な

【發音】一な行第一の音。子音nが母音aに結び附きて發す。又そのnの、母音e・oと結び附きたるは、即ちね・のなり。nは、假名のんによりて現さるる鼻音に三種(n・ng・m)ある中の一種にして、舌面の前部なる蹄鐵形の緣を齒槽突起に押當てて、氣息の洩れぬやうにし、聲帶の鼓動を受けたる呼氣を、垂し下げてある軟口蓋の裏手より、鼻腔を通過せしめて、體外に放出する時に發する音、即ち鼻音學上に謂はゆる舌端部(齒齦)鼻音に屬し、發音の部位、破裂音なるt・d・rと同樣にして、殊にt以外の三者は聲帶の鼓動を伴へる點に於ても相一致す。「男」の字の、漢音はダンにして、吳音はナンなる、又九州地方にて、ランプ(洋燈)をダンプといひ、ロンゴ(論語)をドンゴといふ等、これら三子音の間に相互音通の存するも、これがためなり。又、同じくな行音の中にても、に(ni)に於けるnは、發音の部位、なぬねのに於ける場合とは少しく異なり。委しくは、にの條下を見よ。二長音は、なあ又はなーと記す。本書は前者に依れり。三なの直下にう又はふの續く時は、相合してのの長音となること多し。例へば、なう(腦)・なふ(納付)のノオ・ノオフと發音する類。但し、あきなふ(商ふ)・かなふ(叶ふ)のごとく、なふのふが四段活用の動詞の語尾なる場合には、口語にてはナウと二音に分ちて發音す。四あ又はわが、n音を示すんの直下に連なる時、變じてなと發音すること、字音に於て殊に多し。例へば、きのしたじゅんあん(木下順庵)・げんわ(元和)のキノシタジュンナン・ゲンナと發音する類。

【字源】平假名なとゐとは共に「奈」(吳音ナ)の草體より出でしものなれども、ゐはふと字體誤認の虞ありとの理由によりて、今は變體に編入せらるるに至れり。又、ゐを更に崩したるもの。「那」(吳音ナ)の草體より出でし訓。於、「難」(吳音ナン)の草體より出でし訓。於、「南」(吳音ナム)の草體より出でし訓等、皆、變體平假名に屬し、片假名ナも、「奈」の略體より出でたり。萬葉假名は、以上のの外、「名」・「魚」・「菜」等あり。

な 名【名】一有形・無形の事物の一を他と區別せんがために標識としたる稱呼。文法上にては、名詞といふ。なまへ。名稱。稱呼。二姓氏・苗字の下に添へて、一族中の各個人に限りて稱するもの。古は、人の名は一にして、藤原鎌足・菅原道眞の鎌足・道眞などの類なりしが、中世以後、別に、源九郎義經・加藤虎之助清正など稱するに至り、その九郎・虎之助等を通稱又は俗名といひ、義經・清正等を、實名又は名乘といふ。又、その通稱・實名を姓氏又は苗氏に連ねたる全部をもいふことあり。三古、其の家の世襲となせる職業、又その人の行ふ事によりて負へる稱。四世間へのきこえ。評判。名聞。名聲。名譽。〔雲雀「世に、琴つかうまつるなを施してき」正統記「褒美の詞の甚しさに、與へたる所の少なさ、誠に名を重くして利を輕くしける、いみじき事と、口口に譽めあへりける」〕五めいぶん(名分)に同じ。六名のみにて、實のともなはぬこと。七いひぐさ。口實。

名揚る【句】名高くなる。〔大鏡「六十餘國の歎枕に名あがりたる所所などを書きつつ參らするに」〕

名有り【句】名高し。有名なり。〔雲雀「僧綱たち、名ある智者(サン)どもなど召して」〕

名有りて實(ジツ)無し【句】『漢書の黃霸傳に「澆淳散樸、並行偽說、有レ名無レ實」とあり』虛名のみにて、實實これに伴はず。「名折る。

名落つ【句】名譽毀損す。面目失はる。

名勝つは恥なり【句】『周子通書に「實勝、善也、名勝、恥也」とあり』名聲の實際よりすぎたるは恥とすべし。

名朽つ【句】名譽すたる。名聲落つ。〔源氏「人の程の心ぐるしきに、名の朽ちなんは、さすがなり」〕

名高ければ神(シン)を害す【句】名高くなれば、おのづから慢心生じて、修養を怠るに至る。〔諺語〕

名高し【句】なだかし(名高し)に同じ。〔俳諧古選(宋阿)「名の高き遊女聞えず御代の春」〕

名立つ【句】噂高し。浮名立つ。名に立つ。〔左傳の成公二年の條に「唯器與レ名不レ可二以假一レ人」とあるに本づく』名即ち官位と器、即ち尊卑を區別するしるしの服飾とは、妄に他人に假さず。官爵を授與し、制度を案(アン)ずるは、國家の害なり。〔諺語〕正統記「名と器とは人にかさずとも云ひ、…君のみだりに授くるを謗擧とし、臣のみだりに受くるを戒とす」

名遂ぐ【句】『功成り名遂げて身退くは天の道なり』を見よ』名譽を成す。名譽ある事を成し遂ぐ。〔新六「あら玉の年をあまたにふる人も名をとげてこそ入りこもるなれ」〕

名流る【句】その名、世間に聞ゆ。名聲世に流傳す。名だかし。名に流る。〔拾遺「瀧の音は絕えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ」後拾遺「せき入るる名こそ流れてとまるとも絕えず見るべき瀧の絲かは」〕

名に負ふ【句】一名として負ひ持てるとほりの性狀・特質を具ふ。なにしおふ。〔萬葉「むかしより人のいひくる老びとの若ゆとふみずぞ名におふ瀧つ瀨」〕二おとに聞ゆ。名だかくあり。〔後撰「限なき名におふ藤の花なればそこひも知らぬ色の深さか」〕

名に聞く【句】音に聞く。噂に聞く。〔土佐「まことにて名に聞く所羽根ならば飛ぶが如くに都へもがな」〕

名にし負ふ【句】「名に負ふ」に同じ。〔古今「名にしおはばいざこと問はん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」〕〔顯基「名にしおへば曇らざりけりかがみ山うべこそ夏の影は見えけれ」〕

名に著(シル)し【句】次條に同じ。〔新六「名にしるき秋の空かな月影のいざよふ山は雲もまがはず」〕

名に高し【句】なだかし(名高し)に同じ。〔榮花「名に高き君がみゆきぞ住吉のうら珍しきためしなりける」〕

名に立つ【句】世に聞ゆ。名高くなる。〔榮花「名に立てる五月(サツ)の闇も無かりけり澤の螢のまがふ光に」〕〔金葉「名にたてるあはでの浦のあまだにもみるめはかづくものとこそきけ」〕

名に流る【句】「名流る」に同じ。〔後撰「うつろはぬ名に流れたる河竹のいづれの世にか秋を知るべき」無名抄「歌は名に流れたる歌よみならねど、ことわりをききとして、耳近き道なれば」〕

名に蕩(タ)る【句】ふるくよりその名知らる。〔續後撰「消(タ)ぬが上にさこそは雪の積るらめ名にふりにける越の白山」〕

名に觸る【句】ひろくその名知れわたる。一代男「ここそ、名にふれし木辻(ジツ)町、北は鳴川(ナルカハ)と申して、よねの風俗、都にはちぬ撥おと」

名の朝臣(アソン)【句】上卿の五位を召すとき、その人の名と朝臣とをつけて呼ぶ習なりしこと。

名の形見(カタミ)【句】名が形見として殘ること。〔謠曲(源氏供養)「源氏六十帖を書き記し、亡き跡までの筆のすさび、名の

な

形見とはなりたれども。

名の木【句】■名香。めいぼく。〔元禄時代の語〕■〔文〕俳諧にて、櫻・楓・槭(もみぢ)・椎(しひ)等の如き名のある木。俳諧季寄「名の木散る。これは名のある木の落葉なり。たとへば「楓散る」「まさき散る」「柳散る」の類なり」

名の木も鼻に附く【句】『名香も久しければ、飽くに譬へていふ』すぐれてよき物にて、厭ばこれに接すれば、厭になる。〔諺語〕

名の下(もと)虚(むな)しからず【句】『晉書の孝友傳に「士之有レ名、不レ虚然矣」とあるに本づけるか』「名下(めいか)に虚士無し」に同じ。〔諺語〕尺素往來「名下不レ虚之諺」謡曲「百万」「太鼓の役は本より聞ゆる、名の下空しからず、たぐひなや、なつかしや」

名の月【句】**めいげつ**(名月)に同じ。季色葉集「名月、ナノツキ」

名の無い星は、宵から出る【句】よき物は後より出づ。くだらぬものは先きばしりす。しひな者の先走(さきばし)り。〔諺語〕

名の封(ふう)【句】文書の封じ目に、差出人の名を記すこと、又その文書。源氏「彼の御なのふうつきたり」「簽。籤。

名の札【句】名籍を記錄したるもの。戸名の祿【句】古、妃・夫人・嬪等の名號の異同に應じて給せられし祿。號祿。(職祿と區別していへるもの)

名は公器【句】『莊子に「名公器也、不レ可二多取一」とあり』名は私すべきものにあらず。〔諺語〕

名は實(じつ)の賓(ひん)【句】『莊子の逍遙遊篇に「堯讓二天下於許由一曰、子治二天下一、天下既已治也、而我猶代レ子、吾將爲レ名乎、名者實之賓也、吾將レ成レ賓乎」とあるに本づく』實は主にして、名は賓なるが故に、實あれば足れり、何ぞ名を問はん。〔諺語〕舍利風篇「名は實の賓とやらん、尤も俳名とても撰むべきなれど、まづは何事なくむづかしからず、點畫も少く、讀みやすく輕きを詮とすべし」

な

名は體をあらはす【句】**みやうせんじやう**(名詮自性)に同じ。〔諺語〕

名は末代【句】「身は一代、名は末代」を見よ。

名も無し【句】名のるべき名もなし。取るに足らず。物の數ならず。無名抄「無明の酒を、名もなき酒とよみたまひしかば」

名を揚ぐ【句】■孝經に「立レ身行レ道、揚二名于後世一、以顯二父母一、孝之終也」とあり』世上に美名をあぐ。

名を著はす【句】名を世に知らしむ。平家「五月闇(さつきやみ)名をあらはせる今宵かな」

名を得(う)【句】■名づけらる。盛衰記(細川)卷「義朝が祖父義家は、八幡大菩薩の御子として、八幡太郎と名を得たり」■「名を取る」に同じ。源氏「この世に名を得たる輩の師のをのこども」

名を埋む【句】『前漢書の霍方進傳に「埋レ名」、白居易の詩に「龍門原上土、埋レ骨不レ埋レ名」とあり』名の知れぬやうにす。名をかくす。名譽を失はす。若風俗「世につれて、先祖の名を埋み、…世渡の悲しさに」繼八卦柱鷹「又、この上に盜人と、名をやうづまん、…引窓の下を覗けばとこやみの」

名を賣る【句】『漢書の逸民傳序に「彼雖下磬磬有中類レ沽名者上」とあり』■我が名を世に知れ渡るやうにす。名譽を賣る。■虚名を得るやうにす。**ばいめい**(賣名)參照。

名を落す【句】名譽を減ず。名聲を損ず。

名を掛く【句】多くの名譽の中に入る。〔古語〕擾後拾遺「數ならぬみくづながらも和歌の浦の波にひかれて名をやかけまし」

名を變へ、品を變ふ【句】「手を變へ品を變ふ」に同じ。小町踊「芋豆や月も名をかへ品をかへ」

名を腐(くた)す【句】名譽をけがす。名をおとす。名を沈む。源氏「業平が名をやくたすべき」

な

名を汚す【句】名譽を破り、面目を潰す。名を折る。

名を策す【句】『左傳の僖公二十三年の條に「策レ名委レ質、貳乃僻也」とあり』『我が名を君の簡策に書して、臣たることを明かにする義』臣下となる。

名を沈む【句】名を埋む。名をくたす。源氏「みるめこそうらふれぬらめ年經にし伊勢をの蜑の名をや沈めん」

名を雪(すす)ぐ【句】汚名を清くす。名譽を回復す。

名を正す【句】■正邪を判斷す。■『論語の子路篇に「子路曰、衛君待レ子而爲レ政、子將二奚先一、子曰、必也正レ名乎」とあり』名と實と一致せしむ。名實を相稱(かな)はしむ。君臣・父子その他の名分を正しくなす。**めいけう**(名敎)參照。

名を立つ【句】■『史記の伯夷傳に「閭巷之士、欲二砥二行立一名者一、非レ附二青雲之士一、安能施二于後世一哉」とあり』「名を揚ぐ」に同じ。萬葉「後の代のかたりつぐべく名をたつべしも」■名の立つやうにす。評判をたつ。**なだて**(名立)參照。古今「女郎花多かる野べに宿りせばあやなく仇の名をや立てなん」源氏「せめてながらへば、おのづからあるまじき名をも立ち」

名を保つ【句】名譽を毀損せずに保有す。名をおとさずに保つ。千載「嬉しくも名をたもつだに仇ならぬみのりの花に實を結びける」

名を垂る【句】「名を殘す」に同じ。「名を竹帛に垂る」

名を散らす【句】廣く噂を傳はらす。源氏「本つ香の匂へる君が袖觸れば花もえならぬ名をやちらさん」

名を附く【句】**なづく**(名づく)に同じ。

名を釣る【名】『晉子の法篇に「釣レ名之人、無賢士焉」とあり』虚名を求む。新葉「代代の跡に名をのみつりてかひなきは寄るへもしらぬ和歌の浦船」

名を遂ぐ【句】「名遂ぐ」を見よ。新六「あら玉の年をあまたに經る人も名をとげてこそ入りてもるなれ」

名を留(とど)む【句】「名を殘す」に同じ。太平記「かへらじとかねて思へば梓弓なき數にいる名をぞとどむる」

名を留(とど)む【句】「名を殘す」に同じ。新勅撰「名をとむる世の昔に絕えねどもすぐれし跡を見るもかしこき」

名を取らうより、德を取れ【句】名譽を願ふよりも、利得を得る方よし。〔諺語〕芝居氣質「まだたけを盡し居るか、名を取らうより德を取るが當世ぢや」

名を取る【句】評判を取る。名聲を博す。名を得。源氏「すべて只今世に名をとれる人人」

名を流す【句】廣く又は後世に噂を傳はらしむ。源氏「こころうき名をのみ流して」同「あぢきなきすき心にまかせて、さるまじき名をも流し」

名を鳴く鳥【句】〔動〕**うぐひす**(鶯)の異稱。一代男「立木の白梅に名を鳴く鳥をとまらせ」

名を成す【句】『易經の繫辭下傳に「善不レ積不レ足二以成一名一、又、論語の里仁篇に「君子去レ仁、惡乎成レ名」とあり』美名を成す。名を揚ぐ。

名を盜む【句】『易林に「虚レ衆盜レ名、雄鷄打レ頸」とあり』實力はなきに、ただ名のみを得。

名を殘す【句】後世に名を傳はらす。名を止(とど)む。名を垂る。源氏「名をのこしける深き心ざしをいふに」

名を辱かしむ【句】『說苑に「廉士不レ辱レ名、信士不レ惰レ行」とあり』名譽を傷く。面目を潰す。

名を振ふ【句】名聲をとどろかす。名聲を博す。

名を磨く【句】切磋琢磨して、名聲を增さんとす。

名を漏らす【句】世間に名を知らす。名を流す。玉葉「思ひ弱り身こそは堪へずなるとても人の忍ばん名をばもらさじ」

名折る【句】「名落つ」に同じ。**なをれ**名

折参照。堀杰「いかにして名折るばかりに戀らしめん思にまけぬ心づよきを」

名を惜む【句】名譽を失するを惜む。名譽を大切にす。うき名の立たんことを悲しむ。古今「花すすきほに出でて戀ひば名をしみ下ゆふ紐の結ぼほれつつ」

名を折る【句】「名を汚す」に同じ。なをれ(名折)参照。教本「をみなべしあかぬあまりに袖觸れて花の名折ると人に見えける」

十度(ど)の御名(な)【句】〔佛〕じふねん(十念)に同じ。〔古語〕山家「夢さむる鐘のひびきにうちそへて十たびのみなを唱へつるかな」

無い名は呼ばれぬ【句】■名稱の無き物は、これを呼ぶ能はず。〔諺語〕■無實なる罪過は、人これを鳴らし得るものに非ず。〔諺語〕

な【名】もじ(文字)に同じ。〔古語〕「かな」「まな」起「字(な)隨」羽黒」

な【名】『名詞のなの語の轉』うをを食物とする時の稱。さかな。〔古語〕起「魚、此云ㇾ酸」

な【名】■『名詞のなの語の轉』畠又は野に生ずる草の、莖葉根の食ふべきものの總稱。野菜。蔬菜。■〔植〕あぶらな(油菜)の略。■〔植〕たうな(唐菜)の略。菜の葉に醯を掛けたやう【句】意氣の銷沈したるさまの譬。

な【名】■つな(追儺)に同じ。延喜式「年終行ㇾ儺者」■追儺の時、おひやらふ疫病の神。儺の鬼。〔古語〕夫木「九重の雲の上よりやらふなのほどにともなふりつづみかな」■〔地〕なのくに(儺國)に同じ。

儺の鬼【句】前條■に同じ。

儺の陣【句】追儺の行事のある場所。

儺の人【句】追儺の行事に關係する人。

儺の長(かみ)【句】だいな(大儺)に同じ。

儺遣らふ【句】『な(儺)■を見よ』追儺(つな)を行ふ。儺の鬼を追ひやらふ。榮式「都日記」瀧口も、なやらひ果てけるままに、皆まかでてけり」源氏「なやらうとて、いぬきがこれを壞ちはべりにければ、つくろひ侍るぞ」

な【名】酒飯に副へて食ふべき物、卽ち魚・菜などの總稱。さい。さかな。〔古語〕起「なを(汝)に同じ。〔古語〕

な【代】なんぢ(汝)に同じ。〔古語〕起「なをおきてはなし、なをおきてつまはなし」

な【代】なに(何)の略。なぞ(謎)參照。「なぞ」

なぞ【句】『なぞ(謎)を見よ』「何(なに)ぞ」の略。〔古語〕落窪「なほ今宵御覽ぜよと聞ゆれば、なぞとて、頭もたげて見上げたまふ」源氏「こは、なぞ。あな若若し」

なぞ、なぞ【句】前條の語を重ねて强めていふ語。〔古語〕落窪「泣腫れておりたまふを、なぞなぞと驚きたまへば、かうかうしかありつる由を語り申せば」

なぞの【句】「何(なに)ぞの」の略。〔古語〕榮華「なぞのみかどに」

なでふ【句】『何といふの轉訛。てふ參照』■何といふ。いかなる。なんでふ。〔古語〕竹取「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見たまふぞ」榮華「この事、實(まこと)に定まりなば、又の日、法師になりなん、なでふにか世に經まじらふべき」■何とて。いかで。なんぞ。なんでふ。(下に反語を伴ふ)〔古語〕竹取「なでうさることかし侍らん」

な【副】動詞の連用形(加行變格及び佐行變格の動詞にはその將然形)の上に副ひて、その動作を禁止する語。その動詞の下に助辭その添ふが常なり。「勿來(なカ)」萬葉「妹があたり吾が袖振らむ久堅の夜渡る月に雲のたなびき」伊勢「武藏野は今日はな燒きそ若草の妻もこもれり我もこもれり」きのふはけふの物語「向後は弟子とも思はぬ。師匠ともな思ひそ」

な【助動】■なり(■の連體形の略。狂言「ぬけがら」「やい、そこな奴」同「薩摩の守」「向うな島へうちあげて置きまする」同「法師物狂」「二十(はタ)ばかりな女房が」きのふはけふの物語「そこな金火箸を燒いておこさい」油地獄「棚な物取って來るごとく」■なりの終止形又は連體形の略。ちやだ。竹取「子になりたまふべき人なめり」落窪「盜人にはあらぬなめり」源氏「おいや、聞きし人なりなり」枕「人來(く)る音すれば、然(さ)なりと人人出でて見るに」狂言「鮒物賣」「わごりよは、異(へ)なことを云ふ」鳩翁道話「景淸と美保谷(みほや)が盛衰をするやうな」

なこ【句】なりとも。なりと。鳩翁道話「せめてだまってなとゐればよけれど」生寫朝顏話「琴なと、三味線なと、彈かし召されて」椿説弓張「針でなとつついて、血を附ければ」

な【助】のに同じ。〔古語〕起「瓊響(トヨ)もゆららに天淨名井(ユナヰ)にすすぎ浮け」

な【助】■動詞、助動詞の終止形の下に添へて、その動作を禁止する語。後世訛りて、連用形にも連體形にも添ふ。祝詞「吾(ア)を見たまふなと申すを」俳諧古選「乙由」「畔に寢て塗込められた頭陀袋」きのふはけふの物語「明日は手へ連れて參るぞ、誰を忘れな、…と懇にいひ含むる」柳樽「いろはでは元日からも來(き)なといふ」「溝に落つるな」「笑はるるな」■願望の意。(動詞・助動詞の將然形に添ふ)〔古語〕起「いざあはな我は」萬葉「梅の花咲きたる園の青柳をかづらにしつつ遊びくらさな」同「玉藻刈りてな」■感嘆し、又は意を强むる意。(形容詞と相を示すもの以外の助動詞との終止形又は命令形或は終止せる語句に添ふ)萬葉「すずがねのはゆま馬屋のつつみねの水を賜へな妹がただ手よ」古今「蟬の聲聞けば悲しき夏衣薄くや人のならんと思へば」後撰「人言の頼みがたさは難波なる蘆のうら葉の恨みつべしな」源氏「思の外に心憂くこそおはしけれな」「面白の景色やな」■命令の意。俗謠「一人(ひと)來(き)な、二人(ふタ)來な、三人目には寄って來な」「お出でな」

な【感】次條を見よ。

なやうや【句】『うは諾(なウ)ふ義』否或は然りと返事すること。承知もしくは不承知の確答。〔古語〕拾玉「さぞといはばまことにさぞとあどうちてなやうやと

な【數】なな(七)に同じ。(一(ひと)・二(ふタ)・三(み)と順序を追ひて數ふる時にいふ)

なあ【感】感嘆の意を表はす語。な。「面白いなあ」「美しいなあ」

なあざみ 菜薊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。山野に自生す。高さ二三尺。葉は長楕圓形にして、銳き鋸齒を具ふ。秋季、頭狀花序を成して、淡紫色の花を開く。新葉は食用に供せらる。

なあて 名宛【名】手紙などに、あてて遣るべき人の名。あてな。

なあてがき 名宛書【名】名宛を書くこと、又それを書きてあるもの。

なあてにん 名宛人【名】名宛の人。

ない 內【名】■うち。なか。(外(イヅ)に對して)■ないこく(內國)の略。(外(イヅ)に對して)「內・外の形勢」

ない【名】〔植〕あかりんご(赤林檎)に同じ。

ない 唯【感】呼ばれたるに應へ、又は同意を表はすとき發する聲。はい。薩摩歌「下馬前をして振りませい、ないと答へて振出す手先上りの頭八分」傾城反魂香「これ、そこな奴さん、ここへござんせ、雇ひましよ。ない、ない、ない」

ない【助動】『ずの連體形なるぬより轉成せるものなるべし』否定の意。「行かない」「見ない」

ない 內【接頭】表むきにあらざる意。「內緣」「內祝言」

ない 內【接尾】範圍以內の意。(外(イヅ)に對して)「學校內の事」

ないあん 內案【名】內內の案文。

ないい 內意【名】心中に思ふところ。內內の意向。重帷子「かねて內意話した筈の權三」〔稱。

ないい 內衣【名】ゆかたびら(湯帷子)の異

ないいう 內憂【名】國家又は一家などの內部に存在する憂患。(外患に對して)

ないいろせい 內遊星【名】〔天〕『英 Inter-ior planet』その軌道が、地球の軌道の內方、卽ち太陽に近き方にある遊星。水星と金星と、これなり。下遊星。下惑星。內惑

星。(外遊星に對して)

ないーいん 内印【名】大寶令中の公式令に規定せられし天皇の御璽(ぎょじ)。大さは方三寸、「天皇御璽」の四字を刻し、少納言その請進を掌り、主鈐これを出納し、五位以上の位記及び太政官より下す詔書・勅書などに押すに用ひしもの。(外印(げいん)に對して)

ないーえ 内衣【名】ごてうげさ(五條袈裟)に同じ。

ないーえつ 内謁【名】㊀内内にて謁見すること。内謁見。㊁内内のたのみ。「と。

ないーえつ 内閲【名】内内にて閲覧すること。

ないーえっけん 内謁見【名】ないえつ(内謁)㊀に同じ。

ないえっーしゃ 内謁者【名】㊀内謁する者。内謁を賜はる者。㊁支那唐代の内侍省の職員の一。

ないーえん 内宴【名】㊀内部の者のみにて催す宴。内覡(ないげき)の酒宴。㊁古、禁中にて、正月二十一日に行はせられし、内内の節會。この日、仁壽殿に文章博士その他、詩文に堪能なる近臣を召され、御題を賜ひ、詩を作らしめて、御前に披露し、終りて酒饌を賜ふ。弘仁三年唐の太宗の創めし遺風を習ひ、始めて行はれしものにして、平安の末一時中斷せしを、保元の頃、少納言信西の請により再興せしかども、保元の亂後廢絕せり。源氏「これは、ないえんなどいふこともはべるなるを」

ないーえん 内縁【名】㊀【佛】意識心内に諸法を分別すること。縁㊃の、内部より發するもの。(外緣(げえん)に對して)㊁内内の緣故。川中島合戰「直江山城内緣を以て不思議の御出」㊂表むきの結婚によらずに、夫婦となれること。「内緣の妻」

ないーえん 内焔【名】【化】『英 Inner flame』蠟燭・石油・アルコール等の火焔の中、焔心の外圍に於て、可燃性の氣體が、漸次に燃燒しはじむる部分。この部分に於ては、空氣の供給未だ充分ならざるにより、燃燒不完全にして、氣體の一部分は分解して遊離炭素の細粒を生じ、その炭素粒は熱によりて、光輝を發す。焔心。還元焔。(外焔に對して)

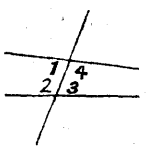
ないーおう 内應【名】㊀『漢書の谷永傳に「永自知有二内應一展二意無一所二依違一」とあり』私かにたくらむこと。㊁内部よりひそかに敵に通ずること。うらぎり。内通。款(かん)を通ずること。

ないーかい 内階【名】ないね(内位)に同じ。(外階(がいかい)に對して)

ないーかい 内海【名】㊀【地】『英 Enclosed sea』四方に廣大なる陸地を繞らし、比較的狹き海峽によりて、大洋に通ずる海。大なるものは地中海・バルト(Baltic)海・黒海・紅海など、小なるものには、我が國の瀨戸内海などあり。うちうみ。中海。(外洋に對して)㊁【佛】九山(くせん)・八海の内、七金山(しちこんせん)の内方にありて、八功德水を湛ふといふ大海。(外海(げかい)に對して)はっかい(八海)參照。太平記「内海・外海(げかい)の龍神八部」㊂茶入の一。口の小さき壺。(大海に對して)

ないーかい 内界【名】㊀【佛】衆生(しゅじょう)の心意、又六識のうちの識界。(外界(げかい)に對して)㊁【哲】『英 Inner world』吾人の心内の、各種の現象。自己の精神活動の範圍。(外界に對して)

ないーかく 内閣【名】㊀【數】『英 Interior angle』一直線が、他の二直線を、圖の如く截るとき生ずる、1、2、3、4、の角。(外角に對して)㊁多角形の、内部に向へる角。「三角形の内角の和は、二直角に等し」



(㊁くかいな)

内界の財貨【句】【經】ざいくわ(財貨)の條下を見よ。

ないーかう 内行【名】平生の品行。おもてむきに分らぬ品行。「の寵愛。

ないーかう 内幸【名】内内の寵幸。閨房内經て斷絶ありし官。(外考に對して)

ないーかう 内考【名】王朝時代に、六年を

ないーかう 内港【名】『英 Inner harbour』港灣の一部。その内部にありて、船舶の碇泊、荷役等に便利なる處。(外港に對して)

ないーかう 内項【名】【數】『英 Mean』四つの量A・B・C・Dが比例をなす時、BとCとの稱。中項。内率。(外項に對して)

ないーがう 内壕【名】㊀うちぼり。(外壕に對して)㊁【兵】胸墻の内方にある壕。高き胸墻を用ひずして、よく守兵を掩護し、又は胸墻に積土を供給するために設く。

(外壕に對して)

ないーかく 内殼【名】内部にある介殼。(外殼に對して)

ないかく 内閣【名】㊀『北史の魏邢邵傳に「邵與レ婦甚疏、自云、晝入二内閣一爲二狗所一レ吠」とあり』奥むきの殿閣。妻妾の居所。おくむき。㊁支那にて、明・清代の國家の最高機關。明の太祖、前制に依り中書省を置きしが、後、宋制に倣ひて、華蓋殿(後、中極殿と改む)・謀身殿(後、建極殿と改む)・武英殿・文淵閣・東閣の諸大學士(後、學士と改む)を置き、なほ文華殿大學士を加へて總稱せしに起り、成祖の時、文淵閣の學士入直して、政務の顧問に備はるに至りしより、吏務に關係を生じ、遂に六部の上班に立つに至りしもの。清末、軍機處の實權加はるに至りし後も、内閣大學士・協辦大學士の職名は、官吏最高の地位として存せしが、宣統の初、中央官制の改革ありて、我が國の内閣と同樣の制を立つ。㊂『英 Cabinet』國務大臣を以て組織し、重要なる國務を審議する行政上の最高官府。我が國のは、明治十八年の制定。

ないかく 内角【名】【數】『英 Interior angle』一直線が、他の二直線を、圖の如く截るとき生ずる、1、2、3、4、の角。(外角に對して)㊁多角形の、内部に向へる角。「三角形の内角の和は、二直角に等し」

ないかく-こんせうしよきくわん 内閣權少書記官【名】内閣少書記官の權官。

ないかく-こんだいしよきくわん 内閣權大書記官【名】内閣大書記官の權官。

ないかく-こもん 内閣顧問【名】太政官に臨時に置かれ、重要なる國務の諮問に應へし職。明治二十年廢止せられたり。

ないかく-しよきくわん 内閣書記官【名】内閣職員の一。内閣總理大臣又は内閣書記官長の命を承け、詔勅及び法律・命令の發布、帝國憲法及び法律・勅令の原本の保存、公文の查閲・起草・受授及び保存、官印の管守、内閣の會計、各廳高等官の履歷、内閣記錄の編纂等に關する事務を掌るもの。奏任官とす。内輪。内史。

ないかく-しよきくわんちやう 内閣書記官長【名】内閣職員の一。内閣總理大臣の命を承け、各機密文書を管掌し、内閣の庶務を統理し、且判任官以下の進退を專行す。勅任官なり。翰長。

ないかく-せいど 内閣制度【名】内閣を組織する制度。

ないかく-せうしよきくわん 内閣少書記官【名】ないかくだいしよきくわん(内閣大書記官)を見よ。

ないかく-そうりだいじん 内閣總理大臣【名】内閣の首班にありて、機務を奏宣し、行政各部を統一する國務大臣。須要と認むる時は、行政各部の處分又は命令を中止して、勅裁を待つことを得。又職權及び特別の委任に依り、閣令を發することを得。首相。相國。

ないかく-だいしよきくわん 内閣大書記官【名】太政官に置かれ、内閣書記官長の次に位せし職員。その下に位する少書記官と共に奏任官にして、兩者共に正・權の別あり、共に内閣の文書を勘し、詔勅・命令を草することを掌りしもの。明治十二年設置、同十八年廢止せられたり。

ないかく-ぶんこ 内閣文庫【名】江戸幕府の紅葉山文庫を承繼し、これを基として、明治政府にて明治十七年に設けし圖書館。

ないかく-ねん 内閣員【名】内閣を組織する國務大臣。閣員。

ないがーしら 蔕【號】次條の轉訛。蟹廼笑「まひまひの師弟の中もこくすれば大夫もいまはないがしらなり」

ないーがしろ 蔑【貌】㊀他人を、有れども無きがごとくに輕んじ侮るさま。愛發記「威勢をつかさどり、帝王をないがしろにし」㊁禮を失するまでに打解けたるさま。源氏「こうちきだつもの、ないがしろに著なして」

ないーがふ 内合【名】【天】たいがふ(退合)に同じ。(外合に對して)

ないーがま 薙鎌【名】なぎがま(薙鎌)の音便。平家「熊手・ないがまを以て敵の舟を引寄せ

引寄せ、をめき叫んで戦ふ」

ないーかん 内寒【名】『史記の倉公傳に「濟北王侍者韓女病、腰背痛寒熱、衆醫皆以爲二寒熱一也、臣意、診レ脈曰、内寒、月事不レ下也、即投以レ藥旋下、病止、病得下之欲二男子一而不レ可レ得也」とあり』腰背の痛む病疾。

ないーかん 内感【名】〔哲〕『英 Inner sense』自己の心意狀態及び心意作用に氣附きて、これを意識すること。内感覺。内的經驗。内的知覺。内感覺。(外感に對して)

ないーかん 内翰【名】■支那の翰林學士の雅稱。■ないかんしょきくわん(内閣書記官)の雅稱。

ないーかん 内監【名】支那にて、宦官の稱。大監ともいふ。

ないーがん 内含【名】〔哲〕ないざい(内在)に同じ。

ないーかんかく 内感覺【名】〔哲〕ないかん(内感)に同じ。(外感覺に對して)

ないがんてつがく 内含哲學【名】〔哲〕ないざいてつがく(内在哲學)に同じ。

ないがーもん 内衙門【名】古の大内裏の被出門。紫宸殿北廂の東階より東北廊に出づる南方の口に在りて、柳葉簾の額を掲げてありしもの。

ないき 内記【名】■中務(なかつかさ)省に屬して、詔勅宣命を作り、又、位記を書くことを掌りしもの。大・中・少の三等あり。文筆に堪へたる儒生の中より選び任ぜられたり。うちのしるすつかさ。おほいうちのしるすつかさ。(外記(げ)に對して)■しょじやうじゃ(書狀侍者)に同じ。(外記(げ)に對して)

ないき 内規【名】■内部の間にのみ示す規約、又は規則。■的の最も中心に近き所。内院。(外規(げ)・矢規に對して)

ないき 内紀【名】内内の綱紀。内規。

ないぎ 内儀・内義【名】■内内の事。内證。■他の妻を、敬ひて呼ぶ語。うちかた。令閨。内方(うちかた)。傾城酒呑童子「れっきとしたお内儀様があるぞや」 五人女「こなたの御内義樣はと尋ねけるに」

ないぎ 内議・内義【名】内内にて評議すること、又その評議。祕密の相談。(外議(げ)に對して) 平家「南都の大衆、かかる内議を傳ば知らずして」

ないきう 内廐【名】『ないざう(内藏)を見よ』宮内に設けたるうまや。(外廐に對して)

ないきうれう 内廐寮【名】うちのうまやのつかさ(内廐寮)に同じ。

ないぎき 内聞【名】憚め内内に聞きただすこと、又そのもの。

ないきーきょく 内記局【名】■ないきしょ(内記所)に同じ。■文部省内に設けし局。文書の接受・發送、本省局課の官吏の進退・身分等に關する事務を掌りしもの。明治十四年三月創置、同年十一月廢せられたり。

ないきーしょ 内記所【名】内記(一)の詰所。宣陽門の南にありたり。内記局。

ないきせいちゆう 内寄生蟲【名】〔動〕ないざうちゆう(内臟蟲)に同じ。(外寄生蟲に對して)

ないきそく 内規則【名】ないき(内規)に同じ。

ないきーどころ 内記所【名】ないきしょ(内記所)に同じ。

ないぎひやうぢやう 内儀評定【名】ないひやうぢやう(内評定)(一)に同じ。

ないーきふ 内給【名】『天皇の御身に屬するを、すべて内といふによりていふ』天皇の年給。縣召(あがた)の除目(じもく)又は一分召(いちぶ)の時、掾(三分)二人・目(二分)三人・史生(二分)二十人を任ぜられしもの。介を申任する場合もありて、その時には掾目各一人づつを減じ、又、後には女房・乳母の給をも内給の中にて給ひし事あり。又臨時内給もありたり。建武年中行事「この外、内給・臨時給」

ないーきふじ 内給事【名】■支那唐代の内侍省の職員の一。■中宮進(しんじゅう)の唐名。

ないきふーじょ 内給所【名】内給に關する事務所。

ないきふーはんじ 内給判事【名】ないきふじ(内給事)(一)に同じ。

ないーきふじ 内給事【名】■支那唐代の内侍省の職員の一。■中宮進(しんじゅう)の唐名。

ないきふーじょ 内給所【名】内給に關する事務所。

ないきふーはんじ 内給判事【名】ないきふじ(内給事)(一)に同じ。

ないーきん 内勤【名】内部の勤務。(外勤に對して)

ないぎんみ 内吟味【名】内内にて吟味をなすこと。内部のむなしきこと。

ないーぎよ 内御【名】『儀禮の既夕記篇に「其母之喪、則内御者浴」とあり』ようじ(女御)に同じ。

ないきようつうせつせん 内共通切線【名】〔數〕ないこうせつせん(内公切線)に同じ。

ないーきよく 内局【名】■内部の部局。■明治九年内務省に、同十四年參視廳に、同年參事院に、同十六年海軍省に設けたる庶務・文書等の事務を掌りし局。卽ち現今の官房の如きもの。内務省のは十八年、參事院のは十八年廢止せり。

ないーく 内供【名】ないぐ(内供奉)の略。大鏡「内供良圓者とおはす」

ないーくう 内宮【名】いせだいじんぐう(伊勢大神宮)を見よ。「ぐ」に對して)

ないーぐう 内宮【名】前條に同じ。(外宮(げぐう)に對して)

ないぐうーざうえいぶぎやう 内宮造營奉行【名】内宮造營の事務に關係する奉行。

ないぐうーぶんこ 内宮文庫【名】はやしざきぶんこ(林崎文庫)の舊稱。

ないーぐぶ 内供奉【名】古、皇室の内道場に於ける護持僧。三綱の一。寶龜三年支那唐代の制に倣ひて始めて置かれ、十人を定員とせしより十禪師の稱あり。闕員を生ずるごとに、德高きものを撰びて補せられしが、後には、内道場に供奉することはなく、單に空名たるに止まるに至れり。内供。供奉。延喜式「於二大極殿一講二說金光明最勝王經一時、以二内供奉十禪師一爲二讀師一」

ないぐぶーじふぜんじ 内供奉十禪師【名】■内供奉の職に補せられたる十人の禪師。■ないぐぶ(内供奉)に同じ。

ないぐぶーじゅし 内供奉豎子【名】ないじゅ(内豎)に同じ。

ないぐぶーそう 内供奉僧【名】■内供奉の職に補せられたる僧。■ないぐぶ(内供奉)に同じ。

ないーくん 内訓【名】■『後漢書の班昭傳に「作二女誡七篇一、有レ助二内訓一」とあり』婦女への敎訓。■部内に對して發する訓令。

ないーくん 内君【名】他の妻の敬稱。内室。

ないーくわ 内科【名】身體の内部の病を治する醫術。本道。當道。(外科(げか)に對して)

ないーくわ 内果【名】〔醫〕うちくるぶ(内踝)に同じ。(外果に對して)

ないーくわ 内卦【名】易の六畫卦の内、下方の三畫。(外卦に對して)

ないくわーい 内科醫【名】内科の醫術に從事する醫者。

ないーくわい 内外【名】■うちと、そととうちそと。■内國と外國と。内外國。公債と外國公債と。(内外)參照。

ないくわいーこくさい 内外公債【名】内國いはゆ(内外)公債と外國公債と。

ないくわいーこくさいしょうしょ 内外公債證書【名】内國公債證書と外國公債證書と。「と。

ないくわいーこく 内外國【名】内國と外國と。

ないくわいーじん 内外人【名】内國人と外國人と。

ないぐわいじんーびやうどうしゅぎ 内外人平等主義【名】〔法〕『英 Principle of impartiality over foreigner』特種の權利を除く外、内國人と外國人とに平等の權利・利益を得しむるを原則とする立法上の主義。

ないーくわく 内郭【名】うちぐるわ(内郭)に同じ。(外郭に對して)

ないーくわひ 内果皮【名】〔植〕『英 Endocarp』果實の内部にありて、直接に種子を包被する果皮。例へば、梅・桃などに於ける核(かく)、蜜柑に於ける内部の各房を包める

薄き膜など。堅果皮の名もあるは、時として堅硬なることあるに因る。(外果皮・中果皮に對して)

ないくわひ 内花被【名】〔植〕くわくわん(花冠)に同じ。(外花被に對して)

ないくわん 内官【名】『史記の李斯傳に「高固内官之賤役也」とあり』宮中に仕ふる官吏。⇔支那唐代の宮中の女官。⇔京にある官人。京官。(外官に對して)

内官の除目【句】ちもく(除目)の條下を見よ。

ないくわん 内患【名】内部のうれひ。内憂。

ないくわん 内觀【名】精神をおちつけ、想像の作用によりて、體氣を丹田以下に集注せしめ、有無・動靜の外に超越せる眞理を觀ずること。

ないくわんりやう 内管領【名】鎌倉の執權、北條氏の執事の稱。

ないくわんれい 内管領【名】前條に同じ。

ないげ 内外【名】⇔ないくわい(内外)に同じ。盛衰記「門の内外には、武士充滿して、所も無し」⇔朝家又は貴族の家などの内部にまでも親しく入込むこと。源氏「今よりはよすがある心地して常に參るべし。内外などをゆるさるべき年ごろのしるしあらはれ侍る心地なんし侍る」⇔奥むきと表むきと。あらゆる方面。盛衰記「この馬をば、大名・小名八箇國の者ども、内外につけて、所望ありき」⇔〔佛〕内典と外典(ゲテン)と。徒然「先賢のつくれる内外のふみにも」⇔内位と外位(ゲヰ)と。

内外の典籍(ナイゲテンジヤク)【句】〔佛〕内典と外典(ゲテン)。内外(ナイゲ)の書(ショ)。

内外の書(ショ)【句】〔佛〕前條に同じ。

ないけい 内兄【名】『宋史の劉敞傳に「王堯臣其内兄也」とあり』母方の年上のいとこ。

ないけいけん 内經驗【名】〔哲〕『英 Inner experience』自己の心内の狀態を意識する經驗。(外經驗に對して)

ないけいどうみやく 内頸動脈【名】〔醫〕『羅 Arteria carotis in erne』總頸動脈より分岐し主として腦を營養し、眼及び前額の皮膚に分布するもの。

ないけう 内教【名】〔佛〕自家の教法、即ち佛道を指していふ語。⇔ないてん(内典)參照。源氏「内教の心をたづぬる中にも」

ないけうばう 内教坊【名】⇔支那の教坊の一。⇔古、禁中にて、蹈歌(タフカ)・節會(セチヱ)・内宴等の奏樂に供せんがために、妓女若干を置き、女樂を調習せし所。左近衞の北、大宿直の東に在り。職員に別當(大・中納言の斯道に堪へたる者を補せられたり)・預(カリ)(多くは婦人にして、内侍宣にて補せられたり)・女孺(ニヨジユ)等ありき。

ないげき 内隙・内郤【名】⇔ないこう(内訌)に同じ。

ないげーくう 内外宮【名】内宮(ナイクウ)と外宮(ゲクウ)と。禰宜(ネギ)「太平記」或る時、伊勢大神宮に參りて、内外宮を巡禮して、密かに自受法樂の法施をぞ奉られける」

ないげーじやく 内外戚【名】内戚と外戚。榮花「内外戚の影從、抑亦見佛聞法の大緣」

ないげだう 内外道【名】〔佛〕内道と外道(ゲダウ)と。

ないけつ 内決【名】事を内内にて、又内部の人人のみにて決定すること。

ないげーてん 内外典【名】内典と外典(ゲテン)と。内外(ナイゲ)。

ないけん 内見【名】内内にて見ること。内覽。若風爲十三歲になる時、この封じ目を切つてこれを見るべしと上書(カキ)あり、涙に包紙をひたし、内見するに」

ないけん 内檢【名】⇔準備として内内にて檢分すること。したけんぶん。⇔けんてん(檢田)に同じ。東鑑「駿河・武藏・越後等國國重依レ可レ遂二内檢一」

ないげんくわん 内玄關【名】内内(ナイナイ)の人の出入するために、表玄關の外に別に設けたる玄關。絶海「狩倒本地「子はおろさうか、流さうか、二人が首は縒らうかと、内玄關の外緋に繩までかけたを覺えてか」

ないげんざん 内見參【名】内内にて見參すること。うちうちのめどほり。

ないけんし 内檢使【名】内檢(ニ)のために遣さるる使。けみのつかひ。

ないこ 内顧【名】⇔『論語の鄕黨篇に「車中不二内顧一」とあり』ふりかへること。首をかへして見ること。⇔家政または妻子の事に心を用ふること。⇔内部の事を氣づかふこと。「内顧の憂あり」

ないこ 内庫【名】『唐書の藝文志に「繕寫藏二于内庫一、以二宮人一掌レ之」とあり』宮中に設けたる倉。内藏。「うち」内隅。

ないこう 内訌【名】うちわのもめ。同士討。

ないこう 内寇【名】國内に在りてあだなすもの。内部の寇讎(コウシウ)。内敵。(外寇に對して)

ないこう 内攻【名】『宋書の劉敏傳に「並向二壽陽一、敏内攻外禦、戰無レ不レ捷」とあり』内に向ひて攻むること。病の、外面に發せずして、内部に侵入すること。病を追込むこと。

ないこう 乃公【代】だいこう乃公に同じ。

ないこうせつせん 内公切線【名】〔數〕『英 Internal common tangent』こうせつせん(公切線)を見よ。

ないこきふ 内呼吸【名】〔醫〕呼吸の一種。體循環の毛細管血液と身體組織との間に行はるる瓦斯交換。(外呼吸に對して)

ないこく 内國【名】くにのうち。國内。國中。(外國に對して)

ないこく 乃刻・廼刻【名】そくこく(卽刻)に同じ。

ないこく-いうびん 内國郵便【名】國内間に發受する郵便。(外國郵便に對して)

ないこく-かうかい 内國航海【名】〔商〕『英 Inland navigation』帆船又は小汽船にて國内の河川・湖沼・運河・内海または近海などを航行すること。

ないこく-かはせ 内國爲替【名】『英 Inland exchange又 Domestic exchange』爲替上の債券・債務の關係が、一國内にて辨濟し得るもの。内地爲替。(外國爲替に對して)

ないこく-かはせてがた 内國爲替手形【名】〔經〕『英 Inland bill』内國爲替に用ふるために振出したる爲替手形。(外國爲替手形に對して)

ないこく-くわふつ 内國貨物【名】自國にて生産し、または外國より輸入して、内國にある貨物。(外國貨物に對して)

ないこく-くわへい 内國貨幣【名】内國にて發行せる貨幣。(外國貨幣に對して)

ないこく-くわんげふはくらんくわい 内國觀業博覽會【名】内國の生産品を陳列して觀覽に共する勸業博覽會。

ないこく-こうさい 内國公債【名】〔經〕『英 Internal debt又 National debt』公債の、内國にて募集せられ、その債權者の全部若しくは大部が内國人なるもの。内國債。(外國公債に對して)

ないこく-こさつて 内國小切手【名】專ら國内にて流通せらるる小切手。(外國小切手に對して)

ないこく-こくさい 内國國債【名】内國公債たる國債。

ないこく-さい 内國債【名】⇔ないこくこうさい(内國公債)の略。(外國債に對して)

ないこく-さん 内國産【名】内國にて產出すること、又その物產。國產。

ないこく-さんげふ 内國産業【名】一國の内にて經營する產業。

ないこく-じむかかり 内國事務係【名】⇔いこくじむくわ(内國事務課)を見よ。

ないこく-じむきよく 内國事務局【名】次條を見よ。

ないこく-じむくわ 内國事務課【名】明治元年正月設置せる七課の一。京畿の庶務、諸國の水陸運輸・驛路・關市・都城・港口・鎭臺・市井等の事を掌りしもの。議定職を長

官たる内國事務總督に補し、その下に、參與職を內國事務掛に補して課務を處理せしが、翌月課と共に廢して、八局の一たる內國事務局を以てこれに代へ、督(カミ)輔(スケ)權輔・判事・權判事・書記の職員を置きたれども、同年閏四月廢止せられたり。

ないこく-じむそうとく 內國事務總督【名】前條を見よ。

ないこく-じん 內國人【名】その在住國の國籍を有する人。內人。(外國人に對して)

ないこく-しやうげふ 內國商業【名】こくないしやうげふ(國內商業)に同じ。

ないこく-ぜい 內國稅【名】〔法〕こくないぜい(國內稅)に同じ。(關稅に對して)

ないこく-せん 內國船【名】內國の船籍に登錄したる船舶。內國船舶。(外國船に對して)

ないこく-せん 內國戰【名】內亂の、戰爭狀態を呈するもの、卽ち國家と叛徒との間に於ける戰爭。內國戰爭。內戰。(外國戰に對して)

ないこく-せんさう 內國戰爭【名】『英 Civil war』前條に同じ。

ないこく-せんぱく 內國船舶【名】ないこくせん(內國船)に同じ。

ないこく-はくらんくわい 內國博覽會【名】國內各地の物產を陳列する博覽會。(萬國博覽會に對して)

ないこく-はふ 內國法【名】〔法〕こくないはふ(國內法)に同じ。(外國法に對して)

ないこく-はふじん 內國法人【名】〔法〕內國にて設定したる法人。(外國法人に對して)

ないこく-はふりつ 內國法律【名】〔法〕その効力がその國內に限らるる一般の法律。

ないこく-ひん 內國品【名】內國にて生產せる物品。(外國品に對して)

ないこく-ぼうえき 內國貿易【名】こくないしやうげふ(國內商業)に同じ。(外國貿易に對して)

ないこく-りよひ 內國旅費【名】公務上、內國を旅行する官吏の、政府より給與せらるる旅費。(外國旅費に對して)

ないごしよどころ 內御書所【名】うちのごしよどころ(內御書所)に同じ。

ないこつかく 內骨骼【名】〔動〕『英 Endoskeleton』身體の內部に在りて、その基礎をなす骨骼。高等動物の骨骼は皆これなり。(外骨骼に對して)

ないこん 內閫【名】奥むきの事。

ないさ 內座【名】江戸幕府の評定所にて、吏員の候せし所。ないざよりあがり(內座寄合)參照。

ないさい 內債【名】ないこくさい(內國公債)の略。(外債に對して)

ないさい 內濟【名】爭などの起らんとするを、內內に濟ますこと。私和。

ないさい 內在【名】『英 Immanency』〔基〕神の力の世界の內に宿りて作用すとなすこと。內含。包含。包有。(超絕に對して)

ないさい 內在【名】『英 Immanency』〔哲〕經驗又は認識の領域の內に存在すること。(超絕に對して)

ないさいてき 內在的【貌】〔哲〕『英 Immanent』內在するさま。

ないさいてきひひやう 內在的批評【名】〔哲〕『英 Immanent critique』その批評の對象の前提に立脚して、その正否・意義・價値を批判すること。(超越的批評に對して)

ないさいてつがく 內在哲學【名】〔哲〕『獨 Immanente Philosophie 獨逸の哲學者シュッペ(Schuppe)の命名に係る』從來實在と稱へ來りしものは、吾人の意識中に含まれて存在すと主張する哲學說。心理上の研究の進歩につれて、唯物的世界觀より進み來りし一元論と唯心論より進み來りし同一哲學とは、その立脚地を異にしながら漸次その歸する所を一にせんとする、近時の潮流より產出せるなり。含蓄哲學。含有哲學。內含哲學。

ないさいはいそ 內細胞層【名】〔動〕ないはいそ(內胚葉)に同じ。

ないさう 內倉【名】支那にて、庾支部(シブ)に屬し、祭祀に用ひ、又、蒙古王公來朝の時に給する米を貯ふる倉。

ないさう 內爭【名】內部にて爭ふこと、又その爭。うちわもめ。內訌。

ないさう 內藏【名】『公羊傳の僖公二年の條に「賓出二之內藏一、藏二之外府一、馬出二之內廐一、繫二之外廐一、君何喪焉」とあり』宮中に設けたる藏庫。內庫。

ないさう 內臟【名】〔醫〕動物の胸腔・腹腔內にある各機關の總稱。特に獨逸解剖學に於て心臟を除外せり。臟器。

ないざうきゅう 內臟弓【名】〔動〕『英 Visceral arches』魚類及び兩棲類に於ける鰓弓(サイキウ)と鳥類及び哺乳類の發生初期に鰓を保持する弓狀の軟骨との總稱。鰓弓。

ないざうくわん 內臟管【名】〔醫〕人體の四肢以外を二大管に區別したるものの一。腹側に位して、營養・繁殖の諸器官を包容せるもの。植物性管。(神經管に對して)

ないざうちゆう 內臟蟲【名】〔動〕『英 Helminth』動物の內臟に寄生する複細胞動物の總稱。吸蟲類・條蟲類・線蟲類・鉤頭蟲類等に屬するもの多し。內部寄生蟲。

ないさく 內作【名】建物の內部の造作。

ないさくかく 內錯角【名】〔數〕『英 Alternate interior angle』さくかく(錯角)を見よ。

ないさぐり 內探【名】ないたん(內探)に同じ。

ないさつしやう 內雜掌【名】昔時、大名諸家の內に置かれ、表むきの雜事を執行ひし役。家司(ケイ)の類。

ないざよりあひ 內座寄合【名】江戸時代、評定所の內座にて、寺社・町・勘定の三奉行が寄合ひて評定せしこと。

ないし 鮞【名】〔動〕なよし(鰯)の轉訛。

ないし 內子【名】卿大夫の妻。

ないし 內侍【名】一宮中の女官。二內侍司に屬する女官の稱。尚侍(ナカヒ)・典侍(スケ)・掌侍(ジヤウ)の三等あり。(禁秘抄)「內侍雖レ持レ之、自不レ取」三掌侍(ジヤウ)の稱。四齋宮寮の女官の一。五安藝國嚴島(イツクシマ)神社に奉仕する巫女(ミコ)。游所內侍といふもあり、併せて數十人に及び、その內侍中、一藏以下八人を、八少女(ヤツ)と呼ぶ。

ないし 內侍【句】こうたうのないし(勾當內侍)に同じ。

ないし 內侍【句】古、天皇の讓位の際、劍璽を新帝に參らするに當り、先帝に奉仕せる掌侍二人の、手づからこれを近衞中將に渡さるる例なりし、その內侍。ないしのじよう(掌侍)參照。

ないし 內旨【名】『唐書に「始伏伽拜二御史一時、先被二內旨一、而制未レ出、歸臥二于家一」とあり』內內に命ずる趣旨。內內沙汰。

ないし 內示【名】內密に示すこと。內內の告示。

ないし 內史【名】一『書經の酒誥篇に「侯甸男衞、矧太史、內史友」とありて、孔穎達の傳に「況太史內史、掌二國典法一所二寘友一乎」とあり』國家の典法を記錄する役。だいし。(外史に對して) 二ないき(內記)(一)に同じ。三明治四年太政官の正院に設置せられし職。詔勅・官記・位記を掌り、機務の文書を草案し、國史を編修す。大內史・少內史の二級に分れ、各級また權官あり。大內史は勅任、權大內史以下は奏任。同八年史と改稱せられたり。四ないかくしよきくわんちやう(內閣書記官長)の雅稱。だいし。

ないし 乃至【接】一『般若心經に「無二無明一亦無二無明盡一乃至無二老死一亦無二老盡一」とあり、略疏に「此擧二初支一中間十支、皆應レ準レ此、故云二乃至一」とあり』數又は物の種類・階級などの上下を擧げて、中間を略するに用ふる語。げし(下至)參照。「二十乃至三十」二また。或は。且つ。

ないし 乃至【句】前條(二)に同じ。狂言(家論)「かうして同道申すからは、乃至は、こなたの方にも、又、身どもが方にも、五日十日、ひまのいる事が御座ると、ままよ」

ないし 內事【名】內部に關する事がら。うちうちのこと。

ないし 乃時・迺時【名】そくじ(即時)に同じ。

ないじ 內耳【名】〔醫〕聽覺器の最深部に

在りて、重要なる部分。顳顬骨(コメカミノホネ)の實質に伏在する嚢、透明なる淋巴液を包容し、二小孔によりて、中耳に連絡す。小孔の一には、中耳内にある一小骨鞭(ムチ)ありて、これによりて鼓膜の振動は、内耳の水様液に傳はり、他の小孔は單に膜によりて張り閉さる。半規軌管、蝸牛殻の二部に分れ、前者は聴覺に關係少なく、音響を感ずるは、主として、後者の内にある器官の媒介に依るものにして、頭腦より來れる聴神經の分れて數千の枝となれる末端分布し、音響は、淋巴液よりこの神經の末端に傳はり、直ちに腦髄に達す。(外耳・中耳に對して)

ないしうげん 内祝言【名】うちうちにて祝言をなすこと、又その祝言。

ないじえん 内耳炎【名】〔醫〕『羅 Otitis interna』内耳の炎症。急性症は、特發することもあれど、通常、熱性傳染病に續發するものにして、俄然發熱し、激烈なる頭痛・嘔吐を催し、聴力障碍を來す。慢性症は、主に黴毒によりて發し、又肯膿勞・動脈硬化症・糖尿病より來り、難聴耳鳴・眩暈等あり、難治なり。

ないしき 内識【名】〔佛〕しんしき(心識)に同じ。

ないしきじ 内職事【名】内位の人の任ずる職事官。

ないしきよく 内史局【名】づしれい(圖書寮)の異稱。(淳仁天皇の御代に一時改められし名稱)

ないじしや 内侍者【名】〔佛〕主僧に近侍して、事務を扱ふもの。(外侍者に對して)

ないじせい 内侍省【名】■支那隋唐・宋の三代に、主として、宮内に供奉して、制令を宣傳し、後宮に關する事項をも掌りし官府。■ちゅうぐうしき(中宮職)の唐名。

ないしせん 内侍宣【名】勾當の内侍の勅旨を藏人頭(トウ)に傳達し、上卿を經ずして直ちに下知せしもの。内宣。りんし(綸旨)。

にようぼうほうしよ(女房奉書)參照。禁秘抄「又召御前一仰之、或又彼御時、内侍宣也。頭已下五位藏人下知之」

ないしだい 内侍代【名】古昔、東宮に仕へて、内侍の任に相當する事を掌り、東宮卽位の後、内侍となりし女官。東宮年中行事「中の巳の日、鎮魂の條の事、この日の夕、内侍代、内には内侍行向ふ。東宮には内侍なし。然れば代を用ふ。その代勤むる人は、卽位の御時、内侍になるべき人を代に求めらるるなり」

ないしつ 内疾【名】體内にこもれる疾患。

ないしつ 内室【名】しつ(室)■に同じ。■我會結■「呢近高家の内室達」世間且那氣質「内室もこれまで二人、この綺麗ずきにこまり」

ないじつ 内實【名】■『左傳の襄公二十八年の條に「齊慶封好田而嗜レ酒、與二慶舍政一則以二其内實一遷二于盧蒲嫳氏一易内而飲レ酒、數日國遷レ朝焉」とあり』一家の財寶又は妻妾。■内内の事情。内面の實情。うちまく。内情。

ないじつ 乃日・廼日【名】そくじつ(卽日)に同じ。

ないしどころ 内侍所【名】■『古、温明殿(ウンメイデン)の別稱、又、今の賢所(カシコドコロ)の明治維新前の稱。■次條の略。正統記「主上は…芳野に入らせたまひぬ。行宮を造りて渡らせたまふ。本のごとく在位の儀にてぞましましける。内侍所も移らせたまひ、神璽も御身に從へたまひけり」内侍所の御鏡(ガミ)【句】八咫(ヤタ)の御鏡の別稱。

内侍所の御神樂(ミカグラ)【句】古、毎年十二月、吉日を選びて、内侍所と綾綺殿との間なる庭上にて行はれ、天皇も臨御せらるる御神樂。今の賢所御神樂もこれに本づきて行はるるなり。薩戒記「享永二年十二月二十四日、庚戌、今夜、内侍所御神樂也、臨時・恆例、一度被レ行レ之」

ないしのかう 尚侍【名】次條の音便。

ないしのかみ 尚侍【名】内侍司の長官。定員二人。至尊に常侍して、奏請・傳宣を掌り、女孺を取締り、内外命婦の朝參にあづかる。平城天皇の御代、藤原藥子(クスコ)、これに任ぜられて寵幸を蒙りしより後は、天皇の寢席に候して、更衣に准ぜらるるに至れり。又、もとは名族・大官の子女之に任ぜられしが、後攝關若しくは大臣の女にあらざれば任ぜざることとなり、鎌倉時代以後廢絶せり。しやうじ。ないしのかう。ないしのかん。かんのきみ。かんのとの。

ないしのかん 尚侍【名】前條の音便。梁塵「ないしのかんの殿の御ゆかりに、ただ今は、いとゝみじうおぼえめでたければ」

ないしのじよう 掌侍【名】内侍司の判官。正四人、權二人あり。職掌は典侍に同じと規定せられたれども、内侍司の要職にして、その實權を掌握したり。略して、單に内侍ととのみいひしことも多く、父もしくは夫の官名を附して、周防内侍・辨内侍など呼ぶを常としたり。又、その第一聲(フシ)を、一の内侍、勾當の内侍、長橋の局は長橋殿といへり。しやうじ。ないし。「遂の内侍」

ないしのすけ 典侍【名】内侍司の次官。定員四人。その職掌は大略尚侍に同じきも、唯奏請・傳宣するを得ざるのみ。又天皇の別殿に渡御ある際に劍璽を捧持し、或は陪膳を勤仕し、御乳母の典侍は、八十島祭(ヤソシママツリ)の使を奉仕し、又鎌倉以前より天皇の寢席に候する者あるに至れり。てんじ。すけ。

ないしのつかさ 内侍司【名】古の後宮十二司の一。後宮中最も重要の地位に立ち、天皇に常侍し、奏請・傳宣、後宮の雜事等を掌りし所。職員は尚侍二人、典侍四人、掌侍正四人、權二人、女孺一百人。

ないしのまつりごとびと 掌侍【名】ないしのじょう(掌侍)に同じ。

ないしのしふ 内集【名】親しき人人、又は家内の者の集會。

ないしん 内心【名】■心のうち。心中。陪膳を勤仕し、御乳母の典侍は、八十島祭(ヤソシママツリ)の使を奉仕し、又鎌倉以前より天皇の寢席に候する者あるに至れり。てんじ。すけ。

ないしのつかさ 内侍司【名】古の後宮十二司の一。後宮中最も重要の地位に立ち、天皇に常侍し、奏請・傳宣、後宮の雜事等を掌りし所。職員は尚侍二人、典侍四人、掌侍正四人、權二人、女孺一百人。

ないしのまつりごとびと 掌侍【名】ないしのじょう(掌侍)に同じ。

ないしふ 内集【名】親しき人人、又は家内の者の集會。

ないしん 内心【名】■心のうち。心中。■數『英 Intent』内心如夜叉(ニョヤシャ)【句】「外面(ソトヅラ)如菩薩、内心如夜叉」を見よ。十訓「女人を見よ』奥に在る座敷

ないしんわうきふ 内親王給【名】内親王に給せらるる年給。

ないしんわうきふ 内親王給【名】内親王に給せらるる年給。

ないしや 内射【名】こやらい(射禮)■に同じ。

ないしょう 内證【名】■『後漢書に「康以二太后久臨一朝政一、心懷二畏懼一託レ病不レ朝、太后使二内人問レ之」とあり』宮中に仕ふる官婦。■『南史の謝弘微傳に「弘微曰、親戚爭レ財、爲レ鄙之甚、今内人尚能無レ言、豈可二導レ之使レ爭」とあり』

ないしつ 内室【名】■『漢書の張安傳に「天子甚尊二禪大將軍一、然内親二安世一密於光一焉」とあり』心の中に親むこと。■ないせき(内戚)に同じ。(外親に對して)

ないしん 内臣【名】■ないだいじん(内大臣)に同じ。■内國の臣民。(外臣に對して)

ないしん 内申【名】内内申し上ぐること、又その言。

ないじん 内人【名】■『後漢書に「康以二太后久臨一朝政一、心懷二畏懼一託レ病不レ朝、太后使二内人問レ之一」とあり』宮中に仕ふる官婦。■『南史の謝弘微傳に「弘微曰、親戚爭レ財、爲レ鄙之甚、今内人尚能無レ言、豈可二導レ之使レ爭」とあり』

ないしつ 内室【名】■『漢書の張安傳に「天子甚尊二禪大將軍一、然内親二安世一密於光一焉」とあり』心の中に親むこと。■ないせき(内戚)に同じ。(外親に對して)

ないしん 内臣【名】■ないだいじん(内大臣)に同じ。■内國の臣民。(外臣に對して)

ないしん 内申【名】内内申し上ぐること、又その言。

ないじん 内人【名】■『後漢書に「康以二太后久臨一朝政一、心懷二畏懼一託レ病不レ朝、太后使二内人問レ之一」とあり』宮中に仕ふる官婦。■『南史の謝弘微傳に「弘微曰、親戚爭レ財、爲レ鄙之甚、今内人尚能無レ言、豈可二導レ之使レ爭」とあり』

ないしつ 内室【名】しつ(室)■に同じ。■我會結■「呢近高家の内室達」世間且那氣質「内室もこれまで二人、この綺麗ずきにこまり」

ないじつ 内實【名】■『左傳の襄公二十八年の條に「齊慶封好レ田而嗜レ酒、與二慶舍政一則以二其内實一遷二于盧蒲嫳氏一易内而飲レ酒、數日國遷レ朝焉」とあり』一家の財寶又は妻妾。■内内の事情。内面の實情。うちまく。内情。

ないじつ 乃日・廼日【名】そくじつ(卽日)に同じ。

ないしどころ 内侍所【名】■『古、温明殿(ウンメイデン)の別稱、又、今の賢所(カシコドコロ)の明治維新前の稱。■次條の略。正統記「主上は…芳野に入らせたまひぬ。行宮を造りて渡らせたまふ。本のごとく在位の儀にてぞましましける。内侍所も移らせたまひ、神璽も御身に從へたまひけり」内侍所の御鏡(ガミ)【句】八咫(ヤタ)の御鏡の別稱。

内侍所の御神樂(ミカグラ)【句】古、毎年十二月、吉日を選びて、内侍所と綾綺殿との間なる庭上にて行はれ、天皇も臨御せらるる御神樂。今の賢所御神樂もこれに本づきて行はるるなり。薩戒記「享永二年十二月二十四日、庚戌、今夜、内侍所御神樂也、臨時・恆例、一度被レ行レ之」

ないしのかう 尚侍【名】次條の音便。

ないしのかみ 尚侍【名】内侍司の長官。定員二人。至尊に常侍して、奏請・傳宣を掌り、女孺を取締り、内外命婦の朝參にあづかる。平城天皇の御代、藤原藥子(クスコ)、これに任ぜられて寵幸を蒙りしより後は、天皇の寢席に候して、更衣に准ぜらるるに至れり。又、もとは名族・大官の子女之に任ぜられしが、後攝關若しくは大臣の女にあらざれば任ぜざることとなり、鎌倉時代以後廢絶せり。しやうじ。ないしのかう。ないしのかん。かんのきみ。かんのとの。

ないしのかん 尚侍【名】前條の音便。梁塵「ないしのかんの殿の御ゆかりに、ただ今は、いとゝみじうおぼえめでたければ」

ないしのじよう 掌侍【名】内侍司の判官。正四人、權二人あり。職掌は典侍に同じと規定せられたれども、内侍司の要職にして、その實權を掌握したり。略して、單に内侍ととのみいひしことも多く、父もしくは夫の官名を附して、周防内侍・辨内侍など呼ぶを常としたり。又、その第一聲(フシ)を、一の内侍、勾當の内侍、長橋の局は長橋殿といへり。しやうじ。ないし。「遂の内侍」

ないしのすけ 典侍【名】内侍司の次官。定員四人。その職掌は大略尚侍に同じきも、唯奏請・傳宣するを得ざるのみ。又天皇の別殿に渡御ある際に劍璽を捧持し、或は

ないしや 乃者【名】だいしや(乃者)に同じ。

ないしやう 内障【名】㊀内部にある障碍。㊁〔佛〕心の内にある障礙。即ち煩惱(ボンナウ)など。うちのさはり。

ないしやう 内症【名】體内の病氣。内疾。

ないしやう 内傷【名】うちきず(打傷)に同じ。

ないしやう 内相【名】㊀『翰林志に「翰林學士貞元末、其任益重、時人謂二之内相一」とあり』内部にありて天皇の政治を相(タス)くる人。㊁しびないしやう(紫微内相)の略。『小野東人喚二裴太都一謂云、有四王臣謀二殺二皇子及内相一』㊂ないだいじん(内務大臣)の異稱。

ないしやう 内匠【名】ないしやうれう(内匠寮)の略。(その職員の上につきていふ)「内匠頭(ナイシヤウ)」「内匠助(ナイシヤウ)」「内匠允(ナイシヤウ)」

ないしやう 内城【名】内部の城郭。ほんまる。牙城。(外城に對して)

ないしやう 内情【名】うちわの事情。内實。(外情に對して)

ないしやう 内狀【名】㊀内密に遣す書狀。内内の書狀。『甫庵太閤記』「御内狀の趣忝き次第、緒上に盡し難く」㊁あてじやう(宛狀)に同じ。

ないしやうがん 内障眼【名】〔醫〕そこひ(内障眼)に同じ。

ないしやうじ 内常侍【名】中宮亮(チウグウノスケ)の唐名。

ないしやうじやう 内清淨【名】心の内の清淨なること。

ないしやうてん 内掌典【名】宮内省式部職掌典部の職員の一。掌典の下、掌典補の上に位し、判任または奏任にして、祭典に從事す。

ないしやうの-かみ 内匠頭【名】たくみのかみ(内匠頭)に同じ。

ないしやうの-じょう 内匠允【名】たくみのじょう(内匠允)に同じ。

ないしやうの-すけ 内匠助【名】たくみのすけ(内匠助)に同じ。

ないしやうふ 内相府【名】ないだいじん(内大臣)の唐名。

「匠寮」に同じ。

ないしやうれう 内匠寮【名】たくみれう(内匠寮)〔醫〕前腹の最も上層なる筋肉。

ないしやく 内借【名】㊀内密にて借金すること。㊁うちがり(内借)に同じ。

ないしやく 内戚【名】ないせき(内戚)に同じ。(外戚(ガイセキ)に對して)〔古語〕

ないしやくり 泣噦【名】なきじやくり(泣噦)の音便。正章千句「むする煙草や吸ひつけてたぶ(といふ句に誕をばたらして後のないじやくり、…貞德判、ないじやくりは、泣き泣きするしやくりなり」

ないしやくこつ-きん 内尺骨筋【名】〔醫〕『羅 Musculus ulnaris internus』前膊筋前側淺在層の一筋。手腕を屈曲又は回轉する作用をなす。

ないしやじん 内舍人【名】うどねり(内舍人)に同じ。

ないじゅ 内豎【名】㊀『禮記の文王世子篇に「文王之爲二世子一、朝二于王季一日三、鷄初鳴而衣服至二寢門外一、問二内豎之御者一曰、今日安否何如、内豎曰、安、文王乃喜」とあり』宮中の給事。㊁我が國にて、古、禁中にて、元日節會以下の朝儀に、或は召使となり、或は陪膳を勤め、或は賭弓(ノリユミ)・射場始等の矢取をなし、或は時奏(ジソウ)をなす等、驅使・雜役に供せられし、貴家の子弟たる小童。始は内豎省に屬し、同省の廢止後、一時舍人(トネリ)と改稱せられしが、弘仁二年また舊稱に復せり。員數もとは百人餘、漸次增して、二百人に及びたり。禁祕抄「次大臣喚二内豎一、内豎稱レ唯」㊂ないじゅどころ(内豎所)の略。うへわらは。『西宮記』「内豎頭並執事等事」『建武年中行事』「ないじゅの頭(カシラ)、杯を取る」

ないじゅ 内豎【名】前條の音便。名目抄「内豎、ナイジュウ」

ないじゅきやう 内豎卿【名】内豎省の長官。『延喜式』「是日始置二内豎省一、以二正三位弓削御淨朝臣淨人一爲レ卿」

ないじゅきょく 内豎局【名】ないじゅどころ(内豎所)に同じ。

ないじゅどころ 内豎省【名】稱德天皇の神護景雲元年に始めて置き、内豎に關する庶事を管せしめたる所。八省に准じて、卿以下の職員を定めたり。寶龜三年廢せられ、後、内豎所設置せられたり。

ないじゅどころ 内豎所【名】ないじゅどころ(内豎所)に同じ。

ないじゅっけつ 内出血【名】〔醫〕身體の内部に於いて、血液の溢出すること。(外出血に對して)

ないじゅどころ 内豎所【名】内豎に關する庶事を掌りし所。内豎省の廢止後、沿革を經て設置せられしものにして、春興殿の東廂をその所と定められ、その厨所は大舍人(オホトネリ)寮の南に置かれ、別當・掾・闕もしくは大臣・納言の中より補せられたり)頭(カシラ)・執事等の職員を置かれたり。職原鈔「内豎所別當二人、必爲二其仁一、他人不レ望レ之、大中納言堪二其道一人補レ之」

ないしゅひ 内種皮【名】〔植〕『英 Endosperm 又 Tegmen』種子の表面に有する二層の被膜中、内部に存するもの。通常甚だ薄けれども、蘇鐵・銀杏等にありては厚く堅し。(外種皮に對して)

ないしゅひ 内珠被【名】〔植〕『英 Inner integument』胚珠の珠心が有する二層の被膜中、内部に位する被膜。後、生長して、内種皮となる。(外珠被に對して)

ないしょ 内書【名】ごないしょ(御内所)に同じ。『鎌田兵衛名所盡』「清盛の御内書是を見よ」

ないしょ 内所・内處・内證【名】ないしょう(内證)㊂㊃㊄㊅㊆の略記。

ないじょ 内助【名】㊀内内に補助すること。㊁『三國魏志波妃后傳に「在昔帝王之治二天下一、不二惟外輔一、亦有二内助一」とあり』妻が、家の内にありて、夫(ツマ)の事業を補助すること。「内助の功多し」

ないしょう 内證【名】㊀内密の證據。㊁〔佛〕『唯識論の卷十に「唯眞證者、自内所證、其性本寂、故名二涅槃一」、法華文句の卷三に「内證甚深」などあり』心中の證果を得て、その妙境の他より窺ひ知る能はざること。内心に眞理を證悟すること。自内證。『盛衰記』「安藝國嚴島明神…當社者、尊二内證一者、則大日也」『徒然』「外相(ゲサウ)もしそむかずば、内證必ず熟す」㊂あらはにせぬこと。人に知られぬやうにすること。ないしょ。内内。祕密。内密。裏面。『若風俗』「外へは年を隱し、節分の大豆(マメ)も鯖讀にして、くらがりにて内證は濟せども」㊃『川中島合戰』「甲州山本勘介といふ者、御家老直江山城殿の御内證へ行くと申し、供の人馬をお國境へ殘し通られし故」㊄妻又は妾。ないしょ。内儀。内方(ナイカタ)。㊅『望月千草』「親子のよしみは内證、主從の忠義は世間」㊆一家の財政。『博多小女郎浪枕』「身請する程内證はあたたかで」㊇主人の居間又は帳場。ないしょ。〔遊廓の語〕『長町女腹切』「お花一人は我れ等が内、手離しては内證に氣遣ひ」

ないしょう-じょう 内證常住【句】〔佛〕内證㊀の變易せぬこと。『鷄鬼合戰』「内證常住の月は、遙かに淡路島の浪を照し、外用(ゲユウ)隨緣の花は、更に津守の浦の春の風に薰ず」

ないしょうの方(カタ) 【句】身分の重き人の妾。御部屋樣。

ないしょうの者 【句】勝手むきの事をも、よく知りをる人。うちうちの者。『狂言』(鏑原丁)「何なりとも料理を好ましめ。いや、私は、内證の者で御座る。さやうの者をば、食べはせられて、お客へ遣されませ」

ないしょう-かけ 内證は曾我【句】『曾我の内證』に同じ。〔諺語〕『長町女腹切』「内證は曾我殿、見せかけ力(チカラ)み、置いてくれ」

ないしょうは火が降(フ)る 【句】次條に同じ。〔諺語〕

ないしょうは火の車 【句】甚だ貧困なる形容。〔諺語〕

ないしょう-あそび 内證遊【名】内證にて遊ぶこと。又その遊び。かくれあそび。『二代男』「島原の大阪屋に内證遊び」

ないしょう-かせぎ 内證稼【名】内證にて

かせぐこと、又そのかせぎ。

ないしょう-がね 内證金【名】内證にてためたる金錢。内證にて所有する金錢。

ないしょう-がり 内證借【名】内證にて借ること、又その物。一代女「銀八十目に詰まり、内證がりして」

ないしょう-ぐひ 内證食【名】内證にて食ふこと。かくしぐひ。

ないしょう-ご 内證子【名】祕密にしておく私生子。かくしご。

ないしょう-ごと 内證事【名】祕密にする事柄。かくしごと。ないしょごと。

ないしょう-ちやう 内證帳【名】内證に持てる帳面、また内證事を記す帳面。若風俗「玉川千之丞内證帳の事。…或時、千之丞内證の文庫を開けし事ありて見るに、假綴にして手日記、この上書に初枕とあり」

ないしょう-づかひ 内證使【名】奥向にて使ふこと、又その女。新可笑記「戀じて武士は相應より内證使の女ずきなり」

ないしょう-でん 内昇殿【名】禁中に於ける昇殿。内(ウチ)の昇殿。しょうでん(昇殿)參照。

ないしょう-ばなし 内證話【名】祕密にする話。ないしょばなし。密談。一代男「互におもはず内證話」

ないしょう-ま 内證間【名】内證事に用ふる室。内證にしておく部屋。かくれべや。二代男「これが御内證間とて、見する」

ないしょう-むき 内證向【名】内證に屬する方面。勝手むき。くらしむき。ないしょむき。

ないしょう-よし 内證善【名】内證の具合、即ちくらしむきのよきこと、又その人。ないしょよし。

ない-しょく 内職【名】■『禮記の昏義篇に「天子聽二外職一、后聽二内職一」とあり』奥向の職務。■本職の外に、私になす生業。(本職に對して)「子」の訛。

ないしょ-ご 内證子【名】ないしょうご(内證子)の訛。

ないしょ-ごと 内證事【名】ないしょうごと(内證事)の訛。

ないしょ-ばなし 内證話【名】ないしょうばなしの訛。

「(内證話)の訛。

ないしょ-むき 内證向【名】ないしょうむきの訛。

ないしょ-よし 内證善【名】ないしょうよし(内證善)の訛。生寫朝顔話「所(コヽ)名うての内しよよし、名さへ戻屋(ナニ)徳右衛門、しにせも廣き十間間口(ケン)」

ない-せい 内政【名】■國内に行ふ政務。■かせい(家政)に同じ。

ない-せい 内聖【名】『鶡冠子に「内政者、精神之原也」とあり』國の内にある聖者。だいせい。

ない-せい 内省【名】■『論語の顏淵の條に「内省不レ疚、夫何憂何懼」とあり。内心に省(カヘリ)る義』はんせい(反省)に同じ。■〔哲〕『英 Introspection』心理學研究の一方法として、自己の心意狀態及び心意作用を觀察して、精密にして組織ある知識を得んがために、大なる興味と注意とを以て自ら省察すること。

ない-せい 内清【名】次條を見よ。内清外濁【句】『太玄經に「内清外濁、厥衣裏レ玉」とあり』濁亂の世に處する方法として、表面は汚れたるやうにて、内實は清らかにすること。

ないせい-けいさつ 内政警察【名】ぎやうせいけいさつ(行政警察)(二)に同じ。

ないせい-はふ 内省法【名】〔哲〕『英 Introspective method』内省(一)に依る心理學研究の方法。

ない-せう 内鞘【名】〔植〕『英 Pericycle』維管束を圍繞する二重の鞘皮中、内面に位する基本組織の一層。根の内鞘は、きはめて重要なる組織にして、側根はすべて、この部にその起源を發し、コルク形成層も、多くは此處に發生す。周邊形成層。周皮。(外鞘に對して)

ない-せき 内戚【名】父方の親族。ないじゃく。(外戚に對して)庭訓往來「下二給御綱一御旗等二之間、内戚・外戚一族」

ない-せつ 内切【名】〔數〕一の圓が、他の一圓の内にありて、一の點にて相切すること。(外切に對して)

ない-せつ 内接【名】〔數〕『英 Inscribe』多角形の各角頂が、一の圓の周又は一の多角形の邊上にあること。(外接に對して)

ないせつ-かく 内接角【名】〔數〕『英 Inscribed angle』圓周上の一點より引ける二弦のなす角。同弧の上に立つ中心角の二分一なり。

ないせつ-きう 内切球【名】〔數〕『英 Inscribed sphere 又 Insphese』多面體の各の面に切する球。(外切球に對して)

ないせつ-けい 内接形【名】〔數〕『英 Inscribed figure』ないせつたかくけい(内接多角形)の略。(外接形に對して)

ないせつ-さんかくけい 内接三角形【名】〔數〕『英 Inscribed triangle』ないせつたかくけい(内接多角形)を見よ。

ないせつ-しへんけい 内接四邊形【名】〔數〕『英 Inscribed quadrilateral』ないせつたかくけい(内接多角形)を見よ。

ないせつ-たかくけい 内接多角形【名】〔數〕『英 Inscribed polygon』内接せる多角形。その邊の數により、内接三角形・内接四邊形等あり。内接形。(外接多角形に對して)

ないせつ-ためんたい 内接多面體【名】〔數〕『英 Inscribe polyhedron』内接せる多面體。

ないせつ-ちよくせんけい 内接直線形【名】〔數〕『英 Inscribed rectilineal figure』内接せる直線形。(外接直線形に對して)

ないせつ-えん 内切圓【名】〔數〕『英 Inscribed circle』一の圓の内にありて、且つこれと、ただ一の點にて切する圓。(外切圓に對して)

ないせつ-えん 内接圓【數】『英 Inscribed circle』一の直線形の各邊に切し、全く、且つその内にある圓。即ちその直線形は、その圓に對して、外接直線形となる。(外接圓に對して)

ない-せん 内戰【名】ないくさ(内國戰)に同じ。

ない-せん 内宣【名】ないしせん(内侍宣)の「略。

ない-ぜん 内禪【名】『文獻通考經籍考に「宋高宗壬午内禪于太子」とあり』皇帝が太子に位を禪(ユヅ)りて、未だその卽位式を行ふに至らざること。

ない-ぜん 内膳【名】■『老學庵筆記に「舊制皇帝曰二御膳一、中宮曰二内膳一」とあり』宮中の大膳職。■ないぜんし(内膳司)の略。(膳)ないぜんに仰せごとありければ」

ないぜん-し 内膳司【名】うちのかしはでのつかさ(内染司)に同じ。

ないぜん-し 内染司【名】うちのそめもののつかさ(内染司)に同じ。

して、天皇の供御の調進を掌りし所。職員に奉膳(カシハデ)二人、典膳(ジョウ)六人、令史一人ありて、膳部四十人、使部・直丁(ヂキテウ)・駈使丁各若干これに附屬し、奉膳には、安曇(アヅミ)・高橋の兩氏を任ぜらるる例なりしが、桓武天皇の代、安曇氏罪ありてより、高橋氏の專任に歸したり。後、大膳職の網引長(アビキノサヽ)、江長(エノサヽ)もこれに隷するに至り、史生(ヤウジン)二人及び食長上・料理長上・御炊(ミカシキ)・炊夫並びに雜器を造る工人等の增設あり。又、別當(大納言の兼任)を置きて、庶務の總管に任ぜしめ、御厨(ミクリヤ)、贄殿(ニヘドノ)を附設し、奉膳を内膳正(ナイゼンノカミ)と改稱する等の沿革ありたり。うちのかしはでのつかさ。うちのかしはで。内膳。だいぜんしき内膳職)參照。■明治三年宮内省に置かれたる、天皇の膳羞の事を掌る司。「し。

ないぜん-どころ 内膳所【名】前條■に同じ。

ないぜん-の-つかさ 内膳司【名】ないぜんし(内膳司)■に同じ。

ないぜん-や 内膳屋【名】内膳司■の中にて、竈を置きて、供御を調せし所。增鏡「二條油小路に火出で來て、閑院殿の築墻(ツヒヂ)の内なれば、内膳屋燒けて、神代より傳はれる御釜も燒け損はれけるをぞ、いとあさましき事には申しけり」

ないそ 内訴【名】■内密に訴ふること。内の訴。■鎌倉時代、近侍等に緣を求めて、幕府にては執權・連署に、六波羅にては探題に、内密に上訴せしこと。

ないそ 乃祖【名】だいそ(乃祖)に同じ。

ないそう 内層【名】内部に位する層。(外層に對して)

ないそう 内奏【名】■内密に奏聞すること。庭訓往來■内密に申し上ぐること。

「頭人内奏畢、寵二機嫌一可レ申レ之」

ないーそう 内送【名】内内にて送ること。

ないーそく 内則【名】■部内に於ける規則。■禮記に内則篇あり、又、後漢書の皇后紀に「遵二宣陰化一、修二成内則一」とあり』一家内のさだめ。

ないーぞく 内族【名】身内(ウチ)なる一族。

ないーぞく 内屬【名】外國が、屬國として服從すること。

ないーそん 内損【名】内臓を損ふこと。體内の病氣。内虚。運歩色葉集「内損、ナイソン」

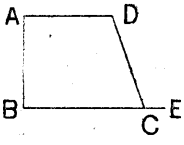
ないーぞん 内存【名】内内の所存。甲陽軍鑑「是非、身延(ミノブ)を、東(アヅマ)の叡山になさるべきと、御内存定め候ひつる」

ないーたい 内帶【名】〔地〕彎曲せる山脈(長大なる山脈は、大抵彎曲す)の凹面。内面。裏面。(外帶に對して)

ないーだい 内題【名】書籍の内部に記せる題目。(外題(ゲダイ)に對して)

ないーだい 内臺【名】■支那の尚書省の異稱。

ないーたいかく 内對角【名】〔數〕『英 Interior opposite angle』多角形の或外角に隣接せる内角と相對する他の内角を、前記の外角に對して呼ぶ稱。例へば、下圖に於て、外角即ち∠DCEに隣接せる内角即ち∠BCDの對角なる∠Aが、∠DCEの内對角なる類。



(くかいたいな)

ないーだいじん 内大臣【名】■古の大臣の一。太政大臣・左右大臣と共に、太政官の長官。初は内臣と稱し、大化元年、藤原鎌足、これに任ぜられ、天智天皇の八年、内大臣と改む。但し、これを太政大臣と記せる書もあれば、當時は、左右大臣の上に列せしなるべし。鎌足の薨後、暫く廢せられ、大寶令制定の後、又置きて、或は内臣、或は内大臣と稱し、地位・職掌は大納言と同一たるに至り、左・右大臣の下に列せしが、後、又、位階、左・右大臣と同じく、正從二位相當に進む。令外(リゲ)の官たるより、員(カズ)の外の大臣ともいへり。うちのおほいまうちぎみ。唐名、内府・内相府・内丞相。■現官制にて、御璽・國璽を尚藏し、常侍・輔弼する親任官。明治十八年十二月、太政官令を以て、始めて宮中に置かれ、宮中顧問官の議事の總提にも任ぜしが、皇室令を以て、現制度に改定せらる。■支那清朝の近衛の將官にて、同時に侍從武官の職を掌りし官。領侍衛内大臣・内大臣(各六人)・散秩大臣(若干名)の三等に分れ、何れも、皇族中より任ぜられたり。

ないだいじんーふ 内大臣府【名】現行の宮内府の官廳の一。職員に内大臣(親任)・祕書官長(勅任)各一人、祕書官專任二人、及び屬(判任)ありて、御璽・國璽を尚藏し、及び詔書・勅書その他内廷の文書に關する事務を掌る所。

ないーたう 内帑【名】ないど(内帑)を見よ。

ないーだう 内道【名】〔佛〕ぶつだう(佛道)に同じ。(外道(ゲダウ)に對して) 沙石集「利根の外道は、邪相を正相(シャウサウ)に入れて、邪法を以て正法(シャウホフ)とし、鈍根の内道は、正相を以て邪相に入れ、正法を以て邪法とす」

ないーだうぢやう 内道場【名】支那唐朝の玄宗帝より文宗帝に至る間、及び我國聖武天皇の御代に、宮中に設けて、僧を召し入れ、佛道を修せし所。天皇・皇后等は、庶民と異にして、寺院に參詣する便を缺くに因る設置にして、支那にては、長生殿を捨てて、これに充て、我國にては、仁明天皇の承和五年以後、眞言院を置きて、これに代へたり。豐臣時代、伏見の城内にも、この設ありたり。**ないぐぶ**(内供)參照。續紀「尊爲二僧正一、安二置内道場一」正統記「弘法……大唐の内道場に准じて、宮中に眞言院を立つ(もとは勘解由使の廳なり)。大師奏聞して、毎年正月、この所にて御修法(ミヅホフ)あり、國土安穩の祈禱、稼穡豐饒の祕法なり」

ないたう-はう 内螗砲【名】『英 Aiming tube』砲膛内に、膛軸と一致して入れる、口徑小なる砲又は小砲。大なる砲の發射を行ふかはりに、小彈を發射して、經濟的に砲の操縱及び照準の方法等を熟練せしむるために用ふ。縮射砲。(外膛砲に對して)

ないだく 内諾【名】内内に承諾すること、又その承諾。「と、又その承諾。

ないーたつ 内達【名】内内に通達すること、又その通達。内内のたつし。

ないーたふ 内答【名】内内に回答すること、又その回答。「ること。内偵。

ないーたん 内探【名】内内に探りしらぶ。

ないーだん 内談【名】■内内に話すこと。うちわばなし。内話。密談。■内内に相談すること。したさうだん。密談。■室町時代に、引付頭人(ヒキツケノトウニン)以下引付衆の參集して爲し、政務の評定。引付衆は、全國を三區若しくは五區に分割し、それぞれ三番若しくは五番等に分れて、その政務に當ることありしより、三方内談・五方内談・一方内談等の別あり。**ないだんはじめ**(内談始)參照。

ないだんーしゆう 内談衆【名】ひきつけしゆう(引付衆)に同じ。〔室町時代の話〕

ないだんーとうにん 内談頭人【名】ひきつけのとうにん(引付頭人)に同じ。〔室町時代の話〕

ないだんーはじめ 内談始【名】内談■の、議首又は將軍襲職の時に行ひしもの。内談■に於けると同じく、三方内談始・五方内談始・一方内談始等の別あり。

ないち 内地【名】■一國家の領土を、外國と區別していふ語。國土の内。版圖内。■一國家の領土の内、屬地又は島地以外の土地。我國にては、主として本土・四國・九州の地をいふ。■海岸を遠ざかれる、内部の土地。

ないぢ 内痔【名】肛門内に瘡の生ずる痔疾。運歩色葉集「内痔、ナイヂ」

ないちーえんちやうーしゆぎ 内地延長主義【名】内地の施政及び法令を、植民地にまで及ぼし、植民地と内地とを同一觀せんとする主義。

ないちーおくりじやう 内地送狀【名】『英 Inland invoice』貨物の内地間の輸送に添ふる送狀。内地仕切書。

ないちーかはせ 内地爲替【名】ないこくかはせ(内國爲替)に同じ。

ないちーくわんぜい 内地關稅【名】〔經〕こくないくわんぜい(國内關稅)に同じ。

ないーち 内治【名】■國内の政治。(外交に對して) 内政。■婦人の、家の内を治めゆくこと。内政。■内科の治療。

ないーち 内智【名】〔佛〕さんち(三智)を見よ。

ないちーざつきよ 内地雜居【名】外國人が、その國土内の何れの地にも、内國人と雜居し、又、自由に移轉・旅行するを許す制度、即ち、居留地を定めて、外國人の居住を制限するに非ざる制度。我國にては、明治三十二年八月以後、許可せり。但し、要塞地帶内等、國防上の理由ある場所に關してのみは、制限を設くること勿論なり。

ないちーしきりじよ 内地仕切書【名】ないちおくりじやう(内地送狀)に同じ。

ないーぢぶつだう 内持佛堂【名】佛像を安置する方丈又は寢。「と、又その陳述。

ないーちん 内陳【名】内内に陳述すること。

ないーぢん 内陣【名】杜寺にて、本堂又は本殿中の奥の間(ま)、即ち本尊又は神體を奉安する處。(外陣(ゲヂン)に對して) 神社にては、本殿を三つに區劃する時は、最奥を内内陣、中間を内陣といひ、或は、最奥を内陣、中間を中陣といふ。特別の例として、内内陣を中心として、内陣・外陣は、その周圍に在るもあり。又、本殿の規模狹少にして、區劃を設けざるものにありては、本殿内全部を、單に内陣と呼ぶ。寺院にては、密教のは、嚴重なる區劃あれど、その他の宗派のは、柱あると、多くの場合、天井の構造の相違などの外、外陣との間に、さしたる區別なし。夫木「粉河(コガ)の觀音に詣でて……祈り申しけるに、内陣より斯く示したまひけるとなん」

ないちやうじやう 内長上【名】内位の長上。(外(ゲ)長上に對して)

ないちやうーしよくぶつ 内長植物【名】〔植〕『屬 Endogenae.これに屬する植物にありては、莖の最内位に位する維管束が

最も若き者なりと誤解せしに本づく』植物分類上の舊名稱の一。現時の顯花植物中の單子葉植物、もしくはこれに隱花植物中の羊齒植物をも含めたるもの。(外長植物に對して)

ないーちよう 內寵【名】君主の妾などを寵愛すること、又その妾など。內嬖。「敕。

ないーちよく 內敕【名】天子の御內意。密

ないーつう 內通【名】■味方の內より、內密に、敵に通ずること。らぢり。內應。■男女密かに情を通ずること。凱陣入島梶原憚なく申す樣…今度の戰半ばにも、船中にて惟盛の御息女と內通あり、それのみならず勿體なくも女院への御戲れ」

ないーつうじ 內通事。內通詞【名】江戸時代の通事役の一。出島(デジマ)に入りて、和蘭の商人と內地の商人との取引に通譯をなしものの。

ないーてい 內庭【名】■うちには。なかには。■ていてい(朝廷)に同じ。

ないーてい 內廷【名】朝廷の內。宮廷の內部。(外廷に對して)

ないーてい 內定【名】內內にさだまりてあること、又その定まり。「內探。密偵。

ないーていかう 內偵【名】內密に探偵すること。

ないーていかう 內抵抗【名】〔理〕『英 Internal resistance』電流が電池內を流るる際に受くる抵抗。(外抵抗に對して)

ないていーしき 內廷職【名】明治二年五月內廷の庶務を掌らしむるため、行政官に置きし役所。同年七月廢止せられたり。ないていちじ(內廷知事)參照。

ないていしきーちじ 內廷職知事【名】次條を見よ。

ないていーちじ 內廷知事【名】明治二年四月行政官中に置かれし職。公卿諸侯の中より公選せられ、內廷の事を總制せしもの。同年五月內廷職の設置と共に內廷職知事と改稱せられ、同七月廢止せられたり。「天子諸侯皆三朝」、疏に「公侯朝二于內朝」とあり。』支那周の代の朝廷の一部。三朝の一。天子退居の室。燕朝。路寢。(外朝・治朝に對して)

ないーてき 內敵【名】內部にある敵。國家の內にある敵。內寇。(外敵に對して)

ないーてき 內的【貌】『英 Internal』內部に關するさま。心意の方面に關するさま。(外的に對して)

ないてきーかんかく 內的感覺【名】〔哲〕ないかん(內感)に同じ。「條に同じ。

ないてきーけいけん 內的經驗【名】〔哲〕前

ないてきーげんり 內的原理【名】〔哲〕主觀そのものの具有する原理。

ないてきーざいくわ 內的財貨【名】〔經〕「內界の財貨」に同じ。

ないてきーちかく 內的知覺【名】〔哲〕ないかん(內感)に同じ。

ないてきーちよくかく 內的直覺【名】〔哲〕じいしき(自意識)に同じ。

ないてきーちよくくわん 內的直觀【名】〔哲〕前條に同じ。

ないーてん 內典【名】佛家にて、佛經をきしいふ稱。佛書。(外典(ゲテン)に對して)職員令「內典・佛像・宮內禮佛」津岡女夫迺「日夜內典・外典にまなこをさらし」「の。

ないーでん 內殿【名】內部の殿室。おくどの。

ないーど 內帑【名】『帑の字の音、正しくはたう。金藏(カネグラ)の義』天皇のうちうちの御費用。帝室費。

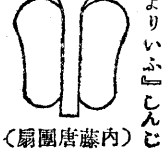
ないとう 內藤【名】姓氏の一。本姓は藤原。鎭守府將軍秀鄕五世の孫頼俊、內舍人(トネリ)・左近衞將監となり、藤原姓にして內舍人なるにより、その一字づつを取りて、氏となす。淸長・家長に至り、德川氏に仕へて功あり、子孫諸國に封ぜられ、日向國延岡(ノベオカ)・陸奥國湯長谷(ユナガヤ)・三河國擧母(ころも)・越後國村上・信濃國高遠(タカトオ)・同岩村田の六藩主あり。外に、志摩國鳥羽(トバ)の藩主たりし家あれど、延寶八年罪によりて、所領を收められたり。明治維新後、何れも子爵を授けらる。

ないとうーいへなが 內藤家長【名】〔人〕武士。德川家康の臣。通稱は彌次右衞門。三河國の人。小田原の北條氏滅亡の後、功に依りて上總國佐貫(サヌキ)城主となる。關ケ原の役、鳥居元忠等と伏見城を守りて戰死す。

ないとうーぎり 內藤桐【名】紋所の一。五七桐の一種。

ないとうーしんじゆく 內藤新宿【名】〔地〕『新宿御苑はもと信濃國高遠(タカトオ)藩主內藤氏の下屋敷の域內なりしよりいふ』しんじゆく新宿』を見よ。

ないとうーたうちは 內藤唐團扇【名】紋所の一。下の圖を見よ。


(內)藤唐團扇

ないとうーたうなす 內藤南瓜【名】〔植〕南瓜の一品種。形、縮緬南瓜などより大きく、扁圓にして、果皮やや滑かなり。東京府下淀橋附近より多く產す。淀橋南瓜。

ないとうーちそう 內藤恥叟【名】〔人〕漢學者。蒼水戶藩士。碧海と號す。漢學及び國史に長ず。佐藩黨に屬して、奧羽に轉戰す。後、東京文科大學敎授に任じ、最も德川史に精しく、德川十五代史の著あり。明治三十五年卒す。年七十一。

ないとうーちやうさう 內藤丈草【名】〔人〕俳人。尾張犬山侯の臣。林右衞門(一說に、儀右衞門)と稱す。芭蕉の高足にて、近江國粟津の義仲寺の上なる龍ヶ岡に佛幻庵(一名弘句庵)を結びて住せり。元祿十七年寂す。年四十二。轉寢草(ネコロサ)及び發句集の著あり。

ないとうーひろさき 內藤廣前【名】〔人〕國學者。江戶の人。世世幕府に仕ふ。史學及び系譜に精通す。嘗て和學講談所出役たり。文政の頃尾州侯の聘に應じ、大內裏考證を校訂す。丹鶴叢書・八代集作者傳等の著作あり。慶應二年歿す。年七十六。

ないとうーふぢ 內藤藤【名】紋所の一。一種の藤丸(フヂマル)なれども、九條家・二條家・一條家等公卿の家のとは形狀異にして、花英開きて葉を抱きたるもの。

ないとうーりう 內藤流【名】馬術の古流の一。大坪流より出でたるもの。

ないとうーろてん 內藤露沾【名】〔人〕俳人。奧州盤城國平(タイラ)の藩主。名は義英。父義泰と共に西山宗因に俳道を學ぶ。のち芭蕉に其角等と交はる。故ありて俗界を脫せんとし、三十歲の頃、弟義孝に封を讓りて、專ら俳道を窮めたりといふ。享保十八年歿す。年七十九。

ないとがり 鳴鳥狩【名】ないとりがり(鳴鳥狩)に同じ。

ないとく 內德【名】身の內に積みて、人に表はさざる美德。

ないとく 內毒【名】內部にこもれる毒。

ないとりーがり 鳴鳥狩【名】さまりやま(泊山)に同じ。

ないーない 內內【副】うちうちに。うちわに。こっそりと。內密に。「庭訓往來」高家之人人、以二路次便一可二打寄一之由、內內其聞候」鎌田兵衞名所畫「扨御使とは、內內仰付らるる屛風の事か」

ないーないちん 內內陣【名】ないぢん(內陣)を見よ。

ないーなん 無い難【句】なし(無し)の條下「を見よ。

ないーにとうぶんせん 內二等分線【名】【數】『英 Internal bisector』角の二分線等を、その角の外角の二等分線、即ち外二等分線に對していふ稱。

ないにゆうーどうみやく 內乳動脈【名】【醫】『羅 Arteria mammaria interna』鎖骨下動脈の分枝。上腹壁動脈・筋橫隔動脈の二枝に分れ、肋間筋・直腸筋・肋間腔及び橫隔膜に分布す。

ないーねつ 內熱【名】『莊子の則陽篇に「漂疽癰、內熱潦宵是也」とあり』內部にこもれる熱。內攻したる熱。

ないーのーかみ 地震神【名】『ないはなの誤なるべし』地震を司る神なりといふもの。神道名目類聚抄「ないのかみ」

ないーはい 內拜【名】內內にてをがむこと。「蓮華千紅」鎌倉圓覺寺の什寶、佛牙(ブツゲ)の舍利、牛込濟松寺にて內拜あり」

ないーはいえふ 內胚葉【名】〔動〕ないはいそう(內胚層)に同じ。(中胚葉・外胚葉に對して)

ないーはいせん 內胚線【名】〔數〕『英 Hypocycloid』固定圓の內方に在りて、その周上を轉ずる圓の周上にある一點が畫く曲線。(外擺線に對して)

ないはいそう 内胚層【名】〔動〕『英 Hypoblast 又 Entoderm』複細胞動物の發生の初期に生ずる二層の囊胚壁の、その内部に位するもの。脊索消化系に屬する諸腺(肝臓膵臓等)・肺臓の上皮層等は、この層より發生す。内細胞層。内胚葉。(中胚層・外胚層に對して)

ないはいにゆう 内胚乳【名】〔植〕『英 Endosperm』胚嚢中に生ずる胚乳。種子發芽の際、その養料となる。(外胚乳に對して)

ないはう 内報【名】内内に報ずること。内内の報告。

ないはう 内方【名】■内面の方。うちがは。うちら。(外方に對して) ■ないぎ(内儀)■に同じ。

ないはう 内包【名】〔哲〕『英 Intension 又 Connotation』概念の複雑なる度。概念の深さ。即ちその概念のあらはす事物の屬性の全體。例へば、「動物」よりは「哺乳類」、「哺乳類」よりは「犬」「馬」などのごとく、特殊の度を增すに從ひて、その概念の内包も增加する類。内容。(外延に對して)

ないはうきん 内膀筋【名】〔醫〕上膊筋前側の一。前膊を屈曲する作用をなす。

ないばくげばく 内縛外縛【句】〔佛〕かなしばり(金縛)に同じ。 ㊟戦國天皇甘露雨「衆怨悉退散、急急如律令と繰返し繰返し、内縛外縛の印を結んでかけたまへば」

ないばん 内番【名】明治元年京都に、翌年東京にも置かれ、皇宮内の分番宿衛を掌りし職。同三年廢止せられたり。

ないばんしゆう 内番衆【名】内番の職にある人人。 法令全書、合一勤番之輩、内番衆と可レ稱候事」

ないばんしよ 内番所【名】内番の詰所。明治二年設置せられ、翌年廢止せられたり。

ないばら【名】〔植〕さるとりいばら(蔷薇科)を云ふ。〔佐渡國の方言〕

ないばらをたつ 無腹を立つ【句】さもなき事に腹立つ。〔古語〕 大鏡「やがて、馬の上に乘りながら、ない腹を立ちて見かへるままに」

ないひ 内祕【名】■内部の祕密。 ■〔佛〕内に菩薩の大行を祕して、外に小乘聲聞(ショウモ)の相を現ずること。舍利弗(シャリフツ)のごとき、これなり。

ないひ 内皮【名】■内面の皮。(外皮に對して) ■〔植〕『英 Endodermis』皮層の最内側に位する細胞層。その細胞は、通常その膜壁の少なくとも一部は、木化並びにコルク化を起し、又、時としては、その内に澱粉粒を含むことあり。

ないび 内鼻【名】〔醫〕『英 Internal nose』外鼻の奥に在りて、鼻腔及び粘膜より成る部分。(外鼻に對して)

ないひさいぼう 内皮細胞【名】〔醫〕内皮組織を組織せる細胞。

ないひそしき 内皮組織【名】〔醫〕中胚葉に續發的に生じたる腔又は裂孔、即ち血管・淋巴管及び二三體腔の内面を被覆する組織。單層扁平にして、上皮と同樣の觀を呈するが故に、一派の學者は上皮組織との間に區別を設けず、又これを組織せる細胞も上皮組織のと酷似すれども、その細胞間質は最少度に減じ ただわづかに細胞相互を黏合せしむるに止まれり。(上皮組織に對して)

ないひん 内品【名】ないこひん(内國品)の「略。

ないひやう 内評【名】内内の評判・評議。

ないひやうこ 内兵庫【名】宮内省■に屬し、御料の儀仗及び兵器の安置其の所を得、且つ出納・曝涼及び事を受けて覆奏することを掌りし官衙。職員は正(カミ)佑(スケ)・令史・使部・直丁(ヂキチヤウ)各一人。大寶の令制にて定められ、後、大同三年兵庫寮に併せられたり。うちのつはものくら。うちのひやうごのつかさ。内兵庫司。

ないひやうこし 内兵庫司【名】前條に同じ。

ないひやうひやう 内評定【名】■内内の評定。内議評定。 ■鎌倉・室町幕府時代に、政所(コドコロ)・問注所にて、内評定を始むる儀式。

ないふ 乃父【名】だいふ(乃父)に同じ。

ないふ 内府【名】■『康熙字典に「掌財幣之官、皆曰府」、周禮の天官篇に「大府玉府・内府・外府」、又元史百官志に「常湖等處茶園都提擧司、秩正四品、掌二常湖二路茶園戸二萬三千有奇一、採二摘茶芽一、以貢二内府一」とあり』宮中の倉庫。(外府に對して) ■ないだいじん(内大臣)の唐名。「屬。

ないふ 内附【名】『英 Knife』西洋風の小刀。せいやうこがたな。

ないふ 名云ふ【動四自】名をいふ。名のる。となふ。稱す。 紀「自稱(ヨバ)爲宰」

ないぶ 内部【名】■うちのかた。内面。(外部に對して) ■腹の内。 ■うちまく。うちわ。

ないぶ 内侮【名】國の内部の人より受くる侮辱。内輪のあなどり。(外侮に對して)

ないふう 内封【名】ないふうじやう(内封狀)の略。

ないふうじやう 内封狀【名】腰文と同樣にて、内部に卷附くる紙を糊にてつけ、禮紙を卷き、更に竪文の如く表卷をなし、上下をひねり、紙にて結ぶもの。

ないぶきせいちゆう 内部寄生蟲【名】〔動〕ないざうちゆう(内臓蟲)に同じ。

ないふく 内福【名】■『列子の力命篇に「不レ賢二外禍一不レ喜二内福一」とあり』人に知られぬ幸福。 ■内證のゆたかなること。うはべは、さほどに見えずして、内輪の富めること。 椎屋「古鳥(ハト)左文太樣は大層に御内福だといふことは、萬長(マナ)でも聞いたぢやねえか。さういふ金持が世話をしてやらうといはっしやるのを」

ないふく 内服【名】藥を飲み用ふること。(外用に對して) 「じ。

ないふくさい 内服劑【名】〔醫〕次條に同じ。

ないふくやく 内服藥【名】内服するくすり。のみぐすり。内藥。内用藥。

ないぶくわん 内武官【名】中古、在京の武官、即ち五衛府・隼人(ハヤト)司・馬寮(メリヤウ)・兵庫などの官人。(外ノ)武官に對して)

ないぶんぴ 内分泌【名】〔生〕『英 Inner secretion』内分泌腺が、その生成せる液を血液中に分泌する作用。(ほるもん參照)

ないぶんぴせん 内分泌腺【名】〔生〕身體の表面に通ずる輸出管を有せずして、專ら内分泌を營む腺。例へば、甲狀腺・副腎の如きもの。

ないへい 内壁【名】『左傳の僖公十七年の條に「齊公好レ内、多二内寵一、内嬖如二夫人一者六人一とあり』君主の氣に合へる妾。内寵。

ないへき 内壁【名】内部の障壁。(外壁に對して)

學に對して)

ないぶたうた 内部淘汰【名】〔生〕『獨 Gastroselektion』生物體の體内なる器官・組織・細胞に於ける各要素の相互の間に行はるる淘汰。

ないぶたう(胚淘汰)參照。

ないぶち-がは 内淵川【名】〔地〕樺太第二の大河。野田寒(サン)嶽に發源し、内淵に至りて海に入る。鮭・鱒の遡上産卵するもの多し。

ないぶつ 内佛【名】『家内に安置する佛の義なるべし』俗家または僧家の燕室の内に安置して、禮拜供養する佛。持佛。

ないぶてき-くわぶつ 内部的貨物【名】〔經〕次條に同じ。(外部的貨物に對して)

ないぶてき-ざいくわ 内部的財貨【名】〔經〕「内界の財貨」に同じ。(外部的財貨に對して) 「いきどほり。

ないぶん 内憤・内忿【名】心の内に抱ける憤。

ないぶん 内聞【名】内内に聞くこと。ひそかに聞きたまふこと。「内聞に達す」

ないぶん 内分【名】■うちわけ(内譯)に同じ。 ■表沙汰にせぬこと。公にせぬこと。うちわ。「内分にて濟ます」 ■〔數〕一直線上に一點を取りたる時、この直線は此の點にて内分せられたりといふ。

ないぶんぶん 内文【名】内印を捺したる文書。

ないぶんてん 内分點【名】〔數〕有限直線を内分する點。

ないぶんばん 内分番【名】内位の分番。内位の番上官。

ないぶんぴ 内分泌【名】〔生〕『英 Inner secretion』内分泌腺が、その生成せる液を血液中に分泌する作用。(ほるもん參照)

ないぶんぴせん 内分泌腺【名】〔生〕身體の表面に通ずる輸出管を有せずして、專ら内分泌を營む腺。例へば、甲狀腺・副腎の如きもの。

ないへい 内壁【名】『左傳の僖公十七年の條に「齊公好レ内、多二内寵一、内嬖如二夫人一者六人一とあり』君主の氣に合へる妾。内寵。

ないへき 内壁【名】内部の障壁。(外壁に對して)

ないへん 内變【名】國の内の變事。内亂。騷動。(外變に對して)

ないへん 内邊【名】うちがは。内の方。内の側。内面。(外邊に對して)

ないへん 内篇【名】内外の兩篇に分てる書籍の一方の篇。(外篇に對して)

ないべん 内辨【名】禁中の朝儀の時、門内にて、諸事を辨備せし上卿。御即位・朝賀など、大極殿にて行はれし大儀には會昌門内にて、又、元日以下、豐樂(ブラク)院にて行はれし諸節會には儀鸞門内にて辨備せしが、後、大極殿・豐樂院に代ふるに紫宸殿を以てせらるるに及び、承明門内にて、辨備せり。(外辨(ゲベン)に對して)**ないべんだいじん**(内辨大臣)參照。建武年中行事「内辨御後に職事や侍ふ。ぶきとうといふ」

ないべんじ 内辨事【名】明治二年四月行政官に置かれ、宮中の庶務を糺判せし職。同年七月廢止せられたり。

ないべんだいじん 内辨大臣【名】内辨の事を勤仕する大臣。内辨も外辨(ゲベン)も、大臣の勤仕するを常としたれども、大臣不參の時は、宣旨によりて、納言のこれを勤仕することありしなり。

ないぼ 内母【名】他人の母の敬稱。母君。

ないほうせん 内縫線【名】〔植〕『英 Inner suture 又 Ventral suture』雌蘂は葉の變形として考へらるるものにして、その子房の膜壁中、葉緣の癒合せるに相當する部分。胚珠これに生ず。單子房の場合には、花軸の中心に向ふ。(外縫線に對して)

ないほふ 内法【名】〔佛〕佛法を他の教法と區別していふ稱。内道。(外法(ゲホフ)に對して)

ないまく 内幕【名】うちまく(内幕)[二]に同じ。

ないみつ 内密【名】表むきにせぬこと。ないしょう。ないない。

ないみつ-ばなし 内密話【名】**ないしょばなし**(内證話)に同じ。

ないみやう 内明【名】〔佛〕『梵 Adhyātma-vidyā の譯語。内は内道・内典などの内にて、自家の教法以外の教法を自家の教法に從屬する補助學と見ていふ』五明(ゴミヤウ)の一。諸佛即ち覺者の言說にして、生死(シヤウジ)・涅槃(ネハン)の理、因果應報の道を說けるもの、即ち哲學・宗教等の根本原理を明かにするもの。盛衰記「唯識兩部の法門、因明(インミヤウ)・内明、一卷もゆるさず…燒けにけり」

ないみやうぶ 内命婦【名】『周禮に「閽人掌レ守二王宮之中門之禁一、凡外内命夫命婦出入、則爲レ之關」とあり、その疏に「内命夫、卿大夫之在二宮中一者、外命夫、卿士大夫婦在レ朝者、外命婦總二卿大夫之妻一也、内命婦三夫人以下也」とあり』五位以上の女官。(外命婦(ゲミヤウブ)に對して) 職員令「凡内親王・女王・及内命婦朝參、行立次第者、各從二本位一」

ないむ 内務【名】一『宋書の戴法興傳に「上即レ位、爲二南臺侍御史一同兼二中書通事舍人一、法興等專管二内務一、權重二當時一」、南史に「留二心吏職一、而王略外舉、未レ遑二内務一」とあり』國内の政務、また内廷の事務。二 次條の略。

ないむぎやうせい 内務行政【名】〔法〕一 國内の安寧秩序を維持し、國民の身體上・精神上及び經濟上の福利を增進するを直接の目的とする政務。内政。二〔法〕行政學の一分科。外務行政・軍務行政・財務行政・司法行政以外の國家行政。分ちて警察行政・助長行政の二となす。前者は消極的に公共の險害を目的とし、後者は積極的に福利を增進するを目的となす。例へば、人事衞生・救恤・宗教・教育等の如し。

ないむきよく 内務局【名】朝鮮總督府及び臺灣總督府民政部の一局。地方學務に關する事務を掌る所。

ないむ-じむくわん 内務事務官【名】内務省に置かれ、内務大臣の命を承けて、地方事務の視察を掌りし奏任官。大正二年廢止せられたり。

ないむしやう 内務省【名】各省の一。内務大臣の統轄の下に、その事務を取扱ふ中央官廳。大臣官房の外、神社・地方・警保・土木・衞生・社會の六局ありて、次官・局長・參事官・祕書官・書記官・屬の外、事務官・技師・技手等の職員を置く。

ないむしやうれい 内務省令【名】内務大臣の發する省令。

ないむだいじん 内務大臣【名】各省大臣の一。内務省の長官。神社・地方行政・議員選舉・警察・土木・衞生・地理・出版・著作權・販恤・救濟及び拓殖に關する事務を管理し、警視總監・北海道長官及び府縣知事を監督す。又朝鮮・臺灣及樺太に關する事務を統理す。内相。

ないむふ 内務府【名】支那清朝の官府。我が國の宮内省に相當するもの。

ないむぶ 内務部【名】一 太政官に置かれたる六部局の一。地理・警察・運輸・通信・敎育・販恤・社寺・勸業・殖產・工事等に關する事務執行の方法を査理し、その主務官廳の事績を監視せしもの。明治十三年設置せられ、翌年廢止せられたり。二 道府縣廳にある一部局。次條參照。

ないむぶ-ちやう 内務部長【名】道・府・縣廳の内務部の職員。上官の命を承けて、部下の官吏を指揮・監督し、所部の事務を掌理するもの。奏任とす。

ないむゐ 内無爲【名】〔佛〕ろくむもん(六妙門)に同じ。(外無爲(ゲムヰ)に對して)

ないめい 内命【名】内内に命令すること、又その命令。

ないめん 内面【名】一 うちがは。内部。(外面に對して) 二〔地〕**ないたい**(内帶)に同じ。(外面に對して)

ないめん-びやうしや 内面描寫【名】〔文〕人物の内的生活、即ち心理もしくは氣分を描くこと。(外面描寫に對して)

ないもの-くはう 無い物食はう【名】ないものねだり(無物強請)に同じ。

ないもの-ねだり 無物強請【名】親の無しといふ食物を、小兒のねだること。ないものくはう。〔俚語〕

ないもん 内門【名】内側にある門。内部の門。

ないもん 内問【名】内内にて問ひ尋ぬること。内内にてただし問ふこと。

ないやう 内洋【名】うちうみ。内海。(外洋に對して) 「に同じ。

ないやく 内藥【名】**ないふくやく**(内服藥)に同じ。

ないやく 内約【名】内密に約束すること、又その約束。

ないやく-し 内藥司【名】うちのくすりのつかさ(内藥司)に同じ。職員令「内藥司…正一人」

ないゆ 内諭【名】内内にさとすこと、又そのさとし。

ないゆ 内輸【名】『輸の字の音、正しくはしゅ』内地へ輸入すること。(外輸に對して)

ないよう 内用【名】一 内密の用事。うちわの用むき。二 内部に用ふるもの。内服すべきもの。(外用に對して)

ないよう 内癰【名】體の内部に發する腫物。庭訓往來「内癰疔瘡」

ないよう 内容【名】一 内部に包容せられてある實質。なかみ。二〔哲〕『英 Content 形式によりて一體にまとめらるる、多樣なる事物。(形式に對して) 三〔哲〕『英 Contents』ないはう(内包)に同じ。

ないよう-しようめい 内容證明【名】**ないようしようめいうびん**(内容證明郵便)又は**ないようしようめいうびんぶつ**(内容證明郵便物)の略。

ないようしようめいうびん 内容證明郵便【名】特殊取扱郵便の一。内容文書の謄本を一通づつ差出人と留郵局に留置き、法律上その他、後日證據を必要とする通信に利用し得べきもの。差出後二年間以内に於て、内容檢査の證明を受くるを得るものとす。明治四十三年の制定。

ないようしようめいうびんぶつ 内容證明郵便物【名】特殊取扱郵便物の一。内容證明郵便の手續に依るもの。

ないようしようめいれう 内容證明料【名】内容證明郵便に要する料金。書留料金の外に、一通の謄本一枚のものは、金十

銭、二枚以上一枚を増すごとに金四銭を加ふ。同時に二箇以上の同文のものは、一箇を除きて、他は前記料金の半額とす。

ないよう-び 内容美【名】〔美〕『独 Inhaltsschöne』藝術の内容に具はる美。(形式美に対して)

ないよう-やく 内用薬【名】**ないふくやく**(内服薬)に同じ。(外用薬に対して)

ないより-あひ 内寄合【名】江戸幕府の評定所にて、寺社町勘定の三奉行が、各自、月番の役宅にて、毎月九日(後六日に改む)・十八日及び二十七日に同役の者を會して評定し、管下の公事・訴訟の裁判をなしし こと。うちよりあひ

ないら 内羅【名】馬に發する諸種の病、殊に内科的諸病の俗稱。轉じて、猫のにもいふ。ねいら。ないらう。 飯粟毛「腹が痛くてならぬ。そりや、御前(オマヘ)、ないらの起ったのだ。豆を喰やあ直る」 狼藉粟毛「谷へすったり落ちをったから、ないらが起って役に立たないから、庭に繋いで、豆ばっか打喰はせてござる」

ないらい 内禮【名】次條の略。(その職員の上につきていふ) 職員令「大臣彈正有二非違一者、内禮不レ得二直禁一」

ないらい-し 内禮司【名】古、中務(ナカツカサ)省に屬し、宮中の儀禮及び非違を檢察することを掌りし所。職員は正(カミ)佑(スケ)令史各一人、主禮使部各六人、直丁(ヤヂキヤウ)一人。大同三年、彈正臺に合併せらる。うちのつかさ。 職員令「内禮司…正一人、掌二宮内禮儀禁二察非違一」

ないらう 内勞【名】**ないらん**(内亂)に同じ。

ないらん 内覽【名】■**ないけん**(内見)に同じ。(外覽に對して) ■摂政・關白又は特に宣旨を蒙りたる大臣が奏宣を行ひ、奏下の文書を内見すること。 正統記「内覽は、昔、醍醐の御代の始つ方、本院の大臣と菅家と政を助けられし時、相並びて、その號ありきと申すめれど」 太平記「奏狀、内覽に下されて後、諸卿參列して、この事如何あるべきと會議あり」 「臣。内覽の臣【句】内覽の宣旨を受けたる内覽の宣下(センゲ)【句】内覽の宣旨を下さるること。

ないらん 内亂【名】■一國内の騒亂。國内訌。内變。(外亂に對して) ■【法】『英 Insurrection』政府を顚覆し、邦土を僭竊し、又は朝意を案亂(アンラン)する等、國家組織の大綱を攪亂するを目的としたる暴動。

ないらん-さい 内亂罪【名】【法】内亂■を起したるによりて成立する犯罪。

ないり 内裏【名】だいり(内裏)に同じ。

ないり 泥梨・泥犁(梵 Niraya)【名】【佛】『出でて往く所の義にて、生活より出でて往く所の意に用ひらる』ならく(奈落)■に同じ。 平家「このたび、ないりに沈みなば」

ないりつ 内率【名】【數】**ないかう**(内項)に同じ。(外率に對して)

ないり-つばめ 内裏燕【名】【動】あまつばめ(天燕)に同じ。

ないりゅうこつ 内龍骨【名】船底内部にありて、肋板の上部を縦に通ずるもの。中心線内龍骨・側内龍骨・彎曲部内龍骨の三種あり。

ないりょく 内力【名】■『英 Stress』構造物を構成する工業用材料が、外力を受くる時、その分子間に、變形を防がんとして起る抵抗力。(外力に對して) ■【地】『英 Endogene』地球が、その内部に有する火圏の熱力によりて、その表面を變化せしむる營力。即ち造山作用・火山・地震及び土地の昇降の四現象を呈するもの。

ないるゐ 内壘【名】内方にある堡壘。(外壘に對して)

ないれい-し 内禮司【名】**ないらいし**(内禮司)を見よ。

ないれう 内療【名】内科の治療。内部の療治。内治。(外療に對して)

ないろんぎ 内論議【名】うちろんぎ(内論議)に同じ。

ないわ 内話【名】**ないだん**(内談)に同じ。

ないわう 乃往【名】〔佛〕『今より過去世に向ひて往く義』今より昔を指していふ語。往昔。往古。

乃往過去【句】『無量壽經に「乃往過去、久遠无量、不可思議、无央數劫」とあり』今より昔の過去世。 太平記「乃往過去に波羅奈國に一人の長者ありて」

ないわくせい 内惑星【名】【天】**ないうせい**(内遊星)に同じ。

ないゐ 内位【名】普通の位。(外位(ゲヰ)に對して)

ないゐ-しゃう 内衛省【名】(朝外内異)參照。

ないゐん 内院【名】■神社の瑞籬(ミヅガキ)の内。(中院・外院(ゲヰン)に對して) 大和名所圖會「春日大宮四社大明神、中院小社二座、内院小社二座、又春日若宮内院小社、外院小社」 ■【佛】兜率天(トソツテン)の二院の中、彌勒(ミロク)菩薩の常に居りて、法を說くといふ所。(外院(ゲヰン)に對して) ■**ないき**(内規)■に同じ。(中院・外院(ゲヰン)に對して)

ないゑん 内援【名】内部よりの援助。(外援に對して)

ないゑん 内苑【名】皇宮の内の御庭園。禁苑。宮苑。御苑。

ないゑん-きよく 内苑局【名】次條を見よ。

ないゑん-れう 内苑寮【名】舊宮内省の一寮。皇室の庭苑及び園藝の事を掌りし所。職員は頭(カミ)・助(スケ)・主事(奏任)各一人、屬及び技師(奏任)四人、技手(判任)十二人。もとの内苑局を、明治四十一年に改稱せられしものの内苑局を、大正三年廢せられたり。

ないをう 乃翁【名】だいをう(乃翁)に同じ。

ないをん 泥洹【名】〔佛〕(梵 Nirvāṇa)の譯語。ねはん(涅槃)に同じ。

ないをん-そうじゅ 泥洹雙樹【名】〔佛〕佛の涅槃(ネハン)に入れる沙羅雙樹。 謡曲「舍利「常在靈山(リヤウゼン)の秋の空、わづかに二月に臨んで魂を消し、泥洹雙樹の昔の庭、遺跡を聞いて、腸を斷つ」

なう 腦【名】〔動〕■有脊動物の中樞神經系の前端(人類にありては上端)に位し、脊髓に連接せる部分。形と大さとは、動物の種類によりて一樣ならざれど、中樞神經系の他の部分よりは膨大し、頭蓋(ヅガイ)腔内を充塡して、これに保護せらる。人類のは最も複雜にして、發達の度著しく、大腦・中腦・小腦・延髓の四部より成る。づなう。腦髓。 ■腦のはたらき。腦力。

なう 惱【名】なやみ。やまひ。病氣。 增鏡「うへはおりさせたまひて、その七日やがて崩號あり。御惱なほおこたらず。大かた世もしづかならず」 ■「いにし年御ぐしおろしにき。御惱なほおこたらねば、いつしか五壇の御修法はじめらる」

なう 嚢【名】ふくろ。きいふ。かばん。

なう 喃【感】人を呼びかけ、又は口說く時に發する聲。

なう-あう 惱懊【名】あうなう(懊惱)に同じ。

なう-いっけつ 腦溢血【名】〔醫〕なういっけつ(腦出血)に同じ。

なう-えん 腦炎【名】〔醫〕『羅 Encephalitis』腦の炎症。化膿菌の腦に侵入するに因りて起る。即ち頭蓋の外傷により、或は中耳炎又は鼻腔の疾病に際し、細菌の侵入を蒙ることあり。腦炎衝。

なう-がい 腦蓋【名】〔醫〕『同じ。蓋』の略。

なう-がい-こつ 腦蓋骨【名】〔醫〕前條に同じ。

なう-きん-しょう 腦炎衝【名】〔醫〕なうえん(腦炎)に同じ。

なうきん-るゐ 嚢菌類【名】〔植〕なうしきんるゐ(嚢子菌類)に同じ。

なう-ぐ 乃貢【名】『納貢(ナフグ)の意なりとも、農貢(ノウグ)の意なりとも、又は即ち貢ぐ意なりともいふ』ねんぐ(年貢)に同じ。

なう-くわつ 嚢括【名】『貿誼の過秦論に「有二席二卷天下一、包二舉宇内一、囊二括四海一之意、并二呑八荒一之心一」と見ゆ』ふくろに入れて、その口をくくること。

なう-けい 嚢螢【名】紗などにて作りたる嚢に入れたる螢。

嚢螢書を讀む【句】『晉書に出づ』支那晉の車胤の、家貧しくして、油を得ず、夏、螢を練嚢に盛り、その光にて書を讀みし故事。

なう-ご 苗籠・野籠【名】農具の一。苗草などを入れて、野良に携ふる竹籠。

なう-こう 嚢口【名】『易經の上經坤卦に「六四、括嚢、无レ咎无レ譽」と本義に、括嚢言下結二嚢口一而不レ出」とあり』ふくろのくち。財布の口。

なう-こう 乃貢【名】なうぐ(乃貢)を見よ。

なう-さ 嚢沙【名】沙を嚢中に充したるもの。土嚢。

嚢沙の計(ケイ)【句】『史記の淮陰侯傳に見ゆ』支那漢の韓信が、嶮め土嚢を以て上流を塞ぎ、敵の渡河する頃これを取除きて、一時に水を決して敵兵を破りし計略。

嚢沙背水の謀(ボウスイノ)【句】嚢沙の計と背水の陣を布きたる謀と。共に支那漢の韓信の爲したる所なるより並稱す。「背水の陣」參照。太平記「義貞嚢沙背水の謀一成而、大得レ破レ敵」

なう-さつ 惱殺【名】『さつ(殺)は助字』なやますこと。

なう-じ 嚢時【名】さきのとき。さきつころ。往時。

なうしきん-るゐ 嚢子菌類【名】〔植〕しなうきんるゐ(子嚢菌類)に同じ。

なう-しつ 腦室【名】〔醫〕『獨 Gehirnkammer』腦髓の內部、脊髓管の續きなる腔所。第一より第四までの四室に分れ、第四室の底を、その形狀により菱形窩と呼び、延髓中に存し、生活上に大切なる部分なり。

なう-じつ 嚢日【名】さきの日。いつぞや。往日。

なう-しんけい 腦神經【名】〔醫〕『英 Cranial nerves』末梢神經系統の一。腦の一部なる延髓と中腦とより派出せるもの。嗅神經・視神經・動眼神經・滑車神經・三叉神經・外旋神經・顏面神經・聽神經・舌咽神經・迷走神經・副脊髓神經・舌下神經の十二對より成り、頭首と內臟とに分布して、各種の知覺・運動・分泌等を掌る。腦髓神經。(脊髓神經に對して)

なうしんけいすゐじゃくしゃう 腦神經衰弱症【名】〔醫〕神經衰弱症の一。腦神經に發するものにして、頭痛・記憶不良の精神症狀を主徴とす。

なう-しんたう 腦震盪【名】〔醫〕『獨 Gehirnerschütterung』羅 Commotio cerebri』頭部の外傷・打撲或は高處より落下せる等の爲に起る腦の震盪。主に人事不省・體溫降下・嘔吐・痙攣(ケイレン)を發し、醒覺の後、運動失調、言語障碍を呈す。外傷の場合は外科的手當を施し、安靜に平臥せしめ、頭部を冷し、腹部を溫む。

なう-しや 嚢沙【名】なうさ(嚢沙)に同じ。

なう-しや 嚢者【副】さきに。嘗て。

なう-しやう 腦漿【名】腦髓にある粘液。腦の汁。

腦漿を絞る【句】あらん限の智慧をはたらかす。智慧を絞る。「狀。

なう-じやう 嚢狀【名】ふくろのごとき形

なうじやうき 嚢狀期【名】〔生〕動物の發生の一時期。數多の細胞集りて球形を成し、中央に空所を生ずるもの。

なう-しやうじ 嚢床子【名】腰の痛まぬやうに、綿を包み入れて、針山のごとく圓く作りたる床子。

なうじやうじんたい 嚢狀靱帶【名】〔醫〕短き膜管を成し、關節面の周圍を嚢狀に封鎖して、關節腔を構成する靱帶。內面は滑液膜にて被はる。

なうじやうたい 嚢狀體【名】〔動〕『英 Sporocyst』寄生蟲の體形の一。筋肉性の嚢を成し、器官は單に原腎を有するのみにて、無性生殖を行ふ。

なう-じゃうけつ 腦充血【名】〔醫〕『羅 Hyperaemia cerebri』腦內に血液の過多となるより發する病。身體・精神の過勞、又は酒精・藥品の中毒等、種種の原因より發し、頭痛・耳鳴・不眠・眩暈等を起し、强度のものは人事不省・全身痙攣等を起す。なうひんけつ(腦貧血)參照。

なう-しゅっけつ 腦出血【名】〔醫〕『羅 Apoplexia』頭部の打撲・外傷・精神の激動又は動脈硬化症等より起り、腦內に出血するもの。多量の出血が溢流する時、腦を壓迫し、爲に組織を破るに至る。往往その前驅として、眩暈・頭痛等を發することあり。或は卒中發作を呈することあり。發作の持續は時に數日に及ぶ。腦溢血。そっちゅうほ(卒中風)參照。

なう-しょ 嚢書【名】嚢(フクロ)に入れたる書籍。嚢中の書。「じ。

なうずゐ 腦髓【名】〔動〕なう(腦)㊀に同

なうずゐえん 腦髓炎【名】〔醫〕腦の炎症。主に腦膜炎を併發す。原因は外傷・頭蓋に於ける炎症・急性傳染病とす。症狀は種種なり。手術的に治療し得ること稀にして、多くは無効なり。

なうずゐ-しんけい 腦髓神經【名】〔醫〕なうしんけい(腦神經)に同じ。

なうずゐしゅ 腦水腫【名】〔醫〕『獨 Gehirnwassersucht』腦脊髓液の腦室又は腦膜間隙に溜る病。先天性と後天性との二種あり。

なう-せき 嚢昔【名】むかし。昔時。嚢時。

なう-せき 嚢跡【名】嚢昔のあと。嚢時のあと。いつかのあと。

なうせきずゐ-えき 腦脊髓液【名】〔醫〕『羅 Liquor cerebro-spinalis』腦膜三層の各層の間に存する淋巴液。無色・透明にして、檢鏡上殆んど細胞を含まず、アルカリ性反應を呈す。なうまく(腦膜)參照。

なうせきずゐ-しんけい 腦脊髓神經【名】〔醫〕『羅 Nervi cerebro-spinalis』腦神經と脊髓神經との併稱。

なうせきずゐ-しんけいけいとう 腦脊髓神經系統【名】〔醫〕『羅 Systema nervorum cerebro-spinalis』とうぶつせいしんけいけいとう(動物性神經系統)に同じ。(交感神經系統に對して)

なうせきずゐ-まく 腦脊髓膜【名】〔醫〕『腦髓のみならず、脊柱管を通じて、脊髓をも包むよりいふ』なうまく(腦膜)に同じ。

なうせきずゐまく-えん 腦脊髓膜炎【名】〔醫〕なうまくえん(腦膜炎)見よ。

なう-そ 腦疽【名】頸のまはりに發する癰。くびきりちゃう。くびきれちやう。

なう-そ 嚢祖【名】せんぞ(先祖)に同じ。

なう-そっちゅう 腦卒中【名】そっちゅう(卒中)に同じ。

なう-たい 嚢堆【名】〔植〕羊齒(シ)類の葉の裏に現はるる胞子嚢の團塊。通常、傘を擴げたるが如き形をなす。

なう-たく 嚢橐【名】『詩經の大雅公劉篇に「于レ橐于レ囊、思二戢用光一」と、又史記の陸賈傳に「尉他賜二陸生橐中裝直千金一」と、註に「案二詩傳一曰、人曰レ橐、小曰レ囊、埤倉云、有レ底曰レ囊無レ底曰レ橐」とあり』ふくろ(嚢)に同じ。

なうち 名內【名】家來筋の者が、おのれの名の右の肩に、その主人の名を記して、某內と書くこと。

なう-ちゅう 嚢中【名】㊀ふくろのうち。㊁財布の中。懷中。

嚢中の錐【句】『えいだつ(頴脫)を見よ』才氣すぐれたる者は、錐の嚢中に在るがごとく、その鋒鋩の隨所に露るる譬。錐嚢(諺語)

嚢中の物を探る【句】『五代史の南唐世家に「李穀曰、中國用レ吾爲レ相、取二江南一如レ探二囊中之物一耳」とあり』甚だ容易なる譬。(諺語)

なう-ちゅう 嚢蟲【名】〔動〕『羅 Cysticercus』條蟲の卵が、中間宿主の胃中にて卵殼を消化せられ、その內なる胚が、その動物の結組織或は筋肉中に入りて、豆大の嚢狀體を成せるもの。

なう-ちゅう 腦中【名】頭腦のなか。

なう-づがい 腦頭蓋【名】〔醫〕八箇の頭蓋骨の縫合して、腦と感覺器とを包容せる骨函。ならがい。ならがいこつ。

なうて 名うて【名】名高きこと。著名。有名。

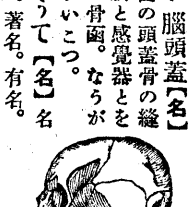
なう-てい 嚢底【名】ふくろのそこ。嚢の內部。さいふのそこ。

なう-てい 腦底【名】腦髓の底部。

なう-てん 腦天・**腦顚**【名】あたまの頂上。膝栗毛「けたいな奴(ヤツ)ぢや。腦天どやいてごまそか」

なう-なう 喃喃【感】なうを重ねたる聲。

なう-なんくわ 腦軟化【名】『羅 Encephalo-



(いがづうな)

malacia』腦髓の實質の一部に血液の循環杜絶したる場合に、其の部分に營養障碍を來すに因りて、壞疽(ヱ)を生じ、軟化崩壞する症狀。「じ。

なう-のうしゅ 腦膿腫【名】〔醫〕次條に同じ。

なう-のうやう 腦膿瘍【名】『羅 Abscessus cerebri』頭蓋の創傷その他近圍の炎症、膿毒症等の釀膿菌が腦内に侵入するより起る、腦質の軟化崩壞し、膿汁に化する病症。特殊の療法なく、死の轉歸を取るものなり。腦膿腫。

なうはい 嚢胚【名】〔動〕『羅 Gastrula』複細胞動物の發生の初に於ける嚢狀の胚。

なうはへ 【名】『繩延(ハヘ)の義かといふ』なはばね(繩船)を云ふ。〔攝津國兵庫邊の方言〕

なうひんけつ 腦貧血【名】〔醫〕『羅 Anaemia cerebri』身體の他の部分に急に血液を溢出せしむる時、即ち外傷出血等をはじめ、精神感動慢性下痢等によりて、腦部に血液缺乏する時に起る病。皮膚蒼白となり、頭痛・眩暈・脈搏頻數・耳鳴・不眠等を來す。豫後は概して良好なれど、素人には腦充血との區別混難なり。

なうびやう 腦病【名】『獨 Gehirnkrankheiten』腦に發する病の總稱。大別して、實質に發するものと、皮膜に發するものと、機能上のものとの三種とす。

なうまい 乃米・能米【名】『乃貢(ナウ)の米の義なるべし』ねんぐまい(年貢米)に同じ。東寺百合文書「一石代一反百五十歩、乃米一石四斗一升一合六勺七才」 人車記「仁平四年四月二日、寮試雜事注文、能米三斛、油二升」 東鑑「御雜事、能米三十斛、白米二石」

なう-まく 腦膜【名】〔醫〕頭蓋骨と腦との間にありて、腦を被覆し、なほ脊柱管を通じて脊髓をも被覆する皮膜。最外部即ち頭蓋骨の裏面に直接する硬腦膜、その内部にある蜘蛛(ユヒ)膜、最内部即ち腦の表面に直接せる軟腦膜(一名、脈絡膜)の三層より成り、腦脊髓液と共に、腦脊髓の機械的保護を營む。腦脊髓膜。「に同じ。

なうまく 嚢莫・嚢謨・那膜【感】なむ(南無)

なうまく-えん 腦膜炎【名】〔醫〕『羅 Meningitis』腦膜に發する炎症。腦膜と脊髓膜とは互に連絡し、腦脊髓液は兩者の疾患を媒介するが故に、兩者の炎症は常に併發するものにして、從て正しくは腦脊髓膜炎と稱すべきものとす。「稱。

なう-みそ 腦味噌【名】なうずゐ(腦髓)の俗

腦味噌を絞る【句】苦心して考ふ。智慧を絞る。

なう-らん 惱亂【名】苦惱によりて、心の狂ひ亂るること。 太平記「心神惱亂せられけるが」

なうり 菜賣【名】野菜を賣る商人。 三十職人歌合「なうり。定めおく宿もなうりの朝夕に通ふ内野の道の苦しさ」

なうり 菜瓜【名】〔植〕つけうり(漬瓜)に同じ。「同じ。

なうり 嚢裏・嚢裡【名】なうちゅう(嚢中)に同じ。

なうれう 腦寮【名】臺灣の樟腦製造場。

なうれん 暖簾【名】『漢字の宋音「ナンレン」の音便とも、禪家にて、簾の面を覆ひし布帛をのんれんといひしより起るともいふ』日除などのために軒先に吊し、又は座敷と勝手口との間などに吊る布帛のとばり。商家にて、軒先に掛くるものには、屋號・目印などを染拔にするを常とせり。のれん。

なうろう 腦漏【名】腦漿の流れ出づる病。

なえ-かかる 萎え掛る【動四自】漸くになえ行く。次第になゆ。其「ひとへなど清げに、うすいろの裳など、なえかかりてはあらず、いと清げなり」

なえぐ 蔫ぐ【動四自】なへぐ(蔫ぐ)に同じ。

なえ-くた 萎くた【貶】萎えてくたくたとなるさま。

なえくた-えぼし 萎くた烏帽子【名】ひきたてえぼし(引立烏帽子)に同じ。〔伊勢神宮にての語〕 古老口實傳「奈江具他えばうし、於レ夜者令二著用一」

なえ-さうぞく 萎裝束【名】後世の强(コハ)裝束に對して、古の、糊を附けざる、柔かなる裝束。なえしやうぞく。 義抄「鰹(ナヘ)」

なえし 鰹【名】〔動〕なよし(鰡)に同じ。名

なえ-しやうぞく 萎裝束【名】なえさうぞく(萎裝束)に同じ。

なえ-とほる 萎通る【動四自】上より下まで萎えて、柔かになる。 宇治「なえとほりたるきぬに、袈裟なども、ところどころ破れたり」

なえ-なえ 萎萎【貶】萎えて柔かなるさま。なよなよ。くたくた。ぐなぐな。 宇治「なえなえとなして、肩にうちかけて」

なえばむ 萎ばむ【動四自】少しなゆ。なえかかる。〔古語〕 源氏「御衣ども、なえばみて」

なえ-やか 萎やか【貶】なよかに同じ。 平家「なえやかなる直垂の腰つき」

なおと 汝弟【名】弟を親しみて呼ぶ語。〔古語〕 萬葉「はしきよしなおとの命」

なおひ-にん 儻追人【名】次條を見よ。

なおひ-まつり 儻追祭【名】尾張國中島郡稻澤(ヤハタ)町大字國府宮(コフノミヤ)なる縣社大國靈(オホクニタマ)神社にて、毎年正月十三日に行ふ祭禮。村内にて四十二の厄年に當る人をして、前日より社殿に籠りて修祓潔齋せしめ、儻追人(ニンソト)とて、社前の川に水垢離(コリ)し、裸體のままなる氏子の男子たち、これに手足を觸れ、一國の厄を負はせて追拂ふさまをなす。はだかまつり。なほゑまつり(直會祭)參照。「じ。

なおや 名親【名】なづけおや(名附親)に同じ。

なか 中・仲【名】一事の、端の方又は表面へ片寄らぬ部分。まんなか。中央。 二多くの物事の一部。うち。うちがは。内部。 楊貴妃「我君政正しくましますなかに」 四二つの物事のあひだ。中間。 萬葉「淡路しまなかに立ておきて白浪を伊豫にめぐらし」 五なかば。半分。 六三つある物事の、中間なるもの。同胞又は一箇月三旬などの中間なるもの。 源氏「中に當るをなん姫君とて、守(カ)はいとかなしうしたまふなり」 千載「文治三の年の秋長月の中の十日に」 七程度の上(カ)にもあらず、下(モ)にもあらぬこと。ちゅうぐらゐ。中等。 狭俠(薬籠)「中下もそれ相應の花見かな」 八まじはり。なからひ。交際。交情。 源氏「この宮ども、おんなかそばそばしきゆゑ」 九男女のなからひ。情交。

なか 中【名】一物の、兩端より等距離にある點。 二物の、兩端の間。 三物の、兩端の間にある部分。 四物の、兩端の間にある數。 五物の、兩端の間にある時。 六物の、兩端の間にある場所。 七物の、兩端の間にある程度。 八物の、兩端の間にある關係。 九物の、兩端の間にある狀態。 十物の、兩端の間にある性質。 十一物の、兩端の間にある種類。 十二物の、兩端の間にある方向。 十三物の、兩端の間にある位置。 十四物の、兩端の間にある人。 十五物の、兩端の間にある物。 十六物の、兩端の間にある事。 十七物の、兩端の間にある時期。 十八物の、兩端の間にある場合。 十九物の、兩端の間にある狀況。 二十物の、兩端の間にある關係。 二十一物の、兩端の間にある性質。 二十二物の、兩端の間にある種類。 二十三物の、兩端の間にある方向。 二十四物の、兩端の間にある位置。 二十五物の、兩端の間にある人。 二十六物の、兩端の間にある物。 二十七物の、兩端の間にある事。 二十八物の、兩端の間にある時期。 二十九物の、兩端の間にある場合。 三十物の、兩端の間にある狀況。

なか 中【名】一物の、兩端より等距離にある點。 二物の、兩端の間。 三物の、兩端の間にある部分。 四物の、兩端の間にある數。 五物の、兩端の間にある時。 六物の、兩端の間にある場所。 七物の、兩端の間にある程度。 八物の、兩端の間にある關係。 九物の、兩端の間にある狀態。 十物の、兩端の間にある性質。 十一物の、兩端の間にある種類。 十二物の、兩端の間にある方向。 十三物の、兩端の間にある位置。 十四物の、兩端の間にある人。 十五物の、兩端の間にある物。 十六物の、兩端の間にある事。 十七物の、兩端の間にある時期。 十八物の、兩端の間にある場合。 十九物の、兩端の間にある狀況。 二十物の、兩端の間にある關係。 二十一物の、兩端の間にある性質。 二十二物の、兩端の間にある種類。 二十三物の、兩端の間にある方向。 二十四物の、兩端の間にある位置。 二十五物の、兩端の間にある人。 二十六物の、兩端の間にある物。 二十七物の、兩端の間にある事。 二十八物の、兩端の間にある時期。 二十九物の、兩端の間にある場合。 三十物の、兩端の間にある狀況。

なか 中【名】一物の、兩端より等距離にある點。 二物の、兩端の間。 三物の、兩端の間にある部分。 四物の、兩端の間にある數。 五物の、兩端の間にある時。 六物の、兩端の間にある場所。 七物の、兩端の間にある程度。 八物の、兩端の間にある關係。 九物の、兩端の間にある狀態。 十物の、兩端の間にある性質。 十一物の、兩端の間にある種類。 十二物の、兩端の間にある方向。 十三物の、兩端の間にある位置。 十四物の、兩端の間にある人。 十五物の、兩端の間にある物。 十六物の、兩端の間にある事。 十七物の、兩端の間にある時期。 十八物の、兩端の間にある場合。 十九物の、兩端の間にある狀況。 二十物の、兩端の間にある關係。 二十一物の、兩端の間にある性質。 二十二物の、兩端の間にある種類。 二十三物の、兩端の間にある方向。 二十四物の、兩端の間にある位置。 二十五物の、兩端の間にある人。 二十六物の、兩端の間にある物。 二十七物の、兩端の間にある事。 二十八物の、兩端の間にある時期。 二十九物の、兩端の間にある場合。 三十物の、兩端の間にある狀況。

「この君は、中にいとかたちよく」

中に立つ【句】雙方の間に身を置く。仲介の勞を取る。板挟(ヰタバサ)になる。なかだち(中立)參照。

中に立った柱【句】板挟(ヰタバサ)になりたる身を、物の中に挟まれたる柱に譬へていふ語。鳩翁道話「女房の最屓(ヒイキ)をすると、母親の機嫌が損ねまする。女房を叱れば、他人ぢやと思うてひとりむどうつらうさっしゃると恨み、いや、をう、中に立つた柱で、つらいの、苦しいのと申すやうな事ではござりませぬ」

中に就いて【句】「中に就きて」の音便。源氏「なかについても、女のすぐせは、浮びたるなんあはれに侍る」

中に就きて【句】多くの物事の中にて。あるが中に。取りわけて。殊に。就中(ヰナカ)。榮花「中につきて、此の一品の宮の御ためを思ひ給ふれば」

中にも【句】『もは感嘆の助辭』「中に」を强めていふ語。大鏡「中にも十戒の中に、妄語をば保ちて侍る身なれば」

仲の秋【句】『漢字の直譯』ちゅうしゅう(仲秋)に同じ。榮花「中の秋の風涼しう、月明かなる程なり」

中の思【句】心の中の思。多くは、おもひ(思)のひを火に言ひかけて用ひ、又、石は、强く打てば火出づるにより、その中に火を含めるものとして、「石の中の思」と續けていふことも多し。源氏「えしも打出でぬ中の思に、燃えぬべき若公達(カンダチ)などもあるべし」新千載「浦近く浪のうちくるさざれ石の中の思と知るや知らずや」夏雲「白山の雪の下なるさざれ石の中の思は消えんものかは」

中の指(ユビ)【句】なかゆび(中指)に同じ。「古語」和名「中指、奈賀乃於與比、第三指也」

中の通(カヨ)【句】二人の間の往復。源氏「つらきにのみ思ひなされし人の、御なかのかよひを、ことわりの絶間なりけりと、少しおぼし知られける」

中の君【句】二番目の姫君。源氏「この御腹には…おほい君・なかの君・四の君・五の君とおはす」

中の兄(カミ)【句】三人の同胞のうちの、中の兄又は姉。「古語」源氏「中のこのかみにて、年も大人びたまふを」

中の衣(ギヌ)【句】上著と下著との間に著る衣なりとも、男女などの二人の間の衣なりとも、宿直物(トノヰモノ)なりともいふ。「古語」源氏「いろいろに身のうきほどの知らるるはいかに染めけるなかの衣ぞ」同「形見にぞ換ふべかりける逢ふ事の日數隔てんなかの衣を」

中の障子(シヤウジ)【句】なかさうじ(中障子)に同じ。源氏「中の御さうじより、ふと渡りたまへれば」

中の下紐(シタヒモ)【句】中の衣の下紐。新拾遺夢ならで又も結ばぬ契かな解けし一夜のなかの下紐」新續古今「今宵こそうきをもうしといふべきに忘れて解くる中の下紐」

中の階(キザ)【句】中の階級。中階。中段。源氏「枝少しおし折りて、御はしの中のしなのほどにゐたまひぬ」

中の瀬【句】なかつせ(中瀬)に同じ。

中の戸【句】中間にある戸口。古の禁中の大極殿・清涼殿などにもありて、大極殿のは、北廂の中央より登廊(ノボリロウ)への出入口(東廂より東軒廊(ヒガシノヒサシノロウ)への出入口は東の戸、西廂より西軒廊への出入口は西の戸といひ、清涼殿のは、北廂の東、第一の間(マ)と第二の間との中間にありて、萩の戸と藤壺の上御局との境に並びたるものと云へり。枕「果のおはん持たる藏人(クラウド)參りて、おもの奏すれば、中の戸より渡らせたまふ」榮花「殿、若君抱き奉らせたまひて、……母屋(モヤ)の中の戸の西に殿の上のおはしします方にぞ、若宮はおはしまさせたまふ」

中の十日(トヲカ)【句】ちゅうじゅん(中旬)に同じ。「上(カミ)の十日」・「下(シモ)の十日」に對して)

仲の夏【句】『漢字の直譯』ちゅうか(仲夏)に同じ。

中の値段【句】〔商〕ちゅうかんだいか(中間代價)に同じ。

中の盤【句】盤の一。大いさ懸盤(カケバン)に次ぎ、徑七寸なりといふ。枕「棚厨子・ひさげ・中のばん」河海抄「盛二中埦一置二中盤一」〔春〕に同じ。

仲の春【句】『漢字の直譯』ちゅうしゅん(仲春)に同じ。

中の人【句】ちゅうらふ(中臈)に同じ。

仲の冬【句】『漢字の直譯』ちゅうとう(仲冬)に同じ。

中の細緒(ホソヲ)【句】箏の弦の一部。細緒卽ち斗爲巾(トヰノキレ)の稱とも、波爲巾のうちの爲(ヰ)のみの稱ともいふ。なかを(中緒)[二]參照。源氏「さうの琴は中の細緒のたえがたきこそ所せけれとて、平調(ヒヤウデウ)におしくだして調べたまふ」

中の間(マ)【句】家の中央にある間。源氏「中のまは、院のおはしますべき御座(オマシ)よそひたり」

中の町(マチ)【句】中すぢの町。中間にある町。(「上(カミ)の町」・「下(シモ)の町」に對して)室町千歳曳「ぞめかばぞめけ、上の町・下の町・中の町の家なみ」

中の御門(ミカド)【句】きゅうもん(宮門)[二]に同じ。萬葉「ひむがしの中門(ナカノカド)ゆ參り來て」榮花「この頃は、中御門に、今の肥後の守むねみつが家にこそ住みたまへ」

中の指【句】なかゆび(中指)に同じ。

中の好(コノ)いで、喧嘩をする【句】「好い中の小いきかひ」に同じ。〔諺語〕

中の緒【句】なかを(中緒)[二]に同じ。源氏「逢ふまでの形見に契る中の緒の調(シラ)べはことに變らざらなん」

中好(コノ)し【句】交情むつまじ。したし。(「中惡しに對して)源氏「右のおとどの御中はよからねど」枕「むげに中よくなりてよろづの事をかたる」

中惡(ワル)し【句】「中惡(アシ)し」に同じ。

中を違(タガ)ふ【句】中たがひになるやうにす。平家「十郎藏人行家は、木曾に中違へて惡しかりなんとや思はれけん」

中を取る【句】物事の中ほどの所を採用ふ。中庸の方法に依る。新六「あるはなく無きはあるよの中を取れさてぞ佛のさとりとはなる」

中を直す【句】元のとほり中をよくす。なかなほし(中直)參照。俳諧新選籠羽「親親の中も直せしどりかな」

中を持つ【句】「中を取る」に同じ。狂言(鷺流)「餘り又長うござる。中をもって受取らっしやれえ」

中を結(ユ)ふ【句】中結(ユヒ)をなす。宇治帷子ばかり著て、中結ひて、足駄はきて」

好(コノ)し中には、垣を爲(セ)よ【句】「親しき中に垣を爲よ」に同じ。〔諺語〕

なか 那珂【名】〔地〕一 常陸國十一郡の一。郡役所を菅谷(スガヤ)村に置く。二 武藏國の舊郡の一。後世那賀と書き、明治初年、那珂に復し、同二十九年兒玉郡に合併す。三 讃岐國の舊郡の一。明治三十二年多度郡と合して、仲多度(ナカタド)郡となる。四 筑前國の舊郡の一。明治二十九年筑前郡に合併す。五 日向國の舊郡の一。明治に至り、南北二郡に分ち、同二十九年北那珂郡を廢し、宮崎郡に合併す。

なか 那賀【名】〔地〕一 石見國六郡の一。郡役所を濱田町に置く。二 紀伊國九郡の一。郡役所を岩出(イハデ)町に置く。三 阿波國十郡の一。郡役所を富岡町に置く。四 伊豆國の舊郡の一。明治二十九年賀茂郡に合併す。五 前條[二]を見よ。

なか 名賀【名】〔地〕伊賀國二郡の一。郡役所を名張(ナバリ)町に置く。

なが 長・永【名】一 長きこと。狂言(六人傘)「長の旅ぢやほどに」俳諧古選附錄(奥雪)「ながの暑を凌ぎし甲斐や今日の月」鬼貫「何故に長みじかある氷柱(ツラヽ)ぞよ」二 ながいき(長息)の略。三 ながながしも(長上下)の略。四 ながてん(長點)の略。五 ながかけ(長掛)の略。

なが 長【接頭】ながき意。「なが旅(タビ)」「なが脇差」「ながい逗留」「じ。

なが-あき 仲秋【名】ちゅうしう(仲秋)に同じ。

ながあき 長秋【名】ながいほあき(長五百秋)に同じ。〔古語〕祝詞「天つ日嗣を萬千秋(ヨロヅチアキ)の長秋に」

なか-あきなひ 中商【名】汽車などの中にて掏摸(ス)をはたらくこと、又その者。〔掏摸仲間の語〕

なが-あくび 長欠伸【名】長くあくびすること。長き欠伸。百合若大臣野守鏡「犬の長啼、おぢいの長あくび」

なか-あし 中足【名】■器物の足の、中央に位せるもの。■いんきやう(陰莖)を云ふ。〔俚語〕

なかあし-ぜん 中足膳【名】ねこあしぜん(猫足膳)に同じ。守貞漫稿「中足膳。京阪、俗に或は猫足膳といふ。猫の足に形似たる故なり」

なか-あつ 中厚【名】他に比して中ほどの厚きこと、又その物。

なか-あに 中兄【名】ちゆうけい(仲兄)に同じ。日本武尊吾妻鑑「中兄の國彦も牙を噛んで口惜がり」

なが-あはび 長鮑・長蚫【名】のしあはび(熨斗鮑)に同じ。

なか-あひ 中間【名】なかほど。あひだ。

なかあひ-ごと 中間言【名】なかぐち(中口)■に同じ。〔古語〕

なが-あふぎ 長扇【名】翳(サシ)に象(カタ)りて作りたる具。落窪「長扇をさしやりて、冠をはたと打落しつ」

なが-あみ 長編【名】編物の方式の一。鉤の編棒に絲を一つ巻きて、下なる目に突入れ、二度に引出して編むもの。縦に長き物を編むに適す。

なかあん-かふきん 中安甲金【名】かふあんいまぶきん(甲安今吹金)に同じ。

なが-あめ 長雨【名】長降(ナガフ)の雨。ながめ。霖雨。積雾。源氏「ながめ雨晴間なきころ、うちの御ものいみさしつづきて」

ながあめ-がち 長雨勝【名】長雨の降りがちなること。枕「今はながめがちなり」

なか-あを 中藍【名】次條の略。

なかあを-いろ 中藍色【名】染色の一。中ほどの濃さの藍色。なかみどり(中綠)・なかむらさき(中紫)参照。

なが-あをのり 長青海苔【名】〔植〕青海苔の一種。通常のよりも長きもの。

なが-い 長寢【名】ながね(長寢)に同じ。〔古語〕

なが-い-おなま 長い御眞魚【句】ながし(長し)の條下を見よ。

なが-いき 長生【名】長く生くること。ちやうせい。長壽。長命。

長生すれば、恥多し【句】「命長ければ恥多し」に同じ。〔諺語〕浮世風呂「ほんにほんに、長生すりやあ恥多しと、よくいったものだ」〔諺〕

長生は、恥多し【句】前條に同じ。〔諺語〕

ながいき-みたいき 長生見度記【名】〔書〕『見度記はみらいき(未來記)をもぢりたるものなるべし』黄表紙の一。百年後の世態を豫想し、一年十二箇月に分ちて戯作せるもの。三册。明誠堂喜三二の作。鱗川春町畫。

ながいけ 長池【名】〔地〕山城國久世(ク)郡富野莊(サウ)村の字。京都・奈良間の一驛。木津川の右岸。果實の産地として有名なり。大和めぐりの記「長池、久世郡なり。伏見より三里あり、茶店あり、旅人の宿驛なり。町の北に長池の跡とて、田地の廻に堤あり。今の町も古の池の跡なりといふ」

ながいす 長椅子【名】『英 Sofa』横に長く凡そ一間ほどに造りたる椅子。多くは後部に背をもたせかくる所あり、左又は右に肘かけを附けたるもあり。休息の用に供す。

なかいた 中板【名】茶室の眞中にある板敷。特に二疊などの小間に多し。

ながいた 長板【名】臺子(ダイス)の四本の柱と天井板とを取去りたる板。長方形にして、茶席にて風爐・水差その他の用具を載するに用ふ。

なかいづみ 中泉【名】〔地〕遠江國磐田(バン)郡にある町。鐵道東海道線の一驛。天龍川の東一里餘、見附(ミツ)町に隣る。江戸時代に陣屋を置き、駿河・遠江二國の公領を管理せしめし所。

なが-いと 長絲【名】二度、三味線にかけ得べき長さの絲。ながを。謡曲「三味の長絲寶る聲、西南にかしがましく」

なかいほ-あき 長五百秋【名】長く久しき秋。年月の限りなく長きこと。ながあき。ちいほあき。〔古語〕記「豐葦原の千秋(チアキ)の長五百秋の瑞穗(ミヅホ)の國」

なが-いも 長芋・長薯・家山菜【名】〔植〕薯蕷(ヤマノイモ)科に屬する多年生の草。畑に栽培す。薯蕷に酷似せるもの。多肉根にして、水分多し。きりいも。一年薯。つくねいも(佛掌薯)参照。

長芋で足を衝く【句】「芋幹(ガイ)で足を衝く」に同じ。〔諺語〕「下を見よ。御平(ゴヘイ)の長芋【句】おひら(御平)の條

ながいもかん 長芋羹【名】長芋を主なる材料として製したる煉羊羹(カンカン)。

なかいり 中入【名】■内部の方へ入り込むこと。■敵味方の對陣中、兵の一部を以て敵の虚を衝くこと。■能(ノウ)にて、一曲の中途に、仕手(シテ)が、一度、樂屋又は造物(ツクモノ)などの中に入ること、又その入らんとする時、地(ヂ)にて謡ふ謡。中入の後には、衣裳を改めて登場するを常とす。■演劇・相撲(スマフ)見せ物などにて、中頃の暫時の休憩。主なる出演者は、この後に出づるを常とす。■物事の中途にて暫く休み憩ふこと。太鼓中入に見舞ふ和尙や茸狩」

なかいれ 中入【名】■物の中間に入るもの。帶しん。衣服の綿などの類。吉野忠信「中入なしの中幅帶」重帷子「大小のしまるため、中入に念は入れたれど」■前條■を云ふ。〔四國・九州の方言〕

なかいろ 中色【名】きんぱく(金箔)を見よ。

ながうた 長歌【名】■和歌の一體。一首の句數は、六句以上にして、五音・七音・五音・七音とやうに排列し、その終は七音を二つ重ぬるもの。ちやうか。短歌(タンカ)などに對して)■中古以後、短歌を誤りていへる稱。俊頼抄「長歌とは、皆人すずろに句餘りにて、長きを申す。それは古人の申しけるとて、師匠なりし人は、短歌と申されき。三十一字の歌をば長歌といはれき」

なが-うた 長唄【名】■『その短きものは、端唄(ハウタ)■の中の長き物よりも遙かに短けれど、小唄のごとく短きものは無きによりて、總稱す』三味線に合はせて唄ふ稍長き唄。多くは撿挍・勾當等の手になりしもの。即ち今の地唄の本曲の類。(端唄に對して)藤栗毛「江戸衆は、長唄をよう唄うてぢやが、京の宮園や國太夫は、又、格別なもんぢやわいな」■えどながうた(江戸長唄)に同じ。

なか-うち 中打【名】■なかおち(中落)に同じ。■〔農〕『うつ(打つ)■を見よ』ちゆうかう(中耕)に同じ。

なかうど 仲人【名】■『なかびと(中人)の音便』兩者の中に立ちて取持つ人。なかびと。なかだちにん。■男女の緣を媒介する人。媒妁人。

仲人七嘘(ナカウド)【句】『仲人と七嘘と頭禿を成す』次條に同じ。〔諺語〕

仲人の空言(ソラゴト)【句】仲人■が、緣談をまとめんがために、雙方いづれにも缺點の無きやうにとりなしていふが常なること。なかうどぐち(仲人口)参照。〔諺語〕

仲人は痘痕(アバタ)の數まで數へて來る【句】仲人■は、責任重きゆゑ、微細に觀察す。〔諺語〕

仲人は嘘八百(ウソハッピャク)の懸値(カケネ)【句】「仲人の空言(ソラゴト)」に同じ。〔諺語〕

仲人は宵の内【句】婚禮の夜、仲人は新夫・新婦の邪魔にならぬやうに、宵のうちに歸り去る。〔諺語〕春花五大力『仲人は宵の内、夜の更けぬ間(マ)にお暇申さう』糟糠粟毛「これはめでたうござる。そんだら、仲人は宵の内と申す。已(ヤ)どもはもう開けません」

仲人は宵の口【句】前條に同じ。〔諺語〕

仲人は宵の程【句】前條に同じ。〔諺語〕

仲人は草鞋(ワラヂ)千足(ゾク)【句】仲人■の奔走の勞多き形容にいふ。〔諺語〕

なかうど-かみ 仲人噛【名】仲人■をなかかみ。若風俗素盞嗚(スサノヲ)尊、老の事缺(カ)に稻田姫に戯れ、これより世にかしましき赤子の聲、とりあげばば・仲人噛も出でき」

なかうど-がた 仲人方【名】仲人をする人。

五人女』その頃、下立賣(シタダチウリ)烏丸上る町にしやべりのなるとて、隠もなき仲人がたあり、これを深く頼み、…吉日を選びて、おさんを迎へける」

なかうどぐち 仲人口 【名】仲人が綵談をまとめんがために、悪しき事も善く取做していふこと。

なかうどさわぎ 仲人騒 【名】仲人㊁の立會を要するほどの夫婦喧嘩などのさわぎ。浮世床「長屋中かかった上で媒人騒き」

なかうどびと 仲人人 【名】**なかうど**(仲人)㊁に同じ。

なかうり 中賣 【名】芝居・興行物の中などにて、茶・辨當・菓子などを賣り歩くこと、又その人。船頭深藍よっぽど人を茶あよしかにするぜ。わたやあ中賣の子だからさ」

なかうり 長瓜 【名】〔植〕へちま(絲瓜)を云ふ。〔薩摩國の方言〕

なかうをぬま 中魚沼 【名】〔地〕越後國十五郡の一。郡役所を十日(トヲカ)町に置く。

ながえ 長柄 【名】㊀道具の柄の長きこと、又その柄、又その柄を具へたる道具。俚丸「傘のろくろを抜けば、長柄に槍を仕込んだり」「長柄の矛(ホコ)」「長柄の槍」「長柄の銚子」㊁**ながえがさ**(長柄傘)の略。當世虎の巻「朱塗の高き駒下駄はいて、四尺のき折の長柄をささせ、對(ツイ)の禿に新造八人」㊂**ながえがたな**(長柄刀)の略。㊃長柄の銚子。㊄車又は駕籠・輿の牛馬を駕し、又は人夫の擔ひ、若しくは持ちて舁くために長く取附けたる棒。車のは、前方に二本を差出し、駕籠のは一本を、輿は二本を、貫きて前後に差出したり。〔轅〕㊅**ながえぐち**(長柄輿)の略。

ながえ 長柄の傘(サン)【句】**ながえがさ**(長柄傘)に同じ。

ながえ 「置く室。長傘の間(マ)【句】槍・長刀などを飾り長柄の者【句】長柄㊀を持ちて隨ふ足輕同心。

轅を北にして、楚に適(ユ)かんとす 【句】『白居易の詩に「欲レ望二鳳來百獸舞一何異二北レ轅將レ適レ楚」とあるに本づく』志と行との反對せる譬。

ながえ 長江 【名】〔地〕加賀國にある地。飾曲(藤「雪消ゆる白山風ものどかにて、日かげ長江の里も過ぎ」

ながえがさ 長柄傘 【名】㊀貴人の馬上の時などに、後方より差掛けて用ひし、長き柄を附けたる一種の傘。江戸時代、武家にては、旗本以上の人に限りてこれを使用するを得。搢紳家にては朱色の傘、武家にては白色のを用ひたり。ながえ。**ながえもち**(長柄持)參照。俚諺新選(隨古)「曲水や何れの君の長柄傘」㊁遊女の道中に、後方より差掛けて用ふる、柄の長き大なる傘。白と藍との紙を蛇目(ジャノメ)張にし、家紋を大いさ四五寸に描く。**ながえひがさ**(長柄日傘)參照。

ながえがたな 長柄刀 【名】柄を特に長くつくり、腕ぬきを入れたる刀。ながえ。

ながえぎり 長柄切・轅切 【名】轅を切去り、屋形の上に駕柄(ノリエモ)を通したる板輿。卽ち板輿(長柄輿ともいふ)の長棒駕籠に轉ずるに至りたる中間の形のもの。のりものえのこし。

ながえぐみ 長柄組 【名】**だうぐしゅう**(道具衆)に同じ。

ながえこし 長柄輿・轅輿 【名】**いたごし**(板輿)に同じ。

ながえそなへ 長柄備 【名】長柄の槍を持ちたる士卒の一隊にて陣立をなすこと。

ながえたいしやう 長柄大將 【名】**やりぶぎやう**(槍奉行)に同じ。

ながえたふし 長柄倒 【名】長柄の槍を手にしたる敵の鏡ひ進みて攻來るを、鐵砲と弓矢とにて打破る戰術。

なかえてうみん 中江兆民 【名】〔人〕佛蘭西學者・民權論者。舊高知藩の人。通稱は篤介。兆民はその號。別に木强生・南海仙漁等の號あり。元老院少書記官に任ぜられ、幾ばくも無くして辭し、新聞社に入り、また代議士となる。晩年實業界に入りしかど、志を得ず。明治三十四年歿す。年五十六。一年有半・續一年有半・理學鉤玄等の著あり。

なかえとうじゅ 中江藤樹 【名】〔人〕儒者。名は原、字は惟命、通稱は與右衛門。藤樹はその號、なほ西江默軒・頤軒等の別號あり。近江國高島郡小川村の人。初め程朱子の學を修め、後、王陽明の學說を奉ず。性温厚篤實にして、實踐躬行を重ず。大洲(オホズ)侯に仕へ、のち故郷に敎授す。近江聖人と稱せらる。慶安元年歿す。年四十一。のち藤樹全集の刊あり。

(ゆじうとえかな)

なかえとくすけ 中江篤介 【名】〔人〕**なかえてうみん**(中江兆民)に同じ。

ながえひがさ 長柄日傘 【名】昔時、富家にて、幼兒を乳母に抱かせ、婢などをして、後よりさしかけしむるために用ひたる、柄の長き日傘。**ながえがさ**(長柄傘)參照。

なかえふ 中葉 【名】鳥子紙の一種。(厚葉薄葉に對して)

ながえぶぎやう 長柄奉行 【名】**やりぶぎやう**(槍奉行)に同じ。「船。

ながえぶね 長柄船 【名】長柄組の乘る兵

ながえぼし 長烏帽子 【名】たけ長き立(タテ)烏帽子ならんかといふ。梶みそかに忍びて來る所に、長えぼしして、さすがに人に見えじとまどひ出づるほどに、物に突當りて、そよろといはせたる」

なかえみんざん 中江岷山 【名】〔人〕大阪の儒者。名は一貫、字は平八。晩に雜髪して、快安と稱す。伊藤仁齋の門に遊びて古學を唱へ、宋學を攻擊し、淺見絅齋(ケイサイ)・三宅尙齋等と相敵視す。享保十一年歿す。年七十二。

ながえん 長緣 【名】**えん**(緣)㊃を見よ。

ながえもち 長柄持 【名】長柄傘を持ちて、主人に從ひゆく供人。

ながえやり 長柄槍 【名】一丈乃至二間・三間ほどもある長き柄を附けたる槍。長柄の槍。ながえ。

なかおき 中置 【名】**おほいたひとつかき**(大板一置)に同じ。

なかおき 長起 【名】夜遲くまで起き居ること。よふかし。

ながおき 長置 【名】長きあひだ、その處に置くこと。風流曲三味線「とかく郭に、一日も長置する故に、さまざまのさはり出來」

なかおく 中奥 【名】江戸城内にて、將軍一己の私用を辨ずる所。奥の一部なれども、表に所屬す。(奥・大奥に對して)

なかおくごしやう 中奥小姓 【名】江戸幕府の職制の一。若年寄の管下に屬し、晝中の中奥に伺候し、儀式ある時は、配膳役送に從ひしもの。平日は七八人結番して候するを例とせり。なかおくづめ。

なかおくづめ 中奥詰 【名】前條に同じ。

なかおくばん 中奥番 【名】江戸幕府の職制の一。若年寄の管下に屬し、中奥に伺候し、中奥小姓の指揮を受けて、その雜務に從事せしもの。二千石内外の家祿の人をこれに任じたり。

ながおくり 長送 【名】薩摩藩にて、他藩の間諜又はその嫌疑ある者を捕へ、國境に送出して、これを斬殺せしこと。

なかおしがち 中押勝 【名】圍碁にて、十七目以上の勝。「目以上の負。

なかおしまけ 中押負 【名】圍碁にて、十七

なかおち 中落 【名】魚の三枚におろしたるものの中間なる脊骨の部分。なかうち。なかぼね。

なかおび 中帶 【名】袍又は狩衣などの下、小袖の上に結ぶ帶。したひも。したのおび。今昔「中帶して、若やかに穢氣なき下衆女共」

ながおひ 長追 【名】敵の逃ぐるを、遠くまで追ひゆくこと。長驅。

ながかうらい 長高麗 【名】〔植〕**たうもろこし**(玉蜀黍)に同じ。

なかがき 中垣 【名】中間のへだての垣。源氏「ときどき、なかがきのかいまみしはべるに」

ながかき 長牡蠣 【名】〔動〕えぞがき(蝦夷牡蠣)に同じ。「蠣」に同じ。

なかがき-がほ 中垣顔【名】中垣らしきやうす。中垣なりといはぬばかりの顔つき。〔蕉後集〕「しづの庵あまたの小屋の見えぬまで中垣顔にさける卯の花」

なかーかげ 中陰【名】紋所の、輪廓の中を地の色のままにして、線條をゑがかざるもの。

なかーかけ 長掛【名】■たけ長き打掛(うちかけ)。〔浮世風呂〕「お年寄樣方は、長掛と申して、長をお掛けあそばす。お傍樣方は中をお掛けあそばすれ」■ながかもじ(長髪)に同じ。

なかーがさ 中蓋【名】汁物を入るる中椀の蓋(ふた)。〔油地獄〕「肴も盃もいらぬ、中がさ添へて持つて來い」〔同じ。

なかーかし 長樫【名】〔植〕くろがし(黑樫)に同じ。

なかーかしは 長柏【名】〔植〕前條に同じかるべし。〔古語〕草根集「思ふこととくのみ島の長がしは長くぞたのむしげき憑みを」

なかーがたな 長刀【名】長きかたな。〔去來抄〕「なに事ぞ花見る人の長がたな」

なかーかつしか 中葛飾【名】〔地〕下總國の舊郡の一。明治二十九年武藏國に入り、北葛飾郡に合す。

なかーかっぱ 長合羽【名】たけ長くして、衣服の下部まで被ふ合羽。(半合羽に對して)衣食住記「木綿合羽。元文頃までは、武家は紺黑の半合羽なりしが、町人は紺花色小倉織・肥後木綿などの長合羽、元文の頃、武家も長合羽になり」

なかがねきやう-き 長兼卿記【名】〔書〕さんちやうき(三長記)に同じ。

なかーがは 中川【名】■三つ並べるうちの中間の川。兩川の中間に位する川。■香(かう)の一。質は眞南蠻(まなばん)にして、香の涼しく花やかに輕く立つもの。■〔地〕古、山城國京都の京極を流るる細き川。京極川ともいひ、今は會初(あはせ)川といへり。〔中河〕源氏「紀の守にて親しくつかうまつる人の、中河のわたりなる家なん、この頃水せき入れて、涼しきかげに侍る」 拾芥抄「中川、近衞北、京極東」■〔地〕武藏國南葛飾(みなみかつしか)郡にある川。古利根(ふるあらかは)川の下流。隅田川との間を流れて海に入る。荒川の改修完成して、その流末のこの川に落ちんこと近きにあらんとす。

中河の逢瀨(あふせ)【句】『源氏物語の空蟬(うつせみ)卷に、源氏の君が方違のため、中川■のほとりなる紀伊守の家に至りて、空蟬に逢ひし由記せるに本づく』戀ふる人に逢ふこと。 橫笛草紙「殊更わりなきは、この戀の道とこそ申しはべれ。中がはの逢ふ瀨は知らせたまはずとも、一筆はやすき御事なれば、御返事あそばしたまへかしと、こまごまと申し侍りければ」

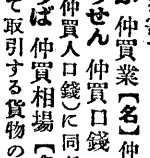
なかがは 中川【名】■〔地〕天慶國六郡の一。上川(かみかは)支廳の所管。■十勝國四郡の一。河西(かさい)支廳の所管。■姓氏の一。清和源氏より出づ。源經基五代の孫明國の末孫、常陸國に住せしが、重清の時に至りて、攝津國に移り住み、中川某の女に配して、その家を繼ぎ、清和源氏に改む。その子清秀戰死の後、子秀政も文祿征韓の役に陣歿し、秀政の弟秀成家を繼ぎ、今の豐後國直入(なほいり)郡竹田町の地を領し、關ヶ原の役、東軍に應じ、子孫相續す。明治維新後、伯爵を授けらる。

なかがは 郡珂川【名】〔地〕常陸國第一の大河。下野國那須川の下流。同國の幕川・黑川等の諸水を合はせて常陸國に入り、同國の涸沼(ひぬま)湖・仙波(せんば)湖の餘水をも容れて、外洋に注ぐ。長さ約三十里。〔じ。

なかがは 長側【名】かふきどう(衡胴)に同じ。

なかがはおついう 中川乙由【名】〔人〕俳人。伊勢派の祖。芭蕉晩年の門人。のち涼菟に從ふ。通稱は圖書、麥畝の內に家を立てて、麥林舍と號す。伊勢國山田の祠官。元文三年歿す。

なかがは-かしは 中川柏【名】紋所の一。舊岡藩中川家の家紋なるもの。



(はしかはがかな)

なかがは-きよひで 中川清秀【名】〔人〕武將。攝津國の人。荒木村重に屬し、瀨平と稱す。天正十年豐臣秀吉を援け、賤ヶ嶽(しづがたけ)を守りし時、佐久間盛政に攻められ、苦鬪して死す。

なかがは-せうえき 中川紹益【名】〔人〕金工。越後國高田の人。與十郎と稱す。天正中、京に移り住む。茶道具の製作を以て聞ゆ。作品は專ら鎚起法に依れり。元和八年歿す。年六十四。

なかがはち 中河內【名】〔地〕河內國三郡の一。郡役所を八尾(やを)町に置く。

なかがは-のーばんしよ 中川番所【名】江戸時代、武藏國中川の河口に設け、通行の川船を檢査したる番所。若年寄管下の中川番これを掌れり。もと深川に在りし番所を、寬文元年に移したるものなり。

なかがはのーみや 中川宮【名】〔人〕さねひこしんわう(朝彥親王)を見よ。

なかがはばん 中川番【名】なかがはのばんしよ(中川番所)を見よ。

なかがはりいろ 中異色【名】鐵の緘(しど)の一。柚・草摺を、縱に中央とその左右と、色を更へて緘したるもの。

なかがひ 仲買【名】物品又は權利を、甲より買ひて乙に賣り、その間の口錢を得るを業とすること、又その人。さやとり。さいとり。接買。牙保。

なかがひ-かぶ 仲買株【名】仲買業の株。

なかがひかぶふだ 仲買株札【名】江戸時代、仲買株の證として、幕府より商人に授けたる札。

なかーがひがらむし 長介殼蟲【名】〔動〕有吻(ういふ)類に屬する昆蟲。介殼は雌は長さ一分、雄はその半より小さし。雌は翅を有せず、雄は一對の翅、一對の發達したる觸角を有し、尾端に一箇の錐狀突起を具ふ。柑橘類の植物を害す。

なかがひ-げふ 仲買業【名】仲買の營業。

なかがひ-こうせん 仲買口錢【名】なかがひにんこうせん(仲買人口錢)に同じ。

なかがひ-さうば 仲買相場【名】商人が相互の間に於て取引する貨物の價格。多少の割引をなすを普通とす。

なかがひ-しやう 仲買商【名】なかがひ、仲買)に同じ。

なかがひ-だいりにん 仲買代理人【名】【商】取引所にて、仲買人の代理として仲買をなす人。仲買人が代理人を使用する場合には、取引所の許可を經べきものとす。

なかがひ-てん 仲買店【名】仲買を營業とする店。仲買人の店。

なかがひにん 仲買人【名】仲買を營業とせる人。仲買商。

なかがひにん-こうせん 仲買人口錢【名】【商】仲買人が商品を賣買したる時、その勞務の報酬として受くる口錢。仲買口錢。

なかがひにん-てすうれう 仲買人手數料【名】【商】前條に同じ。

なかがひにん-めんきよれう 仲買人免許料【名】取引所の仲買人たらんとする者が、農商務省よりその免許を受くるとき納むべき手數料。

なかーかぶ 長蕪【名】〔植〕次條の略。

なかーかぶら 長蕪・箭竿白【名】〔植〕蕪菁の根のやや長き品種の總稱。卽ち米子(よねこ)蕪・紅葉蕪の類。ながかぶ。

なかーかま 長鎌【名】長き柄を附け、立ちながら草を薙(な)ぐに用ふる鎌。(手鎌に對して)

なかーがみ 天一神【名】『金匱經』に「天一立ニ中央一爲ニ十二神將一定ニ吉凶一」とあるによりて、中神の義にていふなるべしといふ』てんいちじん(天一神)に同じ。源氏「こよひ、なかがみ、うちよりは塞(ふた)がりて」

なかーがみ 鑷【名】たてがみ(鬣)に同じ。字鏡集「鑷、ナカカミ・ウナカミ・タチカミ」

なかがみ 中頭【名】〔地〕琉球國五郡の一。沖繩島の中部を占め、郡役所を首里(しゅり)に置く。

なかーがみ 長紙【名】大和國吉野に產し、傘の裏張などに用ふる、一種の紙。傘屋紙。

なかーがみしも 長上下【名】麻上下の一種。肩衣(かたぎぬ)と同じ染色の長袴とを著用する服裝。德川幕府の頃、禮服として、諸大名・高家・交代寄の合士の著用せしもの。色合は青色または鉛房色にて、白く小紋を染出し、紋所は兩肩の前方左右に一つづつ、背に一つ、

(もしもかがな)

袴には、腰板に一つをつく。

なかかんばら 中浦原【名】〔地〕越後國十五郡の一。郡役所を新津(にひつ)町に置く。

なかかめむし 長椿象【名】〔動〕半翅(ハンシ)類に屬する昆蟲。體は細長く、頭部はほぼ三角形を成し、やや長き觸角を具ふ。植物の養液を吸收して害を與ふ。まだらかめむし。

なかかも 中賀茂【名】〔地〕山城國の、上賀茂と下鴨との間なる流木(ナガレギ)の森の地。謠曲「水無月」「清き流や、中賀茂の御手洗(みたらし)川につどふ君」

なかかもじ 長髭【名】毛の分量多く、且つ長く造りたるかもじ。江戸時代には、奥女中などに用ひられたり。ながかもじ。

ながからびつ 長唐櫃【名】長持のごとくに長く造り、前後二人にてかつぐやうにしたる唐櫃。貞丈雜記「唐櫃に二品あり。長からびつは、長持のごとく長し」

なかぎ 中著【名】襦袢と上衣との間に著る衣服。喜の門松「深い中著はうばたまの黒羽二重の蛇目の紋」

ながき 名書【名】名を書くこと、又その書きたる名。一代男「名がきなき文一つ」を見よ。

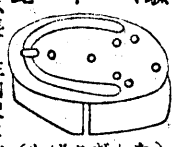
ながきっつけ 中切附【名】したぐら(下鞍)より北は上京、竹屋町より四條通までを中京、四條より南を下京といひて、上・中・下の人氣風俗に少しの所がらあり」

ながきやく 長客【名】長居する客人。長く逗留する客。

なかきり 中切・中限【名】〔商〕ていきとりひき(定期取引)を見よ。

なかきり 中切【名】次條の略。

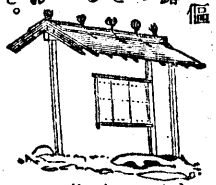
なかぎりげた 中切下駄【名】齒の無き桐の臺を、中央にて二つに切分け、革を鋲にて打著けたる下駄。なかぎり。



(たげりぎかな)

ながきりこんぶ 長切昆布【名】昆布を乾燥して、長さ三四尺に切揃へたる食料品。支那へ輸出せらるること多し。

なかくぐり 中潛・中傴【名】茶庭にて、外露路(ロジ)と內露路との中間に設けて堺とし、潛りて出入するやうにしたる門。



(りぐくかな)

なかぐさ 【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)に同じ。

なかくし 名隱【名】名を隱して、いはぬこと。源氏「おんながくしも、さはかりにこそはと、聞えたまひながら」

ながくし 長櫛【名】普通のものよりは著しく長く作りたる櫛。文化の頃流行したり。

ながぐそく 長具足【名】ながだうぐ(長道具)に同じ。

なかぐち 中口【名】■中央にある入口。なかのくち。傾城反魂香「驅廻っても、奥方の勝手は知らず、中口の明けずの門、碎けてのけと扉を叩き：開けよ開けよと、貫木も折るるばかりに踏み叩き」■中たがひせしむるために、雙方の間に立ちて、何れの事をも惡しざまにいひなすこと。なかあひごと。なかごと。

ながぐつ 長靴【名】深く造りて、殆ど膝の邊までも覆ふやうにせる靴。雨雪の時、又騎馬の時に用ふ。(あさ靴に對して)

ながくて 長湫【名】〔地〕ながくて(長久手)を見よ。

長湫の戰【句】天正十二年四月尾張國愛知郡長湫村にて、豐臣秀吉・德川家康の兩軍會戰し、秀吉の軍大いに敗れし戰役。

ながくて 長久手【名】〔地〕尾張國愛知(アイチ)郡にある村。もと長湫と書きしを、明治三十九年現在の文字に改めしもの。名古屋市を距ること二里十餘町。前條參照。

なかくびき 中頸城【名】〔地〕越後國十五郡の一。郡役所を高田市に置く。

なかくびれ 中括【名】中央部のくびれてあること、又その形。なかっくびれ。

なかくぼ 中窪・凹【名】中は窪みて、四邊の高きこと。なかびく。(中高に對して)

ながくぼ 長久保【名】〔地〕信濃國小縣(ヒヒ)郡(サツ)にある町。和田峠の北一里半。舊中仙道の一要驛。

ながくぼせきすゐ 長久保赤水【名】〔人〕地理學者。名は玄珠、字は子玉、源五兵衛と稱す。赤水はその號。常陸國赤濱の人。水戸藩に仕ふ。博學にして、最も地理學に長じ、また詩文を能くす。享和三年歿す。年八十三。日本地理誌・日本輿地路程全圖・蝦夷松山全圖等の著あり。

なかくみ 中汲【名】濁酒の上澄と沈澱との中間を汲取りたる、下等の飲料。「同じ。

ながくみ 長組【名】ながこゆひ(長小結)に同じ。

ながくみわ 長組輪【名】次條の略。

長組輪の烏帽子(エボシ)【句】「長小結(ナガコユヒ)の烏帽子」に同じ。

ながぐら 長倉・長藏【名】數戸を一棟に長く續けて造りたる倉庫。古、大藏省に屬したるものは、長殿(ナガドノ)とも呼び、諸國よりの貢物を國別に積みおきたり。紀略「左近衞府長倉一宇」國士遺「裏の長藏を小借屋(シヤク)に直し」

なかくれなゐ 中紅【名】『なかあかいろ(中藍色)・なかけしむらさき(中滅紫)を見よ』染色の一。濃淡その中を得たる紅色。

なかくろ 中黑【名】■切生(キリフ)の一種。上下白く中央の黑きもの。その黑き部分の大小によりて、大中黑(オホナカ)・小中黑の稱あり。(中白に對して)■紋所の一。丸に一引(ヒキ)の一種。丸の輪廓は細く、一引の部分は黑く、丸の中の他の部分は白きもの。その一引の部分の太きを大中黑といひ、新田氏の定紋なるより、又新田中黑の稱あり。ひきりゅう(引兩)參照。

なかくろにち 長凶會日【名】凶會日(ニクヱ)の幾日も續くこと。字鏡「欠の日くろ日など書きけるが、長凶會日のやうにはこすべからずこすべからずと續け書きたれば、二三日までは念じ居たるほどに」

なかげ 名掛【名】名を附けて、家來分にすること。

ながけ 長け【形】ながし(長し)の連體形「長き」の轉訛。(東國の古の方言) 萬葉「大君のみことかしこみゆみのみにさねかわたらむながけこの夜を」

ながけし 長けし【形ク】ながし(長し)に同じ。(古語) 道濟集「色變へぬときはの杉はわが國の長け宮のしるしなりけり」

なかけしむらさき 中滅紫【名】『なかあかいろ(中藍色)・なかくれなゐ(中紅)を見よ』濃淡その中を得たる滅紫。「を見よ。

ながけん 長け【句】ながし(長し)の條下

なかご 中子・中心・心【名】■物の眞中の部。中心(チウシン)。■瓜類の、種子を含める部分の柔き肉、又柑橘類の果實の食用に供する部。和名「心。多心、讀ニ奈加古可知ニ」■刀の刃の關(セキ)より下、櫛の中に入りたる部分。こみ。刀身。「劍忠」今國姓鑑「劍(ツルギ)に淨めの鍵目を入れ」■鏃の莖(ク)にさゝりてある部分。こみ。のしろ。■入子(イレコ)に造りたる物の、中なるもの。■「廚子などの中に安置せらるるよりいふなるべし」ほとけ(佛)■を云ふ。「齋宮の忌詞」齋宮寮式「佛稱ニ中子ニ」■なかごぼし(心星)の略。

ながこうじやう 長口上【名】ながながしき口上。若風俗「盃…數重なり、偽なしに醉出で、料理自慢の長口上、申しもあへず片づけられ」長町女腹切「何の伯母が長口上」

なかごころ 中心【名】媒(ナカダチ)によりて結ば

る戀ごころ。〔俳諧の語〕「に同じ。

なかご-さき 中子先【名】ねをかけ(根緒掛)

なかご-さふね 中御座船【名】御座船の一。召替または供人の乗用のもの。(大(オホ)御座船・小御座船に對して)

なかご-し 長腰【名】■腰に帶ぶる長太刀。

■ながじり(長尻)に同じ。

なかこしき-じま 中甑島【名】〔地〕薩摩國の西方にある島。薩摩郡に屬す。一名平良(タヒラ)島と稱す。もと上甑島と地續きなりしが、激浪の爲に中斷せられしものなり。島内悉く山地。周回四里餘。

なかご-しよ 中御所【名】御所(六)の數人ある場合に、上御所の次なるもの、又その住所。ごしよ(御所)參照。

なかごしよ-ばんしゆ 中御所番衆【名】中御所に勤番する番衆。「分。

なかご-じり 中心尻【名】中子(三)の末の部

なかご-ごと 中言【名】なかごと(中口)(二)に同じ。〔古語〕萬葉「たまかつましまくま山の夕露になが こひしつついねがてぬかも」

なかごと-ぼし 心宿【名】しん(心)九に同じ。

なかこま 中巨摩【名】〔地〕甲斐國九郡の一。郡役所を龍王(リウワウ)村に置く。

なが-こんぶ 長昆布【名】〔植〕昆布の一種。長さ六七丈、幅四五寸あるもの。長切昆布に作り、主として支那に輸出す。

なか-ごめ 中込【名】中に込むること。中に押入ること。

なが-ごもり 長籠【名】久しく籠り居ること。源氏「長籠したまはんも、びんなし」

なが-こゆひ 長小結【名】次條の略。長小結の烏帽子(エボシ)【句】侍烏帽子(サムラヒエボシ)の、小結の結びあまりを左右に長く出したるもの。十八九歳以下の者に用ひたり。長組輪(ナガクミワ)の烏帽子。

なかごろ 中頃【名】兩端に片寄らぬほど。なかば。中間。(物にも時にもいふ)。

なかごろう 那珂梧樓【名】〔人〕儒者。初名は江幡五郎。通高(ミチタカ)と稱す。陸中國の人。安積艮齋・森田節齋に從學す。博覽・強記、和漢の學に通ず。古事類苑の編輯に與る。明治十二年歿す。年五十二。「席。

なかざ 中座【名】一座の中央。中央の座

ながさ 長【名】長き程度。

なかさうざ 中障子(長座)に同じ。

なかさうじ 中障子(中障子)參照。〔古語〕源氏「人しづまるほどになかさうじを引けど、例はことにさし固めなどもせぬを、つとさして、人の香もせず」

ながさうじ 長精進【名】ながしやうじ(長精進)の約。〔古語〕蜻蛉「やがて、ながさうじして、山寺に籠りなんに」

ながざうり 長草履【名】『足の裏の全面に敷くほどの長さある草履の義』後世の通常の草履。(足半(アシナカ)に對して)

ながさか 長坂【名】■長く續きたる坂。

■〔地〕すぎさか(杉坂)(一)に同じ。

ながさかもり 長酒盛【名】長き時間續けて酒盛をなすこと、又その酒盛。

なか-さかわ 中賢輪【名】槍の賢輪の、柄の中ほどにあるもの。(上(カミ)賢輪・下(シモ)賢輪に對して)

ながさき 長崎【名】■〔地〕四十三縣の一。肥前國の西半なる長崎佐世保の二市及び西彼杵(ニシソノギ)東彼杵・北高來(キタタクノ)・南高來・北松浦・南松浦の六郡と壹岐・對馬の全部とを管轄し、縣廳を長崎市に置く。■〔地〕肥前國にある市。九州第一の都會。我が國最古の貿易港にして、今も貿易上、神戸・横濱に次ぎて繁昌す。永延以來大村氏の領有に屬せしが、豐臣秀吉收めて、公邑とし、德川時代にも直轄地とし、奉行を置きて治めしめたり。■〔動〕『肥前國長崎に多きよりいふ』小さき鯨(コジラ)。〔薩摩國の方言〕

ながさき-あきなひ 長崎商【名】德川時代に、船來品を賣捌きしこと。唐商賣(タウショウバイ)。若風俗「堺の大道(ダイダウ)筋に、長崎商して、家榮えたる人のありしが」

ながさき-あぢなひ 長崎商【名】德川時代に、船來品を賣捌きしこと。唐商賣(タウショウバイ)。

ながさきや(長崎屋)參照。

ながさき-かいだう 長崎街道【名】〔地〕肥前國三養基(ミヤキ)郡田代村にて、熊本・福岡間の國道と分岐して、長崎市に到る國道。

ながさき-こがくしよ 長崎語學所【名】せいいくわん(濟美館)(二)を見よ。

ながさき-せん 長崎線【名】〔地〕九州鐵道本線の鳥栖(トス)驛より分岐して、長崎市に至る線。

ながさきだいくわん 長崎代官【名】江戸幕府の職制の一。長崎奉行の下にありて、輸入品を檢し、倉庫を主管し、兼ねて寺社の事を掌りしもの。定員二人、世襲せり。

ながさき-たかすけ 長崎高資【名】〔人〕武將。鎌倉幕府の臣。内管領圓喜の子。新左衛門尉と稱す。父に代りて事を視る。執權北條高時の暗愚に乘じ、專恣、威福を弄す。鎌倉滅亡の際、殉死す。

ながさき-だこ 長崎凧【名】長崎地方にて用ふる菱形の凧。

ながさき-たび 長崎足袋【名】木綿足袋の一種。

ながさきは 長崎派【名】正保・慶安頃より長崎に興隆したる支那風の畫派。明僧逸然等の傳へたるもの。

ながさき-ぶぎやう 長崎奉行【名】江戸幕府の職制の一。肥前國長崎の民政を管し、支那・和蘭などとの貿易上の事務と、かねて海防の事とを掌りしもの。老中の被管。定員初は一人なりしが、後二人となり、内一人は在勤し、非番の者は江戸に在りて執務し、評定所式日に列することと定められたり。

ながさき-まちぶぎやうより 長崎町年寄【名】江戸時代、長崎奉行の管下にありて、市中の庶務を分掌せし職。定員七人。

ながさき-もめん 長崎木綿【名】慶長の頃、肥前の織工の織初めたる木綿の織物。

ながさきや 長崎屋【名】昔、大阪にて、船來品を賣りし家の名。新永代藏「京にかくれなき長崎商の近道男、…緞子一卷を半分づつ長崎屋と分けて、器用に取られけるが」

ながさきりんご 長崎林檎【名】〔植〕こりんご(小林檎)に同じ。

ながさきれうり 長崎料理【名】しっぽくれうり(卓袱料理)に同じ。

ながさげ 長疋【名】〔植〕じふろくささげ(十六虹豆)に同じ。

なかざし 中差【名】■『箙の中に差したるものの義』箙(エビラ)に插せる矢の、上差(ウハザシ)以外のすべてのもの。最明寺殿百人上臈「佐佐木返答にも及ばず、中指取ってからりと番ひ、兵と切って放つ矢に」

■婦人の髻の眞中に插す弁又は簪。(前差(マヘザシ)後(ウシロ)差に對して)〔中插〕

ながざし 長差【名】ながしやく(長尺)に同じ。〔を見よ。

なかざしあみ 仲刺網【名】さしあみ(刺網)

なかざしき 中座敷【名】二つの座敷の中間にある座敷。

ながざしき 長座敷【名】座敷に長居すること。長座。〔一代女〕「さばけぬ人の長座敷、あくびも忍ばず出で、さりとてはうたてかりしに」

なかざだ 中比【名】『さだを見よ』程度の、すぐれも劣りもせぬこと。一說に、上代風にも近代風にもあらぬ中世ごろの振(フリ)なりと。〔古語〕源氏「御手は、さすがに文字强う、中さだの筋にて、かみしもひとしく書いたまへり」

ながさ 長狹【名】〔地〕養老二年、上總國よ

り割きて、安房國に置かれし郡。明治二十九年安房郡に合せらる。

なかざはだうに 中澤道二【名】〔人〕心學者。名は義通、通稱は龜屋久兵衞。京都の人。初めは織物を業としが、晩年、手島堵庵の門に入り、三敎一致の旨を明かにし、五十二歳にして薙髪し、江戸に出て、心學道話を講ず。享和三年歿す。年七十九。

ながさはともを 長澤伴雄【名】〔人〕國學者。和歌山藩士吉岡刑右衞門の子、柿園と號す。長澤六郎の養子となる。本居大平の門に學び、和歌有職に達す。又、藩政に參與せしが、事に坐して幽閉せられ、安政二年再び罪を獲て永く監禁せらる。歿年詳かならず。詠史歌集「類題鴨川集」等の著あり。

なかざはり 仲觸【名】仲働にして、妾の役をも兼ねたるもの。

ながさはろせつ 長澤蘆雪【名】〔人〕畫家。名は魚、字は主計(カヅ)。山城國淀の藩士。圓山應擧の門人。寛政十一年歿す。年四十五。

ながさふ 流さふ【動四他】ながす(流す)の延。〔古語〕萬葉「いにしへよ今のをつつにながさへる親の子どもぞ」

ながざまに 長様に【副】長きやうに。枕「疊一ひらを、ながざまに緣(ヘリ)をして」

なかさん 中棧【名】㊀唐戸などの中程にある棧。㊁和船の舵の一部。

なかざら 中皿【名】中位なる大きさの皿。ちゆうざら。(大皿・小皿に對して)

ながされ 流【名】流さるること。流罪(ルザ)に處せらるること。平家「平大納言の流されの事」

ながされびと 流人【名】流さるる人。流罪(ルザ)に處せられたる人。流人(ルニン)。謠曲(俊寛)「いかに、この島に流され人の御座候ふか」

ながさを 長棹【名】棹竹又は三味線の棹の長きもの。醒睡笑「長棹を持ち、庭をあなたこなたと振りまはる」梅暦「辛(ラン)い年季の長棹を浮かして、身儘(ハジ)と場所(シヨ)を替へ」

なかし 仲仕【名】『仕は假借の字にて、實は爲(シ)の意、小揚(ヤア)と當業者との仲にありて働くよりいふ』運送業・土木業などを手傳ふ人夫。

ながし 流【名】㊀流すこと。液體を低き方に就きて行かしむること。㊁しまながし。流罪(ルザ)。〔古語〕㊂臺所井戸端・湯殿などの一部。やや斜に設けて、用ひあまりの湯水の溝へ流れ去るやうにしたる所。はしり。ながしもと。ながしだい(流臺)參照。㊃人浴者の背を擦り洗ふこと。湯屋に雇はれ、浴客に對してこれをなす人を、三助(サンスケ)といふ。浮世風呂「流の男、留桶と小桶二つへ湯を汲んでおき、背中を流しに來り」㊄生花にて、枝の配置の名稱。横に長く出す枝。ながしえ。細城反魂香「これこれ、ずっとのびたる流の枝」孕常盤「控へらるるも控へるも、笑顏ばかりの梅櫻、流・控の眤合」㊅藏鞘の曲の一。㊆藝人の、人家に呼ばれんがために、三味線などを彈きながら街上をねりあるくこと。㊇芝居の囃子(シヤ)の一。笛・太鼓・大太鼓を用ふるもの。㊈ねつづけ(居纏)に同じ。西鶴夢相妙薬「なんだ。茶居が迎ひに來たか。けふもながしか。居纏(ツヅ)だ、居纏だ」㊉南風。陰曆三四月頃のを筍流(カガシコ)といひ、同四五月頃のを茅花流(ツバナ)といふ。㊊つゆ(梅雨)を云ふ。〔雜摩國の方言〕

ながし 流の下の赤小豆(アヅキ)の木【句】細くひよろ長き形容。〔諺語〕

ながし 長し【形ク】㊀端と端との隔り、多し。なかけし。長大なり。㊁時間の經過多し。ひさし。永久なり。長久なり。〔永し〕長い浮世に短い命【句】「長い月日に短い命」に同じ。〔諺語〕

長い御眞魚(マナ)【句】〔動〕はも(鱧)を云ふ。〔女房の語〕大上藤御名之事「女房詞、一、はも、ながいおなま」

長い正月は無い【句】この後榮えて、長くは續くまじ。〔諺語〕

長い月日に短い命【句】歲月は永久なれども、人の命は長からず。長い浮世に短い命。〔諺語〕

長い物には卷かれろ【句】『蛇に卷かれよといふ意より轉じていふ』目上の人又は勢力ある人には、その言ふがままになりて服從するに若くはなし。〔諺語〕

長い草鞋(ワラヂ)を履(ハ)く【句】惡事の露顯しかけたるため、遠方の地に逃げかくる。高飛をなす。

長かるべき事【句】のちのちの事。將來の事。大義「長かるべき事どものたまひしなん、哀なりしとこそ、後に語りたまひけれ」

長き歎【句】長き別のなげき。死別のなげき。

長き眠(ネブ)【句】㊀〔佛〕「長き夜の眠」に同じ。續古今「かくしつつ長きねぶりのさめやせん待つ曉は遙かなれども」續千載「うたた寢の夢は程なく覺めにけり長きねぶりの塲からましかば」㊁えいみん(永眠)に同じ。續千載「七そぢの夢より後のいかならん永きねぶりの果ぞ悲しき」

長き闇路(ヤミヂ)【句】「長き夜の闇」に同じ。續千載「かかげおく法(ノリ)のともし火後の世の長き闇路のしるべともなれ」

長き夜【句】㊀なよ(永夜)に同じ。新古今「秋の露や袂にいたく結ぶらん長き夜あかず宿る月かな」續句「長き夜や通夜の連歌のこぼれ月」㊁よみぢ。冥土。御伽「長き夜の苦しきことを思へかし何嘆くらん假のやどりを」

長き夜すがら【句】長き夜の夜すがら。長き夜の夜どほし。金葉「罪はしも露も殘らず消えねらん長き夜すがらくゆる思ひに」新古今「涙のみ浮き出づる蟹の釣竿の長き夜すがら戀ひつつぞぬる」

長き夜の闇(ヤミ)【句】〔佛〕「生死(シヤウジ)の闇」に同じ。源氏「さばかりの事に妨げられて、長き夜の闇にさへまどはんがやくなさ」續後拾遺「長き夜の闇に惑へる我れをおきて雪がくれぬる空の月影」新後撰「長き夜の闇路(ヤミヂ)【句】前條に同じ。

長き夜の闇路に迷ふ身なりともねぶりさめなば君をたづねん」

長き別(ワカレ)【句】㊀久しき間の離別。永別(エイベツ)。續後撰「山鳥のはつ尾の鏡かけてのみ長き別のかげを戀ひつつ」㊁しにわかれ。死別。永訣。草庵集「人の世の長き別をいかにせん霞みていにし雁は來にけり」

長く成り、短く成りして居る【句】退屈して、身を持てあまし、横になりまた起きて坐りなどして居る。〔俚言〕

長けむ【句】長からん。長くあらん。萬葉「岩根ふみ越えへなりなば戀しけくの長けむぞ」けむ(助動)參照。

長し短し【句】これに長く、かれには短く、何れにもあてはまらずして都合わろし。帶に短し、襷に長し。〔諺語〕

ながしあふ 流合ふ【動四他】入浴者が、互に背中の垢をながす。

ながしあみ 流網【名】水流に任せて投入れ、魚を捕ふる網。使用する時は、潮流を横斷し、魚をして網に入らしむ。

ながしい 長しい【形】ながし(長し)の訛。

ながしいた 流板【名】流(シヤ)に張りたる板、又、風呂居にて、垢を流す板の間(マ)。ながし。

ながしいる 流入る【動下二他】ながしこむ(流込む)に同じ。

ながしえ 流枝【名】ながし(流)㊄に同じ。

ながしかぢ 流舵【名】舵を普通の位置よりも後方に斜に欲むること。順風の時など、舵の働を要せざる際に、舵の抵抗を避くる爲に行ふ。

ながしき 中敷【名】㊀中間に敷くこと、又「その物。

ながしぎ 流木【名】㊀山にて伐りたる木を、下流へ下すもの。㊁木の小枝を薪として用ふるもの。〔能登國・加賀國・越奥國の方言〕

ながしきん 流金【名】『たけながしきん』竹流金の略』さをがね(竿金)に同じ。

なかしきり 中仕切【名】㊀中間のしきり。間のさかひ。㊁なかさだて(中戸立)に同じ。

なかしきゐ 中敷居【名】中仕切にある敷

ながしぐすり 流薬【名】鑄物・陶器などの表面に流しかくる薬。うはぐすり。

ながしげ 長湿氣【名】長く續くしけ。

ながしげどう 中重籐【名】重籐の一種。末筈(ウラズ)の日輪巻の下、星巻の上の一部分にのみ繁く籐を巻きたるもの。

ながしこ 中鉋【名】中仕上げに用ふる鉋(カンナ)。(粗鉋(アラ)・上鉋(ジヤウ)に對して)

ながしこむ 流込む【動四他】流して中へ入る。ながし入る。そそぎこむ。

ながしさく 流作【名】ながしさくば(流作場)の略。

ながしさくだ 流田作【名】次條を見よ。

ながしさくば 流作場・流作塲【名】川筋・湖畔などにありて、作物の水に流されがちなる田畑。田ならば流作田ともいひ、畑ならば流作畑ともいふ。ながしさく。

ながしさくはた 流作畑【名】前條を見よ。

ながしさしあみ 流刺網【名】さしあみ(刺網)を見よ。

ながしーしがらみ 流柵【名】船戰のとき、竹を繩にて柵のごとく編み、浮と釣合をつけ、敵の來るべき水路に置きて、障害となすもの。

ながしだい 流臺【名】臺所などにて、流を据ゑおく臺。

ながーしち 中七【名】ながしちもんじ(中七文字)の略。

ながーしちもんじ 中七文字【名】俳句の中央の七文字。なかしち。

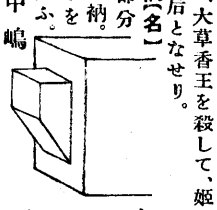
ながしーつり 流釣【名】釣絲を水中に流し、これを曳きながら釣上ぐる方法。急流に行はる。

ながしの 長篠【名】〔地〕三河國南設樂(ミナミシタラ)郡にある村。豐橋市の東北約七里。鐵道豐川線の終點。

長篠の戰【句】天正三年五月三河國なる、今の長篠・東郷(トウゴウ)・信樂(シナラ)の諸村及び新城(シンシロ)町に亙る地域にて、徳川家康・織田信長の兩軍が大いに武田勝頼の軍を破りし戰。

ながしーひめ 中蒂姫・中磯姫【名】〔人〕履仲天皇の皇女。又の名は長田大娘(ナガタノオホイラツメ)皇女。安康天皇の皇后。初め大草香(オホクサカ)王の妃となりて、眉輪(マユワ)王を生みしが、天皇議言を信じ、大草香王を殺して、姫を納れ、立てて皇后となせり。

ながしーほぞ 流枘【名】〔建〕その輪一部分を斜に作りたる枘。二柱の間に横木を差す時などに用ふ。



(そほしがな)

ながしま 中島・中嶋【名】〔地〕一尾張國九郡の一。郡役所を稻澤(イナザハ)町に置く。二美濃國の舊郡の一。もと尾張國中島郡の一部なりしに、木曾川の河道變ぜしため、美濃國に入りしもの。明治二十九年羽栗(ハグリ)郡と合して、羽島(ハシマ)郡となる。三攝津國西成(ニシナリ)郡の地の中世の稱。中津川によりて二分せられ、神崎川との間を北中島、天滿川との間を南中島と呼びたり。太平記「楠帶刀正行は、…住吉大王寺邊へ打出て打出で、中島の在家少少燒拂ひて」きのふはけふの物語「津の國の中島に、大百姓の比丘尼あり。毎年、中津川の堤が切るるゆゑに、隣郷の百姓ども、寄つて、かの比丘尼の田の前を築く」

ながーしま 長き島。細長き形の島。出水(イヅミ)郡に屬し、周回二十二里餘。

ながしま 長島・長嶋【名】一長き島。細長き形の島。二〔地〕薩摩國の西北方にある島。出水(イヅミ)郡に屬し、周回二十二里餘。

ながしま 長島・長嶋【名】一〔地〕伊勢國桑名郡の東偏、揖斐(イビ)川と木曾川の支流なる鍋田川とに圍まれたる地域。今、木曾嶋(キソジマ)・伊曾島(イソジマ)・長島・楠(クスノキ)の四村に分たる。二〔地〕前項の地域内に屬する村。大字長島は一小市街をなす。次條參照。三〔地〕紀伊國北牟婁(キタムロ)郡の町。三方山を繞らし、東方海に面す。長島港あり。四〔植〕福壽草の一品種。八重咲にして、花瓣細くして圓く、淡黄色を呈す。

長島一揆【句】元龜二年今の伊勢國桑名郡長嶋村なる願證寺の僧證意等が、織田信長に抗せしも一揆、一時勢猖獗なりしも、天正二年信長の爲に平げられ、一揆二萬餘人燒殺さる。

ながしまうたこ 中島歌子【名】〔人〕歌人・教育家。幼名とせ。水戸藩御用宿中島又左衞門の女。同藩士林忠右衞門に嫁し、武田耕雲齋の事に關し、夫の戰死するや、連坐して獄に下りしが、後、歌を加藤千浪に學び、明治維新の後、女子教育に盡瘁す。同三十六年歿す。年六十三。

ながしーましやう 長島城【名】伊勢國桑名郡長島にありし城。元龜年間本願寺の門徒一揆を起して、織田氏に抗せし時、信長の部將瀧川一益の築城せしもの。天正の頃織田信雄これに據れり、今僅かにその址を存す。

ながしましやうえん 中島湘烟【名】〔人〕女流文士。信行の妻。岸田茂兵衞の女。男女同權論を唱へ、又、民權説を唱へて獄に繋がれしことあり。明治三十四年歿す。

ながしまたへゑ 中島太兵衞【名】〔人〕砲術家。中島流砲術の祖。名は長守。貫學と號す。攝津國の人。自得流佐佐木流及び武術流等の砲術を學び、遂に一家を成す。子孫父祖の術を繼げり。

ながしまのふゆき 中島信行【名】〔人〕政治家。舊高知藩士。神奈川縣令・元老院議官等に任ぜられしが、野に下りて立憲政黨を起し、後に、自由黨副總理となる。明治二十三年最初の衆議院議長に擧げらる。同二十五年伊國特命全權公使となり、後、男爵を授けられ、同三十二年歿す。年五十四。

ながしまひころく 中島彦六【名】〔人〕江戸の瓦師。江戸瓦師の祖。正保二年始めて、瓦を燒くことを發明す。

ながしまひろたり 中島廣足【名】〔人〕國學者。肥後國熊本の藩士通稱は太郎。權園(ゴンエン)と號す。本居大平の門人。文久四年歿す。年五十一(一説に七十三)。

ながしーまへだれ 仲仕前垂【名】『仲仕などの間に用ひらるるより名づく』ふたへまへかけ(二重前掛)に同じ。

ながしまりう 中島流【名】砲術の一派。中島太兵衞長守の創めたるもの。

ながしまりさう 中島力藏【名】〔人〕倫理學者。京都の人。米國の諸大學に學び、業を卒へて歐洲を巡遊して歸り、東京帝國大學の教授となり、文學博士を授けられ、帝國學士院會員となる。大正七年歿す。年六十一。

ながしーめ 流目【名】眼睛(メノタマ)を斜にして見ること、又その目つき。よこめ。斜視。秋波。流眄(ベン)。

ながーしめ 中締【名】中ほどを締めくくること、又その形。薩藩勘「栗毛のたたき鞘、筆形の中締は江州彦根の御大將」

ながーしも 中下【名】中位の階級と下位の階級と。中流と下流と。炭俵素龍「中下もそれ相應の花見かな」

ながーしもち 流鰤【名】冬季、水鳥を捕ふるために、鰤を板などに塗りて、水上に流すもの。名所「水鳥や心の闇の流しもち」

ながーしもと 流元【名】臺所のながしのある所。續猿蓑卷月「驚に手許休めながしもと」四十八癖「猫の顔ほどななしもとを、腐れ次第に暮もあてずさ」

ながーしもの 流者【名】流罪(ルザイ)に處せられたる人。遠島人。配流人。「上下」に同じ。

ながーしやうげ 長上下【名】ながかみしも(長上下)に同じ。

ながーしやうじ 中障子【名】襖又は戸襖の中央に嵌込むやうに造りたる、高さ二尺ほどの障子、又は襖。

ながーしやうじ 長床子【名】長く造り、簀子敷(スノコジキ)にしたる床子。建武年中行事「參議の座は、長床子なり」

ながーしやうしん 長精進【名】百日・千日など日數を定めて、長き間續けてする精進。ながさうじ。蜻蛉「日頃ながしやうじんしつる人の、たのもしげなれば」

ながーしやく 仲酌【名】ながうど(仲人)に同じ。御伽草代紙衣「仲酌する人が、騙者(カタリ)にて」

ながしやく 長尺【名】一物差の一。その一尺が普通のものの一尺一寸五分にあたるもの。二物差の長きもの。

ながーしやこ 長榊樑【名】〔動〕榊樑類の一種。小形にして、殻は長く、五條の隆起著しからず。南方の諸島の近海に産す。

なかしゆ 中衆【名】なかし(中仕)の訛。

代男「その果ては、中衆上荷さんなどと夫婦となりて」

なが-じゆず 長數珠【名】丈をながく造りたる數珠。ながねんず。ほっけじゆず。(手數珠に對して) 萬葉千紅「十月の曹司が谷、花を開く會式の筵、一天、妙法に歸し、百度、神前に至る。首には長數珠を掛け、手に御簀錢を投ず」

なが-じゆばん 長襦袢【名】たけ長く仕立てたる襦袢。

なが-しら 名頭【名】源平・藤橘などの如く、人の姓氏を列記して、兒童に記憶せしむるためにせるもの。

なが-しらは-の-かみ 長白羽神【名】『長は布帛の長き義、白羽は白き布帛の義』日鷲神の御子。蹈を續みて、緑を作ることを傳へたまへり。伊勢國麻續(ヲミ)氏の祖。

なが-じらみ 野胡蘿蔔【名】〔植〕やぶにんじん(藪人參)に同じ。

なが-じり 長尻【名】客に行きて、長坐すること。ながっちり。ながごし。ながね。長坐。萬葉千紅「篝立て草履に炙をするとも千秋萬歳われはながじり」

なかしれとこ-ざき 中知床岬【名】〔地〕樺太の南端東方に位する岬。西能登岬と相對して亞庭灣をなす。もと重藏岬の稱あり。

なか-じろ 中白【名】一上下は黒く、中ほどの白きこと、又その物。關東兵亂記「中白の旗」二矢羽の一。上下兩端は黒く中央の白きもの。(中黒に對して)

なかす 泣かす【動四他】なかしむ。「小供をなかす」

なかす 中洲【名】川中などにある洲。雅有家集「さまざまの中洲のすがたあらはれて沙干の入江水ぞすくなき」

なかず 中洲【名】〔地〕東京市日本橋區濱町三丁目の東南に隣れる町。もと芝居の洲地なりしを、明治二十一年埋築して町とせしなり。根南志具佐「最前蜆取らんとて、中洲まで行きけるが」梅が枝傳賦「根無草で落を取りし中洲三股(マタ)、今は賑かなれば、生醉客が落したる紙入・方褄(カタヅマ)の類があらうも知れずと、水底を探せしに」

なかす 長簀【名】〔動〕ながすくぢら(長簀鯨)の略。〔壹岐國の方言〕

なかす 長洲【名】〔地〕一豐前國宇佐(サ)郡にある町。驛館(ウマヤ)川の河口にあり。二肥後國玉名(タマナ)郡にある町。有明海に臨む。九州鐵道ここを通過し、隣村清里(キヨサト)村に長洲停車場を置く。

なかす 流す【動四他】一ながれしむ。液體を低き方に就きて行かしむ。二浮び行かしむ。漂ひ去らしむ。三血・汗・涙などを滴らしむ。あやす。四流罪に處す。島ながしにす。紀「唯既配流(ケイルセヨ)」古今「隱岐國になかされける時に」五惡き評判を世にひろむ。源氏「かろびたる名をや流さん」六盃などを、順を追ひて巡らしむ。ずんながしむ。歌不「流しつるけこのみわもり數そひてさや田の早苗とりもやられず」七入浴者の肌をこすりて、垢を洗ひ去る。

ながし(流)【名】一參照。八藥物を用ひて、銅又は眞鍮を、他の色に變ず。九質物を、期月來りても請戻さずして、所有の權を棄つ。流質(ナガシチ)にならしむ。十流產せしむ。(胞衣經本地「子はおろさうか。流產(ナガ)さうか」十一三味線を彈きて、街上を巡行す。

ながし(流)【名】八參照。十一參照。浮世風呂「長く居なさんな。息子株ぢやあるめえし、流せばとて、程がある」十二空に飛ばす。(主に風にいふ)〔相模國の方言〕

ながし(流)【名】流して物に引きかく。夫木「さらぬだに波もてゆするあじろ木になかしかけたる宇治の柴舟」盛衰記「大綱・小綱引張りて流し懸けたれば」

ながし 流し遣す【句】流罪に處して配所へやる。伊勢「この男をば流し遣してければ」

ながし 流す罪【句】るざい(流罪)に同じ。紀「壬子詔曰、死刑・炎官・三流(サンルヽ)並除二一等一」

ながすか-ぶし 長須賀節【名】俗曲の節の一。昔、上總國木更津(キサラヅ)邊にて行はれしもの。

なかすぎ 中杉【名】次條の略。

なかすぎはら 中杉原【名】杉原紙の一種。大いさ大杉原に次ぐもの。下野國那須・安藝國廣島・土佐國幡に產す。なかすぎ。

ながすぎまるた 長杉丸太【名】杉の木の長丸太。

ながすくぢら 長簀鯨【名】〔動〕鯨類の一種。體長九丈に達し、鯨類中の最大なるもの。背部は灰色又は白色、腹部は硫黃色、且つ腹部に長櫛あり。下顎は上顎より甚だ大にして長く、好みて鰛を食ふ。肉は食用に供せられ、又は油を採る。

ながすねひこ 長髓彦【名】〔人〕神武天皇東征の時の大和國鳥見(トミ)の酋長。因りて鳥見彦ともいふ。女を饒速日(ニギハヤヒ)命に納れて之に仕へ、神武天皇の師に抗したれど、戰利あらず。饒速日命遂にこれを殺して歸順す。

ながすはう 中蘇枋【名】『なかあおいろ(中藍色)を見よ』蘇枋色の濃淡その中を得たるもの。

ながすびつ 長炭櫃【名】長きすびつ。(「古語」枕「次の間(マ)に、ながすびつに、まなくゐたる人人の」

ながずみ 中墨・中純【名】一建築物・指物(サシモノ)などの中央の部分。中心。二なかずみもの(中墨物)の略。

ながずみ 中澄【名】**なかくみ**(中汲)に同じ。

ながずみ 永住【名】その處に永く住むこと。えいぢゆう。

なかずみもの 中墨物・中純物【名】臺盤の中に盛りたる菓物。なかずゑもの。なかずみ。

なかずり 中剃【名】**なかぞり**(中剃)の轉訛。

なかすゑもの 中居物【名】**なかずみもの**(中墨物)に同じ。

なか-せ 中春【名】**なかく**(仲仕)に同じ。

なか-せ 令泣【接尾】離儀を掛け、困らする意。「親泣かせ」「人泣かせ」

なが-せ 長雨【名】さみだれ(五月雨)を云ふ。〔伊豫國の方言〕

なが-せ 長風【名】夏の土用の中、數日間吹きて、暮前より北風に變ずる風。

なが-せ-かぜ 長瀬風【名】春・夏の頃の風。〔近江國琵琶湖邊の方言〕

なが-せ-がは 長瀬川【名】〔地〕『てんじんがは(天神川)の別稱。

なが-せ-ついん 長雪隱【名】『せついん(雪隱)を見よ』廁に入りて大便をするに長き時間を費すこと。ながぜっちん。風俗文選「長雪隱をする人は、唐様の書を好(ス)く」

なが-ぜっちん 長雪隱【名】前條に同じ。

なか-せん 中錢【名】興行物などにて、木戸錢・下足料などの外、更に場内にて、觀客より取る錢。

なが-せんぎ 長會議【名】會議のために、長き時間を費すこと。平家「一如房が長會議にこそ夜は明けたれ。その房斬れ」太平記「とやせまし斯くやあるべきと長會議して、敵に難所を越されなば」

なか-せんだい 中先代・中前代【名】〔人〕『足利氏より北條氏を指して、先代と稱せしより、時行の兵を擧げて一時鎌倉に據りしにつきて、中の語を冠らせしなり』ほうでうときゆき(北條時行)の異稱。太平記「中前代蜂起の事」

なか-せんだち 中先代の亂【句】後醍醐天皇の建武二年に、北條高時の遺子時行が諏訪頼重父子に奉ぜられて起したる戰亂。七月十四日兵を信濃國に擧げ、進んで武藏國に入り、足利直義(タヾヨシ)を西に逐ひて、鎌倉に入りしが、八月十八日足利尊氏と相模川に戰ひて敗走し、頼重等自殺せり。

なか-せんだう 中山道・中仙道【名】〔地〕『中とは、東海・北陸の二道の中間に位せる意。仙は山の字の呉音に宛てたる字』京都より、近江(この國草津にて東海道と分る)・美濃・信濃・上野の四國を經て、東京に通ずる街道。その間、百三十八里半餘。德川時代には、兩端なる京都三條橋と江戸日本橋とを合はせて、六十九驛とせり。別稱、木曾街道・木曾路・山道(ヤマヂ)。**こうさんだう**(東道山)參照。雜部纂毛「東海・北陸の中間なれば、中仙道と號して、上方筋及び北國道

の往還にして、やなみ、馬借(バシャク)隙なく、何れも清潔にして」

ながぜりふ 長臺詞【名】■長きせりふ。言葉数多きせりふ。■ながこうじやう(長口上)に同じ。

ながそけん 長素絹【名】本式の、長く曳く素絹。(切素絹に對して)

ながそで 長袖【名】■長きそで。■『武士は、鎧著用の時、衣服の袖を括りて短くせしより、これと區別していふ』武家時代に、公卿・僧侶・醫師・學者などの如く、常に袖括をなさぬ衣服を著用しをりし人人。方外。長袖者流。(梁山堅、長袖に勝ってほまれならず」■くげ(公卿)の俗稱。

ながぞなへ 中備【名】先備(サキソナヘ)と後備(アトソナヘ)との中間なる守備。大將の本陣は、この中に在らしむ。中堅。

ながそねこてつ 中曾根虎徹【名】【人】こてつ(虎徹)を見よ。

ながその 中園【名】姓氏の一。本姓は藤原。閑院家に屬す。參議季定を祖とす。子孫相繼ぎて、明治維新後、子爵を授けらる。

ながそのしやうこくじ 中園相國記【名】【書】あんたいりやく(圓太曆)に同じ。

ながそのだじやうだいじん 中園太政大臣【名】【人】次條に同じ。

ながそののにふだうさきのだいじやうだいじん 中園入道前大政大臣【名】【人】さうゐんきんかた(洞院公賢)に同じ。

ながそら 中空【名】■そらの中ほど。中空(チュウクウ)。半空。天半。空中。新古今「中空にたちゐる雲の跡もなく身のはかなくもなりぬべき哉」■中途。半途。後拾遺「道とほみなかぞらにてや歸らまし思へば假の宿ぞうれしき」■事又は心の定まらず落ちつかぬこと。心の落ちつかぬこと。うはのそら。後撰「葛城やくめぢの橋にあらばこそ思ふ心をなかぞらにせめ」■おろそか。疎略。徒爲。女のためにもなかぞらにこそならめ」

なかぞらにっき 中空日記【名】【書】香川景樹の、文政元年江戸より京都に歸る道中の、名古屋に著するまでの紀行文。一卷。

なかぞり 中剃【名】頂髪の眞中をのみ剃り去ること。なかずり。きのふはけふの物語「旦那坊主來る。…中ぞりを賴み申したいとて、髪を洗ひて剃らする」夕霧阿波鳴渡「明けて七つの乳呑まう、饅頭なりの中剃も、目元賢きうなゐ松」

なかぞりはじめ 中剃始【名】德川時代に、男の、七八歳に達して、初めて中剃をなしこと、又その時の儀式。

なかた 中田【名】【地】越中國東礪波(トナミ)郡にある町。般若(ハンニヤ)野の北。

なかた 名方【名】【地】阿波國の舊郡の一。鮎喰(アクヒ)川と八萬(マンダ)川との流域。寛平八年名東(ナカツ)・名西(ナカツ)の二郡に分たる。

なかた 長田【名】【地】越中國東礪波(トナミ)郡にある町。般若(ハンニヤ)野の北。

なかた 長田【名】古(田)の美稱。(古語)紀「以其稻種一始殖二于天狹田及長田一」天(アマ)の長田【句】天上の田の美稱。

なかた 長田【名】【地】遠江國の舊郡の一。和銅二年長上(ナガノ)・長下(ナガシモ)の二郡に分たる。のち合して長上郡となり。明治維新後、濱名郡に合せらる。

なかたあおうだう 永田亞歐堂【名】【人】ながたぜんきち(永田善吉)に同じ。

ながたいがんな 長臺鉋【名】平鉋(ヒラガンナ)の臺を、甚しく長く、大抵一尺五寸ほどに造りたるもの。木材の面を極めてひらたく削るに用ふ。むらぬきがんな。

ながたいこん 長大根【名】(植)もりぐちだいこん(守口大根)に同じ。

ながたいばん 長臺盤【名】臺盤の、長さ八尺に造り、二人以上の料に充てしもの。(切臺盤・小臺盤などに對して)

ながたいふぶし 仲太夫節【名】宮古路(ミヤコヂ)仲太夫の、宮古路豐後掾(ブンゴジョウ)と都太夫一中との語勢を慕ひ、その中間を取りて語り出だせし一種の淨瑠璃節。その節調、一中節と豐後節との中間に在り。

ながたうぐ 長道具【名】槍薙刀(ナギナタ)・大太刀鎌の類の武器。ながぐそく。狂言「若市「尼どもを、大勢語らうて、おっつけ長道具で、抑寄せて參る」

ながたうびは 長唐枇杷【名】(植)唐枇杷の一品種。果實の楕圓形若しくは倒卵形なるもの。

ながたえ 中絕【名】『「中絕ゆ」を見よ』中らひの絕ゆること。絕交。源氏「この昔、おんなかだえのほどは」

ながたか 中高・凸【名】中部の高くして、四邊の低きこと。(中窪(クボ)に對して)

ながたかあみ 中高網【名】揚繰(アゲ)網の一種。全形、通常の手繰網の如くなれども、中央部を特に幅廣くし、且つ袋狀をなす。通常、兩端の幅十二三尋、中央部の幅五十尋なり。鰛(イワシ)・鰯(カタクチ)・鰺(シマ)などを漁獲するに用ふ。

ながたがひ 中違【名】『「中違ふ」を見よ』中らひの、惡しくなること。なかたがひ。不和。絕交。疎。

ながたがひ 蛙長田貝【名】【動】からすがひ(烏貝)に同じ。字鏡「蛙、蚌長狹者、長田加比」

ながたくわんが 永田觀鷺【名】【人】書家。名は忠原、字は俊平。觀鷺は、その號。又、東皐・黎祈道人と號す。京都の人。李北海の門人。傍ら詩を善くす。寛政四年歿す。年五十五。

ながたじんじや 長田神社【名】攝津國神戸市林田村長田に鎭坐せる官幣中社。祭神は事代主(コトシロヌシ)命。神功皇后の攝政元年の創立。俗に「運の神」と稱し、毎月一日、投機商・藝人の競爭ひて參詣す。

ながたぜんきち 永田善吉【名】【人】銅版家・洋畫家。名は可大、善吉は通稱、後、太中と改め、亞細亞・歐羅巴二洲に象りて亞歐堂と號す。姓と名との各一字を取りて、田善(デンゼン)とも稱せり。岩代國の人。初め繪を父の昆山に學び、藩主白河樂翁に召されて、江戸に出で、後、長崎に赴きて、油繪及び西洋銅版術を研究し、萬國全圖・邊海略圖・西洋公園圖・金龍山圖等銅版畫の傑作多し。文政五年歿す。年七十三。

ながたぜんさい 永田善齋【名】【人】儒者。名は道慶、字は平安(平庵とも書けり)。京都の人。初、建仁寺の僧慈稽古洲に詩を學び、後、藤原惺窩(セイカ)・林羅山に學び、羅山に從ひて、駿府に赴き、また紀伊侯の儒官となる。寛文年中歿す。年八十七。

ながたたみ 長疊【名】たけ長く造りたる疊。ながござ(長床)參照。榮花「御堂の有樣、佛いとをかしげにて、錦の端さしたる長疊どもを、西東北南とまはりて敷かせたまへり」

ながたち 仲立【名】■『中に立つ』を見よ』雙方の間に立入りて、事を取次ぐこと、又その人。仲介。[媒]■男女の間に立ちて、關係を結ばしむること、又その人。なかうど。[媒]■うらぎり。內應。起(ヲコ)乃汝應(ナカダチ)之」■(法)他人間に商行爲を媒介すること。

ながたち 仲立するより逆立(サカダチ)せよ【句】仲立するに勞苦多き譬。[諺語]

ながたち 中立【名】■集會の時、その事の終らぬ內に、中途にて座を立ちて、室外に出づること。■茶の湯の會にて、會席の終りたる後、亭主の挨拶によりて、次の濃茶(コイ)手前の始るまでの間、客の一旦茶席を去りて、內待合(マチアヒ)に退くこと。

中立の腰掛【句】『中立■の時、腰を掛くる所とするによりていふ』うちまちあひ(內待合)に同じ。

ながたち 長太刀【名】■中古、儀式に用ひたる、刀身の細くして長き太刀。節會の時、諸衞府の將佐等これを用ひたり。細太刀。[長劍]和名「長刀、唐令云二銀裝長刀一、又云二細太刀一之路加禰都久利乃奈加太知」■近古以來、柄も身も長く造り、鞘なくして撥ひて持運び、戰場にて、後世の薙刀の如く、人馬の足などを薙ぎて倒すに用ひし太刀。柄を細纏などにて、鍔元まで長く巻きしより、長巻の太刀ともいひ、略して長巻ともいへり。■(動)たちのを(太刀魚)を云ふ。[筑前國の方言]

なかだちえいげふ 仲立營業【名】[法]『英 Brokerage』甲・乙兩人の間に立ちて、商業の媒介をなす業。例へば、或商人のために、その見本を持ちて、これが買取人を求め、或は一方に賣手を求め、他方に買手を探して、その二人の間の賣買を取結ばしむる類。仲立業。なかだちにん(仲立人)參照。

なかだちえいげふ-しや 仲立営業者【名】仲立営業をなす者。「人口」に同じ。

なかだち-ぐち 仲立口【名】なかうどぐち(仲立口)に同じ。

なかだち-けいやく 中立契約【名】〔法〕『獨 Maklervertrag』仲立につきて締結する契約。

なかだち-げふ 仲立業【名】〔法〕なかだちえいげふ(仲立営業)に同じ。

なかだち-てすうれう 仲立手数料【名】〔商〕なかだちにんてすうれう(仲立人手数料)に同じ。

なかだち-にん 仲立人【名】㊀仲立をなす人。仲介者。媒介人。㊁〔法〕『英 Broker』仲立営業を爲す商人。商行爲の媒介を爲すものにあらざるが故に、代理商又は問屋と異なりて、他人の代理權を有することなし。我が國にては、もと一定の資格を具へ、官の認可を受け、且つ保證金を納むるを要すと定められたれども、今日にては、取引所仲買人(所謂仲買人)の外は、何人にても隨意に仲立人たるを得るに至れり。ぶろおかあ。

なかだちにん-てすうれう 仲立人手数料【名】〔商〕『英 Brokerage』仲立人の仲立勞務の報酬として、當事者雙方より平分して受くる金錢。仲立手數料。仲立料。「じ。

なかだち-れう 仲立料【名】〔商〕前條に同じ。

なかだつ 中立【名】和船の大立(おほだち)の中に立つる門。

なかだつ 仲立つ・媒つ【動四自】なかだち(媒)をなす。媒介をなす。仲介の勞を執る。

なかたづね 永尋【名】江戸時代に、日限を定めず永くかかりて逃走せる罪人を搜索せしこと。但し六十箇年を經過したる場合には、これを逮捕するに及ばずと定められたり。

なかだて 仲立【名】なかだち(仲立)㊀に同じ。〔古語〕

なかたび 長旅【名】長き月日の間、たびぢに在ること。

なかたに 長谷【名】〔地〕山城國愛宕(をたぎ)郡岩倉村の大字。山間なれども、古より貴顯の別墅有りし處。

なかたに-かは 長谷川【名】〔地〕山城國愛宕(をたぎ)郡長谷にある川。村内の澗水の集れるものにて、高野(たかの)川に注ぐ。

なかたに-とてん 長谷御殿【名】山城國愛宕(をたぎ)郡長谷にありし足利義政の殿邸。

なかたの-おほいらつめ 長田大娘【名】〔人〕なかしひめ(中蒂姫)に同じ。

なかたび 中度【副】事の半ばなる時に。なかごろ。

なかたび 長旅【名】長き月日の間、たびぢに在ること。

なかたん 【名】なかだち(仲立)の訛。〔伊勢國富田の方言〕

なが-だんぎ 長談義【名】長き時の間、談義をすること。長ものがたり。

なかたらし 長足らし【形二】倦怠を覺ゆるほど長し。冗長なり。冗漫なり。なかったらし。

なかたるみ 中弛【名】勢の中頃たるむこと。

なかち 仲子【名】なかちこ(仲子)に同じ。〔古語〕

なが-ち 長道【名】ながみち(長道)に同じ。

なが-ち 長血【名】婦人の生殖器の、緩慢にして治しがたき出血の俗稱。子宮癌肉腫、その他、種種の惡性腫瘍、もしくは子宮筋腫・子宮内膜炎・流産後等に發す。赤帶下(せきたいか)。

なかちがひ 中違【名】なかたがひ(中違)に同じ。

なかちこ 仲子【名】なかっこ(中子)に同じ。〔古語〕

なかちこ 中稚兒【名】中程の年頃の稚兒。(大稚兒・小稚兒に對して)

なかちはのかみ 長道磐神・長乳齒神【名】みちのながちはのかみ(道之長乳齒神)に同じ。

ながぢん 長陣【名】長き間續けて陣取り居ること。長く續く陣。

なかちやう 仲町【名】〔地〕東京市深川區の一部。富岡(とみをか)門前仲町及び富岡門前東仲町の地。富岡八幡宮社前の通路に當り、德川時代には、共に永代寺門前仲町と呼ばれ、その附近一帶に花柳の街として發展し、岡場所の隨一に數へられ、又、水・陸交通の便に富めるため繁昌し、江戸方角に本づきて、辰巳(たつみ)とも呼ばれ、その藝妓は、明治の初までも、新橋・柳橋と並び稱せられたり。里のをだ巻「深川の地は陽氣にして偏らず、船の通路自由にて、新地の名いつとなく古石場の人おのづから和き、道逢者の入船町、遊の道を直助(すぢすけ)屋敷、表櫓(おもてやぐら)・裏櫓・裾續櫓(すそつづきやぐら)・個(ひとつ)櫓新地、中にも土橋・仲町には全盛の君多く、川には船筏を組み、陸には轎夫(かご)の屯をなす」

なかちやう 長帳【名】「長く書きつぐ帳簿の義なりといふ」武家時代に、人夫の數などを記したる帳簿。(著帳に對して)「京下御物送失、任二雜掌申請一無二左右一依レ令二下知一夫多多之間、民之煩尤不便、自今以後申二請人夫之時一、令レ見二知御物多少一、定二人數一可レ載二長帳一也」

なかちやうちん 長提燈【名】筒形に長く造りたる提灯。(丸提燈などに對して)

なかちやうば 長丁場・長丁塲【名】宿場と宿場との間の距離の長きこと。又時間の長くかかる物事。「お前(まへ)の顏色(かほいろ)に、棒組も、仲間の奴等(やつら)も、息杖(いきづゑ)に氣を持たせたる長丁場」

なかつ 中津【名】〔地〕㊀攝洲國西成(にしなり)郡にある町。大阪市の北に接す。㊁美濃國惠那(ゑな)郡にある町。岐阜市を距ること二十一里弱。木曾街道の名驛。中津川を中心として發達せしものにして、今も鐵道中央線の一驛としては、中津川の舊稱を用ふ。㊂豐前國下毛(しもつけ)郡にある町。同國第一の都會。山國川の河口右岸に位し、周防灘に面す。奥平氏の舊藩地。

なかつ 仲津【名】〔地〕豐前國の舊郡の一。明治二十九年京都(きやうと)郡に合はせらる。

なかつ-うちは 中津團扇【名】紋所の一。唐團扇(からうちは)を象(かたど)れるもの。豐前國中津藩主奥平氏の家紋。

なかつ-え 中枝【名】中程の高さにある枝。中間の枝。(上枝(うはえだ)・下枝(したえだ)に對して)〔古語〕

なが-つか 長握・長柄【名】㊀刀の柄(つか)の長きもの。㊁矢束の極めて長きもの。

なかつかさ 中務【名】㊀なかつかさしやう(中務省)の略。(その職員の上にいひ、殊にはその頭につきていふこと多し)㊁〔人平

安朝の女流歌人。中務卿敦慶親王の女。母は伊勢。三十六歌仙の一。中務集の著あり。

中務の御子(ミコ)【句】親王にして、中務卿たるもの。中書王。**なかつかさしやう**(中務省)参照。

中務の宮【句】前條に同じ。今鏡「村上のみかどの末、中務の宮のうまごと」

なかつかさ-きやう 中務卿【名】中務省の長官。なかつかさのかみ。

なかつかさ-しやう 中務省【名】八省の一。庶所は宮城内にあり。天子に侍從して、諸問に應(コタ)へ、詔勅の發行、國史の監修、官人の考課などの事を總理し、又、國國の戸籍、租調帳、僧尼の名籍などの事をも掌りし所。唐制の中書省に相當し、被管に中宮職及び左右大舍人、圖書、内藏、縫殿、陰陽の六寮、畫工、内藥、内禮の三司あり。職員は、長官に卿(カミ)(初は親王と諸臣と交任ぜられ、延喜天曆以後は、親王のみとなり、親王なければ、闕官とせられたり)一人、次官に大輔(スケ)、少輔(ショウ)各一人、丞(ジョウ)に大丞一人、少丞二人、錄(サカン)に大錄一人、少錄三人、及び史生(シジョウ)三人、その他、被接に侍從八人、内舍人九十人、大中少内記各二人、大監物二人、中少監物各四人、史生四人、大少主鈴、大少典鑰(テンヤク)各二人。文官なれど、皆帶劍せり。なかのまつりごとのつかさ。なかのまつりごとするつかさ。なかつまつりごとするつかさ。なかのつかさ。なかつ。

なかつかさ-の-たいふ 中務大輔【名】〔人〕『その父藤原永繼の職名によりていふ』次條を見よ。

なかつかさ-の-ないし 中務内侍【名】〔人〕平安朝時代の女流歌人。宮内卿藤原永經の女。初、父の職名により、中務大輔と稱せしが、伏見天皇の時、内侍に敍せらる。中務内侍日記の著あり。

なかつかさのないし-にっき 中務内侍日記【名】〔書〕中務内侍の、弘安三年より正應五年まで、禁中に奉仕して見聞せしことを假名にて記したる日記。一卷。

なかつかさ-の-みこ 中務の御子【句】なかつかさ(中務)の條下を見よ。

なかつかさ-の-みや 中務の宮【句】なかつかさ(中務)の條下を見よ。

なかつがは 中津川【名】〔地〕■大和國吉野郡にある地。太平記「大塔宮熊野落の事、中津川の峠を越えんとしたまひけるところに」■**なかつ**(中津)■を見よ。日本行脚文集「尾州への追分、中津川に假寢して、美と信との蟹橋、馬籠(マゴメ)村を過ぎ」

なかつ-がは 中津川【名】〔地〕■攝津國西成(ナリ)郡にありし川。淀川の分流。豐崎村北長柄(ナガラ)にて分れ、西南に環流して、大阪市北區の西端に來り、一派を分ちて安治(ヂ)川に通じ、西流して南傳法(ンデンポフ)、北傳法の二流となり、西南流して、大阪灣に入りしもの。淀川改修工事の結果、今の新淀川となれり。一名、長柄川。**なかじま**(中島)■參照。蓼太「ここはいづくぞと問はせ給ふ。…これは長柄となん申すといふほどに、その橋はありやと尋ねさせ給へば、候ふ由申す。御船とどめて御覽すれば、ふるき橋の柱ただ一つ殘れり。…中津川といふ所におはしましぬ」若風俗「中津川の舟渡を越えて、北中島の宮の森に駕籠を立てさせて」■**やまくにがは**(山國川)に同じ。

なかつ-がひ 中使【名】雙方の中間に立ちて、その意を傳ふるもの。重修本草「主ある妾に執心かけ、度度の狀文…中使の下女に暇遣たれば、兄の不義の使に、妹の乳母が來たさうな」生玉心中「商物の請取なら買主の手へ渡りさうな物が、中使の手に握ってゐるとはの」

なが-づかへ 長仕【名】交替せずして、當直すること。ひらづめ。長上。

ながつか-まさいへ 長束正家【名】〔人〕**なつかまさいへ**(長束正家)を見よ。

なかつ-かみ 中津神【名】〔動〕『陰陽家の謂はゆる八將神の一なる豹尾神は、中央に位せるよりいふ』**へう**(豹)に同じ。〔古語拾遺〕

なかつかる 中津輕【名】〔地〕陸奥國九郡の一。郡役所を清水(シミヅ)村に置く。

なかつぎ 中次。中繼【名】■仲立をして取次ぐこと、又その人。■幼年なる相續者の生長するまで、その家督を繼ぐこと、又その人。■三味線の棹又は尺八の管などの、中間を切りて繼合はするやうに作れるもの、又その繼合はせたる部分。■抹茶の茶入の形の一。蓋(フタ)と身と中央にて相合ふもの。

なが-つき 長月【名】陰暦九月の異稱。〔古語〕奈良「ながつきはいむにつけても慰めつあきはつるにぞ悲しかりける」

長月の念佛【句】陰暦九月十三日より三日間修する念佛。蓼太「長月の御念佛に、院に一品の宮渡らせたまふ」

ながつき-ぐさ 長月草【名】〔植〕きく(菊)■に同じ。

ながつき-さう 長月草【名】〔植〕前條に同じ。

ながつき-ばな 長月花【名】〔植〕前條に同じ。

なが-づきん 長頭巾【名】■頭巾のしころの長きもの。保元「柿の御衣の煤けたるに、長頭巾を卷きて」■「昔、醫師の長頭巾と共に著用せしものなるよりいふ」**ながばかり**(長羽織)に同じ。「江戸時代の語」

なかつ-くに 中國【名】中にある國。中央の國。〔古語〕記「葦原のなかつ國」

なかつ-くびれ 中括【名】**なかくびれ**(中括)

なが-づくゑ 長机【名】普通のよりも長く作りたる机。一代男「四尺の長机に、書院硯・筆掛・香箱さまざまの唐物道具」

なが-づけ 長漬【名】大根をまるのまま漬けたる香の物。〔京都・大阪の語〕

なかつこ 中子【名】三人ある兄弟のうちの中の息子。なかちこ。なかち。〔古語〕記「中子、ナカッコ」

なかつ-じやう 中津城【名】豐前國下毛(シモ)郡中津町の西北に在りし城。天年十六年黒田孝高の築きしもの。後、小笠原長次の居城となり、尋いで奥平昌成これに居りて、子孫相傳へ、明治維新後、廢城となれり。

なかつ-すめらみこと 中天皇。中皇命【名】『先帝の崩後、太子の政を親らせらるるまで、中間を繼承して、一時朝に臨まるる意にて呼び奉りしものなるべしといふ』奈良朝時代に、女帝の或方に對して用ひられし稱呼。〔古語〕萬葉「天鳥遊二廻内野一之時、中皇命(ナカノスメラミコト)使二間人連老(ハシヒトノムラジノオユ)一獻歌」同「中皇命(ナカノスメラミコト)往二于紀伊温泉一之時御歌」

なかつ-せ 中瀨【名】中の瀨。(上(カミ)つ瀨・下(シモ)つ瀨に對して)記「初めて中つせにおりかづきて滌ぎたまふ時に」

なかっ-せば 無かっせば【句】なし(無し)の條下を見よ。

なが-ったらし 長ったらし【形二】ながたらし(長たらし)の音便。

なが-っちり 長尻【名】ながじり(長尻)の訛。

なが-つづき 長續・永續【名】長く續くこと。久しき間續くこと。永續(エイゾク)。

なかつつのをの-みこと 中筒之男命【名】海中の船路を守る神。伊弉諾(イザナギ)尊の御子。(上筒之男命・底筒之男命に對して)

なが-づつみ 長堤【名】長く續きたるつつみ。ながどて。長堤(チヤウテイ)。續猿蓑(仙蛙)「癌寒や山伏村の長づつみ」

なかつづな 中綱【名】綱捌車(クツナさばき)などの、その中ほどの綱、又それを捉く人。(先綱・元綱などに對して)福山鹿「本綱・中綱、きやりてうえ」

なかつ-つに 中土【名】中の土。中ほどにある土。(初土(ハツ)・底土(ソコ)に對して)〔古語〕記「しはにはにぐろきゆる三栗のそのなかつにを」

なかつひめの-みこと 仲姫命【名】〔人〕應神天皇の皇后。品陀眞若(ホムダマワカ)王の女。仁德天皇の御生母。

なかつぼ 中壺【名】なかには(中庭)に同じ。

なが-っぽそし 長細し【形一】ながほそし(長細し)の音便。

ながつぼね 長局【名】宮中又は大名の御殿の中にて、局の數多一棟に連なりたる所。江戸幕府時代、江戸城内にては、大奥の東北隅に四棟を成して存し、年寄・上臈(ジヤウラウ)等重き女房は、各一室に住したり。つぼねまち。

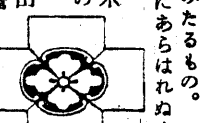
なかつ-まつりごとするつかさ 中務省【名】**なかつかさしやう**(中務省)に同じ。

なかつまつりごとをするつかさ 中務省【名】なかつかさしやう(中務省)に同じ。

なかつまど 中妻戸【名】中仕切としたる妻戸。夫木「あひ見ての後のつらさの中つま戸押せどもあけぬおとしたてかな」

なかづみ 中積【名】㊀荷などを、中程の處に積むこと、又その積みたるもの。㊁煉瓦を積上ぐる時、外側にあらはれぬもの。なかぶせ。

なかつもくかう 中津木瓜【名】紋所の一。下の圖を見よ。


(うかくもつかな)

なかつやまのき 中津山柵【名】〔地〕阪上田村麿將軍の、蝦夷に備ふるために、今の陸奥國桃生(モヽフ)郡中津山村に設けし柵。

なかつやまのみささぎ 仲津山陵【名】應神天皇の皇后仲姫命の御陵。河内國南河内郡道明寺村大字澤田にあり。「じ。

なかつよ 中世【名】ちゆうせい(中世)に同

なかづら 中づら【名】三人あるうちの中のむすめ。〔陸前國仙臺の方言〕

なかづり 中釣【名】蚊屋の釣手の、四隅以外、なほ中途にも取附けたるもの。

なかつるれいし 長蔓荔枝・長苦瓜【名】〔植〕蔓荔枝の一品種。果實の形の著しく長きもの。

ながつろ 長津呂【名】〔地〕伊豆國賀茂(カモ)郡南崎村の大字。石室(イハヤ)岬の東側に小港をなす。港口東南の風を受けて、舟泊に便ならず。

なかつわたつみのかみ 中津綿津見神【名】海を司る神。伊弉諾(イザナギ)尊の御子。(表津綿津見神・底津綿津見神に對して)

なかつをぢ 中小父【名】ちゆうふ(中父)に同じ。(兄小父(エヲヂ)・弟小父(オヲヂ)に對して)〔古語〕和名、仲父。奈良津乎遲」

なかて 中手【名】㊀早稻(ワセ)と晩稻(オクテ)との間にみのる稻。「中稻」㊁はしりの後、おくての前に出づる蔬菜。㊂圍碁にて、目を缺くために、中へ打込む石。國姓爺合戰「四つ目殺しに、中手を入れて」中手の稻【句】中手なる稻。夫木「わがまもるなかての稻のぎは落ちてむらむら穗先出でにけらしも」

なかて 長手【名】㊀ながち(長路)に同じ。〔古語〕萬葉「ぬば玉の夜べは歸しつこよひさへわれを歸すな道のなかてを」㊁長みあること。

なかづう 中條【名】〔地〕越後國北蒲原(カンバラ)郡にある町。新發田(シバタ)の北四里。

なかてそう 長手層【名】煉瓦の横面の長き方を重ねて積みたる水平層。(小面(コヅラ)層に對して)

なかてん 長點【名】㊀たけ長き點。㊁和歌・俳諧などの秀逸なるものにかくる點。なが。**ひらてん**(平點)參照。松屋叢話「長點といへるは、いとやんごとなき秀歌にのみものせさせたまふなりけり。……題詠の歌には長點をせさせられ、事書(コトガキ)の歌には褒詞あるならはしなりとぞ」㊂最もよきもの。松風村雨東帶鑑「使ひころよし、乳も若し、若宮のお乳の人長點なり」

なかど 中戸【名】㊀二つの間(マ)の中仕切なる戸。參考中戸をたてて、ひんがしの方には北の方、西には中納言と、いとうとうとしうて」㊁中の間の戸、又それのある所。百日曾我「青梅すきやらば、惡阻でござろ、めいよな不思議や、中戸のかねどが、はや七月とぞ答へける」

ながど 長門【名】㊀〔地〕『海峽の名、あなど(穴門)の轉訛にして、形、穴のごとく狹き水門を成せる意』山陽道八國の一。下關(モン)市と厚狹(サ)・豐浦(ラ)・大津・美禰(ネ)・阿武(ア)の五郡とに分れ、行政上、山口縣の一部を成す。古稱、穴門(アナト)。長州。㊁ながとづつ(長門筒)の略。

ながどいんろう 長門印籠【名】昔時、長門國にて製出したる漆塗の印籠。重帷子「十二の違ひは丁度好い似合頃、まあ二三年して顏も直し、脇つめたら、しっくりの長門印籠」

ながとうぐわ 長冬瓜【名】〔植〕冬瓜の一品種。實の形殊に長大にして、外皮は白粉なく滑かなるもの。九州地方にて栽培す。

ながとうし 長門牛【名】長門國に産出する牛。嬉遊笑覽「長門牛・奥州金・備中鐵」

ながどうりう 長逗留【名】長らくの間、同處に逗留をること。

ながとおもだか 長門澤瀉【名】ちやじろおもだか(長州澤瀉)に同じ。

ながときん 長頭巾【名】形は普通のと異ならずして、高く峙つやうに造りたる頭巾形(ナリ)。螺髪(ラホツ)に象(カタ)りたるものを螺髪形といふ。滿字に象りたるものを滿字形といふ。

ながとくみ 長門組【名】井籠(セイロウ)横木を結ぶに用ふる繩のからげ方の一。松平大膳太夫の家傳とせしもの。

ながとけいごばん 長門警固番【名】鎌倉幕府の職制の一。外寇に備ふるため、山陽・南海二道の地頭御家人等が、建治の初より課せられて、長門國の要害を警固せしもの。長門探題の配下に屬す。長門國警固番。

ながとこ 長床【名】板敷の上に、一段、座を高くして、長く疊を敷きたる處なるべしといふ。〔古語〕中右記「聽衆著二長床座一」

ながとごしょ 長門御堂【名】長門探題の造りざま、廂の方に廻りて、寺房のながどこのやうに、疊一敷しくばかりの程、長押(ナゲシ)の高さ四寸ばかりあげて造りて、それに、錦の端さしたる長疊どもを、西東北南とまはりて敷かせたまへり」

ながところ 長野老・山草藤【名】〔植〕えどころ(江戸野老)に同じ。

ながとしごご 長門守護【名】ながとたんだい(長門探題)に同じ。

ながとしごだい 長門守護代【名】ながとたんだい(長門探題)に同じ。

ながとだて 中戸立【名】和船の中央に設けて隔壁とする仕切板。

ながとたんだい 長門探題【名】室町幕府の職制の一。鎌倉時代の長門守護の、漸次その職權の擴張せられしもの。もと長門一國のみの事を預かり聽きしが、後には、管所は舊に依りて長門に在りながら、中國に於ける訴訟・檢斷・土貢の事を掌り、又鎭西に策應して、外寇防禦の備をも預かり聽くに及び、守護代として、吏務に長ぜる者を擧げて代官として、その事を攝せしめ、同時に、守護を探題と改め、又中國探題とも呼べり。太平記「長門の探題上野介時直」

ながとづつ 長門筒【名】『もと長州藩士の內職に作りしよりいふ』標管筒の一種。紙捻(コヨリ)を編みて作り、これが表には多くは漆を塗りたり。ながと。

ながとて 長土手【名】ながづつみ(長堤)に同じ。新永代藏「淀堤(ヨドヅツミ)を御普請を請負ひ、……四十八丁の長土手を築(ツ)く。これを奉行するに、何ほど駈けあるきても、隅隅に目の屆くものにあらず」

ながとの 長殿【名】ながぐら(長倉)を見よ。堀文「長殿の常陸の御倉開きあけよ今日みつぎもの納めみつべく」

ながとのくにけいごばん 長門國警固番【名】ながとけいごばん(長門警護番)に同じ。

ながとのーせき 長門關【名】〔地〕長門國にある名所。文安百首「身のはてもゆかしかりけり今はただ命ながとのせきすゑて」

ながとのーくわんばく 中殿關白【名】〔人〕ながのせっしやう(中攝政)に同じ。

ながとのね 長殿居【名】長らくの間、うち續きて、宿直すること。今昔「東三條殿に、長宿直に召上りて、とのゐ終りて、暇賜はりて」

なかーとぼし 中通【名】尺八の竹の裏を拭ひ清むるに用ふるもの。

ながとぼし 長門星【名】紋所の一。三星(ボシ)の上に一文字を加へたるもの。長門藩主毛利氏の家紋。

ながとぼん 長門本【名】〔書〕灰條の略。

ながとぼん-へいけものがたり 長門本平家物語【名】〔書〕長門國の阿彌陀寺に傳はりたる平家物語。文句、普通の平家物語とは大いに違ふ所あり、且つ普通本に載せざる記事多く、延慶本と共に、詳略の度に於て普通本と源平盛衰記との中間に位す。二十卷。

なかーとぼり 中通【名】㊀道路の、本通(ホンドホリ)と裏通(ウラドホリ)との間にあるもの。〔仰通〕「東京日本橋區東仲通」㊁上等にても

下等にてもなきこと。普通の品位。中等。㊁『大夫と庶懇(ヒコ)との中間に位せしよりいふ』てんじん(天神)に同じ。

なかとほり-しま 中通島【名】〔地〕肥前國にある同國第一の大島。周回、六十二里餘。別稱、東島。

なかとみ 中臣【名】『代代朝廷の祭祀を掌りしより、神と人との中を取持ちて和ぐる意にて呼ばれしものといふ』姓氏の一。天兒屋(コヤネ)命の後裔。姓(カバネ)は連(ムラジ)なれど、無姓なるもあり。鎌足の時に至り、同族藍美麿(マロ)・大島等と共に藤原姓を賜はりしが、文武天皇の朝、意美麿等、神事に供奉するによりて、原姓中臣に復し、意美麿の子清麿の時、大中臣朝臣の姓を賜はり、その後も、他の中臣氏に大中臣朝臣の姓を賜ひしこと數回に及び、神祇官及び伊勢・春日・鹿島・香取等の神事に預る者、近世に至るまで、大中臣・中臣の二氏より補任せられしこと多く、代代伊勢の祭主たりし藤波(子爵)、大神宮司たりし河邊(男爵)、常陸の鹿島、下總の香取の諸氏、皆その支流にして、神道家ト部(ウラ)氏もこれと同族なり。ふぢはら(藤原)㊁參照。

なかとみ-かつみ 中臣勝海【名】〔人〕朝臣。敏達天皇の御宇より佛法の漸く世に行はるるや、大連物部守屋と共に佛を排して蘇我馬子と爭ひ、用明天皇の佛に歸せんとし給ふを諫めて、蘇我氏の黨に殺さる。

なかとみ-かまこ 中臣鎌子【名】〔人〕㊀欽明天皇の御代の執政。眞人(ヒト)の子。同十三年百濟王佛像經論を獻ず、大臣蘇我稻目大いにこれを崇拜せんとせしとき、大連(オホムラジ)物部尾輿(ヲコシ)と共に、大いに其の非を鳴らし、遂に帝に奏して、佛像を難波江に投じ、寺を火かしめたり。㊁ふぢはらのかまたり(藤原鎌足)を見よ。

なかとみ-みつぼし-にいち 長門三星一【名】ながとほし(長門星)に同じ。

ながとみつぼし-にいちのじ 長門三星一字【名】前條に同じ。

ながとみ-てらやう 永富朝陽【名】〔人〕儒醫。名は鳳、通稱は昌庵。朝陽はその字。獨嘯庵と號す。長門國豐浦の人。醫業を山脇東洋に、儒を山縣周南に學ぶ。又、始めて砂糖を製す。明和三年歿。年三十五。

なかとみ-でら 中臣寺【名】古、大和國添上郡に在りし中臣氏の氏寺。天武天皇の時、中臣氏の祖大連(オホムラジ)國子の子國足(鎌足の從弟)の建立せしもの。一名、法光寺。藤原寺。是爲、新二淨見原天皇萬歳一建立者」色葉字類抄「天武天皇御宇、中臣寺、

ながとみ-どくせうあん 永富獨嘯庵【名】〔人〕ながとみてうやう(永富朝陽)に同じ。

なかとみ-の-はらひ 中臣祓【名】〔書〕大月・十二月の大祓に神前に申告する祝詞。一卷。

なかとみのはらひ-こぎ 中臣祓古義【名】〔書〕中臣祓を卜部家にて常磐(トキハ)大連(鎌足の曾祖父)の作なりといひ、また出口延佳(ノブヨシ)・山崎垂加等が天種子(アメノタネ)命の作なりといへる說の誤なるを辨じ、祓の詞と祝詞(ノリト)・壽詞(コトホギ)等との同じからざるを論じたるもの。三卷。松崎義兄(ヨシエ)の著。

なかとみのはらひ-みづほせう 中臣祓瑞穗抄【名】〔書〕伊勢の八木但州といふ人のために、中臣祓を講義せるもの。二卷。出口延佳(ノブヨシ)の著。

なかとみ-のよごと 中臣壽詞【名】〔書〕台記別記・康治元年十一月大嘗祭記の中なる中臣壽詞を抄錄したるもの。一卷。

なかとみ-ばらひ 中臣祓【名】「中臣の祓」に同じ。遷步色葉集「中臣祓、ナカトミバラヒ」

なかとみめ 中臣女【名】「節折(ヨナ)の命婦」に同じといふ。〔古語〕

なかーとり 中鷄・中雞【名】にばんどり(二番鷄)に同じ。袖中抄「曉には初鳥・中鳥・しは鳥とて三しきり鳴くに」

なかーとり 中取【名】次條の略。〔古語〕和名抄、今案、俗所謂中取是也。身し食器也」

中取の案(エク)【句】古、飲食の具を置き、また疊錦を積む等に用ひし机。二層より成り、置きたる物のまろび落ちざらんために、高欄を附けたり。延喜式「中取案二十四脚」

なかーとり 中取【名】㊀雙方の間に居て、橫取すること。生玉心中「中取したと思はれては出入がならぬ」㊁女髮結の助手にて、下梳(シタクシ)よりは上なるもの。

なかとり-め 中臣女【名】よをりのくらうど(節折藏人)に同じ。〔古語〕

なかーどろ 長瀞【名】㊀長距離の間つづける瀞。㊁〔地〕武藏國秩父(チチブ)郡野上村なる荒川の上流に、奇石怪岩聳立して急流をなせる勝地。一に秩父赤壁の稱あり。

なかーなうれん 長暖簾【名】ながのれん(長暖簾)に同じ。

なかーなえ 中萎【名】㊀勢力の中頃衰ふること。㊁遊女の舊き情人を疎じて、新に好もしき人に馴くこと。色道大鏡「なかなえ、大かたよき女郎を仕込みおきたるところに、珍しき男かかりて、その方へ心移り、なじみの方薄くなる樣の貌をいふ。又、脇へ心は移らねども、何ぞ憑むることも有るか、疑はしく思ふ心にて、まはりくち違ひ、よろづ扣ふる體に見ゆるをもいふ」

なかなか 中中【副】㊀なかなかに(中中に)㊁に同じ。〔古語〕源氏「なかなかなる事を打出でて、いかに思すらん」同「世のうけひくまじき事なれば、なかなか危くおぼしはばかりて」㊁たやすくは。容易には。いかにしても。下に打消の語を伴ふ)謠曲(鉢木)「我等夫婦さへ住みかねたる體にて候ふほどに、中中御宿は思ひも寄らぬ事にて候ふ」㊂容易ならぬほど。一とほりならず。可なりに。よほど。隨分。奥田上郡は、給所給所の入組にて、地割なかなかむづかしし」㊃言ふまでもなく。いかにも。もちろん。〔足利時代の語〕謠曲(鉢木)「急いで御前へ御參り候へ、何と、某に御前に參れと候や。中中の事」狂言(禁野)「剩いだ物は、兩人して配分致さう。なかなかその通でござる。いざ參らうか。なかなか參らう」

中中でも無い【句】是認し難し。容易ならず。以ての外なり。〔足利時代の語〕狂言(櫻靭)「なかなかでもない事を云ひをる」

中中の事【句】尤ものこと。しかあるべき事。きのふはけふの物語「合點の行かぬ所に附けて、後に師匠に問ふために附ける。それによりて不審紙といふ。女房聞きて、中中の事ぢや、おれも不審があるとて、紙を少し引裂きて、つぼきを附けて、男の鼻の先に、ひたと附ける」

なかーなが 長長【貌】極めて長きさま。源氏「ながながと聞えたまへば」狂言(長光)「ながながの在京仕り」長町女腹切「ながながの憂き苦勞」

なかーなが-し 長長し【形二】甚だ長し。甚だ久し。後撰「たれ聞けど聲たかざにさを鹿の長長し夜をひとり鳴くらん」

なかなか-に 中中に【副】㊀なまなかに。なまじひに。却りて。なかなか。〔古語〕萬葉「なかなかに絕ゆとしいはばかくばかりいきのをにしてわが戀ひめやも」俳諧古選追加「來山」「なかなかに火燵が明いて寒さかな」㊁なかなか(中中)㊂に同じ。〔足利時代の語〕狂言(法師物語)「それは誠か。なかなかに」

ながなき 長泣【名】小供の永く泣止まざること。

ながなき 長鳴長啼【名】鷄などの長く鳴き止まざること。

長鳴の鳥【句】次條に同じ。夫木「庭火たくとこよにありし長鳴の鳥の音聞けば明けぬこの夜は」

ながなき-どり 長鳴鷄【名】〔動〕「常世(トコヨ)の長鳴鳥」を見よ。

なかーなげ 中投【名】茶器に湯をさして、茶を入れたる後、更に湯をさすこと。

ながなす 長茄・水茄子【名】〔植〕茄子の一品種。實の形細長きもの。質軟かなるを以て、煮て食し、又鹽漬となすに適す。

ながなすび 長茄・水茄子【名】〔植〕前條に同じ。

ながなだ 長灘【名】長く續けるなだ。

ながなはて 長繩手【名】長く續ける繩手。淀鯉出世灘鑑「初明月や一口、堤づたひの長繩手、續く里里・山山も」

なかなほし 中直【名】■『中を直す』を見よ』中直(ナカナヲ)をなしむること。■美濃紙の一種。中形なるもの。じやうみの。

なかなほり 中直【名】■『中直る』を見よ』破れたるまじはりの、再び結ばるること。和睦。和解。俳諧古選「奇因」抱籠や一年ぶりの中なほり」■病の、中途にて一度快くなること。

なかなほる 中直【動】中直の出來た敵に油斷すな【句】人の心は分らぬものなれば、一旦中直したりとも、油斷すべきにあらず。「諺語」

なかなり 無かなり【句】なし(無し)の條下を見よ。

なかなり 長鳴【名】長き間續けて鳴ること。保元「御所中に響いて長鳴し」

なかなる 中馴る【動下二自】半ばふるびたり。中くらゐにふるびたり。今昔「伊勢の御息所(ミヤスドコロ)へ、伊衡(コレヒラ)の行きたる所、四尺の屏風の中馴れたる」

なかに 中に【句】なか(中)の條下を見よ。

なかにい 中兄【名】なかあに(中兄)に同じ。「俚語」「中にいさん」

なかにげ 長逃【名】遠く逃げゆくこと。甲陽軍鑑「敵・味方共に、己が在所在所へ長逃(ナガニゲ)致したる者、一そなへに二人・三人づつこれあり」

なかにし 中西【名】亥の方より吹く風。

なかにし 長辛螺・香螺【名】【動】腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。介殻長くして、螺層多し。外面粗糙にして淡黄褐色を呈す。肉食性にして、夏季海底の岩石・介類に産卵す。卵は扁圓形の卵胞に包まる。これを倒酸漿(サカサホホヅキ)といひ、海酸漿に似て非なり。我が國西南の海に産す。ながにしがひ。

なかにし-かうせき 中西耕石【名】【人】畫家。名は壽、別に竹叟と號す。京都の人。小田海僊に學び、山水を最も得意とす。明治十六年歿す。年七十二。

なかにし-がひ 長辛螺【名】【動】ながにし(長辛螺)に同じ。

なかにだん 中二段【名】【語】【句】【語】次條に同じ。

なかにだん-くわつ 中二段活【名】【語】次條の略。

なかにだんくわつよう 中二段活用【名】【語】かみにだんくわつよう(上二段活用)に同じ。「の條下を見よ。

なかに-ついて 中に就いて【句】なか(中)の條下を見よ。

なかに-つきて 中に就きて【句】なか(中)の條下を見よ。

なかには 中庭【名】一棟に造りたる建物と建物との間の庭。なかつぼ。うちには。

なかにひかは 中新川【名】【地】越中國八郡の一。郡役所を滑川(ナメリカハ)町に置く。

なかにひだ 中新田【名】【地】陸前國加美(カミ)郡にある町。郡役所を置く。一關別街道の衝に當る。

なかぬき 中抜【名】■中なる物を狀取ること。中より取去ること。うろぬくこと。■なかぬきざうり(中抜草履)の略。蜀山人「ほととぎすなぜなか抜の上草履ちをはくことのいやでこそあれ」 八笑人「ひやめし草履と中ぬきと、片方ちんばにはいて」

なかぬき 中貫【名】■和船の貫(ヌキ)の一。艙床(コバ)と船梁(ハリ)との間にあるもの。■女鞋の一。

なかぬきざうり 中抜草履【名】表は藁しべなどにて造り、緒は藁にて白紙を卷きたるもの。あはざうり。すべざうり。

なかぬきだいこん 中抜大根【名】うろぬきだいこん(虚抜大根)を云ふ。「畿内の方言」

なかぬき-ぶすま 中抜襖【名】中央を中障子(ナカジシ)にし、これに紗・綾(ヤ)などを張りたる襖。

なかぬき-ふなばり 中貫船梁【名】檣床(ヨコ)と船梁との間にある船梁。

なかぬひ-そ 中縫麻【名】逆頬麻(エサカラ)の背部に綾取りて掛渡したる緒。はたて。

なかぬま 長沼【名】【地】■岩代國岩瀬(イハセ)郡にある町。會津(アヒヅ)・白川間の一要地なりしが、岩越鐵道の開通後衰ふ。蘭雄を産す。■下野國芳賀(ハガ)郡にある町。

なかぬまーたんさい 長沼澹齋【名】【人】ながぬまむねよし(長沼宗敬)に同じ。

なかぬまーむねまさ 長沼宗政【名】【人】武將。小山朝政の弟。五郎と稱す。鎌倉幕府に仕へ、下野國長沼の地を食み、因て氏とす。源範頼に從ひ、平氏を討ちて功あり。東海十五國不法の徒の鎭撫を命ぜらる。延德二年歿す。年七十九。

なかぬまむねよし 長沼宗敬【名】【人】兵法家。長沼流の祖。信濃國松本の人。澹齋と號す。甲州流の兵法を學び、加納城主戸田光重に仕へて近侍となり、祿百石を食む。後意合はず、去つて筑後國主有馬賴利に仕へ、寛文八年辭す。無要錄二十二卷を著はし、長沼流兵法として稱せらる。元祿三年歿す。年五十六。

なかぬまーりう 長沼流【名】兵法の一流派。長沼宗敬(ムネヨシ)が和・漢の兵學を參酌して創めたるもの。

なかぬり 中塗【名】壁・漆器などにて、下地の次、上(ウハ)塗の前に塗ること。(上塗・下塗に對して) 鳩翁道話「壁は、中塗の切返(キリカヘ)し」

なかね 中直【名】■買値と賣値との中間の値段。■平均したる値段。

なかーね 長寢【名】長き間寢ぬること。一代女「晝前まで長寢をして、何を身過とも知れず」

なかねいちうん 中根一雲【名】【人】槍術家。富田流の祖。富田牛生に學びて奥儀を得、これに新意を加へて、中根流を創む。

なかねげんけい 中根元圭【名】【人】和算家。名は璋、通稱を丈右衞門といひ、律襲と號す。近江國の人。江戸に出でて建部賢弘の門に學び、のち京都の銀座役人となり、白山に住す。世に白山先生と呼ぶ。享保十七年公命を受け、伊豆下田に於て、初めて太陽及び太陰と地球との距離を測量す。翌年歿す。年七十二。著書十數種あり。「じ。

なかねーしやう 中根璋【名】【人】前條に同じ。

なかねだいこん 長根大根【名】【植】はたのだいこん(秦野大根)を云ふ。「京都の語」

なかねーとらう 中根東里【名】【人】儒者。名は若思、字は敬夫。貞右衞門と稱す。伊豆國下田の人。江戸に住む。初僧となりて、傍ら物徂徠に學び、還俗して後、室鳩巢に學び、晩に專ら王陽明の學を奉ず。明和二年相模國浦賀に歿す。年七十二。東里文集二卷あり。

なかねばう 長寢坊【名】長寢する人、また長寢すること。

なかーねん 長年【名】ながき年月。

なかーねんず 長念珠【名】ながにゆず(長數珠)に同じ。盛衰記「相國は、尻切(キレ)はき、長念珠後手に取つて」 太平記「高遠は、長念珠を爪繰りて、以大神通力方便力、勿令墮在惡趣と、高らかに啓白(ケイビヤク)して」

なかねんぶつ 長念佛【名】長く續けてする念佛。盛衰記「その夜から御隱居に專修派の長念佛申し出だされ」

なかねゆきえ 中根雪江【名】【人】福井藩の志士。名は師質、通稱は靭負(ユキヘ)。平田篤胤に學ぶ。嘉永六年海防の議を進べ、慶應四年參與職に拜す。昨夢記事の著あり。明治十年歿す。年七十一。

なかねりう 中根流【名】■槍術の一派。中根元圭の傳統に、一時名づけたる稱。■關流の算家。中根一雲の創めたるもの。

なかの 中野【名】【地】■武藏國豐多摩(トヨタマ)郡にある町。淀橋町の西に連接す。■信濃國下高井郡にある町。千曲(チクマ)川の東。長野市の東北五里。郡役所あり。

なかの 長野【名】【地】■四十三縣の一。信濃國全部を管し、縣廳を長野市に置く。■信濃國にある市。長野縣廳の所在地。北國街道の要衝に當り、善光寺あり。鐵道信越線の一驛たり。「を見よ。

なかの-あき 仲の秋【句】なか(中)の條下を見よ。

なかの-うみ 中海【名】【地】出雲國島根半島と伯耆國夜見濱(ヨミハマ)半島との間に在る海。美保(ミホ)灣と宍道(シンジ)湖とに通ず。別稱、名和浦・米子灣浦。

なかの-え 中え中ひ【名】『伊呂波歌の中にて、「え」は、同音に發音せらるることある「へ」と「ゑ」との中間にあるよりいふ』「え」の字を「へ」と「ゑ」とに區別していふ稱。

なかのおほえ-の-わうじ 中大兄皇子【名】【人】てんぢてんわう(天智天皇)を見よ。

なかのおほともひ 中辨【名】ちゅうべん（中辨）に同じ。（大辨（オホトモヒ）少辨（スナイオ）に對して）和名「中辨。職員令云、左右中辨、奈加乃於保止毛比」「下を見よ。

なかのおよび 中の指【句】なか（中）の條

なかのがう 中之鄉【名】〔地〕■東京市本所區の一部。横川の西に當りて、北割下水（ワリゲ）の南北に亙り、中之鄉元町・中之鄉八軒町・中之鄉竹町・中之鄉原庭町・中之鄉瓦町・中之鄉業平町・中之鄉横川町及び向島（ムカフジマ）中之鄉町に分たる。古は附近に上之鄉・下之鄉の名稱もありきといふ。梅鷺、柾木（マサキ）の垣もまばらなる、外は田畑の薄氷、心解合ふ裏借家も、住めば都に勝るらん、實と寔（マコト）の中の鄉、家數（ヤカラ）も僅か五六軒」■近江國伊香（カゴ）郡余吾（ヨゴ）村の大字。柳瀨（ヤナセ）の南方二里、余吾湖の北半里。鐵道北陸線の一驛。

なかのがみ 長上【名】〔地〕元明天皇の和銅二年遠江國長田（ナガタ）郡を二分して、長下と共に置かれし郡。明治二十九年濱名郡に合せらる。

なかのくち 中口【名】大なる住宅にて、玄關と勝手口との間にある入口。

なかのくわんばく 中關白【名】〔人〕『父の兼家も弟の道兼も、共に關白なりしより、「中の」とは云ふなるべしとぞ。**なかのせっしやう**（中攝政）參照』**ふぢはらみちたか**（藤原道隆）に同じ。大鏡「右大臣道兼、…粟田殿とこそは聞えさすめりしか。…粟田殿の…太郎君は福足（フクタリ）君と申しを、…御をぢの中の關白殿の、おりて、舞臺に上らせたまへば」

なかのけんもつ 中監物【名】**ちゅうけんもつ**（中監物）に同じ。「條下を見よ。

なかのこのかみ 中の兄【句】なか（中）の

ながのし 長殿斗【名】廚斗鮑の、長きままにて用ふるもの。（折廚斗（ヲリ）に對して）

なかのしま 中之島【名】〔地〕■肥前國西彼杵（ソノギ）郡高濱村に屬する一小島。もと石炭を産せしが、今は廢坑となれり。■大隅國川邊（カハベ）十島の一。又寶（タカラ）七島の一。大島郡十島（トシマ）村に屬す。周回七里一町。■大阪市北區にありて、天神橋の下にて、淀川の二派に分れたる土佐堀川と堂島（ダウジマ）川との間に挟まれる地。徳川時代に、關西諸大名の藏屋敷ありし處。今は、中島公園・醫科大學等あり。一代男「淀屋橋を越えて、中の嶋の氣色、雲靜かにして風絶え」

なかのしま 中島【名】〔地〕■攝津國島前（タウゼ）三大島の一。附近數箇の小島と共に一部一村を形成し、海士（アマ）郡海部といふ。後鳥羽上皇遷幸の處。

ながのしも 長下【名】〔地〕元明天皇の和銅二年に遠江國長田（ナガタ）郡を二分して置かれし郡。後世の天龍川の左右に亙りしが、何時の頃よりか廢せられたり。

なかのせき 中關【名】〔地〕『上關（カミノ）と下關（シモノセキ）との中間に位せるよりいふ』周防國佐波（サハ）郡にある村。三田尻を距る西南一里半。良港なりしも、海邊遠淺となりしため、製鹽地となる。

なかのせっしやう 中攝政【名】〔人〕『父の忠通も、弟の基房も、共に攝政なりしより、「中の」とは云ふなるべしとぞ。**なかのくわんばく**（中關白）參照』**このゑもとざね**（近衛基實）に同じ。續世繼「六條の攝政殿と申すなるべし。又、中の攝政殿と申す人も侍り。太郎におはせしかども、中の關白と申し樣なるべし」

なかのちやう 仲の町【名】〔地〕東京市吉原遊廓内の、中央一直線の通路、即ち大門のまっすぐの通りの町。兩側に引手茶屋軒を並ぶ。**どちやう**（五町）參照。柳樽「糠味噌の上汁を吸ふ仲の丁」同「素一步（ヒトアユミ）は用向の無い仲の丁」

なかのちやうばり 仲の町張【名】江戸時代に、吉原遊廓の大籬（オホマガキ）の太夫が、毎夕同所の仲の町なる引手茶屋に出張りて、客を待ちしこと。

なかのつかさ 中務【名】**なかつかさしやう**（中務省）に同じ。

なかのでう 中之條【名】〔地〕上野國吾妻（アガツマ）郡にある町。四萬（シマ）・上澤渡（カミサハタリ）・草津等の溫泉地に往復する衝に當る。附近の養蠶の中心地。

なかのと 中戸【名】清涼殿の北廂（キタビサシ）の東、第一の間（マ）と第二の間との間にありて、萩の戸と藤壺上御局との堺に並べたる戸。其「うらうらとのどかなる日のけしき、いとをかしきに、はてのおはん持たる藏人（クラド）參りて、おもの奏すれば、なかのとより渡らせたまふ」「に同じ。

なかのともひ 中辨【名】**ちゅうべん**（中辨）に同じ。

ながのばら 長野原【名】〔地〕上野國吾妻（アガツマ）郡にある町。長野街道に當る。

ながのび 長延【名】■長く延ぶること。久びく延引すること。■〔建〕溝・垣・路などの長さ。

なかのへ 中重【名】■古の宮城の構の三重なりしうちの、中間なる一郭。即ち內裏の外圍にて、兵衞（ヒヤウヱ）府の分擔警衞に任ぜし所。（內重（ウチ）・外重（ト）に對して）■神社・宮殿などの、殿舍と中門との間なる空地。

なかのへ 中重の手車（テグルマ）の宣旨（センジ）【句】手車■に乘りたるまま、宮城の中重の諸門を出入することを聽さるる宣旨。東宮親王・攝關・大臣・妃・夫人・內親王・命婦（ミヤウブ）・三位の嬪（ヒン）・女御及び孫女王・大臣の嫡妻など、又僧は、大僧正・至尊の護持僧・耆老の輩など、これを聽されたり。續世繼「なかのへの手車の宣旨ありき」

なかのへ 中重の鳥居【句】伊勢兩宮の、內外玉垣御門の中間にある鳥居。「じ。

ながのべ 中重の門【句】きゅうもん（宮門）■に同

ながのべ 長延【名】〔建〕屈曲もしくは彎曲せるもの、長さの合計。

なかのぼり 中上【名】古、國守の、任期中に一度京へのぼること。（古語）今茸、彼の國司、中のぼりといふことをするとて」

ながのぼり 長轅【名】たけ長き轅。

なかのま 中間【名】表座敷と裏座敷との間にある間。中間にある室。（懸入卦柱屋・茶室女五枚羽子板）「二階中の間・奥座敷」

なかのま 中の間【句】なか（中）の條下を見よ。

なかのまつりごとのつかさ 中務省【名】**なかつかさしやう**（中務省）に同じ。

なかのみ 中飲【名】酒宴の席に、目上の者の杯にて、酒を飲むこと。古禮には、二杯飲みて返すが例なりといふ。あひ。（古語）今川大雙紙「主人・貴人などの御前にて、中飲をせよと仰せ候ふ時は、罷り出でて、片膝を立て出で、戴かずして、左の手を突きて、右の手にて杯を取りて、飲みてしさるなり、相構へて下にせざるものなり」

なかのみかど 中の御門【句】なか（中）の條下を見よ。

なかのみかど 中御門【名】〔人〕**なかみかどてんわう**（中御門天皇）の略。

なかのみかどてんわう 中御門天皇【名】〔人〕**なかみかどてんわう**（中御門天皇）を見よ。

なかのみやのつかさ 中宮職【名】**ちゅうぐうしき**（中宮職）に同じ。和名「中宮職、奈加乃美夜乃豆加佐」

なかのみやのつかさ 中宮大夫【名】中宮職の長官。拾芥抄「中宮大夫、ナカノミヤノカミ」

なかのもんと 中野門徒【名】『その本山なる專照寺、今は福井市に移りたれど、もと越前國今立（イマダテ）郡中河村大字中野にありて、山號をも中野山と稱せしによりていふ』**さんもんとは**（三門徒派）に同じ。

なかのやき 中野燒【名】■筑前國上座（カミツ）郡小石原（コイシハル）村南中野にて製出せし陶器。天和二年筑前國主黒田光之が陶工に命じ、明（ミン）の製法に倣ひて燒かしめしに始る。水缸（カウ）・酒罎等あり。その附近の住民の日用品たりき。■肥前國北松浦（マツラ）郡中野村にて製出せし陶器。慶長三年朝鮮より歸化せし今村瓦闕の創めしもの。その

子孫窯(ヨウ)を三河内(ミカワ)山に移ししより三河内焼と稱せらるるに至れり。㊁筑前國嘉穂(カホ)郡中村字中野にて製出する陶器。專ら茶器を製す。寛文五年陶工高取善十郎の創めしもの。後、一時中絶し、また再興して、今日に及べり。

なかのゆび 中の指【句】なか(中)の條下を見よ。

なかのよしとき 長野義言【名】〔人〕國學者。通稱は主馬(シュメ)。後に主膳と改む。桃舍(モモヤ)と號す。近江國の人。音韻の學に通じ、和歌を巧みにす。嘉永五年彦根藩の弘道館國學方となり、安政四年幕府の内命を受けて京都に赴き、公武の間に斡旋し、開港の勅許を得て、幕府の倒壊を防がんとせり。後、藩の實權を握りしが、文久二年斬に處せらる。年四十八。古今集姿鏡・小倉百首姿鏡等の著あり。

なかのり 中法【名】うちのり(内法)に同じ。

なかのり 中乘【名】乘物・船などの中央に乘ること、又その人。

ながのり 長乘【名】長き間纏ざまに乘ること。とほのり。

ながのれん 長暖簾【名】三尺ほどの幅(ハバ)を四幅又は五幅合はせて、上部を一尺四五寸ほども綴ち、戸口へ縦に掛くるもの。今も仲買店・賣店・蕎麥屋などに多く見らる。

なかのを 中の緒【句】なかの條下を見よ。

なかのをのこ 中の亥子【句】なのこ(亥子)の條下を見よ。

なかのをん 中院【名】ちゆうゐん(中院)に同じ。增基「今おりさせたまへるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中の院と申し、父御門をば本院とぞ聞えさする」

なかのをん 中院【名】姓氏の一。本姓は源。堀川・久我(コガ)・土御門・北畠の諸氏と同族。源通親の第五男通方を祖とす。その子通成以後、大臣家の一となれり。子孫相繼ぎ、明治維新後、伯爵を授けらる。

なかのをん-ちかふさ 中院親房【名】〔人〕『北畠家は中院家の支流なるによりていふ』きたばたけちかふさ(北畠親房)に同じ。

なかのをん-みちかつ 中院通勝【名】〔人〕歌人。通爲の子。晩に素然と稱し、也足軒と號す。後奈良天皇に事へ、權中納言・侍從に累進す。後、旨に違ひて丹後國に出奔し、同國田邊城主細川幽齋に就きて歌を學び、その奥旨を究む。慶長四年許されて京師に歸り、後陽成天皇に謁して和歌を奉り、恩賞を蒙る。岷江(ミンコウ)入楚の著あり。慶長十五年薨ず。年五十三。

なかのをん-みちしげ 中院通茂【名】〔人〕歌人。通村の孫。通純の子。後西院天皇・靈元天皇・東山天皇に歴仕し、内大臣となる。德川光圀と親交あり。寶永七年薨ず。年八十。家集に老槐和歌集三槐和歌集あり。

なかのをん-みちみ 中院通躬【名】〔人〕歌人。通茂の子。東山天皇・中御門天皇・櫻町天皇に歴仕し、右大臣となる。和歌及び雅を善くす。元文四年薨ず。年七十三。家集に通躬公集・三槐和歌集あり。

なかのをん-みちむら 中院通村【名】〔人〕歌人。通勝の子。また世尊寺流の書を能くす。後水尾天皇幕府の處置に安んぜずして急に讓位せられし時、これを諫めざりきとの科にて、幕府のために江戸に幽閉せられ、後、赦されて歸京し、内大臣・正二位に至る。承應二年薨ず。年六十七。中院殿また後十輪院と稱す。

なかのを 中のを【句】をの條を見よ。

なかのを 中の緒【句】なか(中)の條下を見よ。

なかば 半【名】■二つに分ちたる一つ。なから。半分。■二つに分ちたる界の部分。なかほど。まんなか。中央。■たけなはなる頃。さなか。もなか。さいちゆう。

半なる月【句】次條■に同じ。 資松中納言物語「琵琶の君にさし寄りてのたまへば、いとどかきくらす涙に、聲もたがひて言出でねば、琵琶にて、かたみぞと幕るる夜ごとに眺めても慰まめやはなかばなる月」 八雲御抄「なかばなる月。琵琶をいふなり」

半の月【句】■半圓形の月。はんげつ。ゆみはりづき。弦月。 新根古今「弓張の なかばの月の影よりもなほ澄みまさる 四つのをの聲」 夫木「えにひたすなかばの月に聲すみて荻ふく風の秋ぞかなしき」■秋のなかばの月かげ。仲秋の月。 醒睡「雨月「それさへあるに、秋の空、あまりに堪へぬ半の月…折りしも秋なかば」■『表面に共鳴を助くるための半月形の孔あるによりていふ』びは(琵琶)の異稱。(和名抄に琵琶、滿月半月者、在腹之孔名也とあれば、元來は孔の名なりしを、異稱に用ひたるなり) 玉葉「四つの緒のしらべにつけて思ひ出でよなかばの月に我れも忘れじ」

相(ヒ)半す【句】互に半分づつなり。「功罪相半す」「毀譽相半す」

なかば 半【副】半分ほど。よほど。 古今「さ夜ふけてなかばたけゆく久方の月吹きかへせ秋の山風」

ながば 長葉【名】同一種屬の植物の中にて、葉の長き形なるもの。「長葉の白樺(カバ)」「長葉の立壺菫(タチツボスミレ)」

ながばおり 長羽織【名】たけ長き羽織。 源氏冷泉節「せいても急かぬ醫者の心の長羽織」

ながばかま 長袴【名】裾長くして、足の爪先より一尺ばかり餘る袴。もと儀式の時、素袍(スハウ)の下に著用するのみなりしが、足利時代よりは、直垂(ヒタレ)・大紋にも用ひ、德川時代には、肩衣と合はせて著用して、長上下と稱するに至り、水干にも用ふることあれど、貴人に限られたり。又、素袍のと、直垂の時のと、水干の時のと、多少づつその製を異にせり。宮中女官の紅袴も長袴なり。

なかは-かめすけ 奈河龜助【名】〔人〕狂言作者。奈良の人。遊蕩にして家業に就かず。大阪に赴きて作者となる。伊賀越乘掛合羽・加賀見山廊寫本(サツカキ)等の作あり。

ながはぐさ 長莠【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。莖は高さ二尺、小さき葉を生ず。五月頃、淡綠色の長圓錐形の穗を著く。果實は芒(ノギ)なし。牧草として用ひらる。そもそも。

なかばさま 半樣【名】半分ほど。 若風俗「武庫山の氣色(ケシキ)、雲に隱して、半樣も見えず」

なかばさみ 中挾【名】■中間にはさむこと、又そのもの。■和船の帆柵(ホガキ)にある歩(アユミ)(表歩・艫歩に對して)

なかばさみぞめ 中挾染【名】下染(シタゾメ)と上染(ウハゾメ)との中間に插みて染むること、又その染め方によるもの。

なかばし 中橋【名】■『日本橋と京橋との中間なる橋といふ意』今の東京市京橋區京橋の北、日本橋の南に、京橋川・日本橋川と平行して楓川といふ川ありし時、それに架せし橋。川は安永三年埋められ、今は地名として、中橋和泉町・中橋廣小路の名を存するのみ。■大阪市西區立賣(タテウリ)堀、即ち阿波座(ハザ)と新町(シンマチ)との間にある川に架せる橋の一。その北詰を中橋町といふ。 匠土產「昔は中橋の雛笠といはれし諸分知(ショブンチ)なれども、いつもあるものやうに遣ひすて、差引殘らぬ湯屋町も、この體にて通りかね」

ながばし 長橋【名】■たけ長き橋。長橋(ナガハシ)。 「瀨田の長橋」■禁中の清涼殿より紫宸殿へ渡る長廊下。 古語「ながはしより下(オ)りて、舞蹈したまふ」

長橋の局(ツボネ)【句】■禁中の長橋の傍に在りし局。勾當の内侍の居所に充てられたり。■こうたうのないし(勾當内侍)に同じ。

なかばしかの 中橋狩野【名】『その邸、江戸中橋にありしを以て名づく』狩野三家の一。狩野安信を祖とす。

ながはしーどの 長橋殿【名】「長橋の局」に同じ。

ながはしばみ 長榛【名】〔植〕つのはしばみ(角榛)に同じ。

なかばしら 中柱【名】■中央にある柱。■茶室にて、室内に張出して建てたる柱。屈曲せるものを用ふるより、歪柱(ユガミバシラ)ともいふ。 芭蕉「秋の暮客か亭主か中柱」

なかはず 奈加弭【名】奈利(ナリ)弭の誤にて、弦の響くことならんとも、弭の特に音高く鳴るものならんとも、弦打(ツルウチ)して、弓弦の鳴響くことならんともいひ、或は長弭の意にて、獸類などを突殺す用に供する

ものならんともいひ、又、中筈にて、往古の弓は、弦の中ほどに竹の筈あるよりいふともいへど、詳かならず。〔古語〕 萬葉「夕狩に今たたすらしみとらしの梓の弓の奈加弭の音すなり」

ながはず 長弭【名】前條を見よ。

ながはすぎ 半過【名】半分より多きこと。なからすぎ。過半(クワハン)。大半。

ながはせ 長馳【名】㊀長き間續けて馳すること。㊁長き道を馳すること。長驅。

ながはた 長機【名】普通より長き織物。

ながはた 長旗【名】一端を竿に附けて長く垂らしたる旗。古昔、儀式または軍陣に用ひしものにて、上部を手(テ)、下部を足(アシ)と呼びたり。てながばた。

なかばたらき 仲働【名】奥と勝手との中間にありて召使はるる下婢。下婢のやや上級なるもの。(下働に對して)

ながばな 長花【名】同一種屬の植物のうちにて、花の長き形なるもの。

ながばなおしろい 長花紫茉莉【名】〔植〕紫茉莉(オシロイ)科に屬する多年生の草。莖は高さ二三尺。葉は心臟形を成して對生す。花は香氣に富み、筒部の著しく長き萼を有し、その萼の緣は白色、淡紅色または淡紫色。原産地はメキシコ。觀賞用とす。

ながばなし 長話【名】長き時の間話しつづくること、又その話。ながものがたり。

なかはなだ 中縹【名】『なかあさいろ(中藍色)を見よ』染色の一。中程の濃さなるはなだ色。

ながはのいしもちさう 長葉茅膏菜【名】〔植〕茅膏菜(イシモチサウ)科に屬する多年生の草。食蟲植物の一。高さ八九寸、全體茅膏菜(イシモチサウ)に類すれども、葉は長くして、線形をなし、淡黃綠色を呈し、互生す。又、粘液を分泌する多數の腺毛ありて、昆蟲を粘著せしむ。夏、葉腋より花莖を抽き、淡紅色又は白色なる五瓣の小花を開く。

ながはのかうやばらき 長葉高野箒【名】〔植〕菊科に屬する小灌木。高さ二三尺。葉は披針形若しくは卵形にして、鋸齒を具へ、叢生または互生す。秋季、灰褐色の小花を開く。各地の山野に自生し、莖は帚を造るに用ふ。ばいくわはぐま。

ながはのさくらさう 長葉櫻草【名】〔植〕櫻草科に屬する多年生の草。高さ三四寸乃至七八寸。葉は地下部より生じ、細長き倒卵形を成す。花は帶紫色、白斑ある合瓣花なり。原産地は希臘、波斯の山地。觀賞用として栽培す。

ながはのしらかんば 長葉白樺【名】〔植〕まかんば(眞樺)に同じ。

ながはのすみれさいしん 長葉菫細辛【名】〔植〕葎菜(レス)科に屬する多年生の草。太き根莖ありてそれより葉を生ず。葉は深き心臟形を成して尖り、鋸齒を有す。四五月頃、大形、淡紫色の花を開く。各地の山地に自生す。

ながはのたちつぼすみれ【名】〔植〕葎菜(レス)科に屬する多年生の草。地上莖を有し、葉は下部なるは心臟形、上部なるは心臟狀披針形、狹長にして尖れり。山地に自生し、春夏の候、淡紫色の花を著く。

ながはのつき 半の月【句】ながば(半)の條下を見よ。

ながはのまちせんごけ 長葉毛氈苔【名】〔植〕茅膏菜(イシモチサウ)科に屬する草。莖は短くして、長き葉柄を具ふる長倒卵形の葉を簇生す。葉の表面には多數の腺毛狀突起ありて、粘液と消化液とを分泌し、小蟲を捕へて消化吸收す。花は小形の離瓣花にして、總狀花序に排列す。

ながはのやまぐるま 長葉山車【名】〔植〕山車の變種。葉の披針形にして長きもの。紀伊國の山地に自生す。

ながばば 長馬場・長馬塲【名】道のりの長き馬場、又その馬場にて馬を馳することと。〔浦島年代記〕曲乘でも、長馬場でも、若衆に負けねど」

ながはほととぎす 長葉油點草【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。概形、油點草に似、葉著しく長し。

ながはま 長濱【名】〔地〕㊀伊勢國にありといふ濱。古今「君が代はかぎりもあらじ長濱のまさごの數はよみつくすとも」㊁豐前國企救濱(キクノ)の別稱。㊂近江國阪田郡にある町。琵琶湖に臨み、鐵道北陸線の一驛たり。縮緬を産するを以て名高し。古稱、今濱。㊃伊豫國喜多(キタ)郡にある町。松山を距る十里。肱(ヒヂ)川の河口に在り。

ながはまじやう 長濱城【名】近江國阪田郡長濱町の湖邊にありし城。もと今濱城と稱す。永正年間上阪景宗の築きしもの。後、淺井氏に燒かれしが、秀吉再築して、名を長濱と改めたり。

ながはまぞめ 長濱染【名】近江國阪田郡長濱町にて染めたる染物。

ながはまちりめん 長濱縮緬【名】はまちりめん(濱縮緬)に同じ。

ながはままんじらう 中濱萬次郎【名】〔人〕もと土佐國播多(ハタ)郡中濱の漁夫。天保十二年漂流して無人島に上陸し、米國人に救はれて北米に到り、嘉永四年歸朝す。翌年幕府に召されてペルリの信書を譯し、次いで軍艦操練所教授となる。明治三十一年歿す。年七十二。

ながはまやき 長濱燒【名】樂燒の一種。享保・元文の頃、石見國那賀(カ)郡長濱村の人、永見房造が創始せし以來、同地にて製出す。

ながばん 中番【名】昔時、江戸の街巷の中程に設けし番所。(辻番に對して)

ながばん 長盤【名】『ばん(盤)㊀を見よ』ぜん(膳)に同じといふ。〔古語〕

ながばんてん 長半纏・長半天【名】たけ長く仕立てたる半纏。

なかばやしちくごう 中林竹洞【名】〔人〕畫家。名は成昌、通稱は八郎、字は伯明。竹洞の外、大原庵・東山隱士・沖瀧等の號あり。尾張國の人。京都に住み、文人畫を善くし、嘉永六年歿す。年七十八。

なかばら 中腹【名】腹の中ほどの部分。中央部の腹。

なかばらちかよし 中原親能【名】〔人〕鎌倉幕府の文臣。明法博士廣季の子。大江廣元の弟。壽永三年源賴朝公文所(クモンジョ)を設けし時、その寄人(ヨリウド)となる。文治二年幕命により、六波羅に赴き、京都を鎭り、建久二年政所(マンドコロ)の創設と共に公事奉行に任ぜらる。後、薙髮して寂思と稱す。承久二年歿す。年六十六。

なかばらひ 中拂【名】盆と大晦日との二季の中間の仕拂。天の網島「買物のため、京へのぼる。大分の用なれば、中拂の間(アヒ)にあふやうに歸るは不定」

なかばり 中張【名】中の方を張ること、又その張りたるもの。「葉黃蓮」に同じ。

ながばわれん 【名】〔植〕せりばわれん(芹葉蓮)に同じ。

ながび 長日・永日【名】日中の時間のながき日。永日(エイジツ)。〔古語〕好忠集「ながびすらながめて夏をすぐすかな吹きくる風に身をばまかせて」

なかひがき 中檜垣【名】中間の隔に立てたる檜垣。新六「心ある宿のあたりの中檜垣文のかよひのはざまやはなき」

なかひき 中引【名】牛車(ギッシャ)に男女の同乘する際、中隔として、車内に懸くる几帳。

なかびきあみ 中曳網【名】ふなびきあみ(船曳網)に同じ。

なかびく 中低【名】なかくぼ(中窪)に同じ。

なかびく 長引く【動四自】永くなる。おそくなる。遲延す。延引す。源氏「延引すさまざまにかけとどめられて、今までながびき侍る」

なかびくし 中低し【形ク】中央低くし。

なかびけ 中引【名】夜の十二時。(大引に對して)〔東京の遊廓の話〕

なかひげ 長鬚・長髯【名】長きひげ。

ながひこ 長彦【名】〔植〕いね(稻)の異稱。〔古語〕 清輔抄「鶴のすむ澤邊にかへす苗代は世をながき彦の種やまくらん」

ながひこのいね 長彦の稻【句】〔植〕前條に同じ。〔古語〕 夫木「はるばると年もはるかに見ゆるかなながらの村のながひこの稻」 新續古今「萬代のためしにぞつく田上(タガミ)や秋のはつ穗のながひこの稻」

ながひこのしね 長彦の粢(シネ)【句】七夜の產養(ウブヤシナヒ)に

祝ひて煮る粥。甲斐國の七彦(今の七日市場)の米を用ふるより、七彦の粥ともいひ、甲斐と粥と發音相近く、七彦は七世の孫の義に取りて、家門の繁榮を祝したるならんといふ。〔古語〕 夫木「君が代はながひこの稻ななかへり祝ふことばにあえざらめやは」

ながひじき 長鹿尾菜【名】〔植〕北海道に產する鹿尾菜の中、葉狀部の著しく長きもの。みちひじき。てうせんひじき。

ながびしやく 長柄杓【名】えながびしやく(柄長柄杓)に同じ。

ながびたたれ 長直垂【名】普通の直垂を鎧直垂と區別しての稱。義經記「辨慶、裝束をぞしたりける。長直垂に、赤き袴をぞ著たりける」

ながびつ 長櫃【名】横に長く、長持のごとく棒を通し、二人にて擔ぐやうにしたる唐櫃。土佐「川のも海のも、こともの、ながびつにになひつづけておこせたり」 世繼曾我邊にありし長櫃の蓋を明け」

ながひてり 長日照【名】日照の長き間續くこと。

ながひと 仲人【名】なかうど(仲人)㊀に同じ。〔古語〕 源氏「かのなかひとにはかられて」

ながひと 長人【名】「世の長人」を見よ。

ながひねり 中捻【名】腰のあたりをねぢり、氣取りて歩くこと。 五人女「顧自慢に遠くかづき、中ひねりの歩き姿」

ながひばち 長火鉢【名】横に長き箱火鉢。多くは抽出(ひきだし)あり、茶の間(ちゃ)に据う。

なかひめぎみ 中姫君【名】同胞のうちにて、中にあたる姫君。(大姫君などに對して) 榮花「中姫君の御事をいかでと思し召すほどに」

なかびより 中日和【名】㊀雨の降りつづきたる中途に、一時晴るること。㊁なかなほり(中直)㊁に同じ。

ながひら-がみ 長平紙【名】後世の丈長(たけながし)㊁の類なる、一種の髪飾。杉原紙を横に幅廣く折疊みたるもの。二十歳前後の婦人の間に行はれたり。

なかひろ

なかひろがり 中廣【名】『末廣と靜折(しづおり)との中間なるより名づく』上の小口のしまらずして、六七分ほど開きたる扇。室町時代より江戸時代の末まで、武家にて儀式または出仕の時に用ひたり。なかひろがりあふぎ。中浮(なかうき)。 條條關鷰「扇の事。中ひろがりは大名は御持ち候。末ひろがりは御持ちなく候。奉公衆童形(どうぎやう)出仕樣體、扇は開きたるも、中うけも不苦候也」 女房私記「扇は中廣也」

なかひろがり-あふぎ 中廣扇【名】前條に同じ。

なかぶ 菜蕪【名】〔植〕かぶな(蕪)に同じ。

ながぶ 長夫【名】長き間勤むる夫役(ぶやく)。物草太郎「わがやうなる百姓の中より、都へ人をのぼせて使はせまゐらするをながぶとは申すなり」

ながぶえ 長笛【名】管の甚だ長き橫笛。即ち神樂笛など。 和名「長笛。奈加布江」

ながふくべ 長瓢【名】〔植〕ゆふがほ(夕顏)㊀に同じ。 俳諧古選「桃太郎「寢てゐても世は形(なり)形や長ふくべ」

ながふくりん 長覆輪【名】丈長く覆輪を施したること、又その物。太刀のは、鞘の金物を、刃のかたにも、峯の方にも、長くかけたるもの、即ち雨覆(あまおほひ)と芝引(しびき)との長く通れるをいふ。 保元「長覆輪の太刀、長覆輪の鞘」

ながふくろ 長袋【名】長き袋。二代男「長袋の烟草入があらば、取っておけ」

なかぶせ 中伏【名】なかづみ(中積)㊁に同じ。(裏積・北粒積に對して)

なかふたびし 中太菱【名】まつかはびし(松皮菱)㊁に同じ。

なかふね 中船【名】ひきふね(引船)㊃を見よ。

なかふね-うはに 中船上荷【名】上荷船の一種。

ながふみ 長文【名】長きふみ。長く認めたる手紙。 俳諧新選(曉山)「長文を脇に繰る炬燵かな」

ながふん 長文【名】前條に同じ。一代男「ふみづら氣高く、長ぶんの書手」

ながぶり 長降【名】雨などの、長き間降續くこと。

なかへ 中重・中倍【名】㊀物の間にはさみて隔とするもの。㊁襲(かさね)の、中間に重なれるもの。

なかへ 名替【名】㊀呼名(よびな)を取替ふること。㊁古、諸國の稼(かせぎ)目(もく)・史生(ししやう)等を年給として給はりて、一旦申任せられし人の、その國本邑にあらずと稱して、任符を給はらざる場合に、その人を停めて、他の人を同國に申任すること。又既に任符を給はりたる後、給主が他の人を同國に任ぜんとて、申請して、改任すること。くにがへ(國替)㊁參照。 江次第「院宮名替」

なかへい 中閉伊【名】〔地〕陸中國の舊郡の一。明治二十九年東閉伊・南閉伊の二郡と合はせて、下閉伊郡を立つ。

ながへい 長塀【名】長く續きたる塀。曾我五人兄弟「後の築地長塀より、ばらりばらりと打つほどに」

ながへぎ 長折【名】長き折板(おりた)。 鳩翁道話「馬耳は檜木(ひのき)の長へぎ」

なかへだて 中隔【名】二つの物の間のへだて。なかじきり。障壁。 花鳥なかへだての障子(しやうじ)を明けたまふに、かたければ、これ明けよと宣ふに」

ながへちま 長絲瓜【名】〔植〕絲瓜の一品種。果實の形細くして、長さ六尺乃至八九尺に達するもの。

ながへんじ 長返辭【名】長く辭を引きていふ返辭。 浪速出世瀧鯉「秋の月は小判の雲に光り、小傳よびましや、長返辭、驚かすべき夜半もなし」

なかへり 中緣【名】掛物の表具の二重の緣(へり)を置きたるものの、中の方の緣。なか。 一代男「帶を中へりにして、袈裟のかけ物」

ながぼ 長穗【名】同一の種屬なる植物にて、穗の特に長きこと、又その植物。「長穗の破帽額(はぼもの)」「して」

ながぼう 長棒【名】次條の略。(切棒に對く)

ながぼう-かご 長棒駕籠【名】棒長くして、數人にて舁(か)くやうにしたる、上等なる駕籠。德川時代に、專ら家格ある人、又は特に免許を得たる者のみ乘用し、家格の高下によりて、打揚(うちあげ)腰黑(こしぐろ)腰板(こしいた)腰網代(こしあじろ)・筵包(こもづつみ)等の種別を設けたり。のりものかご。のりもの。〔切棒駕籠に對して〕 ながえかご(長柄切)參照。

ながぼえ 長吠【名】㊀犬などの、聲長く吠ゆること。㊁長たらしく物いふ事を罵りていふ。 重帷子「わしは戌で、ちやう六十、うろたへあるいて、棒にあはぬさきに、長吠せずと往にましよと」

ながぼこ 長鉾・長槍【名】柄の長き鉾。起「長槍、ナガホコ」

なかぼそ 中細【名】㊀長き形の物の、中央の部の細くなれること。㊁きぬ(絁)㊁を云ふ。〔女の語〕

ながぼそ 長細【名】細きこと、又その物。

ながぼそし 長細し【形ク】長くて細し。細長し。ながぼそし。「の程度。なかば。

なかほど 中程【名】中央の部分。中ぐらゐ。

なかほね 中骨【名】なかおち(中落)に同じ。

ながぼん 長盆【名】長き形の盆。

なかぼり 中堀【名】堀を三重に構へたるうちの、中間に位するもの。 盛衰記「道をば三重に掘切りて、一の堀には橋を廣く渡せ。中堀には橋を渡せ。二の堀には逆茂木(さかもぎ)を引き」

なかま 中間【名】㊀物に圍まれたる、まんなかの部分。 名所方角抄「國中に山なし。…なかまは人家なり」 ㊁諸共に事をする人。同類。徒黨。〔仲間〕

なかま-あそび 中間遊・仲間遊【名】仲間同士の遊。 二代男「相手なしの仲間あそび」

なかま-あらし 中間荒・仲間荒【名】仲間の平和を害すること、又その人。

なかま-いり 中間入・仲間入【名】仲間に加はること。〔氣うけ。〕

なかま-うけ 中間受・仲間受【名】仲間の者たちの內部。 諸道聽耳世間猿「中間うちの肝人どもが打寄って、…樣樣の噂して羨まぬ者もなかりし」

なかま-うち 中間內・仲間內【名】仲間の

なかま-がひ 中間買・仲間買【名】仲間う

ちにて銭を出しあひて、物を買ふこと。一代女「中間買の安部茶(アベチャ)、鶴屋が饅頭、女ばかりの一日ぐらし、何の罪も無く」

ながまき 長巻 【名】 ㊀長太刀(ナガダチ)の柄の、細縄などにて、鍔元まで長く巻きたること。「長巻の太刀(即ち長太刀)」 ㊁ながたち(長太刀)㊀に同じ。 ㊂長太刀を持ちて、戦場に立つ兵士。 太閤記「使番のもの十騎、長巻五十人」

なかまく 中幕・仲幕 【名】 ㊀昔、軍陣にて、夜用ひし水色の幕。夜幕(ヨマク)。 ㊁舊演劇にて、一番目狂言と二番目との間、又は二番目と大切との間、又は通狂言(トホシキャウゲン)の中間に插む一幕物の狂言。観客の目先を變へんがために、多く舞臺面の花やかなものを演ず。

なかまぐひ 中間食・仲間食 【名】 仲間うちを食ひあらすこと。仲間同士の共ぐひ。なかまだふし。

なかまぐみ 中間組・仲間組 【名】 仲間のうちにて、特に實の形の長きもの。

ながまくら 長枕 【名】 二人にて共に用ひらるるやうに造りたる、長き括枕(クヽリマクラ)。三代男「二人並びし床に、獨寝の夢もけうとく、長枕うらめし」

なかまげんくわ 中間喧嘩・仲間喧嘩 【名】 仲間同士の喧嘩。

なかまさうば 仲間相場・中間相場 【名】 同業者間の取引直段。一般需要者に賣捌く場合の直段よりも低廉なるを常とす。

なかまざんよう 中間算用・仲間算用 【名】 仲間うちにてなす算用。 一代女「小遣帳にもつけられぬ中間算用」

なかまだふし 中間倒・仲間倒 【名】 仲間の者に對して、借倒し又は食倒しなどすること。仲間の者に損害を加ふること。かまぐひ。なかまつぶし。

ながまち 長町 【名】 長く人家の續ける町。

ながまち 長町 【名】〔地〕 ㊀大阪市南區道頓堀川に架れる日本橋(ニホンバシ)の南北の通路。一丁目より九丁目までに分れ、五丁目までは橋北にありて、東西兩側に旅舍多く、その地をも日本橋と呼び、橋南六丁目以下は、場末の地にして、九丁以南は紀州街道なり。 日本新永代蔵「三歩に足らぬ分散して、身代を洗ひ、長町に引込み」 ㊁陸前國名取郡茂ケ崎(サヽガ)村の大字。廣瀬川を隔てて仙臺市と相對し、鐵道東北本線の停車場あり。

ながまち-ちくせき 長町竹石 【名】〔人〕文人畫家。名は徽(キ)、字は琴翁。讃岐國の人。長町を自ら修して長といひ、又弓を加へて張氏となす。初、建部凌岱に學び、後、沈南蘋の筆意を學びて、最も山水に長じ、野呂介石及びその門人僧愛石と共に、三石と稱せらる。享和年間中の人。

ながまち-をんなのはらきり 長町女腹切 【名】 淨瑠璃の一。京都下立賣(シタダチウリ)なる刀屋石見某方の手代半七といふ者、大阪長町に住めるその叔母より、或主家より託せられし脇差の拵(コシラヘ)を注文せられしが、馴染の遊女井筒屋の花といふ女への金に窮して、その脇差を賣り、擬物の脇差を大阪に送りしに、事露はれて、叔母の自殺するに至る事を作れるもの。近松門左衛門の作。

なかまづきあひ 中間附合・仲間附合 【名】 仲間うちの人人の交際。

なかまつぶし 中間潰・仲間潰 【名】 なかまだふし(仲間倒)に同じ。

なかまづれ 中間連・仲間連 【名】 次條に同じ。

なかまどうし 中間同士・仲間同士 【名】 共に仲間なる者。互に仲間たる間柄の人人。なかまづれ。

なかまはづれ 中間外・仲間外 【名】 仲間に加はらず、又加へられざること、又その人。 浮雲「いや我等は仲間はづれ、この瀬村の在郷鳥」

なかまばり 仲廻 【名】〔商〕 米穀の取引所にて、各定期・各限月を通じて、相場の三回周轉する、その第二回。〔取引所の語〕

なかまびいき 中間贔屓・仲間贔屓 【名】 仲間の人を贔屓すること。

ながまんてる 長マンエル 【名】 ふろっくおつに(半まんてるに對して)〔明治初年頃の語〕

ながまる 長まる 【動四自】 ながながと横たはる。ねまる。

ながまるた 長丸太 【名】 尖端を切除かざる丸太。足代(アシヽロ)などに用ふ。(切丸太に對して)

なかまろくぶ 中間六部・仲間六部 【名】 昔時、常に江戸に住ひ居りながら、回國行者なりと見せかけし者。

なかまわれ 中間割・仲間割 【名】 仲間の人人の間に生ずる爭。ともわれ。

なかみ 中身 【名】 ㊀中に入りてある物。内部に充實せる物。 ㊁刀劍・槍などの、鞘の中に收むる部分、即ち刃の部分。なかご。み。 ㊂談話・文章などの、形容・潤飾を除きたる實質。み。内容。〔中實〕

ながみ 長味 【名】 長き心持。長き氣味。

ながみ 長身 【名】 刀劍・槍などの身の長きもの。

ながみ 長實 【名】 同一種屬に屬する植物のうちにて、特に實の形の長きもの。

なかみかど 中御門 【名】 ㊀大内裏の待賢門と藥壁門との稱。 ㊁姓氏の一。本姓は藤原。勸修寺(カンジュジ)經俊の弟四男、經繼を祖とす。子孫相繼ぎ、明治維新後、伯爵を授けられしが、後に侯爵を陞授せらる。

なかみかどせっしやう 中御門攝政 【名】〔人〕 ふぢはらよしつね(藤原良經)に同じ。

なかみかどのおとど 中御門大臣 【名】〔人〕 ふぢはらときひら(藤原時平)に同じ。

なかみかどてんわう 中御門天皇 【名】〔人〕 第百十四代の天皇。御名は慶仁(ヤスヒト)。東山天皇第五の皇子。御母新崇賢門院藤原賀子(ヨシコ)。在位二十六年(紀元二三七〇年—二三九五年)。元文二年崩ず。壽三十七。

ながみきんかん 長實金柑・牛蠟柏 【名】〔植〕 金柑の一品種。果實の長倒卵形なるもの。

ながみけ 長御食 【名】 次條を見よ。

長御食の遠御食(トホミケ)【句】『長も遠も長久の義』供御を祝ひていふ語。〔古語拾遺〕その天(アメ)の御縣(ミアガタ)に生(ナ)出づる甘菜(カンサイ)・辛菜(カラナ)を持參(モチマヰ)來て、皇御孫命(スメミマノミコト)の長御膳(ナガノミケ)・遠御膳(トホノミケ)と聞食(キコシメ)すが故に」

ながみじか 長短 【名】 長きことと短きこととと。長きものと短きものと。 稚児草「宵の雨知るや土筆(ツクシ)の長みじか」 蕪村「かたつぶり何思ふ角の長みじか」

ながみち 中道 【名】 道のなかほど。途中。中道(ナカヂ)。 古今「いそのかみ布留(フル)のなかみちなかなかに見ずは戀しと思はましやは」

ながみち 長路 【名】 ㊀長きみち。ながぢ。 ㊁長き道のり。遠路。長途。

なかみちたか 那珂通高 【名】〔人〕 なかどう(那珂梧樓)に同じ。

なかみちよ 那珂通世 【名】〔人〕 史家。文學博士。舊盛岡藩士。高等師範學校・帝國大學等に教鞭を執り、最も東洋史に精し。東洋通史・成吉思汗(スヂンギ)實錄の著あり。那珂通高に學び、その嗣となる。明治四十一年歿。年五十八。

なかみつ 仲光 【名】 謡曲の一。多田滿仲の一子美女丸、學問に心を入れずとて、父の怒を受け、手討に遇はんとせしを、仲光と僧都とに救はれて、遂に勘氣を解かれ、仲光の一子幸壽は、最初に身代りに立つて首討たるることを作れるもの。一名、滿仲(マンヂュウ)。

なかみつ 中水 【名】 茶の湯にて、湯を出して後、菓子を出すまでの間に、露次(ロジ)に水を打つこと。

なかみつ 長光 【名】〔人〕 刀工。備前長船の刀工光忠の子にして、順慶長光といふ。その鍛ふる所の刀劍、地鐵の綺、刃文の妙、刃業の銳、天下無雙と稱せらる。

ながみづき 長水木 【名】〔植〕 くまのみづき(熊野水木)に同じ。

なかみどり 中綠 【名】『なかあおいろ(中藍色)を見よ』染色の一。藍と黃蘗(キハダ)とにて染めたるもの、即ち濃淡その中を得たる綠色。

ながみね 長峰 【名】〔人〕 京都の彫工。通稱は次郎三。緻密の彫刻を善くし、最も武者人形を巧みにす。

ながみねくわうざん 長嶺鑛山 【名】〔地〕

■伊豫國西宇和(ニシウワ)郡町見村にある鑛山。銅を產す。■越後國刈羽(カリハ)郡長嶺村にある鑛山。石油の噴出盛んなり。

ながみのごえふ 長實五葉【名】〔植〕ごえふまつ(五葉松)に同じ。

ながみはしばみ 長蜜榛【名】〔植〕つのはしばみ(角榛)に同じ。

ながみみ 中耳【名】或種類の織物の兩端ならざる所(多くは中央)につくりたる耳。みみ(耳)(六)參照。

ながみる 長水松【名】〔植〕綠色藻類に屬する隱花植物。體は水松に類し、綠色にして、甚だ長く、紐狀を成して、往往五十尺に達す。一二尺ごとに叉狀に分岐して、その分岐點は廣き三角形を成す。各地の淺海の底に著生す。あぶらあぶら。くづれみる。さめのたすき。

ながむ 長む【動下二他】長くす。ひきのばす。(歐洲大陸、始は、ありご五をながめて」と云うて、三段おちやるが」大原問答(西洛)「戀の中川中昔、御方遣の御幸町」きのふはけふの物語、中むかしの事にや、信濃國にて、ある人、主人を申し入れんとて」

ながむ 詠む【動下二他】聲を長く引きてうたふ。吟ず。詠ず。吟咏す。くちずさむ。

ながむ 眺む【動下二他】■うっとりとして見詰む。愛ふる事ありて、つくづくと見る。悵望す。「古語」■遠く見る。遙かに見渡す。眺望す。「詠む」

なかーむかし 中昔【名】上古と近古との間の時代。中世。中古。(おほ昔に對して)狂言(鈴木)「さりながら、大昔、中むかし、當風と云うて、三段おちやるが」大原問答(西洛)「戀の中川中昔、御方遣の御幸町」きのふはけふの物語、中むかしの事にや、信濃國にて、ある人、主人を申し入れんとて」

なかーむし 長蟲【名】〔動〕へび(蛇)の異稱。(但し、古は、夜に限りていへり)

ながむしろ 長筵【名】たけの長きむしろ。筵道(ムシロ)・壘表など。「古語」宇治「ながむしろを四五枚敷きたる」今昔「醫師屋の大なる內に長筵を敷滿てて」

なかーむすこ 中息子【名】三人ある息子のうちの、中なるもの。

なかーむすめ 中娘【名】三人ある娘のうちの、中なるもの。油地(アブラヂ)・茶屋の前にて、中娘、あれ、父(トト)樣かと縋り寄る」

なかむら 中村【名】■〔地〕磐城國相馬(ソウマ)郡にある町。陸前濱街道の要衝に當る。相馬氏の舊藩地。■〔地〕土佐國幡多(ハタ)郡にある町。下田港の西北二里餘。郡役所を置く。舊稱、畑本(ハタモト)。■〔地〕尾張國愛知郡中村の大字。なか(中)■參照。■姓氏の一。祖武平氏より出づ。家系詳かならず。なかむらかずうち(中村一氏)參照。

なかーむら 中村【名】〔地〕なか(中)■を見よ。

なかむらーあきか 中村秋香【名】〔人〕國學者。駿河國の人。不盡舍(フジヤ)と號す。第一高等學校教授・御歌所寄人となり、明治四十三年歿す。年七十。落窪物語大成・不盡廼舍遺稿等の著あり。

なかむらーいてふ 中村銀杏【名】紋所の一。

なかむらーうたえもん 中村歌右衛門【名】〔人〕大阪の俳優。■(初代)。家號は加賀屋、俳名は一洗。加賀國金澤の醫大關俊庵の次男。中村源左衛門の弟子。江戸にも下りしことあり。二代に名を讓りし後は、加賀屋歌七と稱す。人品すぐれ、實惡を得意としたり。寬政三年歿す。年七十八。■(二代)。初名は水木東藏。初代の弟子となりて中村東藏といひ、天明二年その養子となりて中村東藏といひ、天明二年その養子となりて中村東藏といひ、天明二年その養

なかむら-ちくどう 中村竹洞【名】〔人〕畫家。名は成昌。字は伯明。太原庵・東山隱士・冲澹等の別號あり。尾張國の人。山水及び墨竹を能くす。嘉永六年歿す。

なかむら-てきさい 中村惕齋【名】〔人〕儒者。名は士欽、字は敬甫、通稱は、初、七左衛門、後、仲二郎。伊藤仁齋と名を等しくす。京都の人。元祿十五年歿す。年七十四。著す所、數十部あり。

なかむら-とみじふらう 中村富十郎【名】〔人〕大阪の俳優。Ⅰ(初代)。芳澤あやめの三男。女方俳優として、三都に盛名を成せり。天明六年歿す。年六十八。Ⅱ(二代)。大阪の人。初に四代目市川團藏の弟子となり、後に三代目中村歌右工門の門に入り、天保四年富十郎と稱す。奢侈を以て禁に觸れ、大阪を逐はる。弘化二年歿す。年七十。

なかむら-なかざう 中村仲藏【名】〔人〕江戸の俳優。Ⅰ(初代)。浪人齋藤某の子、幼にして孤となり、踊の師匠志賀山お俊に養はれ、二代中村傳九郎の門に入り、市十郎と稱し、後仲藏と改む。舞踊を善くし、創意に富み、忠臣藏の定九郎の型も、仲藏によりて全く一變せらるるに至れり。寛政二年歿す。年五十五。Ⅱ(三代)。踊師匠。志賀山さいの子。十二代中村勘三郎の弟子となりて、鶴助といひ、後仲藏を襲ぐ。敵役にて、舞踊をも善くせり。明治十九年歿す。年七十八。

なかむら-は 中村派【名】槍術の一流派。鐵寶藏院流より出づ。覺禪房の高弟中村市右衞門尙政を祖とす。

なかむら-まさたつ 中村正辰【名】〔人〕赤穗四十七士の一人。淺野長矩の臣。通稱は勘介。元祿十六年死を賜はる。年四十五。一說に四十八。

なかむら-まさなほ 中村正直【名】〔人〕なかむらけいう(中村敬宇)に同じ。

ながむら-やま 長村山【名】〔人〕近江國にありといふ山。銀後拾遺「君がみ代ながむら山の榊葉を八十氏人のかざしにはせん」

なかむら-らんりん 中村蘭林【名】〔人〕儒者。名は明遠、字は子晦、通稱は深藏、蘭林はその號、また盈進齋と號す。江戸の人。室鳩巢に學び、將軍家重の時、儒官となる。學山錄・孟子考證・諸子考證・大學衍義考證等の著あり。寶曆十一年歿す。年六十五。

なかむら-りう 中村流【名】いっそうりう(一噌流)に同じ。

なかんづく 就中【副】「中に就きて」の訛。

なかんなか 中中【副】なかなか(中中)の訛。

なか-め 中目【名】博奕(バクエキ)の名目の一。詳かならず。大鏡廷「その外、中目・二目おり、遁れがたしや我が命」

ながめ 眺【名】Ⅰながむること。うっとりとして見詰むること。憂ふる事ありて、つくづくと見ること。悵望。(歌などに、多くは長雨(ナガ)の意を含めて用ふ)〔古語〕伊勢「つれづれのながめにまさる涙川袖のみひちて逢ふよしもなし」Ⅱながむること。見わたすこと、又そのありさま。遠望。眺望。風雅「月はただむかふばかりのながめかな心のうちのあらぬ思に」

ながめ 眺の末【句】眺めわたす彼方のはて。(歌などに、多くは長雨(ナガ)の降りつづきたる果といふ意を含めて用ひたり)風雅「我が心春にむかへる夕ぐれのながめの末も山ぞかすめる」同「鳥の行く夕べの空のはるばると眺のすゑに山ぞ色濃き」

ながめ 眺の空【句】憂ふる事ありて、つくづくと見る空。(多くは、眺に長雨(ナガ)の降りつづく空といふ意を含めて用ひたり)源氏「あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての秋のしぐれとや見る。心の通ふならば、いかになが眺の空も物忘しはべらんなど、こまやかになりにけり」

ながめ 詠【名】聲を長くひきてうたふこと。くちずさみ。吟咏。〔古語〕

ながめ 長雨【名】ながあめ(長雨)の略。(歌などに、多くは眺(ナガ)の意を含めて用ひたり)〔古語〕蜻蛉「まして長雨のさみだれは浮世の中にふるかぎり誰が袂かたぢなん」

長雨の末【句】「眺の末」を見よ。

長雨の空【句】「眺の空」を見よ。

長雨増(ま)る【句】ながめまさる(眺増る)を見よ。

ながめ 長海布【名】たけの長き海布(ノリ)。〔古語〕源氏「ながめ刈る蜑のすみかと見るからにまづ塩垂るる松が浦島」

ながめ 長目【名】物の、適度よりも、すこし長きこと。「長目につくる」

ながめ 菜龜蟲【名】〔動〕『菜に附く龜蟲の義』椿象(カメムシ)類に屬する昆蟲。體は長さ約三分、楕圓形、藍黒色にして、黄色の斑紋あり。頭部黒く、前胸背やや六角形を成す。油菜・大根・蕪等に附きて、その養液を吸收す。

ながめ-あかす 眺明かす【動四他】眺めつつ夜を明かす。(眺暮すに對して)新撰撰「隈なき月をながめあかして」

ながめ-あく 眺飽く【動四他】長き間眺めて倦く。屢〻眺めていやになる。みあく。風雅「長しとふ秋の百夜を重ねても眺めあくべき月の影かは」

ながめ-いだす 眺出す【動四他】內より外の方を眺む。〔古語〕源氏「ついたち頃の夕月夜に、すこし端近く臥して、ながめいだしたまへり」

ながめ-いづ 詠出づ【動下二他】詠じいづ。吟じ出す。〔古語〕

ながめ-いる 眺入る【動四他】深く心を注ぎて眺む。しみじみと眺む。見入る。源氏「中將ながめ入りて、とみにも驚くまじき氣色にて居たまへるを、心とき人の御目にはいかが見たまひけん」

ながめ-おくる 眺送る【動四他】去行く者を後方より眺めて送る。見送る。目送す。風雅「郭公あかぬなごりを眺めおくる心もそらに暮ひてぞゆく」

ながめ-がしは 長女柏【名】〔植〕柏の一種。なるべけれども實物詳かならず。〔古語〕新六「もろく散る頃ぞ悲しき山下のながめがしはのながめながめて」

ながめ-がち 眺勝【名】憂ふる事經えずして、とかく眺むること。古語「ながめがちなる人の御目にはいかが見たまひけん」

ながめ-くらす 眺暮す【動四他】眺め眺めて日を暮す。眺めつつ暮す。(歌などに、多くは長雨(ナガ)の降り暮す意を含めていふ)(眺明すに對して)古今「起きもせず寢もせで夜を明しては春の物とて眺め暮しつ」謠曲(項羽)「ながめくらして花にまた宿かる草を尋ねん」

ながめ-ごと 眺言【名】長く聲をひきていふことば。〔古語〕後成女集「十五夜の御歌の中に、故殿のながめごとおはしますと聞きしに」

ながめ-ごゑ 眺聲【名】長く引きていふ聲。〔古語〕狹衣「わぎみぞ、ながめごゑはよきまろは更に更にと笑ひたまふれば」

ながめ-ざと 眺里【名】眺むるによき里。眺望のすぐれたる里。若風俗「雨はさはりなく、浮雲も心ありげに、晴天の思ふままなる眺里」

ながめ-すぐす 眺過す【動四他】眺めて月日を過す。眺めつつ過す。玉葉「眺めすぐす日數や秋に移りぬる小萩が末ぞ花になりゆく」

ながめ-すつ 眺捨つ【動下二他】眺めたるままにして、また顧みず。〔古語〕玉葉「ふけぬともひとり起居ん眺めすてて月より先に入らじと思へば」

ながめ-ふ 眺經【動下二他】眺め眺めて年月を經過す。眺めつつ月日を經來たる。ながめく。(歌などに、多くは「長雨降る」の意を含めて用ひ來れり)金葉「逢ふ事はながめふる屋の板廂さすがにかけて年の經ぬらん」

ながめ-ふける 眺ふける【動四他】深く心を入れて眺む。しみじみ眺む。ながめいる。

ながめ-まさる 眺増る【動四自】憂ふる事ありて、ますますしみじみと眺む。(歌などに、多くは長雨(ナガ)の降りまさる意を含めて用ふ)【古語】拾遺「さ月來てながめまさればあやめ草思ひたえにしねこそ泣かるれ」

ながめ-みる 眺見る【動上一他】ながむ(眺む)とみる(見る)とを重ねていふ語。【古語】源氏「山の端に入るまで月を眺め見ん閨の板間もしるしありやと」

ながめ-もの 眺物【名】眺むる物。眺むるによき物。眺めて樂しむ物。一代女「一生の眺物ながら、女の姿すぎたるは惡しからめ」

ながめ-やる 眺遣る【動四他】その方を眺む。遙かに眺む。見渡す。見遣る。源氏「ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへ暮るる頃のわびしさ」

ながめ-ゆく 眺行く【動四自】眺めて行く。眺めつつ行く。俳諧古選(二峨)「須磨・明石卿走(スッ)のはてに眺めゆく」

ながめ-わたす 眺渡す【動四他】遠く眺め認む。見渡す。夫木「橘の小島が崎の月影をながめやわたす宇治の橋守」

ながめ-わぶ 眺侘ぶ【動上二他】眺めて寂しく思ふ。眺めて侘ぶ。新古今「眺め侘びぬ秋より外の宿もがな野にも山にも月やすむらん」

ながも 長裳【名】たけ長き裳。保遠女集「ながも著たる人ぞ寄りきて」

ながもち 中持【名】㊀ながもち(長持)に同じ。東鑑「有レ盛二進貢馬三四并中持三棹等一」㊁ながもちぶぎやう(長持奉行)の略。

ながもち 長持【名】㊀物の久しく保つこと。耐久。㊁櫃の横長きもの。專ら衣服・調度などを藏め置くに用ふ。桐又は檜の材にて造る。古のは、後世のよりもふかりしものの如し。別に籠(カゴ)長持・車長持などあり。各その條を見よ。平家「まやしの女(メ)の童(ワッ)の、ながもちの蓋さげたるが泣くにてぞありける」俳諧古選(西鶴)「長持に春かくれゆく衣がへ」㊂【句】前條㊁に同じ 參遇「長持の御からびつに、女のよそひ、裳(モ)十具」

長持、枕にならず【句】過ぎたるは及ばざる譬。諺語】

ながもち-うた 長持唄【名】長持人夫のうたふ唄。膝栗毛「箱根八里の長持唄には、猛き宰領の心を和げ、竹に雀の馬士(マゴ)唄には、鬼殺を爛せしむ」「く竿。

ながもち-ざを 長持竿【名】長持を舁(カ)ぐ人足。膝栗毛「本庄の宿にさしかかれば、むかふより來る長持人足の唄に」

ながもち-ぶぎやう 中持奉行【名】おものなかもちぶぎやう(御物中持奉行)に同じ。

ながもち-ぶぎやう 長持奉行【名】前條に同じ。

ながもち-ぶね 長持船【名】たたみぶね(疊船)に同じ。

ながもち-もどり 中戻【名】中途より戻ること。女殺油地獄「おほかた寄って中もどり」樓嶽裏正秀「夕立や中もどりして蟬の聲」

なかもの 中物【名】〔商〕定期取引に於て、中切(ナカギリ)當物(モノ)に對して)の約束なるもの。翌月ぎり。(先物(サキモノ)に對して)

ながもの 長物【名】㊀長き物。㊁ながもち(長持)に同じ。㊂ながぐそく(長具足)に同じ。

ながものがたり 長物語【名】久しく物語すること。長談。贅沢かかる長ものがたりに、夜ふかいたまふも」

ながものみ 長物見【名】牛車(ギッシャ)の物見の、前袖より後袖まで開きたるもの。(切物見に對して)

ながものみぐるま 長物見車【名】長物見のある牛車(ギッシャ)。「(ソノト)(モン)に對して)

なかもん 中門【名】内方にある門。(外門(ソト)に對して)

ながもり-じやう 長森城【名】美濃國稻葉(イナバ)郡南長森村大字切通に在りて、土岐頼遠の居りし城。

ながもり-はら 長森原【名】〔地〕越後國南魚沼(ナンスマ)郡城内村にある野原。八海山の麓にて、上杉顯定の戰死せし地。

ながや 長屋【名】㊀古、棟を長く建てたる家。細長き形に建てたる家。(古語)「橘の寺の長屋にゐしうなゐはなりは髮上げつらむか」㊁數多の家を、一棟に長く建て連ねたるもの。諸侯の邸にては、藩士等の住所とし、町家にては貧しき人の住家とす。㊂つぼねながや(局長屋)に同じ。

なかやう 中檬【名】厚檬と薄檬との中ほどの厚さの鳥子紙(トガミ)。

ながやか 長やか【形】長きさま。源氏「ひとへの袖ながやかに見ゆ」

なかやしき 中屋敷【名】上屋敷の控屋敷。(かみ屋敷しも屋敷に對して)

ながやすまひ 長屋住【名】長屋㊁に住居すること、又その人。ながやずみ。一代女「長屋ずまひの侍衆に召使はれし中間(チュウゲン)と見えしが朝の買物、芝肴を籠に入れ、片手に醉德利附木を持添へ」

なかやすみ 中休【名】仕事の間に、暫時休息すること、又その休息。こやすみ。小憩。

ながやすみ 長休【名】長き時間又は長き日の間休むこと、又そのやすみ。膝栗毛「六里餘りの道、先剩の夕立に長休し」

ながやずみ 長屋住【名】ながやすまひ(長屋住)に同じ。

ながやだて 長屋建【名】ながやづくり(長屋造)に同じ。

ながやぢよらう 長屋女郎【名】切見世の女郎。つぼね女郎。ながや。

ながやづきあひ 長屋附合【名】同じ長屋に住める人人の間の交際。

ながやづくり 長屋造・長屋作【名】長屋の如き、家のつくりざま、又その家。ながやだて。一代男「細路次、長屋作の入口を並べ」

なかやど 中宿【名】㊀次條に同じ。拾玉「ほととぎす森の梢のみ渡しになかやどしむる松の一村」㊁昔、奉公人の宿元なき者が、出代りの時などに宿として宿下りする家。やど。一代女「この親父强藏(ゴウゾウ)にして、夜もすがら少しもまどろむ事もなく、…やうやう御齒を申して、せめては死なぬうちにと恐ろしく、中宿へ人に預けれて歸りぬ」㊂こやど(小宿)㊀に同じ。一代女「暗物(モノ)といふは、戀の中宿に呼ばれて、かりそめの慰(ナグサ)を」㊃揚屋。引手茶屋。(京都・大阪の語)

なかやどり 中宿【名】途中にてやどること、又その處。なかやど。源氏「うちよりまかりたまふ中やどりに」馬「初瀬に詣でたまふ…宇治のわたりの御中やどりのゆかしさに」

ながやーなみ 長屋並【名】同じ長屋㊁に住みてある人人の、同じく行ふべき定まり。

ながやのうだいじん 長屋右大臣【名】〔人〕ふぢはらさとより(藤原覺成)に同じ。

ながやーのはら 長屋原【名】〔地〕大和國山邊(ヤマベ)郡長屋郷(今の朝和(アサ)村大字永原)にありし原。萬葉「和銅三年春、從二藤原宮一遷二于寧樂宮一時、御輿停二長屋原一向二望古郷一作御歌」今鏡「元明天皇、奈良の都に、和銅三年の春の頃、始めて遷らせたまひけるに、長屋の原に御輿とどめて、藤原のふるさとを顧みたまひて」

ながやばん 長屋番【名】長屋の番の行事。脇百氣質「きのふ長屋番が廻ってさ、表に斯斯で嫁入があったから是是を遣ふっさ」

なかやま 中山【名】〔相模國の方言〕

なかやま 中山【名】㊀〔地〕下總國東葛飾(ヒガシカツシカ)郡にある町。法華經寺の所在地として名高し。鐵道總武線の一驛。㊁〔地〕羽津國川邊(カハベ)郡長屋村の大字。中山寺の所在地として名高し。鐵道阪鶴線の一驛。㊂姓氏の一。本姓は藤原。花山院家忠の孫忠親より出づ。藪羽林家の一。忠親、内大臣に至り、その二十世の孫愛親(ナカチカ)尊號事件に際して關東に下向せり。子孫相繼ぎ、明治維新後、侯爵を授けらる。

なかやまいちゐのつぼね 中山一位局【名】〔人〕なかやまよしこ(中山慶子)に同じ。

なかやまかきつばたびし 中山杜若菱【名】紋所の一。今の中山侯爵家の定紋なる杜若菱。

なかやまかなやまびこじんじや 仲山金山彦神社【名】なんざんじんじや(南宮神社)を見よ。

なかやまくわんぱく 中山關白【名】〔人〕ふぢはらもとふさ(藤原基房)の異稱。

なかやまごんにやく 中山蒟蒻【名】下總國東葛飾(ヒガシカツシカ)郡中山に產し、同國市川・行德(ギヤウトク)邊にて賣る蒟蒻。形小さく扁(ヒラ)く、やや楕圓にして、淡紅色又は白・黑などに染めたるもの。

なかやまじんじや 中山神社【名】美作國苦田(ニカハ)郡一宮(イチノミヤ)村大字西一宮に鎭坐せる國幣中社。祭神は石凝姥(イシコリドメ)命。延喜の制、名神大社に列し、當國一ノ宮として尊崇せられたり。

なかやませつくわん 中山攝觀【名】〔人〕勤王僧。攝津國敎行寺の住職。明治六年朝廷財政缺乏の際、大原重德の意を體して西本願寺門主に說き、金千兩を獻ぜしむ。同十五年寂す。年七十五。

なかやませつしやう 中山攝政【名】〔人〕『なかやまくわんぱく(中山關白)を見よ』ふぢはらもろいへ(藤原師家)に同じ。

なかやまだいなごん 中山大納言【名】〔人〕なかやまなるちか(中山愛親)に同じ。

なかやまただみつ 中山忠光【名】〔人〕朝臣。忠能(タダヤス)の第三子。孝明天皇の侍從。文久三年攘夷親征の詔勅を下すに與りて力あり。同年天忠組と稱して、勤王の兵を擧げしが、敗れて長州に走り、遂に人に刺さる。

なかやまただやす 中山忠能【名】〔人〕朝臣。權大納言忠顯の第二子。愛親(チカ)四世の孫。明治天皇の外祖父。維新の前後常に帷幄に參畫し、權大納言・議定に至り、明治十七年侯爵を授けられ、尋いで大勳位に敍せらる。明治二十一年薨ず。年八十。

なかやまでら 中山寺【名】攝津國河邊(ハベ)郡長尾村大字中山にある眞言宗の寺。紫雲山と號す。本尊は十一面觀世音三體。聖德太子の開くところと傳ふ。西國順禮第二十四番の札所。〔補〕載入は中山寺の男かな」

なかやまないだいじん 中山內大臣【名】〔人〕『なかやま(中山)三を見よ』ふぢはらただちか(藤原忠親)に同じ。

なかやまなるちか 中山愛親【名】〔人〕朝臣。榮親の二男。惜陰室と號す。資性忠誠にして、朝家の式微を慨す。寬永五年勅を奉じて正親町(オホギマチ)公明と共に江戸に下り、尊號の件を定め、功により准大臣に進み、三日にして辭す。文化十一年薨ず。年七十四。

なかやまのぶな 中山信名【名】〔人〕國學者。本姓は阪本、通稱は平四郎。常陸國の人。塙保己一の門人。後、幕府の書物御用掛となり、諸國の舊祠・古剏の古文書・舊記を採りて歸る。群書類從校訂の任に當り、和學講談所の屬員となる。天保七年歿す。年五十。

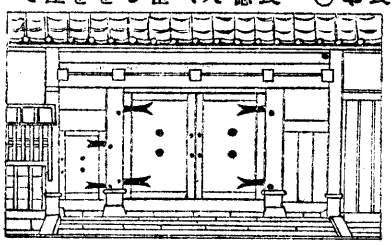
なかやまは 中山派【名】日蓮宗の一派。日蓮の弟子常忍・日常を祖とし、下總國東葛飾(ヒガシカツシカ)郡中山村なる法華經寺を本山とするもの。

なかやまよしこ 中山慶子【名】〔人〕明治天皇の御生母。忠能(タダヤス)の二女。孝明天皇に奉仕す。從一位に敍せらる。養性敦厚、和歌に長じ、また書を能くす。明治四十年薨ず。年七十三。

なが-やみ 長病【名】久しく病むこと。ちやうびやう。ながわづらひ。

ながやもの 長屋物【名】やぐらもの(櫓物)を見よ。

ながやもん 長屋門【名】德川時代に、大名屋敷にて、左右に、家臣を住ましむるための長屋を設け、屋根をも、その長屋と共通にして設けたる門。



(ながやもん)

なが-やり 長槍【名】柄を長く造りたる槍。長長槍(ナガヤウ)。

ながやわう 長屋王【名】〔人〕高市皇子の長子。神龜元年左大臣に進みしが、天平元年漆部君足(ヌリベノキミタリ)等に讒せられて自盡す。年四十六(一說に、五十四)。夫人及び王子等皆縊る。詩歌に長じ、當時の才人多くその門に遊び、懷風藻・續古今集にその作見えたり。

なかやまわらは 中山童【名】〔人〕國學者。本姓は阪本、通稱は平四郎。常陸國の人。塙保己一の門人。後、幕府の書物御用掛となり、諸國の舊祠・古剏の古文書・舊記を採りて歸る。群書類從校訂の任に當り、和學講談所の屬員となる。天保七年歿す。年五十。

なかやまわらは 中山派【名】日蓮宗の一派。日蓮の弟子常忍・日常を祖とし、下總國東葛飾(ヒガシカツシカ)郡中山村なる法華經寺を本山とするもの。

なかやまよしこ 中山慶子【名】〔人〕明治天皇の御生母。忠能(タダヤス)の二女。孝明天皇に奉仕す。從一位に敍せらる。養性敦厚、和歌に長じ、また書を能くす。明治四十年薨ず。年七十三。

なが-やみ 長病【名】久しく病むこと。ちやうびやう。ながわづらひ。

ながやもの 長屋物【名】やぐらもの(櫓物)を見よ。

ながやもん 長屋門【名】德川時代に、大名屋敷にて、左右に、家臣を住ましむるための長屋を設け、屋根をも、その長屋と共通にして設けたる門。

なが-やり 長槍【名】柄を長く造りたる槍。長槍(ナガヤウ)。

ながやわう 長屋王【名】〔人〕高市皇子の長子。神龜元年左大臣に進みしが、天平元年漆部君足(ヌリベノキミタリ)等に讒せられて自盡す。年四十六(一說に、五十四)。夫人及び王子等皆縊る。詩歌に長じ、當時の才人多くその門に遊び、懷風藻・續古今集にその作見えたり。

なが-ゆ 菜粥【名】■こながき(餘)■に同じ。■菜を刻み入れたる粥。■「七種(ナナ)の粥」に同じ。

なが-ゆ 長湯【名】入浴時間の長くかかること。藤葉毛「あまり長湯をして、湯氣(ユゲ)に上(カヅ)り」

なが-ゆはへ 中結【名】次條に同じ。

なが-ゆひ 中結【名】■衣服の上の中程の部分に帶をゆふこと、又その帶。なかゆはへ。宇治「俗正、なかゆひうちして、高足駄をはきて」■風呂敷包の中ほどの部分又は內部を、紐などにてゆふこと、又その紐など。なかゆはへ。

なか-ゆび 中指【名】五本の指の、中央にあるもの。たけたかゆび。たかたかゆび。長指(ナガユビ)。

なが-ゆもじ 長湯文字【名】たけの長き湯文字。浮世風呂「女の湯具は白木綿二布に規したもので…長ゆもじといふ物は下鄙た人のする業でござるっさ」

なか-ゆるし 中許【名】諸藝の初許(ハジメユル)、又は初手(ハジメ)の次に受くる免許。(奧許・初手許に對して)

なが-よ 長夜【名】暮れてより明くるまで長き夜。よなが。永夜。長夜(ナガヨ)。萬葉「わび人のあな心なと思ふらむ秋の長夜をいねずしあれば」

なか-よし 中好【名】『「仲好し」を見よ』まじはりのむつましきこと、又その間柄の人。親密。親善。親友。

中好・小好(ショウ)【句】まじはりのむつましきこと。なかよし。〔小供の語〕

ながよせんさい 長與專齋【名】〔人〕醫家。初名は秉綱。緒方洪庵に學ぶ。長崎醫學校學頭たり。力を刀圭界に盡す。元老院議官に任ぜられ、後、貴族院議員及び宮中顧問官となり、明治三十五年薨ず。年六十五。

なか-よど 中淀【名】中間の淀めること、又その處。なかよどみ。〔古語〕萬葉「事出(シ)しは誰が言なるか小山田の苗代水の中よどにして」

なか-よどみ 中淀【名】前條に同じ。〔古語〕萬葉「よそながら中よどみする淀川にありけんこひを一つ見るかな」

ながよりびこのかみ 中依彥神【名】神皇產靈(カムムスビ)神の御子。

なか-よわ 中弱【名】文書の初と末とに身分高き人を記し、中ほどに身分低き人を記す方式。〔古語〕

なから 半【名】『中らの義、らは接尾語』なかば(半)■に同じ。〔古語〕源氏「いとなれがほに、なからは、內に入りて、そひふしたまへり」

なから 【句】減じて、半となむ。〔古語〕萬葉「檳榔(ビラウ)やしかもないひそ月長(ナガ)らがえだちはたらば汝(ナ)もなからかも」

半は【句】副詞のなかば(半)に同じ。〔古語〕萬葉「おそろしかりけるけしきに、なからは死にけん」

なから 【副】ほとんど。およそ。〔信濃國の方言〕狹衣「新町まちやあなから五里もござらう」■「善光寺の如來樣はの、なから一寸八分のさくい佛樣でも」

ながら 長柄【名】■〔地〕■攝津國西成(ニシナリ)郡豐崎村大字南長柄・北長柄の地。淀川の末分れて長柄川となり、その北を過ぐ。孝德天皇の大化元年都を難波(ナニハ)に遷して、長柄豐埼宮を經營せられし處。弘仁三年この地の邊にて、長柄川に橋を架けしが、後絕えて、渡船となれり。古今「世の中にふりぬるものは津の國のながらの橋と我となりけり」心中二枚繪草紙「父は長柄の田地持」■上總國の舊郡の一。明治二十九年上埴生(カミハニフ)郡と合して、長生(ナガイキ)郡となる。

ながら 長良【名】■〔地〕美濃國稻葉(イナバ)郡にある村。長良川の北岸。橋を隔てて岐阜市に連なり、事實上一市街を成し、長良川の鵜飼は多くこの地に住す。■〔植〕

大根の一種。美濃國稻葉郡島村(長良川の舊新河道に包まれたる地)附近にて栽培するもの。守口(ﾓﾘｸﾁ)大根と同一品種。

ながら 接尾【接尾】そのまま・それと共になどの意。(名詞にも動詞にも形容詞にも添ふ) 萬葉「神(ｶﾐ)ながら神(ｶﾐ)さびゐます」 伊勢「昔、男ありけり。身はいやしながら、母なん、宮なりける。その母、長岡といふ所に住みたまひけり」 源氏「何ばかり所せき身の程にもあらずながら、今は、のどやかにおはしますに」

ながらう 長羅宇【名】煙管(ｷｾﾙ)の、羅宇のたけ長きもの。

ながらか 長廊下【名】長くつづきたる廊下。 殺狐藻(牧童)「月影や海の音聞く長廊下」

ながらうにん 長浪人【名】長き間浪人生活をなすこと。 文武五人男「長浪人の兵衛めが、年は寄りつ、望もなし」 若風雀「生國の大隅にも、長浪人は住みうし」

ながらがは 長良川【名】〔地〕美濃國にある川。郡上(ｶﾐｼﾞ)郡大日嶽(ﾀﾞｲﾆﾁｶﾞﾀｹ)に發源し、諸流を併せ、岐阜市の北側を掠めて數流に分れ、或は合して、末は木曾川に入る。鵜飼の夜景を以て名高し。又、同國安八(ｱﾝﾊﾁ)郡墨俣(ｽﾉﾏﾀ)の邊にては、墨俣川の名あり。

ながら(長良)がは 長柄川【名】〔地〕なつがは(中津川)〔一〕を見よ。

かならかむ 半かむ【句】なかむ(半)の條下を見よ。

ながらぎ-の-みや 半木宮流木宮【名】山城國中賀茂(ﾅｶｶﾓ)にある神社。祭神は玉依姫(ﾀﾏﾖﾘﾋﾒ)。 十訓「いつはりの事はただすの神も聞けさやは契りしながら木の宮」

ながらく 長らく【副】ながく。久しく。

ながらじに 半死【名】はんし(半死)に同じ。 靈井筒「なから死して恥さらし」

ながらすぎ 半過【名】なかばすぎ(半過)に同じ。 著聞「これほどの大木をながらすぎ切入りて候ふに」

ながらづつみ 長柄堤【名】〔地〕攝津國長柄の地の、長柄川に沿ひたる堤。 供滿新選

ながらの 〈篇羽〉「ひとり行く長柄堤や冬の月」

ながら-の-うら 長柄浦【名】〔地〕大阪灣の攝津國長柄の邊まで入込みし時代の、その邊の海濱。 萬葉「あしびたく(ながらの浦を澄分けていくとせといふに都見つらむ」

ながらのとよさき-の-みや 長浦豐崎宮【名】孝德天皇のおはせし宮。**ながら**(長柄)〔一〕參照。

ながら-の-みや 長柄宮【名】ながらのとよさきのみや(長柄豐碕宮)に同じ。 萬葉「續麻(ｳﾐｿ)なす長柄の宮に眞木柱ふと高敷きて食(ｵｽ)す國を治めたまへば」

ながら-の-やまかぜ 長等山風【名】〔書〕弘文天皇の御事蹟を記したるもの。五卷。伴信友の著。伴信友全集に收む。

ながらのやまさき-の-みささぎ 長等山前陵【名】弘文天皇の御陵。近江國大津市別所町に在り。壬申の亂に敗れて天皇の崩ぜられし地にして、古來世にあらはれず、明治十年に至り、推定せられしもの。今、大津兵營の構内に入る。

ながらはんじやく 半半尺【名】ちゆうとはんば(中途半端)に同じ。

ながらはんど 半半途【名】前條に同じ。

ながらひ 交際【名】人と人との間がら。交情。 源氏「かんだちの筋にて、なからひも、ものぎたなき人ならず」

ながらふ 流らふ【動下二自】『ながる(流る)の延』〔二〕のどかに降(ふ)る。ながる。〔古語〕 萬葉「うらさぶる心さまねし久方のあめのしぐれのながらふ見れば」 〔三〕經て行く。つたはる。〔古語〕 萬葉「世の中は常なきものと語りつぎながらへ流れ」

ながらふ 存ふ【動下二自】『もと前條の語の意』生きて、長くこの世にあり。死なずに居る。生存す。存命す。いきながらふ。ながる。 源氏「もしながらへば、よろづにはぐくまんとこそ思ひしか」 新拾遺「數ならでながらへ來つるうき身をも君がためにとなほ惜しむかな」

ながらふそく 長蠟燭【名】たけの長き蠟燭。 一代女「今宵もまた長蠟燭の立切るまで、悟氣樣あれかし」 若風雀「夜は明けやく長蠟燭の立つこと早く」

ながらへ 存【名】ながらふること。存命。

ながらへ-わたる 存渡る【動四他】ながらへて、年月を渡る。 萬葉「天霧(ｱﾏｷﾞﾗ)ひ零(ﾌ)り來る雪の消(ｹ)なめども君に合はむとながらへ渡る」

ながらます 半桝【名】『こなから(小半)を見よ』一升桝の半ばの容量なる桝、即ち五合桝。

ながらみ 【名】〔動〕とこぶし(常節)に同じ。

ながらむすこ 半息子【名】むこ(婿)に同じ。

ながらも ながら藻【名】〔植〕つるも(蔓藻)〔一〕に同じ。

ながらやま 長等山【名】〔地〕比叡山より南走して、近江山城の國境をなせる山脈の中、大津市の西に當る邊の汎稱。その山麓の一部に三井寺ありて、山號を長等山(ﾅｶﾞﾗｻﾝ)といふ。一名、滋賀山。 拾遺「夜を寒みしがの浦なみ氷るてながらの山の嵐をぞ聞く」

ながらゐ-ぼくやう 半井卜養【名】〔人〕江戸幕府の侍醫。奇雲と稱し、大和守と號す。俳諧を貞德に學ぶ。又、狂歌を好み、卜養狂歌集の作あり。延寶六年歿。

ながる 流る【動下二自】『ながし(長し)と同一の語原より出でたる語』〔一〕液體が、低きに就きて行く。流動す。流下す。〔二〕ふる(降る)に同じ。 **ながらふ**(流らふ)〔一〕參照。〔古語〕 萬葉「まきむくの檜原もいまだ雲ゐねば小松がうれゆ沫雪ながる」 〔三〕水に浮びて、漂ひ行く。 萬葉「このくれに柘の小枝の流れこばやなはうたずてとらずかもあらむ」 〔四〕空なる月、歲月など、次第に移りゆく。 萬葉「世のなかのすべなきものは年月は流るるごとし」 土佐「照る月の流るる見ればあまの川いづる湊は海にざりける」 〔五〕ずんながる(順流る)に同じ。 增鏡「御みきまゐる。あまたくだり流れて、上下少しうち亂れたまへるに」 〔六〕次第にひろまる。つたはる。流傳す。 萬葉「春霞ながるるなべに青柳の枝くひもちて鶯鳴くも」 〔七〕ながらふ(存ふ)に同じ。 拾遺「行く水の泡ならばこそ消えかへり人の淵瀬を流れてもみめ」 〔八〕さすらふ。流浪(ﾙﾛｳ)す。 夫木「いなば川いなとしつひにいひはてば流れて世にもすまじとぞ思ふ」 〔九〕風俗・習慣など、次第に移る。「放縱に流る」「奢侈に流る」 〔十〕はづれて、外ざまにゆく。そる。 曾我「宇田が太刀、鐺(ｺｼﾞ)を深く打削り、流るる太刀にて、右の肘を斬られて、引いて入る」 〔十一〕流産す。半産す。 〔十二〕期月來りても、請戻すこと能はずして、質物を沒收せらる。 〔十三〕行はれずにやむ。おながれになる。

ながるるが如し 【句】水の流るるが如くに滯らず進む。「裁決流るるが如し」「歲月流るるが如し」

ながるる霞 【句】りうか(流霞)〔二〕に同じ。

ながるる水歸り來(こ)ず 【句】過去りたる事物の後より追求めがたき譬。〔諺語〕 古今「きのふたぬ悔の八千度悲しきは流るる水の歸りこぬなり」

ながるる水は腐らず 【句】「流水(ﾘｭｳｽｲ)腐らず」に同じ。〔諺語〕

ながれ 流れての【句】後後に至りての。後世の。末末の。〔古語〕 更科「その日も、京をふり出でてゆかんも、いと心ぐるほしく、ながれての物語ともなりぬべきことや」 玉葉「する盥の色し見えずば水莖の流れての世の跡をとめばや」

ながれ 足流る【句】躓みとどまること能はず。 **ながれあし**(流足)參照。 平家「多くの官兵等、馬の足流れて、多く亡びにけり」

ながれ 脛(ﾊｷﾞ)流る【句】前條に同じ。 狂言「惡坊「酒に醉うたによって脛が流れて」 新版歌祭文「投ぐる刀を請損じ、たじろぐ所を附入って、兩脚(ﾘｮｳｱｼ)流れ、よろよろよろ、うんとのっけに倒れ臥し」

ながれ 勿れ・莫れ・毋れ【句】『無く有れの約』禁止に用ふる語。

ながれ 流【名】〔一〕水の流るること。流るるさま。流るる物。 〔二〕盃の酒の餘瀝。酒のあまり。おながれ。殘酒。 徒然「盃の底をすつることは…魚道なり。流を殘して、口のつきたる處をすすぐなりとぞ仰せられし」 〔三〕血統・流儀などを受傳ふること、またその受傳へたるもの。 古今「小町の小町は、いにしへの衣通

(ガレ)姫のながれなり」 増鏡「亀山院の御流絶ゆべきにはあらずとにや」 植城島原蜂合盟「流を正す源の氏の再興」 五流産。死産。 六次第に移りゆくこと。「思潮の流」 七ながれじち(流質)の略。 特許天皇歌軍法「質屋に石塔の流があるか」 八行はれぬこと。やめ。おながれ。 九屋根などの傾斜の度。かたながれ(片流)参照。「流なき屋根」 十遊女のはかなくうきたる生活、又その身の上。ながれわたり。ながれの身。 医土産「嶋原の座持女郎土佐といへる流なり」

流に嗽(ソヽグ)ぐ 【句】「石に枕し、流に嗽ぐ」を見よ。

流に棹 【句】次條の略。 騎射秘抄「射やうもよく、矢數もあらんは、流に棹のごとし」

流に棹さす 【句】水の流にしたがひて棹さし下るごとく、物事力を得て都合よくはかどる。 太平記「我とは事を起し得ず。あはれ、謀叛起す人のあれかし、與力せんと思ひけるところに、新田左兵衛佐・同少將のもとより内狀を通じて事の由を知らせたりければ、流に棹さすと悦びて」 「を見よ。

流に枕す 【句】「石に嗽(ソヽグ)ぎ流に枕す」

流に耳を洗ふ 【句】『顯川(ケイセン)の水に耳を洗ひし許由の故事に本づく。きよいう(許由)参照』前條に同じ。 津國女夫遇「人に頼まれぬ高名だて、知行ほしげに無益の事と、流れに耳を洗ひ樂しむ所」

流の遊君 【句】ながれめ(流女)に同じ。 曾我「我こそ出でて對面せざらめ、流の遊君をふさぐべきか」

流の君 【句】前條に同じ。 雪流小栗判官「元より長は海道一の有徳人、三十餘人の流の君を持たれしが」

流の里 【句】流女(ナガ)の居る里。遊里。 遊君三世相「難波の秋の西横堀…橋を四つ渡せるも、戀を通はす天の川、流の里に入りければ」

流の末 【句】その流儀にしたがふ末世の者。末流。流末(マツ)。 儀制(寛永)「玉水の水上(カミ)澄める御代ぞとて、流の末の我等まで、ゆたかにすめる嬉しさよ」

流の人 【句】ながれめ(流女)に同じ。 天の橋島「流の人の此後は絶えて心中せぬやうに」

流の身 【句】流女(ナガ)の境遇。川竹の流の身。 隠多小女郎浪枕「傾城どもにうち向ひ、汝等は流れの身、彼奴等に添ふは勤のならひ」

流の道 【句】流女(ナガ)の世を渡る道。 一代女「流の道あるほどは立てつくして、諸佛にも見限られ、神風や伊勢の古市(フルイチ)、中の地藏といふ所の遊山宿に身をなして、世間は娘といはれて、内證は地の御客を勤めける」

流の者 【句】次條に同じ。

流の女 【句】ながれめ(流女)に同じ。 蕪「ながれのをんな。是れ遊女の事也」

流を汲みて、水上(カミ)を知る 【句】次條に同じ。 諺語「流を汲みて、源を知る 【句】『摩訶止觀に「挹レ流尋レ源、聞レ香討レ根」とあるに本づく』事物の末を知れば、その本源を推知するを得。 諺語」

流を汲む 【句】その流儀にしたがひ倣ふ。傳はれる道を受けいれて修む。 千載「近きためしに堀河の流をくみてさざなみの寄りくる人にあつらへて」

流を立つ 【句】流女(ナガ)となりて、世をすごす。遊女の道を守る。遊女の意氣地を立つ。 吉野忠信「もとは九條の町にて、流を立てし身なれども」 傾城色三味線「ここに置いた扇が見えぬ。われらが持ちしは十一骨の、友禪が繪にゆく水に、茶筅を書いて、流を立つるといふ故事ぢや」

流を亂(ミダ)る 【句】『嗣雅に「正絕レ流曰レ亂」とありて、註に「橫レ流而濟レ之也」とあり』水流をつき切りて渡る。

同じ流を掬(ムス)ぶ 【句】「一河の流を汲むに同じ。 平家「一樹の陰に宿りあひ、同じ流をむすぶだに、別は哀しき習ぞかし」

ながれ 流 【助數】旗など、細長き物を數ふるに用ふる語。旒(リウ)。本(ホン)。 盛衰記「碪波(ちたてたり)」

ながれ-あし 流蘆 【名】流れ行く蘆。流るる蘆。 千載「みつ潮の末葉を洗ふながれ蘆の君をぞ思ふ浮きみ沈みみ」

ながれ-あし 流足 【名】『足流る』を見よ』

ながれ-あるき 流歩 【名】さすらふること。漂泊。流浪(ルラ)。 具町女腹切「親方に見限られつつ筒井筒、心の水をかへほして、流れ歩きにとぼとぼと」

ながれ-え 流江 【名】潮の滯らず流るる江。 續後撰「伊勢の海のをのの湊のながれえの流れても見ん人の心を」

ながれ-おとし 流落 【名】流水の如く高き處より低き處へすべり下ること。 盛衰記「馬の尻足引敷かせて、流落しに下したり」

ながれ-かは 流川 【名】水の滯らず流るる川。 續後撰「伊勢の海の鹽やく煙ながれ川」

ながれ-かわ 流川で尻を洗ふ 【句】心地の爽かになる體。 諺語」

ながれ-かれき 流枯木 【名】川水に流されて漂ひつく枯木。 俗曲(五人會我)「河原おもてを見渡せば、流枯木が棄てて有る」

ながれ-ぎ 流木 【名】一川水などに浮び流れたる材木。 和泉式部續集「ながれぎの上もかくれずなりぬるをあなあさましの水の心や」 夢浮橋「流木に尻摺き蛙かな」 二流刑に處せられたる罪人の體。 新古今「ながれぎとたつ白浪とやくしほといづれかからきわたつみのそこ」

ながれ-くだる 流下る 【動四自】ずんながる(順流る)に同じ。 增鏡「女院の御かはらけを齋宮まゐる。……あまた度流れくだりて、人人そほれがちなり」

ながれ-くぢら-うんじやう 流鯨運上 【名】江戸時代に、流鯨を引揚げたるときに、納めたる運上。落札高の十分の一と定められたり。

ながれ-くぢら 流鯨 【名】沖に漂流する鯨。

ながれ-くわんぢやう 流灌頂 【名】 【佛】密教の法要の一。我が國に發達せしものにて、河流に向ひて、六本の塔婆を矢來のごとく立並べて、六道に擬し、その各に六道能化(ノウケ)の本尊たる六地藏の種子(シュジ)と名號とを記し、光明眞言又は諸陀羅尼などを記したる幡を造りて施餓鬼壇に懸け、繩にて結びたる長き華鬘(ケマン)の紐を水中に浸すこと。流水その紐に觸れて、法味を遠く大海に送り、無數の水族は、ために大悲の救濟に浴し、その祕法修業の功德は、遠く流れて一切の群生に及び、有緣(ウエン)無緣の亡靈、特に離産にて死にし婦人の靈を脫苦得樂せしむるを得と傳へらる。七一職人歌合「流灌頂流させたまへ。卒塔婆と申すは、大日如來の三摩耶形。いかにせん五條の橋の下もせばけては涙の流灌頂」

ながれ-こ 流子 【名】一動物の産したる子。流産。 二【動】さぶんく常節)を云ふ。「土佐國の方言」

ながれ-こす 流越す 【動四他】水など流れて、物の上を越す。 藥村「砂川や或は蓼(タデ)を流れ越す」

ながれ-ごと 流事 【名】その場限りの事柄。その時限りに流れ失すること。 五人女「折から庭に人のなきことを幸に、…かの文(フミ)を、我が事我と遣しけるに、茂右衛門も、ながれ事に、…面白をかしきかへり事をして」

ながれ-こむ 流込む 【動四自】一流れて、その中に入る。流るるが如く入込む。 二茶「木曾山へ流れこみけり天の川」 三漂泊して、その仲間に入る。

ながれ-さく 流笏 【名】ながれぼし(流星)(二)に同じ。

ながれ-さしあみ 流刺網 【名】ながしあみ(流刺網)に同じ。

ながれ-さしち 流質 【名】期日を過ぎても、請戻すこと能はざる質物。

ながれ-しゆぎ 勿主義 【名】禁止・節制の一

流星(ナガレボシ)なる上に、一足の白きもの。 「絹」に同じ。 破鹽孤踏」

ながれ-ぢち 流質 【名】期日を過ぎても、請戻すこと能はざる質物。

ながれ-しゆぎ 勿主義 【名】禁止・節制の一

流笏の一白(イツパク) 【句】馬の毛色の一。流

方にて、奨勵發展の方面を等閑にする主義。消極主義。

ながれ-す 流洲【名】蘆の浮根などに土つもりて生じたる洲の、流にしたがひて移動するもの。謡曲(飛鳥川)「ことさら、けふは、流洲の瀬は定なきものを」

ながれ-そだち 流育【名】流の里に育つこと。流渡(ナガレワタリ)のそだち。「同じ。

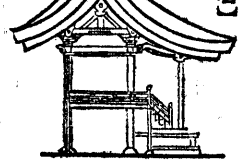
ながれ-だま 流丸【名】りうぐわん(流丸)に同じ。

ながれ-ち 流地【名】質流となりたる田地。

ながれ-つき 流突【名】冬の頃、水中に入らずして、船中より魚を突きて捕ること。

ながれ-づき 流月【名】質物の期限となりたる月。流質となるべき月。

ながれ-づくり 流造【名】【建】神社の建築法の一。側面は、破風造(ハフヅクリ)にて、屋根の前面の流は、後面のより長くして、向拝(カウハイ)をも幷せ覆ふやうにせるもの。ながれはふづくり。



(りくづれがな)

ながれ-はふ 流破風【名】【建】棟より軒までの長さの左右不同なる屋根における、側面の破風。

ながれはふ-づくり 流破風造【名】【建】ながれづくり(流造)に同じ。

ながれ-びたひ 流額【名】馬の毛色の一。額の白きもの。たいしゃく。

ながれ-ぼし 流星【名】■りうせい(流星)に同じ。■馬の毛色の一。額より下(斜に細長く白き斑あるもの、即ち星月(ホシヅキ)と流額との中間なるが如きもの。ながれさく。

ながれ-みづ 流水【名】りうすゐ(流水)に同じ。「じ。

ながれ-むし 流蟲【名】【動】あみいばに同

ながれ-むしや 流武者【名】水に流るる武者。流水に漂ふ武者。重帷子「先陣こされた宇治川に膝ぶりぶりの流武者」

ながれ-め 流女【名】うかれめ。ながれの女。なかれのもの。遊女。

ながれ-も 流藻【名】浮きて流るる藻。夫木「氷魚(ヒヲ)の寄る網代にかかる流藻のしばしまじるもいとはれやせん」

ながれ-もの 流物【名】■不用となりたる物。七一職人歌合「こひ衣袖をかへばや藏まはり絕えず涙のながれ物とて」■流質(ナガレシチ)の品物。

ながれ-や 流矢【名】りうし(流矢)に同じ。十訓「みづから攻めたまふほどに、流矢にあたりて」

ながれ-やき 流燒【名】刀身の燒(セ)の、流水の如き象あるもの。

ながれやま 流山【名】【地】下總國東葛飾(ヒガシカツシカ)郡にある町。江戸川の東岸。松戸町の北二里十町。味醂の産出を以て名高し。

ながれやま-みりん 流山味醂【名】下總國東葛飾(ヒガシカツシカ)郡流山町より産出する味醂。前條參照。

ながれ-ゆく 流行く【動四自】流れて行く。流轉しながら經てゆく。後撰「流れ行く水こほりぬる冬さへやなほ浮草のあとは止めぬ」讀俳家奇人談「流れ行く年につるるや老の膝」

ながれ-よる 流寄る【動四自】流れて寄る。流れて一所に集る。拾遺「なく泪よはみな海となりななんおなじ渚に流れよるべく」

ながれ-わたり 流渡【名】■川などを、水の流に任せて渡ること。盛衰記「高綱は…宇治川早しといへども、淵瀬をいはず、さざめかして、かねに渡し…梶原源太も、流渡に上りけり」■世の風潮に任せて渡りゆくこと。ゆきなり次第の世わたり。ぬめりわたり。小町踏貞因「年波にながれわたりの世間かな」俳諧新選(宇秀)「瓢箪のながれわたりや水の上」

ながろうじやう 長籠城【名】長く籠城すること。久しく城にたてこもること。

ながろお 長路地【名】長く續きたる路地。

ながわきざし 長脇指【名】■たけ長き脇指。おほわきざし。一代男「染分の組帶、背板華皮(ヅケガワ)の長脇指」■常に長脇指を佩び居る博徒。

なかわた 中綿【名】衣服・蒲團などの中に入るる綿。一代女「秋の小袖、ゆるし色にして、總鹿子、この辻を一つ一つ紙燭(シソク)にてこがし抜き、紅に染めし中綿、穴より見えすき、又もなき物好、著物一つに銀三貫目入りけるとなり」

なかわたり 中渡【名】古渡(コワタリ)と新渡(シンワタリ)との中間のころに渡來したること、又その物。(古渡(コワタリ)・新渡(シンワタリ)に對して)

なかわたり-いんでん 中渡印傳【名】印傳革の一。莫臥兒(ムガル)に似たれども、裏に紅脈あるもの。

なかわたり-さんとめ 中渡棧留【名】棧留革の一。鮫下(シボ)の鼠色なるもの。

なかわたり-やぎういんでん 中渡野牛印傳【名】印傳革の一。茶褐色にして、一面に絞(シボ)あるもの。

なかわづらひ 長煩【名】長き間病むこと。ながやみ。長病(ヂヤウビヤウ)。一代男「手かけ者といふも、上つ方の世つぎの無きを嘆き、あるひは、内義長煩のうち、融むわざにはあらず」

なかわん 中椀【名】大いき親椀(ワン)に次ぐ椀。汁物を入るるに用ふ。しるわん。一代男「岩倉の松茸を燒いて、中椀に二つ飲み」畑城反魂香「門出(イデ)祝ふ中椀に、例の熱燗三杯引っかけ、打立(ウツ)つ所に」

なかゐ 中居・仲居【名】■高貴の家の奥の間(マ)の一。又そこに召使はるる女。おんなかだち。おなかゐ御中居參照。一代女「大道(ダイドウ)筋の何がし殿の御隱居とかや、中居分(ブン)にして、御寢間近く夜の道具のあげおろしばかりに召抱へられたしと尋ね來りて」■『遊女と客との中間に立ちて、用を辨ずる者の義』京都・大阪の色茶屋にて、遊女を扶けて、客をとりなす、老功の下女。てなが。心中二枚綺草紙「花車や仲居・娘にまで仕著(シキ)をして取らせうと、約束ばかりにて夢らぬゆゑ」世間旦那氣質「客來大切にして、中居・小女郎など抱へて」■つま、妻(□)を云ふ。「甲斐國の方言」

なかゐ 中井【名】姓氏の一。德川時代に長門國に住居せし歸工の一家。古くは象眼を主とし、後、透(スカシ)を主とし、長州鐔の名、天下に高かりきといふ。

なかゐ 長居【名】久しく同じ處に居ること。長く其の場を去らぬこと。長坐。咨稿「などて、久しうながゐしつる」歌木「卯の花のさかりならずば山里にくる人ごとにながゐせましや」

長居する鷺、墓目(ハカメ)に逢ふ【句】 長居して禍を招く譬。他人の家を訪問して長居するを戒めたる語。長居鷺、汁になる。「諺語」 永鳥記「酒の樽の數に戀慕して、心も坐ろに浮立ち、時刻の移るも辨へず。長居する鷺、墓目に逢ふとは是かや」北條時分談「長居する鷺引目にあふ」

長居は恐あり【句】 前條に同じ。「諺語」 醫曲(盛久)「長居は恐ありと、罷申(マカリマウシ)仕り、退出しける盛久が心の中」

長居をすれば、物を見る【句】 『物を見るを見よ』前條に同じ。「諺語」

なかゐ 長井【名】【地】■羽前國西置賜(オキタマ)郡に在る町。最上(モガミ)川の左岸。郡役所を置く。**ながゐむら**(長井納)參照。■武藏國大里(オホサト)郡にある村。古、長井庄と稱し、齋藤實盛の地に住して、長井別當と稱したり。■日向國東臼杵(ヒガシウスキ)郡北川村の字。可愛(エ)嶽の東麓、延岡・大分間の國道に沿ふ。明治十年西南役の激戰地なり。

なかゐ 永井【名】姓氏の一。德川家康に仕へし永井直勝を祖とす。直勝の父は長田(ヲ)直吉と呼びしに、長田は源義朝を弑せし逆臣の姓なればとて、家康の命にて、永井に改めたりといふ。明治維新後、本家なる舊美濃國加納の藩主、支流なる舊攝津國高槻の藩主の二家、共に子爵を授けらる。

ながゐ-うた 永井雅樂【名】【人】志士。毛利侯の臣。名は隆徇、通稱は與之助。後、隼人(ハヤト)また右近と改む。雅樂は藩主より賜はれる稱。開國の說を持し、又公武合體に努む。藩命を帶びて京に使せし時、命を矯めて、開國の策を中山大納言に呈す。文久三年捕へられて、自裁を命ぜらる。年四十五。

ながゐ-うら 長井浦【名】【地】いさざき(絲崎)を見よ。

なかねーがしら 仲居頭【名】江戸幕府の大奥の御中居の長。

ながねーさぎ 長居鷺【名】次條を見よ。

ながねーさぎ 長居鷺汁になる【句】『汁になるとは、捕へられて煮らるる意』「長居する鷺、葦目(アシマ)に逢ふ」に同じ。(諺語)

なかねーしろあん 中井甚庵【名】〔人〕儒者。名は誠之、字は叔貴、通稱は四郎、又、忠藏。播磨國龍野の人。三宅石庵の門人。大阪に移り住み、懷德書院を創立して、專ら宋學を唱へ、寶曆八年歿す。年六十六。

ながねーしりがい 長井鞦【名】長井[二]より製し出だせる鞦なるべしといふ。尺素往來「那波鎧・長井鞦」

なかねーせうあん 中井蕉園【名】〔人〕儒者。名は曾弘、字は伯毅、通稱は遠藏、介庵、又、仙波とも號す。竹山の長子。大阪に住み、享和三年歿す。年三十七。

なかねーせきぜん 中井積善【名】〔人〕なかねせきさん(中井竹山)を見よ。

なかねーせきとく 中井積德【名】〔人〕なかねりけん(中井履軒)を見よ。

なかねーちくざん 中井竹山【名】〔人〕儒者。名は積善、字は子慶、通稱は善太郎。竹山、又、同關子と號し、晚年、漱翁(ソウオウ)と號す。甚庵(ジンアン)の長子。大阪に住み。宋學を主とし、亦詩文に通ず。文化元年歿す。年七十五。草茅危言・逸史・非論語徵等の著あり。くわいとくえきあん(懷德書院)參照。

ながねーつむぎ 長井紬【名】『長井[二]がその集散地となるよりいふ』よねざはりうきう(米澤琉球)に同じ。

ながねーてっせん 永井鐵線【名】紋所の一。永井氏の家紋なる鐵線。

なかねーとのばら 仲居殿原【名】御俗勤(ゴゾクヅトメ)の役を勤むる人の敬稱。

ながねどーぬま 長井戸沼【名】〔地〕下總國猿島(サシマ)郡に在る沼。南北二十町。池水は利根川に注ぐ。

ながねなし 永井梨【名】『永井氏の祖直勝の案出して、その家紋と定めしものなるよりいふ』からなし(唐梨)の俗稱。

ながねなほむね 永井尙志【名】〔人〕政治家。舊江戸幕府の旗下。通稱は岩之丞。介堂と號す。安政年間、幕府の海軍を創設するや、その議に參し、後、外國奉行となる。明治維新の際、函館に據り、獄に下さる。のち赦に逸ひ、開拓使御用掛・元老院權大書記官となり、同二十四年歿す。年七十六。

ながねーのいけ 長居池【名】〔地〕攝津國東成(ナルガリ)郡長居村にある池。南北十八町、東西二町。堀川後百首「すめらぎの長居の池に水すみて、のどかに千代の影ぞ見えける」

なかねーらんかう 中井蘭江【名】〔人〕畫家。名は直、字は伯養、通稱は泰藏、別號、鄰古。大阪の人。鄧(レイ)翁月に學び、人物を善くし、兼ねて山水に長ず。天保元年歿す。年六十五。

なかねーりけん 中井履軒【名】〔人〕儒者。名は積德、字は處叔。德二と號す。甚庵の第二子。竹山の弟。五井蘭洲に學ぶ。諸說を折衷して、一家を成す。又、文章・書を善くす。文化十四年歿す。年八十六。七經雕題略・通語・擴斥茅議・昔昔春秋等の著あり。くわいとくえきあん(懷德書院)參照。

ながねる 長居る「勘上一段」長居をなす。源氏「いとどながねさぶらひたまふを」和泉式部續集「いづこにかここら久しくながねつる山より月の出でて入るまで」

なかねーをんな 中居女・仲居女【名】なかね(仲居)[二]に同じ。一代女「戀の中居女をして、硯にありし時、御隱居のかみさまになぶりものとなりぬ」「はしらあ。

ながあ 長繪【名】一枚摺の丈長き浮世繪。

なかあちこ 中越後【名】〔地〕越後國のうち、米山(ヨネヤマ)以北、阿賀野川以南の地域、即ち刈羽(カリハ)・三島(ミシマ)・古志・南蒲原(ミナミカンバラ)・西蒲原・中蒲原の六郡の總稱。(上越後・下越後に對して)

ながを 長尾【名】[一]〔地〕安房國安房(アハ)郡にある村。本多氏の舊藩地。[二]〔地〕筑前國嘉穗(カホ)郡上穗波(カミホナミ)村の大字。延喜式の長立(ナガタチ)驛の地。米山を越えて太宰府に通ず。古の官道なり。新拾遺「はるかにぞ今ゆくすゑを思ふべき長尾の村の長きためしに」[三]〔地〕相模國鎌倉郡にある村。近世は、鄕名にして、郡中七鄕の一たり。次項參照。[四]姓氏の一。鎌倉權五郎景政の六男定景を祖とす。定景、相模國鎌倉郡長尾村に居り、地名を取りて氏としもの。子孫、管領上杉氏の被官となる。越後の上杉家に屬せし爲景(カゲカゲ)自立し、その三子景虎、鎌倉管領山內(ヤマウチ)の上杉憲政の、小田原の北條氏のために勢衰へて、來り投ずるに及び、その氏を譲らる。上杉謙信これなり。うすゐすぎ上杉[二]參照。

ながをあんぐう 長峽行宮【名】景行天皇熊襲御親征の時、豐前國長峽縣(ナガタノアガタ)に建てられきといふ行宮。現時、何れの地なるや明かならず。

ながをか 長岡【名】[一]〔地〕舊陸奥國五十四郡の一。今の陸前國遠田(タダ)郡田尻・富永・中埣(ナカノ)諸村に相當するものの如しといふ。[二]土佐國七郡の一。郡役所を大篠(オオシノ)村に置く。[三]越後國にある市。信濃川の東岸。新潟市の東南約十七里。石油事業の中心地。牧野氏の舊藩地。[四]〔地〕今の山城國乙訓(オトクニ)郡のうち、向日(ムカウ)町、乙訓村・新神足(シンカタリ)村の邊に亙れる地域の舊稱。その地の跡、今は西岡(ニシオカ)と呼ぶ。ながをかのみや(長岡宮)參照。千五百番歌合「ながをかや田づらの庵のあれまくにめざめいざなふ鳴のはねがき」[五]ながをかもりよし(長岡護美)の略。

ながをかーかげとら 長尾景虎【名】〔人〕うへすぎけんしん(上杉謙信)を見よ。

ながをかーけんもつ 長岡監物【名】〔人〕[一]勤王家。熊本藩士。本姓は米田。名は是容、初名は壹岐。西鄕隆盛・藤田東湖等と深く交り、一藩推して師表となす。安政六年歿す。年四十八。[二]ながをかもりよし(長岡護美)を見よ。

ながをかーけんもつ 長岡監物【名】〔人〕[一]勤王家。熊本藩士。本姓は米田。名は是容、初名は壹岐。西鄕隆盛・藤田東湖等と深く交り、一藩推して師表となす。安政六年歿す。年四十八。[二]ながをかもりよし(長岡護美)を見よ。

ながをかーじやう 長岡城【名】越後國長岡市にありし牧野氏の居城。

ながをかーてんわう 天岡天皇【名】〔人〕くさかべのわうじ(草壁皇子)を見よ。

ながをかーのーみささぎ 長岡陵【名】『長岡に都のありし時の御葬所なるよりいふ』たかはたのみささぎ(高畠陵)に同じ。

ながをかーのーみや 長岡宮【名】桓武天皇のおはせし宮。山城國長岡の地にありしもの。延曆三年平城(ナラ)より遷り、平安遷都の時まで、十三年間の帝都たり。その跡は、今の向日(ムカヒ)町大字雞冠井(カケヰ)にあり。

ながをかーもりよし 長岡護美【名】〔人〕政治家。子爵。熊本藩主細川韶邦(ヨシクニ)の弟。長岡監物と稱して勤王攘夷の說を唱へ、諸藩の名士と交り、朝幕の間に斡旋せり。明治維新後參與となり、海外に留學して法學を修め、歸朝後、遠祖藤孝の祀を紹(ツ)ぎて、長岡と稱し、和蘭特命全權公使・元老院議官・貴族院議員となる。明治三十九年薨ず。年六十五。

ながをかーをんせん 長岡溫泉【名】伊豆國田方(タカタ)郡川西村大字長岡にある溫泉。泉質は單純泉に屬す。

ながをかーけんしん 長尾謙信【名】〔人〕うへすぎけんしん(上杉謙信)に同じ。甲陽軍鑑「御當家に對し、第一の强敵とさす長尾謙信公」

ながをためかげ 長尾爲景【名】〔人〕武將。越後の上杉家の家宰。上杉謙信の父。小字は六郎、彈左衞門尉と稱し、剃髮して欽竹庵謙怒と號す。永正四年その主越後の守護上杉房能の、謀を信じて己れを誅せんとするや、戰ひてこれを害し、また房能の兄上杉顯定を信濃國に敗死せしめてより、勢大いに振ふ。天文五年歿す。

ながをーてら 長尾寺【名】讃岐國大川(オホカハ)郡長尾村にある天台宗の寺。本尊は觀世音。補陀落山と稱し、天平十一年僧行基の創建といふ。四國八十七番の札所。

ながをてるとら 長尾輝虎【名】〔人〕うへすぎけんしん(上杉謙信)に同じ。

なかーをどり 中踊【名】多數の人の輪をなして踊る時、その中央にありて、踊ることを

かといふ。俳諧獨子「三味線の胸なべていざや中をどり」

なかをどり 長尾鶏【名】〔動〕ちやうびけい（長尾鶏）に同じ。

なかをのみさざき 中尾陵【名】光孝天皇の御生母藤原澤子の陵。京都市下京區今熊野野町字垣内にあり。仁明天皇の皇妃なるも、特に追尊して、陵と稱す。

なかをり 中折【名】㊀中ほどを折りかへすこと。㊁なかをりがみ（中折紙）の略。

ながをりう 長尾流【名】書道の御家流の一派。長尾半左衞門の創めたるもの。

なかをりがみ 中折紙【名】『もと二つに折りて懐中したるよりいふ』石見・土佐・豐後等より産する和紙。楮の黒皮より製し、半紙判と美濃判との中間の大いさになしたる和紙。竪一尺五分内外・横八寸四分あり。懐中紙として用ふ。

なかをれ 中折【名】㊀中央の折れてまがり、又は窪むこと。㊁次條の略。㊂なかをれぼうし（中折帽子）の略。

なかをれげた 中折下駄【名】下駄の臺の、中ほどより折れて、自由に曲るやうにつくれるもの。なかをれ。

なかをれぼう 中折帽【名】次條の略。

なかをれぼうし 中折帽子【名】羊毛・パナマ及び羅紗にて造り、鍔ありて、頭の上の中央の部にて、縦に折凹めたるもの。なかをれぼう。なかをれ。

なかをれまめ 中折豆【名】〔植〕「果實の種子と種子との間の部分に節ありて、たやすく折るるより名づく」ささげ（草合歡）に同じ。

なき 泣【名】㊀泣くこと。㊁〔商〕泣を入れて解け合ふこと。〔取引所の語〕

泣の涙【句】涙を流して泣悲しむこと。悲しみ泣くこと。〔俚語〕「泣の涙で、日を送る」

泣を入れる【句】㊀泣きつくやうに、ひたすら詫入り、または頼み込む。哀訴歎願す。㊁〔商〕相當の値段にて解約を懇願す。なく（泣く）㊂參照。〔取引所の語〕

なき 和風【名】『風は風止（や）むとの意にて作れる和字』海上の風波の鎭まること。

あさなき（朝風）**ゆふなぎ**（夕風）參照。

なぎ 竹柏・梛・栘【名】〔植〕『竹柏の字は、葉のさまの竹に似たるより云ふ。梛の字は、支那の原意は、この木に當らざれども、古來那木の二合の意に用ひ來れり。又栘は、その字音ナンを轉用せしなるべしといふ』㊀位（ゐ）科に屬する常綠喬木。幹は直立し、生長速かならざれども、老大なるものは高さ七丈に達す。葉は、强靱にして光澤あり、楕圓形にして平行脈を有し、竹の葉に似たり。六月頃、穗狀の單性の花、雌雄異株に開く。我が國南部の暖地に自生し、材は緻密にして、器具・建築等の用に供せらる。なぎのき。ほそばのなぎ。ちからしば。

（ぎな）

増鏡「雫ゐる山」「なぎの葉風のかしこきにひとり道ある小車の跡」滿數座之歌「今度御座らば持て來てたもれ、伊豆のお山の梛の葉を」

なぎ 水葱【名】〔植〕こなぎ（小水葱）に同じ。萬葉「ひしほ酢に蒜（ひる）搗きかてて鯛もかも我れにな見せそ水葱のあつもの」

なぎ 葱（ねぎ）の花の御輿（みこし）【句】『葱は「ねき」、古名「き」にて、野菜の一なるより、菜葱（ねぎ）の義にていふかといふ。或は又、和名の類似せる上、漢字も葱の字を共にせるより、混同して訓じ誤れるものといふ』**そうくれん**（葱花輦）に同じ。

なぎ 神【名】〔植〕みづあおい（水葵）を云ふ。

なぎ 凪【名】㊀〔植〕みづあおいの鮎鮎こそは島へもえきえ苦しゑなぎのもと芹のもとあれは苦しゑ」㊁〔植〕あさざ（荇菜）を云ふ。〔駿河國の方言〕㊂山の崩れたる所を云ふ。〔甲斐國の方言〕

なぎあかす 泣明す【動四自】泣きて、夜をあかす。夜どほし泣く。詞苑「夜の鶴一都のうちにこめられて子をこひつつも鳴きあかすかな」

なぎあぐ 啼上ぐ【動下二自】ますます聲高くなく。琵琶「犬のもろ聲に、長長となきあげたる」

なぎあはせ 啼合【名】うぐひすあはせ（鶯合）に同じ。

なぎあふ 泣合ふ・鳴合ふ【動四自】互になく。一所になく。千載「いにしへを戀ひつつひとり越えくればなきあふ山のほととぎすかな」

あきあま 泣尼【名】㊀泣く尼。涙もろき尼。㊁能の狂言の一。田舍者、親の年回なりとて、都より僧を招きて、法談を請ふ。僧、泣く癖ある尼を連行き、法談の要所にて泣かしめんと思ひしに、尼泣かずして居眠ることを作れるもの。

なぎいかだ 梛筏【名】〔植〕百合（ゆり）科に屬する常綠小灌木。高さ一尺内外、葉は小形、披針形にして鱗狀を成し、葉腋より卵形、扁平なる綠色の枝を生じ、小形帶白色の花を著く。原産地は歐羅巴洲。觀賞用として廣く栽培す。地下部は藥用に供せらる。

なぎいぢ 泣意地【名】他人に負くることを口惜しがりて泣くこと。泣（なき）辨慶。なみだ辨慶。（關西の方言）

なぎいらる 泣きいらる【動下二自】泣きて、心いらる。いらいらしく思ひて泣く。大和「かくなん思ふといはざりける事のいみじきことを思ひて、なきいられて」

なぎいる 泣入る【動四自】『いる（入る）は接尾語』正體のなきまで泣く。泣き沈む。源氏「あかず悲しくて、御供に參りなんと泣入りたまひて」

なぎうかす 泣浮かす【動四自】枕床などを、涙にぬらす。山家「夜の床をなきうかされん郭公ものおもふ袖を訪ひにきたれば」

なぎうち 薙打【名】薙ぎて打ること。横薙に打つこと。義經記「なぎうちに、一度に緣より下になぎおとしける」

なぎおとし 泣落【名】なきおとすこと。浮世床「南無阿彌陀佛を泣きおとしにして、座を退く世話女房」

なぎおとす 泣落す【動四自】泣沈む。泣入る。芝居の狂言にて泣伏す動作。春秋五大力「これを見て、堪忍して下さんせいなあとなきおとす。始終、あひ方」

なぎおとす 薙落す【動四他】薙ぎておちさす。義經記「なぎうちに、一度に緣より下になぎおとしける」

なぎかなしぶ 泣悲しぶ【動四自】次條に同じ。記「哭泣悲哀、ナキカナシブ」

なぎかなしむ 泣悲しむ【動四自】泣きてかなしむ。悲泣す。宇治「泣きかなしめども、いふかひもなし」

なぎかはす 鳴交す【動四自】互に鳴く。こもども鳴く。源氏「夕されば萱が茂みに鳴かはす蟲のねをさへ分けつつぞゆく」

なぎかへる 泣返る【動四自】『かへる（返る）は接尾語』甚しく泣く。〔古語〕蜻蛉「なきかへる聲ぞきほひて聞ゆなる待ちやしつらん關のひぐらし」

なぎかほ 泣顔【名】㊀泣きたる顔つき。なきつら。琵琶「なきがほづくり、けしきことになせど、いとかひなし」㊁泣かんばかりの顔つき。

なぎがま 薙鎌【名】草刈鎌の形せる武具。盛衰記「熊手薙鎌、手手にさげ」

なぎがら 亡骸【名】亡き人のかばね。しかばね。屍體。遺骸。源氏「かのなきがらをみざさんが、いといぶせかるべきを」

なぎからす 泣嗄す・鳴嗄す【動四他】泣きて、聲をからす。源氏「松蟲のなきからしたる聲も」

なきかる 泣嗄る・鳴嗄る【動下二自】泣きて、聲かる。源氏「蟲の音もなきかれて」

なきさちかひ 泣氣違【名】然るべき理由なきに憂悶して泣く精神病、又その人。

なきくづる 泣頽る【動下二自】次條に同じ。

なきくづる 泣崩る【動下二自】强く泣きて、正體無くなる。正體なく泣く。

なきくどく 泣口說く【動四自】泣きてくどく。泣きながらくどく。盛衰記「賢き父

の愚かなる子を教ふる樣に、泣口說き教訓したりければ」

なきくらす 泣暮す 鳴暮す【動四他】泣きて、日をくらす。終日泣く。源氏「つれづれとわが泣きくらす夏の日をかごとがましき蟲の聲かな」

なきこがる 泣焦る【動下二自】思ひこがれて泣く。源氏「なきこがれたまふに」

なきごと 泣言【名】わが身の不幸を歎きて話すこと。愚痴をこぼすこと。よまひごと。愁訴。雲女五枚羽子板「目覺し高名御感狀を拜受し、今の泣言止ぶぞや」

なきごと-を 無き事を【枕】わが身の上に、實際覺えのなきことをいはるといふ意より、いはれ(謂)(名)にかけていふ。拾遺「無き事をいはれのいけのうきぬなはくるしきものは世にこそありけれ」

なきこふ 泣戀ふ【動上二他】泣きて戀ふ。

なき-こふ 泣戀ふ【動上二他】泣きて戀ふ。古今「泣戀ふる涙に袖のそぼちなばぬぎかへてらよるこそはきめ」玉葉「泣戀ふる袖にはいかが宿すべき蟲り習はぬ秋の夜の月」

なきごゑ 泣聲 鳴聲【名】■泣叫ぶ聲。狭衣「なき聲は、まして、いとわりなけれど」俳諧新選(孤桐)「泣聲の獄屋に高き霜夜かな」■泣かんとして語る聲。涙ぐみたる聲。

なぎ-さ 渚【名】『和名(ワミヤウ)の義にて、荒磯に對する語といふ』水邊の波の寄る處。みぎは。萬葉「古のふるき堤は年ふかみ池のなぎさに水草おひにけり」「に同じ。

なき-ざくり 泣噦【名】なきじゃくり(泣噦)

なき-さけぶ 泣叫ぶ【動四自】聲を放ちて泣く。號泣す。

なぎさ-づたひ 渚傳【名】なぎさを傳ひ行くこと。新古「漕入はなぎさづたひに漕ぎまはせとあさもあらば舟もこそゐれ」

なぎさ-の-みや 渚宮【名】次條に同じ。歌枕名寄「夜もすがらおきの鈴鴨はふりしてなぎさの宮にねつづみ打つ」

なぎさ-の-ゐん 渚院【名】文德天皇の皇子惟喬(コレタカ)親王が交野原(カタノ)に營まれし別業。今の河內國北河內郡牧野村大字渚(ナギサ)の地にある西雲寺はその跡なりといふ。土佐「任果ててのぼりける道にて、なぎさの院の梅の花を見て詠みはべりける」河內名所圖會「渚院は、今觀音堂となす。堂前に、五本櫻とて、枯朽して纔かに存せり」

なき-さわぐ 泣騷ぐ【動四自】泣きて騷ぐ。さわがしきほど泣く。源氏「夜中ういち過ぐるほどになん絶えてたまひぬるとて、泣きさわげば」

なきさはの-もり 泣澤森【名】大和國にある森。この地に、なきさはめの神をまつる。萬葉「なきさはのもりにみわ据ゑいのれどもわが大君は高田しらしぬ」

なきさはめ-の-かみ 泣澤女神【名】伊弉諾(イザナギ)尊の御子。香具(カグ)山の麓にいませりといふ。

なき-しきる 鳴頻る【動四自】しきりに鳴く。源氏「ひぐらし鳴きしきりて」

なき-しづむ 泣沈む【動四自】泣きて伏沈む。なげきしづむ。涙に沈む。泣入る。源氏「いかでかはおくれじと、泣沈みたまへど」

なき-しまふ 泣仕舞ふ・鳴仕舞ふ【動四自】なきやむ(泣止む)に同じ。吉野「聲に皆なきしまうてや蟬の聲」

なき-しみづく 泣沈著く【動四自】泣きに泣く。ひた泣きに泣く。冥土飛脚「泣きしみづきて語るにぞ」

なき-じやうご 泣上戸【名】酒に醉へば泣く癖、又その癖ある人。(怒上戸・笑上戸に對して)繪田兵衛名所盡「泣上戸と申す癖有って、酒に醉へば吠上る」

なき-じやくり 泣噦【名】さくりながら泣くこと。すすりなき。ないじやくり。なきざくり。

なき-しをる 泣萎る【動下二自】泣きて、力を失ふ。なきくづほる。源氏「泣きしをれておはするも、いと心ぐるし」

なき-すすり 泣噦【名】すすりなき(啜泣)に同じ。

なき-すつ 鳴捨つ【動下二他】鳴きて後を顧みず。(多く時鳥の上にいへり)玉葉「鳴きすてていづちいく田の時鳥名殘をとむる森の下蔭」續千載「ほととぎす聲もたかねの橫雲に鳴捨てて行く曙のそら」

なぎすつ 薙捨つ【動下二他】薙ぎて切捨つ。俳諧新選(猿蓑)「首途(カドデ)や鬼の醜草薙ぎすてん」

なきそう【名】(植)なすび(茄子)を云ふ。(京都の語)

なぎそで 薙袖【名】袖口の下の方を、薙刀の如き形に仕立てたる袖。

なぎその 竹柏園【名】佐佐木弘綱の號。

なきそふ 泣添ふ・鳴添ふ【動下二他】泣きたる上に、また泣く。泣聲を添ふ。續千載「曉の鳥のや聲に一聲を鳴添へてゆくほととぎすかな」

なきそぼつ 泣濡つ【動下二自】泣きて、涙のために濡る。起「玉ゲには飯(イヒ)さへ盛り玉もひに水さへ盛り泣きそぼち行くも影姫あはれ」

なき-そむ 鳴初む【動下二自】なきはじむ。なき出だす。なきいづ。風雅「日影殘る籬の草に鳴初めて暮るるを急ぐきりぎりすかな」

なき-だす 泣出す・鳴出す【動四自】前條に同じ。俳諧古選(晉月)「鳴出して米こぼしけりいな雀」

なき-そぼつ 泣濡つ【動下二自】泣きて、涙のために濡る。起「玉ゲには飯(イヒ)さへ盛り玉もひに水さへ盛り泣きそぼち行くも影姫あはれ」

なき-そむ 鳴初む【動下二自】なきはじむ。なき出だす。なきいづ。風雅「日影殘る籬の草に鳴初めて暮るるを急ぐきりぎりすかな」

なき-だす 泣出す・鳴出す【動四自】前條に同じ。俳諧古選(晉月)「鳴出して米こぼしけりいな雀」

なきたふる 泣倒る【動下二自】泣きて倒る。なきまろぶ。

なきたま 亡魂【名】亡き人のたましひ。ばうこん。亡靈。傾城酒呑童子「われこそ弘徽殿のなき魂よ」鎌倉(也有)「なき魂や尋ねて雲になく雲雀」

なきちらす 鳴散す【動四他】鳥など鳴きて、その羽風にて花などをちらす。新續古今「鶯の鳴きちらすらん春の花いつしか君と手をりかざさん」

なきつく 泣付く【動四自】泣きてすがりつく。泣かぬばかりにして救を求む。

なきつくす 泣盡す・鳴盡す【動四他】泣きたきだけ泣く。聲又は涙のかぎり泣く。續後拾遺「何せんに鳴きつくしけん時鳥君がためにと聲ををしまで」新後拾遺「長き夜は絕間もあれや蟲鳴きつくすべき恨ならぬを」「便。

なきつつら 泣面【名】なきつら(泣面)の音す」を見よ。

なきつつら 泣面【名】なきがほ(泣顏)を賤めていふ語。なきっつら。

なきつつら 泣面【名】次條の略。(諺語)泣面に蜂【句】次條の略。(諺語)泣面を蜂が螫(サ)す【句】■小兒の泣きつつある顏を、蜂が螫して、一入泣かしむ。■鞠のために苦しめる上に、更に鞠の加はる譬。泣妹噌(ハヤ)を蜂が螫す。(諺語)「に。

なぎづら 薙面【名】なぐりづら(撲面)に同じ。

なきとよむ 泣響む・鳴響む【動四自】多くの人、共に聲を立てて、甚しく泣く。源氏「上下ゆすりみちて泣きとよむに」

なきとよむ 泣響む・鳴響む【動下二他】次條に同じ。(古語)萬葉「曉の月にむかひて行きかへり鳴きとよむれどいかがあきたらむ」

なきとよもす 泣響す・鳴響す【動四他】なきとよましむ。萬葉「ほととぎす花橘の枝に居てなきとよもせば花は散りつつ」

なぎとる 薙取る【動四他】薙ぎて切取る。狂言(宗論)「片はしより、双物をもってなぎとり」

なきな 無名【名】跡方もなき評判。むじつの惡名。寃聞。古今「あやなくてまだきなきなのたつた川わたらでやまんものならなくに」傾城酒呑童子「死したる人に無名を負はせなき-なき 泣泣・鳴鳴【副】なくなく(泣泣)に同じ。吉野「時鳥なきなき飛ぶぞいそがはしき」

はし」

なぎなた 長刀・薙刀【名】刃長く廣くして反(ゾ)り、長き柄を取附けて、敵を薙拂ふに用ふる武器。柄の長さは三尺乃至六尺三寸にて、一定せず。大長刀・小長刀・兩刃長方・小反刃長刀等の種類あり。後世は、多く、婦女・僧侶などの用とす。長刀。眉尖刀。〔三〕薙刀を用ひて敵を擊つ武術。荒山合戰記「三宅備後守は長刀の名人にて、大勢に渡合ひ、八方透さず斬ったれば」〔三〕**なぎなたざうり** 長刀草履の略。浮世風呂「草履はなぎなただらうが鑓だらうが、履きちがへられてはすまぬ」

なぎなた-あいさつ 長刀挨拶・薙刀挨拶【名】次條に同じ。

なぎなた-あしらひ 長刀接待・薙刀接待【名】相手の間ひかくる鋒先を受けつ流しつ應答して、程よくあしらふこと。なぎなたあいさつ。

なぎなた-あひしらひ 長刀接待・薙刀接待【名】前條に同じ。吾嬬我妻「寄長刀戀、あるる時はやりどめにしつある時はつらきなぎなたあひしらひかな」

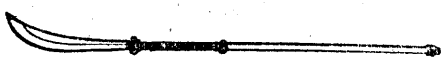
なぎなた-からじゅ 長刀香薷・薙刀香薷 香薷【名】【植】唇形(クチビル)科に屬する一年生草本。高さ二尺餘。方形にして毛あり。葉は卵狀披針形にして鋸齒を有す。花は秋季開き、白色にして微紫紅を帶び、穗狀花序に排列す。香高し。各地の山野に自生す。いぬあらなぎ。いぬえ。からじゅ。

なぎなたざうり 長刀草履・薙刀草履【名】履きふるし、經(タテ)の絲磨りきれて、長刀形(ナギナタ)に歪みたる草履。なぎなた。

なぎなた-なり 長刀形・薙刀形【名】〔一〕薙刀の刃のごとく横に反(ソ)歪みたる形。〔二〕他人の言ふところに逆らはず、程よく受け つ流しつすること。「の一」。

なぎなたば 長刀羽・薙刀羽【名】鷲の羽

なぎなたばうず 長刀坊主・薙刀坊主【名】〔一〕頭のそりたるばかりといふ意』文盲なる僧侶。



なぎなた-ぶくろ 長刀袋・薙刀袋【名】長刀の刃の部分にかぶせおく鞘袋。丹波與作「長刀袋・傘袋」

なぎなたぼこ 長刀鉾・薙刀鉾【名】京都の祇園神社の祭禮に曳く山車の一種。川波の里「祇園會の長刀鉾のきっさきに」

なぎなたほほづき 長刀酸漿・薙刀酸漿【名】海酸漿(ウミホホヅキ)の一種。赤辛螺(ニガナ)の卵嚢。形、長刀形をなし、海中の木石に附著す。酸漿(ホホヅキ)に代用して、婦女子の玩ぶものなり。

なぎなたやく 長刀役【名】江戸幕府の職制の一。將軍出行の際、長刀を持ちて隨行せしもの。

なきな-のみ 無き名のみ【枕】〔一〕なき名、即ち無實には評判立ちやすく、又四方に擴まりて高くなるといふ意より、たつ(立つ)又たか(高)にかけていふ。拾遺「なき名のみたったの山の麓には世にもあらしの風や吹かなん」同「なき名のみ高尾の山にいひいづる君はあたごの峯にやあるらん」

なきぬらす 泣濡らす【動四他】泣きて、涙にぬらす。萬葉「白妙(タヘ)の袖なきぬらし給へり」源氏「袖のいたう泣きぬらし給へり」

なきぬる 泣濡る【動下二自】泣きて、涙に濡る。

なきね 泣寐【名】小供などの、泣きながら疲れて眠ること。

なきねいり 泣寐入【名】〔一〕前條に同じ。〔二〕不服ながらも、その儘にして止むこと。續藤葉毛「まはり遠き望にして、つひに得がたく、果は泣寐入にして」「に同じ。

なぎ-の-き 竹柏・梛木【名】〔植〕なぎ(竹柏)

なぎ-の-せん 那岐山【名】美作國勝田郡と因幡國八頭(ヤ)郡との間に聳立する山。花崗岩より成る。高さ四一六〇尺。

なきのしる 泣罵る【動四自】大聲にて泣く。なきわめく。竹取「我こそ死なめとて、泣き罵ること、いとたへがたげなり」

なきのはなの-みこし 慈の花の御輿【句】なぎ(水葱)の條下を見よ。

なぎはこべ 竹柏繁縷【名】〔植〕『葉の形、竹柏(ヤ)のに似たるよりいふ』しこたんはこべ(色丹繁縷)に同じ。

なきはじむ 泣初む・鳴初む【動下二他】はじめてなく。なきだす。なきそむ。古今「東雲の別を惜しみわれぞまづ鳥よりさきになき初めつる」「鴨」に同じ。

なきはらす 泣腫らす【動四他】「目を泣腫らす」を見よ。當世風の姿「傾城瀬川、二重眼ぶちも泣きはらし」「薩ぐ。

なきはらふ 薙拂ふ【動四他】横に打拂ふ。

なきはる 泣腫る【動下二自】「目泣腫る」を見よ。薗鶯「ただ時の間に泣きはれておりたまふを」

なきひと 亡人【名】今は、世になき人。死にたる人。芭蕉「なき人の小袖も今や土用干」

なきふくろ 鳴嚢【名】蛙の雄の咽喉にありて鳴聲を發する、一種特異の器官。うたぶくろ。

なきぶし 梢節【名】なげぶし(投節)の舊稱。

なきふす 泣伏す【動四自】泣きてふしづむ。竹取「竹取心まどひて泣伏せるところに」

なきふす 薙伏す【動下二他】なぎたふす(薙倒す)に同じ。謡曲「土蜘蛛」「足もためずなぎふせつつ」

なきふどう-えんぎ 泣不動緣起【名】〔書〕ふどうりゃくえんぎ(不動利益緣起)に同じ。

なきふどり 泣太【名】赤子の、泣くにつれて、その運動によりて太るといふこと。

なきふる 鳴古る【動上二自】鳴聲ふるくさくなる。鳴聲珍しくなくなる。新千載「鳴きふりて後に語らへ郭公老いて聞くべき初音ならずば」

なきふるす 鳴舊す【動四他】しばしは鳴きてその聲をふるくす。續後撰「いくとせか鳴きふるしてし時鳥かみなび山の五月雨の空」

なきへんけい 泣辨慶【名】なきいち(泣意地)に同じ。關西の方言。

なきまさる 泣勝る・鳴勝る【動四自】ますますなく。源氏「いと泣きまさりて」

なきまつり 泣祭【名】陸中國中尊寺の近傍なる、清原基衡の室(安倍宗任の女)の墓と稱するものの供養。每年、四月二十日に行はる。

なきまどふ 泣惑ふ【動四自】甚しく泣きしづむ。前後もわきまへぬまで泣く。源氏「人人いみじう泣きまどふ」「き。

なきまね 泣眞似【名】泣くまね。そらなき。

なきまろぶ 泣轉ぶ【動四自】ふしまろびて泣く。なきたふる。榮花「泣きまろばせたまふこと、限なし」「び。

なきみそ 泣味噌【名】なきむし(泣蟲)に同じ。泣味噌を蜂が螫す【句】「泣面を蜂が螫す」に同じ。諺語

なきみつ 泣滿つ【動四自】泣聲滿つ。滿場泣聲のみなり。源氏「宮の內ゆすりて泣きみちたり」

なぎむ 和む【動四自】なごむ(和む)に同じ。【古語】萬葉「見るごとに心なぎむとしげやまの谷邊に生ふるやまぶきを宿にうゑて」

なきむし 泣蟲【名】泣きやすき性質、また、泣くわざをつとめし女。記「雉を哭女(ナキ)とし」

なきめ 鳴女【名】ななきめ(名鳴女)を見よ。

なきもだふ 泣悶ふ【動下二自】泣きて煩悶す。もだへて泣く。盛衰記「人目も知らず泣きもだへけり」

なきものぐさ 無物草【名】〔植〕うきぐさ(浮萍)に同じ。〔古語〕。大鏡「草合(クサアハセ)しはべりける所に、種なくてなきものぐさやまの谷邊に生ふるやまぶきを宿にひきうゑて」

なきやう 奈行【名】〔語〕五十音圖の第五行、即ち「な・に・ぬ・ね・の」の五音。

なきやう-へんかく 奈行變格【名】〔語〕次條の略。

なきやう-ものにす 無き物にす【句】なし無しの條下を見よ。

なぎやう-へんかくわつよう 奈行變格活用【名】〔語〕動詞の活用の一。「な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ね」と活用するもの。「往(イ)ぬ」と「死ぬ」との二語あるのみ。

なき-やむ 泣止む・鳴止む【動四自】なくこと止む。なきしまふ。玉葉「松蟲も鳴止みぬなる秋の野に誰れ呼ぶとてか花見にも來(こ)ん」續後撰「ふくろふの鳴きやむ岨(ソバ)の若菜かな」

なき-やる 泣きやる【句】なく(泣く)の條「下を見よ。

なき-ゆく 泣行く・鳴行く【動四自】なきて過ぎゆく。なきながらゆく。萬葉「なぐさむる心はなしに雲がくり鳴きゆく鳥のねのみしなかゆ」後選「天雲に鳴きゆく雁の音にのみ聞きわたりつつ逢ふ由もがな」

なきよ-がたり 無世語【名】『無き世』を見よ』なき後の世の話の種となること。死後の風評。謡曲實盛「名を洩らしたまふなよ。亡き世語も恥かし」

なき-より 泣寄【名】難儀に出あひたる時、親しき者の助を借ること。蜻蛉「親(シン)は泣寄、他人は食寄(コヨセ)」異土飛脚「からからした傾城に、かうして、譯の金がいる、ひそかに便宜もするならば、親(シン)は泣寄、親子なり」

なき-よわる 泣弱る・鳴弱る【動四自】鳴きて、疲れて聲よわる。玉葉「鳴きよわる葎が下のきりぎりす今いくかとか秋を知るらん」

なきり 菜切【名】なきりばうちやう(菜切庖丁)に同じ。

なきり-ばうちやう 菜切庖丁【名】庖丁の、刃薄くして、先の尖らぬもの。日常、蔬菜を切るに用ひ、單に庖丁といへば、主としてこれを指す。うすば。ながたな。なきりたな。なっきりばうちやう。

なきり-すげ なきり菅【名】〔植〕莎草(カヤツリ)科に屬する多年生の草。葉は叢生し、細くして、長さ一尺ばかり、緣邊粗糙なり。九月頃、葉間より長き花軸を出し、數個の小さき穗を著く。原野・路傍の陰地に自生す。

なきり-ばうちやう 菜切庖丁【名】庖丁の、刃薄くして、先の尖らぬもの。日常、蔬菜を切るに用ひ、單に庖丁といへば、主としてこれを指す。うすば。ながたな。なきりたな。なっきりばうちやう。

なぎる 和ぎる・凪ぎる【動上一自】『なぐ(和ぐ)を見よ』なぐ(和ぐ)の訛。

なきわかる 泣別る・鳴別る【動下二自】鳴きながら別る。別るるに臨みて、悲しさに泣く。萬葉「かすがぬにいぬる鶯なきわかれかへりますともおもほせわれを」

なき-わかれ 泣別・鳴別【名】なきわかること。

なき-わたる 鳴渡【動四自】鳴きて渡る。鳴きつつ過ぎゆく。萬葉「うちなびく春ともしるく鶯はうゑ木のこまを鳴きわたらなむ」同ほととぎすなき渡りぬと告ぐれどもわれ聞きつがず花は過ぎつつ」

なぎ-わたる 和渡る・凪渡る【動四自】一面になぐ。源氏「海のおもては、うららかとなぎ渡りて」

なき-わぶ 泣侘ぶ・鳴侘ぶ【動上二他】なきて思ひわぶ。わびしくて泣く。なげきわぶ。榮花「鳴きわびしあまたの聲と聞くばかり」續千載「泣きわびて身を空蟬(ウツセミ)となりぬれば恨むる聲も今は聞えじ」

なき-わめく 泣喚く【動四自】なきさけぶ(泣叫ぶ)に同じ。

なき-わらひ 泣笑【名】泣きながら笑ふこと。盛衰記「北の方より始めて、出でたまひつる心苦しさに、今は皆泣笑して喜びあひたまへり」

なきをとこ 泣男【名】ともすれば泣く癖のある男。

なきをとこ-さへゑ 泣男左兵衛【名】〔人〕すぎもさへゑ(杉本左兵衛)に同じ。

なく 泣く【動四自】■『ね(音)と同一の語源より出づ』感情の興奮に堪へかねて、迫りたる聲を出だし、又は涙を流す。■赤子又は鳥・獸・蟲など、聲を發す。「鳴く・啼く」■〔商〕泣(サ)を入れて解けあふ。(取引所の語)

泣いても笑っても【句】如何にしても、外に方法なき形容。「泣いても笑っても これっきり」

泣く口には物食(ク)ふ【句】悲歎の中にも食を廢する能はず。相模入道千疋犬「泣く口には物くふと聲に違はず、今日限る命にも、ひだるさこらへかね」

泣く口へは食(ク)はれるが、笑ふ口へは食はれぬ【句】『前條を見よ』笑ひながら物を食ふこと難し。諺語

鳴ける泉【句】めいせん(鳴泉)に同じ。

七十五度泣く【句】子を養育するに苦勞する形容。諺語

一たび鳴けば、人を驚かす【句】「飛べば必ず天に沖す」を見よ。諺語

なく 泣く【動下二他】泣かす。泣かしむ。〔古語〕萬葉「なせの子やとりの中ちし中だをれあをねし泣くよいくつくまでに」同「武藏ねのをみね見かくし忘れゆく君が名かけてあをねしなくる」

なく 不【助動】打消の助動詞ずの連體形「ぬ」の延。〔古語〕萬葉「ももしきの大宮人の飽田津に船のりしけむ年の知らなく」古今「深山には松の雪だに消えなくに都は野邊の若菜摘みけり」

なぐ 薙ぐ【動四他】横に打拂ひて切る。源氏十二段長生殿「返す太刀にて薙ぎたまへば」

薙ぐ手【句】薙刀の使ひ方のうち、薙拂ふ方法。幸若(鎌田)「薙刀のきっ手には、こむ手、開く手、八ばうさびしき薙刀の手」

なぐ 和ぐ・凪ぐ【動四自】『風の字は、風止(ヤ)むの意の和字にて、風波の上に用ふ。なぐさむ(慰む)參照』心又は風波おだやかになる。しづまる。なごむ。土佐「海はあれど、心はすこしなぎぬ」

なぐ 和ぐ・凪ぐ【動上二自】『前條を見よ』前條に同じ。〔古語〕萬葉「あひみてはしばしも戀はなぎむかと思へどいよよ戀ひまさりけり」

なぐ 投ぐ【動下二他】■手に持ちて飛ばし遣る。取りて彼方へはふりだす。はふる。なげうつ。投(カ)ず。伊勢「沓(クツ)はとりて、奥に投入れてのぼりぬ」源氏「さらに筆なげすつべしやとねたがり給ふ」宇治「狐身をなげてにげれども、おひせめられてえ逃げず。■「身を投ぐ」を見よ。■投與す。施與す。報捨す。喜捨す。投(カ)ず。沙石集「資財をなげて、などか助成したまはざるべき」

なくこ-なす 啼兒如(ナ)す【枕】■啼兒のごとくの意にて、赤子は、啼くのみにて言葉を發せず、又、腹遣ひゆきて物を探り取り、又、啼きて親を慕ふより、ねのみしなく(音のみし啼く)ことだにさはず(言だに問はず)ゆきとりさぐり(往取探り)及びしたふ(慕ふ)にかけていふ。萬葉「なく兒なすねのみしなかゆ」同「哭(ナ)く兒なすゆきとりさぐり」同「不知火のつくしの國になく子なす慕ひきまして」

なぐさ 慰【名】なぐさみ。なぐさめ。**ところなぐさ**(心慰)參照。〔古語〕萬葉「さぬかたは實にならずとも花のみも咲きて見えこそ實にならずとも」

なぐさ 名草【名】〔地〕紀伊國の舊郡の一。明治二十九年、海草(カイソウ)郡に合併せらる。

なぐさ-の-はま 名草濱【名】〔地〕紀伊國名草山の麓なる海濱。

なぐさ-の-はまみや 名草濱宮【名】崇神天皇の朝、倭姫命、天照大神を齋(イツ)き祀りし宮。其の趾は、紀井國海草(カイソウ)郡三井寺村大字毛見浦に在り。

なぐさみ 慰【名】■なぐさむこと、又その材料となる物事。こころやり。うさはらし。きばらし。なぐさめ。たのしみ。なぐさ。日本武尊吾妻鑑「てんどうに子が殺されるか、慰に腹が切られるか」■なぶりて樂しむこと、又その材料となる物。なぶりもの。翫弄物。■博奕(バクチ)。手あそび。

なぐさみ-がき 慰書【名】なぐさみ半分に書くこと、又その書きたる物。

なぐさみ-がくもん 慰學問【名】なぐさみ半分になす學問。「聲ふ藝。

なぐさみ-げい 慰藝【名】なぐさみ半分になす藝。

なぐさみ-ごと 慰事【名】なぐさむ材料となる事柄。狂言腰はにかみ「なんぞ、なぐさをなぐさみごとせいと」

み事して参りたう御座るの」

なぐさみ-はんぶん 慰半分【名】なかば慰にすること。氣まぐれにすること。みがてら。おもしろはんぶん。

なぐさみ-もの 慰物【名】なぐさむ材料となる物。もてあそびもの。若風俗「世渡の悲しさに、大臣の慰者となって、今日も、この席に連なり」

なぐさみ-もん 慰物【名】前條の訛。浮世風呂「物見・遊山(ユサン)のなぐさみもんぢやあねえ」

なぐさみ-をんな 慰女【名】慰物となる女、即ち遊女など。一代男「出雲崎といふ所に、舟宿のあるじを招き、この所のなぐさみ女はと尋ねければ」

なぐさむ 慰む【動四自】『なぐ(和ぐ)より派生せる語』物思を忘れて、しばし樂しむ。しばし憂さを晴らす。心なごむ。千載「おもひねの夢になぐさむ戀なればあはれど暮の空ぞ待たるる」

なぐさむ 慰む【動下二他】㊀他人の心をなぐさむやうにす。他人の憂さをしばし晴らす。なぐさめる(慰もる)參照。萬葉「なぐさめてこよひはねなむあすよりは戀ひかゆかむ今別れなば」㊁なだむ。すかす。だます。㊂いたはる。ねぎらふ。

なぐさむ 慰む【動四他】㊀前條に同じ。枕「山鳥は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せたれば、なぐさむらん」㊁なぶりて樂しむ。愚弄す。㊂女を犯す。節操を弄ぶ。

なぐさめ 慰【名】なぐさむること、又その材料となる物事。なぐさ。慰籌(サン)。

なぐさめ-がほ 慰顔【名】なぐさめんとする樣子。なぐさむるやうなる顏つき。風雅「いはねともつらしと思ふ色や見ゆるなぐさめ顏に人の恨むる」

なぐさめ-ぐさ 慰草【名】なぐさむる材料とする物事。源氏「なぐさめぐさにて、見すぐしつべし」

なぐさめ-どころ 慰所【名】なぐさむべきところ。なぐさめとなる場所。枕「妹ひとりあるばかりにぞ、思ふ事をも打語らひ、なぐさめどころなりける」狹衣「限だにな き御物思は、いとど口をしく、なぐさめどころだになし」

なぐさもる 慰もる【動他】下二段活用のなぐさむ(慰む)の連體形「慰むる」の轉。〔古語〕萬葉「草まくら旅の憂をなぐさもることもあらむと」

なぐさやき 名草燒【名】享保元年以來紀伊國和歌山鈴丸十次郎家にて燒出したる陶器。

なぐさやま 名草山【名】〔地〕紀伊國海草(カイソウ)郡三田(ミタ)村の西南、雜賀(サイカ)川の東岸に横はれる山。山腹に紀三井寺あり。萬葉「名草山ことにしありけり我が戀の千重の一重もなぐさめなくに」

なぐし 和し【形二】なごし(和し)に同じ。〔古語〕丹後風土記「此處我心奈具志久」

なくす 無くす【動四他】なくなす(無くなす)に同じ。「じ。

なくそ 【名】〔動〕むぎわらへび(麥藁蛇)に同じ。

なく-たづの 鳴く鶴の【枕】㊀鶴の鳴くといふによりて、ね(音)にかけていふ。萬葉「わぎも子に戀ひつつをれば明けくれの朝霧がくり鳴くたづのねのみし泣かゆ」㊁たづといふより同音を重ねて、たづね(尋ね)にかけていふ。古今「君を思ひ沖つの濱に鳴くたづのたづねくれればぞありとだに聞く」

なくとりの 鳴く鳥の【枕】鳥は常に鳴くものなるより、まなくきなく(間無く時無く)にかけていふ。萬葉「ふる衣きならの山に鳴く鳥のまなく時なくわが戀ふらくは」

なく-なく 泣泣く【副】なきながら。なきつつ。源氏「よろづのことを、なくなく契りのたまはすれど」榮花「なくなくといふばかりに申させたまへば」栁樽「泣く泣くも善い方を取るかたみわけ」

なく-なす 無くなす【動四他】㊀無きやうにす。失ふ。絶えしむ。なくす。㊁「無きものにす」に同じ。盛衰記「興隆佛法の法師等をなくなしたまふことのいとほしさよ」㊂死なす。死別す。なくす。後撰「人をなくなして、かぎりなく戀ひて」

なくならかす 無くならかす【動四他】なくなす(無くなす)に同じ。續猿蓑毛「足駄もかたっぽ無くならかした。そこらに有るづらあ」

なく-なる 無くなる・亡くなる【動四自】㊀無きやうになる。無に歸す。消ゆ。盡くる。うす。たゆ。ほろぶ。㊁死ぬ。歿す。源氏「われなくなりぬとて」「と。

なくにがへ 名國替【名】名替と國替(ニ)

なくはし 名細し【形二】『くはし(細し)を見よ』名うるはし。名高し。はなくはし(花細し)參照。〔古語〕萬葉「名ぐはし吉野の山はかげともおほみかどゆ雲居にぞ遠くありける」同名ぐはしいなみの海の沖つ波ちへに隱りぬ大和島根は」

なく-や 投矢【名】なげや(投箭)に同じ。〔古語〕萬葉「梓弓末ふりおこしなぐやもち千ひろ射わたし」

なぐら 名倉【名】㊀〔地〕三河國北設樂(キタシタラ)郡にある村。田口町の北方山間にあり。名倉砥の産出を以て名高し。㊁なぐらど(名倉砥)の略。〔納庫〕

なぐら-ど 名倉砥・納庫砥【名】三河國北設樂(キタシタラ)郡名倉村の山中より出づる砥石。太古、鳳來寺山噴火の飛灰土中に堆積して成れるものなるべしといふ。品質きはめて緻密、合砥(ガフド)として貴ばる。なぐら。

なぐり 殿擲【名】木材を手斧(チョウナ)にてつり、又はそれに似せて、凸凹あるやうに仕上ぐること、又そのもの。

なぐり-がき 殿書・擲書【名】書畫文章などを筆に任せて、率意に書くこと、又その書きたるもの。書きなぐること、又その物。

なぐり-がひ 殿買【名】利益の點を顧みずして買ふこと。

なぐり-ころし 殿殺・擲殺【名】なぐりころすこと。たたきころし。

なぐり-ころす 殿殺す・擲殺す【動四他】殿りて殺す。殿打して殺す。たたきころす。

なぐり-つく 殿附く・擲附く【動下二他】『つく(附く)は接尾語』なぐる(殿る)を強めていふ語。

なぐり-づら 殿面・擲面【名】なぐり(殿)にしたる木材の面。なぎづら。

なぐり-とばす 殿飛ばす・擲飛ばす【動四他】力まかせに捨てたたく。はりとばす。

なぐり-なさけ 殿情・擲情【名】「無氣(サン)情」に同じ。關八州繁昌記「此の程のなぐりなさけに、瓢をなりとも置いて行け」

なぐり-ぬひ 殿縫・擲縫【名】急ぎて粗末に縫ふこと。

なぐり-ゆひ 殿結・擲結【名】髪を、急ぎて粗末に結ふこと。

なぐる 殿る・擲る【動四他】『なぐと同一の語源より出づ』㊀横さまに打つ。打擲す。殿打す。はたく。たたく。ぶつ。ぶんなぐる。㊁手さきにてする業を、粗末に仕上ぐる。なげやり半分に物す。念を入れずに物す。

なぐる【動下二自】㊀横ざまに逸(ソ)れゆく。わきみちに出づ。㊁うれのこる(賣殘る)に同じ。㊂病氣久しく癒えず。㊃正道にはづる。身を持ちくづす。おちぶる。墮落す。零落す。

なぐる-さの 投ぐる矢の【枕】『さは矢にて「投ぐる矢」はなげや(投矢)の意』投矢の遠く飛びゆく緣より、とほざかる(遠ざかる)にかけていふ。萬葉「なぐるきの遠ざかりゐて思ふ空安からなくに」

なぐれ 【名】『なぐるの假體言』㊀横さまに逸(ソ)ること、又その物。㊁賣れのこること、又その物。㊂病氣の久しく癒えぬこと。㊃身を持ちくづし、又落ちぶること。墮落。落魄。㊄なごり(餘波)に同じ。凡兆「矢田の野や浦のなぐれに鳴く千鳥」

なぐれ-もの なぐれ物【名】賣れのこりたる物。ろうずもの。

なぐれ-もの なぐれ者【名】身を持ちくづし、又は落ちぶれたる人。

なげ 投【名】㊀投ぐること。㊁相撲(スマフ)の手の一。四つに組み、上手(カミテ)又は下手(シタテ)に相手の褌(フンドシ)を取り、片手に相手の差手を押へ、腰を入れて投ぐること。上手なると下手なるとによりて、上手投・下手

投の名あり。㊀〔商〕定期取引にて、買方又は賣方の目算外れ、其の建玉により生ずる損失。明かにして、挽回の見込立たざる時、それ以上の損失を避けんが爲に、轉賣・買戻により、賣買を決すること。(入(ヒ)に對して)㊁なげおし(投押)の略。吉野史信「逢ひたさ見たさの唱歌をば、投に歌ひつ書いて見つ」 歌土產 吉原の揚屋町、廓ばかりの寄所(ヨリドコ)、引うたひのなげも、勤とて、臺前より夜中すぎまで、かひなと聲のつづく程は、一日十七匁に當るほどわめきける」

なーげ 無氣【感】㊀無きがごとくなるさま。㊁有るに甲斐なく思はるるさま。心からにてはあらぬさま。精神の籠りてあらぬさま。ないがしろ。なほざり。かりそめ。なげやり。なげら。〔古語〕古今「いざけふは春の山邊にまじりなん暮れなばなげの花の陰かは」 源氏「なげの、走り書いたまへる御筆づかひ・言の葉」 榮花「もと人がらは口惜しきはにはあらざりけるにや、なげの老人(ロウド)とも見えず」

なげーあぐ 投上ぐ【動下二他】上の方へ投ぐ。はふりあぐ。(なげおろすに對して)

なげーあし 投足【名】足を投出して坐ること、又その足。なげずわり。「與」に同じ。

なげーあふぎ 投扇【名】⇒とうせんきょう(投扇)

なげーあみ 投網【名】⇒とあみ(投網)に同じ。

なげいだす 投出す【動四他】㊀投げて外方へ出す。なげだす。なげいづ。㊁投げつけるやうに差出す。放棄す。なげだす。

なげいづ 投出づ【動下一他】前條㊀に同じ。〔古語〕源氏「あづまぢぬどもを押卷きつつ投出でつ」

なげいる 投入る【動下二他】投げて、內に入るやうにす。なげこむ。はふりこむ。投入す。伊勢「香はとりて、奥になげいれんとす」 曾我「花をつかんで投入るるに、心利たる宮仕」

なげいれ 投入【名】㊀活花をするに、不自然なる技巧を加へずして、無造作にすること。なげいればな。〔拋入〕生花傳「野山の錦「投入とは、ずっと入れ候うて、いろひ申さぬがゆゑ、山に咲き、野に生(ハ)ゆるとほりにいきいきとおもしろく出來るものなり」 徒然草「砂土投入の梅の風は鬼の豆」 ㊁和船の艙立(アヲ)となる臺。

なげいればな 投入花・拋入花【名】前條㊁の方法にて活けたる花。又その方法。生花傳「拋入花は卽興の翫物」

なげーうち 投打・擲・拋【名】㊀投げつけて擊つこと。讀曲「それに刀物を投打して、だまし討に殺さうや」 ㊁小供などの、戯れに物を投げて、人に取らすること。

なげーうつ 投打つ・擲つ・拋つ【動四他】㊀投げて遣る。なげつく。なげすつ。㊁惜しまず差出す。すつ。なげすつ。放擲す。

なげーうり 投賣【名】⇒とうり(捨賣)に同じ。

なげえぼし 投烏帽子【名】『その形、投げつけたるが如くなるよりいふ』⇒えぼし(菱腐烏帽子)に同じ。

なげおろす 投下す【動四他】投げておろす。(投上ぐに對して)

なげーかぎ 投鉤【名】敵の船などに投げつけて引掛くるに用ふる鉤。百合若大臣「野守鏡「なげ槍・投鉾・投鉤を打かけ打かけ」

なげーかく 投掛く・投懸く【動下二他】㊀投げてうち掛く。落窪「この下襲(クダガ)も、只今縫ひたまはずば、ここにもなおはしそとて、腹立ちて、なげかけて、立ちたまふに」 ㊁投げてうち掛くるやうにして著る。太平記「城の本人佐和善四郎並に郎等三人、腹巻取って、肩に投懸け」 謠曲「夜討曾我「膚(ダ)には鎧の袖を解き、草摺かろげにざっくと投げかけ、上には薄衣引きかづき」

なげかく 歎かく・嘆かく【動自】なげく(歎く)の連體形の延。〔古語〕萬葉「旅に往く君かも慰ひむ思ふ空安くあらねばなげかくをとどめもかねて」

なげかし 歎かし・嘆かし【形二】⇒なげかはし(歎かはし)に同じ。〔古語〕源氏「なげかしうおぼしわたる」

なげかしがる 歎かしがる・嘆かしがる【動四他】なげかしく思ふ。〔古語〕竹取「同じ心になげかしがりけり」

なげかす 歎かす・嘆かす【動自】なげく(歎く)の敬語。萬葉「夕されば床打拂ひぬばたまの黒髪しきていつしかとなげかすらむぞ」

なげがね 投金【名】「唐(カラ)へ投金」を見よ。

なげかはし 歎かはし【形二】なげくべくあり。かなし。なげかし。

なげかふ 歎かふ・嘆かふ【動四自】なげく(歎く)の延。〔古語〕萬葉「われに語らくはしきよし…君は比來(コロ)うらさびて歎かひいます世間(ヨノナカ)のうくつらけく」

なげき 投木【名】植ゑずに、根の附きたるまま投げおく木。誹「十月の投木」

なげき 歎・嘆【名】『長息(ナガイキ)の約轉』㊀なげくこと。深く感じて溜息つくこと。歎息。萬葉「たびにしていもをおもひでいちじろくひとのしるべくなげきせむかも」 ㊁悲しむこと。うれへ。悲嘆。盛衰記「歎の中にもうれしくて、門を開きて入れたり」 ㊂切にこひねがふこと。うれへ。哀願。歎願。愁訴。 領城墓原蛙合戰「此の里を出でたらば、嘆をいうて暇をとり」

なげきの色 【句】歎く樣子。歎くおももち。(歎などに、多くは木の色といふ意を含めて用ひ來れり) 源氏「世の中の歎きの色を知らねばやこぞに變らぬ蔦のもみぢ葉」

なげきの霧 【句】歎きて出だす溜息を霧に譬へていふ。〔古語〕萬葉「おきつ風いたく吹きせばわぎも子がなげきのきりにあかましものを」

なげきの中の喜 【句】歎かはしきうちにも喜ばしきこと。百合若大臣「君を助け申すこそ、歎の中の喜なれ」

なげきの森 【句】大隅國の森の名を、歎の繁きにかけていふ。⇒なげきのもり(歎森)參照。金葉「いかにせんなげきの杜は茂れども木の間の月のかくれなき世を」

なげきーあかす 歎明す・嘆明す【動四他】歎きつつ夜を明かす。新續古今「思ひやれ歎の夜すがら寢覺してなげきあかせる袖の雫を」

なげきーあまる 歎餘る・嘆餘る【動四自】餘りに深く歎く。歎きてたへやらず。千載「歎き餘り知らせめつる言の葉も思ふばかりは言はれざりけり」

なげきいる 歎入る・嘆入る【動四自】『いる(入る)は接尾語』深く歎く。

なげきぐさ 歎種・嘆種【名】悲嘆の本となる物事。源氏「朝夕の御なげきぐさなり」

なげきーことば 歎詞・嘆詞【名】〔語〕⇒かんたん(感歎詞)に同じ。

なげきーごえ 歎聲・嘆聲【名】歎きて出す聲。歎く聲。歎の聲。歎聲(ゴエ)。

なげきしづむ 歎沈む・嘆沈む【動四自】なげかはしさに、思に沈む。なきしづむ。太功記「悲しいわいのと、どうと伏し、歎きしづめば」

なげきじに 歎死・嘆死【名】歎き歎きて死ぬること。歎きつつ死ぬること。義經記「十六と申す年、つひになげきじにになりにけり」

なげきのもり 奈牙木森・歎森【名】〔地〕大隅國姶良(アイラ)郡國分(コクブ)村大字內村にある森。蛭兒祠あり。古事記に蛭兒三歳に至れども脚立たず、これを磐櫲樟(クスノキ)船に載せて、風に順ひ、放棄すとあり。その蛭兒の漂著せる處と言傳ふ。「歎の森」參照。

なげきぶん 投銀【名】⇒なげがね(投金)に同じ。

なげきーわたる 歎渡る・嘆渡る【動四他】長き年月かけて歎く。源氏「おこたり難く物せらるるを、やすからず歎渡りつるに」

なげきーわぶ 歎侘ぶ・嘆侘ぶ【動上二自】わびしく思ひて歎く。泣きわぶ。新拾遺「歎きわび逢ふとばかりをいかにして暮せる宵の夢にだに見ん」

なげく 歎く・嘆く【動四自】『なげき(歎)を見よ』㊀深く感じて溜息をつく。歎息す。歎(ナゲ)ず。萬葉「わがせこが振りさけみつつ嘆くらむきよき月夜に雲なたなびき」 ㊁悲へかなしむ。悲嘆す。萬葉「往くみちのたづきをしらに思へどもしるしをなみ歎

けどもおくかをなみ大御袖ゆきふれし松を」㊁切に乞願ふ。哀願す。愁訴す。嘆願す。古今「よの中にさらぬ別のなくもがな千代もと歎く人の子のため」歎きやる【句】歎きなさる。歎きたまふ。狂言(武悪)「そなたが歎きやるのをば思うて」

なげ-ぐし 投櫛【名】櫛を投ぐること、又その櫛。上古、不吉なりとして忌みたり。『夜忌二郷櫛一(ヨナシニ)、此其縁也』

なげ-ぐち 投口【名】相撲(スマフ)などにて、相手を投ぐる手。相手を投ぐる取口。

なげく-なげく 歎く歎く・嘆く嘆く【副】歎きながら。浄瑠「あさましくうちとけたまへりつるものをなど、なげくなげくうち臥しぬ」

なげ-くび 投首【名】思案に餘りて、首を右又は左に傾くること。桂川連理柵「難儀を何と投首し、しをしを歸る我が家の内」

なげ-け 無氣氣【貌】**なげ**無(氣に)同じ。「古語」新六「忘れじの契もえこそ頼まれねなげけにいひし人の言の葉」

なげ-けみ 投檢見【名】江戸時代の檢見の一。役人を村に派出し、その宿泊所に村吏を召喚し、豊凶を尋問して、談判の上にて、その年の年貢を定めしもの。

なげ-こす 投越す【動四他】投げて、物の上を越えしむ。萬葉「たぶてにもなげこしつべきあまの川隔てればかもあまたすべなき」

なげ-こみ 投込【名】㊀なげこむこと。㊁**なげこみでら**(投込寺)の略。

なげこみ-ぐすり 投込藥【名】流涎・齒齦炎等の中毒症状を發しやすきため、齒に當てぬやうに、喉に投込みて服するよりいふ』**けいふん**(輕粉)に同じ。

なげこみ-でら 投込寺【名】死者を葬るに、新に穴を掘らず、かねて設けおきたる大穴へ投入るるを許す寺。なげこみ。

なげ-こむ 投込む【動四他】投げて入れ込む。なげいる。はふりこむ。

なげ-ころす 投殺す【動四他】投げつけて殺す。千両幟「どう魂膽してなりとも、投殺さにやならぬ相撲(スマフ)」

なげ-さうば 投相場・投相場【名】〔商〕投(分)㊀の相場。なげうりの相場。

なげ-ざん 投算【名】物を投げ、その上にあらはれたる方の表なるか裏なるかによりて、吉凶を判斷すること。俚言集覽「俗に清明が投算といふことあり、京房卜易卦以レ錢擲以二甲子一起レ卦見ゆ。又錢を擲ち、その表裏を見て、吉凶を定むるあり」

なげ-ざや 投鞘【名】『**なげづきん**』(投頭巾)を見よ』毛皮などにて造りたる袷の鞘の、未を長くし、後方へ折りて、垂らし置くもの。薩摩歌「與大名の長道中、奴が首も投鞘に、紺に手柄をつくつくつく」

なげし 長押・承塵【名】『承塵は、實は長押とは異なれども、古來慣用し來れり。レ**ようぢん**(承塵)參照』鴨柄の上、又、敷居の下に、別に裝飾のために横さまに互したる材。上なるを上(カミ)長押、下なるを下長押といひ、後世は、專ら上なる方のみをいへど、大なる家には、落縁(オチエン)より敷居までの間高きより、下にも設け、上長押と同じく釘隱を打つなり。榮花「御堂の造りざま、…壘一敷しくばかりの程、長押の高さ四寸ばかり上げて造りて」増鏡「御几帳ばかりを隔てて、長押の下へ、西園寺大納言實兼・善勝寺大納言隆顯召さる」

なげし-びき 長押挽・承塵挽【名】〔建〕木口の矩形なる材を斜に左右同形に卽ち引違(ヒキチガヒ)に挽き割ること。

(きびしけな)

なげ-しまだ 投島田【名】**さげしまだ**(下島田)に同じ。一代女「つとなしの投島田」天の網島「むごや惜し氣もなげ島田、はらりと切って投げすつる」

なげ-すつ 投棄つ【動下二他】㊀投げて棄つ。うちやる。ほかしすつ。なげうつ。投棄(ナゲ)す。㊁**なげうつ**(投打つ)㊁に同じ。

なげ-すて 投棄【名】なげすつること。うつちやり。放擲。

なげ-すわり 投坐【名】小供のまだ正しく坐ること出來ず、足を投出して坐ること。なげあし。

七月(ナヽツキ)の投坐【句】小供生れて七箇月の頃には、投坐ながらも坐るを得るに至ること。「諺語」

なげ-ぜに 投錢【名】大道藝人などに、觀客より投げ與ふる錢。なげせん。「に同じ。

なげ-ぜにうら 投錢占【名】**ぜにうら**(錢占)

なげ-せん 投錢【名】**なげぜに**(投錢)に同じ。膝栗毛「投錢を網に受けつつ、往來の人を茶にする宇治橋の元」

なげ-たいまつ 投松明【名】燒打の目的を以て、敵陣などに投ずる松明。太平記「投松明の先に火を附けて」同「拋續松(ナゲツヾケマツ)、塀より外へ投出し投出し、靜まりかへりて見えけるが」

なげ-だし 投出【名】㊀なげだすこと。放擲すること。㊁料理屋などに行きて、最初より若干の金を出し、その額だけにてまかなはすること。

なげ-だす 投出す【動四他】㊀**なげいだす**(投出す)に同じ。㊁もちいだす。

なげ-ちらす 投散す【動四他】投げて散す。方方へまく如くに投ぐ。空蟬「おほい殿の君はなげちらしてのたまふ」

なげ-つかはす 投遣す【動四他】投げてつかはす。なげとらす。なげやる。空蟬「おし卷きてなげつかはしつ」

なげ-つき 投突【名】投擲・投矢などをなして突きさすこと。

なげ-づきん 投頭巾【名】『**なげざや**(投鞘)を見よ』頭巾の上の方を後へ折りてかぶるもの。黒縮頭巾。井筒業平河内通「落人の身に、業平は、曇の衣に投頭巾」尤草紙「引く物の品品、投頭巾にて、お茶をひく」芭蕉「米買ひにゆきの帒や投頭巾」

なげ-つく 投附く【動四自】『**つく**(附く)』は接尾語』**なぐ**(投ぐ)㊁を強めていふ語。

なげ-づくり 投作【名】庖丁を斜にして、薄く平作の刺身にすること、又その作り方の刺身。

なげ-づり 投釣【名】餌を附けたる長き釣絲を、陸上より投込み、これに魚のかかるを俟ちて引上ぐる釣方。

なげ-つるべ 投釣瓶・扉斗【名】桶の兩側に相對して二本づつの繩を附け、二人の者、水を挾みて、各その一方の繩を執り、これを投入れては汲むやうにせるもの。水を澁ふ時、又、旱天に田地に灌漑するなどに行ふ。かへをけ。

なげ-ど 投所【名】投ぐるところ。

投所を見たら、落所(オチド)を見るな【句】一旦決行し、又は事の起りたる後は、それにつけて顧慮するとも甲斐なし。「諺語」和歌民のかまど「投所を見るとも落度を見るな」

なげ-とばす 投飛す【動四他】投げて、勢よく遠き方に遣る。

なげ-とらす 投取らす【動下二他】『**とらす**(取らす)』を見よ』投ぐるやうにして與ふ。投與す。「きぬ媒けたり、白くて著よとて、なげとらせたれば」「下を見よ。

なげ-なく 無けなく【名】**なし**(無し)の條

なげ-なし 無氣無し【名】殆んど無きこと。續膝栗毛「なげなしの物を、とんだ目に合せやあがった」

なげなしの無駄遣(ムダヅカヒ)【句】㊀僅少の貯を無益に浪費すること。㊁不足がちなる人の、却りて浪費しやすきこと。「諺語」

なげ-に 投荷【名】〔商〕**うちに**(打荷)に同じ。

なげ-にんぎやう 投人形【名】芝居にて、勇士が多勢の敵兵を鏖す場合などに、舞臺の後方より、雜兵の死屍に擬したる人形をその場所に投出すこと、又その人形。

なげ-はた 投畑【名】山腹・原野などを燒きて、その跡に蕎麥・粟・黍その他の雜穀の種子を投蒔したる所。收穫の後は、棄て草木の自生に委するを常とす。やきばた。

なげ-び 投【名】〔植〕**さじおもだか**(匙澤瀉)に同じ。

なげ-びしやく 投柄杓【名】茶會にて、柄杓に水を汲みて、釜の中に、投入るること。

なげ-ぶし 投節【名】㊀歌の節の、投ぐるがごとくにうたふもの。雪玉「思ふことなげぶし聲に歌ふなりめでたや松の下にむれゐて」㊁**なぜぶし**(梛節)の轉訛なりとも

いへど、なほ前項の意味より出でしものなるべし』隆達節・弄齋節に繼ぎて、貞享・元祿の間に、京都島原の遊廓を中心として流行せし小唄。七(四・三)・七(四・三)・七(三・四)・五の四句二十六音より成ること、その後流行せし潮來(ウシホ)節・よしこの節・都都一等と同じ。なげ。松の葉『投節百首』津國女夫淵『本歌・投節はやりうた』

なげーふつ【動四他】**なげうつ**(投打つ)【一】に同じ。名義抄『拋、ナゲツ』『じ。

なげーぶみ 投書【名】**さうしよ**(投書)に同じ。

なげーぼう 投棒【名】逃走する者の後より、その兩脚の間へ棒を投げ入れて倒す技、又その棒。

なげーぼこ 投矛【名】昔時、敵に投げ中つる矛。

なげーまい 投米【名】〔商〕投(ナゲ)【三】に付する米。〔取引所の語〕

なげーまき 投蒔【名】投蒔くこと。

なげーまく 投蒔く【動四他】種子を投げやりに蒔く。「用ふる鍬。

なげーまり 投毬【名】まりなげ、又それに

なげーめん 投免【名】德川時代に、水田・陸田等の區別を設けず、うちこみに田租を賦課せしこと。

なげーもの 投物【名】投(ナゲ)【三】に付する物品。投寶の品。「なぐや。

なげーや 投矢・投箭【名】投げて中つる矢。

なげやり 投槍【名】槍の柄短くして、敵に投げつけて用ふるもの。

なげーやり 投遣【名】なげやること。なほざり。やりばなし。放任。

なげやり(投遣)を强めていふ語。〔俚語〕

なげやりーそだて 投遣育【名】投遣に育つること。放任して育つること。のそだち。

なげやりーもの 投遣者【名】物事を投遣にする性質の人。

なげーやる 投遣る【動四他】投げて、遠くにやる。なげつく。【二】そのままにして置く。ほかしおく。やりばなしになす。

なげーら 無氣【副】**なげ**(無氣)【三】に同じ。

なげるいづみ 鳴ける泉【句】**なく**(鳴く)の條下を見よ。

なげわ 投環【名】**わなげ**(輪投)に同じ。

なげわざ 投業【名】相撲(スマヒ)・柔道などにて、對手を投ぐるわざ。

なげわたし 投渡【名】【一】投渡すこと。投渡したるもの。【二】**なげわたしいた**(投渡板)に同じ。【三】**けたばし**(桁橋)に同じ。

なげわたしいた 投渡板【名】根切(ネキリ)の上などに投渡したる歩板(アユミ)。

なげわたす 投渡す【動四他】【一】投げて、他の者に渡す。投げやりて渡す。【二】投げて、此方より彼方へ渡す。投ぐるやうに置きわたす。

なーご 名子【名】【一】家族より出でて、分家を立てたるもの。【二】**しもべ**(下部)を云ふ。〔越後國の方言〕

なご 那古【名】【一】〔地〕安房國安房(アハ)郡に在る町。館山(タテヤマ)灣に臨み、東南は北條町の字湊に接し、北は船形(フナカタ)町に接す。那古寺ありて有名なり。【二】攝津國の名所。攝津國大阪市道頓堀の南、今宮・木津・難波(ナニハ)の古稱。古は海に臨みたり。〔名子・那兒〕萬葉『住吉の名兒の濱べに駒なめて玉ひろひしく常わすらえず』【三】〔地〕**なごのうら**(那古浦)を見よ。【四】**なごのわたり**(那古渡)の略。「よ見。

なご 名呉【名】〔地〕**なごのはま**(名呉濱)を

なご 【名】**いしなご**(石子)の略。守武千句『今は呼ぶとも戻らじと思ふ(といふ句に負けねばなごの勝負もやめにけり」

なーごくし 名國司【名】『名義のみの國司といふ意』古、年官として給せられ、その實際の任に當らざりし國司。

なごし 夏越・名越【名】『夏越の字は假借にて、實は**なごす**(和す)の假體言』『夏越の祓』の略。

夏越の神樂(カグ)【句】夏越のはらへの時執行する神樂。夫木『思ふことなる川上にうちはへて夏越の神樂聲すみぬなり」

夏越の月【句】『夏越の祓(ハラヘ)の行はるる月なるよりいふ』陰暦六月の異稱。水無月。空穗『人はいき名越の月ぞたのまれし瀧の御祓(ミソギ)に忘らるやとて」

なごし 夏越の祓(ハラヘ)【句】次條に同じ。和泉式部集『清き瀬になごしのはらひしつるよりやほよろづ代は神のまにまに」

なごし 夏越の祓(ハラヘ)【句】『**なごし**』は和(ナゴ)の義。邪神を和(ナゴ)めんとて修するより名く』陰暦六月晦日、各神社にて行はるる神事。淺茅(アサヂ)にて輪形(茅の輪)を作り、參詣人をしてくぐらしめて、總身を祓ひ清むるなり。なつばらへ。みなづきばらへ。荒和(アラニコ)の祓。『名越の祓』拾遺『みな月のなごしのはらへする人は千とせの命延ぶといふなり」

なごし 夏越の御禊(ミソギ)【句】前條に同じ。伊勢大輔集『みなかみも荒ぶる心あらじかし波もなごしのみそぎしつれば」

なごし 名越【名】〔地〕相模國鎌倉町の一部。逆(サカ)川の邊。北條時政の第の址あり。鎌倉七口の一なり。

なごし 和し【形一】なぎたり。おだやかなり。なだらかなり。なぐし。『古語』『とまるべき所に漕ぎつくるほど、船に波のかけたるさまなどは、さばかりなごかりつる海とも見えずかし」

なごしーでら 名越寺【名】近江國阪田郡西黒田村大字名越にある天台宗の寺。惠光山・常喜院と號す。三修の弟子名越童子の開基。

なごしーぶんこ 名越文庫【名】鎌倉幕府の時、三善康信が名越家の附近の山麓に建立せし文庫。將軍家の文書及びその他貴重の書籍を收藏せしが、承元二年火災に罹りて烏有に歸す。

なごしやまーしんじや 草越山神社【名】安房國安房(アハ)郡豐田村莫越山に鎭坐せる鄕社。祭神は手置帆負(タオキホヲヒ)命、及び彦狹知(ヒコサヂ)命。

なごしーりう 名越流【名】〔佛〕淨土宗の鎭西流の內、關東三流の一派。相模國鎌倉の善導寺の第二代たる僧尊觀の開きたるもの。『念業成(ネンゴフジヤウ)』の義を立つ。

なごす 和す【動四他】和(ナ)ぐやうにす。やはらがす。なごます。謠曲『梅』『すぐなれ

ばこそ鬼神(キジン)をも、和(ナ)しむるなれ、いかでさる浮かべる古歌のあるべき」

なごそ 勿來【名】〔地〕『な來(コ)そ』は「來る勿れ」の意なるより、勿來の字を宛つ。次條及び助辭な參照』磐城國石城(イハキ)郡窪田村大字關田にある鐵道常磐線の一驛。勿來關址へ十五町。

なごそーのーせき 勿來關【名】〔地〕『本名は菊多(キクタ)關なれども、もと蝦夷の南下を防ぎしよりこの稱を生ぜり』中古、常陸より陸奥へ通ずる海道に置きし關塞。後に至りては、蝦夷を防ぐ外に、他の關と同じく、通行の人を檢察せり。今、磐城國石城(イハキ)郡窪田村大字關田より常陸國多賀郡關本村大字關本へ越ゆる山路にその址あり。小野篁集『みるめかる海士のゆくへのみなと路になこその關もわれすなくに」千載『吹く風をなこその關と思へども道もせに散る山櫻かな」

なごーたけ 名護嶽【名】〔地〕琉球國沖繩島にある山。同國五嶽の一。

なごーでら 那古寺【名】安房國安房(アハ)郡那古町にある眞言宗の寺。補陀洛山・普門坊千手院と號す。本尊は千手觀音。養老元年行基僧正の開基。堂宇は源頼朝の再興と傳ふ。阪東三十三所の一。當國五大寺の一。「同じ。

なーことば 名詞【名】〔語〕**めいし**(名詞)に同じ。

なごーのーうみ 奈古海【名】〔地〕**なごのえ**(奈呉江)に同じ。

なごーのーうら 那古浦【名】〔地〕伊勢國四日市の前面にある浦。春夏の候、時時蜃氣樓出現す。

なごーのーうら 奈呉浦【名】〔地〕越中國射水(イミヅ)郡新湊(シンミナト)町の近海。**なご**(奈古)參照。

なごーのーえ 奈呉江【名】〔地〕**ほうじやうがた**(放生津潟)の古稱なるべしといふ。萬葉『みなと風寒く吹くらし奈呉の江に妻呼びかはし田鶴(タヅ)さはに鳴く」

なごーのーくわんおん 那古觀音【名】**なごでら**(那古寺)に同じ。

なごーのーはま 名呉濱【名】〔地〕**なご**(那古)

に同じ。古は海に沿ひたりしも、今は陸地となる。ながまち(長町)参照。萬葉「すみのえのなごの濱べに」

なごの-わたり 那古渡【名】なごのうら(蜑氣樓)を云ふ。『伊勢國四日市の方言』

なごはし 和はし『形二』なごし(和し)に同じ。謡曲(松)「蘆の若葉のなごはしみ、風も音せて寄る波の」

なごみ 和【名】なごむこと、又その時、或

なごむ 和む【動四自】やはらぐ。なぐ。【古語】源氏「おのづからなごみつつものしたまふを」新後拾遺「なごむてふ神のしるしもみたらしの川の瀬清き夏祓かも」

なごむ 和む【動下二他】なごましむ。なだむ。やはらぐ。なぎむ。【古語】謡曲(水無月祓)「今日の名越の祓、なごめしづめて心が清き」

なごん 納言【名】『なふげん(納言)を見よ』

ちゅうなごん(中納言)に同じ。拾芥「中納言(カスノカミノヤマ)。門下侍郎。今世號二納言一」**ふごん**(納言)を見よ。

なごや 名古屋【名】【地】尾張國にある市。徳川氏の舊藩地。今は我が第四の都會となり、東京と京阪との中間に位せるより、中京と呼ばる。古は、那古屋また那古野とも書けり。**あつた**(熱田)参照。

前國東松浦郡にある村。文祿元年秀吉征韓の役に、陣營を設けし地。水深く、灘廣くして泊舟に宜し。「名護屋・那古耶」

なごや 和や【貌】**なごやか**(和やか)に同じ。「古語」萬葉「むしぶすまなごやがしたにふせれども妹とし寢ねば肌し寒しも」

なごや-あふぎ 名古屋扇【名】尾張國名古屋より産出する一種の扇。密なる骨に張りて、濃を塗りたるもの。なごやせん。

なごや-うち 名古屋打・名護屋打【名】『打』足の股の間の廣き、一種の簑。『背時、簑などに用ひし、太き丸打の紐。後、平打の絲眞田をもいふ。一代女「又ひとりは、絲屋

(びおやごな)

者、…名護屋打の帶、しげ打ちの下げ緒」

なごや-おび 名古屋帶・名護屋帶【名】『もと肥前國名古屋にて、唐絲を組みてつくりたるより名づくといふ』丸打にて、兩端に總ある眞田紐を幾重も廻して、帶として用ひしもの。足利時代の末より慶長の頃まで、專ら花柳界に行はれたり。人子訣「小倉縞の帶をやめて、なごや帶」

なごや-おり 名古屋織・名護屋織【名】**なごやうち**(名古屋打)に同じ。

なごや-か 和やか【貌】和(ニ)きさま、おちつきたるさま、なだらか。おだやか。やはらか。のどか。やすらか。にこやか。にこよか。にこにこ。平穩「古語」源氏「なごやかなるけはひの、ふと昔おぼしいでらるるにも」「いとなごやかに、あてはかに見あつかひたまふにつけても」

なごや-かうちん 名古屋交趾雞【名】『動』雞の一品種。交趾種の、尾張國名古屋地方にて淘汰せられしもの。

なごや-さんざぶらう 名古屋山三郎【名】『人』歌舞伎師。豐臣秀吉の直參(サムラヒ)名古屋庄兵衛の末子。容色すぐれしより、蒲生氏鄕の小姓となり、戰功あり。氏鄕の薨後、父の許に歸る。家富有にして、華奢を競ふ世なりしかば、衣類・刀劒等にて贅を費し、洛中の男女を迷はしめたりといふ。のち歌舞伎の群に入りて、出雲のお國と併稱せられたり。晩年美作侯に仕へて、名こ三左衛門と改め、君命によりて反臣を討ちたるに、勝たずして死す。

なごや-さんざぶらもん 名古屋山左衛門【名】『人』前條を見よ。

なごや-じんく 古名甚九【名】甚九の一種。尾張國名古屋にて唄ふもの。

なごや-じんじゃ 那古野神社【名】尾張國名古屋市西區茶屋町に鎭坐せる縣社。祭神は須佐之男神・櫛稻田姫。

なごや-しゃち 名古屋城【名】尾張國名古

屋市の北隅にある城。尾張徳川氏の居城。大永年中、今川氏親此に築き、後廢墟となりしを、慶長十五年徳川家康北國・西國の諸大名に課して築く。屋上に黃金の鯱(シャチホコ)あるを以て、一名、金城といふ。今は第三師團司令部を置く。舊本丸は明治三十年以來離宮に充てられ、名古屋離宮といふ。

なごや-せん 名古屋扇【名】**なごやあふぎ**(名古屋扇)に同じ。

なごや-ふぐ なごや河豚【名】『動』硬骨類(ハウ)に屬する魚。河豚(フグ)の類。口吻突出し、兩眼の間廣く、背部は綠色にして、少數の不規則なる黑斑あり。腹部はやや黃色を呈し、劇毒を具ふ。南日本の近海に產す。なめらふぐ。

なごや-やま 名兒山【名】【地】筑前宗像(ムナカタ)郡田島村の西方にある山。萬葉「なのみを名兒山と負ひて我が戀のちへの一重もなくさまなくに」

なごや-みさき 名古屋岬【名】【地】筑前國遠賀郡戸畑町の北に斗出せる岬。下關海峽西口の南角をなす。

なごや-みそ 名古屋味噌【名】名古屋にて產する味噌、味辛し。續膝栗毛「鯉を一本貰った。……頭(カシラ)のとこを、名古屋味噌で、ことこと煮て」

なごや-みなと 名古屋港【名】【地】尾張國熱田港の規模を大にして、明治四十年改稱したるもの。

なごや-みなと 名護屋港【名】【地】肥前國東松浦郡名護屋にある港。

なごや-りきゅう 名古屋離宮【名】**なごや**(名古屋城)を見よ。

なごーらん 名護蘭・仙人指甲蘭【名】『植』『琉球國沖繩島の名護嶽に產するよりいふ』蘭(ラン)科に屬する草。高さ二三寸乃至五六寸。葉は鈍披針形にして厚く、夏日四五すの花莖を抽く。花は白色にして、脣瓣の先端に短嘴あり。我が國南方暖地の老樹の枝間に寄生す。

なごり 餘波【名】『波(ナミ)殘(ノコ)の略といふ』『磯に打寄せてかへる浪の、後にいささか殘るもの』**なごれ**『名ごら参照。萬葉

「なには潟しほひのなごりよく見てな家なる妹が待らとはむため」海上風止みて、なほ波の鎭まらぬこと。なごりなみ。なごろ。催馬樂(紀伊國)「風しも吹いたればなごりしも立てれば」

餘波の波【句】前條に同じ。伊勢「南の風吹きて、なごりの波いと高し」

なごり 名殘【名】『なごり(餘波)の話の意の轉じたるもの』物事の過去り、又は衰へ亡びなどせし後、なほその一部分又は面影などの殘れること。黃之葉「滯ぎかへり見れどもあかず別れにし春のなごりの藤なみの花」萬葉「おはしましつる法興院までぞ名殘は續きたるほど、おしはかるべし」子孫。後裔。萬葉「尙侍・六の女御など聞えし御名ごりも見えきこえ給はぬに」別れての後、心殘りて忘れられぬこと。(すべて別れし後よりのみならず、別れぬ前より豫め想像してもいふ)萬葉「夕されば君きまさむと待ちしよのなごりぞ今もいねがてにする」落葉「をかしかりつる人のなごり戀しく」狂言「餓差十王」住馴れし娑婆の名殘を振捨てて」別れんとする最後の時、又それを惜しむ意にて行ふ事。天の網島「名殘の文のいひかはし、毎夜毎夜の死覺悟」「文」「名殘の折」に同じ。「名殘の茶」の略。

名殘多し【句】名殘を惜しむ心多し。その事の過ぎたる後までも殘る心多し。のこりおほし。源氏「なごりおほく殘りぬらん御ものがたりのとぢめは」

名殘無し【句】殘るところ無し。あとかたなし。のこりなし。落葉「返事をだに聞えんとおぼせかし。名殘なくもある御心かな」増鏡「中務(ナカサ)の宮の御女は、もとよりいとあざやかならぬ御おぼえなりしかば、世を捨てさせ給ふきはにとても、とりわきたる御名殘もなかるべし」

名殘の裏【句】「文」「名殘の折」を見よ。

名殘の表【句】「文」「名殘の折」を見よ。

名殘の杯【句】名殘を惜しみてかはす杯。別杯。

名殘の霜【句】わかれじも(別霜)に同じ。俳家奇人談(沾洲)「枝葉まで名殘の霜のわ

かれかな」

名残の袖【句】名残の惜しみて分つ袖。名残惜しくも分つ袖。諺曲「松蟬」「さらばよ友人、名残の袖を招く尾花のほのかに見えし跡絶えて、草茫茫たる朝(アシ)の原に蟲の音ばかりや殘るらん」

名残の空【句】㊀名残を惜みて別れたる時の空。玉葉「別れぢの名ごりの空に月はあれど出でつる人の影は止らず」㊁大晦日の空。

名残の袂【句】名残を惜しみつつ分つ袂。名残惜しくも分つ袂。「天の網島」「泣いて盡きせぬ名殘の袂」

名残の茶【句】次條の略。俳家續奇人談「不白「朝貌につづくや菊の名殘の茶」

名残の茶會【句】『古、茶の湯にて、風爐の名殘に行ふ意』九月下旬より十月までの間に行ふ茶會。

名残の月【句】㊀「有明(アリアケ)の月」に同じ。謡曲「雲林院」「我れは東に趣けば、名殘の月の西の海」㊁『一年月の最終の名月なるよりいふ』『後(ノチ)の月」に同じ。「俳歌加留多」「來る十三夜名殘の月を北山にて御覽あり」

名残の涙【句】名殘を惜しみて流す涙。名殘惜しさに出づる涙。

名残の花【句】他の散りたるあとに殘れる花。玉葉「春をしたふなごりの花も色くれぬ豐浦の寺の入りあひの空」

名残の雪【句】春の頃、名殘に降る雪。風雪「吳竹や名殘の雪に打ちしわり」

名残の折(オリ)【句】〔文〕『百韻の場合には四枚目に當れども、「四の折」といひては、四と死と通ずるより、忌みて呼びたるもの』俳諧の附合(アヒ)の、最終の紙一枚。例へば、歌仙の法における、終の十八句（その内、十二句を「名殘の表」、最後の六句を「名殘の裏」といふ）、百韻の法における、終の二十二句（その内、前の十四句を「名殘の表」、最後の八句を「名殘の裏」といふ）の類。

名残を惜しむ【句】名殘惜しく思ふ。名殘を惜しくつらく思ふ。保元「また會ふべきことならねば、名殘を惜しむもことわりなり」

なごり-がほ 名殘顏【名】名殘を惜しむ顏つき。名殘惜しきやうす。

なごり-きやうげん 名殘狂言【名】役者の、その地を離れんとし、又はその職業より退かんとする時に演ずる狂言。

なごり-なさけ 名殘情【名】心のこもらざるなさけ。心からならぬ情。なげのなさけ。

なごり-なみ 餘波【名】なごり(餘波)㊁に同じ。拾遺「荒磯の浦と頼めし名殘なみ打寄せてけり忘れ貝かな」

なごり-の-そで 名殘袖【名】香(カ)の一。古く、輕くして、火末(ヒサキ)の薄く消ゆる伽羅。

なごり-やみ 餘波病【名】病みたる後、又、少しわづらふこと。榮花「あかがさの後、なごりやみこそいとほしう聞け」

なごり-をし 名殘惜し【形シク】別るることと惜し。別離の情に堪へず。續拾遺「きくたびに名殘をしくぞなりまさる春くれ方の鶯のこゑ」冥途飛脚「目出度と申さうか、お名殘惜しいと申さうか、千日いうても盡きぬこと」

なごりをし-がほ 名殘惜顏【名】名殘惜しげなる顏つき。名殘を惜しむらしきやうす。右京大夫集「世のけしきなごりをしがほに打ちしぐれて、もの哀れげなれど」

なごろ 餘波【名】なごり(餘波)㊁に同じ。山家「あはぢ島せとのなごろは高くともこのしほわたにおし渡らばや」「見よ。

なさ-い 爲さい【句】なす(爲す)の條下を見よ。

なさう 菜候【名】『さうはさらふ(候ふ)の略』古、菜を賣る呼聲。又菜を賣るもの。なうり。「足利時代の語」三一職人歌合「定めおく宿もなさうの朝夕に通ふ内野の道の苦しさ」

なさか 浪逆【名】〔地〕次條に同じ。

なさか-の-うみ 浪逆海【名】〔地〕次條を見よ。萬葉「常陸なるなさかの海の玉藻こそひけば絕えぬなどか絕えせむ」

なさか-の-うら 浪逆浦【名】〔地〕『萬葉集に見えたる浪逆海の名に本づきて呼びしものにて、利根(ト)の下流より北浦・霞浦邊

へかけての名なるべきが、後世久しくその名絕えしに、仙覺の萬葉抄撰述の際、今の地に邊とせしより、後人つひに從ひて、名とするに至りしなり』常陸國霞ケ浦と北浦との相合するところの浦。同國行方(カタ)・鹿島(カシマ)の二郡と下總國香取(カトリ)郡とに圍まれ、内浪逆と外浪逆とに分れ、外浪逆の水は東南に流れて、利根(トネ)川に合す。

なさけ 情【名】㊀物の哀を知ること。情愛。人情。玉葉「からずばとまる心もありなましきぞこの世のなさけなりける」㊁みやびごころ。風流心。伊勢「なさけある人にて、瓶に花をさせり」㊂あぢはひ。ふぜい。風流。趣味。徒然「雨に向ひて月をこひ、垂れこめて春の行衞しらぬも、なほあはれに情ふかし」㊃男女の間の戀情。色情。吉野忠信「情の目遣(メヅカ)ひとて…好いた男のやうに見て、二度も三度も見返り」㊄肉慾。いろ。淫。「なさけを賣る」㊅相手を憐みて爲すこと、又その意味にて爲さんことを請求すること。おなさけ。お慈悲。謡曲「俊寛」「せめて向の地までなりとも、情に乘せてたびたまへ」平家女護島「おのれら五人や十人は、敎經が片腕にも足らねども、情の貧(ビン)と知らざるか」

情が仇となる【句】情をこめてなしたる事が、却りて害となる。「諺語」

情雫(シヅク)る【句】情ごころ甚だ多し。情溢るるばかりあり。愛敬(アイキヤウ)こぼる。

情に刃向(ハムカ)ふ刃(ヤイバ)なし【句】仁慈には何者も敵對する能はず。「諺語」平假名盛衰記「重忠嚴「情に刃向ふ刃なし、腹十文字に搔切つて、首を御邊に參らす」

情の兄【句】情誼を結びたる兄。義理の兄。義兄。門出八島「情の兄の繼信が」

情の絲【句】情誼に引かるる、その情誼を絲に譬へていふ語。愛のほだし。人情のきづな。情の繩。源氏烏帽子折「牛若も情の絲につながれて、岩木にあらぬ風情なり」

情の色香(イロカ)【句】情のまことのあぢはひ。情の深み。情の眞味。諺曲「小督」「千代のふる道たどりこしゆくへも君の惠ぞと、深き情の色香をも知る、人のみぞ花鳥の、音にだに立てよ」

情の濕(ウルホ)ひ【句】情のかかることを、水の濕(ウルホ)ひに譬へていふ語。

情の切賣【句】淫をひさぐこと。

情の罪科(ツミトガ)【句】情の心よりなしたる事の、却りて相手の苦のたねとなること。毛吹草「なさや情の罪科ほどとぎす」

情の死(シ)【句】情誼に引かれて死ぬること。情のための死。

情の末【句】情のかかる末の方。情の及ぶ端。謡曲「花筐」「情の末は白露の、めぐみに洩れぬ花筐の」

情の峠【句】「情の山」に同じ。「ふ語。

情の谷【句】情の深きを谷に譬へていふ語。

情の種【句】㊀情の基(モト)。人情の根本。㊁情を交はしたる結果として、胎内に宿したる胤。「情の胤」「情の種を宿す」

情の露【句】身にかかる情を、草木をうるほす露に譬へていふ語。

情の釣針【句】それを賣りて、人を引寄する情を、餌にて、魚を釣寄する釣針に譬へていふ語。

情の問屋【句】遊女屋。青樓。傾城佛の鳳「ここぞなさけの問屋なる、三國の揚屋柏屋作左衞門が方」

情の繩【句】「情の絲繩」に同じ。

情の錦【句】美しき愛情を錦に譬へていふ語。生玉心中「嵯峨が情の錦手に染めつけられて、親兄弟の意見も耳に蓋。「をかはす文。艷書。

情の文(フミ)【句】情をこめて送る文。情

情の貧【句】情をかけてやること。お情の貧。

情の緣【句】情の道に深きを、草木の葉の綠濃きに譬へていふ語。

情の山【句】情の深く多きを、山の高く大なるに譬へていふ語。戀の山。情の峠。天人五「ここに、大經師の美婦とて、浮名の立ちつづき、都に情の山を動かし」

情は人のためならず【句】情を人に加ふるは、ただ人のためのみならず、必ずよき報ありて、我が身の爲ともなる。諺

語】本朝記「情は人のためならず、徐に隣を極めつつ、我意に任せて振舞へば、武運も早く盡きにけり」謡曲(葵上)「思ひ知らずや、世の中の情は人のためならず、我人のためにつらければ、必す身にも報ふなり」

情も糸も面(ツラ)一皮(カハ)【句】情といひ戀といふも、表面のみのものなり。〔諺語〕

情も過ぐれば仇となる【句】情をかくるとも、度を過ぐれば害になる。〔諺語〕

情を賣る【句】愛情を賣物にす。情(ナサケ)を賣る。色を賣る。淫を賣る。情(ナサケ)を鬻(ヒサ)ぐ。

情を賣る里【句】いろざと。遊里。大磯虎稚物語「引く手數多の愛き節や、情賣る里、秋闌けて」

情を掛く【句】㊀言葉又は行によりて、情を他の身に及ぼす。情をこめていたはり扱ふ。憐をかく。風雅「そなたより吹來る風のつてにだに情をかくる晉づれぞなき」㊁契を結ぶ。文武五人男「いつか情をかけそめし唐橋の里に、有明といへる女あり」

情を交はす【句】㊀互に情を厚くして接す。源氏「なさけをかはし、めでたう、かひある御中らひどもなりと、上下めで聞えます」㊁男女の交をなす。契る。

情を加ふ【句】情をかけていたはる。目をかく。

情を酌む【句】人情を酌取る。事情を推察して斟酌す。酌量す。

情を知る【句】情の何たるかを知る。人情を解す。**なさけしり**(情知)〈參照。大塔宮曦鎧「物のあはれ情を知るを眞の勇士といひまする」

情を鬻(ヒサ)ぐ【句】「情を賣る」に同じ。

人の情は合ふ中【句】人の心は自然と感應すること。〔諺語〕源氏「待つ程に、人の情は合ふ中とて」

人の情は身の仇【句】情をかけられるために、却りて不利になりゆくこと。人の情は世に在る時【句】人の親切も世に時めく間のこと、落目になりては頼みするものなし。〔諺語〕

人は情の下に立つ【句】人は互に情によりて生く。〔諺語〕

なさけ名酒【名】名を改めたるとき、人にふるまふ酒。(名を改めたる人に對して、ふるまふ酒と名を呼ぶ者あるとき、「名酒を飲ませぬ故ぞ」など云ひたり)

なさけ-がほ情顔【名】情ある顔つき。情を持つやうす。三代男「夕霧ぞ情がほ」

なさけ-がる情がる【動四自】**なさけだつ**(情立つ)に同じ。〔古語〕源氏「すきごころありて、すこしなさけがりける」「じ。

なさけ-ごころ情心【名】なさけ(情)に同じ。

なさけ-ごと情事【名】色ごと。雪女五枚羽子板「こそこそ宿の情事」

なさけ-ざかり情盛【名】色氣ざかり。中宮庚申「しかもよいこの情ざかりに、ちよつきりこつきり小女房の、腰もしなへて」

なさけ-じむ情染む【動上二自】なさけありげなり。なさけらしく見ゆ。

なさけ-しらず情知らず【名】情の何たるかを知らぬこと、又その人。無情。一代女「そなたさまに氣を惱ませ、つれなくも御心に從はぬは、世に又もなき情しらずといふ女なり」若風俗「今まで數百人の通はせ文、つひに開(アケ)ず、諸人に情知らずと名に立つも」

なさけ-しり情知【名】「情を知る」を見よ」情の何たるかを知れること、又その人。人情を解せること、又その人。同情心のあること、又その人。する。一代女「はや、女、手に入れて、神(シン)ぞ情知様ともたれかかれば」

なさけ-すがた情姿【名】情のあらはれたる姿。情のあふれたる様子。二代男「なさけ姿にて、面は雪を爭ひ」

なさけ-ぜうじん情少人【名】情の深き少人。情を解せる若衆。人情を辨へ知れる少年。若風俗「多村(タムラ)三之丞といへる情少人、…素面(スメン)自然の美男にして」

なさけ-ぜめ情攻【名】情にて攻めたてらるること。いたく人情にほださるること。なさけづめ。

なさけ-だい情代【名】女が、なさけを賣りて、男より得る金。賣淫料。一代女「一夜づつの情代、金子二分に定めおき」

なさけ-だいぎん情代銀【名】前條に同じ。若風俗「此の若衆を墓原といへるは、一夜の情代銀三枚あげし跡へ言葉なり」

なさけだつ情立つ【動四自】なさけありげに振舞ふ。色めかしき擧動をなす。なさけがる。なさけづくる。なさけぶ。〔古語〕源氏「あまりなさけだたんも、うるさし」

なさけ-づくる情づくる【動四自】前條に同じ。〔古語〕源氏「しばしこそ、さのたまひじものをなど、なさけづくれど」

なさけ-づめ情詰【名】なさけぜめ(情攻)に同じ。丹波與作「宵から積もるうき涙、理づめ・義理づめ・情づめ」

なさけ-な情無【脫】なさけなし(情無し)の語幹』情無きさま。謡曲(紅葉狩)「あら情なの御事や、村雨のあまやどり、一樹のかげに立寄りて」

なさけながる情無がる【動四自】なさけなきことに思ふ。

なさけ-なさけし情情し【形二】なさけ甚だ深し。いかにもなさけありげなり。なさけらし。〔古語〕源氏「なさけなさけしくのたまひつくすべかめれど」大鏡「人のためなさけなさけしき所おはしましけるに、など御末かれさせたまひにけん」

なさけ-なし情無し【形一】㊀なさけごころ無し。つれなし。無情なり。無慈悲なり。源氏「ことさらに、なさけなく、つれなきさまを見せて」㊁無慈悲なる目にあひ、又は禍にあひなどして、悲しらし。撰集抄「山のために寺燒かれはべりしかば、なさけなく、あぢきなくて」㊂風流心なし。さとびたり。無骨なり。源氏「例の船子ども、からどまりより川尻おすほどはと吹ふ扉のなさけなきも、哀れに聞ゆ」

なさけ-ばなし情話【名】愛情に關しての物語。雨土連「何やかや取交ぜての情ばなし。我等が男は上方(カタ)にて無事かえ。なるほど、なるほど、慇懃なるが、所所で避を止めぬ奴(ヤツ)」

なさけ-びと情人【名】情ある人。情の深き人。情を賣る人。若風俗「菊井松三郎とて、隱なき情人、兄分の訂情(カタ)も深き瀬川卯兵衛と、少時も離るることの無かりしに」

なさけ-ぶ情ぶ【動上二自】情ある樣子をなす。情らしく振舞ふ。なさけだつ。(遣用形以外に、用例を見ず)〔古語〕源氏「かやうになさけびたる方は、もとよりえ染(シ)まめにやあらん」

なさけ-ぶかし情深し【形一】情ごころ多し。あはれむ心深し。あはれみぶかし。源氏「御ありさまはひのなさけぶかう、はかなきことにも、まめなる方にも、思ひやり多かる御心ばへを」

なさけ-まじり情交【名】情のまじり入りたること。情の加はりまじれること。平家女護島「めしうどとなる程ならば、手枷・足枷・牢獄屋にも入れられず、なさけまじりの憂きめを見る」

なさけ-めづかひ情目遣【名】情をこめてする目遣。いろめ。秋波。一代女「情目づかひとて、近附にもあらぬ人の辻立にも見返りて、好いた男のやうに思はせ、揚屋の夕暮、端居して、知る人あらば、それに遣くより目を遣りて」

なさけ-もやう情模樣【名】情を含む模樣。なまめかしき模樣。粋(イキ)に見ゆる模樣。當流小栗判官「前垂・襷ぬぎ捨てて、情模樣の色小袖」

なさけ-やど情宿【名】情ある宿。密會の宿。戀の中宿(ナカヤド)。五人女「雪の夜の情宿」

なさけらし情らし【形二】情あるらし。なさけなさけし。五人女「娘、情らしき擧して、神は見通(ミトホ)し、おせん殿には、こなたといふ兵(ヒョウ)あり、何事か有るべしと」

なざし名指【名】名を指して呼ぶこと。指名(ユビナ)。狹衣「たしかなるなざしにて、とかくさすらへんもいとほしう」

なざし名刺【名】めいし(名刺)に同じ。

なざし-かう名指港【名】〔商〕定港に同じ。

なざし-にん名指人【名】㊀名指されたる

人。㊁〔商〕『英 Payee』指定したる手形の受取人。

なさしび 名指日【名】〔商〕『英Name day』取引所に於ける、決算の第二日、即ち受渡日の前の日、決算繰越日の次の日。この日、取引せられたる證券が、その定期間に、何人の手より他の何人の手に渡さるるかを定む。切手日。

なさす 名指す【動四他】その人、その物と「じ。名を指定す。指名す。

なさ-の-き 【名】〔植〕えどの(齊墩果)に同じ。

なさり-ます 爲さります【動下二他】なさる(爲さる)を、敬意を強めていふ語。

なさり-んす 爲さりんす【動下二他】前條の訛。〔遊里の語〕

なさ-る 爲さる【動四自】『るはもと敬意の助動詞にて、下二段活用の形に變化する語なれど、動詞と合して、四段活用の形となりしもの』なす(爲す)の敬語。なしたまふ。

なさる 爲さる【動下二他】なす(爲)の敬語。なしたまふ。後鬘「ならのはの葉守の神のましけるを知らでぞをりし祟なさるな」

なされ-かた 爲され方【名】『れは次條のに同じ』なされやう(爲され樣)に同じ。

なされ-ます 爲されます【動下二他】『れは敬意の助動詞るの連用形』なさります(爲さります)に同じ。狂言「棒縛」「棒しばりになされましたら、ようございましょ」

なされ-やう 爲され樣【名】しやう(仕樣)の敬語。

なし 爲作【名】己が心にて、それと爲し定むること。和泉式部集「いにしへのありしながらにある人も心のなしに物ぞ悲しき」

なし 生【名】生(セ)すこと。生成。萬葉「父母が成(ナ)のまにまにはしむかふおとのみことは」

なし 梨・梨子【名】㊀〔植〕薔薇(ライバ)科に屬する落葉喬木。高さ三四丈に達す。葉は卵形にして光澤あり。花は白色にして五瓣より成り、四月頃開花す。果實は大形の漿果にして扁圓、外皮は黃灰色にして斑點を有し、甘味なり。材は種種の用に供す。㊁故所の一。梨の果の斷面を象りたるもの。「梨口びし」。「梨の花」。「三もり梨花」等種種あり。

梨尻、柿(カキ)頭(ツラ)【句】梨の味よき所は頭の部分にして、柿の味よき所は尻の部分なり。〔諺語〕

梨の皮は乞食(コツ)に剝(ム)かせ、瓜の皮は大名に剝かせ【句】梨の皮は細心に薄く剝くべく、瓜の皮は大膽に厚く剝くべし。〔諺語〕

梨の礫(ツブテ)【句】次條の略。〔諺語〕

梨の礫(ツブテ)も打たぬ【句】『「梨」に「無し」の意を含めていふ』絕えて音沙汰をせぬ形容。〔諺語〕

梨も礫(ツブテ)も爲(セ)ぬ【句】前條に同じ。當世虎の雀「何處に居なんす事か、梨もつぶてもしなんせん」

江戸っ兒の梨を食ふ樣【句】えどっこ、江戸兒の條を見よ。

なし 無し【形ク】㊀あらず。存在せず。㊁家に居らず。留守なり。不在なり。㊂「よるひるも、くる人をば、何かは、なしなどかがやきかへさん」㊃すでに死にたり。「亡し」萬葉「かざはやのみほの浦わのしらつつじ見れどもさぶし無き人思へば」千載「戀死なば世をはかなきにいひなしてなきあとまでも人に知られじ」㊄現心(ウツツゴコロ)無し。正體(シャウ)無し。「古語」源氏「われにな聞かせそ、かくいみじと思ひまどふに、なかなか道さまたげにもこそとて、なきやうにおぼしほれたり」㊅またとなし。二(ニ)なし。無類なり。無雙なり。「古語」十訓抄「景殿の女御の女房なり。なき好者(スキ)にて、朝夕琴をさしおくことなかりけり」

無いが意見の總仕舞(シマヒ)【句】放蕩者にはいかに意見しても容易には聽入れず、財盡きて、始めておのづから放蕩の止むるに至るものなり。〔諺語〕

無い子では泣かれぬ【句】こ(子)の條下を見よ。

無い袖は振られぬ【句】實際無きものは活用するに由無し。〔諺語〕ありべかり「まづ商賣を廣くせんには、元金が第一なり。ない袖は振るに振られず」

無い時は梨も無い【句】「有る時は蟻もあり、無い時は梨も無い」を見よ。

無い難(ガタ)【句】「無き難」の音便。淨瑠璃出世灌頂「恐らくすずしいこの新七に、無い難附けて暇出させ」

無い目【句】「無き目」の音便。十訓抄「我、弓矢取る身にて候はば、仲政がやうに無い目をも見せつべく、いきどほり深く侍れども」

無い物食はう【句】無き食物はなほさら食はんと思ひ、また何にても無き場合には、却りてこれを得んとするが人情なり。〔諺語〕胸算用「伊勢海老が無うて年の取れねといふ事もあるまじ。一つ三文する年、二つ買うて算用合すべし。無い物食はうといふ年德の神は、ござらいても、苦しうないこと」

無い物にす【句】「無き物にす」の音便。

無い物は無い【句】㊀「無き物は無し」の音便。五人女「世にあるほどの萬寶、ない物はなし」

無かっせば【句】「無かりせば」の音便。(漢文の訓讀又は漢文直譯體の文に用ふ)「徵っせば」「管仲なかっせば、われ袵を左にせまし」

無かなり【句】『無くあるなりの約略』無きなり。無し。榮花「中將の乳母(トド)は、彼の三位中將の御許にと聞こしめしかども、今はそこになかなれば」

無かんなり【句】前條に同じ。「古語」

無かめり【句】『「無くあるめり」の約略』無きやうに見ゆ。無きが如し。「古語」源氏「このをりの御うしろみなかめるを、添臥にもと、催させたまひければ」

無からましかば【句】『無くあらましかばの約』「無かりせば」に同じ。正統記「大かた保元以來のみだりがはしきに、頓朝といふ人もなく、泰時といふ者もなからましかば、この日本國の人民、いかがなりなまし」

無かりせば【句】『「無くありせば」の約』實際有ること又は有りしことに對して、反對に假設していふ語。無きならば。無かりしならば。無からましかば。無かっせば。「徵りせば」古今「世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」

亡き影【句】亡き人の面影。亡き靈(タマ)。源氏「親の御なき影を恥かしめんことのいみじさに」大鏡「故おとどの事を、なき影にもいかがと、いとほしかりしかば」

亡き影に懸くる太刀【句】「寶劍を家樹に懸くに同じ。金葉「なきかげに懸けける太刀もあるものをさやつかの間に忘れはてぬる」

無きが如くす【句】無きものの如くに思ひ、又は行ふ。輕んじ侮る。蔑視す。蔑(シナ)にす。宇治「仰せらるる事、なきがどとくにするを討たんとて」

無き手を出(ダ)す【句】『これまで世にあらざる手ぶりを用ふ。參照「半ばにては惡しからんとのたまへば、立ちて無き手を出して舞ひはてつ」㊁さまざまの手だてをめぐらす。源氏「もとより思ひ至らざりける事にも、いかでこの人のためにはと、無き手を出し」

無き難(ガタ)【句】身に覺なき事につきての非難。「無い難」參照。

無きにあらず【句】無しといふにはあらず。無しとは限らず。有る場合もあり。

無きにしもあらず【句】『「は强めの助辭』前條の語をやや詠嘆的にいふ語。參照「世の中にかかる事はなきにしもあらず」

無きになす【句】無き物と同樣にす。物の數に入れず。無き物になす。ないがしろにす。源氏「身を無きになしても、東宮の御代を平かにおはしまさばとのみ思しつつ」千載「恨むべき心ばかりはあ替り、身はふるひ、手足冷ざめて、…はや息のかよひも無かり。おのおの驚き、水急ぎ、藥を與へ」祇王「是非もなき世の中、さても生きては甲斐も無かり」

無かりせば【句】『「無くありせば」の約』實際有ること又は有りしことに對して、反對に假設していふ語。無きならば。無かりしならば。無からましかば。無かっせば。「徵りせば」古今「世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」

るものをなくなしてもとはぬ君かな」無きになる【句】無きものと同様に取扱はる。物の数に入らず。源氏「中ごろなくになりて沈みたりし憂にかはりて、今までもながらふるなり」亡き人の來(こ)る夜【句】死にし人の靈魂のもとの家に來る夜。俗に、二月十五日の寅の時に來りて、その次の日の午の時に歸り、又十二月晦日午の時に來りて、正月一日卯の時に歸るといふ。從然「つごもりの夜、……なき人の來る夜とて、魂(タマ)祭るわざは、この頃、都にはなきを、あづまの方にてはなほすることにてありこそあはれなりしか」無き目【句】『世の中にまたとなき目の義』辛き目。つらき思。「無い目」參照。無き物無し【句】無き物とては無く、悉く有り。無しといふ物は無し。空蟬「くだものの木、數を盡してなきものなく」無き物にす【句】■「無きにす」に同じ。■殺す。なくなす。無き物になす【句】「無きにす」に同じ。新古今「數ならぬ身はなき物になしはてつ誰がためにかは世をも恨みん」無き物は無し【句】■「無き物無し」に同じ。■いかに與へよといふとも、無き物はいかにともせん方なし。無き世【句】死にたる後の世。死後。夫木「三輪の山のしるしの杉も荒れはててなき世に我れは來てたづねけり」續後拾遺「今來んといひて別れし君なればなき世と聞けどなほぞ待たるる」無くて七癖(クセ)【句】次條の略。〔諺語〕無くて七癖(クセ)、有って四十八癖【句】『癖無しといはるる人にすら七つの癖はあれば、まして癖ありといはるる人には四十八もありとの義。「無くて七癖」とは頭韻を爲す』人には、多かれ少なかれ、必ず癖はあるものなり。〔諺語〕「同じ。〔諺語〕無くて七癖、有って八癖【句】前條に同じ。無くば無く【句】無き時は、無きに任せて。野坡「春の田をまかする人のなくばなく返すがへすも花こそ見め」無しに【句】無くして。無くて。無きに。あらぬに。あらで。萬葉「闇き夜に鳴くなる鶴(タヅ)の外(ヨ)にのみ聞きつつか有らむ相(ア)ふとはなしに」古今「淺茅生(アサヂフ)の小野のしら原しのぶとも人知るらめやいふ人なしに」無み【句】無きゆゑに。無さに。〔古語〕彙輔「人知れず春をこそ待て我が宿に降積む雪を拂ふ人なみ」無め【句】前條の訛。〔東國の古の方言〕萬葉「群玉(ムラタマ)のくるに釘さし固めとし妹がこころはあよくなめかも」

なし【副】『なぜ(何故)を見よ』なじに同じ。〔古語〕萬葉「しだの浦を朝漕ぐ船はよしなしに漕ぐらめかもよなし來ざるらめ」

なし【接尾】意味を强めていふに用ふる語、卽ちその狀態の甚しき意。たし。「荒けなし」「おぢなし」「せはしなし」「滿遍なし」

なしあぐ 成上ぐ【動下二他】官位などをのぼす。なりあがらしむ。〔古語〕源氏「今日明日といふばかりになしあげてんとこそ仰せらるなれ」「の方言」

なしいい 何【副】なじに(何に)に同じ。〔西國

なしいづ 爲出づ【動下二他】しいづ(爲出づ)に同じ。

なしいづ 成出づ【動下二他】成りいでます。引立てて昇進せしむ。〔古語〕源氏「右近のぞう解けて御供に下りしをぞ、とりわきてなしいでたまひければ」

なしいろ 梨子色【名】梨の實の皮の色に似たる染色。

なしうち 梨子打【名】次條の略。

なしうちえぼし 梨子打烏帽子【名】『梨子は假借の字にて、菱(サシ)打ちたる烏帽子、卽ち柔かに造りたる烏帽子の義』青の下に被る揉(モミ)烏帽子の一種。通常、表はふしかね染の綾、裏は薄樣(ウスヤウ)を黑漆にて塗りて縫ひて作る。昔時、軍陣にて、武將の間に用ひられたり。打梨。梨打。貞丈雜記「揉烏帽子に三品あり、一つには梨打えぼし」無くて七癖、有って八癖【句】前條に

じかは。風雅「猶しばし此一ふしは恨みはてじなじかと思ふ情もぞ見る」

なじかい 何かい【副】なじに(何に)に同じ。〔薩摩國の方言〕

なじかは 何かは【副】■なじか(何か)に同じ。三部抄「なじかは、さのみ、人わろさもあらん」■なじに(何に)に同じ。

なしかん 梨子羹【名】梨子をおろしたる汁に煮溶かしたる寒天を加へ、砂糖・鹽などを加へてつくれる、羊羹の如き菓子。

なしかめむし 梨龜蟲【名】〔動〕半翅(ハンシ)類に屬する昆蟲。椿象(カメムシ)の類。體は長さ約四分、暗褐色を呈す。頭の後部に二箇の黑紋あり。梨・林檎等の薔薇科植物を食害す。

なしくづし 濟崩【名】なしくづすこと。

なしくづしこうさい 濟崩公債【名】〔經〕政府が毎年利子と共に元金の幾部分を償還し、期限に至りて、その全部を皆濟する規定の公債。

なしくづす 濟崩す【動四他】■借金を少しづつ返濟す。■爲すべき仕事を、少しづつ行ふ。

なししゆ 梨酒【名】梨の實をつぶし、その果汁の糖分を醱酵せしめて造れる酒。

なしじらみ 梨子蝨【名】〔動〕葉蝨の一種。體は蚜蟲(アブラムシ)に類し、長さ一分許、暗褐色を呈し、頭部のみ黃褐色にして、翅は透明なり。大なる複眼と三箇の單眼とを有し、絲狀の觸角を具ふ。梨の木に著き、葉及び花萼より液汁を吸收して、害を與ふ。

なしたつ 成立つ【動下二他】『なりたつ(成立つ)』■に對する他動詞』人となりて、世に立つやうにす。なりいでしむ。立身せしむ。〔古語〕源氏「御子ども、みな、ものめかし、なしたてたまふを聞けば」

なしぢ 梨地・梨子地【名】■蒔繪の地に金銀粉を蒔きて、梨の實の膚(ハダ)の斑紋の如くならしめたる上に梨地漆を塗り、研(ト)出したるもの。ちりぢ。なしぢまきゑ。梨紋。空蟬「ふるびたるからまきゑの梨地の箱」■金銀の細工物にて、その面を梨子の實の膚の如くせるもの。

なしぢうるし 梨地漆・梨子地漆【名】主として、梨地塗に用ふる透明なる漆。生漆(キウルシ)に雌黃(シワウ)を加へ、日に乾かして水分を去り、絹布と麻布とを重ねたるものにて濾過して製す。

なしぢぬり 梨地塗・梨子地塗【名】梨地に塗ること、又その塗方の物。

なしぢふん 梨地粉・梨子地粉【名】梨子地塗に用ふる金屬の粉末、主に金・銀・錫等を用ふ。

なしぢまきゑ 梨地蒔繪・梨子地蒔繪【名】なしぢ(梨地)に同じ。

なしつぼ 梨壺・梨子壺【名】『その壺に梨の樹の植ゑてありしよりいふ』せうやうしや(昭陽舍)に同じ。

梨壺の五歌仙【句】■赤染衞門・和泉式部・紫式部・馬內侍(ウマノナイシ)・伊勢大輔(イセノタイフ)の五人の歌仙。「梨壺の七歌仙」參照。■次條に同じ。

なしつぼ 梨壺の五人【句】次條の略。

梨壺の五人の歌仙【句】大中臣能宣(オホナカトミノヨシノブ)・清原元輔・源順(ミナモトノシタガフ)・紀時文・坂上望城(サカノウヘノモチキ)の五人の歌人。(元暦五年十月始めて和歌所を梨壺に設けられし時、藏人少將藤原伊尹(コレマサ)をその別當とし、その下にこの五人を屬せしめて、萬葉集を訓釋せしめ、その序に後撰集を編修せしめられたり。「悅目抄」に「この五人の女房は、天曆の御時、梨壺の五人の歌仙のうちに、一人は其頃清原元輔の女に清少納言といふ人也」十訓抄「かの清少納言は、天曆の御時、梨壺の五人の歌仙の內、清原元輔の女にて、その家の風吹傳へたりける上」

梨壺の七歌仙【句】梨壺の五歌仙に、清少納言と小式部內侍とを加へていふ稱。

なしとぐ 爲遂ぐ【動下二他】しとぐ。しおほす。なしあぐ。成就す。「見よ。

なしに 無しに【句】■なし(無し)の條下を

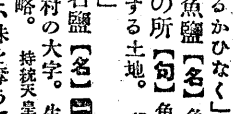
なじに 何に【副】『何しにの略』いかにして。なに故に。なぜに。なじかは。〔古語〕沙石集「なじに思しめし立ちたる」

なしのきじんじや 梨木神社【名】京都市

上京區縫殿(ぬひどの)町にある別格官幣社。祭神は三條實萬(さねつむ)・三條實美(さねとみ)。

なしーのーくさがめ 梨草龜・梨椿象【名】〔動〕なしかめむし(梨龜蟲)に同じ。

なしーのーはな 梨花【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(なはのしな)

なしーばたけ 梨畑【名】梨の樹を植ゑたる畑。

なしーばら 生腹【名】生(う)の母。實母。〔古語〕狹衣「なしばらとのみ思ひきこえさせたまへるかひなく」〔語〕

なーしほ 魚鹽【名】魚と鹽と。食料品。〔古事記〕魚鹽の所【句】魚鹽の産地。食料品を提供する土地。起「魚鹽地、ナシホノトコロ」

なじほ 名鹽【名】■〔地〕攝津國有馬(ありま)郡鹽瀨村の大字。生瀨(なまぜ)驛の西北。■次條の略。持統天皇歌謠法「春彦の尊と一締になって、妹を奪うて、鳥の子とは、名鹽らしいたくみぢやな」

なじほがみ 名鹽紙【名】攝津國有馬(ありま)郡鹽瀨村大字名鹽より産する和紙。縱短く橫長くして、大阪その他にて書翰箋とす。なじほまつば。なじほ。俗稱、大阪半紙。

なじほまつば 名鹽松葉【名】前條に同じ。

なじま 名島【名】〔地〕筑前國福岡の古稱。

なーじみ 馴染【名】■なじむこと、又なじめること、又その人。■同じ遊女の許に三回通ひたること、又その客。(初會(しょくわい)・裏に對して)

馴染を附ける【句】娼妓を買ひて、馴染金を出だす。通例第三回の時に出だすべきものなれども、その買ひたる娼妓の意に適ひたるときは、初會もしくは裏の時にすることもありて、初會馴染(しょくわいなじみ)・裏馴染といへり。〔俚語〕

なじみーきん 馴染金【名】遊廓にて、馴染を附くる時に出だす、若干の金。昔は、二兩二分を通例としたり。この金を出だせば、娼妓は、その客の名を呼び、飲食するにも、銀の袴附の象牙箸を用ひ、枕などには、その客の定紋を附くるなど、親狎の待遇をなす。

なじみーきゃく 馴染客【名】遊女のなじみの客。狎客。

なじみーをとこ 馴染男【名】馴染める男。馴染の男。

なじみーをんな 馴染女【名】馴染める女。馴染の女。

なーじむ 馴染む【動四自】『馴(な)染(じ)むの略』馴れ親しむ。なつく。親睦す。天の網島「丸三年もなじまいで、この災難に大江橋」

なしもと 梨本・梨下【名】なしもとのゐ(梨本院)の略。

なしもとーしふ 梨本集【名】〔書〕中古以來、二條・冷泉二家の和歌に制の詞を定めて、歌道を拘束したる積弊を論じたるもの。四卷。戸田茂睡の著。

なしもとのーみや 【名】宮家の一。伏見宮貞敬(さだゆき)親王の第十子守脩親王の始めて立てさせたまへるもの。

なしもとのーゐん 梨本院梨下院【名】古、大内裏の縫殿(ぬひどの)寮の東、左近衞府の西に在りし別宮。仁明天皇の後院として造營せられしものの如きも、又文德天皇の時にも、一時皇居とせられしが、いつしか荒廢せり。文德實錄「仁壽三年二月庚辰、自二東宮一移二梨下院一。此院先代別館也」

なしもとばう 梨本坊【名】なしもとのゐんぜき(梨本門跡)を見よ。

なしもともとする 梨本茂睡【名】〔人〕もとするの(戸田茂睡)に同じ。

なしもともーんぜき 梨本門跡【名】■その京都に在りし坊を梨本坊と呼びしに本づく。■かねのゐんぜき(椙井門跡)に同じ。

なしもの 鹽鰺【名】しほかう(鹽辛)に同じ。

なしものをけ 鹽鰺桶【名】鹽鰺を容れ置く桶。用明天皇職人鑑「頭から爪先までやりがんなをみしらせて、なしもの桶にしてくれん」

なじゃ 何故【副】なぜ(何故)の訛。〔羽前國〕

なしよなりずむ (英 Nationalism)【名】こくかしゅぎ(國家主義)に同じ。

なじる 詰る【動四他】『なじにのなにに語尾の添はれる語』咎め問ふ。責めただす。とひつむ。詰問(きつもん)す。詰責す。なぜる。

なーしろ 名代【名】みなしろ(御名代)を見よ。

なしろーべ 名代部【名】みなしろべ(御名代部)を見よ。

なしわり 梨割【名】梨の實を割るが如くに輕げに斷ちわること。本朝三國志「まっかう梨割に、切れも切れたり不動國行」

なしわりーさう なしわり草【名】〔植〕いちやくさう(一藥草)に同じ。

なしゑ 梨繪・梨子畫【名】梨地に描きたる畫なるべし。〔古語〕枕「宮は、沈の御火桶の、なしゑしたるに向ひておはします」

なす 茄・茄子【名】■なすび(茄)■■に同じ。■釜の鐶附(くわんつき)の形の一。■茶家にて用ふる茶入の一種。口元すぼみて、中央のふくらみたる壺。圓座のあるものあり。唐物にて、最上品とす。四能(のう)の狂言の一。花盛に茄子と橘とが互に自慢して爭ひ、つひに茄子の與市は柚の皮の三太郎、栗の伊賀の守等を伴ひて橘を攻め、橘は柿・蜜柑・金柑等を集めて防ぎ、戰まさに酣なる時に、山風吹きおろして皆散り失する筋のもの。

茄子の鴫燒【句】しぎやき(鴫燒)に同じ。

茄子の田樂【句】しぎやき(鴫燒)を云ふ。〔大阪の語〕

なす 那須【名】■〔地〕下野國八郡の一。郡役所を大田原町に置く。■〔地〕下野國那須郡にある村。鐵道奥州線の黑田原驛あり。■姓氏の一。本姓は藤原。道長の子權大納言長家より出づ。長家の孫貞信下野國那須郡に住して那須權守と稱し、その六世の孫資高、始めて氏とし、子孫同地の豪族となれり。武家時代に至り、大關・大田原・蘆野・千本・福原・伊王野(いわうの)・岡本の七家に分れて、那須七騎又は那須七黨と稱せられ、その內、大關・大田原の二家は、德川時代に諸侯に列し、明治維新後、共に子爵を授けられ、伊王野・岡本の二家は斷絕し、那須・福原・蘆野・大田原(分家)の四家は、幕府に仕へて、那須衆と稱せられたり。

那須七騎【句】前條を見よ。

那須七黨【句】前條に同じ。

那須七湯(ゆ)【句】〔地〕なすをんせん(那須溫泉)を見よ。

なす 爲す・做す・作す【動四他】■爲(す)らしむ。おこなふ。爲(さ)す。■或物を他の物として用ふ。この物を變へて、かの物にす。爲(さ)す。狹衣「さばかり美しかりし人を、よその者になしつるぞと、思ひつづけたまふ」書紀「久しく龍り居て、色黑く日にあたりなして後、陸奥國の方へ修行のついでに咏みたりとぞ披露しける」■或物に手を加へて、他の物に爲(す)らしむ。作る。こしらふ。起「そのをとめをゆつ爪櫛にとりなして」■その船を踏み傾けて、天のさか手を青柴垣にうちなして」〔語〕

爲はる【句】「爲さる」に同じ。〔京都の動詞にて、もと前條の語の意の轉じたるもの〕殖やす。產む。竹取「おのがなさぬ子なれば、心にもしたがへず」

生さぬ中(なか)【句】繼親と繼子と、又は養父母と養子との間柄。北野綠起「今も昔も、なさぬ中のならひにて、この娘を、あながちに憎みけり」

なす 成す【動四他】『なす(爲す)の語の意の轉じたるもの』■成らしむ。仕遂ぐ。仕上ぐ。成就す。■『なる(成る)(六)を見よ』お成(な)あるやうにし奉る。太平記「鴻籠を廻らして、六波羅へ成し進らせんとしけるを、前前、臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を、强ひて仰せ出されける間、力なく鳳輦を用意し」

なす 濟す【動四他】『前條の語の意の轉じたるもの』支拂ふべき金品、又は借りたる金品を返す。すます。返濟す。償還す。

濟しても三百【句】次條に同じ。〔諺語〕

濟しても八百【句】返濟しても借金のなほ殘り居ること。借金の、償ひても盡き難きこと。濟しても三百。〔諺語〕森寺玉山書「濟しても八百」

濟す時の閻魔顏、借る時の地藏顏【句】「借る時の地藏顏、濟す時の閻魔顏」に同じ。〔諺語〕傾城反魂香「借る時の地藏菩薩に拾てられ、返す時の閻魔の廳」

なす 鳴す【動四他】ならす(鳴らす)の略。さなす(さ鳴す)参照。〔古語〕萬葉「時守(トキモリ)が打ちなす鼓よみみれば時にはなりぬ逢はなくも怪し」古今「秋風にかきなす琴の聲にさへはかなく人の戀しかるらん」

なす 寝す【動四自】いぬ(寝ぬ)に同じ。一説に、寝ねたまふの意なりと。〔古語〕記「あわ雪のわかやる胸をそだたき・玉手さしまき股長(マタモ)にいはなさむを」萬葉「あを待つとなすらむ妹をあひてはや見む」

なす 寝す【動四他】寝(ネ)しむ。ねかす。萬葉「鳴きとよめ安いしなさず君をなやませ」

なす 做す【接尾】強ひて然(サ)がごとくにする意。源氏「うち荒れたる心地すれど、あてにけだかく住みなしたまひて」増鏡「皆人の知ろしめしたらん、ことあたらしく聞えなすこそ、老のひが事とならめ」

なす 如す【接尾】云云の如くの意。のす。〔古語〕記「くらげなす漂へる國」萬葉「朝日なすまぐはしも夕日なすうらぐはしも」同「しきたへの衣手かへて玉藻なすなびきかぬらむわを持ちがてに」

なすぎ-やま 名次山【名】〔地〕攝津國武庫(ムコ)郡廣田神社の西方にある岡の稱。萬葉「わぎもこは猪名野は見せつ名次山つぬのまつばらいつか示さん」

なす-くにのみやつこ-の-ひ 奈須國造碑【名】なすこくざうのひ(那須國造碑)に同じ。

なすくる 擦くる【動四他】なする(擦る)に同じ。

なずくる【動四他】■前條に同じ。■臨著す。だます。籠絡す。新永代藏「見せかけの商人ありて、人をなずくらんために、町の衆を船遊に誘ひ」「に同じ。

なす-くわ 茄科【名】〔植〕なすびくわ(茄科)

なす-くわざんみやく 那須火山脈【名】〔地〕本州東半部を縦走せる火山系。北端は陸奥斗南半島の恐(イタコ)山を起點とし、八甲田山・赤倉山・燒山・駒ケ嶽・藏王山等を連ねて岩代に入り、吾妻山・磐梯山・那須嶽に及び、下野の高原山・日光火山系たる赤城・榛名(ハルナ)の兩山を經て淺間山に達し、富士火山脈と合す。

なす-くわん 茄管・茄子管【名】最も普通なる形の電球、即ち茄の實に似たる形のもの。

なす-くわん 茄鐶・茄子鐶【名】時計の鎖の末に附くる鐶の、形、茄の實の縦斷面の輪廓に似たるもの。

なす-こくざう-の-ひ 奈須國造碑【名】下野國那須(ナス)郡湯津上(カミツ)村に在る古碑。我が國に現存する最古の碑にして、御影石にて造り、高さ四尺、厚さ五寸、正面は砥の如くに磨かれ、他の三面は自然のままにて、頭に扁石の被らしめられたるより、土俗、笠石と呼ぶ。文武天皇の四年の建設にて、刻せる文字は、百五十二字。缺損多く、語も亦古雅なるため、學者の解釋一ならず。

なす-さん 那須山【名】〔地〕なすだけ(那須嶽)を見よ。「條下を見よ。

なす-しちき 那須七騎【句】なす(那須)の**なす-しちたう** 那須七黨【句】なす(那須)の條下を見よ。

なす-しちたう 那須七湯【句】なす(那須)の條下を見よ。「見よ。

なす-しゆう 那須衆【名】なす(那須)■を三國に跨れる活火山。附近に噴火口の跡多く、池沼また多し。主峯を茶臼山といひ、半腹に那須温泉の湧出するあり。

なす-ぢやう 茄子錠【名】きんちやくぢやう(巾著錠)に同じ。

なす-の 那須野【名】〔地〕下野國那須(ナス)郡の殆ど全部に亙れる廣原。東西五乃至七里。南北八乃至十里。建久四年源頼朝この野に狩せしことあり。明治年間、縣令三島通庸、鋭意開墾に努め、田園相望むに至れり。せっしやうせき(殺生石)參照。金槐集「ものふの矢なみつくろふ籠手の上に霰たばしる那須の篠原」「に同じ。

なす-の-がはら 那須野原【名】〔地〕前條に同じ。

なす-の-がみ 那須野紙【名】昔時の和紙の一。雨月物語「なすの紙のいたう古びて、文字もむらぎえして、所所見定めがたき」

なす-のよいち-さいかいすずり 那須與市宗高硯【名】滑瑠璃の一。那須與市宗高西海國へ發向するに方り、二子の中一子を連れ行かんとして、二子の乳母達の爭ふこと、平宗清妻の二見と共に建禮門院を守護することなどを交へて作れるもの。作者は並木宗輔・同丈助。

なす-ばら 茄灰・茄子灰【名】茄の莖・蔕(ヘタ)などを黒燒にして造りたる懐爐灰。俚言集覽「茄灰。埋火のよくもつものなり。懐爐などに入るるに妙なり」

なすび 茄・茄子【名】■〔植〕茄科に屬する栽培一年草。高さ二尺許。夏の半ばより秋の末に掛けて紫の花を開き、實を結ぶ。實の形、玉子の如くにして、蔕の方漸く窄み、色紫黒にして、飄に細子多し。香の物とし、また煮、また燒きて食ふ。■『その形、茄子に似たればいふ』病氣のため、子宮が外方に脱出したるもの。「俚語」

なすび 茄の馬【句】茄に竹などを插して、四足を附け、馬の形となして、靈棚(タナ)に供ふるもの。

なすび 茄の巾著・口開(アケ)かぬ【句】『巾著茄子として、巾著の形に似たる茄子あるよりいふ』默する者を嘲る語。「諺語」

なすび 茄は友露受ければ千生(オ)る【句】茄子は疎に植ゑて、隣の木の露を受けぬやうにすべし。「諺語」

なすび-あへ 茄蘞・茄子蘞【名】茄の實のあへもの。俳諧古選(嵐雪)「魂棚や皆細細(コマゴマ)と茄子あへ」

なすび-うり 茄賣・茄子賣【名】茄の實を賣る人。太平「茄子賣揚屋が門や秋の雨」

なすび-がね 茄鐵漿・茄子鐵漿【名】茄の實の皮の如く、鐵漿を黒く光澤あるやうに附くること。なすび(茄蔕)■參照。

なすび-ぎり 茄桐・茄子桐【名】紋所の一。五箇と三箇との茄子と、その葉三枚とにて、五三の桐の紋の如くにせるもの。

なすび-くわ 茄科【名】〔植〕顯花植物被子類・雙子葉門・合瓣花區に屬する一科。草本・灌木又は小喬木にして、廣く世界の各地に分布し、殊に熱帶地方に多く、我が國に産するものに、茄の外、枸杞(クコ)・酸漿(ホホヅキ)・朝鮮朝顏等二十餘種あり。なすくわ。かくわ。

なすび-じる 茄汁・茄子汁【名】茄の實を入れたる汁物。蟹峨天皇甘露雨「茄子汁にさきのひたし物」

なすび-せんなり 茄千成【名】〔植〕いぬほほづき(犬酸漿)に同じ。

なすび-だね 茄種・茄種子【名】茄の種子。芭蕉「細かなる雨や二葉のなすび種」同「春雨や二葉に萌えるなすび種」

なすび-づけ 茄漬・茄子漬【名】茄の實を漬けたる香の物。召波「人妻のこれをもてなす茄漬」

なすび-なへ 茄苗・茄子苗【名】茄の苗木。俳諧新選(一樣川)「春雨や目鼻の附きし茄苗」

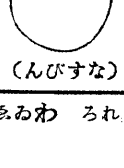
なすび-の-えだのまる 茄枝丸【名】紋所の一。花・葉實を有する茄子の枝二つを上下に相對せしめて、圓形に綰(マワ)ねたるもの。

なすび-は 茄齒・茄子齒【名】■茄の實の皮を口に含みて齒を覆ひ、鐵漿(カネ)を附けたる如くに見せたること。なすびがね(茄鐵漿)參照。正嘉千句「をなごのやうな兒(チゴ)なすびは」■齒の黒みあるもの。

なすび-ばた 茄畑・茄子畑【名】茄を作る畑。茄を植ゑたる畑。二代男「島原の人口までなすびばたにして」

なすび-ばたけ 茄畑・茄子畑【名】前條に同じ。心中刃は氷の朔日「堤を下りて、身を何となすび畑に隠れけり」

なすび-びん 茄瓶・茄子瓶【名】茄の横斷面の如き形の瓶。



(んびすな)

なすみそ 茄味噌・茄子味噌【名】茄の實を刻みて、諸味(もろみ)と麴とに漬けたる食品。

なすむねたか 那須宗高【名】〔人〕武將。下野國那須の人。資高の第十一子。通稱は與市。檀ノ浦の役に、平氏の軍、旭日扇を竿頭に插みて船に立て、源氏の軍を驅きし時、義經の命を受け、射て、その扇を落し、ために賞として丹波・信濃等五箇國に莊園を賜はり、那須の總領となる。後、落髮して、伏見の卽成院に入る。

なすめし 茄飯・茄子飯【名】茄の實を炭火にて十分に燒き、水に入れて皮を去り、細かに割きたるを椀に入れ、その上に飯を盛り、澄汁と胡椒などの藥味とを加へて食ふもの。

なずらひ 準擬【名】なずらふこと、又その物。なずらへ。たぐひ。比較。〔古語〕源氏「すこしもなずらひなるさまにものしたまはず」

なずらふ 準ふ・擬ふ【動四自】他の物がこれにたぐふ。くらべる。なぞらふ。類す。準ず。源氏「この御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにもなかりけり」同「今はこの内のおとどになずらふ人なし」

なずらふ 準ふ・擬ふ【動下二他】なずらはしむ。他の物をこれにたぐはしむ。くらぶ。よそふ。なぞらふ。準ぜしむ。擬(ギ)す。源氏「今はなほ昔のかたみになずらへてものしたまへ」

なずらへ 準・擬【名】なずらふること、又その物。なずらひ。なぞへ。狭衣「さりとも、なずらへなる人ありなん」

なずらへうた 準歌・擬歌【名】古今和歌集の序に見えたる和歌六體の一。詩の六義(ムクサ)中の比(ヒ)にあてたるもの。古今「歌のさま六つなり。……三つにはなずらへうた」

なすり 擦・捺【名】なすること、又その物。

なすりがき 擦書【名】筆をなするやうにして書くこと、又その字。ちやちんや。

なすりこむ 擦込む・捺込む【動四他】なすりて入れ込む。すりこむ。「じ。

なすりぞめ 捺染【名】なっせん(捺染)に同

なすりぞめはふ 捺染法【名】なっせんはふ(捺染法)に同じ。

なすりつく 擦附く・捺附く【動下二他】なすりて附著せしむ。なすりて附かしむ。すりつく。こすりつく。

なすりつく 擦附く・捺附く【動下二他】『つく(附く)は接尾語』なする(擦る)』を強めていふ語。

なする 擦る・捺る【動四他】一すりつく。ぬりつく。塗抹す。二責任・罪過などを、他人に負はしむ。轉嫁す。かづく。なすくる。なすりつく。

なすれか 何爲れか【副】次條に同じ。〔古語〕名義抄「爲爲・胡爲、ナスレカ」

なすれぞ 何爲れぞ【副】なにすれぞ(何爲れぞ)の略。〔古語〕名義抄「何須、ナスレソ」

なすをんせん 那須溫泉【名】〔地〕下野國那須(スカ)郡那須嶽の主峯たる茶白嶽の半腹にある溫泉。古來、湯本・高雄殿・辨天・北大丸・三斗小屋・板室の七箇所に分れ、那須七湯の稱ありしが、明治二十六年旭湯開かれて、八湯となれり。

なせ 汝兄【名】『せ(兄)を見よ』女より男子を親しみて呼ぶ語。**なにもの(汝命)**參照。〔古語〕記「あがなせの命」

なせ 何故【副】次條に同じ。〔京都の方言〕俚言集覽「江戸にてなぜと濁りていふを、京にてなせと清みていふ」

なぜ 何故【副】何の理由にて。どうして。いかなれば。なぜに。なにに。心中宵庚申「ぞんざいなる小丁稚め、朋輩をなぜ投げた」

なぜこ云ひな 【句】『云ひなは親愛の意を含める命令の語』:なぜと問ふならば、その理由は。當世虎の卷「このゆもじを、たった一度、おまへ締めてくれなさい。なぜと云ひな、そこを頭巾にしてかぶりたい」

なぜこ云って見な 【句】前條に同じ。

なぜか 何故か【副】前條に同じ。

なぜに 何故に【副】前條に同じ。桑鵐「なぜに内侍のかんのとの、一手のかぎりひきつくしたまへらん」

なぜる 詰る【動四他】なじる(詰る)に同じ。字鏡「詰、甚問遍貌、責也、問也、奈是留」

なぜ 謎【名】『いかなる意味なるぞの義』一**なぜなぞ(謎謎)**の略。曾我虎が鷹心に無理な謎かけて、解けども解けぬ富士の雪」二あらはに云はずして、それと覺らしむるやうにいふこと、又その語。猜謎。三意義のたやすく解しがたきこと。疑問。

なぜ 謎を掛く【句】一なぞなぞの題を出して、問ひかく。**なぞかけ(謎掛)**參照。二遠まはしに言ひかく。冥途飛脚「この水入も男どし、母の心を安めるため請取ってくれるかと、謎をかけて渡したを」

なぜ 謎を解く【句】一なぞなぞの意を覺りて答ふ。**なぞとき(謎解)**參照。二遠廻しに言掛けしを聞きて、その意味を覺る。

なぜ 字の謎【句】文字の邊旁を離合し、又は字體を分析して判ぜしむるもの。支那にても、「黃絹幼婦」の四字に「絕妙」の二字を寓し、「頭如刀」、中央橫廣、四角六抽、右面負二兩刀」、「左邊屬二變牛」といひて「龜」の字を思ひ出でしむる類の遊戲行はれたり。「黃絹幼婦」參照。

なぜ 何ぞ【副】『何(ナ)ぞの略』**なんぞ(何ぞ)**に同じ。〔古語〕萬葉「君無くばなぞ身よそほはむ櫛げなるつげの小櫛も取らむともはず」源氏「なぞ斯くあいなきわざをして、安からぬ物思をすらん」

なぜ 等・杯【接尾】など(等)の轉訛。柳樽「釣なぞもしてみる馬鹿な軍學者」

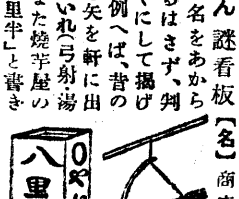
なぞあて 謎當【名】**なぞとき(謎解)**に同じ。

なぞあはせ 謎合【名】**なぞなぞあはせ(謎謎合)**に同じ。

なぞうた 謎歌【名】詞の音又は意義の中に、何等かの事物を隱して詠みたる和歌。例へば、「鼠の家、米つきふるひ木を伐りて、引鑽(キリ)り出す四つといふかそれ」の歌にて、「鼠の家」は穴(ナ)、「米つきふるひ」は粉(コ)、「木を伐りて引鑽り出す」は火(ヒ)の意、又「四つ」は「し」の意を含み、一首の中に「あなこひ(戀)し」といふ言葉隱されてある類。

なぞかけ 謎掛【名】『「謎を掛く」を見よ』謎を言掛くること。

なぞかんばん 謎看板【名】商店の看板の、商品の名をあからさまにあらはさず、判じ物の如くにして揭げたるもの。例へば、昔の湯屋に、弓矢を軒に出せるは、**ゆいれ(弓射湯入)**の意。また燒芋屋の看板に「八里半」と書きて「栗(九里栗)に近き意をあらはす類。



(んばんかぞな)

なぞことば 謎言葉【名】謎の言葉。謎をなせる言葉。和玉篇「なぞたて・なぞことば・ねごと」

なぞぞめ 謎染【名】謎の意を橫樣に寓したる染物。鎌の繪と○と「ぬ」の字とにて「構はぬ(○は「輪」にて「わ」の假名なれど)卽ち寬闊の意を寓し、斧と琴と菊との繪により「善き事聞く(斧を「よき」とも云へば)の意を寓する類。浮世風呂「斧(ヲノ)琴菊といふ昔模樣、謎染の新形浴衣をかかへて」

なぞたて 謎立【名】**なぞかけ(謎掛)**に同じ。和玉篇「なぞたて・なぞことば・ねごと」

なぞづけ 謎附【名】〔文〕前句附の一種。點者より、謎をかけたるがごとき題を出だし、他人に附けしむるもの。例へば「赤きものは」といふ題に、「親の譲りの黒小袖」と附くる類。寬保年中流行す。物は附。

なぞとき 謎解【名】『「謎を解く」を見よ』謎の意味を解すること。

なぞなぞ 謎謎【名】『何(ナ)ぞ何ぞの義。なぞ(謎)參照』言葉に、他の物事の意を隱し含めて問ひかけ、他人にいひあてしむるたはむれ。あとうがたり。なぞ。なぞなぞがたり。なぞなぞものがたり。狂人のなぞなぞしけるところに」井筒業平河内通「この文の日附と杜若の花を、なぞなぞにして解いて見れば」

なぞなぞあはせ 謎謎合【名】謎を掛けつ解きつして、勝負を爭ふこと。なぞあはせ。

なぞなぞがたり 謎謎語【名】次條に同じ。

なぞなぞ-ものがたり 謎謎物語【名】なぞなぞ（謎謎）に同じ。實方集「小一條殿のなぞなぞものがたりに」

なぞふ 準ふ・擬ふ【動下二他】なずらふ（準ふ）に同じ。〔古語〕萬葉「わが宿に蒔きしなでしこいつしかも花に咲かなむなぞへつつ見む」

なぞへ 【名】なずへに同じ。

なぞへ 準【名】なずらへ（準）に同じ。〔古語〕伊勢「おふなおふな思ひはすべしなぞへなく高きいやしき苦しかりけり」

なぞへ 【名】ななめ。はす。はすかけ。「なぞへに並ぶ」

なぞも 何ぞも【副】なんとまあ。なんぞまあ。なぞや。參考「白浪のまさごを過ぐるたごの浦におくれてなぞも歎く舟人」敘本「なぞもかく別れそめけん常陸なる鹿島の帶の恨めしの世や」

なぞや 何ぞや【副】前條に同じ。源氏「なぞや心づから今もむかしもすずろなることにて、身をはふらかすらん」同「なぞや斯く、かたみにそばそばしからでおはせよかし」

なぞらふ 準ふ・擬ふ【動四自】なずらふ（準ふ）に同じ。後撰「見ぬ人の形見がてらは折らざりき身に準らへる花にしあらねば」

なぞらふ 準ふ・擬ふ【動下二他】なずらふ（準ふ）に同じ。伊勢「秋の夜の千代を一代になぞらへて八千代しねなはあくときのあらん」

なぞらへ 準・擬【名】なずらへ（準）に同じ。

なそり 納蘇利【名】なそり（納蘇利）に同じ。

なぞり-がき なぞり書【名】なぞりて書くこと、又その書きたるもの。などりがき。

なぞる 【動四他】『なぞらふ（準ふ）と同一の語源より出づ』一旦書きたる文字の上に、更に墨を塗る。などる。

なた 鉈【名】刀に似て、短く厚く且つ幅廣き刃物。薪などを割るに用ふ。

なた 鉈を振ふ【句】多數の者を罷免す。多くの人を誡首（カイシュ）す。

なだ 灘【名】『梵 Nada（江・海の義）より出でしなるべしといふ。灘の字は、支那にては川水の早瀬をなして船を行（ヤ）ることの難き處の意に用ふるを、我が國にては、この語の意に慣用せり』海路の、港に遠くして、浪高き處。あらうみ。〔洋〕山家「播磨がたなたのみ沖に漕出でてあたり思はぬ月を眺めん」■〔地〕『攝津國西宮（ニシノミヤ）町以西、神戸市に至る沿海一帶の地、卽ち今の西宮町・御影（ミカゲ）町及び今津・本庄・魚崎・住吉・六甲・西郡・賀濱・西灘等の諸村に亙り、氣候と井水との清酒釀造に適するより、古來その名産地たり。又昔、今津鄉・西宮鄉・東鄉・中鄉・西鄉の五鄉に分ちしより灘五鄉の稱あり。伊勢「蘆の屋の灘の鹽やき暇無みつげの小櫛もささず來にけり」■〔地〕紀伊國日高郡御坊（ゴバウ）・印南（イナミ）二村の間にある海村なる名田（ナダ）村の俗稱。新古今「今更に住みうしとてもいかがせん灘の鹽屋の夕ぐれの空」

灘五鄉（ナダゴガウ）【句】〔地〕前條■を見よ。

灘の懸路（ナダノカケヂ）【句】『陸上の懸路に擬へていへる語』灘の中の難航路。新勅撰「都にといそぐかひなくおほしまのなだのかけぢは潮滿ちにけり」

なだ 名田【名】『若狹國遠敷（オニフ）郡の西部名田川に沿へる地域がその原産地なるによりていふ』若狹・淡路の二國に産する、一種の厚紙。

なだ 【名】なみだ（涙）の略。〔奴詞〕奴俳語「形見こそあだなる跡につん殘れ（とい句に）こぼるるなだの雨のふる塚」

なた-あたま 鉈頭【名】頭の鉢の、鉈に似たる形をなせるもの。

なだい 名題【名】■姓名を標題に掲ぐること、又その標題。■脚本又は浮瑠璃の標題。げだい。〔江戸の語〕■なだいかんばん（名題看板）の略。四その名によりて行ふこと。名義。曾根崎心中「堺筋で加賀一四、且那の名だいで買ひがかる」五名だかきこと。有名。著名。〔名代〕「藏」を見よ。

なだい 那提【名】〔人〕なだいさんざ（那提三藏）の略。

なだい-がくもん 名題學問【名】げだいがくもん（外題學問）に同じ。

なだい-かんばん 名題看板【名】劇場の表看板の一種。大名代（オホナ）と小名代（コナ）との總稱。主としては、大名代をいへり。

なだい-さんざう 那提三藏【名】〔人〕『那提は梵 Nadi 詳しくは Punyoyaśas 布如烏伐耶譯して福生といふ』中印度の佛教學者。支那唐に佛法の盛行するを聞き、經典千五百餘部を捜集して東渡し、永徽六年京師に到り、勅によりて慈恩寺に留まり、八曼荼羅・禮佛法・阿吒那智の三經を飜譯す。また大乘集義論四十餘卷の著あり。これを飜譯せんとして果さず、後、京師を去りて寂ずる所を知らず。

なだい-した 名題下【名】名題役者の次に位すること、又その役者。

なだい-びろう 名題披露【名】俳優が名題に昇進したる時の披露。

なだい-びろめ 名題弘【名】前條に同じ。

なだい-みだ 灘忌【名】一・九・十七・二十五日などを、凶日なりとして、渡海に嫌ふこと。又、七・十七・二十七日をも忌む。

なだいめん 名對面【名】■宿直の侍臣・瀧口などが、その姓名を呼ばれて名乘り上ぐること。禁中にて、夜の亥の一刻、卽ち今の午後十時に、時の奏（ソウ）濟みたる後、宿直・勤番の侍臣・瀧口の武士などの勤惰を檢するため、名籍につきて行ひし點呼。殿上の名對面。とのゐまうし。名謁（メイエツ）。問籍（モンセキ）。源氏「内をおぼしやりて、名對面は過ぎぬらん、瀧口のとのゐまうし、今こそとおぼしはかりたまふは、まだいたう更けぬにこそは」■殿上のなだいめんこそ、なほをかしけれ」■姓名などを名のりあふこと。盛衰記「見參、いづれの時ぞや。名對面どもして、何方（イカヤウ）よりも忽ちに寄すべき樣もなし」

なだいやくしゃ 名題役者【名】小名題看板の綿組に載せらるるほどの資格ある役者。今は小名題看板に綿組を載することなきも、尙俳優の資格として存す。なだいした（名題下）參照。「者の男。

なだいやくしゃ 名題役者【名】〔動〕だつ（啄長魚）に同じ。

なだし 【形】なだらかなり。すなほなり。おだし。〔古語〕義經記「猛くとも、なだしき心も附け、書の一卷も讀ませ」

なだす 【動他】ただす（正す）に同じ。一說に、なづ（撫づ）の延なりと。〔古語〕起「おみの子はたへの袴を七重にし庭に立たしてあよひなだすも」

なたたし 名立たし【形二】『名立つ』を見よ』なだてがまし（名立がまし）に同じ。〔古語〕源氏「いとなだたしう、ひたすら、世になくなりて後に」

なだたり 名立たり【動四變自】『名立ちありの約』名に立ちてあり。その名聞えてあり。（但し連用形・連體形以外に用例を

者の女。

なだか 名高【名】名高きこと、又その物。名高の骨高（ホネダカ）【句】『ほねだか（骨高）を見よ』名高き割合に價値少し。〔諺語〕本朝俚諺「世俗に聞きし程になきものを、名高の骨高などいへり。古語に、聞きて千金、見て一毛とあるがごとし」

なだかし 名高し【形二】名が、ひろく世間に聞えてあり。高名なり。有名なり。名高き月【句】めいげつ（名月）に同じ。〔俳諧の語〕

なだかのうら 名高浦【名】〔地〕紀伊國海草（カイサウ）郡内海（ウツミ）村の大字。熊野街道の海村。萬葉「木の海の名高の浦によるなみの音高きかもあはぬ子故に」

なたぎり-ぎん 鉈切銀【名】元祿九年以前、越後國長岡にて通用せし銀貨。厚さ二分ほどに長く吹き、「寛」の字の極印あり、大・小欲するがままに切りて用ひしもの。

なたくひ 名類【名】その名のたぐひ。その名に類せること、又その物。〔古語〕土佐「しばしありし所の名たぐひにぞありける」

なだ-ざけ 灘酒【名】攝津國灘地方にて醸造する酒。清酒の最良なるものとせらる。なだめざけ。なだ（灘）■參照。

なた-ささげ 鉈豆【名】〔植〕いんげんまめ（隱元豆）に同じ。

なだ-さより 灘鰶・灘魚針【名】〔動〕だつ（啄長魚）に同じ。

見ざるのみならず、連用形のも極めて稀なり」〔古語〕後撰「數知らず君が齢を延ばへつつ名だたる宿の露とならなん」 参考「世の中に名だたりたまひつるあだ人」

なだち 名立【名】〔地〕■越後國西頸城(ニシクビキ)郡にある町。名立川の河口に位し、北陸街道に沿ふ。寶暦元年大地震ありて、村民悉く死し、免れしもの唯産婦一人のみ。之を名立崩れといふ。■越後國西頸城郡にある村。前項なる同名の町と一嶺を隔つ。石油を産す。

なだて 名立【名】『「名を立つ」を見よ』評判の立つやうにすること。浮名を立たしむること。〔古語〕朝恒集「女郎花いかに思はん秋の野に一夜ぞねまし花のなだてに」

なだて-がほ 名立顔【名】名立(ナダテ)らしき顔つき。名を立つるやうにする樣子。〔古語〕新六「夕暮はいつかは人を我が宿に名だてがほなる松蟲の聲」

なだて-がまし 名立がまし【形】浮名を流すべき振舞なり。なだたし。 綉綺閣卯月の紅葉「宮の木立も、いつごろよりか、名立がましき天滿屋お初(ハツ)」

なだて-でら 那谷寺【名】加賀國江沼(エヌマ)郡那谷(ナタ)村大字那谷にある古義眞言宗の寺。養老元年泰澄大師の草創。初、岩屋寺といひしを、花山法皇巡錫の際、今の名に改めしめられたりと傳ふ。

なた-なぎなた 鉈薙刀・鉈長刀【名】つくしなぎなた(筑紫薙刀)に同じ。

なたね 菜種【名】■あぶら菜の種子。 竹取「なたねの大きさにおはせしを」■〔植〕あぶらな油菜)を云ふ。〔伊豫國の方言〕■「菜種の花」の略。 續猿蓑「雪芝」「伏見かと菜種の上の桃の花」〔諺語〕

なたね-から 菜種から油まで【句】始より終まで。

なたね-ちょう 菜種に蝶【句】離れがたき關係あるもの、又配合のよきものの譬。 傾城島原鮭含「梅に短册、花に檀、籠に黄公、なたねに蝶」

なたね-なぶら 菜種油(菜種油)に同じ。

なたね-の-しょうじ 菜種の御供(ゴクウ)【句】往時、京都の北野神社にて、毎年二月二十五日の忌日の夜に、飯を堆く盛りて、その上に菜の花を插したるを供物とし、菜の花の未だ咲かざる歳には、梅花を用ひて行ひし神事。天神御忌。梅花祭(バイクワサイ)。

なたね-の-とおやめ 菜種の十七、大根種(ダイコン)の老女【句】『じふしち(十七)■を見よ』油菜の種は早く取收めてよく、大根種は晩く收むるがよし。〔諺語〕「■に同じ。

なたね-の-かみ 菜種の神事(ジンジ)【句】「菜種の御供(ゴクウ)」

なたね-の-むま 菜種の竹馬(チクバ)の昔【句】竹馬に乘りて遊びたる幼少なりし昔。 盛衰記「菜種の竹馬の昔より生ほし立てたる」

なたね-の-はな 菜種の花【句】菜の花。 萬葉千紅「黄金屏風菜種の花の御殿山おなじ色あるてふてふがひ」

なたね-の-ふたば 菜種の二葉(フタバ)【句】幼少なる齢の譬。 平家「我等が菜種の二葉よりおほし立てたまひし神たち」

なたね-あぶら 菜種油【名】菜種より搾り取りたる油。通常、黄褐色、粘稠にして、水よりやや輕し。燈用・食用に供し、また機械油として用ひらる。たねあぶら。

なたねあぶら-かす 菜種油滓【名】あぶらかす(油滓)■に同じ。

なたね-いろ 菜種色【名】菜種の如き色、即ち黄褐色の染色なるべし。〔古語〕 参考「つぎつぎのは、朽葉香(クチバガ)・なたねいろの摺(ズリ)のおほ海の裳なり」■に同じ。

なたねかす 菜種糟【名】あぶらかす(油滓)

なたねがら 菜種殻【名】菜種を採去りたる殻。 万葉「菜種殻焚くや野風の時鳥」

なたねづゆ 菜種梅雨【名】陰暦三四月頃に吹く、東南の風。〔伊豆國及び志摩國鳥羽の船人の語〕「に同じ。

なたね-な 菜種菜【名】〔植〕あぶらな(油菜)

なたね-にふばい 菜種入梅【名】なたねづゆ(菜種梅雨)に同じ。

なだ-のうを 灘魚【名】〔動〕あまだひ(甘鯛)

なだ-ぶね 灘船【名】昔、攝津國灘の邊を通行せし船。

なたまめ 鉈豆・刀豆【名】■〔植〕蔓(バ)科に屬する一年生の蔓草。葉は三箇の小葉より成り、光澤あり。夏日總狀花序を成して紫色の花を開く。莢は長大にして尺餘に達し、形、鉈の如し。未熟なるは、通常、莢と共に漬物として食ふ。豆の長さ七八分、淡紅にして光あり。太薦刀豆やのたりと下(サガ)る花まじり」〔植〕いんげんまめ(隱元豆)を云ふ。〔伊勢國の方言〕■なたまめぎせる(鉈豆煙管)の略。

(一) なたまめ

なたまめ-やき 鉈豆の鳴燒(ナリヤキ)【句】鉈豆を鳴燒にすること、又鳴燒にしたる鉈豆。

なたまめ-ぎせる 鉈豆烟管・鉈豆煙管【名】『形やや鉈豆の莢に似たるよりいふ』扁く短く延打(ノバ)にせる烟管。なたまめ。

なたまめ-めし 刀豆飯【名】刀豆を水に浸し、皮を去りたるを混ぜて炊きたる飯。

なたまる 宥まる【動四自】なだらかになる。平穩になる。しづまる。やはらぐ。のどまる。

なだみ-ざけ 灘見酒【名】なだめざけ(灘目酒)の轉訛。

なだむ 宥む【動下二他】■なだらかにす。やはらぐ。しづむ。なだらむ。なだらかす。のどむ。 源氏「世のなかをおぼしなだめしほどに」■罰をゆるやかにす。免して咎めず。宥恕す。宥免す。 源氏「例あらんにまかせて、なだむることなく、きびしう行へと仰せたまへば」■他人の罪に對して、罰をゆるやかならしめんことに盡力す。とりなす。調停す。 「ふことば。

なだめ 宥【名】なだむること。なだめていふこと。なだれて押しゆくこと。

なだめ-め 灘目【名】〔地〕『灘邊(ベ)の轉訛なるべしといふ』なだ(灘)■に同じ。

なだめざけ 灘目酒【名】なだざけ(灘酒)に同じ。

なたや-がさ 鉈屋笠【名】『古今夷曲集に「京のなたやといふ者發心して、大なる鉦(カネ)敲き、大笠著て、京・田舍ありくを見て詠める。近吉。笠かねも捨てて菩提を悟れかし生木に灘や氣の毒な體」とあり。このなたやの被りたる笠に摸して作りしものなるべし』笠の一種。籐(トウ)にて作りたり。 鶴遊笑覽「近頃、空也寺の法師、江戸に來り、勸化(クワン)しありきしが、竹皮の異なる大笠を著たり。なたや笠も此等の類なるべし」

なだ-ら 【貌】『なづ(撫づ)・なだむ(宥む)・なだるなどと同一の語源より出づ』■角(カド)だたず、きびしからず、險しからざるさま。おだやか。おとなしやか。のどか。 源氏「我が御方ざまに苦しかるべき事をも、なだらかに聞きなし思ひ直したまへば」 同「ひびき灘のも、なだらかに過ぎぬ」■特に目立ちたる點とてもなく、程よきさま。なのめ。 源氏「いづれをもなだらかにもてなして、女の恨な負ひそ」■傾斜の度低きさま。勾配のゆるきさま。

なだらか 宥か【名】〔動〕したびらめ(舌平目)に同じ。

なだれ 雪崩【名】〔動〕なだれて押附くること。なだれて押しゆくこと。

なだれ-ゆき 雪崩雪【名】なだるる雪。なだれたる雪。なだれ。

なち 那智【名】〔地〕■紀伊國東牟婁(ヒガシムロ)郡にある村。大字市野野に那智神社及びもとその供僧(グソウ)坊たりし青岸渡寺あり。■「なちさん」那智山)の略。

なち-さん 那智山【名】那智の千日行者(センニチギヤウジヤ)【句】不動明王に祈願をかけ、千日を期して那智瀧に水垢離を取りつつ苦行する修行者。

なち-の-せんにち 那智八十【句】『高野(カウヤ)六十、那智八

十」を見よ。

なちーいし 那智石【名】なちぐろ(那智黒)に同じ。一代女「盆山(ボン)に那智石を撒きて」

なちーがらす 那智烏【名】〔動〕くまのがらす(熊野烏)に同じ。

なちーくじゃく 那智孔雀【名】〔植〕いはうちは(岩團扇)に同じ。

なちーぐろ 那智黒【名】紀伊國那智の海濱に産する、質緻密にして純黒色なる石。硯・碁石・庭石などに造り、又試金石として用ふ。なちいし。さつまぐろ(薩摩黒)・けいばんがん(硅板岩)参照。

なちーくわんおん 那智観音【名】せいがんさじ(青岸渡寺)の俗稱。

なちーごんげん 那智權現【名】なちじんじゃ(那智神社)の舊稱。「すること。

なちーごもり 那智籠【名】那智山二に參籠

なちーさん 那智山【名】〔地〕■紀伊國東牟婁(ヒガシムロ)郡の東方にある山。熊野三山の一なる熊野夫須美神社あり。又、山中に那智瀧あり。■せいがんさじ(青岸渡寺)に同じ。

なちーじんじゃ 那智神社【名】くまのふすみじんじゃ(熊野夫須美神社)に同じ。

なちーのーうら 那智浦【名】〔地〕紀伊國東牟婁(ヒガシムロ)郡那智村の沿海。平維盛入水の地。

なちーのーじんじゃ 那智神社【名】なちじんじゃ(那智神社)に同じ。

なちーのーたき 那智瀑【名】〔地】■紀伊國東牟婁(ヒガシムロ)郡那智山にある瀑。三條に分れて下る。一の瀑は、高さ十丈八尺・幅十八間。二の瀑は、高さ十丈八尺・幅三間。三の瀑は、高さ七丈八尺・幅三間。■備後國比婆(ヒバ)郡西城(サイジョウ)町にある瀧。高さ六十五丈・幅一間餘。

なちゆらりずむ (英 Naturism)【名】〔文・美〕しぜんしゅぎ(自然主義)に同じ。

なちーわかしゅ 那智若衆【名】那智山二の僧侶と男色の關係ある若衆。義經千本櫻「ても怖ろしい、この金を、那智若衆めに、すっ

てのこと、ひじり取らりよと致した」

なつ 夏【名】四季の一。地球上いづこにても、太陽の光線を垂直に受けて、氣候最も暑く、且つ日光にあたる時間の永き季節。我が國にては、六・七・八月頃に當る。天文學上にては、西洋の定によりて、夏至(ゲ)より秋分までとし、もと支那及び我が國にては、立夏より立秋までとしたり。夏季。朱明。

夏淺し【名】夏季に入りてより未だ多くの日數を經ず。初夏なり。「夏深し」に對して)新拾遺「夏淺き青葉の山の朝ぼらけ花にかをりし春ぞ忘れぬ」

夏掛く【句】夏季にさしかかる。春より夏にまたがる。夫木「夏かけて山かほるらし白樫の落葉しをれて路うもれつつ」芭蕉「夏かけて名月暑き納涼(ノウリョウ)かな」

夏消ゆ【句】夏の暑さ消ゆ。

夏碁に火燵(コタツ)俳諧】【句】夏季は圍碁に遊ぶべく、冬季は火燵にあたりて、俳諧を樂しむによし。〔諺語〕

夏無し【句】涼しくて、夏の暑さを知らざる形容。夏の外(ホカ)なり。夏を忘る。拾遺「松蔭の岩井の水を結びあげて夏なき年と思ひけるかな」

夏の雨は馬の脊を分ける【句】『馬の脊の片方は降りても、他の片方は降らぬ意』夏の雨の降る地域の狭き形容。夕立は馬の脊を分ける。〔諺語〕梅園日記「本邦言曰、夏雨分二馬脊一」

夏の限(カギ)【句】「夏の果(テ)」に同じ。

夏の陰【句】なつかげ(夏陰)に同じ。萬葉「片岡のこの向峯(ソカ)に椎蒔かば今年の夏の陰に比(ナ)みむか」

夏の風邪(ゼ)は犬も食はぬ【句】夏風邪(ゼ)を引くは甚だ馬鹿げたり。〔諺語〕

夏の風邪(ゼ)は犬も引かぬ【句】前條に同じ。〔諺語〕

夏の神【句】夏を司るといふ神。炎帝。

夏の暮【句】■夏の暮れゆく頃。夏季の終らんとする頃。暮夏(カ)。新後拾遺「みたらしや誰が御祓禊(ギ)とも白木綿(ユフ)

の夕ぐれ。

夏の心【句】■夏を人に擬へ、心あるものとしていふ語。夏の胸に宿る心。■夏季に於ける人の心。夏の暑さに苦しむ心。「春の心」參照。拾玉「いかにとよ板井の水をむすぶとて夏の心はとけにけるかな」

夏の氷は宣旨(センジ)なければ氷らず【句】夏季に氷を得ることは容易ならず。(古は人造氷の無かりしによりていへり)〔諺語〕塵添壒嚢鈔「夏の氷は宣旨なければ氷らずといふ如何。王法いみじくば、さもこそあるべけれ。但し氷に至りては、その濫觴、思ふに必ずしも不レ依二勅宣一」

夏の境【句】春より夏に、又は、夏より秋に移る境、即ち夏の始る頃、又は終る頃。夏のへだて。重之集「いそぐらん夏のさかひに關すゑて暮れゆく春をとどめてしがな」

夏の茂(シゲ)【句】夏、草木の生ひ茂りたること、又その場所。更科「わけて訪ふ心の程の見ゆるかな木蔭小闇き夏のしげりを」

夏の末葉(バツエ)【句】夏の末の頃、又その頃の草木の葉。夫木「刈りはやす麻の立枝(エダ)にしるきかな夏の末葉になれるけしきは」

夏の蟬【句】■夏の頃出でて鳴く蟬。丹波與作「思ひしかひも夏の蟬、春秋知らぬ世のたとへ」■〔動〕なつぜみ(夏蟬)に同じ。■喧しき物の譬。ぜんさうあめ(蟬噪蛙鳴)參照。國姓爺後日合戰「お慈悲お慈悲となく聲は、秋の野の蟲、夏の蟬」

夏の蟬、春秋(アキ)を知らず【句】『莊子の逍遙遊篇に「蟪蛄不レ知二春秋一」とある命の極めて短き譬。蟪蛄(ケイ)は春秋(シュンジュウ)を期せず。〔諺語〕徒然「かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし」

夏の陣【句】「大阪夏の陣」に同じ。

夏の果(テ)【句】夏の果つること。夏の季節の終る頃。夏のかぎり。夏のわかれ。晩夏。季夏。六帖「夏のはて。夕立に夏はいぬめりそぼちつつ秋のさかひに今や至らん」

夏の蛤(ハマグリ)、犬も食はぬ【句】夏季の蛤の甚しく不味なる形容。〔諺語〕

夏の火は娘に焚かせよ、冬の火は嫁に焚かせよ【句】娘にはさびしくせよ、嫁にはやさしくせよ。〔諺語〕

夏の蛤(ハマグリ)で、見くさって買ひくさらぬ【句】『肉(シ)は腐って貝(カヒ)は腐らぬに言ひかけたる語。「見くさる」・「買ひくさる」のくさるは接尾語』商品を見しのみにて、買はざるを罵りていふ語。〔諺語〕

夏の日、冬の夜【句】『詩經の唐風葛生篇に「夏之日、冬之夜、百歳之後、歸二于其居一、冬之夜、夏之日、百歳之後、歸二于其室一」とあるに本づく』寒暑共に。

夏の隔(ヘダ)て【句】「夏の境」に同じ。堀太「鳰鳥(ニホ)のかづく池邊のかきつばたこれこそ夏のへだてなりけれ」

夏の穂【句】夏の頃の稻の穗。

夏の外(ホカ)【句】夏の暑さを知らぬこと、又その所。夏のよそ。新撰古今「涼しさは夏の外なるすみかかな山の岩根の松のした水」

夏の牡丹餅(ボタモチ)、犬も食はぬ【句】夏の牡丹餅は腐りやすきものなれば、誰れも希望せず。〔諺語〕仲人紫質「夏の牡丹餅犬もくはぬといふ譬あり。夏ぢやとて、好きな女中方などに見せては、下におくものでなし」

夏の牡丹餅(ボタモチ)で、來てゐる【句】夏の牡丹餅は腐りやすきより、その腐敗に傾ける意の「來てゐる」を、男女の、相手をひそかに戀慕する意の「來てゐる」にかけていふ語。〔諺語〕

夏の牡丹餅(ボタモチ)ご夫婦喧嘩は、犬も食はぬ【句】取るに足らぬ物事を並べ擧げていふ語。〔諺語〕

夏の蟲、飛んで火に入る【句】『夏は戸・障子など明けはなしなるより、蟲の火影を慕ひて飛込み燒死ぬるもの多き

よりいふ』自ら禍を招く譬。飛んで火に入る夏の蟲。〔諺語〕

夏の蟲、氷を笑ふ【句】『莊子の秋水篇に「夏蟲不可以語於氷」とあり』「井の中の蛙、大海を知らず」に同じ。〔諺語〕風來六々部集「里の小田巻節」「各一理なきにしもあらず。さりながら、井の内の蛙大海を知らず、夏の蟲氷を笑ふの論なり」

夏の蟲、飛んで火に焼く【句】「夏の蟲、飛んで火に入る」に同じ。〔諺語〕盛衰記「常の御詠吟に、智者は、秋の鹿、鳴きて山に入り、愚人(グニ)は、夏の蟲、飛んで火に焼くとぞながめさせたまひける」

夏の蟲、雪を知らず【句】「夏の蟲氷を笑ふ」に同じ。〔諺語〕

夏の餅と夫婦喧嘩は、犬も食はぬ【句】「夏の牡丹餅と夫婦喧嘩は犬も食はぬ」に同じ。〔諺語〕

夏の物【句】■夏の季節のもの。■なつもの(夏物)に同じ。丹波與作「父さまの出入も、夏の物ども人手に渡し、朋輩にも無心いひ」

夏の行手(ナカ)【句】夏を人に擬へて、その行き向ふ方。夏の行く先。風雅「淡川夏の行くては知らねども流れて早き瀬瀬のゆふしで」

夏の夕焼(ナカ)、雨が降る【句】夏の夕焼は降雨の前兆なり。〔諺語〕

夏の夕焼(ナカ)は河を渡れ【句】夏の夕焼は降雨の前兆なれば、降らざる先に河を渡れ。豐後國にていふ語

夏の餘所(ナカ)【句】「夏の外(ホカ)」に同じ。新葉「せきとむる岩井の清水そこ清み夏のよそなる松のした蔭」

夏の夜の霜【句】『白居易の詩に「月照二平沙一夏夜露」とあり』夏の月のさやかに照せるさまの形容。新撰萬葉「夏の夜の霜やふれると見るまでに荒れたる宿を照す月かげ」

夏の別(ワカ)【句】『夏を人に擬へていふ』「夏の果」に同じ。

夏は鰹に、冬鮪(マグロ)【句】夏季は鰹が味よく、冬季は鮪がよし。〔諺語〕

夏は日向(ヒナタ)を行け、冬は日陰を行け【句】夏季は暑さに耐ふるやうに、日向を行け、冬季は寒さに耐ふるやうに、日陰を行け。〔諺語〕

夏深し【句】夏たけたり。夏たけなれり。夏の盛りの頃なり。(「夏淺し」に對して)續後撰「夏深き山里なれどほととぎす聲はしげくも聞えざりけり」

夏も小袖【句】「戯く物は夏もお小袖」の略。〔諺語〕

夏を催す蟲【句】その聲の、夏の早く來るを促すかと思はるる蟲。金葉「夏をもよほす蟲。春山の木の根の蟬は集をせばみ夏の木の葉や戀しかるらん」

夏を忘る【句】夏の暑さを知らず。夏無し。風雅「雨そそぐ外面の眞柴風過ぎて夏を忘るる山の下かげ」

夏を惜しむ【句】夏の暮れ行くを惜しむこと。なづさふこと。滯かることこと。ひたること。〔古語〕記「由良のとのとなかの…なづの木のさやさや」

なづ撫づ【動下二他】『なだらかを見よ』■掌にて、やはらかに擦る。■いつくしむ。あはれむ。いつくしみなつく。愛撫す。萬葉「山吹はなでつつおほさむありつつも君きましつつかざしたりけり」金葉「親の撫でやしなひし時は」■うつ(打)に同じ。〔齋宮の忌詞〕

なつ-あさ 夏麻【名】〔植〕『夏季に茂るよりいふ』あさ(麻)の異稱。夫木「今日はいや木綿(ユフ)とりしでて夏麻のあふの川瀬にみそきしてけり」

なつ-あさがほ 夏朝顔【名】〔植〕六月頃小さき花を開く朝顔。恒丸「麥飯に夏葵(アフヒ)の分限(ブン)かな」〔同じ。〕

なつ-あたり 夏中【名】あつさあたり(暑中)に同じ。

なつ-あづき 夏小豆・蔴熱【名】〔植〕赤小豆の一種。果實の夏季熟するもの。

なつ-あふ 捺押【名】あふなつ(押捺)に同じ。

なつ-あふぎ 夏扇【名】昔時、年若き公卿の夏季に用ひし扇。式正(シキシヤウ)には、冬と同じく檜扇(ヒワギ)なりしが、後世、夏には紙を張れるを用ふるに至れり。(冬扇に對して)

なつ-あらし 夏嵐【名】夏吹く烈しき風。夏の嵐。子規「夏嵐机上の白紙飛盡す」

なつ-いちご 夏苺・夏懸鉤子【名】〔植〕木苺(キイチゴ)の一品種。果實の夏熟するもの。とくりいちご。とっくりいちご。

なつ-いでたち 夏出立【名】夏の身形(ミナリ)。夏季の服裝。今圖姓氏「片手に輕き夏いでたち」

なつ-いぬ 夏犬【名】■夏頃の犬。■『夏は狂犬多き季節なるよりいふ』荒氣なき者の譬。金葉「例の夏犬なれば、集りてかまずぐにはあらずや」

なつ-いん 捺印【名】印を押すこと、又その押したる印。押印。捺判。蹈印。

なつ-うみ 夏海【名】夏季に於ける海。(主に波の穩かなる時季とす) 若風詠「夏海の靜かに室の津よりあがりて、須磨の關といふも、戀せばつらかるべし」

なつうめつる 夏梅蔓【名】〔植〕またたび(木天蓼)に同じ。

なつ-えびね 夏海老根【名】〔植〕蘭科に屬する多年生の草。やや小形にして細く、葉は長楕圓形にして尖り、裏面平滑なり。七八月頃、白色に淡紫色を帶びたる花を開く。

なつ-おび 夏帶【名】夏季に用ふる帶。

なつ-かいだう 夏海棠【名】〔植〕たにうつぎ(谷潅疏)に同じ。

なつ-がき 夏牡蠣【名】〔動〕ころびがき(轉牡蠣)に同じ。

なつ-かぐら 夏神樂【名】「夏越(ナゴシ)の神樂」に同じ。夫木「夏神樂けふやしつらん卯の花の白木綿(シデ)かくる加茂の川浪」

なつ-かげ 夏陰【名】夏の物陰。夏の繁れる木蔭。夏物陰の涼しき所。夏の日陰。萬葉「夏かげのねやの下に衣たつわぎもらまけてわがためたばやや大にたて」

なつかし 懐し【形二】なつきたし。いとほしかはゆし。したはし。萬葉「世のつねにきけば苦しき呼子鳥聲なつかしき時にはなりぬ」

なつかし-ぐさ なつかし草【名】〔植〕なでしこ(撫子)■の異稱。〔古語〕雅目抄「故郷とこれにぞ思ふ夏ごとになつかしぐさの袖のくれなゐ」

なつかしび 懐【名】なつかしぶこと。〔古語〕續拾「うらなくなつかしびを通はしたまひしに」

なつかしぶ 懐しぶ【動四他】なつかしむ(懐しむ)に同じ。〔古語〕

なつかしみ 懐【名】■なつかしむこと。萬葉「たまぼこのみちのかみたちまひはせむあがおもふきみをなつかしみせよ」■なつかしきところ、又その心もち。

なつかしむ 懐しむ【動四他】なつかしと思ふ。なつかしぶ。〔古語〕中務内侍日記「なつかしむ心をしらばゆくさきをむかひのかみのいかが見るらん」

なつ-がすみ 夏霞【名】夏のかすみ。(春霞と區別していふ)

なつ-かぜ 夏風【名】夏吹く風。夏季の風。夫木「なつ風の我が袂にしつつまれば戀しき人のつてにしてまし」

なつ-がつば 夏合羽【名】昔時、荷布・芭蕉布などにて仕立て、夏季に用ひたる合羽。

なつ-かは 中中【副】なかなか(中中)の訛。

なつ-かは 夏川【名】夏の川。春日(重五)「夏川の音に宿かる木曾路かな」

なつかは 撫川【名】〔地〕備中國都窪(ツクボ)郡にある町。岡山市の西二里八町。戸川氏の陣屋のありし處。

なつかは-うちは 撫川團扇【名】備中國都窪(ツクボ)郡撫川にて製する團扇。

なつ-かはづ 夏蛙【名】さかりを過ぎたる夏蛙。凡牛「淺澤や歌も忘れて夏蛙」

なつ-がひ 夏飼【名】夏季に飼養すること、又その動物。

なつ-かへて 夏楓【名】夏の頃の、若葉の赤く萌え出でたる楓。太功記「初菊は、飛立つばかり氣もいそいそ、心の悦、穗に出づる、顏は、上氣の夏かへて」

なつかまさへ 長束正家【名】〔人〕武將。豐臣氏の五奉行の一人。通稱は藤兵衛。大藏大輔と稱す。算數に明かなり。丹羽長秀に仕へて鉅萬の富を累ねしめ、豐臣秀吉に徹されて貢賦・租稅の事を掌り、水口(ミナ)

ゐ城五萬石を食む。關ケ原の役、池田輝政に圍まれ、逃れて自殺す。

なつ-がみしも 夏上下【名】輕く薄き織物にて仕立て、夏季に用ひたる上下。

なつ-がも 夏鴨【名】〔動〕『初夏の候、稻田又は沼・川の邊に營巢・產卵するより いふ』かるがも(輕鴨)に同じ。

なつ-かり 夏刈【名】〔植〕やまもも(楊梅)に同じ。

なつ-がり 夏狩【名】夏季に行ふ狩獵。東鑑「將軍家爲覽二富士野藍澤夏狩一、人人赴二駿河國一給」

なつ-がり 夏刈【名】夏季に刈取ること、又その刈取りたる物。新古今「夏がりの草のかりねも哀なり玉江の月のあけがたの空」

なつ-き 夏木【名】なつこだち。新樹。

なつ-き 夏季【名】一奉公人の一季又は半季にて出代(ではり)する場合に、その季(き)の終が夏に當れるもの。一代女「我、夏きより奉公をやめて」二かき(夏季)に同じ。

なつ-ぎ 夏著【名】夏季に著る衣服。なつごろも。なつもの。なつのもの。

なづき 腦髓【名】一なう(腦)(二)に同じ。〔古語〕和名、腦。說文云、腦奈都岐」三部抄「からべには、なづきを入れていただき」二あたま。つむり。續膝栗毛「あいた、あいた…身ども、なづきが割れた。…やいやい、あんで打(ブ)った。ああ、なづきがぶち碎けた」

なづき 名附【名】みやうぶ(名簿)に同じ。〔古語〕後撰「小一條右大將に、なづき賜ふとて」

なづき【名】なづきてあること。麛(ナ)附けること。〔古語〕記「なづきの田の稻(ナ)がらに」

なつ-ぎく 夏菊・金銀菊【名】〔植〕菊の一品種。高さ二三尺に達し、夏季、莖頭に花を開く。その色、黃・淡紅・白など種種あり。(秋菊に對して)若風俗「缺(カ)德利に夏菊を生けて、風を樂みの種とし」若風俗「庭に夏菊作りなして、井の水清げに」續猿蓑「夏菊や茄子の花は先へ咲く」

なづきだ なづき田【名】『なづきを見よ』なづきたる田。麛(ナ)附きたる田。「古語」記「御陵(カハ)を作りて、其地(ソコ)のなづき田に御劍(ツルギ)ひ廻(モト)りて、哭(ナ)かしつつ歌ひたまはく」

なつ-ぎぬ 夏衣【名】なつごろも(夏衣)に同じ。夫木「なつぎぬのありしながらも冬の夜は妹としねねば寒からんやは」

なつ-ぎり 夏霧【名】夏季に立つ霧。夏の霧。(秋霧などと區別していふ)

なつきり-おや 夏切茶【名】次條を見よ。

なつきり-つぼ 夏切壺【名】六月の始、山城國宇治の茶師の、新茶を新しき壺に入れて、當に茶を賣る家家に贈るもの。又その茶を夏切茶といひ、その壺の蓋の紙を、小刀にて切りて、茶を出すを、壺の口切、又は壺口を切るといふ。

なつきりばうちやう 菜切庖丁【名】なきりばうちやう(菜切庖丁)の音便。

なつ-く 懷く【動四自】『馴れ附くの略』馴れて附從ふ。親しみ從ふ。心を寄す。なじむ。したふ。萬葉「なつきにし奈良の都の荒れゆけば出でたつことに嘆きしまさる」

なつ-く 懷く【動下二他】なつくやうにす。親しましむ。源氏「この人をなつけ語らひきこえたまふ」

なづ-く 名附く【動四他】次條に同じ。

なづ-く 名附く【動下二他】名を附く。命名す。人丸集「梅の花まづ咲く枝を折りもちてつととなづけてよそへてむかも」

なづ-く 懷く【動四自】なつく(懷く)に同じ。「じ。

なづ-く 懷く【動下二他】なつく(懷く)に同じ。

なづく【動四自】麛(ナ)附く。なびき附く。【古語】なづきなづきだ(なつき田)・たたなづく參照。記「なづきの田のいながらにいながらにはひもとろふところづら」

なつ-くさ 夏草【名】夏季の草。新拾遺「暮るるより露と亂れて夏草のしげみにしげく飛ぶ螢かな」

なつくさの 夏草の【枕】一夏の草は、長く延び茂りて深くなり、葉の數多く、又延びてしなえ萎(ナ)ゆるより、しげし(繁し)・ふかし(深し)・しなゆ(撓ゆ)及びなゆ(萎ゆ)・なえ(萎え)の約なるぬ・ねにかけ、又靡りて、のにかけていふ。萬葉「夏草の思ひしなえてしぬぶらむ妹がかど見むなびけこの山」二夏草は、深く茂るため刈取ることもあるより、かりにかけていふ。萬葉「この頃の戀のしげく夏草のかり拂へども生ひしくがごと」

なつくひな 夏水雞・夏秧雞【名】〔動〕水雞の一種。やや小形にして、背面は橄欖褐色、胸部は栗茶色、初夏、冬水雞(クイナ)の去ると前後して渡來し、多く稻田に巢を營む。古來、歌人に喜ばるる水雞はこの種に屬す。ひくひな。

なつ-ぐみ 夏茱萸【名】〔植〕一胡頽(ツミ)科に屬する落葉灌木。葉は互生して、形楕圓なり。春の末、花を開く。實は南天より大きく、赤くして白き斑あり。熟すれば食ふべし。山野に自生す。たはらぐみ。二なはしろぐみ(苗代茱萸)に同じ。〔木半夏〕

なつ-ぐも 夏雲【名】夏の空に立つ雲。夏の雲。夏雲(ナツ)。

なつ-け 懷【名】懷くること。なつかしむること。躬恒集「春の野に荒れたる駒のなつけには草葉に身をもなさんとぞ思ふ」

なつ-げ 夏毛【名】鹿の毛の、仲夏以後、黃になりて、白斑の鮮かに出づる頃のもの。毛皮として用ひ、又筆に造る好時節なるより、特に名づく。著聞「夏毛の行縢(ムカバキ)」祖徠反魂香「ならび夏毛の狩野の筆」

なつ-げ 夏毛 夏毛の秋懸けたる【句】鹿の毛色にいふ語。秋、鹿の古く長き毛をむしり去り、新しく短き毛のみを殘し留めたるもの。夏毛よりは色濃し。むしりげ。あきふたげ。

なづけ 菜漬【名】漬菜を鹽に漬けたる香(カ)の物。おはづけ。醃菜。

なづけ 名附【名】一生後七日目に、小供の名を附くること。二いひなづけ(言名附)の略。今宮心中「なづけの方より、急急に欲しいと申すにつき」艷狩獵本地「名付ばかりの若草の、下紐一夜ときもせで」

なづけ-おや 名附親【名】名附(一)をなす人。母方の祖父これに當ること、古來の習慣なり。なおや(名附子に對して)俳諧新選「山「紫陽草(アヂサヰ)や香山居士を名附親」

なづけ-おやかた 名附親方【名】前條に同じ。

なづけ-ご 名附子【名】名附親が名を附けたる子。(名附親に對して)

なつ-げしき 夏景色【名】夏季のながめ。

なつ-こ 夏蠶・蠶【名】蠶の、夏季に孵化するもの。二番蠶。和名「蠶、奈都古、眽蠶也」

なっ-こ 【名】『なごの音便』いしなご(石子)を云ふ。(東國の方言)物類稱呼「石投(ナゲ)。江戸にて手玉と云ふ。東國にて石ナンゴ又ガツコともいふ」

なつ-こく 夏石【名】元祿の頃まで、九州などの地方にて、麥にて納めたる畑年貢。

なつ-こだち 夏木立【名】夏の頃、おひ繁れる樹木。玉葉「月の影もるかと見えて夏木立繁れる庭に咲ける卯の花」

なつ-ごほり 夏氷【名】夏季に清涼飲料などに用ふる氷。「イ麥」に同じ。

なつ-こむぎ 夏小麥【名】〔植〕らいむぎ(ラ)に同じ。

なつ-ごめ 夏米【名】夏季に於ける米。夏の米。醒睡笑「夏米を蟲のくらふも知らいで」

なつ-ごらう 夏ごらう【名】〔植〕すのきに同じ。

なつ-ごろ 夏衣【名】夏季に著る著物。なつぎ。なつきぬ。素性集「春だにもありし心を夏衣いかにうすきのけふまさるらん」

なつ-ごろも 夏衣【枕】一夏の衣は、古は片絲にて織りたる物を用ひて仕立つること多かりしより、片織の約なるかたりにかけていふ。新葉「明けぬるかはや影うすしなつごろもかとりの浦のみじか夜の月」二夏衣は、單(ヒトヘ)にて薄きものなるより、ひとへ(單)・うすし(薄し)にかけていふ。古今「蟬の聲聞けば悲しなつごろもうすくや人のならんと思へば」續古今「夏衣ひとへにつらき人戀ふる我が心こそうらなかりけれ」二衣に綠あるたつ(裁つ)・き著)・ひも(紐)・すそ(裾)・うら(裏)などにかけていふ。後拾遺「夏衣たつた河原の柳かげすずみに來つつならす頃かな」續千載「夏衣かとりのうらのうたたねに浪のよるよる通ふ秋風」新古今「おのづから涼しくもあるか夏

衣ひも夕ぐれの雨のなごりに」 幾千載秋きぬといはぬばりぞ夏衣すそ野の原の楢のした風」

なつ-さく 夏作【名】夏の間田畑にある作物。なつつけ。

なつ-ざけ 夏鮭【名】北海道十勝國地方にて、六七月頃漁獲したる鮭。ときしらず。

なつ-さけ 夏酒【名】夏の酒。俳家奇人談(北枝)「夏酒や我れと乗込む火の車」

なつ-ざしき 夏座敷【名】夏季の開け放したる座敷。芭蕉「山も庭も動(ゆる)ぎ入るるや夏座敷」

なづさはる 昵はる【動四自】なづさふ(昵ふ)(二)の延。〔古語〕 類聚集「をみなへしそのかたおひは目も絶えて花のさかりぞなづさはりぬる」

なづさひ-わたる 昵渡る【動四自】なづさひて渡る。なづさひながら向ひへ渡る。〔古語〕 萬葉「暇有らばなづさひ渡り向つ峯(ヲ)の櫻の花も折らましものを」

なつ-さぶ 夏さぶ【動上二自】ますます夏らしくなる。夏ふけ過ぐ。〔古語〕 拾玉「手にむすぶ音羽の瀧に夏さびて涼しくなりぬ森の下風」

なづさふ 【動四自】(一)水に漂ひ、又は浸る。〔古語〕 萬葉「山の端に月かたぶけばいさりするあまのともし火沖になづさふ」(二)なつく(懐く)に同じ。〔古語〕 類世継「われも戀しければ、しばしもなづさひ奉らん」

なつ-さぶとん 夏座蒲團【名】夏季に用ふる座蒲團。多くは麻布、真蔗(ざ)皮革などにて造る。

なづさへ 【名】なづさはるもの。〔古語〕 山家「古き妹が園に植ゑたるからなづな誰がなづさへとおぼし立つらん」

なつ-しばゐ 夏芝居【名】夏季に興行する芝居。涼しげなる狂言を撰ぶを普通とす。 凡兆「汗拭や左祖(ソダ)ぐ夏芝居」

なつ-じむ 夏染む【動上二自】夏の有様になる。夏らしくなる。夏めく。

なつじめ-らふ 夏搾蠟【名】〔夏季、氣温高くして、その蠟の内に含まれたる軟脂の溶け出づる時に壓搾するよりいふ〕いたじめらふ(板締蠟)に同じ。

なつ-しやうぞく 夏裝束【名】夏季に着用する裝束。夏の裝束。

なつ-しよ 納所【名】(一)年貢などを納むる所。(二)禪寺にて、施物を納むる所、又その役務の僧。(三)次條(二)の略。

納所から和尚(カサウ)【句】「沙彌(シミ)から長老」に同じ。〔諺語〕

なつしよ-ばうず 納所坊主【名】(一)納所(二)なる僧。なつしよ。(二)下級なる僧。下等の坊主。

なつ-す 捺す【動佐變他】印などをおす。押捺す。捺押す。「略。

なつ-すかし 夏すかし【名】〔植〕次條の

なつすかしゆり 夏すかし百合【名】〔植〕はるかしゆり(春すかし百合)に同じ。

なつ-ずるせん 夏水仙【名】〔植〕(一)石蒜(セキサン)のかみそり(狐髪剃)に同じ。(二)石蒜(セキサン)科に屬する多年生の草。地下の鱗莖は丸くして大きく、八月頃、五六箇の大形にして淡紅紫色なる花を著く。本州中部以北の原野に自生し、また觀賞用として栽培せらる。けいせいばな。〔庶葱〕(三)石蒜(セキサン)科に屬する多年生の草。根莖は不規則なる球形を成し、地上莖は三四尺に達す。葉は細長き披針形を成す。夏季、夜間、白色の花を開きて、强烈なる佳香を放つ。メキシコの原産にして、觀賞用として栽培せらる。げっかかう。じやがたらずゐせん。ろげっかう。〔月下香〕

なつ-ぜみ 夏蟬・蟪蛄【名】〔動〕有吻(ハウン)類に屬する昆蟲。蟬類の一。六月より九月まで發生し、體長六七分、淡褐色に綠を交ふ。前翅は開けば二寸餘ありて、透明にして、黒褐色の斑を有し、後翅は殆んど全部黒褐色なり。蜩(ヒグラシ)は、全體に泥土の附著せるが故に、蛻皮(ゼイ)によりて辨明するを得。長く樹幹に靜止して飛ぶこと少なく、終日鳴く。にいにいぜみ。

なつ-せん 捺染【名】型紙又は亜鉛・眞鍮などの板に、種種の模様を彫抜(ホリヌ)きたるものを當てて、その上より染料を捺(スリ)つり、或は印刷機械にて、紙に印刷すると同様なる方法を用ひて、布帛・絲などに模様を染出すこと。更紗・中形(チウガタ)・友禪・小紋・染絣(ソメガスリ)等は、この法に據る。おしぞめ。なすりぞめ。

なつせん-のり 捺染糊【名】捺染をなすに當り、染料・染藥などのにじみを防ぎて、模様を鮮明に染出さんがために使用する糊。我が國在來の方法なる型紙を用ひて行ふ捺染には、專ら米の粉と米の糠又は精米粉とを混和して作れるものを用ひ、近時の輪入に係る機械使用の捺染には、主として生麩・トラガントゴム・アラビヤゴム・プリチシュゴムなどより成れるものを用ふ。

なつ-そ 夏麻【名】夏季に畑より引きて取りたる麻。〔古語〕

なつそ-ひく 夏麻引く【枕】夏麻を引きて取る畑の畦といふ意にて、そのうねの轉音うなにかけていふ。一説に、夏麻を引きて頸(クビ)に懸く、即ちうなが(項)すとの意にていふとも、魚(ナ)釣(ツ)綱(ツ)撓くの義にて、釣絲を引くを云ふによりて、うなが(海上)うなひ(海元合)にかけていへるなりと。萬葉「なつそひくうなかみ潟の沖つすに舟はとどめむさ夜ふけにけり」同「なつそひくうなひをさして飛ぶ鳥の至らむとぞよあが下はへし」

なつ-ぞら 夏空【名】夏の頃の空。夏の空あひ。 許六「夏空や花の名殘の朝曇」

なつ-そり 納蘇利【名】高麗樂の一。面をかぶり二人にて舞ふもの。古、競馬節會には、此の樂を奏し、龍駕を迎へ奉りきといふ。

なつた 夏田【名】夏の頃の田。夏の田。新撰字鏡「穢に出でぬ夏田にまじるひえ草のひきすてられて世をや過ぎなん」

なつ-だいこん 夏大根・夏蘿蔔【名】〔植〕大根の一種。夏より秋にかけて採收する大根の總稱。一般食用に供す。

なつ-だいだい 夏橙【名】なつみかん(夏蜜柑)に同じ。

なつ-だうぐ 夏道具【名】夏季に使用する道具。 嬉遊笑覽「古長持の上にたつ縞の夜著・蒲團、茜の乳綠(チヽミ)を附けたる蚊帳も時ならず疊み重ねて見せける、夏道具を霜月頃まで質屋へもやらぬことの頼もし」

なつ-たか 夏鷹【名】雲雀(ヒバリ)などを捕る、夏の鷹狩に使用する鷹。「柑」に同じ。

なつ-たちばな 夏橘【名】〔植〕きんかん(金柑)の略。

なつ-たて 夏建【名】なつたてもの(夏建物)の「稱。

なつ-たて 夏蓼【名】〔植〕けたて(毛蓼)の異名。

なつ-たてもの 夏建物【名】張合米(ハリガフマイ)にて、第一期と定めし四月十七日より十月八日までの期間に於ける標準米。大阪堂島にては、加賀米又は米子(ヨナゴ)米をこれに充つ。なつたて。

なつ-ちん 納音【名】六十甲子に五行を配當して、それぞれの名を附し、その各の異なる性質を表すもの。即ち海中金(甲子・乙丑)・爐中火(丙寅・丁卯)・大森林(戊辰・己巳)・路傍土(庚午・辛未)・劍鋒金(壬申・癸酉)・山頭火(甲戌・乙亥)・澗下水(丙子・丁丑)の類。

なつ-つかた 夏方【名】夏の頃。なつざま。〔古語〕 狹衣「夏つ方より、母上なやましげにしたまふを」

なつ-づき 夏月【名】(一)夏季に於ける月。(二)夏の月影。 俳諧新選(牧童)「夏月や葉の影動く長廊下」

なつ-づきん 夏頭巾【名】夏季用ふる頭巾。多くは紗・絽などにて造る。古くは、麻布もて造りといふ。

なつ-づた 夏蔦【名】〔植〕つた(蔦)(二)に同じ。

なつ-つばき 夏椿【名】〔植〕(一)山茶(サンチャ)科に屬する落葉喬木。高さ四五十尺に達す。樹皮は平滑にして赤褐色を呈し、葉は長楕圓形にして尖り、鋸齒を具へ、互生す。六月頃、葉間に山茶の花に似たる白花を開く。山地に自生し、また觀賞用とす。材は農工具の柄、挽物細工又は薪炭の料とす。さるなめ。さるすべり。さんどな。てんつきのき。〔杪欏〕(二)なにはいばら(難波薔薇)に同じ。(三)またたび(木天蓼)に同じ。

なつ-てたち 夏扮裝【名】〔なついでたち(夏扮裝)の約〕夏季のいでたち。夏らしき扮裝。今國姓爺「片手に輕き夏でたち」

なつてん 南天【名】〔植〕なんてん(南天)に同じ。

なつと(英Zinc)【名】一片の金屬片にボルトの螺旋に適すべき雌螺旋(めねじ)の孔を穿ち、ボルトと相合して、機械・器具などの二部分を固結する用をなさしむるもの。ボルトと同じく錬鐵・鋼・砲銅・眞鍮などを用ひて造る。

なっと 納豆【名】次條の訛。芭蕉「納豆切る音暫し待て鉢たたき」太祇「曲輪(くるわ)にも納豆の匂ふ齋日(ものいみ)かな」

なっとう 納豆【名】■くき(豉)に同じ。■大豆を釜にて煮、又は蒸籠(せいろ)にて蒸して、柔かくしたるを藁苞或は笊に入れ、上より少許の藥を加へ、數日溫室に置きて、そのバクテリヤ醱酵を起し、表面粘著性を呈し、一種の臭氣を生ずるに至りし食品。消化を進むる効あり。前者を苞納豆(つとなっとう)、後者をばら納豆といふ。いとひきなっとう。とうふやなっとう。まめなっとう。

なっとううり 納豆賣【名】納豆を賣ること、又その人。なっとうや。

なっとうえぼし 納豆烏帽子【名】その頂の折目、寺納豆(テラナット)を盛るに用ひし曲物の數物の折目に似たるよりいふ』さぶらひえぼし(侍烏帽子)に同じ。

なっとうごえ 納豆肥【名】生の納豆を醱酵腐熟せしめて造りたる肥料。人糞と同様の効あり。殊に茶樹に特効ありといふ。

なっとうじる 納豆汁【名】味噌汁に、擂(す)りつぶしたる納豆を加へたるもの。なっとじる。

なつとうだい 夏燈臺・甘遂【名】〔植〕大戟(タイゲキ)科に屬する多年生の毒草。高さ一尺內外、平滑にして帶紅色を呈す。葉は長倒卵形または箆形にして、疎らに互生す。莖頂には大なる五瓣の葉輪生じ、四五月頃、褐色の花を著く。各地の山野に自生す。あきざくね。「夷」に同じ。

なっとうや 納豆屋【名】なっとうり(納豆賣)に同じ。

なっとく 納得【名】■祈願などの、神佛に露納せらるること。■うべなふこと。得心。合點。日本武尊吾妻鑑「妹が納得する樣、御了簡もあれかし」

なっとじる 納豆汁【名】なっとうじる(納豆汁)の訛。續狂言(許六)「はらわたをさぐりてみれば納豆汁」素堂「朝霜や室(むろ)の場屋の納豆汁」

なつとらのを 夏虎尾【名】〔植〕くりんさう(九輪草)に同じ。

なつな 夏菜【名】夏季に食用に供する菜。續狂言記(狐)「蟲の食ふ夏菜遠しや寺の畑」

なづな 薺【名】〔植〕十字科に屬する二年生の草。高さ四五寸乃至一尺。根生葉は羽狀に分裂し、莖葉は鋸齒または銅齒を有す。初春、數個の小形白色なる花を著く。果實は扁平なる三角形の裂果にして、形狀やや三味線の撥に似たり。各地の原野に自生す。葉は食ふべし。春の七草の一。ぺんぺんぐさ。しゃみせんぐさ。さみせんぐさ。べんべんぐさ。びんびんぐさ。ねこのしゃみせん。きはね。すもとりぐさ。むしつりぐさ。かにとりぐさ。からなづな。めなづな。ばちくさ。なづな・ならしば、いとをかし」

なつな 薺の拍子(ヒヤウシ)【句】薺を囃す時の拍子。

なつな 薺を打つ【句】次條に同じ。「じ。

なつな 薺を囃す【句】「七種(ななくさ)を囃す」に同じ。

なつなか 夏中【名】夏季三箇月の中央なる陰曆六月、孟夏。「古語」 貴之集「夏なかに秋を知らするもみぢばは色ばかりこそ變らざりけれ」

なつなし 夏梨【名】〔植〕からなし(唐梨)をいふなるべし。「古語」 新六「時にあひて秋をし待たぬ夏梨は必ず西の枝ならずとも」

なづなじる 薺汁【名】薺を實としたる汁物。「同じ。

なづなのみ 夏實【名】〔植〕いぬなづな(犬薺)に同じ。

なつなほし 夏直衣【名】夏季に著用する直衣。夏の直衣。桃華蕊葉に據るに、穀織物(コウモノ)にて仕立て、三重襷の紋とし、色は紫・薄色・淺黃等を用ひたり。

なつなり 夏成【名】■夏季に成熟すること、又その物。■德川時代に、關東にて、夏季に納めし畑年貢。

なつぬ 夏野【名】なつの(夏野)に同じ。「古語」 萬葉「父母に知らせぬ子ゆゑ三宅道(みやぢ)の夏野の草をなづみ來るかも」

なつねぎ 夏蔥・漢葱【名】〔植〕葱の一種。葉は春葱より細く、二月下旬に植ゑ、五月頃より盛んに繁茂し、夏食するを得。

なつねぶつ 夏念佛【名】夏の土用に念佛を唱へて修行すること。なつねんぶつ。かんねぶつ。寒念佛)參照。 ▲我「日頃しる門を行くへか夏念佛」

なつねんぶつ 夏念佛【名】前條に同じ。

なつの 夏野【名】夏季に於ける、百草の茂れる野。芭蕉「まぐさ刈り入るをしをりの夏野かな」

なつの 夏野の原【句】前條に同じ。俳諧古選「守武「撫子や夏野の原のおとし種」

なつのさぎさう 夏鷺草【名】〔植〕さぎはは(常磐ばせ)に同じ。

なつのたむらさう 夏田村草【名】〔植〕秋田村草(ムラサウ)の變種。夏季に大形の深紫色なる美しき花を開く。山間の幽谷に生ず。「を見よ。

なつのちん 夏の陣【句】なつ(夏)の條下

なつのちやひきぐさ 夏茶挽草【名】〔植〕かもじぐさ(鼈草)に同じ。

なつのはなわらび 夏花蕨【名】〔植〕瓶爾小草(ヘイジサウ)科に屬する多年生の草。葉は大形にして、數回羽狀複葉を成す。夏季、葉の間より一莖を抽き、多數の粟粒の如き子嚢を穗狀に著け、黃金色を呈す。各地の山野に多く自生す。「を見よ。

なつのむし 夏の蟲【句】なつ(夏)の條下

なつは 菜葉【名】菜の葉。

なつば 夏場・夏場【名】■夏季のあひだ。■夏季の住居に適する地。なつばしよ。

なつばう 夏帽【名】次條の略。

なつばう 夏帽子【名】夏季に被る帽子。材料・形狀樣樣なれども、麥藁にて作りたるもの最も多く行はる。なつぼう。

なつばおり 夏羽織【名】夏季に著用する、一重の羽織。多くは紗・絽・透綾(スキヤ)などにて仕立つ。ひとへばおり。太祇「そばに寢いて著ぬことわりや夏羽織」

なつはぎ 夏萩【名】■〔植〕萩の一品種。夏より咲くもの。花の色、深紅にして美し。■萠(カワ)の色目の一。表は青、裏は紫。夏季に用ふ。

なつはぎ 夏剝【名】草木の皮などを、夏の頃剝取ること、又その物。曾丹「夏はぎの麻のをがらとあた人の心がろさといづれ增れり」「同じ。

なつはじ 夏櫨【名】〔植〕なつはぜ(夏櫨)に同じ。

なつはじかみ 夏薑【名】〔植〕さんせう(山椒)に同じ。

なつばしよ 夏場所・夏場所【名】■夏季に最も適する場所。■ごぐわつばしよ(五月場所)に同じ。「相撲の語」

なつはぜ 夏櫨【名】〔植〕石南(シナン)科に屬する落葉灌木。高さ二三尺乃至五六尺。葉は楕圓形または長卵形にして尖り、互生し、夏季、紅葉す。五六月頃、鐘狀淡黃色の花を著く。果實は小球形。各地の山野に自生す。なつはじ。あきごろも。やまなすび。

なつはつき 夏端月【名】陰曆の四月の異稱。「古語」 親藏抄「ほととぎす 翠は今日まで夏はつき音羽の山のかきのいほりに」

なつばふ 納法【名】古、年貢を納むる法。庭訓往來「濟例納法之注文、悉可二被召進一也」

なつはん 捺判【名】なついん(捺印)に同じ。

なつばらへ 夏祓【名】■夏の夕暮、水邊にて行ふ祓。■みなづきはらへ(六月祓)に同じ。夫木「思ふことあさぢの繩にときつけて清き河瀨になつばらへしつ」

なつびき 夏引【名】■夏季に取る、手引の絲。又夏麻(ナツヲ)をひくこととともいふ。古今「夏引のてびきの絲をくりかへしことしげくとも絕えんと思ふな」■備馬樂(ビンガク)の律の曲の一。夏引「なつびきの白絲七ばかりありさごろに織りても著せん」新續古今「まことにや人のくるには絕えにけん生野の里の夏引の絲」

なつびきらく 夏引樂【名】〔音〕雅樂の

一。黄鐘(ワウキ)調に屬する古樂。

なつ-ふく 夏服【名】夏季に用ふる被服。夏の衣服。(多く洋服にいふ)

なつ-ぶし 夏沸瘡【名】暑中に、小供の頭に發する瘡。なつぼし。貞享「夏ぶしや櫛さへ入らぬ額髪」

なつ-ぶた 夏蓋【名】夏季など、暖爐に火を焚かぬ時、その焚口を隠しおくための、鐵製の蓋。「藤」に同じ。

なつ-ぶち 夏藤【名】〔植〕ぞようふぢ(土用藤)に同じ。

なつ-ぶとん 夏蒲團【名】■夏季に用ふる蒲團。■なつざぶとん(夏座蒲團)の略。

なつ-ふゆ 夏冬【名】なつと、ふゆと。俳諧古選(定武)「夏冬と元日やよき在りどころ」

なつ-ぼし 夏干【名】夏季に干すこと、又その干したるもの。

なつ-ぼし 夏沸瘡【名】なつぶし(夏沸瘡)の轉訛。〔關東の方言〕

なつ-まけ 夏負【名】暑氣に冷りて、身體衰へ病むこと。なつやせ(夏痩)參照。

なづ-まし 泥し【形二】なづむさまにてあり。〔古語〕 愛花「何事も、心苦しげに、うちうちなづましげなりつる人も、事かぎりあれば、織物の唐衣を着、年頃めでたうしたり顔なりつる人も、俄かに平絹などにて」

なつ-まつり 夏祭【名】夏季に行ふ祭禮。

なつまつり-なにはがみ 夏祭浪花鑑【名】淨瑠璃の一。元祿頃の歌舞伎狂言、宿無團七を本として作りたるもの。泉州堺の魚賣團七九郎兵衛愚人の子磯之丞及びその馴染の遊女琴浦のために、その舅三河屋義平治を殺す場は泥仕合(ドロジ)と稱して、有名なり。並木千柳・三好松洛・竹田小出雲の合作。

なつ-まひたけ 夏舞茸【名】〔植〕ちよれいたけ(猪苓蕈)を云ふ。〔陸中國南部の方言〕

なつ-まめ 夏豆【名】〔植〕■わせまめ(早稻豆)に同じ。 芭蕉「夏豆の二葉や麥の株かへし」 ■そらまめ(蠶豆)を云ふ。〔出雲國・備後國の方言〕

なつみ 夏海【名】〔地〕近江國甲賀(カフ)郡三雲村の大字。和名抄にある夏身郷の遺

稱。〔菜摘〕 輔親集「近江なるなつみの里の家居には秋の紅葉ぞ今に殘れる」

なつ-み 菜摘【名】菜を摘むこと、又その人。 謡曲「二人靜」「時も來にけり、靜の舞、今三吉野の河の名の、菜摘の女と思ふなよ」

なづみ 泥【名】泥むこと。泥みたること。泥みたる者。

なつみ-がは 夏摘川・夏箕川【名】〔地〕大和國吉野(ヨシ)郡中莊村に在る川。源を吉野山に發し、北流して吉野川に合す。 新古今「よしのなるなつみのかはの川淀に鴨ぞ鳴くなる山陰にして」

なつみ-の-しん 菜摘川の神事(ジン)【句】正月七日、大和國吉野川のほとりなる勝手(カツテ)明神に、氏子の男女、この川の邊にて、若菜を摘み、神供に備へて、祭禮をすること。

なつ-みかん 夏蜜柑・橘橘【名】〔植〕橙(ダイ)の變種。實は大きくして、果皮厚く、凸凹あり。夏季熟して食用に供せらる。酸味強く少しく苦味を有す。もと長門國萩の産なりしが、近年各地に栽培せらる。たうみかん。なつだいだい。長州蜜柑。

なづむ 泥む【動四自】■しぶりとどこほる。行きわづらふ。澁滯す。〔古語〕 萬葉「しろたへにほふまつちの山川にわが馬なづむ家戀ふらしも」 聖德太子繪傳記「鳥のなく者も絕えはてて駒のなづまん草もなし」 ■惱み煩ふ。心引立たず。〔古語〕 蜻蛉「若苗のおひたちしを……色づける葉のなづみて立てるを見れば、いと悲しくて」 ■一方にかかはる。拘泥す。 徒然「死を輕くして、すこしもなづまざるかたのいさぎよく覺え」 ■ひとへに心を寄す。思ひ込む。戀慕す。 一代男「緣は知れぬものかな、その備後衆の十が一つかはいがられたいとなづめば」 五人女「この女、過ぎし年の春より、源五兵衛男盛をなづみて、數數の文に氣を惱み」

なつ-むし 夏蟲【名】■螢・蟬・蛾・蚊など、すべて夏季に發生する蟲。 萬「なつむしのひむしのころも二へ著て」 後撰「八重むぐらしげれる宿は夏蟲の聲より外に訪ふ人もなし」 ■〔動〕ほたる(螢)の異稱。 林葉集「たどりゆく板田の橋は朽目多み島數とも

せ夜はの夏蟲」

なつ-むし-の-いろ 夏蟲の色【句】るりいろ(瑠璃色)に同じといふ。一說に「蟬の羽(ハ)」に同じと。 萬「夏は二藍、いと暑き頃、夏蟲色したるも涼しげなり」

なつめ 棗【名】■〔植〕鼠李(ソリ)科(クワ)に屬する落葉喬木。葉は互生にして卵形、夏の半に、白くして青みある花を開く。實は初め淡綠にして、熟すれば赤くなり、卵又は圓形をなす。生にて食ひ、乾して、藥用とす。原産地は亞細亞及び南部歐羅巴。我が國にては、信濃・甲斐に野生す。 著聞「貞信公、なつめを愛してまゐりけり。式部卿親王の家に、おきなつめの木ありけり」 ■抹茶の茶入の一種。形、棗の實を立てたるが如くに、多くは漆器なるもの。

(なつめ(一))

なつ-めぐが 夏蘡荷【名】夏季やや生長したる蘡荷。

なつめ-がた 棗形【名】棗の實の形に似たるもの、即ち楕圓形をなす。

なつめ-く 夏めく【動四自】夏の樣子になる。夏らしくなる。夏じむ。

なつめ-せいび 夏目成美【名】〔人〕江戸の俳人。通稱を井筒屋八右衞門。蕉亭・隨齋等の號あり。淺草藏前の札差を業とす。夏目宗成の門人。成美家集・隨齋諧話・冬の日解等の著あり。文化十三年歿す。年六十八。

なつめ-そうせき 夏目漱石【名】〔人〕文學者。名は金之助、漱石はその號。東京の人。明治二十六年東京帝國大學文科大學を卒業し、同大學講師たり、のち東京朝日新聞記者となり、創作・文學評論に從事す。文學博士を授けられしが辭して受けず。「我が輩は猫である」・「虞美人草」・「文學論」等の名著多し。大正五年歿す。年五十。漱石全集の刊あり。

なつめ-ぞくのすけ 夏目族之助【名】〔人〕劍法家。下總國佐倉の人。始め柳生(ヤギフ)流を學びて、一流を出だす。無滯體心流劍法の祖。

なつめ-の-き 棗木【名】〔植〕なつめ(棗)■に同じ。

なつめみかさろ 夏目甕麿【名】〔人〕國學者。通稱は嘉右衞門、萩園と號す。遠江國の人。本居宣長の高弟にして、最も和歌に長ず。安政六年歿す。年八十七。

なつめ-やし 棗椰子【名】〔植〕棕櫚(シュロ)科に屬する常綠喬木。幹は直立し、高さ四五丈に達す。長さ一丈餘に達し、葉柄に刺あり。花は單性にして、雌雄異株に生ず。果實は、大いさ棗の果實ほどの核果にして、熟すれば橙黃色となる。東印度に產す。戰捷を祝する際に、此の木を用ふるが故に、戰捷木の異稱あり。

なつ-もち 夏持【名】夏季の所持に充つること、又その物。

なつ-もの 夏物【名】■夏季用ふるもの。■なつぎ(夏著)に同じ。

なつ-もも 夏桃【名】〔植〕桃の一種。夏の頃早く熟するもの。五月早桃。

なつ-やすみ 夏休【名】しよちゆうきう(暑中休暇)の俗稱。

なつ-やせ 夏痩【名】夏負(カフ)の結果として痩すること。 萬葉「石竹にわれ物申す夏痩によしといふものぞむなぎ取りめせ」 俳諧古選(初眞)「夏痩も願の中の一つなり」

なつ-やま 夏山【名】夏季の、青青と草木の繁りたる山。 萬葉「なつやまのこのしたかげにほととぎすなきとよむなるこゑのはるけさ」 芭蕉「夏山や杉に夕日の一里鐘」

なつゆき 夏雪【名】〔植〕■かまつか(鎌柄)に同じ。

なつゆき-ぐさ 夏雪草【名】〔植〕■うつぎ(空木)に同じ。〔古語〕 ■次條の略。

なつゆき-さう 夏雪草【名】〔植〕■うつぎ(空木)に同じ。 ■薔薇(バラ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達す。葉は掌狀に分裂し、長き葉柄を具へ、夏季、小形なる白色四瓣の多數の花を開く。山地に自生し、また觀賞用として栽培す。「條に同じ。

なつゆき-しようま 夏雪升麻【名】〔植〕前(杜鵑)の異稱。〔古語〕

なつゆき-どり 夏雪鳥【名】〔動〕ほととぎす

なつ-わらび 夏蕨【名】〔植〕いたちさ

げ(鹿豆)に同じ。

なで 撫【名】男の髪(カミ)の一。

なで 名手【名】【地】紀伊國那賀(カ)郡にある町。大和街道に當る。

なで【名】■はき(帶)を云ふ。〔越後國北部の方言〕 ■『なだれ(類)の訛』なだれゆき(積雪)を云ふ。〔越後國の方言〕

なて【助】『打消の助動詞ぬの變化なるなに、その添ひたるものなるべし』ずして。ずに。〔古語〕 新千載「立ちばなの花の宿訪ふ郭公かれなでいまもむかし戀ふらん」

なで-あぐ 撫上ぐ【動下二他】■下方より上方へと撫づ。(撫下ぐに對して) ■亂れ垂れたる髪を、梳り上げて整ふ。

なで-いたはる 撫勞る【動四他】撫でて勞る。撫でていつくしみあはれむ。

なで-いつくしむ 撫慈しむ【動四他】撫でてかはゆがる。撫づるやうにして慈しむ。

なで-うし 撫牛【名】素燒などにて、臥牛形を造れるもの。多く天滿宮の社より出だす。常にこれを撫づれば、吉事ありといふ。又、吉事ある毎に、蒲團一枚を作りて重ね、その上に牛を安置す。 傾城買談客物語「青山流の活花は、床掛の雪深を覆ひ、東江が額物となりて、撫牛と共に祕藏なり」

なで-おほす 撫生す【動四他】撫でいたはりておほしたつ。撫で愛ひて育てあぐ。 ※鳧「なでおほすかひもなきかな櫻花にほふ春にもあはずと思へば」

なで-がく 撫角【名】匣などの角の、圓く面取(ドリ)りたるもの、又その物。(葉入(イレ)角・隅切角に對して)

なで-がく-せん 撫角錢【名】■『四隅が撫角なるよりいふ』 **せんだいつうほうせん**(仙臺通寶錢)に同じ。

なで-がく-てっせん 撫角鐵錢【名】『なでがくせん(撫角錢)を見よ』 **せんだいつうほうせん**(仙臺通寶錢)に同じ。

なでがた 撫肩【名】徐り聳えずして、恰好よき肩。なだらかなる肩。(怒肩に對して)

なで-ぎり 撫斬・撫切【名】■壓しつけて切ること。 ■『なでぐひ(撫食)を見よ』手あたり次第に、すべてを容易く切ること。

今國姓爺「百姓ども、どいつも動くな。逃げたらば撫切」

なで-ぐし 撫櫛【名】なでつけぐし(撫附櫛)に同じ。 堀河波の鼓「重たき頭撫櫛や、向ふ鏡に餘情あり」

なでくだす 撫下す【動四他】なでさぐ(撫下ぐ)に同じ。

なで-ぐひ 撫食【名】『なでぎり(撫斬)■を見よ』手あたり次第に、その場に有るだけをわけなく食ふこと。

なで-ごち 撫心地【名】撫づる心地。撫でて、手などに感ずる心持。なでごころ。

なで-ごころ 撫心【名】前條に同じ。 俳諧古選附錄「存義」「まへうしろ有るや火桶の撫でごころ」

なで-ころばす 撫轉ばす【動四他】甘言を用ひて、己が意に從はしむ。うまく丸め込む。をがみたふす。 ※略。

なで-ごゑ 撫聲【名】ねこなでごゑ(猫撫聲)の略。

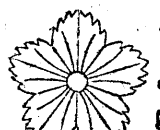
なで-さぐ 撫下ぐ【動下二他】下の方へ撫で行く。なでくだす。(撫上ぐに對して)

なで-さすり 撫摩【名】撫でさすること。

なで-さする 撫摩る【動四他】撫でつ摩(サス)りつつす。

なで-さばき 撫捌【名】髮などを、撫附け、又解きさばくこと。 若風迫「叡山…この山の若衆、髮を柴男(シバヲ)のあらけなき手して、事缺(カ)けに撫流(ナガ)しをさすこと心に叶はずとて、おのおの雲母越(キラコエ)はるかに四里の山道を行きて、三條の橋なる床まで、髮を結ばせに出でける中にも」

なでしこ 撫子・瞿麥【名】■【植】石竹科に屬する多年生の草。秋の七草の一。山野に生じ、高きものは一尺餘に至る。莖に節あり、線狀披針形の葉、對生す。夏・秋の交に、枝頂に二箇づつ花を開く。瓣の端、絲の如く細かに裂け、色多くは淡紅、後、莢を生ず。觀賞用に供す。おもひぐさ。かたみぐさ。かはらなでしこ。こがねのぜに。そでぬれぐさ。なづかしぐさ。のなでしこ。ひぐらしぐさ。やまとなでしこ。**あめりかなでしこ**(亞米利加撫子)・**おらんだなでしこ**(和蘭撫子)・**からなでしこ**(唐撫子)參照。 ■**なでしこがさね**(撫子襲)の略。 ■『なでぐひ(撫食)を見よ』手あたり次第に、すべてを容易く切ること。


(なでしこ)

なでしこ-あはせ 撫子合・瞿麥合【名】撫子■にて行ふ物合(モノアハセ)。 公任集「七月七日藤壺の撫子合に」

なでしこ-いろ 撫子色・瞿麥色【名】撫子の花のごとき染色、即ち紫がかりたる淡紅色。なでしこ。紅梅色。

なでしこ-うたあはせ 撫子歌合【名】撫子を詠みたる歌によりて行ふ歌合。

なでしこ-がさね 撫子襲・瞿麥襲【名】襲(カサネ)の色目の一。表は紅梅、裏は青。一說に、表も裏も紅色なるものと。五六月頃、男女共に用ひしもの。とこなつ。なでしこ。源氏、こなたのは濃き單がさねになでしこがさねの汗衫などおほどかにて」

なでしこ-がひ 撫子貝【名】【動】瓣鰓(ベンサイ)類に屬する軟體動物。殼は一寸内外、卵形扁平にして、不規則なる放射肋あり。概形帆立貝に似、質脆く、鮮紅色・褐色等美しき色彩・斑紋を有す。諸所の近海に產す。 夫木「ちしほしむなでしこ貝もしく色は大和唐(カラ)にもあらじとぞ思ふ」

なでしこ-ぎれ 撫子切【名】名物切(メイブツギレ)の一。萌黃地に、紋金絲にて大いさ約三分、花のみなる撫子模樣を織出したる金襴もの。

なでしこ-の-えだのまる 撫子枝丸【名】紋所の一。撫子の花と葉とを中に包みて、莖を縮(ヂ)ねて圓形にせるもの。

なでしこ-の-まる 撫子丸【名】紋所の一。撫子の花と花梗と葉とにて、圓形に描けるもの。

なでしこ-もやう 撫子模樣【名】撫子の形をあらはしたる模樣。

なでそだつ 撫育つ【動下二他】撫づるやうに愛して育つ。撫育(クヰイ)す。 續入鉢柱廢「親が大事に生みつけて撫育てた體(カラ)を、槍で突かれて死にたいか」 ※「じ」

なでだが 撫臥【名】かたがへり(片臥)に同じ。

なでつく 撫附く【動下二他】■撫でて押しつく。 ■麻の葉に思ふ事をばなでつけて六月祓つる御祓(ミソギ)をぞする」 ■亂れたる髮を、梳りて整ふ。かきつく。 源氏「御髮(ミグシ)の所狹(トコロセ)うひろごりたるをいと苦しとおぼして、額などなでつけておはするに」 若風俗「岩の小細水(コサヾレ)を掬ひ上げて、元のごとくに兒達(チゴダチ)を撫でつけまゐらせけるは」

なでつくろふ 撫繕ふ【動四他】撫でてつくろふ。なではだく。 源氏「御髮(ミグシ)をなでつくろひつつ聞えたまへば」

なでつけ 撫附【名】■なでつくること。 ■なでつけがみ・なでつけあたま(撫附頭)【名】髮を撫附けたる頭。撫附髮の頭。

なでつけ-がみ 撫附髮【名】頭髮を結はずに、頂の後方に撫附けて垂らし置くこと、又その頭髮。未亡人の切髮(キリガミ)、又、德川時代には、儒者・醫者などに多し。

なでつけ-ぐし 撫附櫛【名】髮を撫附くるに用ふる櫛。なでぐし。

なでつけ-びん 撫附鬢【名】撫附けたる鬢。撫附髮の鬢。なでびん。 國姓爺「撫附髮の大たぶさ」

なでつけをとこ 撫附男【名】撫附頭の男。他狩猟本地「それそれそこへ、絹上下の撫附男」

なでつけ-をんな 撫附女【名】撫附頭の婦人。

なでづり 撫釣【名】岩礁の邊に浮遊せる鰤(ブリ)を釣る方法。端に牛角または海松(ミル)にて造りたる擬餌鉤を附けたる短き綸(イト)を長き竹竿の先に垂れ、岩礁などの上に立ちて、海面を撫づるやうに、これを左右に振りて釣ること。九州地方にて、九月頃より翌年四五月頃にかけて行はる。

なでは-だく 撫刷く【動下二他】撫でて掻上ぐ。掻撫でて繕ふ。なでつくろふ。保元「さしよって髪ゆひあげ、汗のこひなどしけるが、年ごろ宮づかへ、朝夕にただなではだけ奉りて、今をかぎりと思ひけん心どもこそ悲しけれ」

なでびん 撫鬢【名】なでつけびん(撫附鬢)に同じ。若風俗「風はあらけなく、落葉は肩を埋みて、撫鬢の油もかわらぎ」

なでふ【句】な(何)の條下を見よ。

なでぶか 撫鰾【名】〔動〕をながさめ(尾長鮫)に同じ。「俗稱。

なでぼとけ 撫佛【名】びんづる(賓頭盧)の上ぐ。

なでまくる 撫捲る【動四他】撫切(ナデギ)に切りまくる。國姓爺「八方無盡に割り立て割り立て、撫でまくる」

なでまはす 撫廻す【動四他】㊀物をまんべんなく撫づ。㊁雑巾掛をなす。

なでん 南殿【名】なんでん(南殿)㊁の略。南殿の櫻【句】「左近の櫻」に同じ。今昔「敦忠の中納言、なでんの櫻を、和歌に詠める語(クダリ)」

なでもの 撫物【名】㊀かたしろ(形代)㊁に同じ。源氏「みそぎ河せぜにいださんなで物を身に添ふ影と誰れか頼まん」㊁こそで(小袖)に同じ。

なでもの-づかひ 撫物使【名】武家の職制の一。祓(ハラヘ)の時、撫物を祓の場所に持行きて捨つることを掌りしもの。あがものやく。なでものやく。

なでもの-やく 撫物役【名】前條に同じ。

なで-やしなふ 撫養ふ【動四他】撫でいたはりて養ふ。撫でいつくしみてかしづき養ふ。源氏「あけたてば猫のかしづきをして、なでやしなひたまふ」

など 【句】『なりと』の略』なりの條下を見よ。

なーど 何ど【副】『「何(ナ)と」の略』何とて。源氏「など、かく、うとましきものにしもおぼすべき」

なぞやらん【句】何の故にかあらん。何としてならん。なぜか。謡曲・頼政「前世(ゼン)の戒行(カイギョウ)いみじくて、今、皇子とは爲りたまへども、極楽(ゴクラク)の内より、などやらん兩眼盲(シ)ひたまひまして、蒼天に月日の光なく」

など 等・抔【接尾】『何(ナ)との略。「犬猫なんか」などの「なんか」が「何か」の音便なるに類せる語。又、抔の字は、もと手にて物をすくふ意なるを、古來この語に充て來れるなれど、その由來は明白ならず』㊁なぜに。なにゆゑに。などて。源氏「など、かく、うとましきものにしもおぼすべき」

なぞやらん【句】何の故にかあらん。何としてならん。なぜか。謡曲・頼政「前世(ゼン)の戒行(カイギョウ)いみじくて、今、皇子とは爲りたまへども、極楽(ゴクラク)の内より、などやらん兩眼盲(シ)ひたまひまして、蒼天に月日の光なく」

なーどころ 名所【名】㊀姓名と住所と。㊁一つの物の内の、各部分の名目。「琴の名どころ」「刀の名どころ」㊂名ある所。名高き土地。めいしょ。勝地。名區。謡曲・藤栗毛「御座れ都の名どころ見せん祇園・清水やれ音羽山」

なでて 何而【副】など(何ど)に同じ。伊勢「などてかくあふごかたみになりにけん水もらさじとむすびしものを」源氏「などて乗添ひて行かざりつらん」

なでてか 何而か【副】なぞか(何どか)に同じ。源氏「などてか、深く隠しきこえたまふことははべらん」

なでてかは 何而かは【副】なぞかはを、やや咏嘆的にいふ語。後拾遺「三千代經て成りける物をなどてかはもも(百・桃)としもはた名づけそめけん」

なでや 何でや【副】なぞか(何どか)に同じ。千載「などやかくさも暮れがたき大空ぞ、我が待つ事はありと知らでや」謡曲・合浦「鱗(ウロコ)も、などや、命恩の、その情(サケ)をば知らざらん」

なでやか【貌】のどやか(長閑)に同じ。

なーとり 名取【名】『「名を取る」を見よ』㊁遊藝人などの、その技に熟せるため、師匠より藝名を許さるること、又その名を許されたる人。㊂名だかきこと、又その人。長門本平家「源氏の名取に返しあはせたまへといひければ」曾我五人兄弟「曾我は山家の山樵なれど、今は名取ぢや、やっこりやこりや」

なとり 名取【名】〔地〕陸前國十四郡の一。郡役所を茂ケ崎(モガサキ)村に置く。

なーとり 和鳥【名】次條を見よ。

なとり 【貌】『なんとりを見よ』なでやか(和)に同じ。一説に、和鳥(ナトリ)の略にて、和ぎたる海の上に居る鳥なりと。古語拾遺「いまこそはちどりにあらめのちはなどりにあらんを」

なとりうむ 那篤儒謨(獨 Natrium)【名】【化】金屬元素の一。水より輕く、柔軟にして、銀白色を呈し、種種の物質と化合しやすく、殊に水に遇へば劇しく反應するにより、通常、石油中に貯ふ。天然には遊離して存在することなく、鹽化物、即ち食鹽として、海水の他に多量に存し、また硅酸鹽等となりて、諸鑛物の成分をなす。その化合物中、重要なるものは、苛性曹達・炭酸曹達等なり。そちうむ。なとろん。

なとりうむ-あまるがむ 那篤儒謨汞和金(獨 Natriumamalgam)【名】【化】ナトリウムのアマルガム。銀色を呈し、ナトリウムを含むこと少なきものは、半流動體を成し、百分の二以上を含めるものは、固體を成す。化學の操作に強力なる還元劑として用ひ、また黄金の冶金に汞化の助劑として用ふ。そちうむあまるがむ。こうくわあまるがむ。

なとりうむ-めちらあと 那篤儒謨木精(獨 Natriummethylat)【名】【化】メチルアルコオルにナトリウムを溶解せしめて得る、白色の結晶。空氣に觸るれば二酸化炭素を吸收して分解す。

なとり-おうな 名取嫗【名】謡曲の一。三熊野の僧、靈夢により、陸奥國名取の里に至り、年來熊野の信者たる老嫗を尋ね、夢相の歌を與へしに、嫗感泣の餘り、其の地に三熊野を勸請せる山僧を伴ひしに、護法善神出現せし由を作れるもの。實生流にのみあり。

なとり-がは 名取川【名】〔地〕陸前國にある川。羽前國との境界にある二口(フタクチ)嶺より發し、東流して名取郡に入り、閖上(ユリアゲ)の濱に至りて、太平洋に注ぐ。鮎を名産とし、上流よりは埋木を出す。長さ約十二里。古來和歌の名所たり。古今「名取川瀬瀬のうもれ木あらはればいかにせんとか逢見そめけん」同「みちのくにありといふなる名取川うき名取りては苦しかりけり」太平記「名とり川を過ぎさせたまひて、上人一首の歌を詠みたまふ。みちのくのうき名とり川流れ來て沈みや果てん瀬瀬のうもれ木」

なとり-ぐさ 名取草【名】〔植〕ぼたん(牡丹)の異稱。〔古語〕藏玉珍「おる人の心なしとや名取草花見るときはとがも少なし」

なとりれ-そ な取入れそ【句】とりいる(取

入る)の條下を見よ。

なさり-をんせん 名取溫泉【名】〔地〕あきふをんせん(秋保溫泉)に同じ。

なざる【動四他】なざるに同じ。

なざろん 那篤倫(獨 Natron)【名】〔化〕なとりうむ(那篤個謨)に同じ。

なざろん-ろえき 那篤倫鹵液【名】〔化〕水酸化ナトリウムの水溶液。〔方言〕

なな【名】あね(姉)を云ふ。〔上總國安房國の〕

なな 七【數】しち(七)に同じ。

七の朝(アシタ)【句】正月七日、即ち七種(ナナクサ)の節句の朝。〔古語〕夫木「君がため七の朝の七草になほ摘みそへんよろづ代の春」

七の老(オイ)らく【句】次條に同じ。〔古語〕 淸輔朝臣會和歌、今更に驚けし車を引連れて七のおいらく心をぞ遣る」

七の翁(オナ)【句】尙齒會に集れる七人の老人。ななのおいらく。七坐(マス)す人。しゃうしくわい(尙齒會)參照。 後世集、尙齒會とて、年老いたる、時の詩作(シヅク)の七人(ナナリ)集りて、文の作ること行ひたまひき。九十ばかりまでおはしき。七の翁にも入りたまへりけるとぞ聞えはべりし」

七の御神(オホン)【句】次條の尊稱。〔古語〕新撰古今「さざ波や願をみつの濱にしも跡を垂れます七のおほん神」

七の賢き人【句】しちけんじん(七賢人)〔二〕に同じ。萬葉、古の七の賢き人等(ヒトドモ)も欲(ホ)する物は酒にし有るらし」

七の神【句】「七坐(マ)す神」に同じ。〔古語〕

七の神垣【句】七の社の神垣。山王七社の祠。〔古語〕新拾遺「おのづから仕へぬひまも心こそなほ怠らぬ七の神垣」

七の宗(シュ)【句】しちしゅう(七宗)に同じ。〔古語〕千載「說きおく法(ノリ)はさまざまになな の宗まで分るれど心一つをたねとしてまことの道にぞたづね入る」

七の寶【句】『七寶(シチホウ)の訓讀』しちちん(七珍)に同じ。〔古語〕 榮華「御かたがたはゆたかに勢ひて、七の寶をやらん方なくこそおはしますめれ」

七の御社(オホヤシロ)【句】「七の社」の尊稱。 拾遺「やはらぐる光さやかにてらしみよ賴む日吉の七のみやしろ」

七の社(ヤシロ)【句】しちしや(七社)に同じ。 新古今「我が賴む七の社のゆふだすきかけても六つの道にかへすな」 新撰古今「やそぢまで七の社に仕へのきて新るも君がみかげなりけり」

七坐(マ)す【句】「七坐す星」の略。 源順草「北星、七の星、七星也、ななます、同上」

七坐(マ)す神【句】七の社に坐(マ)す神。 續後拾遺「あはれとはなほます神も照しみよ九品(クホン)にもかくる心を」 夫木「萬代の春にもあかじ八重櫻七ます神の玉の瑞垣(ミヅガキ)」

七坐(マ)す星【句】しちせい(七星)に同じ。〔古語〕 夫木「我が戀はななます星に祈るのみ人の思を空に知るなり」

なな【助動】なくに同じ。〔關東の古の方言〕 萬葉「惱ましけん妻がもよ濳ぐ舟の忘れはせなないやもひますに」「上」を見よ。

なな-あがり 七上【名】「世は七下(ナナサガリ)七上(ナナアガリ)」を見よ。

なな-あし 七足【名】次條を見よ。

七足去る【句】次條に同じ。〔諺語〕

七足隔つ 師弟の禮【句】「七尺去って師の影を踏まず」に同じ。〔諺語〕

なな-あゆみ 七歩【名】「七歩(シチホ)の才」を見よ。 拾玉「からくにに七あゆみせしたぐひとや三時に足らで散らすことのは」

なな-いろ 七色【名】一ななくさ(七種)に同じ。二七種類の色彩。七彩。七色。三ないろぐわし(七色菓子)の略。四なないろたうがらし(七色唐辛)の略。

なないろ-うり 七色賣【名】七色菓子を賣り歩きたる者。次條參照。 洛陽集「庚申夜。一說に七色うりや呼子鳥」

(賣色七)

なないろ-ぐわし 七色菓子【名】昔、庚申の日の供物に用ひし、千菓子。砂糖豆・煎餅など、七種の菓子。價は七種にて一文、その當日に賣歩きし者ありて、これを七色賣(ナナイロウリ)と云ひしが、後には、店にて賣ることのみなり、又、甲子の大黑天その他神佛に普く供ふるに至れり。 風流夢の浮橋 降りみ、降らずみ、定なき神無月七日、庚申の日、七色菓子の賣聲もかしましく」 浮世風呂「お佛壇へお盛物を並べ立つて、…お供(ソナ)や七色菓子を上げるよりか、生きてゐる內に、初松魚(ハツガツヲ)で一杯飮ませる方が、遙かに功德だ」

なないろ-たうがらし 七色唐辛【名】焦したる唐辛を粉にし、これに、胡麻・陳皮・山椒・罌粟(ケシ)の實・菜種(ナタネ)・麻の實を交へたるもの。七味唐辛。

なないろ-ちやづけ 七色茶漬【名】辣薤(ラッキョウ)・草石蠶(ナガラコ)・梅漬の生薑など、七種ほどの物を添へて出す茶漬飯、又それを主とする小料理屋。江戸時代の末、手輕なる料理として流行せり。 古今百馬鹿「それから腹ごなしに湯へ行つて、出ると、善公が居て、おらあまだ夜食前だから七色茶漬へ往かうといふ」

なないろ-づけ 七色漬【名】梅醬(ウメビシオ)・櫻の花・更紗(サラサ)梅・芥子びしほ・紫草(ムラサキ)の實・薤(ラッキョウ)・ほととぎす卷・紫草びしほの中七種を取合はせたる漬物。相模國小田原の名產とす。

なないろ-なます 七色膾【名】大根と胡蘿蔔(ニンジン)をせんに打ち、これに椎蕈・相良獅子(サガラヂシ)・蓮根・油揚・柚子(ユズ)などを程よく刻みたるを混ぜて作りたる膾。

ななーうら 七浦【名】一多くの浦。 俗謠「安藝の宮島まねば七里、浦は七浦七夷(ナナエビス)」 二〔地〕安房國安房郡七浦村大字白間津(シラマヅ)より北、曉(アサ)町を經て、千歳(チトセ)村大字白子に至る一帶の沿海。有名なる漁場にして、秋刀魚(サンマ)の漁獲最も盛んなり。

ななーかざり 七飾【名】書院床に、硯屏(ケンピヤウ)・硯・水入・軸物・印籠・卦算(ケイサン)・水瓶の七種を排置して飾ること。

ななーかまど 七竈【名】〔植〕一樺(カバ)科に屬する落葉喬木。高さ二三丈に達す。葉は互生し、奇數羽狀複葉を成す。五六月頃、聚繖花序を成して、白色の五瓣花を著け、南天燭(ナンテン)の實に似たる實を結ぶ。各地の山野に自生し、材質堅緻にして、轆轤・槌などの製造に適す。おやまざんせう。二からたちばな(唐橘)に同じ。

(一どまかなな)

ななきめ 名鳴女【名】「己が名を呼びて鳴く意なりといふ。又、「名は鳴女と訓むべきかともいへり」天孫降臨の時、先驅者として天上よりこの國土に來りし天稚彦(アマワカヒコ)、大國主の女下照(シタテル)姫を娶り、復命を怠ること八年に及びし時、詰問の命を帶びて、天上より遣され、つひに殺されし雉子。記、諸(モロ)の神たち及び思金(オモヒカネ)神答白(マヲ)さく、雉(キヂシ)名鳴女を遣してむと白す時に、…かれ、ここに、鳴女(ナキメ)、天(アメ)より降り到(ツ)きて、天若日子が門(カド)なる湯津楓(ユツカツラ)の上に居て、委曲(マヂマヂ)に天つ神の詔命(ノリゴト)のごと言(イ)りき」

なな-くさ 七種【名】一七つの種類。ななしろ。いろいろ。 記「七物、ナナクサアリ」 二「秋の七種」を見よ。〔七草〕 曉野(後拾)「七草を叩きたがりて泣く子かな」 俳諧新選(蘆水)「七草の惣代として齋かな」 萬葉「拔松拔レ竹御門前、叩レ菜叩レ齋俎板邊、唐土島衆二日本鳥一東天來レ渡素レ天天」 四「七種の節句」の略。

七種の菜(ナ)【句】次條に同じ。 四季物語「そのそくひは、七くさのあつもの殘れる、またけふの御粥を一つにすりまぜて御札おさるるなり」〔じ。

七種の祝(イハヒ)【句】「七種の節句」に同じ。

七種の御物(オモノ)【句】次條に同じ。 夫木「今日ぞかし齋(ナナ)はこべら芹摘みてはやななくさのおもの參らん」

七種の粥【句】一古、七種の物を入れて炊ぎし固粥(カタガユ)。多くは、正月十七日にい

ひ、七種の名目は、延喜式には、米・粟・黍・子・稗子(ヒエ)・薏子(ハトムギ)・胡麻子・小豆を擧げ、年中行事祕抄并に拾芥抄には、小豆・大角豆(ササゲ)・黍・粟・薥子・蓼蕎・米、また白穀・大豆・小豆・粟・栗・柿・薥子とあり。後には、正月十五日赤小豆粥(アヅキガユ)を用ひ、近世は正月七日七草を入れたる汁粥をいひ、十五日の小豆粥を十五日粥と稱す。**ななくさがゆ**(七種粥)參照。

七種の節(セチ)【句】次條に同じ。

七種の節句【句】五節句の一。陰曆正月七日、七種を以て祝ふ。七種のいはひ。若菜の節。人日。

七種の寶【句】『七寶(シチホウ)の譌語』**しちちん**(七珍)に同じ。萬葉「世の人の貴み慈(メ)ふ七種の寶も我は何爲(セ)むに我が中の產れ出でたる白玉の吾が子古日(イトヒ)はし」

七種の菜【句】「春の七種」に同じ。

七種の菜の羹(アツモノ)【句】「七種の粥」に同じ。公事根源「正月七日に七種の菜の羹を食すれば、その人、萬病なし」

七種の花【句】「秋の七種」に同じ。

七種の囃子(ハヤシ)【名】昔時、七種の祝に、前日の夜七つ時と當日の朝六つ時とに、小桶の上に置きたる俎板の上に、七種粥に入るべき七種の菜を載せ、吉方(エホウ)に向ひて、「七種(ナヅサ)齊(ナヅサ)唐土(トウド)の鳥の日本の土地へ渡らぬ先に」或は「唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に、七種齊手に摘入れて」など唱へつつ庖丁などにて打囃ししこと。後世、關東にては、青菜と齊とに火著(ヒヅキ)擂粉子(スリコギ)庖丁・杓子・割薪の五種を合はせて七種とし、俎板の上にて打囃したり。

七種の味噌水(ミソミヅ)【句】**ななくさがゆ**(七種粥)に同じ。

七種の若菜【句】「春の七種」に同じ。

七種を囃(ハヤ)す【句】七種の囃子(ハヤシ)を爲す。

秋の七種【句】秋花咲く草の中より、古來選ばれて賞翫せらるる萩・尾花・葛・女郎花(ヲミナヘシ)・藤袴・撫子・桔梗の七種の草。もと萬葉集卷八に「秋の野に咲きたる花を指(ヤウ)折りかき數ふれば七種の花」「芽(ハギ)の花・乎花(ヲバナ)・葛花・瞿麥(カルカヤ)の花・姫部志(ヲミナヘシ)また藤袴・朝貌(アサガホ)の花」とあるに本づけるものにて、その朝貌は、今の朝顏には非ずして、晝顏なりとも槿(ムクゲ)なりともいふ。又、國史草木昆蟲攷千草の根ざし等の說に據りて、桔梗をこれに充つる者ありてより、後世の習となれり。七夕(タナバタ)の七くさ。[秋の七草]

春の七種【句】春生ずる菜の中、芹(セリ)・薺(ナヅナ)・五行(ゴギヤウ)・田平子(タビラコ)・佛座(ホトケノザ)・鈴菜(スヾナ)・清白(スヾシロ)の七種。但し、この七種の名目は、增補題林集に見えたるものにて、拾芥抄には、米・小豆・大角豆(ササゲ)・黍・粟・薥・蕎(ソバ)・豆子の七種をいひ、公事根源には田平子・鈴菜の名見えずして、繁蔞(ハコベ)・蕎(ソバ)を數へ、又塵添埃嚢抄には「七草事、…或歌には、せり・なづな・五行・はこべら・佛のざ・あしな・耳なしこれや七種とあり、古今、その種類一定せざりしなり。古、正月七日、これを羹として食せり。もと、同日七種の若菜を羹に調じて食すれば、萬病を除く効ありといへる支那の習俗に本づきて、上記の七種の菜を定むるに至りしなり。「七種の粥」・「七種を囃す」參照。

ななくさうち 七種打【名】春の七種を、俎板の上にて打ちたたくこと。七種をはやすこと。其角「早蕨の七種打は寒からん」

ななくさがゆ 七種粥【名】「七種の粥」に同じ。

ななくさざらし 七草草子【名】御伽草子の一。正月七日七草の粥を食する由來を記せるもの。

ななくさづめ 七種爪【名】七種粥に入れたる殘餘の齊(ナヅナ)を茶碗の中の水に漬け、爪をこれに浸して切ること。昔時、江戸に行はれたり。守貞漫稿「蓋し齊を僅かに加へ煮て、餘る齊を茶碗に納れ、水に浸して、男女これに指を浸し、爪を切るを七草爪といふ。今日專ら爪の切初をなすなり。京阪には此の行をきかず」

ななくせ 七癖【名】「無くて七癖、有って四十八癖」を見よ。

ななくり 七栗湯・七久里湯【名】〔地〕次條に同じ。堀太「いかなればななくりの湯のわくごとく出づるいづみの涼しかるらん」

ななくりをんせん 七栗溫泉【名】〔地〕伊勢國一志(イチシ)郡榊原村大字湯之山に在る溫泉。泉質は單純泉に屬す。

ななくるま 七車【名】〔書〕上島鬼貫(オニツラ)自選の句文集。五卷。

ななこ 魚子・鮞子・斜子・七子【名】『魚(ウヲ)の子の轉にて、魚卵の如くなるよりいふとぞ』■金屬に、先端圈狀にして中凹みたる鏨(タガネ)を並べて打込み、粒粒凸起して、粟粒の並列せるが如くに刻みしもの。これを刻むを蒔くといふ。■地合厚く、光澤に富み、織目方形・緻密にして、鑢目の如く、粒だちて見ゆるやうにしたる絹布。多くは黑く染めて、紋附羽織などとす。武藏國飯能(ハンノウ)地方はその本場として著れ、桐生・京都等にも產す。ななこおり。

魚子を蒔く【句】前條(一)を見よ。

ななこおり 魚子織・鮞子織・斜子織・七子織【名】魚子(一)の織方、又その織物。

ななこがた 魚子形【名】ななこの形。

ななこごう 魚子江【名】ななこし(魚子師)に同じ。

ななこさや 魚子紗綾【名】魚子に織りたる紗綾。

ななこし 魚子師【名】魚子(一)を蒔くことを業とする工人。魚子工。

ななこじき 七乞食【名】人一生の間には、屢ば乞食のごとき境遇に陷る場合のあること。七轉(ころび)八起(おき)。

ななこしだけ 七越嶽【名】〔地〕和泉・河內・紀伊の三國に跨れる山。其の山路を七越峠又は父鬼(ヂヂオニ)峠と稱す。高さ三一三一尺。山麓「たちのぼる月のあたりに雲消えて光かきぬるななこしの峯」「子」に同じ。

ななこしばこ 七子箱【名】ななついれこ(七入子)に彫ること。又魚子に彫りたる物。

ななこぼり 魚子彫・魚子彫【名】魚子(一)

ななこまち 七小町【名】古來、小野小町の一生中の事蹟なりとて語り傳へたる、七つの俗說。卽ち草子洗(サウジアラヒ)小町・通(カヨヒ)小町・鸚鵡小町・卒都婆(ソトバ)小町・關寺小町・清水小町・山本小町。芭蕉「名月や湖水に浮ぶ七小町」

ななこめ 魚子目【名】魚子形の目。魚子の如き形容。〔諺語〕■屢ば困難に遭ひながら、なほ屈せず、世と鬪ふ形容。七顚八起。人間萬事塞翁(サイオウ)が馬。世は七下(ナナサガリ)七上(ナナアガリ)。〔諺語〕

ななさがり 七下【名】「世は七下七上」「の村里。

ななさと 七里【名】附近なるここかしこ七里枯る【句】さと(里)の條下を見よ。七里に憎まる【句】「七つ、七里に憎まる」を見よ。

ななさら 七皿【名】次條を見よ。七皿食(タ)うて鮫(サメ)臭い【句】多く食しながら不味を誇る形容。〔諺語〕

ななし 名無【名】名のなきこと、又その者。無名(ムメイ)。

ななしざし 名無指【名】【句】次條に同じ。〔古語〕和名「無名指。奈奈之乃於與比、野山案、第四指也」

ななしのゆび 名無の指(ユビ)【句】(名無指)に同じ。伊呂波字類「無名指、ナナシノユビ」

ななしのごんべえ 名無の權兵衛(ゴンベエ)【名】名の分らぬ人に對して、名の無き者といふ意を、その人の姓名なるがごとくに云ひなす語。名無の三太郎(サンタラウ)【句】前條に同じ。

ななしきぎし 名無雉【句】**ななき**(名鳴女)を見よ。起是時高皇產靈尊慨其久不來報、乃遣無名雉伺之」

ななしぐさ 無名草【名】その名の不明なる草。名も無き取るに足らぬ人。吉野忠信「步み苦しき枯れ野邊はあれど甲斐なき名なし草」

ななしどり 名無鳥【名】その名の不明なる鳥。名も無き取るに足らぬ人。川中島合戰「世の人の問ふとも我れは名無鳥」

ななしびと 無名人【名】その名の、世に知

られぬ人。

ななしまーさう 七島草【名】〔植〕しちたうそう（七島藺）に同じ。「に同じ。

ななしゆび 無名指【名】くすりゆび（藥指）

ななせ 七瀬【名】■多くの瀬。萬葉「まつら川七瀬のよどはよどむともわれはよどまず君をし待たむ」■七瀬の祓を行ふ七箇所の瀬。源氏「難波の御はらへなど、ことにななせによそほしうつかうまつる」

七瀬の祓【句】古、朝廷にて、毎月又は臨時に、七箇所の瀬にて行はれたる祓。難波農太(ダ)・河俣・大島・楠小島・佐久那谷・辛崎(カラサキ)にて行ふを大七瀬又は單に七瀬といひ、河合・耳敏(ミヽトシ)川・松崎・石影・東瀧・西瀧・大井川にて行ふを靈所七瀬、河合・糺川・一條・土御門・近衞・中御門・大炊御門(オホイミカド)・二條末にて行ふを賀茂川七瀬といふ。鎌倉幕府にても、貞應六年以來、由比濱・金洗(カナアラヒ)澤池・固瀬(カタセ)川・六連(ムツラ)・柚(カユ)河・杜戸(トベ)・江島を點定してこれを行ひたり。公事根源「七瀬御祓。これは、毎月の事なり。七瀬とは河合・一條・土御門・近衞・中御門・大炊御門・二條の末、これを七瀬とは申すなり。陰陽師、人形を獻る。主上御息(オキ)をかけ、御身を撫でて返したまへば、殿上の侍臣、この所所の河原に向ふ」

七瀬の御禊(ギヨ)【句】前條に同じ。新六「月ごとの七瀬のみそぎたえせねばまことに清き河原とや見ん」

ななそ 七十【數】十を七つ合はせたるもの。ななそぢ。七十(シヂフ)。「古語」名義抄「七十度、ナナソタビ」

ななそが 七曾我【名】曾我兄弟の事を作れる七種の謠曲、即ち調伏曾我・元服曾我・小袖曾我・夜討曾我・禪師曾我・切腹(カヒリ)曾我・伏木(フシ)曾我。

ななそぢ 七十【數】『ぢは助數詞』■ななそ（七十）に同じ。■年齢の七十。七十歳。「古語」土佐「かしらも皆白(シラ)けぬ。ななそぢやそぢは海にあるものなりけり」新古今「ななそぢにみつの濱松老いぬれど千代の殘はなほぞ遙けき」

七十の巻物(モノ)【句】〔書〕『七十五巻あるを、おほよそに云へり』はくしもんじよ（白氏文集）に同じ。續世說「白樂天と申したる人は、ななそぢの巻物を作りて、詞をいろへ、讐を取りて、人の心を進めたまふ」

ななぞなへ 七備【名】先手の備を三つに分ち、これに左右の備と旗本と後備(ガヘナヘ)とを並べたる陣立。

ななたき 七瀑【名】〔地〕肥後國上益城(カミヤツキ)郡北上野村にある瀑。水流岩石に激し、七層をなして落下するより此の名あり。高さ十丈八尺、幅八間。

ななたびまうで 七度詣【名】一日に七度參詣すること。ななたびまゐり。（稻荷詣にいふ。拾遺集に「瀧の水かへりてすまば稻荷山七日のぼりしるしと思はん」といふ歌もありて、稻荷へは七度詣づるをよしとする習ありしなるべしといふ）なぬかまうで（七日詣）參照。其「稻荷に思ひおこして參りたるに、…三十(ミソ)あまりばかりなる女の、…まろは七度まうでしはべるぞ、三度は詣でぬ、四度はことにもあらず、未(ヒツジ)には下向しぬべしと、道にあひたる人にうちいひて」

ななたびまゐり 七度參【名】前條に同じ。

ななつ 七【數】■六つに一つを加へたるかず。しち。■年齢の、六つに一つ加はれるもの。七歳。

七つ五つの神の代【句】天神七代と地神五代との併稱。謠曲（淡路）「國常立(トコタチ)の初めより、七つ五つの神の代の御末は今に君の代より」

七つ、七里(サトナ)に憎まる【句】七歳ごろの小供は、いたづらざかりにて、到る處に憎まる。「諺語」

七つの池【句】七夕(バタ)に、星を祭る際、水を入れて、鏡を浸して、星の影をうつす七箇の盥。

七つの祝(イハヒ)【句】女子が七歳に達したるをいはふ祝儀。「七五三(シチゴサン)の祝」參照。

七つの寶【句】『七寶(シツポウ)の訓讀』しちほん（七珍）に同じ。幸若「よろづの物は、七つの寶にしかへして」

七つの光【句】しちえう（七曜）(一)に同じ。倭訓栞「世治文事興の題にて、近衞太閤。たてまつるたえし曆の月日星の七つの光あらはるる世…。貞享年中に七曜曆を奏覽せしめたるによりてなり」

七つの文(フミ)【句】しちしよ（七書）に同じ。國姓爺後日合戰「繰りひろげたる巻巻の軍書は、孫子・吳子・三略・六韜の七つの文の道よりも、まだふみも見ぬ日の本の太平記は讀み易く」

七つの星【句】しちせい（七星）に同じ。新後選「あひにあひて日吉の空ぞさやかなる七つの星の照す光に」倭訓栞「徹書記の歌に、夜や寒き七つの星のすむかたもむかへる里も衣打つなり」

七つの道【句】〔地〕しちだう（七道）に同じ。新拾遺「あひにあひて守る日吉の數數に七つの道の國榮ゆらし」同「四方の海七つの道も我が君の御代ぞ治るはじめなりける」

七つの都路(ミヤコヂ)【句】〔地〕『諸方面より京都に達する七つの道の義』前條に同じ。謠曲（逆矛）「唯今龍田に參詣仕り候ふ。國國の末は七つの都路を夜深く出でて、淀舟や立つ旅衣はるばると」

七つ・八つは憎まれざかり【句】小供の七八歳の頃は、憎まれ口をきく最中なり。「諺語」

ななつーいれこ 七入子・七入籠【名】七箇の木匣を入子に組合はせたるもの。和泉國堺にて製出する春慶塗のもの、最も名あり。ななこばこ。

ななつーいろは 七伊呂波・七以呂波【名】片假名・平假名・萬葉假名など、七種類の字體の伊呂波を書集めたるもの。七聲いろは。堀川狂歌集「野は七野七ついろはの中にある杖突きていざ遊びに行かん」

ななつーおき 七起【名】『朝の七つ時（午前四時）に起くる意』朝、暗き内に、起出づること。はやおき。

ななつーがさね 七襲【名】襲(カサネ)の、上に白、その下に紅・青及び薄色の各の濃きと淡きとを重ねたるもの。

ななつーがね 七金【名】儀仗の太刀の足革に著くる七箇（一の足に三箇、二の足に四箇）の金物。古、兵仗(ヒヤウヂヤウ)にも用ひたり。

ななつかはぎ 七掛脛【名】長さ七束(ツカ)ある脛。「古語」

ななつーかまくら 七釜敷【名】紋所の一。釜敷の一箇の輪の周邊に、半輪形を七箇連續して纏ひつけたるもの。

ななつーききやう 七桔梗【名】〔植〕はしりどころ(莫荇)に同じ。

ななつきご 七月子【名】赤子の、十箇月に滿たず、七月にして生れしもの。

七月子は投げても育つ【句】『七(ナ)と投げと頭韻をなす』七月子の育ち易きをいふ俗說。

ななつーげ 七毛【名】■小供の時より生えたる、柔き毛。■手足の指に生えたる毛。其角「捕虎(東坡)、七毛の蚊に苦しむや足疾鬼」

ななつーげんじぐるま 七源氏車【名】紋所の一。源氏車の中央の輻(ヤ)の數七箇なるもの。

ななつーご 七子【名】■次條及びその次條を見よ。■いしなご（石子）を云ふ。「避前國の方言」

七子の鏡【句】上代にありし一種の鏡。中央に大なるもの一箇、その周圍に小さきもの七箇ありて、七曜の紋の如き形したるものといふ。「古語」

七子の鞘【句】七鞘(サヤ)の太刀と七子の鏡との混同したるものとも、七鞘の刀の各の鞘なりとも、七鞘の太刀に同じともいふ。「古語」六帖「七つごの鞘のロぐちつどひつつわれを刀にさして行くなり」

ななつーさがり 七下【名】■『さがる（下る）』を見よ』夕暮の七つ時を過ぎたる頃、即ち今の午後四時すぎ。浦島年代記「刻限は知らねども、わが腹は七つ下り」續膝栗毛「もう七つさがりだ。草津でいふには、大月(オホツキ)泊だらうといったが」■『暮の義より、轉じていふ』衰へかかり、古びなどせること、又その物。衣服の染色の褪めたるなど

にいふこと多し。「七つさがりの黒羽二重の羽織」㊁鶉の鳴聲の形容。七下の雨ご四十過ぎての道樂は、止まぬ【句】夕方より降りはじめたる雨と中年より始めたる放蕩とは、止みがたきものなり。「諺語」

ななつ-さや 七鞘【名】次條を見よ。

ななつ-しま 七鞘の太刀(タチ)【句】上代にありし一種の刀。多くの鞘をなしたるものとも、一つの鞘に、七本の刀をさし置くやうにしたるものともいふ。起「七枝(ナナツノ)刀」

ななつ-しま 七島【名】【地】能登國輪島(ワジマ)町の北方十二海里の海上にある小群島。全島樹木なく、鮑(アワビ)・海苔等を産す。

ななつ-すぎ 七過【名】七つ時を過ぎたる頃。ななつさがり。

ななつ-だうぐ 七道具【名】㊀常に揃へて携帯し、又は使用する七種の道具。㊁具足・刀・太刀・矢・弓・母衣・兜の稱。又、鎌・鋸・槌・斧等の小道具。武藏坊辨慶・朝比奈三郎など、勇者はこれを負ひて、戰場に赴けりといふ。ななつもの。㊂大名行列に用ふる槍・長刀・臺笠・立傘・大鳥毛などの稱。堀川波の鼓「七つ何事七つ道具の臺笠・立傘・馬印、これぞと名にし大鳥毛」㊃剪刀(ハサミ)・針・毛抜・耳掻・絲卷・尉など、婦人の懐中持にする小道具。㊄立花(リッカ)にて、しん・小しん・うけ・ながし・ひかへ・そへ・まへ・おきの總稱。聖徳太子繪傳記「床には守屋が劍の立花、くろがねのうすばたに、七つ道具は拔身の刃」㊅『七と質と音の通ずるによりていふ』しちぐさ(質種)に同じ。

ななつ-だち 七立【名】七つ時に出立すること。丹波與作「旅の汚れのあかつきは七つ立か八つ立か」

ななつ-どき 七時【名】昔の時刻の一。今の午前及午後の四時頃。申(サル)の刻。ななつ。

ななつ-とぢ 七綴【名】書物の上下の角を、二重にして綴づること、又その綴ぢかたの書物。

ななつ-どもゑ 七巴【名】紋所の一。中央に一箇、その周圍にやや小さきもの六箇を並べて、七曜の星のごとくにしたるもの。

ななつ-ば 七葉【名】(植)はんごんさう(反魂草)に同じ。

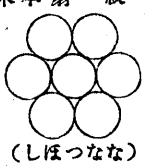
ななつ-ばうず 七坊主【名】昔、小供の、男女に拘らず、丈夫に育つやうにとて、鬼子母神などに祈りて、七歳まで、髪の毛を剃りたるもの。

ななつ-ばち 七鉢【名】七箇を組合はせたる入子鉢(イレコ)。七箇の入子(イレコ)にしたる鉢。五人女「畳も棚から入れ子鉢の落つる事もあるよ、いたづらなる七つ鉢め」

ななつ-ぶとん 七蒲團【名】昔、道中馬などに、七枚重ねたる蒲團を用ふること。ふたつぶとん(二蒲團)參照。一代男「大阪の黒舟といふ乘りかけ馬、…七つ蒲團を、白縮緬にしめかけ」丹波與作「さても、見事な、それれは、おつづら馬や、七つ蒲團に、そんれは、曲絲据ゑて」

ななつ-ぼし 七星【名】紋所の一。下の圖を見よ。

ななつ-ぼね 七骨【名】扇の骨あるもの。堀込「末廣く七つぼねにてはる扇やつれにけりなもとの姿に」



(しほつなな)

ななつ-め 七目【名】㊀或物事より順次に數へて、七つに當ること。第七。七番目。㊁我が生年の支より七つ目の支。例へば、子年生なれば午に當る、依つて馬を畫いて常に見れば、福來るといふ俗説。㊂一の膳、即ち本膳より一組づつ七組の膳。七の膳。

ななつ-めん 七面【名】歌舞伎十八番の一。元文五年二代目團十郎、娑覩(スガ)隅田川の狂言に、面打元興寺(ガウジ)赤右衛門の役を勤めたる時、面箱を竝べ置きて、尉(ジョウ)・姥(オウ)・靈吹・般若(ハンニャ)などの假面の眞似をしたりしに、その化粧の速かなるにて、大當りなりしより、家の藝となれりといふ。

ななつ-もの 七物【名】ななつだうぐ(七道具)㊁に同じ。太平記「この三人の者ども、闇にだになれば、或は帽子甲に鎌(カマ)を著て、足輕に出立時もあり、或は大鎧に七物持つ時もあり。樣樣の質(テダテ)を替へて、敵の向城に忍入る」

ななつ-もん 七紋【名】羽織などの、背中に一つ、兩袖の前と後とに一つづつ、胸の兩旁に一つづつ、都合七つの家紋を附けたるもの。ななところもん。

ななつ-や 七屋【名】『質と七と、音相通ふよりいふ』しちや(質屋)の隱語。略語用序「錦繡羅綺を、七つ屋へ曲げる時」

ななつやあるき 七屋歩【名】質屋へ歩き通ふこと。ななつやがよひ。

ななつやがよひ 七屋通【名】前條に同じ。

ななつ-わん 七椀【名】七箇を入子(イレコ)に組合はせたる椀、即ち親椀・汁椀・中椀(ナカバン)と三箇の蓋と、高鉢の臺に置き、臨時の入用に宛つる蓋一つとよりなる。女人は、本椀より中椀へ盛分けて食す。

ななつわり-げんじぐるま 七割源氏車【名】紋所の一。源氏車の外枠を七つに區分せるもの。

ななつわり-ふたつひき 七割二引【名】紋所の一。圓の徑を七つに割りたる平行線の中、第三・第四及び第五・第六及び圓周を白く染抜きて、丸に二を表せるもの。

ななつを 七緒【名】㊀七つの緒。萬葉「色けせる菅笠小笠吾がうげる珠の七條(ナナツヲ)取りかへも申さむものを」㊁輿・牛車(ウシ)などの簾の、左右の緣とこれに平行せる緒との數七條なるもの。簾の色の赤色なるものは、この制に依る定にて、唐車・絲毛車・檳榔庇(ビラウサシ)車等の如き、貴き牛車に適用せられたり。(四緒(シヨヂ)・五緒に對して)七緒の琴【句】しちげんきん(七絃琴)に同じ。倭訓栞「東舞の歌に、ななつをのやつをの琴と見えたり」

ななと 【名】(植)次條の略。「瀉」に同じ。

ななとうぐさ 【名】(植)さじかもだか(匙澤瀉)の異名。

ななところ-がり 七所借【名】處處方方より、金錢などを借集むること。

ななところ 七所【名】次條の略。一代男「町人ごしらへ、七ところの大脇差少し反らして、あね絞を懸け」

ななところ-ごしらへ 七所拵【名】道具の各部分を、それぞれ專門の細工人に誂へて拵ふること、又その拵へ方の道具をいふか。御伽名代紙衣「七所拵の大脇差」

ななところ-どう 七所籐【名】弓の、幹(カラ)の七箇所に籐を巻きたること、又その弓。ところどう(所籐)參照。「紋」に同じ。

ななところ-もん 七所紋【名】ななつもん(七つ)に同じ。

ななぬか 七七日【名】しちしちにち(四十九日)に同じ。

ななぬかのわざ 【句】四十九日の佛事。伊勢「失せたまひてななぬかのみわざ、安祥寺にてしけり」

ななのか 七七日【名】前條の轉。

ななみせ 七並【名】鷹の翼の一部。胸のあたりのもの。

ななの 七野【名】㊀七箇處の野原。㊁【地】京都の北野・紫野・柏野・禁野(バノ)・千代野・平野・蓮臺野など七箇處の野。堀川狂歌集「野は七野七ついろはのうちにある杖突きていざ遊びに行かん」「下を見よ。

ななのやしろ 七の社【句】な(七)の條

ななはか 七墓【名】七箇所の墓所。ななはかめぐり(七墓巡)參照。

ななはかめぐり 七墓を巡る【句】七墓巡(メグリ)をなす。賀古教信七墓廻「われは七墓めぐる教信といふ道心」

ななはか-まゐり 七墓參【名】次條に同じ。

ななはか-めぐり 七墓巡【名】德川時代に、大阪にて、陰曆七月十六日の宵より夜の明くるまでに、七箇寺に參詣せしこと、又その修行者。巡拜して、天王寺を最終とすとも、梅田・長柄(ナガラ)・野原(ノバラ)・野枝(ノエ)・小橋(コバセ)・高津(コウ)・飛田(トビタ)の七箇處を巡りしともいふ。一説に、大阪のみに限らず、各地にて、その地附近の七箇處の名家の墓に參詣せしをいひ、後には、單に七箇處の寺に參詣するをいへりと。大阪繁昌記「家父有二七律一、賦二都俗中元夜歴二拜七墓巡(ハイナナボメグリ)一」

ななひかり 七光【名】長へに餘光の及ぶこと。孝親の光は七光」「を見よ。

ななばけ 七化【名】「狐の七化、猫の八化七化・八化(ハチバケ)【句】老猾にして顚りに假面を裝ふ形容。

ななひこ 七彦【名】次條を見よ。七彦粥【句】「長彦の粥」を見よ。 飲木「君が代をななひこのかゆ七かへり祝ふことばのあえざらめやは」

ななびやうし 七拍子【名】歌舞の拍子の七種類。早し・輕し・上歌舞伎(カブキ)・中・遲し・したるし・しづか、これなりと、觀世極意抄にいへり。 謡曲「道明寺」「ただ今かなづる歌舞(カ)の曲・七德・變調・七拍子」

ななふ 七節・七符【名】■數物などの編目の七すぢ。ふ(節)參照。【古語】 ■一枚の數物の幅の十分の七ほどの部分。【古語】 袖中抄「陸奥の十(ト)ふの菅ども七ふには君をしなして三ふにわれねん」

ななふ 七ふ【名】次條を見よ。七ふの祝【句】有卦(ウケ)に入りたる人が、筆・鋏などやうの「ふ」の字の附きたる七種の品を揃へて祝ふこと、又その祝。有卦の祝。

ななふし 七節【名】【動】ななふしむし(七節蟲)の略。

ななふしぎ 七不思議【名】■一地方に於て、古、不思議なりとして並べ擧げし七つの事物。越後の七不思議、最も有名なり。 ■或物事につきて、七つの不思議なる事柄。 二代男「男女の中に、今日の七不思議は」

信州諏訪(スハ)の七不思議【句】社壇雨・根入杉・七頭鹿・氷之橋・衣崎富士・湯口神止・板穴宮影をいふ。

親鸞上人の七不思議【句】越後國に於ける、親鸞上人に關係ある七不思議。蒲原(カンバラ)郡田上(タナカミ)村の繋櫃(ツナゲビツ)・小島の八房(ヤツブサ)の梅・數珠掛(ズヅカケ)櫻・保田(ボダ)の三度栗・鳥屋野(トヤ)村の逆竹(サカサ)・山田の燒蛸・平島の川越名號(カワゴエミヤウガウ)・新潟淨光寺の倒竹。

越後の七不思議【句】越後國にある七不思議。蒲原(カンバラ)郡三條町在如法寺村の燃風火・頸城(クビキ)郡能生(ノウ)名立(ナダチ)村の四海波・同郡妙高山赤坊主八滝・蒲原郡新津(ニヒツ)町柄目木(カラメキ)にある臭水(クサミ)・同郡村松在河内墓坊塔・同郡栃尾(トチヲ)驒谷鹽水・刈羽(カリハ)郡柿崎在米山(ヨネヤマ)腰の燒石をいひ、又一説には、海鳴・塔鳴・蚤・兎の毛色・矢根石・かまいたち・火井戸ともいふ。

遠州の不思議【名】遠江國に於ける七の不思議。さざんざの松・片葉のよし・無間の鐘・夜鳴石・櫻ヶ池・波の音・三度栗。

ななふしむし 七節蟲【名】【動】たけのふしむし(竹節蟲)に同じ。

ななふすげ 七節菅【名】七節(フシ)を編むに用ふる菅。一說に、七は石の誤りにて、いはひすげと訓むべしと。【古語】 萬葉「天(アマ)なるささらの小野の七相菅(スガ)手に取持ちて」

ななへ 七重【名】■七つ重ぬること、又その物。しちぢゆう。 ■多く重ぬること、又その物。

七重かる衣(キヌ)【句】七つ重ねて著る衣。【古語】 萬葉「從が葉のさやぐ霜夜になな(七)へかる衣にませる子らが肌はも」

七重の網【句】【佛】普く衆生(シュジョウ)に及ぼして遺漏なきを、幾重にも重なれる網を用ひて濟ふに譬へていふ。「寶(ホウ)の網」に同じ。(佛の惠の厚くして、遺漏なきにたとへていふ) 金葉「よもの海の波にただよふみくづをもななへの網に引きなもらしそ」

七重の植樹(ウエキ)【句】【佛】しちぢゆうぼうじゅ(七重寶樹)に同じ。 新後撰「影清き七重のうゑ木うつり來て瑠璃の扉も花かとぞ見る」

七重の膝を八重(ヤ)に折る【句】極めて丁寧に腰を下げて賴む。折入つて嘆願す。【諺語】 晉齡我集「まじらへば七重の膝を八重に折る袴のひだのむつかしの世や」

七重の襞(ヒダ)を八重に折る【句】前條に同じ。 堀河院艷書合「紅の七重がさねに、下給に掌手書きて」

ななへがさね 七重襲【名】ななつがさね(七襲)に同じ。

ななほしてんたうむし 七星天道蟲・七星瓢蟲【名】【動】天道蟲の一種。翅翅圓形にして、赤褐色の地に七箇の黒き點紋あり。幼蟲は體黑くして、黃色の紋あり。苹(ヨモギ)の樹に著く。蚜蟲(アブラムシ)を食ふ。

ななまがり 七曲【名】坂などの、幾重にも曲りてあること、又その處。つづらをり。羊腸。 「見よ。

ななます 七坐す【句】なな(七)の條下をみよ。

ななまはり 七廻【名】■七たびまはること。ななめぐり。 ■年などの幾度もめぐり來ること。ななめぐり。(祝ひていふ) 狂言「笈かつぎ」「ありし契にかへりあふ緣こそうれしけれ。ななつなら。そなたと身どもが命は五百八十年、ななまはり。めでたうおりやる」

ななみのき 【名】【植】冬青(ソヨゴ)科に屬する常綠喬木。幹は高さ三四十尺に達し、葉は革質・長楕圓形にして尖り、五六月頃、淡綠色の小花を著く。暖地に自生し、また觀賞用として栽培せらる。ななめのき。

ななむらうはに 七村上荷【名】上荷船の一種。

ななめ 斜【名】時刻の半ばを過ぎたること。さがり。すぎ。 晉齊鑑「申斜著二中條右衙門家長若宮大路家一」

ななめ 斜【說】■水平ならず、又直立せず、又は相並び、もしくは正しく相對することなくして對角線的なるさま。なぞへ。はす。はすかけ。ななめ。傾斜。 夫木「月影に天(アマ)飛ぶ雁の數見えてななめに立てる佐野の船橋」 ■日月の中天を通過して低くなれるさま。ななめ。 燕村「廐を刈れと夕日この頃斜なる」 ■きはだたぬさま。ひとほり。ななめなる。なだらか。ななめ。普通。若風俗。今ここへ容貌なまめかしき若衆の腹をこそ切れ。げになまめかしき若衆の腹をこそ切れ。げになまめかしく片ほなるだに、人の親の習、いかが思ふめるに、まして理に過ぎていみじければ」 ■次條の略』一とほりならぬさま。甚しきさま。 金平法「君御悦喜ななめにて、急ぎ義綱召せとある」

ななめ 斜ならず【句】一方ならず。おほかたならず。はなはだし。なのめならず。なべてならず。 平家「法皇斜ならず御歎ありしほどに、同じき十四日、六波羅池殿にて、新院ひに崩御なりぬ」 太平記「延曆寺の中堂供養の日は、…主上斜ならず信心を傾けさせたまひて」

ななめあみ 七目網【名】底刺網の一。綱の目七寸餘・幅七目掛なり。浮子(ウキ)及び沈子(イ)を附して沈下す。長さ十五丈乃至二十五丈。沖合より陸の方に向けて張下す。專ら比目魚(ヒラメ)を漁するに用ふ。

ななめぐり 七廻・七巡【名】■ななまはり(七廻)■■に同じ。 夫木「ほととぎす生田(イクタ)の山の七めぐりめぐりゆきても又も鳴かなん」 俳諧新選「眼「月雪や春來夏來て七めぐり」 ■しじふくにち(四十九日)に同じ。

ななめのき 【名】【植】ななみのきに同じ。

ななめぐら ななめ葎【名】【植】かなむぐら(金葎)に同じ。

ななよ 七夜【名】■七つの夜。七日間の夜。 今鏡「ななよ、かちより、御束帶にて、石清水に參りたまひけるに」 ■しちや(七夜)に同じ。

ななよづき 七夜月【名】『七夜は七夕(タナバタ)の意にていふ。卽ち七夕のある月の義』 陰曆七月の異稱。【古語】 異情抄「七夜月。七月。彦星の今日や逢ふらんななよづきななよの空の宵のまぎれに」

ななり 【助動】『なるなりの略』 なんなり。 源氏「女の心は辿り知らず、しか物したるななり」 蜉「入りくる音すれば、さななりと、人人出でて見るに」

ななりそ 菜鳴菜【名】【植】なのりそ(莫告藻)に同じ。【古語】 和名「莫鳴菜。奈奈里曾」

ななを 七尾【名】【地】能登國鹿島郡にある町。捨越(スゲ)川の河口にあり。郡役所を置く。その港は貿易港の一なれども、殆んどその實なし。

ななをじやう 七尾城【名】能登國鹿島(カシマ)郡矢田鄕にありて、畠山氏の居城たりし城。

ななをのいりえ 七尾入江【名】【地】ななをわん(七尾灣)に同じ。

ななをりやき 七折燒【名】伊豫國浮穴(ウケナ)郡七折村より製出する磁器。天保年間、同村の人佐川友助の創めたるもの。

ななをわん 七尾灣【名】【地】能登半島の

東側に在る灘。能登島その中央に横はりて、南北二灣を成し、南灣に七尾港あり。

なに 何【代】㊀不定稱。なにもの。なにごと。いかなる物事。あに。萬葉「家に行きて何を語らむ足びきの山ほととぎす一聲も鳴け」狂言(餅酒十王)「汝が望のやうにして取らせうぞ。それは何より安い事でござる」㊁その外、その類のいろいろの物事。大和「蓑も何も、涙のかかりたる所は、血の涙にてなんありける」枕「くだものや何やと、いと多く取らせたれば」枕「すべて、紫なるは、何も何もめでたくこそあれ。花も綠も紙も」㊂その外のすべての物事。浮世床「子ども衆は、何はおけ、御丈夫さまが一番結構な事でございますよ」夫木「何よりは舌抜く苦こそ悲しけれ思ふ事をもいはせじとはた」狂言(鏡男二)「何より重寶な寶物を求めてござる」卷花五大力「何はさしおき、これへ呼びませうかな」㊃いろいろの物事の内の一つ。宇治「何がな取らせんと思へども、取らすべき物無し」㊄いろいろの物事の内の一つも。何一つとして。(下に打消の語を伴ふ)松風村雨東雲鑑「太平の御代に生れあうてござれば、何暗い事は御座らぬ」

何か【句】㊀何事なるか。何物なるか、㊁何なりとも。いかなる物事にても。なにぞ。㊂何事が云云なるか。何物が云云なるか。古今「世の中はなにか常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬となる」㊃相手の意を確むるために、まづ發する語。千両幟「むむ、そんなら、なにか、蹈まれても、撲たれても、言分無いといふのか」㊄「何か知らん」に同じ。なにか(何か)參照。狂言(花盛頭)「何か、内裏上臈と見えまして」

何が【句】㊀前條㊃に同じ。狂言(秀句大名)「何が惜しかろ」㊁次條の略。狂言(八句連歌)「手づだひ人は、あまた多うはおじやったいの。なにが、さやうで御ざりませう」

何が扨(サテ)【句】何といひても。いふまでもなく。狂言(月見座頭)「一つ食(タ)べうほどに、我御料(ゴリョ)も何(ナ)ぞ肴をさしませ。何がさて、心得ました」鳩翁道話「壺を…只一打に打碎いた。何がさて、座中は金米糖が散らかって、雪を降らしたやうになる」「かしら」

何かしら【句】や「何か知らん」の略。「何か知らず【句】㊀いかなる物事なるか、知らず。㊁いかなる物事なるか、たしかには知らねども。

何か知らん【句】『前條の句の「ず」を連體形なる「ぬ」にしたるものの音便』前條に同じ。

何か爲(ス)ん【句】何の役(ヤク)にも立たず。何にかはせん。何せん。鳳雛「春の心のどけしとても何かせんたえて櫻のなきよなりせば」

何彼(カ)こ【句】何とか、かとか。何や彼(カ)や。狂言(鼻取相撲)「さあさあ早うおりやれ。やあ、何かと申すうちにこれぢや」甲陽軍鑑「小身なれども、武田・村上などならば、自然、何かと存ずることもあるべし」

何が無し【句】「何彼(カナ)無し」に同じ。異途飛脚「何がなしに、懐へ押込んで」

何が南京豆、唐茄(カラスウ)南瓜(カボチャ)【句】相手が「何ぞや」と反問せるに對して、答辯を避けて、更に嘲る意味にて言返す語。「小供の語」

何が何(ナ)だか【句】前條に同じ。

何が何(ナ)でも【句】いかなる事情ありても是非に。

何が何やら【句】混亂して見當の附きかぬる形容。「何が何やら、さっぱり分らぬ」

何が爲(ス)る【句】どうせ陸(クガ)な者のする仕事にてはあらず。心中宵庚申「大切な主の煩、藥一つ溫めうともせぬ。下下(シジク)には何がなる。圍爐裏の下焚きつけぬか。次郎よ、次郎よ」伊達染手綱「おぢやれの身には、何がなる。朝の夜(ヨル)から見世ざらし」「じ。

何かは知らず【句】「何か知らず」に同じ。

何かは爲(ス)ん【句】「何か爲(ス)ん」に同じ。

何から何まで【句】すべてに亙りて。一から十まで。のこらず。一切。萬端。絹笠綱目「何から何まで心づけ、親身(シンミ)も及ばぬしの介抱」

何食(ナ)はぬ顔【句】何事をも知らぬ樣を裝ふ顔つき。そしらぬ顔。

何爲(ス)ろ【句】「何に爲(シ)ろ」の略。「なにしろ面白い」

何爲(ス)も【句】「何に爲(ス)よ」の略。

何爲(ス)ん【句】「何か爲(ス)ん」に同じ。萬葉「戀死なむ後は何せむ生ける日のためこそ妹を見まくほりすれ」

何爲(ス)ん彼(カ)爲(ス)ん【句】『なにか(何彼)を見よ』何やかやせん。宇治「何せんかせんと、のりのろひければ」

何爲(ス)んに【句】㊀何にせんために。何の要ありて。「古語」萬葉「何せむに我(ア)を召すらめや」同「何せむに命をもとな長く欲(ホ)りせむ生けりとも我が思ふ妹に安く逢はなくに」㊁「何か爲(ス)んに」に同じ。「古語」萬葉「白金も黃金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも」

何爲(ス)んにか【句】前條㊀に同じ。盛衰「大將、何せんにか、いぬ宮のもとに、うちにふすとこそいふなれ」

何ぞ【句】㊀何事ぞ。何物ぞ。なぞ。なんぞ。㊁「何か」㊀に同じ。

何ぞの【句】いかなる。何といふ。なぞの。「古語」奈良「彼は、なにぞの人ぞ」枕「なにぞの犬の、かく久しく鳴くにかあらん」

何其(ソ)は【句】『「何某(カナシ)其某(カシ)」。「何(ナ)のその」を見よ』それが何の役に立つものぞ。「古語」古今「歸る山何ぞはありてあるかひは來てもとまらぬ名にこそありけれ」續古今「見し人を音にも聞かぬ瀧つ瀨のなにそは絕えず袖に落つらん」「じ。

何だ彼(カ)だ【句】「何の彼(カ)の」に同じ。

何だは彼(カ)だは【句】前條に同じ。

何たる【句】『何とあるの約』何としたる。いかなる。なんたる。何といふ。甲陽軍鑑「心も知れぬ若者は、後に何たる者(モノ)やらんも知れず」

何ごと【句】㊀いかなる物事と。何物と。何事と。㊁何とて。何として。何によりて。なんで。なぜ。なに。新續古今「行暮れて一夜宿かる松が根に何と嵐の床(トコ)拂ふらん」㊂如何なるさまに。如何やうに。如何に。謠曲(放下僧)「げにげに面白う候ふ。さて、座禪の公案何と心得候ふべき」狂言(烏帽子折)「烏帽子がはげてあったが、なにとした物であらうぞ」㊃問掛くる時、相手の注意をひくためにいふ語。如何に。どうぢや。狂言(烏帽子折)「やい、して、何と、明日(アシ)の襟附(エリツキ)はどうしたものであらうぞ」狂言(鼻取相撲)「なうなう、何とそなたに藝はないか」㊄『何と言ふか』「何と仰せらるるか」等の略。相手の言葉につきて、更に念を押す意なに。謠曲(鉢木)「何と、たとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に參れと候ふや」「しても。

何ごと云ひても【句】何としても。いかに何ごと云ひてよきか知れぬほどの、甚しき。なんといふ。なにたる。なんたる。

「何といふ無作法ぞ」

何ごか【句】㊀「何と」㊁㊂に同じ。㊁「何とかして」㊀に同じ。㊂何とか云ふ。「何とか町(チ)の裏通りに」

何ごか彼(カ)ごか【句】『なにか(何彼)を見よ』あれこれさまざまに工夫して。

何ごかして【句】㊀何とか工夫して。何やうにかして。どうにかして。なにとかして。なんとかして。なんとか。なにとぞして。なにとぞ。どうぞして。どうか。どうぞ。㊁何としてか。どうか。どうぞ。狂言(蚤取侍)「何にしてか、どうしてか。とかして取放ちけん、虛空をさして逃げて行く」

何ごがな【句】「何と」に希望の意を添へ、咏嘆していふ語。何となあ。如何やうに、なあ。狂言(佛師)「まんまと佛は受取ってござる。某は楊枝一本削ったことがござらぬが、何とがな致さうぞ」

何ごかは【句】㊀「何とか」㊁をやや咏

なに

嘆的にいふ語。何とか、まあ。源氏「君なくて岩のかけ道絶えしより松の雪をも何とかは見る」㊂「何とてか」に同じ。玉葉「何とかは急ぎも立たん夏衣憂身を變ふる今日にしあらねば」

何とかも【句】何としてか、まあ。何とてかまあ。どうしてか、まあ。紀「物ごとに花は咲けども何とかもうつくしいもがまだきて來(こ)ぬ」

何とかや【句】何とかいひたるよ。源氏「何とかや今日の插頭(かざし)よ且つ見つつぼめくまでもなりにけるかな」

何とこそ【句】㊀如何なるさまになして。如何なる原因・理由或は手段又は目的によりて。なにとて。延慶本平家「多くの者共の中に、何としてたづね來りけるぞ」 續古今「六十あまりみつるも悲し何とこそ心のとまる月になるらん」 謡曲「七騎落」「如何に義盛に申し候ふ。さて、此の者をば、何として召連れられて候ふぞ」㊁いかなる方法によりても難き意。 狂言「鬼継子」「身共がためにも繼子ぢやものを、何として喰ふものぢや」

何こ爲(も)ん【句】何とすべきか、すべきやうなし。せんかたなし。なんとせん。

何こぞ【句】㊀「何と」㊁に同じ。 狂言「筑紫」「さても、さても、興がったなりかな。あの箕をかついだなりは、何とぞあらうことぢや」㊁「何とか」㊂に同じ。(現時は、專ら、何とかして、希望を叶へられたしと誂ふる意に用ふ)【何卒(卒は「ぞ」の音に宛てたる假借の字)】 狂言「鐘馗」「何とぞ申譯を仕らう」 「じ。

何こぞして【句】「何とかして」㊂に同じ。

何こて【句】何といふ譯にて。いかにして。何故に。何として。なぜ。 更科「月もいでぬ闇にくれたる姨捨に何とて今宵尋ねきつらん」

何こ無し【句】㊀これぞと取立てて云ふ程にはあらず。特別に擧げて言ふべき事は無し。そぞろなり。普通なり。 蜻蛉「若やかに青みたるに、霞も霧も隔てぬ空のけしきの、何となくそぞろをかしきに」 平家「やがて、その夜受禪ありしかば、天下何となくあわてたる樣なりけり」㊁特に一事一物に限らず、すべてに亙れり。 太平記「天下の事、大小(だいしょう)となく關東の御計ひとして、叡慮にも任せられざりしかば」

何こ無しに【句】これぞと取立ていふ程にはあらずして。何となく。そぞろに。

何こ何こ【句】「何と」㊃を重ねてその意を強めていふ語。

何こには無し【句】何といふ程の事にてはあらず。これぞといふ程の事にはあらず。 土佐「この祠、何とにはなけれど、ものいふやうにぞ聞えたる。人の程にあはれば咎むるなり」

何こは無し【句】「何と無し」に同じ。 源氏「何とはなけれど、過ぐるよはひに添へて、忘れぬ昔の御物語など承り聞えまほしう思うたまへるに」

何こも【句】㊀何物とも。何事とも。㊁物の數とも。 源氏「おのが斯く今日あすになりぬる命をば、何とも思したらで」㊂いかやうにも。一向に。 宇治拾遺「衆中にて斯く言ふことを、何とも答へざらんもくちをしと思ひて」㊃「何とも彼(か)とも」に同じ。 狂言「鳥山伏」「何とも、氣の毒な事でござる」 きのふはけふの物語「さる若衆、念者と寢て、これもとりはづされた。何とも、この臭を去るべきやうなければ」

何こも有れ【句】いかにありとも。何に爲(も)よ。 醒睡笑「二郎が居らう間は、何ともあれ、めでたうはなすまいぞ」

何こも彼(か)こも【句】『なにか(何彼)を見よ』いかやうにも。どのやうにも。どうにもかうにも。いかにも。非常に。「何ともかとも申譯なし」 狂言「貰聟」「何ともかともならぬ酒飲(さけび)でござるが、醉狂(よひぐる)を爲(も)られて、迷惑致します」

何こも無し【句】㊀いかなる物事とも思はず。㊁いかなる變も無し。別條なし。なんともなし。どうもなし。㊂いかなる理由もなし。いかなる譯もなし。 玉葉「昔こそなにともなしに戀しけれ伏見のさとに今宵やどりて」

何こやら【句】㊀次條の略。 狂言「鐘馗」「何とやら拜めば寒し梅の花」 生駒朝顏「それは、さて、あはれな話、身も、今宵は、何とやら物淋し」㊁「何とか彼(か)とか」に同じ。

何こやらん【句】「何やらん」に同じ。 延慶本平家「漫漫たる海上に、何とやらんはたらく物あり」 謡曲「邯鄲」「物仰せられ候ふも、何とやらん物物しく見え給ひて候ふ」

何ならず【句】「何の數ならず」に同じ。 源氏「いつの程にてかは、なにならぬ御名のりを聞えたまはん」 梁塵「長濱の眞砂の數も何ならず盡きせず見ゆる君が御代かな」

何なり【句】いかなる物事にてあるか、知れず。「古語」 夢浮「涙川淵瀬も知らぬ絲子をしるべと賴む我れや何なり」

何なれや【句】前條に同じ。「古語」 後拾遺「程もなく戀ふる心は何なれや知らでだにこそ年は經にしか」

何に【句】㊀何といふ物事に。如何なる物事に。何物に。何事に。 更科「いかに言ひ何に譬へて語らまし秋のゆふべの住吉の浦」 後撰「結びおきしかたみのこだになかりせば何にしのぶの草を摘まましし」㊁「何にも」に同じ。 狂言「素襖落」「これを飲まうと存ずる所に、また何に着へられたものではござらぬ」 同「佐渡狐」「尤もよい國なり。何に不足も無いが」㊂何のために。なにしに。「古語」 古今「あひ見ねば戀こそまされみなせ川何に深めて思ひそめけん」 狂言「樽柿」「珍しからぬ花を御覽ぜられて、何にせらるる」

何にかは爲(も)ん【句】「何かは爲んに同じ。 平家「命の惜しく候ふも、母上を今一度見ばやと思ふためなり。今は生きても、何にかはせん」

何に爲(し)ろ【句】次條に同じ。

何に爲(も)よ【句】いかなるためなりとも。いかなる理由のあるにもせよ。何ともあれ。いづれにしても。何にしろ。何にせ。どうせ。

何に附け、彼(か)に附け【句】『なにか(何彼)を見よ』あれや、これや、いろいろの物事につけて。「も」に同じ。

何にても彼(か)にても【句】「何も彼(か)も」に同じ。

何には依るまい【句】「何に依らず」に同じ。 狂言「かくすと」「何には依るまい。藝のたたる和歌の心のあらうずる人を、鑑に取らうと存ずる」

何にまれ【句】『何にもあれ』の約。何と限らず。何なりとも。

何にも【句】何事にも。何物にも。なんにも。何にまれ。何に。

何にも彼(か)にも【句】『なにか(何彼)を見よ』あの物事にも、この物事にも。

何に依らず【句】何と限らず。何にてもよし。なんであれかし。一代男「何によらず、今日を限りに雜僕を申しかけ、手をよく引きて、遊を替へるぞ」

何の【句】㊀いかなる物事の。何事の。何物の。㊁何のための。 起「赤駒のい行きはばかる眞葛原なにのつてごとたのしえけむ」㊂何ほどの。どれだけの。(下に打消の語を伴ひ、又は反語として用ふ) 幸若「何の、これほどの事に困却すべきに非ず」

何の數ならず【句】「物の數ならず」に同じ。 梁塵「何の數ならぬ下部」

何の彼(か)の【句】或はあれなりといひ、或はこれなりといふ。何だ彼(か)だ。

何の心を思ふ【句】何事を思ふ。「古語」 梁塵「何の心を思ふとも、言ひやらぬまのあやめぐさ」

何の某(がし)【句】次條に同じ。 「じ。

何の何某(かなにがし)【句】なにがし(何某)に同じ。

何の誰(れ)【句】前條に同じ。

何一つ【句】多くの中にて、いづれの一種も。(下に打消の語を伴ふ)「何一つ缺けたる事なし」

何まで【句】「何から何まで」に同じ。

何も【句】㊀何事も。何物も。「餘は御面會の上にてと存じ、何も申し殘し候」

なに

㊀何としても。何によりても。「何も、それほどの御心配には及ばじ」 狂言(八句連歌)「なるほど結構なお手でござる。して、何も、まそっと上らうと思やるか。このお手は、屋根さへ無くば、天までも上らう御手でござる」

何も【句】次條に同じ。

何も彼(カ)も【句】『なにか(何彼)を見よ』

何にても彼(カ)にても。如何なる物事も。何物をも。何事をも。ことごとく。 落窪「ここには、ただ何も彼(カ)もな賜(タ)びそ。きんだちに遍く奉らせたまへ」 きのふはけふの物語「おちこち機、お里が不便さに、晴がましき時は、何もかも借物ぢや」

何や【句】「何か㊀に同じ。〔京都・大阪の語〕

何や彼(カ)や【句】『なにか(何彼)を見よ』

何なりとか彼(カ)なりとか。何とか彼(カ)とか。何やら彼(カ)やら。あれやこれや。 源氏「人は、皆おのが物染めいそぎ、何やかやといへど、耳にも入らず」 増鏡「御祈、何やかやと、伊勢にも御使たてまつらせたまへど」 太平記「諸拂(シヨバラヒ)何やかやに、持合(モチアハセ)の金が不足で」

何やら【句】㊁次條の略。㊂「何やらん」の略。 狂言(賽の笠)「いやいや、其方(ソナタ)がさらさら聊爾を云ふではないが、何やら尋ねる態ぢやが、何が欲しいぞ」

何やら彼(カ)にやら【句】『なに(何)のに類化せられて、か(彼)にも、にの添ふに至りしもの』次條に同じ。 膝栗毛「とりあげ婆の間違やら、何やらかにやら話しあひて」

何やら彼(カ)やら【句】『なにか(何彼)を見よ』「何や彼(カ)や」に同じ。

何やらん【句】㊀何といふ物事にやあるらん。何物やらん。何事やらん。なにとやらん。 謡曲「砧」「あら不思議や、何やらんあなたに當つて物音の聞え候ふあれは何にて候ふぞ」 膝栗毛「とりあげ婆の間違やら、何やらかにやら話しあひて」

何やら彼(カ)やら【句】『なにか(何彼)を見よ』「何や彼(カ)や」に同じ。

何より彼(カ)より【句】『なにか(何彼)を見よ』

何や彼(カ)やの物事のいづれより。一切の物事より。

なに

何よりの【句】何より彼(カ)よりの。いかなる物事よりもすぐれたる。 狂言(鏡男)「何より重寶な寶物を求めてござる。何よりの寶でござる」

何は【句】『なに(何)㊁を見よ』その外のいろいろの物事は。(歌などに、地名の浪速(ナニハ)に言懸けて用ふること多し)〔古語〕 古今「津の國のなには思はず山城のとはにあひ見んことをのみこそ」 春花五大力「何はさしおき、これへ呼びませうかな」

何は然れ【句】その外のいろいろの物事はそれとして。何はともあれ。

何はに附けて【句】何やかやの物事につけて。なにかにつけて。何に附け、彼(カ)に附け。 方丈「京の習、なにはにつけても、皆もとは田舎をこそ頼め」

何はの【句】㊀何やかやの。すべての。(歌などに、地名の浪速(ナニハ)に言懸けて用ふること多し)〔古語〕 源氏「數ならでなにはの事もかひなきになどみをつくし思ひそめけん」 謡曲(蓬矢)「何はの恨うち忘れて」 ㊁何の。いかなる。(歌などに、地名の浪速(ナニハ)に言懸けて用ふること多し)〔古語〕 月詣集「津の國の葦手にもなき浦と見てなにはのことに落つる涙ぞ」

何はも【句】何や彼(カ)や、いろいろの物事も。何も彼(カ)も。(歌などに、地名の浪速(ナニハ)に言懸けて用ふること多し)〔古語〕 舞内侍日記「津の國のなにはも知らぬ世の中にいかでかあまの袖濡らすらん」

何を【句】㊀何事を。何物を。㊁何を言ふか。何をするか。(言ふべからざるに言ひ、爲すべからざるに爲したる等を咎むる場合にいふ)「何を、小癪(コシヤク)な」 狂言(宗論)「有るやら、無いやら、何を、その方が知って」 ㊂何を思ひて。何を目的に。何のために。 延慶本平家「今は、何を御戰ひ候やらん」

何を云ふにも【句】次條に同じ。

何を云ふも【句】「何と云ひても」に同じ。 狂言(福慈)「何をいふも、間を隔てたるに依って、了簡に及ばぬ事ぢや」

なに

なに 何【副】㊀事の理由の定かならぬを問ひただすにいふ語。何として。何とて。何しに。など。何によりて。何故に。なぜ。なぜに。などて。なにか。なにかは。なにかも。なにしかも。なにぞ。なぞ。など。 拾遺「夢とのみ思ひなりにし世の中をなに今さらに驚かすらん」 ㊁相手の言葉につき、念を押して問返す語。なにと。 謡曲(鉢木)「いかに、あれなる旅人、鎌倉へ勢(セイ)の上(カミ)るといふは誠か。何、夥しく上る。さぞあるらん」 ㊂他人の言葉又は考を否定する意にいふ語。「何、樣ふものか」「何、そんな事があるものか」

何か【句】㊀なに(何)に同じ。 萬葉「足びきの山も近きをほととぎす月立つまでに何か來鳴かぬ」 ㊁いかでか。なにぞ。なんぞ。(反語の意に用ふ) 萬葉「いまきなるをむれが上に雲だにもしるくし立たばなにか嘆かむ」 ㊂『何か然(サ)ることあるべきの略』上の語を承けて、反對の意を逃べんとする初に、まづ打消していふ語。 源氏「たもたるる女のためにも心にくおしはからるるなり。されど、なにか、世の有樣を見たまへ集むるままに、心に及ばず、いとゆかしき事もなしや」 ㊃されば。なり。その事につきては。「何か」參照。 枕「などいと久しく見えざりつるといへば、なにか、いと心うき事の侍りしかばといふに」

何かは【句】なにか(何か)を咏嘆的にいふ語。 拾遺「五月雨にならぬ限は時鳥なにかは鳴かんしのぶばかりに」

何かも【句】前條に同じ。〔古語〕 萬葉「大方は何かも戀ひむことあげせず妹に許(ユル)し數にも有らぬ壽(イノチ)持て何かも幾(イク)數にも有らぬ壽(イノチ)持て何かも幾 狭衣「あかぬ別は、何かもまされればにや」

何さ【句】他人の言葉の正しからぬを正し、又は自ら言ひかけたる事を抑へて、他の物事に轉じまぎらす時にいふ語。いやさ。 膝栗毛「こりや、あなたがたはおやかましからうけれど、なにさ、わっちらも、聽聞致しやせう」

何しか【句】『しは强めの助辭』何によりてか。何の故にか。何としてか。何とてか。何しに。なじか。なに。なにぞ。なぜ。 萬葉「直(タ)に相(ア)はず有るは諾(ウベ)なり夢にだに何しか人の事の繁けむ」

何しかは【句】前條を咏嘆的にいふ語。 後拾遺「何しかは今は急がん都には待つべき人もなくなりにけり」

何しかも【句】前條に同じ。 萬葉「開かずして默(モダ)も有らましを何しかも公(キミ)が正香(カタダ)を人の告げつる」

何して【句】いかにして。何しに。 榮花「おし返しあさましければ、なにしてといふ事のやうに、つらくあさましう思さる」

何何(ナニナニ)【句】文句を讀みはじむる時に、先づ問ひかくるが如き心持にていふ語。何とある。何となる。何なるか、何なるか。 謡曲(藪馬)「是に文の御座候。御覽候へ。何何、西谷の花、今をさかりと見えて候に」

何・何【句】なに(何)を重ねて强めていふ語。 盛衰記「かの僧申し出でたりければ、上人聞きたまひて、なになに、今一度語りたまへとて、委しく言はせて」

何許(イクバク)【句】何と數ふるばかり。なにほど。いかばかり。 源氏「何ばかりのあやまちにてか、このなぎさに命をきはめん」

何分【句】『ぶん(分)を見よ』いかなる點よりしても。如何にありとも。いづれにしても。是非。なにとぞ。なんぶん。「何分不案内の事なれば」「何分宜しく」

何分こも【句】前條に同じ。

何程【句】たとひ、いかやうに。なんぼ。いくら。 狂言(寢覺)「なに程そのやうにほえたとて、去(イ)なすことではないぞ」

何故【句】いかなる目的又は原因にて。何の故に。何のために。なぜ。 謡後撰「身をつめば草葉にいかで言問はん何故かくは置ける露ぞと」

なに【接頭】いかなる。何といふ。「何物」「何事」「何業(ワザ)」

なにーあやまり 何誤【名】いかなるあやまち。 源平布引「何あやまりて、何咎(トガ)て。さ、さあ、それ聞かう」

なにーか 何彼【代】『何とか彼(カ)とか』・『何とも彼(カ)とも』・『何にも彼(カ)にも』・『何も彼(カ)も』・『何や彼(カ)や』・『何やら彼(カ)やら』等を見よ』**なにくれ**(何呉)に同じ。 源氏「ところどころの饗、院のしもべ、殿の召次(メシツギ)どころ、なにかのくまでいかめしうせさせたまへり」 増鏡「諸社の奉幣・神馬、何かとののしり騒ぎつれど」 狂言(松の橋)「やあ、まづ誰殿から参らう。何かといふ内に、これぢや。ものまう。案内も」

何彼無しに【句】 何とか彼とかいふことも無く。別にとやかくいふ意味も無く。 狂言(俄道心)「何かなしにこれへ参り、有りついておりやる」

なにか 何か【句】**なに**(何)の條下を見よ。

なにーがし 何某・某【代】■**それがし**(某)(一)に同じ。 源氏「むかしのなにがしがためしも引出でつべき心地なんするとて」 大鏡「なにがし丸といひし御事副(フクヒヤ)」(二)明瞭なる物事を、わざとおぼめかしていふ語。■**それがし**(某)(二)に同じ。 源氏「なにがしは、しれものの物語せんとて」 大鏡「なにがし物おぼえて後、不思議なりし事は」

何某・呉某(ガシ)【句】『**なにくれ**(何呉)及びくれがし(呉某)を見よ』あの人この人。何やかやいろいろの人。なにくれの人。それがしかれがし。それかれ。 源氏「なにがしくれがしと数へしは、頭中将(トウジヤウ)の随身、その小舎人童(コドネリ)をなん、しるしにいひはべりしなど聞ゆれば」

何某・其某(ガシ)【句】『不定称の代名詞と指示代名詞中の中称の指示代名詞とは連結して用ひらるること多く、この語もその一なり。**だれそれ**(誰某)・**どこそこ**(何処其処)・「何其(ソ)は」・「何(ナ)の其の」参照』前條に同じ。 狭衣「なにがし・それがし、ここへとどめてはべれば」

何某より金貸(カシ)【句】何の某といはれて名聞あるよりは、金貸になりて富裕なる方まされり。それがしよりは食ふがし。〔諺語〕

五つの何がし【句】〔佛〕**ごしやう**(五障)を指していふ語。〔古語〕 源氏「五つの何がしも、なほうしろめたきを」

なにーがし 某【接尾】『端数(カズ)の確かならぬ意にて、代名詞より転用せるもの』あまり。強。「七里なにがしの道を歩みて」

なにーかと 何彼と【句】**なに**(何)の條下を見よ。

なにーくれ 何呉【代】その事、かの事。何やら彼(カ)やら。いろいろの物事。何彼(カ)。 幸徳「そめくさ、なにくれの事、庄庄の物どもは、一條殿にも分ち奉りたまふ」 源氏「御くだもの、なにくれと、谷の底まで掘出でて」 栄花「北の御せうとの、なにくれの守ども」

何呉と無く【句】その事、かの事と定めたること無く。何や彼(カ)や、いろいろと。なにくれと。

なにーけ 何家【名】何といふ家がら。何といふ姓氏の一族。なんけ。

なにげなし 何氣無し【形ク】■何の氣(ケ)も無し。如何なるけはひも無し。何の儀子も無し。■何の氣(キ)も無し。何の考も無し。

なにーごころ 何心地【名】何といふ心地。如何なる心地。どのやうなる心持。 詞花「その事と思はぬだにもあるものを何ごころして月を見るらん」

なにーごころ 何心【名】何といふ心。如何なる考。何といふ意味。 萬葉「我が宿の葛葉(クズ)日に殊(ケ)に色附きぬ来ますぬ君は何情(ナニゴコロ)ぞも」

なにごころなし 何心無し【形ク】何といふ心も無し。何の氣(キ)無し。無心なり。何氣(ケ)無し。 源氏「なにごころなき空のけしきも、ただ見る人から、えんにもすごくも見ゆるなりけり」 同「いとなにごころもなく、若やかなるさましたまひて」

なにーごと 何事【名】何といふ事柄。如何なる事。なにわざ。 謡千歳「何事か思ひもおかん末の露もとの雫にかかるうき世に」

何事も知れぬで持ったもの【名】何事も、その眞相の知れざるによりて都合よきなり。〔諺語〕

何事も時世(ジセ)【句】何事も、その時その時の運命に支配せらるるものなり。〔諺語〕 園姓爺合戦「何事も時世にて、國の掟は是非もなし」

何事も時世・時節(ジセツ)【句】前條に同じ。〔諺語〕

なにーさま 何様【名】いかなるやうす。いかやうさま。いかにも。

なにーさま 何方【名】何れのむき。如何なる方面。 源氏「なにざまの事ぞ、われにはつつむことあらじ」

なにーしに 何爲に【副】■何の目的又は原因にて。何のために。なぜに。 源氏「まろとは、なにしに、ここに、たびたび参るぞ」■何の目的又は原因に由るとも、いかでか。(反語の意にいふ) 竹取「見送りたまへといへども、何しに悲しきに見送り奉らん」

なにーしも 何爲ろ【句】**なに**(何)の條下を見よ。

なにーすれぞ 何すれぞ【副】『すれはす(爲)の已然形にて、その下に助詞ばの省略せられたるもの』何のためにか。いかなる故にて。なすれぞ。なすれか。なんすれぞ。 萬葉「時時の花は咲けどもなにすれぞ母とふ花の咲出(サキデ)こずけむ」

なにーせ 何爲【句】**なに**(何)の條下を見よ。

なにーぞ 何ぞ【副】■何ゆゑに。何として。何とてか。いかで。いかんぞ。なんぞ。 萬葉「玉河にさらす手づくりさらさらになにぞこの子のここだかなしき」■いかでか。なにか。なんぞ。いかんぞ。(反語の意にいふ)

なにーぞ 何ぞ【句】**なに**(何)の條下を見よ。

なにぞも 何ぞも【副】**なにぞ**(何ぞ)(一)を咏嘆的にいふ語。何とてかまあ。 萬葉「柔田津(ニギタヅ)に舟乗(フナノ)せむと聞きしなへ如何(ナニ)ぞも君が見え来ざるらむ」

なにーと 何と【句】**なに**(何)の條下を見よ。

なにーとが 何科【名】いかなるとが。 源平布引「これ、賓盛どの、娘が腕(カヒナ)は、何とが有って切ったぞ」

なにーとき 何時【名】いつ。いつごろ。なんどき。 和泉式部擬墓「戀ふる身はことものなれや鳥の音に驚かされし時は何どき」

なにーとぞ 何卒【句】**なに**(何)の條下を見よ。

なにーなに 何何【代】列擧すべき事物の名の不明なる時にいふ語。 俳諧古選(蕉翁)「時雨初め黒木になるは何何ぞ」

なには 浪速・浪華・難波【名】(地)■『神武天皇この地に到りたまひしに、浪速かなりしより、浪速(ナニハ)の國といひしものの訛りて地名となれる由、日本書紀神武天皇の條に見ゆるは、俄かに信ずべからざれど、古代には、この地、淀川・大和川・河内川の落合ひし處にして、大阪灣は今日よりも深く灣入し、江口浪速の形勢を呈せしは實際なるもののごとし。されど、萬葉集には、浪速・浪華の文字は見えず』**せつ**(攝津)の古稱。 萬葉「海原のゆたけき見つつ葦が散るなにはに年は經ぬべく思ほゆ」 同「おしてる難波の國に天の下知らしめしきと」■**なにはづ**(難波津)に同じ。

難波の蘆は伊勢の濱荻(ハヂ)【句】物の名の、所により異なるをいふ語。〔諺語〕 萬玖波集「草の名も所により變るなり」(いふ句に、救濟法師)浪速の蘆は伊勢の濱荻」

難波の柏(カシハ)【句】蘆の葉の異名といふ。 俊頼髄「紅葉菊千ぐさの露にやどる月の今はなにはのかしはにぞすむ」

難波の祓(ハラヘ)【句】**やそしまつり**(八十島祭)に同じ。

なにはあしげ 難波葦毛【名】『歌に、難波といへば、蘆を取添へていふこと多きより、難波の稱を冠らせたるなるべし』**あしげ**(葦毛)に同じ。 夫木「さざ波や比良の高ねに雪降ればなにはあしげの駒なめてけり」

なにはーいばら 難波薔薇・金櫻子【名】〔植〕薔薇(ウバラ)科に屬する灌木。莖は蔓狀を成し、多くの刺により他物に攀縁す。葉は複葉にして、微細なる鋸齒を具ふ。初夏の候、白色または淡紅色の五瓣花を開き、その様、山茶(サンザ)のに似たり。臺灣その

他の地に自生し、また觀賞用として栽培せらる。いざよひばら。きんしゃら。てうせんいばら。さんせうばら。はとやばら。

なにはえ 難波江【名】〔地〕今日の大阪市及びその附近の未だ海水に蔽はれゐたりし時の古稱。なには(難波)〔一〕參照。小町集「なには江の釣するあまに目かれけん人もわがごと袖や濕るらん」新古今「夕月夜しほ滿ちくらし難波江の葦の若葉を越ゆる白なみ」

なにはおぼこぼりのむろつみ 難波大郡館【名】『難波大郡は、和銅年中、國郡の名を定めし時、東成(ヒガシナリ)と稱せし所、即ち後世の東成(ヒガシナリ)郡の地域なるべしといふ』古、攝津國にありて、外蕃の來朝せる者を置きし所。後、京都に移して、鴻臚(コウロ)館といふ。

なにはおほすみのみや 難波大隅宮【名】應神天皇の皇居。今の大阪市内に當るべけれども、その跡明かならず。

なにはがし 難波柏【名】「難波の柏」を見よ。

なにはかぜ 難波風【名】難波(今の大阪地方)に吹く風。二代男「難波風のくれぐれ、いかのぼりのはやりて」

なにはがた 難波潟【名】〔一〕〔地〕なにはのうみ(難波海)に同じ。萬葉「難波がた鹽干に出でて玉藻刈るあまつをとめら汝(ナ)が名のらされね」〔二〕神樂歌の曲の一。難波潟なには湯潮滿ちくればあまごろもあまごろも田蓑の島に田鶴(タヅ)鳴きわたる鳴きわたる」

なにはぐさ 難波草【名】〔植〕あし(葦)の異稱。【古語】秘目抄「秋くれば穗に咲出づるなにはぐさかりそめながら見ゆる夕霧」

なにはごにんをとこ 難波五人男【名】難波の惡徒、雁金文七・極印千右衛門・庵(イホ)の平兵衛・布袋(ホテ)市右衛門・神鳴(カミナリ)庄九郎の五人。元祿十五年獄門の刑を受く。その年岡本文彌、芝居にて「雁金文七」と題して興行せしより、淨瑠璃脚本等に仕組まれて、今日に行はる。

なにはじやうるり 難波淨瑠璃【名】江戸時代、攝津國難波即ち大阪地方に流行せし淨瑠璃。虎屋源太夫の門人井上播磨掾(ジョウ)の起し播磨節を初とし、文彌節・表具屋節・道具屋節などあり。竹本義太夫の創めし義太夫節に至りて最も盛んに行はれたり。(江戸淨瑠璃・京淨瑠璃に對して)

なにはすがさ 難波菅笠【名】古昔、難波に生ずる菅にて作りし菅笠。萬葉「おしてる難波菅笠縫きふるし後は誰が著む笠ならなくに」

なにはせん 難波錢【名】寛永銅錢の一。享保十三年より同十五年まで、攝津國難波村にて鑄造せしもの。徑九分もしくは八分七厘、紫褐色を呈す。

なにはた 難波田【名】難波の田。謠曲(兼平)「住吉の岸田、入江にまかせしは、難波田の、伏水(フシミ)、都べに植ゑしは、伏見田・鳥羽田の」

なにはぢ 難波路【名】難波の道。萬葉「難波路を行きて來(ク)までとわぎも子が附けし紐が緒絕えにけるかも」

なにはづ 難波津【名】〔一〕〔地〕『なにはのたかつのみや(難波高津宮)を見よ』難波江の要津たりし處、即ち今の大阪の地。なには。萬葉「難波津にみ舶泊(ハ)てぬときこえなば紐解きさけて立走りせむ」〔二〕中世、「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心はわが思はなくに」の歌と共に、幼兒の手習ふ初に學びし歌。即ち「難波津に咲くやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」。次條參照。杜「ただ、思ひまはさで、なにはづも、なにも、ふとおぼえんことを」

なにはづのみや 難波津・淺香山(アサカヤマ)の道【句】『古今和歌集の序に「なにはづの歌は、みかどのおほん始なり(大ささぎの帝の難波津にて皇子(ミコ)と聞えける時、東宮を互に讓りて、位に即き給はで、三歲になりにければ、王仁(ワニ)といふ人のいぶかりて詠み奉りける歌なり。この花は、梅をいふなるべし。淺香山の言葉は、采女(ウネメ)のたはぶれより詠みて(葛城のおほきみを陸奥(ムツノ)へ遣したりけるに、國のつかさ事おろそかなりとて、まうけなどしたりければ、すさまじかりければ、采女なりける女のかはらけ取りて詠めるなり。これにぞ、大きみの心解けける)、この二歌(ウタ)は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人の始にもしける」とあるに本づく。前條〔二〕參照』和歌の道。やまとうたのみち。歌道(ウタミチ)。謠曲(殺生石)「難波津淺香山の道は夫婦の仲だちなれば」

なにはづのながれ 難波津の流(ナガレ)【句】難波津の道。歌道の流派。謠曲(芳野)「難波津の流は、淺くして、底をはかり難く、淺香山の道は、また狹くして、際を知らざりき」

なにはづのみち 難波津の道【句】「難波津淺香山の道」に同じ。

なにはづけ 難波漬【名】刻みたる茄子に蕃椒酢(ナンバンザ)をかけたる漬物。

なにはでら 難波寺【名】こてんわうじ(四天王寺)に同じ。謠曲(三井寺)「初瀨も遠し、難波寺、名どころ多き鐘の音」若風俗「難波寺の五つの鐘の鳴る時、…愛極樂の東門過ぎてゆくに」

なにはと 難波門【名】〔地〕難波の港。(古語)萬葉「なにはとを漕出て見れば神さぶるいこまたかねに雲ぞたなびく」

なにはのうみ 難波海【名】〔地〕攝津國大阪灣の一部の古稱。なんばの海。難波潟。萬葉「ただこえのこの道にしておしてるやなにはの海と名づけけらしも」

なにはのおとど 難波大臣【名】〔人〕ふぢはらよしなり(藤原豐成)の異稱。

なにはのさき 難波碕【名】〔地〕難波津の海門。御津埼(ミツノサキ)。起「難波之碕」同「おしてるやなにはのさきのならび濱ならべむとこそそのことはありけめ」

なにはのさきのみや 難波碕宮【名】なにはのながらのよさきのみや(難波長柄豐碕宮)に同じ。起「幸二于難波碕宮一」

なにはのたかつのみや 難波高津宮【名】仁德天皇のおはせし宮。その址は、大阪市玉造(タマツクリ)・石山の間より八軒屋にかけての邊、即ち大阪城附近の地なるべしといふ。たかつ(高津)參照。

なにはのながらのとよさきのみや 難波長柄豐碕宮【名】ながらのとよさきのみや(長柄豐碕宮)に同じ。

なにはのはふりつのみや 難波祝津宮【名】攝津國西成郡難波(ナニワ)村(現今大阪市に編入せらる)にありきといふ欽明天皇の行宮。

なにはのほりえ 難波堀江【名】〔地〕仁德天皇の難波高津宮におはせし時、水害を除かんため、宮北に穿たしめられし堀江。物部守屋等排佛の徒の、昔て佛像を此處に投ぜしことあり。今の大阪市内を貫流する天滿川に當る。起「冬十月堀二宮北之郊原一引二南水一以入二西海一因以號二其水一曰二堀江一」

なにはのみこ 難波御子【名】〔人〕仁德天皇の、未だ即位し給はざりし時の稱。謠曲(難波)「難波の御子は、皇子ながら、未だ位に即きたまはねば、冬咲く梅の花の如し」

なにはのみや 難波宮【名】なにはのながらのよさきのみや(難波長柄豐碕宮)に同じ。萬葉「太上天皇幸二於難波宮一時、…身人部王作歌」

なにはのをえ 難波小江【名】〔地〕なにはえ(難波江)に同じ。萬葉「おし照るや難波の小江に」

なにはばし 難波橋【名】大阪市にありて、天滿天神の二橋と共に淀川の三大橋の一たる橋。北區樋上(ヒノウエ)町より、中之島劍岬を横切り、北濱二丁目に通ず。

なにはばら 難波薔薇【名】〔植〕なにはいばら(難波薔薇)に同じ。

なにはびと 難波人【名】難波の人。萬葉「難波人蘆火たく屋のすしたれどおのが妻こそとこめづらしき」續猿蓑二「千刈(カリ)の田をかへすなり難波人」

なにはぶし 浪花節・難波節【名】『難波、即ち大阪地方より行はれはじめしによりていふなるべし』語物の一。二上(ガミ)の三味線に合はせつつ、地(ジ)は一種特有の節にて講ひ、臺詞は、講談の如くに語り、多くは、劍客・勇士・俠客・博徒等に關する、武勇

なる話を材料とす。說經・祭文などより轉化し來りしものなるべく、もとは、誘ふ部分、今のより少なく、三味線を用ふることも無かりしものの如しといふ。うかれぶし。ちよんがれぶし。ちよぼくれ。

なにはみやげ 難波土産【名】〔書〕淨瑠璃の御所櫻堀川夜討・於初(ヲハツ)天神記・安倍宗任松浦鑒(ソウニンマツウラカガミ)・北條時頼記(トキヨリキ)・大内裏大友眞鳥・國姓爺(コクセンヤ)合戰・刈萱桑門築紫輦(カルカヤサウモンツクシノキサキ)・盧屋道滿大內鑑・大塔宮曦鎧等より語句を摘出して、評註を加へたるもの。五卷。近松半二の著。

なにはめ 難波女【名】難波の浦に住む女。頼政集「貝踏むとしほひに立てるなにはめが歸る濱邊にまよふ夕霧」「を見よ。

なにはやき 難波燒【名】なんばやき(難波燒)

なにはりう 難波流【名】蹴鞠の流派の一。

なにはをとり 難波踊【名】あしべをどり(葦邊踊)に同じ。

なにびと 何人【名】何といふ人。如何なる人。なにもの。なんびと。源氏「この酉なる家には、なに人の住むぞ」

なにほど 何程【名】いかばかりの分量、又は代價。いくら。いくばく。狂言(文相撲)「何程置いてよかろ。されば、何程がようござりましよぞ」

なにんじん 菜人參・菜胡蘿蔔【名】〔植〕にんじん(人參)㊁に同じ。

なにも 汝妹【名】男より、女を親しみていふ語。なね(汝姉)參照。〔古語〕起「汝妹、此云二難邇毛一」

なにもの 何物【名】何といふ物。如何なる品物。萬葉「わぎも子がかたみのころもなかりせばなにものもてか命つながむ」

なにもの 何者【名】何といふ者。如何なる者。なにびと。枕「この殿上の盥の蓋は、何ものの盜み隱したるぞ」

なにやう 何樣【名】なにさま(何樣)に同じ。

なにやつ 何奴【名】なにもの(何者)を卑しめ罵りていふ語。其角「初雪にこの小便は何奴ぞ」

なにら 何等【代】なに。いくら。いかばかり。なんら。庭訓往來「何等御事候哉」

なにわざ 何業【名】如何なるわざ。なにごと。方丈「京の習、何わざにつけても、皆もとは田舍をこそ頼めるに、絕えてのぼる物なければ」

なぬか 七日【名】㊀なのか(七日)に同じ。萬葉「わがゆきはなぬかは過ぎじ龍田彦ゆめこの花を風に散らすな」㊁しちや(七夜)に同じ。堀文「七夜。鶴の子の千歲をふべき始とは七日よりこそ祝ひそめけれ」㊂次條の略。又、死後七日目。盛遠「まさこ君の七日のわざを、母君、佛、經書き、法服調じて、比叡にてしたまふほどに」若風俗「遠國の人として、誰跡弔ふかだもなしとや、…下地窓(シタヂマド)より供部屋を覗けば、まだ七日も立たぬに、小者集りて、…いかに下下(シタジタ)なればとて、主の死別(シニワカ)を知らざるやと、ことわりなしに枝折戸を明けて入るに」

なぬか・七日【句】㊀七日目ごと。㊁初七日より四十九日までの間、七日目毎に死者の追福を營むべき日。七七日。

七日・七夜(ナヌカ)【句】㊀七晝夜。㊁多くの晝夜。

七日の節(ナヌカ)【句】次條に同じ。增鏡「御門も。德治の頃、帥にて、七日の節に出でさせたまへりしためしおぼし出づるにや」「會」に同じ。

七日の節會(ナヌカノセチヱ)【句】「白馬(アヲウマ)の節會」に同じ。

七日の說法屁一つ【句】「百日の說法屁一つ」に同じ。〔諺語〕鶴翁「昔、太平記の無禮講に始めてこれを許しそめたより、終に鎌倉に曉ぎつけられて、七日の說法屁一つに破れぬ」「同じ。〔諺語〕

七日の說法無(ナ)になす【句】前條に同じ。

七日の御會(ナヌカノエ)【句】「後七日(ゴシチニチ)の御修法(ミヅホ)」に同じ。

七日の夜【句】㊀七日の日の夜。㊁七月の七日の夜。七夕(タナバタ)。萬葉「一とせに七夕(ナヌカ)のみ相(ア)ふ人の戀も過(ス)ぎねば夜の深(フ)け往くも」㊂しちや(七夜)に同じ。源氏「七日の夜、うちよりも御うぶやしなひの事あり」梁花「七日の夜は、おほやけの御うぶやしなひなり」

七日の宵【句】前條に同じ。萬葉「稚草(ワクサ)の妻が手まかむと大船の思ひ憑みて撐(サヲ)ぎ來らむその夫(ヲ)の子が荒珠の年の緒長く思ひ來し戀盡すらむ七月(フミ)の七日の夕(ヨヒ)は吾も悲しも」

七日病む【句】甚しく驚き、又は呆れて、七日も病みわづらふ。〔諺語〕梁花「父大臣(オトド)は、七日病むといふらんやうに、あさましういみじきに」

なぬか・うらがき 七日裏書【名】目安裏書の一。出廷の期日を七日と定めたるもの。

なぬか・くわんばく 七日關白【名】〔人〕㊀關白の職にあること七日にして薨ぜしよりいふ。ふぢはらみちかね(藤原道兼)の異稱。

なぬか・ざめ 七日鮫・鬚斗鮫【名】〔動〕軟骨類に屬する魚。鮫類の一種。體は長さ三尺餘、頭部大にして廣し。背部は蒼褐色にして、五條の廣き橫線あり。長崎の近海及び相模灘に多く棲息す。

なぬか・しやうぐわつ 七日正月【名】「七種(ナヌカ)の節句」に同じ。むいかしやうぐわつ(六日年越)參照。

なぬか・び 七日日【名】正月七日の稱。ななくさ。人日。〔古語〕躬恒集「なぬかびははやも暮れなん久方の天のかはぎり立ちわたるべく」

なぬか・まうで 七日詣【名】神社又は佛寺に、七日の間、毎日參詣すること。ななびまうで(七度詣)參照。熊歌加留多「七日詣の乘物に、供人少少召具して」

なぬか・まゐり 七日參【名】前條に同じ。阿部家傳物語「八幡宮へ、七日參を、日に七度づつ申すなり」

なぬし 名主【名】江戸幕府時代の、江戸町役人の一、又江戸以外の幕府領内の諸村に於けるものの長。江戸町方のものは、身分は町人なれども、町年寄の指揮の下に一二箇町より多きは二十二三町位までを支配し、玄關を構へて、その支配場の公務を取扱ふ。給料は二兩二分より三百一兩三分。銀十二匁餘までありて、一定せず。又名主の組合ありて、全體を二十一番に分ち、番外二組あり。各組に肝煎名主(キモイリナヌシ)兩三名ありて、仲間の取締の責の任ず。江戸以外のは、村内の威望あるものを以てこれに充て、庄屋・肝煎・里正・町役頭等の名あり。

なね 汝姉【名】男女に拘らず、人を親しみて呼ぶ語。なにも(汝妹)參照。〔古語〕記「那泥(ネ)汝命」萬葉「朝菜の思ひ亂れてかくばかりなれが戀ふれぞ夢に見えける」

なのあがた 儺縣【名】〔地〕なのくに(儺國)に同じ。起「儺縣、ナノアガタ」

なのおほつ 娜大津【名】〔地〕なのつ(那津)に同じ。

なのか 七日【名】㊀七つの目數。なぬか。㊁月の第一日より七日目の日。なぬか。

なのかいち 七日市【名】〔地〕上野國北甘樂(キタカラ)郡にある町。前田氏の蒼溪地。

なのかしやうぐわつ 七日正月【名】なぬかしやうぐわつ(七日正月)に同じ。

なのかもち 名【名】〔植〕仙人掌(サボテン)科に屬する多年生の草本。莖は高さ三尺內外、縱に數箇の稜ありて、その緣邊波狀をなす。大形・紅色の花を著け、晝間開く。觀賞用として栽培せらる。

なのき 名の木【句】なの(名)の條下を見よ。

なのくに 儺國【名】〔地〕筑前國博多地方の古稱。

なのつ 那津【名】〔地〕筑前國博多港の古稱。筑紫の大津・娜大津又は長津ともいひ、九州の要津たりき。

なのつき 名の月【句】なの(名)の條下を見よ。

なのめ 斜【貌】㊀ななめ(斜)㊀㊁㊂に同じ。〔古語〕字鏡「嶂、山岡邪平。奈女佐可、又、奈乃女爾」源氏「とあれば斯かり。あふさきるさにて、なのめに、さてもありぬべき人の少なきを」㊂次條の略。語曲(烏帽子折)「帝、なのめに思しめされ」

なのめならず【句】「斜(ナナ)ならず」に同じ。〔古語〕源氏「げになのめならぬかたにはあめる」ものふはけよの物語「夫婦ながらなのめならず悅び」

なのめなり【句】云云の言葉にては形容するに足らず。世の常なり。おろかなり。增鏡「世のおもしにておはしましぬべきことの、かくあへなき御ありさま、

口をしなど聞ゆるも、なのめなり」

なのり 名告【名】㊀名告(ノ)ること。人に向ひて、わが名をのり知らすること。神樂「朝倉や木のまろどのにわがをれば名のりをしつつ行くは誰が子ぞ」源氏「さやうならん物のくさはひ見出でまほしけれど、名のりも物うき際(キハ)とや思ふらん、更にこそ聞えね」㊁實物の名を呼びあるくこと。源氏「いかにとか、聞きも知らぬなのりをして、打ちむれて行くぞや聞こゆる」

な-のり 名乗【名】『もと前條の語の意。乘は假借の字』㊀中古以後、公家(クゲ)及び武家の男子が、元服と同時に、通稱の名に新に加ふる習なりし實名。通例漢字二字より成るものなるが故に、二字ともいへり。**かたな(片名)**とほりじ(通字)參照。㊁謠曲の文句のうち、役者の自らその役名を名乗る部分、即ち一種の科白(セリフ)。例へば「これは諸國一見の僧にて候」などの類。「に同じ。名乗を揚ぐ【句】**なのりあぐ**(名告揚ぐ)名乗を反(カヘ)す【句】名乗㊀の二字の字音の反切によりて得たる字の吉凶を判ず。

なのり-あぐ 名告上ぐ【動下二自】名のりを聲高にいふ。高らかに名告る。

なのり-あげ 名告揚【名】**まへぎやうじ**(前行司)の舊稱。

なのり-あひ 名告合【名】名告りあふこと。共に名告る。

なのり-あふ 名告合ふ【動四自】互に名告る。

なのり-いづ 名告出づ【動下二自】自己の姓名を、他人に申し出づ。源氏「ほの聞傳へける女の、我れなんかこつべき事あると名のり出で侍りけるを、中將の朝臣なん聞きつけて」㊁「この君は、いとあてなるものから、さまことにをかしげなるを、子と名のり出でくる人だになきこと」一葉「名月や蟹も平(ラヒ)を名乘出で」

なのり-かく 名告掛く【動下二自】相手に對ひて名告る。名のりをいひかく。謠曲「一人をとめん事は案のうち物小脇にかいこんで、なにがしは平家の侍惡七兵衛景經と名のりかけ、名のりかけ、手取にせんとて追うて行く」

なのり-かへす 名告返す・名告反す【動四他】㊀名告り掛けられたるに對して、此方よりも名告る。㊁繰返して名告る。

なのり-がほ 名告顔【名・貌】名告らんとする顔つき。名のるらしきやうす。一葉「嵯峨村と名のりがほなり枇杷の花」

なのり-がみ 名乘紙【名】名乘を書くに用ふる紙。

なのり-ざ 名乘座【名】能樂にて、出演する仕手(シテ)の幕を出で、一の松を過ぎ、橋掛(ハシガカリ)より右に折れて、舞臺に入り、立ちながら謠ひ出す所。

な-のり-そ 神馬藻・莫告藻・名乘藻・名乘曾【名】〔植〕『日本書紀允恭天皇の條に「とこしへに君にあへやいさなとり海の濱藻のよる時時を。時天皇謂二衣通姫一曰、是歌不レ可レ聆二他人一、皇后聞必大恨、時人號二濱藻一、謂二奈能利曾毛(ナノリソモ)一」とあるに本づける名、即ち莫(ナ)告りそ(告ぐる勿れ)の義なるを、又莫(ナ)乘りそ(乘る勿れ)の義に取りなして、神馬藻の字を宛つるに至れること、和名鈔に「神馬藻、奈能利曾、…神馬莫レ騎之義也」とあるがごとし』ほんだはら(馬尾藻)に同じ。〔古語拾遺〕催馬樂「伊勢海」「伊勢の海の清き渚に汐かひになのりそや摘まむ貝や拾はむ玉や拾はむ」

なのりそ-の 神馬藻の【枕】語路の緣より、**なるる**にかけていふ。萬葉「みさごゐる磯わに生ふるなのりその名はのらしてよ親は知るとも」

なのりそ-も 神馬藻・名乘曾藻・莫告藻【名】〔植〕**なのりそ**(莫告藻)に同じ。〔古語拾遺〕萬葉「家の島荒磯(アリソ)の上に打靡きしじに生ひたるなのりそもなどかも妹(モ)に告(ノ)らず來にけむ」

なのり-ちらす 名告散す【動四他】あちこちらにて名告る。やたらに名告る。鴛思百首「足柄の關をも知らずねたげにも名のりちらして歸る雁」

なのり-ぶえ 名乘笛【名】能樂にて、次第なく、直ちに名乘をする脇の出づる時に、專ら笛にてあしらふこと。

な-のる 名告る【動四自】自ら、己が名を告ぐ。(人以外には、時鳥(ホトトギス)にいふこと多し)萬葉「あかときと名のり鳴くなるほととぎすいやめづらしく思ほゆるかも」

な-のる 名乘る【動四自】『もと前條の語の意』名乘㊀として有つ。「よ。

な-のりそ 儺の長【句】な(儺)の條下を見よ

なは 繩【名】『なふ(綯ふ)と同一の語源より出づ』㊀藁・麻又は棕櫚の毛などの植物の纖維にて、細長く綯(ナ)ひ、物を結び、又は繋ぐ等に用ふるもの。普通、紐よりは太く、綱よりは細きにいふ。〔索〕㊁犬追物の馬場の繩圍。うちはうじ。**はうじ**(幣示)參照。㊂罪人を縛するなは。とりなは。㊃なはいれ、又それに用ふる繩。

繩掛(カケ)る【句】次條の略。謠曲「何(ナニ)ゝて繩掛つた…今日、代官所で、何のために縛られて戻らしやつた」

繩に掛(カケ)る【句】罪あり、又は生捕られなどして、繩にて縛らる。繩附(ツケ)に同じ。

繩にも葛(カヅラ)にもかからぬ【句】「箸にも棒にもかからぬ」に同じ。〔諺語〕

繩にも杓子にもかからぬ【句】前條に同じ。〔諺語〕

繩の際(キハ)【句】繩を掛けられたる身分。繩目にあへる分際。狂言「生捕鈴木」「その時、頼朝、汝、繩のざいに至つて、健氣立(ケナゲ)は入らざることよ」

繩の樞(ソホ)【句】じょうう(繩樞)に同じ。新葉「玉の臺…繩の戸ぼその内に至るまで」

繩を入る【句】田畠を測量するために、繩張をなす。檢地を行ふ。繩入(イレ)をなす。

繩を打つ【句】㊀繩蝮(ハバミ)をなす。繩打をなす。㊁前條に同じ。㊂次條に同じ。

繩を掛く【句】罪人・捕虜などを、繩にて縛る。繩を打つ。

繩を結ぶ【句】結繩(ユヒナハ)の政を行ふ。天木「木をきざみ繩を結ひし古も世をうきものと人やいひけん」

なは 那覇【名】〔地〕琉球國の區。同國第一の都會。沖繩本島の南端、那覇江に跨る。開港場にして、沖繩縣廳の所在地。

なは【名】〔植〕**きのこ**(蕈)を云ふ。〔中國・九州の方言〕

なば 那波【名】〔地〕上野國の舊郡の一。明治二十九年佐位(サヰ)郡と合して、佐波(サハ)郡となる。

なは-あぶみ 繩鐙【名】繩を輪にして鐙とす。

なば-あぶみ 那波鐙【名】木鐙の一種。下野國那波にて作りたるものなるべしといふ。

なは-あみ 繩網【名】繩にて編みつくりたる網。聖德太子繪傳記「宇奧に繩網かけさするからは、縛るに及ばず」

なは-いれ 繩入【名】『繩を入る』を見よ』

けんち(檢地)に同じ。

なはうち 繩打【名】『繩を打つ』を見よ』

なはばり(繩張)㊁に同じ。

なばえ 蘗【名】『苗(ナヘ)生(ハ)の義』木の切株(キリカブ)より生ずる芽。ひこばえ。〔古語拾遺〕夫木「春雨はいや降りにけり河邊なるねぐひの柳なばえするまで」㊁萬「ねぐひの柳なばえして芽ぐみにけりな春を忘れず」

なは-えい 繩纓【名】繩と布又は麻絹とを縒合(アハ)せ、しもの二筋(一筋は黑色、一筋は黃色)にて作りたる纓。諒闇の時に著用せられ、また臣下も重喪の時に著用す。

(いえはな)

なはおび 繩帶【名】繩を、帶として用ひたるもの。二代男「布地の柿染に繩帶して」

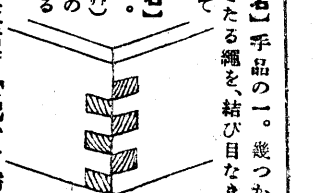
なはーかう 那覇港【名】〔地〕琉球國第一の良港。沖繩島那覇にあり。

なはーかくし 繩隱【名】〔建〕土藏の壁塗にて、卷込みたる棕櫚繩を、漆喰(シックヰ)と土砂とにて塗隱すこと。

なはーからげ 繩紮【名】繩にて縛りからぐること、又そのからげたる物。鷹土產「哀や、帷子も著ぬ死出の旅、繩からげの棺桶、道頓堀の野に遊られて」

なはきり 縄切【名】手品の一。幾つかに切りて結び合はせたる縄を、結び目なき元のままの縄として見するもの。

なはぐみ 縄組【名】器物の接合法の一。その隅の外法(ソトノリ)を弧形として、圖のごとくに組みたるもの。


(みぐはな)

なはくわっしょ 那波活所【名】〔人〕儒者。名は方、字は道圓。播磨國姫路の人。藤原惺窩(セイカ)の門人。初め肥後侯加藤忠廣に、後に紀伊侯賴宣に仕へ、しばしば直言を以て、優禮を加へらる。正保五年歿す。年五十四(一説、五十七)。

なはざいく 縄細工【名】■縄にて物を細工すること、又その物。■嘉永の頃、江戸にて、縄細工の衣裳、蓑を用ひて、街巷を演じ歩きし乞食芝居。

なはささげ 縄豆豉【名】〔植〕じふろくささげ(十六豆豉)を云ふ。〔田舍國の方言〕

なはさば 鯆魚【名】〔動〕いるか(海豚)に同じ。〔古語拾遺〕和名「鯆魚、奈波佐波、大魚名也」

なはさばき 縄捌【名】縄のこぐらからぬやうに、巧みに取扱ふこと。

なはしゃうじ 縄床子【名】縄を用ひて造りたる床子。

なはしろ 苗代【名】稻の種をおろして、苗を仕立つる田。苗生じて、七八寸に至れば、常の田に移し植う。なはしろだ。秧田(ヤウデン)。夫木「なはしろの水汲みにごしけふよりは早苗取るらんかつまたの里」

なはしろいちご 苗代苺・蔣田藨【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する蔓狀の草本。山野に生ず。莖の長さ四五尺。葉は羽狀複葉にて、三箇又は五箇より成り、鋸齒あり。夏の初、五瓣、淡紫色の小花を開き、夏の半、深紅色にして、多漿なる實熟し、味甘酸にして食ふべし。あしくだし。わせいちご。

なはしろがき 苗代垣【名】苗代田の周圍に結ひて、鳥の苗代を害せぬやうにしたる、粗き垣。夫木「しめはふる苗代垣のけしきまで遙へん田面のほどぞしらるる」

なはしろぐみ 苗代茱萸・胡頽子【名】〔植〕『その實の、苗代時に熟するによりていふ』瑞香(ジンチウ)科に屬する常綠灌木。主に山地に自生す。高さ七八尺。葉は渦色又は銀色の鱗片密生し、楕圓形、波狀邊緣にして、質厚し。秋冬の頃、帶白色の合瓣の花を著く。果實は長楕圓形にして、翌春紅熟し、食用に供す。いそぐみ。くこみ。ごゆみ。たうぶぐみ。

なはしろさぎ 苗代鷺【名】〔動〕あまさぎ(尼鷺)に同じ。

なはしろざくら 苗代櫻【名】〔植〕やへざくら(八重櫻)に同じ。

なはしろだ 苗代田【名】なはしろ(苗代)に同じ。

なはしろどき 苗代時【名】苗代を仕立つる頃。ひさご(正秀)「畔道や苗代時の角大師(イツシキ)」

なはしろどり 苗代鳥【名】〔動〕『苗代時に出づるよりいふ』かもめ(鷗)を云ふ。〔近江國の方言〕

なはしろみづ 苗代水【名】苗代にせき入るる水。新古今「雨降れば小田のますらを暇あれや苗代水を空にまかせて」

なはしろをだ 苗代小田【名】なはしろだ(苗代田)に同じ。松風村雨東帶鑑「苗代小田の蛙ごま、さてまた夏に鯰絲の」

なはすだれ 縄簾【名】一條の撰竹に縄を幾すぢも並べ垂れて、簾に代用したるもの、即ち縄暖簾(ナハノレン)と同樣なるもの。風雪、初秋の心動きぬ縄すだれ」「の筋。縄。

なはすぢ 縄筋【名】縄を引延べたる筋。縄へざるもの。あかぜみ。えどぜみ。おしぜみ。〔古語〕和名「蜚蠊。奈波世美。蜚蠊不レ能レ鳴者也」

なはた 菜畠・菜畑【名】次條に同じ。野・雪舟「春近く撚(カラ)積みかふる菜畑かな」

なはだけ 菜畠・菜畑【名】菜を植ゑてある畑。なはた。

なはだすき 縄襷【名】縄を襷となしたるもの。縄の襷。青我虎が磨「あれなふ、在所娘の縄襷、膝の上まで濁水」

なはたづな 縄手綱【名】縄を手綱となしたるもの。縄の手綱。

なはたて 縄楯【名】昔、船戰の時、縄を縄暖簾(ナハノレン)の如くにして、水際まで垂れさげて、船體の楯とせしもの。

なはたらし 縄たらし【名】昔の手品の一。縛したる縄の自然に解くるやうに見するもの。

なはつき 縄附【名】罪を犯し、又は生捕られなどして、縄にて縛られてあること、又その人。日本武尊吾妻鑑「それ囚人に我儘さすな、縄付曳け、守興やれ」

なはづり 縄釣【名】太き幹縄(ミキナハ)に、數條の支縄(エダナハ)を繋ぎ、その端に鉤を著けてする釣魚法。又、延縄(ハエナハ)とて、數十尋乃至數百尋の長さに及ぶものあり。

なはて 縄手【名】■縄のすぢ。なはすぢ。〔古語拾遺〕「碇おろす船のなはては綱くとも命のかぎり絶えじとぞ思ふ」■『縄のごとく一すぢに續きてある道の義。cf.手(テ)』■参照』田の間の路。たんぼみち。〔襲〕夫木「玉鉾の道のなはてのさし柳はや森になれ立ちも宿らん」

なはてみち 縄手道【名】縄手なる道。縄手。續後拾遺「涼しさや駕籠を出でての縄手道」

なはとび 縄飛【名】縄を飛越す遊戲。二人が、綱の兩端を持ちて廻轉すれば、他の一人が、その中に入りて、縄に觸れぬやうに、上下に飛び、又は縄の兩端を己れ一人にて持ち、縄を廻轉せしめつつ、その中間を縫ひて、身體を上下すること。或は横に張りわたしたる縄を飛越すをもいふ。

なはとほし 縄通・索通【名】縄を物に通し貫くこと、又その用に供する道具。

なはとり 縄取【名】人を縛れる縄の一端を手に握り持つこと、又その人。なはもち。太平記「大納言殿縄取に引かへられて、中門へ出でたまふ」

なはならひ 縄綯・索綯【名】■縄を綯ふこと、又その用に供する道具。■さしなは(繩繩)□に同じ。

なはなみ 縄波【名】縄を打つ時に起る波。又、波の如くに縄のうねること。夫木「芳野川河瀬を下す鵜飼舟打つなはなみの寄りやくるらん」

なはぬけ 縄脱【名】縛られてある縄を、はづして遁るること。

なはのび 縄延【名】■延きたる縄の長さ。■『縄を入る』を見よ』段別の高の、檢地よりは餘分にあること、又その高。

なはのり 縄海苔【名】〔植〕海藻の、縄のごとく長きものなるべけれども、實物詳かならず。〔古語〕萬葉「海原のおきつなはのりうちなびき心もしぬにおもほゆるかな」

なはのりの 縄海苔の【枕】■縄の緑語にて、ひく(引く)にかけていふ。萬葉「なはのりの引けば絶ゆとや」■頭韻の同じきより、なは(縄)にかけていふ。萬葉「わたつみの神に生ひたる縄のりのなはかつてのらじ戀ひは死ぬとも」

なはのれん 縄暖簾【名】■縄簾(ナハス)と同樣に造れるのれん。米屋・居酒屋・飯屋・人力車宿などに多し。■一膳飯屋・居酒屋などの異稱。

縄暖簾に倚(モ)れるやう【句】「暖簾と腕押(ウデオシ)に同じ。〔諺語〕

なはばし 縄橋【名】縄を編みて架したる橋。

なはばしご 縄梯子【名】二條の縄を平行せしめ、その所所に棒を横たへて、梯子となしたるもの。一端に鉤をつけ、高きところに繋ぎ垂らして用ふ。縄梯(ナハバシ)。

なはばり 縄張【名】■縄を張り渡すこと、又その渡したる處。播磨年代記「たとへ縄張一重でも、隔を越え」■〔建〕地上に縄を張りて、建設物の位置を定むること。■昔の芝居にて、縄を張りて、見物場を區劃せしこと。後世、縄を用ふる代りに、仕切枡(シキマス)とするに至れり。■わが領分、勢力範圍。(主に博徒などの間にいふ)〔俚語〕

なはばりうち 縄張内【名】■縄張をなしたる區域の内。■前條■に同じ。

なはばりちゃうにん 縄張町人【名】草分(クサワケ)により、土地を得て居住したる町人。

〔徳川時代の京都・大阪の語〕

なはびき 縄引【名】縄にて、圃地の作條を造ること。

なはぶぎやう 縄奉行【名】昔時、検地の時、總奉行の下に在りて、縄入(イレ)の實務に當りたる役。

なはぶし 縄節【名】縄のむすび目。狂言(協人連歌)「このやうな物も入らうかと存じて、鋸を用意致した。まづ縄節を切らう」

なはぶね 縄船・縄舟【名】延縄(ハエナハ)を使用する小形の漁船。漁獲する魚の種類により、鰹(カツヲ)縄船・鮪(シビ)縄船などいふ。

なはまき 縄巻【名】■漆喰(シツクヒ)を盛るために、下地の木材に縄を巻くこと。■しほぶり(鹽鰤)を見よ。

なはーむしろ 縄莚【名】縄にて圓座の如くつくりたるもの。狂言「なはむしろ・がうたう、また、よろづに怖ろし」

なはん 名判【名】名と判と。氏名と判形(ハンギヤウ)と。狂言(胸突)「お手前の手形でおぢやる。一目見せさっしやれて下されい…。その身どもが名判の所を引裂かっしやれて下され」

なはーめ 縄目【名】■縄の結び目。■縄目の辱に遇ふこと。縲紲(ルエイセツ)。枕屑「たとへ縄目に及んでも、又言譯の仕樣もある」

縄目の色革(カハ)【句】伏縄目(フセナハメ)の革。参考保元物語「親大納言、法皇の御前にて戯れて、やあいかに親信、坂東には何事か有ると申されたりけるに、兵衛佐とりあへず、縄目の色革こそ多く候へと答へたり」盛衰記「縄目の色革こそ多く候へ」

なはめがは 縄目革【名】染革の一。筋文の斜にあるもの。甲冑に用ひたり。

なはーもち 縄持【名】なはとり(縄取)に同じ。

なはーやか 眇【貌】そびやか(聳やか)に同じ。〔古語〕字鏡「眇、細長之貌。曾比也加禰、又、奈波也加禰」

なはーやけし【形ク】なはやかなり。〔古語〕

字鏡「儻、長好貌、閑貌、長也。奈波也介志」

なーばら 菜原【名】はたけ(畑)を云ふ。〔筑後國の方言〕

「同じ。

なはーらん 縄蘭【名】〔植〕いはひも(岩紐)に同じ。

なばり 隠【名】隠(カク)ること。かくれ。〔古語〕萬葉「暮(ユフベ)にあひて朝(アシタ)面(オモ)無みなばりにかけながき妹がいほりせりけむ」

なばり 名張【名】〔地〕伊賀國名賀郡にある町。上野町を距る五里。郡役所を置く。

なばりーがは 名張川【名】〔地〕伊賀國にある川。大和國宇陀郡より發する宇陀川と長瀬川との合流。名張町にて相合し、再び大和國に入り、月瀬(ツキセ)を流れ、伊賀川の下流を合はせ、山城國に入り、木津川となる。

なはる【接尾】云云のやうになるといふほどの意。「遅(オソ)なはる」「うご(動)なはる」「たたなはる」「見よ。

なはーる 爲はる【句】なす(爲す)の條下をなばる 隠る【動四自】かくる(隠る)に同じ。

なばり(隠)・なまる(隠る)參照。〔古語〕

なばる 訛る【動四自】なまる(訛る)に同じ。

よこなばる(訛る)參照。〔古語〕

なはーろだ 那波魯堂【名】〔人〕京都の儒者。名は師曾、字は孝卿、通稱は主膳。魯堂は、その號。又、餓視道人とも號す。活所の第二子。岡白駒に學ぶ。程朱の說を宗とし、聖護院宮の侍讀となり、晩年、阿波侯に聘せらる。寛政元年歿す。年六十三。

なばる 胤【名】なまえ(髪)の誤。名義抄「胤、ムマゴ・ナバサ。タネ。ヨワシ。」

なはを 縄緒【名】履物の緒の、縄にてつくりたるもの。縄の鼻緒。差縄緒。盛衰記「受領の鞭を取り、朝夕に貰布(ヌノ)の直垂に縄絃(ヲ)の足駄はきて通ひたまひしかば、京童部(キヤウワラベ)は高平太と云ひて唉ひしぞかし」

なーび 儺火【名】おにやらひ(追儺)に同じとも、さぎちやう(左義長)に同じともいふ。〔古語〕蜻蛉しはすも過ぎにけり…十五日、なびあり。大夫の雜色の男ども、なびすとて騒ぐを聞けば」

なびああたいすう ナピア對數【名】〔數〕なぴやあたいすう(ナピヤア對數)に同じ。

なひーかく 綯掛く【動下二他】■綯ふことを仕掛く。■綯ひて、中途に在り。

なびーかく 靡かく【動自】なびく(靡く)の延。〔古語〕萬葉「たかぎたのくくりの宮に日むかひに行きなびかくをありと聞きて」

なひーかけ 綯掛【名】綯掛くること。綯掛けたること。綯掛けたる物。

なびかし 靡【名】靡かすこと。靡かしたること。靡かす物。靡かしたるもの。

なびかす 靡かす【動四他】■勢又は力を加へて、なびくやうにす。なふ。萬葉「たかしきの玉藻なびかし漕ぎ出なむ君がみふねをいつとかまたむ」■己が勢に屈せしむ。己が意に從ひ靡くやうに仕向く。源氏「さもなびかしつべきけしきにてこそあらめ」同「天の下をなびかしたまへるさま」

なびかふ 靡合ふ【動四自】なびく(靡く)の延。(連用形以外、用例なし)〔古語〕萬葉「吾が王(キミ)の立たせば玉藻の如くころ臥せば川藻の如く靡相(ナビカ)ひ」

なびき 靡【名】■靡くこと。靡きたること。〔古語〕萬葉「指擧(サ)げたる幡(ハタ)の靡(ナビキ)は冬ごもり春去り來れば野(ヌ)べごとに著きて有る火の風の共(ナ)靡ける如く」増鏡「いづくにも、守護といふものの、目代よりはおぞましきをするたれば、武家のなびきのみにてのみ、おぼやけざまの事は、よろづおろそかにぞしける」■指物(サシモノ)(二)の一。幟の風に反りたる如き形のもの。

なびきあふ 靡合ふ【動四自】互に靡く。靡きて寄合ふ。萬葉「明日香(アス)瀬瀬に玉藻は生ひたれどしがらみあれば靡き相(ナビ)かはなくに」

なびきえつる 靡棲【名】指物(サシモノ)(二)の一。

なびきがほ 靡顔【名】靡くやうなる顔つき。靡く如き樣子。なびきざま。源氏「さるべきついであらば、人の御ことになびきがほにてゆるしてんとおぼす」

なびきく 靡來【動變自】靡きて來(ク)。靡き來る。新千載「靡きこし烟はよそになり果てて我が身の方に浦風ぞ吹く」

なびきごころ 靡心【名】靡かんとする心。靡く心。五人女「口上手にていひ綴ければ、おせんも、自然となびき心になりて、もだもだと上氣して」

なびきさま 靡樣【名】靡かんとするさま。靡く有樣。源氏「同じき花のすがたも、草水のなびきざまもことに見なされて」

なびきそむ 靡初む【動下二自】靡くことをなし始む。靡きはじむ。新拾遺「今ぞ憂きかはる契のしらまなびきそめてし心弱さは」

なびきぬ 靡寢【動下二自】靡きて寢(ネ)。寄添ひて寢ぬ。〔古語〕萬葉「玉藻成す靡き寢し兒を深海松(ミル)の深めて思へば」

なびきば 靡葉【名】風などに靡きてある葉。〔古語〕「夫木「夕されば池のはちすのなびき葉に露吹きわたす風ぞ涼しき」■勢に屈す。他の意に從ふ。盛衰記「國國の兵、日に遲ひて多く靡き附きければ」

なびきふす 靡伏す【動四自】靡きて倒れ伏す。玉葉「露重る小萩が末は靡きふして吹返す風に花ぞ色添ふ」

なびきも 靡藻【名】流水などに靡きてある藻。〔古語〕新後撰「思ひ川いつまで人になびきものしたに亂れて逢ふ瀬待つらん」

なびきよる 靡寄る【動四自】靡きて寄添ふ。靡き從ひて賴り來る。源平「今すこしなびきよりたる、いとらうたく」

なびく 靡く【動四自】■風又は水などのために、横に撓み延ぶ。萬葉「青うなばら風浪なびきゆくさくさつつむ事なく舟はやけむ」■勢に屈す。他の意に從ふ。盛衰記「國國の兵、日に遲ひて多く靡き附きければ」

なびく 靡く【動下二他】なびかす(靡かす)に同じ。盛衰記「美濃・尾張へ打越えて、まづ近國を打靡けて、關東へ向ふべき由」一代女「忍び忍びに旦那をなびけて」

なーびと 汝人【代】なんぢ(汝)に同じ。〔古語〕

なひーまず 綯交ず【動下二他】質・色などの異なる物を一緒に綯ふ。綯ひて交ぜ合はす。雲入卦柱屋「まを續ぐみ濁めてなひまぜて、今は我が身のしばり繩」

なひーまぜ 綯交【名】■綯交ずること、又

綯交ぜたる物。天の網島「算筒の小ひきだし明けて、惜しげもなひまぜのひぼつき袋、おし開き」 ㊁芝居にて用ふる鉢巻の一。丸括の緒を細の如くなひたるもの。

なびやあたいすう ナピヤア對數（英 Napierian logarithm）【名】〔數〕『英國人のナピヤア(John Napier)の發見に係るよりいふ』eと稱する不盡數（≒2.71828…）を底邊とする對數。

なびやか【說】 しなひ靡かんとするさま。なよよか。なよらか。しなやか。やはらか。なびらか。〔古語〕 敷妙「その國はふれけん鳥も羽やすみ草の葉がひもすゑなびやかに」

なびーやかし【形二】 なびやかなり。しなやかなり。なびらけし。〔古語〕 草根集「急ぐらん心もさぞな荒れわたる春の田面(タノモ)の雁の常世(トコヨ)を。なびやかしくきこえ候ふ」

なびーらか【說】 なびやかに同じ。〔古語〕 抄石集「若き女房のみめかたちなびらかなりければ」

なびーらけし【形二】 なびやかに同じ。〔古語〕

なーびろう 名披露【名】次條に同じ。

なーびろめ 名廣・名弘【名】藝人の、その藝名を得たる時、その名を世に披露すること。なびろう。 梅暦「その時は、私(ワッチ)も、何とやら信女と名弘をして、極樂の新道(シンミチ)へ世帶を持ちますは」

なびろめーくわい 名弘會【名】名びろめのために催す會。

なふ 納・衲【名】〔佛〕次條に同じ。

なふ 納の袈裟(ケサ)【句】**なふけさ**（納袈裟）に同じ。 榮花「納の袈裟は、もろこしより、このたびの御堂の會(エ)にと心ざして、持(モ)て參れる物どもなれば」

なふ 綯ふ【動四他】『なは（繩）と同一の語源より出づ』撚りあはせて造る。あざなふ。なはなふ。 日本武尊吾妻鑑「藤蔓にてなうたる繩綱輿にはらはらと打かけ」

なふ 萎ふ・痿ふ【動下二自】**なゆ**（萎ゆ）に同じ。あしなへ（痿）參照。〔古語〕

なふ 綯ふ【動四他】『なは（繩）と同一の語源より出づ』撚りあはせて造る。あざなふ。なはなふ。 日本武尊吾妻鑑「藤蔓にてなうたる繩綱輿にはらはらと打かけ」

なふ【助動】 『ずの變化なるぬねより出でし語なるべし』す（不）に同じ。〔東國の古の方言〕 萬葉「あひづねの國をさ遠みあはなはばしぬびにせむと紐結ばさね」 伺「まかなしみぬれば言(ト)にづさねなへば心のをろに乘りてかなしも」

なふ 並ぶ【動下二他】**ならぶ**（並ぶ）に同じ。〔古語〕 萬葉「いかがなべて夜にはここの夜日にはをかを」

なふ 靡ぶ【動下二他】**なびかす**（靡かす）㊀に同じ。〔古語〕 萬葉「めひの野(ヌ)の薄おしなべ降る雪に宿借る今日し悲しく思ほゆ」

なふえ 納衣・衲衣【名】〔佛〕㊀**なげさ**（納袈裟）に同じ。 ㊁**なそう**（納僧）に同じ。

なふーかい 納戒【名】〔佛〕『戒體を身中に納受する義』じゅかい（受戒）に同じ。「たか。

なふがく 納額【名】納付する數額。納むる稅義務者に、その納額を告知する書面。

なふかーみやうじん 苗鹿明神【名】近江國滋賀(シガ)郡雄琴村大字苗鹿に鎭坐せる縣社。祭神は宇賀御玉命（或は天太玉ノ命とも云ふ）延喜の制に小社たり。

なふき 納期【名】租稅などを納付すべき日限。

なふきげん 納期限【名】前條に同じ。

なふきじつ 納期日【名】租稅などを納付すべき期日。

なふきん【名】 **なふきんの轉訛。**

なふきん 納金【名】政府へ納入する金錢。

なふぎん 納銀【名】前條に同じ。

なふきん 納巾（英 Napkin）【名】西洋料理の食後、口のあたりのよごれを拭ふに用ふる布片。「する金額。

なふきんーがく 納金額【名】納金の額。納入

なふきやう 納經【名】來世の福、現世の安穩を願ひ、または死者の冥福を祈りて、寺社に經卷を奉納すること。 眞俗佛事編「六十六部の納經の人、今世甚だ盛んなり。これ北條時政前生納經の事より起れり」

なふきやうーだう 納經堂【名】〔佛〕**きやうざう**（經藏）㊁に同じ。

なふくわい 納會【名】㊀和歌・俳諧・謠曲・長唄・茶の湯・活花・園藝など、遊藝の師匠の、一年の終りに、弟子たちを呼び集めて催す會。 ㊁（商）一箇月の最終の立會(タチアヒ)。（取引所の語）

なふくわん 納完【名】くわんなふ（完納）に同じ。「ること。

なふくわん 納棺【名】死體を棺に納(イ)るにはをかを」

なふくわんーしき 納棺式【名】納棺する時に行ふ儀式。

なふーげさ 納袈裟・衲袈裟【名】〔佛〕『雜多の布帛を補綴して製するよりいふ』袈裟の一種。種種の色の布帛の細片を集めて綴り、裏を附けて厚く作りたる法衣。上臈(ジヤウラフ)の比丘(ビク)の著用するもの。本來、世人の棄てて顧みざる雜多の布帛を縫合はせて作り、更に檀家の施衣を用ひざるを、比丘の十二頭陀行(ヅダギヤウ)の一とし、貪著(トンヂヤク)を離るる功德(クドク)ありとせしものなれど、後には、美しき金襴などを裁ちて作るに至れり。つづり。遠山(トホヤマ)の袈裟。納の袈裟。納衣(ノウエ)。衲(ナフ)。糞掃衣(フンザエ)。

なふーげん 納言【名】『書經の舜典に「命汝作二納言一、夙夜出二納朕命一、惟允」とあり』諫言を納(イ)るること。**なごん**（納言）參照。

なふーこつ 納骨【名】死者の骨を墓所納骨堂または棺などに納めいるること。

なふこつーだう 納骨堂【名】死者の骨を納め入るる堂。骨堂。

なふーごん 納言【名】㊀**なごん**（納言）に同じ。 源氏「なふごんに昇りて、みえんの御心、ふかかるべし」 ㊁太政官の勅任官。その職掌太政大臣に亞ぎ、太政大臣闕席のとき、その事務を代理す。明治四年七月創置、同年八月廢止せられたり。

なふさ（英 Napkin）【名】〔服〕**なふきん**に同じ。

なふさ【名】 次條を見よ。

なふさの馬【句】 **なふさうま**（なふさ馬）に同じ。〔古語〕 類本字鏡「騮、奈夫佐之馬」

なふさい 納采【名】支那にて、結婚の初に、物を納れて、采擇の禮を爲ししこと。**なふちよう**（納徵）參照。

なふさーうま なふさ馬・騮【名】黃に白を混じたる毛色の馬。〔古語〕 伊呂波字類「騮

なふさつ 納札【名】巡禮者の、千社札(ダ)を、その禮拜したる寺社に納め貼ること、又その札。千箇寺參の札。ふだをさめ。をさめふだ。

なふさーなふさ 隨分【副】『伊勢物語より出づ』おふなおふなの詔。千五百番歌合「あはれなるなふさなふさの思ひかなながら人に知れつつ」

なふーし 衲子【名】〔佛〕**なふす**（衲子）を見よ。「じ。

なふーしう 納收【名】**しうなふ**（收納）㊁に同

なふーじつ 納日【名】『書經の堯典篇に「寅餞二納日一」とあり』いりひ。夕陽。落日。

なふーしゆ 衲衆【名】〔佛〕衲袈裟(ケサ)を著たる僧衆。衲衣(ノウエ)の衆。

なふーじゆ 納受【名】㊀**じゆなふ**（受納）に同じ。 ㊁『漢書の王尊傳に「上初納二受章言一」とあり』神佛などが、祈願の旨を受附くること。平家權現すでに御納受あるにこそとて、療治をもしたまはず、まして祈禱をも致されず」

なふーしよ 納所【名】衣服・調度等を入れ置く所。なっしょ（納所）參照。 落葉集「和泉守殿の納所の役人を召して」

なふーしよく 納職【名】『淮南子に「海外賓伏、四夷納レ職」とあり』**こうしよく**（貢職）に同じ。

なふしよーだか 納所高【名】遠江國の榛原(ハイバラ)・豐田・周智(スチ)の三郡、三河國の八名(ヤナ)郡などにて、元來の檢地の石高の稱。

なふす 衲子【名】〔佛〕**なふそ**（納僧）に同じ。

なふぜい 納稅【名】租稅を納付すること、又納付すべき租稅。納租。

なふぜいーかいきふーせんきよ 納稅階級選擧【名】〔法〕『獨 Steuerklassenwahl』普通選擧の一。選擧人を納稅額の多小により數階級に分ちて行ふもの。「額。

なふぜいーがく 納稅額【名】納稅の額。稅

なふぜいーき 納稅期【名】次條に同じ。

なふぜいーきげん 納稅期限【名】租稅を納付すべき期間。納稅の期限。納稅期。

なふぜい-ぎむ 納税義務【名】租税を納付すべき義務。

なふぜいぎむ-しゃ 納税義務者【名】納税義務を有する者。

なふぜい-ぐわんしよ 納税願書【名】貨物の通關を求むるために、稅關に差出す願書。稅關は、これに記載せる貨物を檢査し、有稅品に對しては關稅を納付せしむ。

なふぜい-くわんりにん 納税管理人【名】『納稅事務の管理人の義』納稅義務者の、他出その他の事故によりて、自ら義務を履行する能はざる時、代理して納稅する者。

なふぜい-こくちしよ 納税告知書【名】收稅官吏が、金額・納付期日及び場所を記載して、納稅者に納稅義務の履行を命ずる書面。

なふぜい-しかく 納税資格【名】納稅額を要件として生ずる、或資格。

なふぜい-しや 納税者【名】租稅を納付する者、又それを納付すべき者。納稅人。

なふぜい-ち 納税地【名】租稅を納付すべき官公署の所在地。「稅者」に同じ。

なふぜい-にん 納税人【名】なふぜいしや(納稅者)に同じ。

なふぜい-ほしよう 納税保證【名】納稅義務者が、納稅義務履行の擔保として、一定の財産を政府に提供すること。卽ち物上保證の一。

なふぜい-ほしようにん 納税保證人【名】納稅義務者のために、政府に對して、その納稅義務の履行を保證する人。

なふぜい-ほしようぶつ 納税保證物【名】納稅義務者が、納稅保證のために政府に提供する擔保物。

なふ-せん 納錢【名】納めたる金錢。納金。

なふせん-いちしゆう 納錢一衆【名】『一衆は市衆の義にて、市店の事に關したるよりいふとぞ』室町幕府の職制の一。政所(マンドコロ)の被管にて、洛外の土倉(ウサ)役錢・酒屋役錢等の徵收、質物の沙汰、及び諸大名の禮錢、または國役錢の收納等の事を掌り、納錢藏の預をなししもの。鎌倉幕府にも、これに相當する職制ありて、納錢方と呼び、室町幕府時代にも、納錢方をも用ひたり。おくら。御倉納錢方。倉法師。

なふせん-かた 納錢方【名】前條を見よ。

なふせん-くら 納錢藏【名】納錢方にて、その取扱ふ金品を納め置きし藏。「稅。

なふ-そ 納租【名】租稅を納付すること。納

なふそう 納僧【名】〔佛〕■一納衣を著して、天下に遊方する僧。■『前項の事を爲す僧は、禪僧に多きよりいふ』ぜんそう(禪僧)に同じ。

なふた 《獨Naphtha》【名】〔化〕揮發油・輕油等數種の鑛油及び木材を乾餾して得る油狀物質等の總稱。又、燈用石油の原油なる石腦油をもいふ。なふさ。

なふだ 名札【名】■姓名を記したる札。卽ち名簿(メイボ)・名刺(メイシ)・門札(モンサツ)などの何れにもいふ。一代男「女に切らせたる黑髮、八十三までは、名札を讀みぬ。その跡は計ふるに暇無し」■厚紙の一種。

なふだ-いれ 名札入【名】めいしいれ(名刺入)に同じ。

なふたりん 《獨Naphthalin》【名】〔化〕コオルタアルの分餾によりて得る一種の炭化水素。光輝ある白色の鱗片狀結晶を成し、軟くして、やや揮發性あり。特異の臭氣を發し、點火すれば、煤多き焰を揚げて燃え、水及び炭酸瓦斯を生ず。細菌を死滅せしめ、下等動物には烈しき毒作用を呈するため、殺蟲劑として賞用せられ、又その多量は、染料の製造に用ひらる。

なふ-ち 納地【名】土地を納め入るること、又、納め入れたる土地。

なふ-ちよう 納徵【名】『なふさい(納采)を見よ』支那にて、結婚の約束の證として、物を贈りしこと。納幣。

なふとおる 《獨Naphthol》【名】〔化〕ナフタリンと硫酸とを熱し、炭酸ナトリウム・苛性ナトロン等にて處理して得る有機化合物。白色にして光澤ある鱗片狀の結晶を成し、石炭酸に類似したる臭氣と味とを有し、揮發しやすし。防腐消毒藥として、皮膚病に用ひらるることあれども、主として

は染料の製造に供せらる。

なふとく 納得【名】なっとく(納得)に同じ。

なふにふ 納入【名】をさめいること。受納收入すること、又差出さしむること。

なふにん 納人【名】納むる人。納むべき人。納付人。

なふ-のけさ 衲の袈裟【句】〔佛〕なふ(衲)の條下を見よ。

なふはい 納盃・納杯【名】酒宴を終ふること、又その終ふる際に受け、或はさす盃。

なふふ 納付【名】官府にをさめいること。納入すること。

なふふ 納布【名】古貴、運上として上納せし布。東鑑「納布九反」「務。

なふふぎむ 納付義務【名】納付すべき義務。

なふふ-にん 納付人【名】納付する人。納付すべき人。納人。

なふへい 納幣【名】■ほうへい(泰幣)に同じ。■『禮記の雜記下篇に「納幣一束、束五兩、兩五尋」とありて、鄭玄の註に「納幣謂二昏禮納徵一」と見ゆ』なふちよう(納徵)に同じ。

なふ-ほん 納本【名】見本として、書籍を官府にをさむること、又その書籍。

なふまい 納米【名】米を上納すること、又、上納する米。

なふ-まう 納帽・衲帽【名】〔佛〕『納は納衣(ナフエ)の納に同じ』布帛の細片を集め綴りて作りたる帽子(ボウス)。「じ。

なふ-まく 納莫【感】〔佛〕なむ(南無)に同

なふみ 名書【名】みやうぶ(名簿)に同じ。〔古語〕

なふ-もつ 納物【名】納入する物。上納する物。をさめもの。「同じ。

なふやく-ぐら 納藥倉【名】のぐら(野倉)になふら 魚群【名】海上に群りたる魚。なぐら。〔伊豆國・駿河國邊の漁夫の話〕

なふられ-もの 嬲られ者【名】他に嬲らるる者。なぶりもの。

なふり【名】(表ぶり机)の類。

なふり 嬲【名】嬲ること。

なふり-ぎり 嬲切【名】嬲者(モノ)にして切ること。 盛華記「鋸にて、なぶり切に頸を切ったりとも申す」

なふり-ごろし 嬲殺【名】なぶり殺すこと。 雪山堆「却りてきやつをたぶらかし、なぶり殺に退治せん」

なふり-ごろす 嬲殺す【動四他】嬲りて殺す。嬲切(ナブリ)にして殺す。

なふり-ちん 嬲賃【名】嬲りたる償として與ふる物。若風俗「長德寺四つ五つ蒔散して、先程よりのなぶり賃に、これ紅(クレナヰ)のばっと賜はりけるにぞ」

なふり-もの 嬲者【名】嬲る材料とする者。嬲らるる者。なぶられもの。 心中萬年草「この糸之助が居る內は侮らせはせまいが、追付お暇申請け、國へ歸ったその跡では、高野一山の嬲者」

なふりやう 納涼【名】『涼氣を納(イ)るる義』すずむこと。すずみ。ゆふすずみ。 著聞「治部卿兼定、滋野井(シゲノヰ)の泉にて納涼せられけるに」

なふる 嬲る【動四他】■他人を、戲れに苦しましむ。愚弄す。嘲戲す。 夫木「戀死なば戀ひも死ねかしなぞも斯くこやのいけすになぶられて經る」 女裁油地獄「女子と思うてなぶらっしやると、膝立てて、わめくぞや」■もてあそぶ。いぢる。〔京都・大阪の語〕 五人女「前髮をなぶりて」嬲れば、兎も食附(クヒツ)く【句】溫順なる者も、愚弄すれば終には憤怒す。〔諺語〕 世話草「ナブレバ兎モクヒツク」

なへ 苗【名】■草木を萌え出でしめ、栽培地に移植するまで一定の期間、特別に仕立つるもの。狹義には、草本性のにいふ。なへぎ。なへくさ。■稻の芽ばえ。

なへいろ(苗色)の略。

なへ 敢【動他】あふ(敢ふ)の未然形なるあへの轉訛。〔東國の古の方言〕 萬葉「さへなへぬみことにあればかなしいもが手枕離れあやに悲しも」

なへ【接】なべ(並)を見よ。

なへ 鍋【名】『肴(ナ)を煮る器(ヘ)の義』鐵・銅・眞鍮・アルミニウム等の金屬にて造り、又、陶製にて、底淺く、上部開き、木製の蓋

あり、又鉉(ツル)若しくは柄を取附けて、物を煮るに用ふる器。土器製なるは、土鍋(ツチナベ)と呼ばる。

鍋に入れて煮て食(タ)ふ【句】娘を娼妓に賣りたる金にて生活す。〔俚語〕

鍋に耳あり【句】「德利に口あり、鍋に耳あり」を見よ。

鍋の尻【句】なべじり(鍋尻)に同じ。一茶「鍋の尻干し並べたる雪消(ユキゲ)かな」

鍋の三足(アシ)【句】『平常、炊爨(スヰサン)にのみ從事し、鍋に三箇の足あることなどはよく知れども、その他の世事には通ぜぬ意』世間見ずの譬にいふ。〔諺語〕

なべ 並【接】云云と殆んど同時に。云云にともなひて。なべに。(一說に、なへと清みて訓むべしと)〔古語〕萬葉「けさのあさけかりがね寒く聞きしなべ野邊の淺茅ぞ色づきにける」同「秋風の山吹の瀨のひびくなべ天雲かけり雁わたるかも」

なべ-あな 鍋穴【名】〔地〕『英Pot-hole』岩石に穿てる圓き穴。小石などの流水の爲に轉轉して下る際、岩面に當りて生ず。

なべ-いかけ 鍋鑄掛【名】鍋を鑄掛くること、又それを業とする人。

鍋鑄掛が釣鐘(カネ)の請合(アヒ)【句】身に相應せぬことを引受くる譬。〔諺語〕

なへ-いちご 苗莓【名】〔植〕くさいちご(草莓)を云ふ。〔伊豫國の方言〕

なへ-いろ 苗色【名】染色の一。うすき萌黃色なりとも、青く黃がかりたるをいふともいへり。なへ。

なべ-うり 鍋賣【名】鍋の類を賣る商人。七一職人歌合「鍋賣。播磨鍋買はしません。釜も候ふぞ」

なべ-かうじ 鍋柑子【名】〔植〕くろつばら(黑つばら)を云ふ。〔下總國の方言〕

なべ-かづき 鍋被【名】なべかぶり(鍋被)(一)に同じ。

なべ-がね 鍋鐵【名】鍋釜などを鑄るに用ふる鐵。づくてつ。生鐵。

なべ-かぶり 鍋被【名】(一)「筑摩(マク)の鍋被」を見よ。(二)昔時、顏面の上部より頭に掛けて黑色を呈し、黑色深きものは死に至れりといふ、一種の傳染病。(三)しらくもあたま(白雲頭)に同じ。(四)〔動〕なべかむり(鍋被)(二)に同じ。

なべ-かま 鍋釜【名】鍋と釜と。鍋や釜。供讀古選(乙由)「鍋釜の煤まで掃いて別(ワカ)れかな」

鍋釜の相住(アヒスミ)【句】水仕奉公をなすこと。

なべかま-まつり 鍋釜祭【名】なべまつり(鍋祭)に同じ。

なべ-かむり 鍋被【名】〔動〕『頭上の黑色なるによりていふ』(一)燕雀(エンジャク)類に屬する小鳥。形、頰白に似、頭部は黑く、背部は褐色の地に黑色の斑紋散在し、腹部は淡褐色または白色なり。北地に產す。こじょうん。(二)せぐろごゐ(背黑五位)に同じ。

なべかむり-にっしん 鍋被日親【名】〔人〕にっしん(日親)を見よ。

なべかむり-やま 鍋冠山【名】〔地〕信濃國安曇(アヅミ)郡にある山。犀川と梓(アヅサ)川との分水嶺。高さ八〇五二尺。

なへ-ぎ 苗木【名】〔地〕美濃國惠那(エナ)郡にある町。木曾川の沿革。飛驒街道の一驛。遠山氏の舊藩地。

なへぎ-いし 苗木石【名】〔鑛〕『Naegite』美濃國苗木地方にのみ產する一種の鑛物。正方晶系に屬し、柱狀又は扁平なる球狀をなす。多くは暗綠色にして、脂肪光澤を有し、斷口は介殼狀をなし、硬度七·五、比重四·一、ウラニウム·タンタリウム等、種種の稀有土金屬を含み、ジルコンに類せり。錫の砂鑛に混じて出づ。

なへぐ 蹇ぐ【動四自】『なゆ(痿ゆ)→なやむ(惱む)等に關係ある語とすれば、正しくはなえぐの假名なるべし』足に病ありて、歩行に艱む。足、痿(ナ)ゆ。〔古語〕和名「蹇、訓二阿之奈閉一此間云二那閉久一行不正也」盛衰記「習はぬかち道なれば、なへぐなへぐその日は守山(モリヤマ)の宿に著き」

なへ-くさ 苗草【名】苗なる草。草の苗。

なへ-くさらし【名】〔動〕あまだひ(甘鯛)に同じ。

なべ-げり 鍋鳧【名】〔動〕いぬげり(犬鳧)に同じ。

なへ-どえ 苗肥【名】草肥(クサゴエ)の一種。紫雲英(ゲンゲ)·苜蓿(ウマゴヤシ)·蕎麥(ソバ)などのごとき、特に育てたる植物を用ふるもの。

なべ-どふ 鍋鶴【名】〔動〕鶴(ツル)の一種。大いさ、普通のよりやや小さく、羽毛は全身暗黑色乃至黑色にして、金屬光澤を帶ぶ。滿洲·北支那に多く、稀には我が國にも渡來す。

なべ-しぎやき 鍋鴫燒【名】『しぎやき(鴫燒)を見よ』茄子を輪切にして、油にていため、その中に味噌·醬油·砂糖などを加へて煮たる食品。なべしんやき。なべしん。

なべ-しま 鍋島【名】(一)〔地〕肥前國佐賀郡にある村。佐賀市の西北郊。鍋島氏の最初に住せし地。(二)姓氏の一。藤原秀鄕の裔。龍造寺と同族。加賀守直茂豐臣秀吉に屬し、關ヶ原役には、その子勝茂東軍に屬す。その子孫代代佐賀城に居り、明治維新の際、直正大業に翼贊し、侯爵に列せらる。鹿島の鍋島·小城(オギ)の鍋島·蓮池の鍋島等は皆その支流なり。(三)なべしまだんつう(鍋島段通)の略。

鍋島の猫騷動(ネコサウドウ)【句】なべしまさうどう(鍋島騷動)に同じ。

なべしま-がき 鍋島柿【名】次條の略。

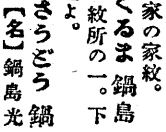
なべしま-かきいろ 鍋島柿色【名】染色の一。代赭に墨を加へたるが如き、黑みがちなる焦茶色。なべしまがき。

なべしま-かつしげ 鍋島勝茂【名】〔人〕肥前國佐賀の城主。關ヶ原の役、初め西軍に黨し、後、東軍に與す。島原の賊を討つて功あり。明曆三年卒す。年七十。

なべしま-かんそう 鍋島閑叟【名】〔人〕佐賀藩主。齊直(ナリナホ)の子。幼名は眞丸、德川將軍家齊の女を娶り、家齊の片諱を賜はりて齊正と名づけ、明治維新後、直正と改む。嘉永年間、海岸の警備に心を盡し、又、公武の調和に力を致す。明治二年開拓使長官、大納言に任じ、同四年薨ず。年五十八。

なべしま-ぎやうえふ 鍋島杏葉【名】紋所の一。肥前國舊小鍋藩の鍋島家及び舊公家の押小路家の家紋。

なべしま-くるま 鍋島車【名】紋所の一。下の圖を見よ。



なべしま-さうどう 鍋島騷動【名】鍋島光茂、盲人龍造寺又七郎を壁に塗込めたりといふ傳說に、江戶虎の門の鍋島邸にて、怪猫家臣角田要助の母と化し、終に要助の爲に殺されたりといふことなどを作り合はせし假作談。脚本にては、瀨川如皐の花野嵯峨猫雛稿(ハナノサガノネコノヒナガカウ)を初とす。

なべしま-だんつう 鍋島段通【名】肥前國にて織出す綿(メン)段通。天保二年支那製を摸して織始めたるもの。なべしま。

なべしま-なほまさ 鍋島直正【名】〔人〕なべしまかんそう(鍋島閑叟)を見よ。

なべしま-なりまさ 鍋島齊正【名】〔人〕なべしまかんそう(鍋島閑叟)を見よ。

なべしま-もん 鍋島門【名】『鍋島侯の屋敷、その附近にありしよりいふ』やましたもん(山下門)に同じ。

なべしま-やき 鍋島燒【名】ありたやき(有田燒)に同じ。

なべ-しん 鍋鴫【名】次條の略。

なべ-しんやき 鍋鴫燒【名】なべしぎやき(鍋鴫燒)の訛。

なべ-じり 鍋尻【名】鍋の下部の外側。

鍋尻を燒く【句】(一)夫婦となりて、世帶を營む。(二)臺所の事に世話を燒く。

鍋覗(ナベノ)をなす。

なべじり-もち 鍋尻餠【名】ぼたもち(牡丹餠)を云ふ。〔羽後國秋田の方言〕

なへ-しろ 苗代【名】なはしろ(苗代)に同じ。

なへしろがは-やき 苗代川燒【名】薩摩燒の一種。薩摩國日置(ヒキ)郡下伊集院村苗

代川にて焼くもの。産額多からず。

なべすう 並据う【動下二他】ならべて据う。つられて据う。ゐならばしむ。〔古語〕拾遺「ここらめでたき人をなべすゑて御覧ずるこそ、いと羨しけれ」

なべずみ 鍋墨【名】鍋尻に附きたる煤烟。蜻蛉日記「腰に一本薬研鍛、頬に鍋墨髭人参、煎じつめたる奉公人」

なべせん 鍋銭【名】鍋鐵(ナベ)にて鑄たる銭。寛永通寶の中にて、最も下質なるもの。

なべぞこ 鍋底【名】鍋の底。鍋の内部の底の方。

なへだけ 苗竹【名】〔植〕『弱竹(ナヨタケ)の轉なるべし』なりひらだけ(業平竹)に同じ。

なべちゃうまげ 鍋町髷【名】女の髪の結ひ方の一。丸髷の一種にて、圖のごとき形のもの。

(なべちゃうまげ)

なべづる 鍋弦【名】■鍋に附けたるつる。■にじ(虹)を云ふ。〔尾張國の方言〕

なべづる 鍋鶴【名】〔動〕鶴の一種。體長三尺餘、全身灰色にて、ただ頭部と頸部とのみ白色、嘴は黄色なり。主なる産地は西比利亞滿洲にして、日本・支那に越冬す。くろづる。

なべて 並べて【名】すべて。おしなべて。概して。〔古語〕古今「梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれれば」

並べてならず【句】普通にあらず。なのめならず。〔古語〕榮花「なべてならず、いみじうおはします」方丈「さまざまの御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にそのしるしなし」

並べてにもあらず【句】前條に同じ。〔古語〕榮花「なべてにもあらぬ別の悲しさ」

並べての【句】普通の。なみなみの。〔古語〕源氏「あひ見ずてしのぶる頃の涙をもなべての秋の時雨とや見る」盛衰記「なべての馬の渡すべき川にあらず」

なべてつくわ 鍋鐵火【名】飲食に奢りて産を破りなどすること、又その人。なべどら。

なへどこ 苗床【名】苗■を仕立つる場所。

なべどら 鍋ごら【名】なべてつくわ(鍋鐵火)に同じ。

なべとり 鍋取【名】■昔、臺所にて、鉉(ツル)の無き鍋又は釜の類を竈の火の上より取りはづすとき、手の熱からぬために、兩手に持ちて用ひしもの。藁にて作り、小さき扇形をなして、紐にて繋ぎたるものなりしが、後には、形變りて、草鞋(ワラヂ)・足半(アシナカ)やうのものともなり、又、布にても作り、兩手に一つづつ持ち、鍋・釜の類の縁を持つやうにせり。かまとり。■『形の似たるよりいふ』おいかけ(緌)の異稱。〔俚語〕太平記抄「老驅とは下下の者の鍋取といふやうな物ぞ」假名字例「おいかけ緌。冠の具。俗、鍋取といふ」■なべとりかづら(鍋取公家)の略。

(なべとり■)

なべとりかづら 鍋取葛【名】〔植〕えびづる(蘡薁)を云ふ。〔阿波國の方言〕

なべとりくげ 鍋取公家【名】■緌(カケイ)ある冠を著くる公家衆(シュ)。〔俚語〕■くげしゅ公家衆)を嘲りていふ語。松風村雨東帰「鍋取公家の子は產めど、後腹やめずの片われ船」萬葉千紅「春の野に鍋取公家も立出でて引くや子の日の松の牛蒡根」

なべな 山芹菜・續斷【名】〔植〕山蘿蔔(ヤマダイコン)科に屬する多年生の草。地中に塊莖あり。地上莖は高さ三四尺に達す。葉は卵形・楕圓形または長楕圓形にして、鋸齒あり。夏季、碧紫色の花を著く。中部地方の山地に自生す。

なへに 並に【接】次條を見よ。

なべに 並に【接】なべ(並)に同じ。(一說に、なにと清みて訓むべしと)〔古語〕萬葉「かりがねを聞きつるなべに高圓(タカマド)の尾の上の草ぞ色づきにける」榮華「びんなきなべに惡(ワロ)くしたらばやさしからん」

なべのぞき 鍋覗【名】臺所の事を、下女などに任せず、世話を焼きすぐること。「鍋尻を焼く」參照。

なへはた 苗畠・苗畑【名】苗を仕立つる畠。なへばたけ。苗圃。

なへばたけ 苗畠・苗畑【名】前條に同じ。

なへはむし 苗葉蟲【名】〔動〕あをむし(青蟲)に同じ。名義抄「蝮蛉、ナヘハムシ、アヲムシ」

なべはやま 鍋場山【名】〔地〕信濃國下高井郡と越後國南魚沼郡の境に聳ゆる山。山頂に平地ありて、方一里餘草茂生し、宛然稻田の如しといふ。高さ六九六三尺。

なべふた 鍋蓋【名】■鍋のふた。侯後(孤兒)「鍋蓋のけばけばしさよ年の暮」■漢字の「亶」・「文」・「亦」などの上部なる「亠」の俗稱。

なべぶたなり 鍋蓋形【名】一定して變化なき有樣。形式的なること。おざなり。

なべぶたののじ 鍋蓋の字【名】普通の平假名なる「の」の字。つゞつきののじ(杖突の字)參照。〔俚語〕

なべぶたやま 鍋蓋山【名】『山は相撲取の名に擬していふ』力の弱き相撲取(スモトリ)の、常に仰向けに投倒さるるを嘲りていふ語。

なへま 苗間【名】なはしろだ(苗代田)を云ふ。〔甲斐國の方言〕

なべまく 並巻く【動四他】ならべて巻く。〔古語〕萬葉「かなしいもをゆづかなべまきもころをのことしいはばいや勝たまに」

なべまつり 鍋祭【名】「筑摩(マツマ)の鍋祭」を見よ。

なへん 那邊【代】どの邊(ヘン)。どこいら。

なべや 鍋屋【名】鍋を鑄造し、又これを賣る人、又その家。

なべやき 鍋燒【名】■鳥肉・魚肉などに野菜などを交ぜ、鍋に入れたるまま煮ること。續膝栗毛「鍋燒の鯉の自(ジ)ばいり山盛にして、刺身の代りに、二朱一つ膳に附けて出しやれとわめく」■次條の略。

なべやきうどん 鍋燒饂飩【名】饂飩を、小さき土鍋にて煮たるもの。多くは、冬の夜、街上に賣りあるく。

なべやつばち 鍋八撥【名】能(ノウ)の狂言の一。羯鼓賣(カッコウリ)と淺鍋賣(アサナベウリ)と、新市に互に第一の棚を占めんとて爭ひ、目代出來りて曲直を判ぜんとし、終に二人の相舞となり、鍋賣鍋を破りて、負となる事を作れるもの。古稱、羯鼓炮烙(カッコウホウラク)。

なべゐる 鍋類【名】牛鍋・鳥鍋・寄鍋(ヨセナベ)・蛤鍋などの如く、鍋にて煮ながら食ふものの總稱。

なべわり 鍋破・黄精葉釣吻【名】〔植〕百部(ビャクブ)科に屬する多年生の草。地中に横走せる根莖ありて、鬚根を生じ、地上に七八寸許の莖を出す。葉は卵形又は長楕圓狀披針形、六月頃に內外各二瓣づつより成る紫黑色の下垂せる花を開く。果實は卵形の蒴類(トウルイ)にして、熟すれば裂開して種子を懸垂す。我が國中部の山陰に生ず。有毒なりといふ。きちがひぐさ。

なほ 直【副】なみなみに。世のつねに。〔古語〕拾遺「咲きし時なほこそ見つれ桃の花散ればをしくぞ思ひなりける」

直あらじ【句】ただにてはあらじ。なほざり。〔古語〕源氏「なほあらじに弘徽殿の御殿に立寄りたまへば」

直有り【句】ただにてあり。徒爾にてあり。空しくあり。默してあり。〔古語〕續紀「默(モダ)有らむとすれども」

直も有り【句】前條に同じ。〔古語〕大和「なほもあらず、この家にゐて來て、壁を隔てて住みて」

なほ 猶【副】■それにても、やはり。まだ。萬葉「たびごろもやつき重ねていぬれどもなほ膚寒し妹にあはねば」■その上に。いよいよ。ことに。なほなほ。なほさら。一層。〔尙〕後撰「をみなへしにほへる秋の武藏野はなほ睦しきかな」■丁度。あだかも。(但し、漢籍の訓讀及び漢文直譯體の文にいひ、下に「如し」といふ語を伴ふ。例へば、「猶子」は「なほ子のごとし」と訓む類にて、「猶」の字を、「なほ」と「ごとし」との二度に訓むなり)

猶の事【句】■一層の事。なほさらの

事。㊁一層。なほ。

猶以て【句】なほ(猶)㊀㊁に同じ。

猶以ての事【句】「猶の事」に同じ。狂言「松楠」「某が煉って進ぜう。それは、なほもっての事ぢや」

なほ-あひ【名】なほらひ(直合)に同じ。

建武年中行事「直合の御鋏みき參りぬれば」

なほえ-かねつぐ【名】直江兼續(ナホエカネツグ)「人」上杉家の老臣。本姓は樋口。直江與兵衛信綱の後を嗣ぎて山城守と稱す。石田三成と結び、景勝に勸めて兵を擧げしむ。關ヶ原の役後、家康、景勝を米澤三十萬石に封じ、その内六萬石を兼續に分與す。兼續自ら一萬石を取り、その餘を將士に頒つ。文學に通ず。元和五年卒す。年六十。

なほえつ 直江津【名】「地」越後國中頸城(ナカクビキ)郡にある町。荒川河口の左岸。鐵道信越・北陸兩線の交叉點。日本海に面す。

なほえばん 直江板・直江版【名】直江兼續が銅の活字を用ひて、慶長年間に出版したる書籍。要法寺版。

なほ-か 猶か・尚か【副】『かは感嘆の意の助辭』なほ(猶)㊀㊂に同じ。萬葉「かくばかり雨の降らくにほととぎす卯の花山になほか鳴くらむ」

なほ-かし 猶かし・尚かし【副】前條に同じ。今宮心中「違(ヂ)へば違ふ現世さへ、未來は、なほかし覺束なや」

なほかた 直方【名】「地」筑前國鞍手(クラテ)郡にある町。嘉麻(カマ)川と呼ぶ所に位す。筑豐炭田の中央要部を占め、郡役所あり。

なほ-さら 尚更・猶更【副】その上に。いよいよ。殊にまた。なほ。

なほ-ざり 等閑【貌】深く心を用ふることなきさま。かりそめ。おほかた。姿鑑「なほざりなる御心かな」十訓「何ばかりの事かはと、なほざりがてらに言ひいでたりつるを」續拾遺「別れけん昔にあはぬ涙こそなほざりならず悲しかりけれ」

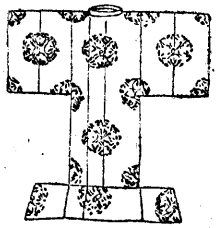
なほざり-ごと 等閑事【名】等閑になす事柄。眞心にあらずして爲す事柄。源氏「心とまりぬべきも、強ひて、なほざりごとにしなして」

なほざり-ごと 等閑言【名】等閑にいふ語。眞心より出でざる語。源氏「すきずきしきなほざりごとを打出で、あざればまんも」

なほざり-に 等閑に【副】深く心を用ふることなく。かりそめに。大方に。千載「なほざりに三輪(ミワ)の杉とは教へおきて尋ぬる時はあはぬ君かな」

なほざる 等閑る【動四自】『なほざり(等閑)の語尾を變化せしめたるもの』深く心を用ひずに行ふ。物事をゆるがせにす。

なほし 直衣【名】『直はなほびと(直人)などのなほにて、禮服・朝服などならぬ唯の服の義。ノオシと發音す』昔の天皇・朝臣等の平常の服。形、袍に似て、やや短く狹く、冬のは、地質はしじら綾にて、色は白、蝶の丸の摸樣あり。紫(若年の時は濃きを用ひ、後、次第に淡くす)の平絹の裏を附け、夏のは、紗の類を用ひ、裏を附けず、三重襷(ダスキ)の摸樣あり。これを著用する時は、冠の外、烏帽子(エボシ)を被ることもあり(冠を用ひたる時の姿は、冠直衣といひ、烏帽子の時のは、烏帽子直衣といへり)、又、石帶は用ひず、直衣と同じ織物の帶(夏のは單、冬のは裏あり)を締め、袴も指貫(サシヌキ)にて事濟む等、すべて略式のものなれば、これを著けて參內し得るは、上達部(カンダチベ)の人に限り、且つ冠を被るを要し、勅許を得たる上にての事なりき。すそつけのころも。雜袍。ひきなほし(引直衣)參照。源氏「なほしにて、かろらかなる御よそほひどもなれば」



(しほな)

直衣束帶【句】束帶して、袍の代りに直衣を著くること。江次第「地下者、直衣布袴、或直衣束帶」

直衣の御衣(オンゾ)【句】なほし(直衣)に同じ。姿鑑「直衣の御ぞどもを奉りたまひて」

直衣の位【句】特に直衣にて參內することを許されたる地位。姿鑑「心にいれて殘す手なくつかうまつらせたらば、なほしの位たまはせんとのたまふ」

直衣の衣(コロモ)【句】なほし(直衣)に同じ。和名「綿襖、須曾豆介乃古路毛、一云、奈保之能古呂毛」

直衣の布袴(コフコ)【句】直衣に下襲(シタガサネ)、指貫(サシヌキ)を著て、劍を帶び、笏(シャク)を持ちたる姿。

直衣を許(ゆる)す【句】直衣を著て參內するを得る由の勅許を受く。

なほし 直【名】㊀なほすこと。㊁せったなほし(雪駄直)の略。物類「窓下の藝者なほしの娘なり」㊂なほしざけ(直酒)の略。なほしぼし(直灰)參照。㊃ふくろなほし(袋直)の略。㊄なほしみりん(直味醂)の略。㊅江戸時代に、遊客が、一定の遊興の時間の後、更にその時間を延ばすこと。なほしざかな(直肴)參照。春花五大力「今夜は、ここのなほしにまでしてあるものを」㊆あづさみこ(梓巫)を云ふ。「中國の方言」

なほし 直し【形二】㊀ゆがみなし。眞直なり。曲ることなし。ただし。(物にも心にもいふ)續紀「明(カ)き淨(キヨ)き直き誠の心もちて」㊁「いとなはき木をなん、おし折りためる」㊂亂雜ならず。平(タヒ)らされてあり。姿あら畠などいふものの、土もろるはしうなほからぬに」㊃なみなみなり。普通なり。なほなほし。源氏「眼も鼻もなほしとおぼゆるは、心のなしにやあらん」

直き木に曲れる枝【句】すべての物は一樣に律し難き譬。後撰「なほき木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵をいふがわりなさ」

直き事絃(イト)の如し【句】『琴に張りたるいとの、直くして、曲らぬが如き意』正しく眞直なる譬。

なほし 直し【形二】なほし(直し)㊀に同じ。古語「おのづからなほしくなる心なり」十訓「おのづからなほしくなる心なり」

なほ-し 猶し・尚し【副】『こは強めの助辭』

前條に同じ。萬葉「橘は花にも實にも見えつれどもいや時じくになほし見がほし」

なほし-がみ 直紙【名】美濃紙の一種。大直・中直・小直等の種類あり。

なほし-さうぞく 直衣裝束【名】『なほしはノオシと發音す』直衣を著ること、又その裝束。姿鑑「狩衣さうぞくをして、直衣さうぞくは持たせて」

なほし-ざかな 直肴【名】江戸の遊里にて、直(ネ)の時、肴を倍にして再び出だししこと、又その肴。

なほし-ざけ 直酒【名】腐敗に傾きたる酒又は下等なる酒などに加工して、普通の品と同等の香味を有せしめたるもの。なほし。

なほし-すがた 直衣姿【名】『なほしはノオシと發音す』直衣を著たる姿。姿「細やかに、清げなる公達(キンダチ)のなほしすがた一

なほし-たつ 直立つ【動下二他】なほす(直す)を強めていふ語。古語「源氏「なほしたてたまひて、み心涼しく」

なほし-どころ 直所【名】直すべき點。なほすところ。源氏「なほし所なく、誰れも物したまふめれば」

なほし-はじめ 直衣初【名】『なほしはノオシと發音す』直衣を著て參內する勅許を蒙りたる人の、始めてこれを著ること。なほし(直衣)及び「直衣を許(ユ)る」參照。盛衰記「內大臣、直衣始にて、出仕せられけり」

なほし-ばひ 直灰【名】『なほし(直)㊂參照。酒の腐敗を直すに用ふる灰。石灰一斗と豐後灰四升とを熬りて製す。

なほし-びな 直衣雛【名】『なほしはノオシと發音す』直衣を著たる雛人形の、直衣狩衣(カリギヌ)などを著けしめたるもの。

なほし-じま 直島【名】「地」讃岐國北方の海中にある嶋。香川郡に屬す。周回四里半ばかり。又、附近なる向(カ)島・家島・井島等を含めてもいふ。

なほし-みりん 直味醂【名】燒酎に糯米米麴を加へて醸造せる酒。即ち燒酎と味醂との中間に位するがごときものにて、燒酎よりも甘くして弱し。燒酎なほし。ほんなほし。なほし。

なほ-しも 猶しも・尚しも【副】『しは强め、もは感嘆の意の助辭』なほ(猶)[一][二]に同じ。曾根崎心中「後の世も猶しも一つ蓮ぞや」

なほし-もの 直物【名】[一]直すべき物。つくろひもの。[二]除目(ヂモク)の後、召名に姓尸などの誤ありたるものを一括して、大臣陣に著き、參議をして改め直さしむること。もと毎年除目のありし月に行はれしも、中古以來必ずしも毎年行はれざるに至れり。榮花「三月には、例のなほしものなどいふことあればにや、三月四日つかさめしあり」

なほし-もの 直物の勘文(カンモン)【句】直物の次第などを記したる勘文。

なほし-もの 直物の除目(ヂモク)【句】直物によりて直して行ひたる除目。

なほす 直す【動四他】[一]直くす。正しくす。匡正す。[二]補ひ改む。つくろふ。修覆す。[三]改めて、元のごとくにす。なほらしむ。[四]病をよくす。癒す。治療す。[五]わずまひを正す。正しき位置に置く。浮世親仁形氣「上座になほせば」[六]血族上に、或位置の闕けたる時、他の者をその代りに据う。なほらしむ。「女中を後妻に直す」[七]切り、裂き、又は搓(ヨ)りなどす。「齋宮の忌詞」

なほ-すぐ 直すぐ【副】なほ(猶)[一]を重ねて、その意を强めたる語。「いま、いくつ月をねんぜよ。ことにもあらずなどいひたる、なほなほ、いみじうすさまじげなり」

なほ-なほ 猶猶【副】[一]なほ(猶)[一]を重ねて、その意を强めたる語。「いま、いくつ月をねんぜよ。ことにもあらずなどいひたる、なほなほ、いみじうすさまじげなり」[二]なほ(猶)[二]を重ねて、その意を强めたる語。[尚尚]【名】[一]尚尚書(ナホガキ)の始にいふ語。[尚尚]【名】[二]尚尚書(ナホガキ)の始にいふ語。

なほなほ-がき 尚尚書【名】『初に尚尚と書出すよりいふ』書翰文の一且終りたる後に、更に文句を書足すこと、又その文句。そへがき。そへふで。追書(オッテガキ)。日本武尊吾妻鏡「一つ書にして、なほなほ書にまで、惡人お殺しなされいとくどう申越されし通り」一代男「然らばなほなほがきと望みける」

なほ-なほし 直直し【形二】なほし(直し)[三]を强めていふ語。「古語」源氏「なほなほしきただ人のなからひにてだに」

なほび 直日【名】齋(イ)み愼むこと終りて、平常の如く直すこと。おほなほび(大直日)參照。「古語」

なほびと 直人【名】『なほし(直し)[三]を見よ』門地高からぬ人。世の常の人。ただびと。「古語」源氏「なほびとの、上達部(カンダチベ)などまでなりのぼりたる」

なほび-の-みたま 直毘靈【副】「書」神道に關せることを記せるもの。一卷。本居宣長の著。

なほみ 直日【名】なほび(直日)に同じ。おほなほみ(大直日)參照。「古語」

なほ-も 猶も・尚も【副】『もは感嘆の意の助辭』なほ(猶)[一][二]に同じ。拾遺「あはれとも思はじものを白雪の下に消えつつ猶もふるかな」

なほ-もの 直者【名】『なほなほ(直直)を見よ』すなほなる人。從順なる者。「古語」蜻蛉丸をのたまふかといふを聞くにぞ、なほものなりけりと思ひぬる」

なほ-やま 奈保山・直山・那富山【名】【地】奈良市大字奈良阪の西方に當る山地。那羅山の一部、佐保山に接續す。

なほやま-の-にし-の-みささぎ 奈保山西陵【名】元正天皇の御陵。奈良市大字奈良阪の西。東陵の西二町、辨天山と呼ばる。

なほやま-の-ひがし-の-みささぎ 奈保山東陵【名】元明天皇の御陵。奈良市大字奈良阪の西方の山中北部にあり。

なほらひ 直會【名】『なほり(直)の延にて、齋(イ)むこと直りて、平常の狀態に復る義』神事の終りたる後、神饌をおろして開く酒宴。おほなほび。解齋(イミ)。「古語」[補記]今日(ケフ)は、大新嘗(オホニヘ)のなほらひの豐明(トヨノアカリ)聞しめす日にあり」

なほらひ-でん 直會殿【名】神官がなほらひをする殿舍。解齋殿(ゲサイデン)。

なほらひ-どころ 直會所【名】前條に同じ。

なほらひ-どの 直會殿【名】前條に同じ。

なほらひ-ゐん 直會院【名】前條に同じ。

なほり 直【名】なほること。なほりたること。狂言(胸突)「そのやうにやかましういうても、直りはすまい」

なほり 直人【名】[地]豐後國十郡の一。郡役所を竹田町に置く。

なほり-もの 直物【名】[一]なほる物。なほしもの。[二]死ぬること。なほる(直る)[七]參照。「齋宮の忌詞」

なほる 直る【動四自】[一]なほくなる。正しくなる。[二]補ひ改めらる。つくろひたる結果、よくなる。[三]改まりて、元の如くになる。復す。源氏「聞えなほし給へど、殊に御けしきもなほらず」[四]病よくなる。癒ゆ。治す。源氏「心地のいみじう惱ましきかな。やがてなほらぬさまにもなりなば」[五]正しく坐す。定の席に著く。太平記「法印、席に直りて、四海靜謐の事ども賀し申して」去來「振舞や下座に直る去年の雛」[六]血族上に、或位置の闕けたる時、他の者、代りてその位置に立つ。[七]死ぬ。なほりもの直物[二]參照。「齋宮の忌詞」

なほれおん 奈破崙(佛 Napoleon)【名】ナポレオン第一世の時、佛國にて鑄造せる金貨。價格二十フラン、卽ち我が七八圓に當る。

なほれおんがん 奈破崙岩(英 Napoleonite)【名】【鑛】閃綠岩の一種。佛國コルシカ島に產し、岩體中に角閃石と長石との集合より成れる球狀塊を含有す。我が國にても、磐城國白石町の東方、大率都婆にこの種のものを產し、菊面石と呼べり。

なほれおんばう 奈破崙帽(英 Helmet)【名】兜の如き形狀をなし、コルク又はフエルトにて造り、リンネル又はセル等を以て張り、頂に氣拔(キヌキ)の孔あるもの。一時大いに流行せり。

なほれ-ゑ-まつり 直會祭【名】昔時、尾張國中島郡なる國府宮(コフノミヤ)にて、毎年正月十二日に行ひたる祭禮。神官が往來の人を一人捕へ、犧(ニヘ)に擬して、神前に据ゑ、翌日土の供餅(モヂヒ)を負はせて放つもの。後、雛追(ヒナオヒ)祭と改稱せられて現今も行はる。

なま 生【名】[一]動・植物の、枯れ、煮、燒き、乾しなどせぬこと、又その物。[二]なまいき(生意氣)の略。[三]なまびいる(生麥酒)の略。[四]まだ煮ぬ牛肉。「牛肉店の語」安愚樂鍋「生肉(ナマ)の替りの粹がり連中」[五]げんなま(現生)の略。[六]「美」配色の巧なるがために、色彩の冴えず、伸びず、粗鬆なること。

なま 生【接頭】[一]未熟なる意。[二]年若くして、經歷少なく、十分に世馴れぬなどの意。あを。[三]しかとせぬ、おぼつかなどの意。[四]すこしその氣味ある意。「なま恨めし」「なま德有り」

なま-あくがる 生憧る【動下二自】『なま(生)は接頭語』すこしあくがる。「古語」

なま-あげ 生揚【名】豆腐を肉厚に切りて淺く揚げたるもの。卽ち、油揚と同樣にて、厚く、內部は豆腐の狀態のままなるもの。

なま-あたたかし 生暖し【形一】『なま(生)は接頭語』少しあたたかし。

なま-あたらし 生新し【形二】なまなましくて新し。新鮮なり。

なま-あつし 生暑し【形一】『なま(生)は接頭語』少しくあつし。舞女五枚羽子板「おお、なまあついと、上著脫ぎかけ」

なま-あらあらし 生荒荒し【形二】『なま(生)は接頭語』すこしあらあらし。「古語」源氏「前には呼出でぬ人の、何事にかはあらんと、なまあらあらしきけしきなれど」

なまいえ 生癒【名】『なま(生)は接頭語』いささか癒ゆること。宇治「いまだなまいえにて、赤みたり」

なまいき 生生【名】半ば生きてあること。

なまいき 生意氣【名】ものしり顏すること。出過ぐること。知ったかぶり。きいたふう。半可通。なま。

なまいき-さかり 生意氣盛【名】生意氣なる言行の多き年頃。

なまいた 生板【名】なま木の板。

生板に釘【句】「樣に釘」に同じ。「諺語」

なまいだ 南無阿彌陀【感】なむあみだぶつ（南無阿彌陀佛）の約略。

なまいだあ 南無阿彌陀【感】前條に同じ。（撰集抄）「百萬遍をやらかさう。…なまいだあ、なまいだあ」

なまいだ-ばうず 南無阿彌陀坊主【名】なまいだといふ語を、毎節の終りの拍子にして、俗謠・淨瑠璃などを謠ひあるきし乞食坊主。說經・祭文などの類。（天の網島）「あれ、一丁目から、なまいだ坊主が、てんがう念佛申してくる」

なまいたはり 生勞【名】『なま(生)』は接頭語』眞心より出でたるにはあらぬいたはり。いたはり心の少なきこと。〔古語〕（枕）「なまいたはりなりと、腹だちて」

なまいで 生茹【名】なまゆで(生茹)の轉訛。（苔筵）「なまいで誰れかつくりそめけん」

なまいとほし 生憐し【形二】『なま(生)』は接頭語』少しいとほし。〔古語〕（源氏）「みだるるところもやと、なまいとほしくおぼす」

なまいどまし 生挑し【形二】『なま(生)』は接頭語』少しいどまし。〔古語〕（源氏）「なまいどましきたの心は」

なまいどむ 生挑む【動四自】『なま(生)』は接頭語』いささかいどむ。〔古語〕（大和）「なまいどみて、時時ものなどいひける人のもとより」

なまいり 生煎【名】よくいらぬこと、又そ の物。

なまいわけなし 生稚し【形一】『なま(生)』は接頭語』すこしわらべらし。〔古語〕（源氏）「なまいわけなきたはぶれごとなども」

なまいを 生魚【名】なまうを(生魚)に同じ。

なまうかび 生浮【名】なまじひに佛道に入ること。（源氏）「なまうかびにては、かへりて惡しき道にもただよひぬべくぞおぼゆる」

なまうしろめたし 生後目痛し【形一】『なま(生)』は接頭語』すこしうしろめたし。何となく心ぐるし。〔古語〕（源氏）「いかで、かばかりも、人に聲聞かすべきものとならひたまひけんと、なまうしろめたし」

なまうた 生歌【名】熟せぬ歌。生硬なる歌。下手なる歌。

なまうだ 南無阿彌陀【感】なまいだ(南無阿彌陀)の訛。（太平）「なまうだや十夜の道のあふれ者」

なまうたよみ 生歌人【名】下手なる歌よみ。

なまうだり 生茹【名】なまゆだり(生茹)の轉訛。（伊勢）「なまおきなの、今は、さる事、にげなく思ひければ」

なまうで 生茹【名】なまゆで(生茹)の轉訛。

なまうらめし 生恨し【形二】『なま(生)』は接頭語』少しうらめしかりければ」

なまうを 生魚【名】なまの魚。なまざかな。（人參木）に同じ。（和名抄）奈萬衣乃岐。木名也」

なまえのき 荊・牡荊【名】〔植〕にんじんぼく

なまおきな 生翁【名】『なま(生)は接頭語』甚しく老いてはあらぬ翁。〔古語〕（伊勢）「なまおきなの、今は、さる事、にげなく思ひければ」

なまおそろし 生恐ろし【形二】『なま(生)は接頭語』何となくおそろし。〔古語〕（更科）「なまおそろしと思へるけしきを見て」

なまおぼえ 生覺【名】『なま(生)は接頭語』■十分におぼえぬこと。たしかならぬ記憶。うろおぼえ。（枕）「よみたる歌をだに、なまおぼえなるを」 ■いささかの恩遇。〔古語〕（源氏）「中納言殿の御前の中に、なまおぼえあざやかならぬにや…歸りてうちうなづきて」

なまおぼおぼし 生おぼおぼし【形二】『なま(生)は接頭語』すこしおぼおぼし。何となく氣にかかる。〔古語〕（紫式部集）「なまおぼおぼしき事ありて歸りにける」

なまおゆ 生老ゆ【動下二自】『なま(生)は接頭語』少し老ゆ。〔古語〕（夢花）「なまおいたる人は、涙も落ちにけり」

なまかうべ 生頭【名】なまくび(生首)に同じ。（増鏡）「御わざの夜、御棺に入れたまへる御頭を、人の盜み取りけるぞめづらかなる。御顏の下短(シモミジカ)にて、半ばほどに御目のおはしましければ、外法(ゲホフ)とかやまつるに、かかる生からべの入ることにて、何がしの聖(ヒジリ)とかや、東山のほとりなりける人、取りてけるとて」

なまがくしやう 生學生【名】『なま(生)は接頭語』いまだ學問の熟せざる學生。年功少なき學生。〔古語〕（大鏡）「父がなまがくしやうにて使はれ奉りて」

なまかくす 生隱す【動四他】『なま(生)は接頭語』何となく隱す。いささか打ちあけず。〔古語〕（源氏）「なまかくすけしきなれば、人にも語らず」

なまがくもん 生學問【名】『なま(生)は接頭語』なまかぢりの學問。未熟の學問。半面學。

なまかじり 生囓【名】■十分にかまぬこと。なまかみ。 ■なまなかの智識。なまものしり。ききかじり。「さか。

なまかた 生方【副】すこし。わづか。いささか。

なまかたは 生片端【名】『なま(生)は接頭語』どことなく不完全なること。何となく缺點あること。なまかたほ。〔古語〕（源氏）「なまかたはにしたるに、聞きにくき音(ネ)がらなり」

なまかたはらいたし 生傍痛し【形一】『なま(生)は接頭語』すこし傍いたし。〔古語〕（榮花）「上の御方の女房、さきざきは、宮の女房に劣らぬさまの裝束を、上のおまへなど、なまかたはらいたく思しめすに」

なまかたほ 生片帆【名】『なま(生)は接頭語』なまかたほ(生片端)に同じ。〔古語〕（源氏）「なまかたほなる事見えたまはば、かうまでことごとしうもてなしおはさじと」

なまがてん 生合點【名】『なま(生)は接頭語』十分に了解せずして、合點すること。はやのみこみ。

なまがね 生鐵【名】鍛錬の不十分にして、炭素の少なき鐵。

なまかは 生皮【名】■生のままなる皮。よく乾かぬ皮。 ■雁・鴨などの皮を、酢に漬けたる食品。沸騰せる醬油に浸して食ふ。

なまけ 生け(懶)に同じ。（狂言）「物ぐさの藏人(クラビト)と召されけるより、世には、なまかはの藏人とも呼ぶ事になん」「者」に同じ。

なまかべ 生壁【名】■塗りたてにして、いまだ乾かぬ壁。（七一職人歌合）「わが袖のひるよもしらぬなまかべのよりそふ人のなきもうらめし」（松風村雨東帰鑒）「皆一口は食ふけんど、あとから剝げる生壁の釘ごたへせぬ懸ぞかし」 ■なかべいろ生壁色)の略。生壁を算盤(ソロバン)で扣(ハジ)いたやう【句】疵の附きやすき譬。〔諺語〕

なかべいろ 生壁色【名】染色の一。薄氣鼠(ネズミ)の濃きもの。なまかべ。

なまかべ-ねず 生壁鼠【名】染色の一。生壁色よりも一層鼠がかりたるもの。「と。

なまがみ 生噛【名】食物をよく噛まぬこと。

なまかんだちめ 生上達部【名】『なま(生)は接頭語』年功の積まざる上達部。（太平記）元は公家のなま上達部に仕へて、盛んなりし御代を見たりし女房」

なまがれ 生枯【名】いまだなましくして、十分に枯れざること、又その物。

なまかれがた 生枯方【名】やや枯れがたなること。枯れかかること。〔古語〕（兼澄集）「かし木植ゑたるがなまかれがたになりにける」

なまかわき 生乾【名】いまだ濕氣ありて十分に乾かぬこと。なまび。なまっかわき。

なまき 生木【名】地に生ひてある木、又は伐取りてより程經ずして、未だ水分を含みをるほどの木。なまなましき木。なまっき。生木に釘【句】「生板に釘」に同じ。〔諺語〕（盛生隅田川）「ひっしひっしと生木に釘打つ鐵槌(ツカナ)論」

生木に鉋【句】前條に同じ。〔諺語〕（醒睡笑）「借金を乞へどもくれぬ氣の毒やなま木に鉋の庄のものかな」

生木若味噌・若世帯【句】損失の多き物事を列挙していふ語。〔諺語〕

生木を裂く【句】仲好き男女を強ひて離別せしむる譬。

なまーぎき 生聞【名】『なま(生)は接頭語』□十分に聞取らぬこと。今川大雙紙「扨なまぎきなる事を、押しかへして不審を申すもの也」□よくも聞知らずして、物しり顔すること。ききかじり。なまかじり。

なまーきず 生疵【名】なまなましき疵。新しき疵。なまっきず。(古疵に對して)「生疵の絶間無し」

なまーきんだち 生公達【名】なまじひの公達。さまで高き地位ならぬ公達。〔古語〕狭衣「なま君だちのいたう隠ろへて、よるよる時時おはするを」

なまーぎれ 生切【名】十分に切れざること。切味(アヂ)の鋭利ならぬこと。

なまく 曩莫・曩謨・南謨・那謨【感】〔佛〕なむ(南無)に同じ。

曩謨(サウ)三曼多(サンダ)、嚕曰羅南(バザ)、旋多(ダン)、摩訶嚕遮那(シャカラ)、娑婆多耶(サバ)、吽(ウン)、多羅吒(タラ)、干帰(マン)【句】〔佛〕「曩謨(サウ)三曼多、嚕曰羅赦、戦拏、摩訶路灑拏、薩婆多耶、吽、怛羅吒、憾帰」に同じ。醐曲(謡成寺)「東方に降三世明王(ゴウサンゼウ)、南方に軍荼利夜叉(グンダリヤシャ)、明王、西方に大威徳明王、北方に金剛夜叉明王、中央に大日大聖(ダイニチ)不動、動くか動かぬ索(サク)の曩謨、三曼多、嚕曰羅南、旋多、摩訶嚕遮那、娑婆多耶、吽、多羅吒、干帰、聽我說者(チャウガ)得大智慧(ダイヂエ)、知我身者(シンガ)即身成佛(ソクシンジヤウブツ)と、今の蛇身(ジヤ)を祈る上は」

なまーくげ 生公家【名】なまなかの公家。さまで高き地位ならぬ公卿(クギ)。吉野都女「まづなま公家ばら引(ビ)括れ」

なまーぐさ 生臭・腥【名】なまぐさもの(生臭物)□の略。「さし。

なまーくさし【形一】 生意氣なり。しやらくの如くくさし。生魚のやどなまぐさしといひける人」□僧侶にして、酒色の戒を守らず。しかたばなし「昔なまぐさき出家と、山伏と、うらやさんと、順禮と、乗込の舟に」

なまぐさーつき 生臭附【名】食品の獻立(ツ)に、魚類の附きてあること。

なまぐさーでら 生臭寺【名】なまぐさ坊主の居る寺。破戒僧の居る寺。二代男「今時のなまぐさ寺」

なまぐさーなべ 生臭鍋【名】□魚類などを煮る鍋。□『わづかに血緣の臭あるのみなる義といふ』疎遠なる親族。遠類。

なまぐさーばうず 生臭坊主【名】『なまぐさし(生臭し)□を見よ』僧の、酒色に溺れなどして、身の修まらぬもの。

なまぐさーばうちやう 生臭庖丁【名】さかなばうちやう(魚庖丁)に同じ。

なまぐさーもの 生臭物・腥物【名】□なまぐさき物、即ち魚類など。なまぐさ。(精進(シヤウジン)物に對して)狂言(腥物)「まことに太刀とは見えますまい。なまぐさ物のやうにござる」□能(ク)の狂言の一。主人、冠者に、その伯父の許へ黄金作の太刀を返しに遣し、途中の不用心を慮りて、これを腥物に擬して持たせやりしが、なほ安んぜず、自ら途に要して脅かし試むるに、冠者果して怖ぢて、奪ふに任せ逃げ歸りといふ筋に作りたるもの。

なまぐさ-れうり 生臭料理【名】生臭物を材料とせし料理。(精進(シヤウジン)料理に對して)

なまくちをし 生口惜し【形二】『なま(生)は接頭語』すこしくちをし。〔古語〕源氏「なまくちをしければ、にくからず見たてまつりたまふ」

なまくねくねし 生くねくねし【形二】『なま(生)は接頭語』少しくねくねし。〔古語〕源氏「なまくねくねしき事もいでくる時時あれど」

なまくび 生首【名】生きてをる人の首、又は斬取りてより未だ程經ぬ、なまなましき首。なまっくび。

なまくら 鈍【名】□刃物の切味(アヂ)鈍きこと、又その刃物。□精神の堅固ならぬこと、又その人。のらくら。

なまーくらうど 生藏人【名】『なま(生)は接頭語』年功の積まざる藏人。著聞「あるなま藏人の妻」

なまくらーがたな 鈍刀【名】なまくらなる刀。鋭利ならぬ刀。

なまーぐらし 生暗し【形一】『なま(生)は接頭語』うす暗し。少し暗し。〔古語〕大和「御車のあたり、なまぐらき折に立てりけり」

なまくらーぶし 鈍武士【名】強からぬ武士。こしぬけざむらひ。なまぶし。「物。

なまくらーもの 鈍物【名】なまくらなる刃物。

なまくらーもの 鈍者【名】なまくらなる人。浮世風呂「ほんに、ほんに、をへねえなまくら者で、憎くてなりません」

なまーぐり 生栗【名】燒き、茹(ユ)で、乾しなどせず、なまのままなる栗の實。

なまーぐるし 生苦し【形二】『なま(生)は接頭語』すこし苦し。〔古語〕狭衣「なまぐるしとおぼしたるを」

なまくれる 鈍れる【動下一自】なまくらとなる。〔供豫國の方言〕

なまくわう 生鑛【名】『英 Raw ore』採掘したるままにて、未だ鎔燒せざる鑛石。

なまくわうーぶき 生鑛吹【名】『英 Pyritic smelting』硫化鑛物の精煉にて、生鑛を鎔燒せずして、その内に含蓄せる硫黄及び金屬の酸化作用より發生する自熱により、または僅少の燃料を加へて鎔解する方法。なまぶき。

なまぐわし 生菓子【名】餡類を用ひて製したる菓子、即ち餅菓子・蒸菓子・羊羹などの總稱。(乾(ヒ)菓子に對して)

なまけ 懶【名】なまけること、又その人。

なまけいこ 生稽古【名】『なま(生)は接頭語』未だ熟達せざる稽古。不十分の學修。

なまけーなき 懶泣【名】赤子などの、だらけたる聲にて泣くこと。

なまけーもの 懶者【名】なまける人。なまけもの。ものぐさ。づつなしもの。あぶらうり。

懶者の足から鳥が起つ【句】平素怠れる者は、一旦事起るに當りて、遽かに狼狽して、平素の力を發揮し得ざるの譬。

なまけもの 樹懶【名】【動】貧齒類に屬する獸。大いさ、形、共に普通の猿に似、全身黄灰色、頭は短く、面部は暗色にて、容貌猫に類し、耳甚だ小さく、鉤狀の爪を有して、常に森林中の樹上に棲み、晝は體を曲げ、球狀をなして、地衣又は蘚苔の中に睡り、植物質を食し、運動遲緩なり。中央亞米利加より南亞米利加にかけて産す。

(のもけまな)

懶者の食怠(イヂ)【句】なまけ者の、食事のことのみ考へ居ること。懈怠者(ケタイ)の食怠。能無(ノウナ)の食だくみ。〔諺語〕

懶者の節供働(セックバタ)【句】平生怠れる者の、何かの事ある場合に、俄かに働くこと。のらの節供働。〔諺語〕

なまけもの 樹懶【名】【動】貧齒類に屬する獸。大いさ、形、共に普通の猿に似、全身黄灰色、頭は短く、面部は暗色にて、容貌猫に類し、耳甚だ小さく、鉤狀の爪を有して、常に森林中の樹上に棲み、晝は體を曲げ、球狀をなして、地衣又は蘚苔の中に睡り、植物質を食し、運動遲緩なり。中央亞米利加より南亞米利加にかけて産す。

なまけやけし 生尤し【形一】『なま(生)は接頭語』少しけやけし。いささかあやし。〔古語〕源氏「なまけやけしとは見給へど」

なまける 懶ける【動下一自】□精を出だせず。おこたる。ずるける。□曇る。「天氣がなまける」

なまこ 海鼠【名】□【動】『その乾したるもの、即ち乾海鼠(ホシ)又は海參(ミ)と呼ぶものに對して、生(サ)海鼠(コ)の義にていふ』沙噀(コ)類に屬する棘皮動物。形やや水蛭に似て大きく、長さ五六寸より尺餘に至る。蒼黒色にして、暗褐色の雲紋あり。淺海の底に棲息し、岩礁の間、海藻の繁茂せる所を好み、ややもすれば内臓を口より吐出す奇性あり。冬季を旬とし、生にて、多くは三杯酢に浸して、大根おろしなどと共に食ひ、又、乾して海參(ミ)として食し、腸藏したる内臓は海鼠腸(コワタ)と稱し、佳味なり。□『生海鼠・沙噀』□『金・銀・銅・鉛等の地金、形の生子に似たるよりいふ』なまこいた(海鼠板)の略。『生子』□なまこがはら(海鼠瓦)の略。『生子』□なまこかべ(海鼠壁)の略。『生子』□なまこしぼり(海鼠絞)の略。□なまこもち(海鼠餅)の略。『生子』

なまこいっく 海鼠漆喰の略。「生子」

なまこいり 海鼠に薬筋(スヂ)【句】『海鼠は薬に触れば、とろくるやうになるといふ』急に勢の挫くる形容。〔諺語〕

なまこ-いた 海鼠板・生子板【名】『英Corrugated steel』亜鉛引鉄板又は亜鉛板を波形に彎曲せしめ、多くは屋根葺又は塀などの材料に用ふるもの。幅四尺位、長さ三尺乃至六尺位。厚さは番號にて示し、二十四番二十六番等多く用ひらる。なまこ。

なまこがた 海鼠形【名】〔一〕海鼠のごとき形。かまぼこなり。〔二〕火鉢などの手かけ穴にある、なまこ餅の切口の如き形。

なまこがはら 海鼠瓦・生子瓦【名】まるがはら(丸瓦)に同じ。

なまこかべ 海鼠壁・生子壁【名】土蔵・塗屋又は大名屋敷の長屋などの外壁に、竪瓦(ハヂガ)を斜に張附けて、その繼目に、海鼠形に、漆喰(シックヰ)を塗上げたるもの。なまこ。

なまごころ 生心【名】『なま(生)は接頭語』〔一〕なまなかに事理をわきまふる心。〔鰒鮫〕「なま心ある人などさしあつまりて」〔百合若大臣野守鏡〕侍分の者共は、生心ある故に、向の心に徹するなり」〔二〕いろけ。春心。春情。〔八犬傳〕「ぬしの秘藏の筥入女兒(ムスメ)を旅物にして、…生ごころの附きたる者を遊ばしてのみ宿所に在らせば、よき事あらじと諫めしかども」

なまごころえ 生心得【名】『なま(生)は接頭語』不十分なる心得。

なまごころおとり 生心劣【名】『なま(生)は接頭語』どことなく心おとりすること。何となく劣れるやうに思はるること。〔古語〕取鷲「なま心おとりもしぬべき事ぞまさりたるや」

なまごころぐるし 生心苦し【形二】『なま(生)は接頭語』少し心苦し。〔古語〕源氏「なまごころぐるしう、さまざま思しみだる」

なまごころづきなし 生心附無し【形ク】『なま(生)は接頭語』すこし心づきなし。〔古語〕榮花「なまごころづきなく御覽ぜらるるに」

なまごころゆく 生心行く【動四自】『なま(生)は接頭語』少し心ゆく。〔古語〕源氏「ひきたがへたまへるを、なまこころゆかぬやうなれど」

なまごころわろし 生心悪し【形ク】『なま(生)は接頭語』少し心わるし。〔古語〕源氏「なま心わろきつかうまつり人」

なまござかし 生小賢し【形二】『なま(生)は接頭語』何となく小ざかし。どことなく小利口なり。生意氣にして小利口なり。用明天皇職人鑑「なまござかしき了稚めかな」

なまこじっくい 海鼠漆喰・生子漆喰【名】海鼠壁の瓦の繼目に、海鼠形に塗りたる漆喰。なまこ。

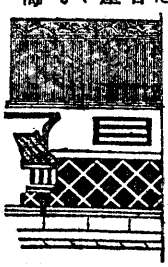
なまこしぼり 海鼠絞【名】『烈(キ)が海鼠のごとき形をなせるによりていふ』有松絞の一種。一層繁く絞りたるもの。根掛(ネカケ)などに用ふ。なまこ。

なまこなし 生熟【名】『なま(生)は接頭語』こなれの不十分なること。

なまこなれ 生熟【名】『なま(生)は接頭語』こなすことの不十分なること。

なまこひし 生戀し【形二】『なま(生)は接頭語』少し戀し。〔古語〕大和「京さへなまこひしき旅のほどなりければ」

なまこ-べい 海鼠塀・生子塀【名】外壁を海鼠壁にした塀。大名屋敷の長屋などに多く用ひらる。



(いべこまな)

なまこかべ(海鼠壁)参照。

なまごめ 生米【名】炊(カシ)ぎ、又は煎りなどせざる米。きごめ。

なまごも 生薦【名】〔一〕なまの菰(モ)。〔二〕なまの菰にて編みたる俵(タハ)。

なまこ-もち 海鼠餅【名】なまこ形の餅。薄く小口切にして、かき餅とす。なまこ。

なまこ-るね 沙噴類【名】〔動〕棘皮動物の一綱。體は柔軟にして、口の周圍に多數の觸手を生ず。歩足を有するものと有せざるものとあり。何れも海産なり。沙噴(サフン)。金海鼠(コン)等これに屬す。

なまごろし 生殺【名】〔一〕殆んど死に至らしむること。はんごろし。半死半生。〔二〕物事の始末を附けずに、半ばにて止むること。ちゆうとはんぱ。

なまこ-わ 海鼠輪【名】男子の用ふる淫具の一。輪狀をなし、外面に疣狀の突起を多く設けたるもの。一代男「生海鼠輪六百懸(ケ)、…枕繪二百札(サツ)、伊勢物語二百部一頭語』未熟の才學。不十分なる學問。太平記「道も立たぬなま才學に時移りて、數日を徒らに過ぎにけり」

なまさかし 生賢し【形二】『なま(生)は接頭語』すこし賢し。こざかし。〔古語〕井蛙抄「耳しあれば、なまさかしきぞと、上皇勅定ありて」

なまさかしら 生賢【名】『なま(生)は接頭語』なまじひの利口。なまなかに利口ぶること。〔古語〕鰒鮫日鳥「なまさかしらなどする人」

なまざかな 生魚【名】なまうを(生魚)に同じ。

なまざけ 生鮭【名】鹽漬にせぬなまの鮭。(鹽鮭に對して)

なまざき 生笹【名】青青とじたる笹。枯れたるに對して)

なまざとり 生悟【名】『なま(生)は接頭語』なまじひのさとり。十分に悟らぬこと。生悟、堀に落つる【句】「生物議(ナマモジリ)」に同じ。〔諺語〕

なまさば 生鯖【名】煮焼き又は鹽に漬けなどせぬ、なまの鯖。(鹽鯖に對して)

なまさぶらひ 生侍【名】あをさむらひ(青侍)に同じ。字治「人の許に宮づかへしてあるなまさぶらひありけり」

なまさまあし 生様悪し【形二】『なま(生)は接頭語』すこし、よからぬ樣なり。〔古語〕榮花「なまさまあしう心得ぬことに思すべかめれど」

なまさむらひ 生侍【名】なまさぶらひ(生侍)に同じ。

なまし 生し【形二】〔一〕なまなり。なまなまし。〔古語〕著聞「長洲(ナガス)の濱に至りて、なましき魚を求めて」盛衰記「さすが生しき身なれば、三日といひける日は、息絶え、身すくみて、死人のごとし」〔二〕未だなりととのはず。あをし。〔古語〕砂石集「慈悲願力は、衆生に平等に被れん…衆生の機なましき時は感應なし」

なまし【助動】『完了の意の助動詞ぬの未然形なるなにましの添はれるもの』まじを強めていふ語。萬葉「きべひとのまだらぶすまにわたさはにいりなましとのいものをどこに」

なまじ 愁【鰒】なまじひ(惹)に同じ。飢陣入島「なまじ附かずば附かぬまでよ」

なまじなまなか【句】前條に同じ。

なまし-がたな 生刀【名】なまくらがたな(鈍刀)に同じ。東北院職人歌合「わが戀はなましがたなのかねあまみ思ひ切れども切られざりけり」

なまし-ぞく 生氏族・生親族【名】『なま(生)は接頭語』少しは眞き家筋。〔古語〕榮花「失せにし母の、なましぞくの高きまじらひして」

なまじっか 愁か【鰒】『たしか(確か)わづか(僅か)などの形よりの類推によりて、なまじ(愁)にかの添ひたるもの』なまじひ(愁)に同じ。

なましな 奈萬之奈・男信【名】〔書〕『男信は上野國利根(キ)郡の鄕名にて、男の字の音は、唇内の「ナム」なるが故に「ナマ」と轉じ、信の字の音は、舌内の「シヌ」なるが故に「シナ」と轉じたるものなるより、この地名を基として說明せるためなり』漢字の發(ハ)ぬる韻に「ン(ヌ)」と「ム」との別あることを論じたるもの。三卷。僧義門の著。

なましば 生柴【名】なま木の柴。

なまじひ 生強・愁【鰒】〔一〕心には願はぬながら爲すさま。〔古語〕萬葉「物思ふと人に見えじとなまじひに常に思へりありぞかねつる」〔二〕然あらずともよきに然ありし、又然せずともよきに然するさま。なまじ。なまじっか。源氏「かずならぬ身にて、及びがたなき御なからひに、なきじひに許されたてまつりて」〔三〕かりそめ。深く心にとめずになすさま。盛衰記「聲をも聞上げず、…參りたり。殿下、…引繕ひて參るべき由仰せ出されければ、なまじひに聲振上げて供奉しけり」穗八幡柱鳳「なまじひ親

かくまふと聞えては、さきに我が立て許したうても許されぬ」「の鹽。

なまじほ 生鹽【名】焼鹽などにせぬ、普通

なまじめ 生メ【名】■髪の結ひ方の一。元祿年間に行はれ、□はこれに擬したるなり。■鬢の一(チヒ)を多く出さずして、緩く結ひたるもの。

なまじめくるまびん 生メ車鬢【名】鬢の一。前條□の鬢を車形の如く荒く出だしたるもの。若衆荒事の狂言に用ひらる。

なまじめる 生濕る【動四自】『なま(生)は接頭語』いささかしめる。〔古語〕空穂「御髪(ミグ)のなまじめりたる、急ぎほしたまふ」「ぬ醤油。

なまじやうゆ 生醤油【名】煮立てなどせ

なまじやくはい 生若輩【名】『なま(生)は接頭語』なまなましき若輩。若輩を嘲りいふ語。假名手本忠臣藏「なま若輩な形(サ)をして、お尋もなき評議」「じ。

なまじやけ 生鮭【名】なまざけ(生鮭)に同

なまじり 生知【名】『なま(生)は接頭語』十分に知らぬこと。なまなかに知ること。

なまじろし 生白し【形ク】『なま(生)は接頭語』青みを帶びて白し。うすじろし。なまっちろし。(多くは、顔色にいふ)

なます 膾・鱠【名】■魚介又は獸肉などを、生のまま、細くはやしたる食品。〔古語〕和名「鱠、奈萬須、細切肉」■魚介の肉の細くはやしたるを、酢に浸したる食品。□大根・人參などを細くはやし、揺りたる白胡麻を加へ、酢味噌にあへたる食品。

膾かく【句】膾をつくる。室町千疊敷「餅つくやら膾かくやら庭掃くやら」

膾に叩く【句】次條に同じ。聖徳太子繪傳記「いはれぬ彼女(カナ)が相手好み、膾にたたけ」

膾に作る【句】■魚介などの肉をきざみて、膾となす。□こまごまにきざむ。宇治拾遺「生きながらなますに作り、切に廣げさせて見たまはん」

膾は酢で持て、男は氣で持て【句】『もつ(持)』六を見よ』それぞれに、特色を發揮せよ。〔諺語〕

膾を吹く【句】「蓼(タデ)に懲りて膾を吹く」を見よ。

膾を盛る【句】床(コ)に入る。〔元祿頃の語〕傾城色三味線「隨分强藏(ゾウ)、自慢を申し、汝は鱠何盃盛ったと、所所のはやり言葉にて、床に入ることを鱠盛るとは申し習はせしが、何の腎張(バリ)か申し出せしやらん」

鱠(キス)の膾【句】「鱚魚(ハゼ)の膾」に同じ。散木「秋かぜにすずきのなます思ひ出でてゆきけん人の心地こそすれ」

なます 焼す【動四他】焼きたる鐵を、水に入れて打つ。刃物の燒(ヤ)を戻して、にぶくす。

なます 【助動】「なさいます」の略。〔江戸の遊廓の語〕浮世床「寢なますなら、愛な上へ寢なませ」梅暦「花魁(オイラン)え、又ね、あの意地惡が怒(オコ)りましたから、早く行っておあげなましえ」

なまず 慾【貌】『なまじ(慾)の轉か』なまなか(生半)に同じ。新永代藏「一旦求めたる家を、なまずにては離すべからず」

なますき 生梳【名】うらすき(裏梳)に同じ。

なますくらへ 膾食【名】出雲國にて、毎年陰暦二月一日より七日間年神に鱠を供する神事。

なますさまじ 生凄じ【形シク】『なま(生)は接頭語』すこしすさまじ。〔古語〕「宮、なますさまじとおぼしたるに」源氏

なますすろはし 生漫はし【形シク】『なま(生)は接頭語』すこしすずろはし。〔古語〕榮花「なますずろはしうおぼしめして、入らせたまふ」

なますどり 【名】〔動〕くひな(水鷄)を云ふ。〔陸前國仙臺の方言〕

なますふな 膾鮒【名】〔動〕源五郎鮒の、大なるものの稱。

なまずりやう 生受領【名】『なま(生)は接頭語』受領したりとも思はれぬほどの受領。受領たる價値のなき受領。〔古語〕源氏「ことなることなきなまずりやうなどやうの家に有る人は」

なまぜ 慾【貌】なまじ(慾)に同じ。

なまぜ・なまなか【句】「なまじなまなかに同じ。松の葉「なまぜなまなか馴れずば、かほど物は思はじ、さりとては」

なまぜん 生禪【名】なまざとりの禪學。野狐禪。

なまそんわら 生孫王【名】『なま(生)は接頭語。王は、孫の字の韻に引かれてノウと發音す』時を得ず、世に知られたまはぬ孫王。皇族とは名のみにて、その甲斐なきもの。皇統より遠く隔りたる一族。なまみや。なまわかんとほり。〔古語〕狹衣「何となきなま孫王にて、いとよせなからんよりは」

なまぞり 生反【名】形は鑢(ヤスリ)に似て小さく、刃の薙刀(ナギナタ)のごとく反(ソ)り曲れる小刀。造船工などの、彫刻に用ふるもの。

なまだ 【名】〔動〕■うつぼ(鰹魚)に同じ。□なまづ(鯰)を云ふ。〔安房國吉濱(ハマ)邊の方言〕

なまだ 【感】なむあみだぶつ(南無阿彌陀佛)の「約略。

なまだあ 【感】前條に同じ。雜藤紫毛「なまだあ、なまだあ、願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國」

なまだけ 生竹【名】伐取りてより久しからずして、未だ枯れ果てず、色の青きほどの竹。あをだけ。

なまだこ 生蛸【名】煮、茹(ユ)でなどせぬ、なまのままなる蛸。

なまだひ 生鯛【名】煮、燒き又は鹽に漬けなどせぬ、なまの鯛。きのふはけふの物語「尾張の熱田へ、生鯛を調へに遣しけるが」

なまたまご 生玉子・生卵【名】茹(ユ)で、燒きなどせぬ、なまの卵。

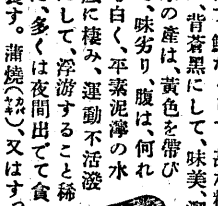
なまたる 生垂る【動下二自】男子などが、なまぬるく活氣なき言動をなす。にやける。〔京都・大阪の語〕

なまたれ 生垂【名】なまたること、又その人。〔京都・大阪の語〕

なまだれ 生垂【名】料理のたれの一種。料理物語「生垂は、味噌一升に水三升入れ、揉みたて、袋に垂れ申候也」

なまち 生血【名】生きてゐる動物の血。いきち。鮮血。

なまづ 鯰【名】■〔動〕喉鰾(コウ)類に屬する魚。河川湖沼等の淡水に産す。體長約一尺。頭大きくして扁く、口は大きくして、上下の顎に、各一對の觸鬚あり。尾部は側扁す。鱗なくして、甚だ粘滑なり。流水の產は、背蒼黑にして、味美、濁水の產は、黃色を帶びて、味劣り、腹は、何れも白く、平素泥濘の水底に棲み、運動不活潑にして、浮游すること稀に、多くは夜間出でて食食す。蒲燒(カバヤ)、又はすっぽん煮にして食ふ。幼き者は、ぎちやといふ。しやうげんばう。〔鰻魚・河鱒・鰌〕和名「食經云鯰。和名奈萬豆。貌似鮠(ガ)而大頭者也」■『鯰髭(ひげ)(鯰髭)の略。鯰公(コダン)□『鯰髭を蓄へたる者の義』官吏などを卑めていふ語。〔明治の半ば頃までの語〕



(ロ) づまな

鯰の瓢箪【句】次條の略。傾城反魂香「看鯰の瓢箪…叩けばすべり、打てばすべり、ぬらりぬらりと手にたまらず」

鯰を瓢箪(ヒサゴ)で押(オ)へるやう【句】「瓢箪で鯰に同じ。〔諺語〕

なまづ瘢【名】『鯰の形のごとき斑點を生ずるよりいふ』皮膚病の一。皮膚上に圓形その他種種の斑紋現はれ、互に融合して擴大す。患者は輕度の瘙痒を感ずるのみ。原因はミクロスポロンフルフル(Microsporon furfur)と稱する絲狀菌の寄生に因る。色によりて「黑なまづ」又は「白なまづ」といふ。なまづはだ。でんぷう。

なまづいか 鯰胍【名】鯰の形せる風。心中刀は氷の朔日「鰻瓢箪鯰胍吹かぬ風もつい扇か」

なまづえ 鯰江【名】〔地〕攝津國東成(ヒガシナリ)郡にある町。市街、大阪市に接續す。鐵道片町線通過し、又城東線京橋停車場あり。

なまづがた 鯰形【名】鎧の小手の一種。上下のふくべ大指などの、すべて指の形を有せざるもの。

なまっかわき 生乾【名】なまかわき(生乾)

なまっき 生木【名】なまき(生木)の音便。

なまっくび 生首【名】なまくび(生首)の音便。

なまづけ 生漬【名】漬方の不十分なること、又その物。娼妓網「なまづけのかうかうは、たった二つは買ってよこしいせん」

なまっけなし【名】なまけること、又その人。なまっけなしの節句働(セックバタラキ)【句】「懶者(ナマケ)の節句働」に同じ。〔諺語〕

なまづだ-たんかう 鯰田炭坑【名】〔地〕筑前國嘉穂(カホ)郡飯塚町・笠松村外二箇村に跨る炭坑。三菱會社の經營に屬す。

なまづだな 鯰棚【名】三角形なる棚板。

なまっ-ちろし 生白し【形一】なまじろし(生白し)の音便。

なまづつましい 生慎し【形二】『なま(生)』は接頭語』少しつつまし。〔古語〕 榮花「この女御、后にもなりたてまつらんとのたまはすれど、おとど、なまつつましうて」

なまつば 生唾【名】酢き物などを見たるとき、自然に口中より出づる唾。なまつばき。

なまつばき 生唾【名】前條に同じ。

なまづ-はだ 癜肌【名】なまづ(癜)に同じ。

なまづ-ひげ 鯰髭【名】細く長くして、鯰の髭に似たる髭。どぢやうひげ(泥鰌髭)參照。

なまづ-ぶね 鯰船【名】船首の、まるくして、形鯰に似たる小船。

なまづ-むし 鯰蟲【名】〔動〕㊀たがめ(田龜)に同じ。㊁蜻蛉(ボン)の幼蟲。

なまづめ 生爪【名】指にはえて居る爪。いきづめ。

なまつめ 生爪【名】㊀爪をはがす。㊁生身の爪をはがし取る。昔、遊女などが、己が心中を見すとて、せしわざなり。堀川波の鼓「生爪放して入れたる文」 壽の門松「心中に生爪を放してくれた」

なまづら 生面【名】いきづら(生面)に同じ。 世間手代氣質「御損をかけ申し、生面下げて、御奉公はなりがたし」

なまづる 生鶴【名】生のままにて、鹽などに漬けぬ鶴の肉。 傾城酒呑童子「何がな珍しい物をとて、生鶴の御汁」

なまづを 鯰尾【名】㊀しやうぶづくり(菖蒲作)に同じかるべしといふ。 增鏡「三條の家に傳りて、鯰尾とかいふ刀のありける物をつけたるもの。㊁兜の鉢の、黑塗にて、兩ひれの立てるを」

なまづを-づくり 鯰尾作【名】刀劍を、鯰尾㊀の制に作ること、又その刀劍。 持統天皇歌軍法「鯰尾作引(ヒ)拔いて」

なまっ-とうふ 生豆腐【名】煮又は茹(ユ)でなどせぬ豆腐。

なまっ-とく 生徳【名】『なま(生)』は接頭語』すこしの德。〔古語〕 狹衣「主計(カヅヘ)の頭(カミ)などいふ者の妻(メ)にて、生徳ありけるが」

なまっ-とり 生鳥【名】㊀生きて居る鳥。㊁煮、燒き、又醢に漬けなどせぬ鳥の肉。

なまっ-なか 生中・生半【副】㊀各異なれる二つの狀態の、何れにも屬せぬさま。なまはんか。なからはんと。はした。なまじひ。 今國姓爺「なまなか聞いては身の大事、兎角耳へ入れぬこと」㊁むしろ。〔俚語〕

なまなか-じ【副】前條に同じ。

なまっ-ながし 生長し【形一】『なま(生)』は接頭語』なまなかに長し。妙に長し。 狂言「生島蘭「くちなはが秀句は、さぞ、生長(ナガ)い秀句でがなござらう」

なまっ-なま 生生【貌】㊀いかにも生なるさま。㊁十分ならぬさま。未熟なるさま。 記「やそその御琴(コト)を取依せて、なまなまに挽(ヒ)きましけるに、いくだもあらずて、御琴の音(ネ)聞えずなりぬ」 源氏「才(イ)のきは、なまなまの博士はづかしう」

なまっ-なまし 生生し【形二】なまなましてあり。さも新しく見えてあり。 大和「君を思ひなまなまし身を燒く時は烟多かるものにぞありける」

なまっ-なり 生成【名】『なま(生)』は接頭語』㊀十分に生りをはらざること。㊁未だ十分に生長せざる鮒。 殿中申次記「生成、三十、例年進上之」㊂能(ノ)の女假面(ヲンナ)の一。鐵面(カヂ)の曲に用ふ。

なまっ-に 生煮【名】煮方の足らぬこと、又その物。

なまっ-にえ 生煮【名】『なま(生)』は接頭語』㊀煮方の足らぬこと、又その物。㊁わざまへの、未熟なること。熟達せぬこと。 浮世親仁形氣「やれ、仙術がなまにえにて、まだよく熟(ウ)めもせぬに飛んで、臆骨を打折ったは」㊂燒いたとも煮えたともつかぬこと。挨拶・返事などの、何れとも譯のわからぬこと。

なまっ-にく 生肉【名】煮、燒きなどせぬ肉。

なまっ-にくし 生憎し【形一】『なま(生)』は接頭語』すこし憎し。〔古語〕 源氏「なまにくき事どもいひきかせつつ」

なまっ-にしん 生鯡【名】生のままにて、乾し又は煮などせぬ鯡。「に同じ。

なまっ-にんじやく 生女房【名】『なま(生)』は接頭語』宮仕して未だ年功を積まぬ女房。未熟なる女房。 宇治「ある人のもとに、なま女房のありけるが」

なまっ-ぬかる 生抜る【動四自】『なま(生)』は接頭語』すこしぬかる。なまぬるき動作を爲す。 松風村雨東帶「さりながら生抜って侮られな」

なまっ-ぬり 生塗【名】塗方の十分ならず、又は塗りて未だ仕上らず乾かぬこと、又その物。 慶長記「田舍合子の大に、尻高く底深きに、生塗なるが所所剝げたるに、毛立したる飯の黑く親交りなりけるを」

なまっ-ぬるし 生温し・生緩し【形一】『なま(生)』は接頭語』㊀少しぬるし。あたたかみ少し。㊁容貌又は擧動など、しっかりとせず。きびしくなし。てぬるし。きのふはけふの物語「長そでのなまぬるき立振舞」 兎園記「なまぬるい、櫻丸が顏つき」

なまっ-ぬるっこし 生ぬるっこし【形一】前條に同じ。 曾我扇八景「やあ、がいに生ぬるっこい番太の」

なまっ-ね 生寢【名】眠りの十分ならぬこと。熟睡せざること。

なまっ-ねたし 生妬し【形一】『なま(生)』は接頭語』すこしねたまし。〔古語〕 源氏「人知れず、なまねたしとぞおぼしける」

なまっ-ねぶたし 生眠し【形一】『なま(生)』は接頭語』すこしねぶたし。 落葉「なまねぶたかりつる日もさめて」

なまっ-のみこみ 生呑込【名】『なま(生)』は接頭語』なまなかに呑込むこと。十分に會得せざること。はんかつう。

なまっ-のり 生海苔【名】なまのままの海苔。(乾(ホ)海苔に對して)

なまっ-のろし 生鈍し【形一】『なま(生)』は接頭語』すこしのろし。うすのろし。 浮世風呂「なまのろい口拍子」

なまっ-は 生葉【名】生木(キヅ)の葉。まだ枯れきらぬ葉。

なまっ-はしたなし 生端無し【形一】『なま(生)』は接頭語』すこしはしたなし。〔古語〕 源氏「かかる末のもよほしになん、なまはしたなきまで思ひ知らるるをりも侍りける」

なまっ-はづかし 生恥し【形二】『なま(生)』は接頭語』少しはづかし。〔古語〕 狹衣「なまはづかしとおぼしたる御けしきにて」

なまっ-ばむ 生ばむ【動四自】怪しく見ゆ。〔古語〕 太平記「侍・中間(チウゲン)十餘人走り出で、用心の最中、なまばうだる人の疲乞(ツカ)するは、夜討・強盜の案内見る者か」

なまっ-はんか 生半可【副】なまなか(生中)に同じ。「訛。

なまっ-はんじっか 生半じっか【副】前條のなまっ-はんじやく 生半尺【貌】なからはんじやく(生半尺)に同じ。

なまっ-はんじゆく 生半熟【貌】前條に同じ。

なまっ-ばやり 生流行【名】『なま(生)』は接頭語』なまなかに流行すること。十分に流行せぬこと。

なまっ-はらぎたなし 生腹穢し【形一】『なま(生)』は接頭語』すこし腹ぎたなし。〔古語〕 增鏡「内に近くさぶらふ上達部(カンダチメ)などの、なまはらぎたなき」

なまっ-はらだたし 生腹立し【形二】『なま(生)』は接頭語』すこし腹だたし。〔古語〕 宇治「待ちゐたるに、二時(トキ)ばかりまで出

であはさねば、なま腹だたしう覺えて」

なま-はらだつ 生腹立つ【動四自】『まな(生)は接頭語』少し腹が立つ。〔古語〕源氏「ここちなくなどはあらぬ人の、なまはらだちやすく」

なま-び 生干・生乾【名】すこし干ること、又すこし干たること、又その物。なまがわき。なまぼし。「生干の干物(ひもの)」

なま-びいる 生麥酒【名】『英 Unpasteurized beer』殺菌のままにて、未だ蒸氣殺菌法を行はざる麥酒。

なま-ひがひがし 生僻し【形二】『なま(生)は接頭語』何となくすこしひがひがし。〔古語〕紫式部日記「なまひがひがしき事も、物の折にはいひ出したりけるを」

なま-ひとわろし 生人惡し【形一】『なま(生)は接頭語』何となくすこし人わろし。〔古語〕源氏「なま人わろく爪食はるれど」

なま-びやうほふ 生兵法【名】『なま(生)は接頭語』■すこし兵法(ひやうほふ)を學び知ること。■いささか物を知りたること。なまものじり。なまかじり。

生兵法は大疵(おほきず)の基(もと)【句】なまなかその道に通じたる者は、それを恃みて輕輕しく事を行ひ、却つて大なる失敗を招くこと多し。生悟(なまさと)り、堀に落つる。生禪(なまぜん)大疵の基。生物識(なまものじり)は川へ陷(おちい)る。〔諺語〕「同じ。〔諺語〕

生兵法は大怪我(おほけが)の基【句】前條に同じ。

なま-ぶき 生吹【名】なまくわうぶき(生鐵吹)に同じ。

なま-ぶし 生武士【名】『なま(生)は接頭語』なまくらぶし(鈍武士)に同じ。百日會我(ももかのそが)猫に鰹、武士に似合はぬ甘いこと、これ、ここになまぶしたち」「じ。

なま-ぶし 生節【名】なまりぶし(生節)に同じ。

なま-ふせがし 生防がし【形二】『なま(生)は接頭語』何となくすこし防がし。〔古語〕なまふせがしげに思ひていらふるに」

なま-ぶき 生蕨【名】ふ(蕨)を見よ。

なま-ぶき 生吹【名】なまくわうぶき(生鐵吹)に同じ。

なま-ぶし 生武士【名】『なま(生)は接頭語』なまくらぶし(鈍武士)に同じ。百日會我(ももかのそが)猫に鰹、武士に似合はぬ甘いこと、これ、ここになまぶしたち」

なま-ぶし 生節【名】なまりぶし(生節)に同じ。

なま-ふせがし 生防がし【形二】『なま(生)は接頭語』何となくすこし防がし。〔古語〕なまふせがしげに思ひていらふるに」

なま-ぶき 生吹【名】なまくわうぶき(生鐵吹)に同じ。

なま-ぶし 生武士【名】『なま(生)は接頭語』なまくらぶし(鈍武士)に同じ。百日會我(ももかのそが)猫に鰹、武士に似合はぬ甘いこと、これ、ここになまぶしたち」

なま-ぶし 生節【名】なまりぶし(生節)に同じ。

なま-ふせがし 生防がし【形二】『なま(生)は接頭語』何となくすこし防がし。〔古語〕なまふせがしげに思ひていらふるに」

なま-ぶき 生蕨【名】ふ(蕨)を見よ。

十分に火氣の通らぬこと、又その物。はんやけ。

なまーやさし 生優し【形二】『なま(生)は接頭語』ややさし。爲すに少したやすし。「そんな、なまやさしい事では、埒が明かぬ」

なまーやすし 生易し【形一】『なま(生)は接頭語』何となく易し。少しやすし。〔古語〕源氏「なほそのあつかひにと聞し召してだに、なまやすからざりしを」

なまーゆかし 生床し【形二】『なま(生)は接頭語』何となくすこしゆかし。〔古語〕枕「なまゆかしき方ざまに打ちまじりたる御中にぞありける」

なまーゆがむ 生歪む【動四自】『なま(生)は接頭語』何となくすこしゆがむ。〔古語〕源氏「院の御ため、なまゆがむ心や添ひにたらん」

なまーゆだり 生茹【名】未だ十分に茹らぬこと、又その物。なまうだり。なまうで。

なまーゆで 生茹【名】前條に同じ。

なまーゆふぐれ 生夕暮【名】『なま(生)は接頭語』すこし日の暮れたる頃。夕ぐれに近き頃。

なまーよひ 生酔【名】なまゑひ(生酔)の訛。柳樽「名月のなまよひ臺の氣であるき」

なまよみの【枕】 かひ(甲斐)にかけていふ。その意、生木の弓の意なる生弓の轉にて、生木の弓の反(ソ)りかへるに由るとも、生善身(ナマヨミ)の義にて、貝の味は生なるが善きに由るともいふ。又、一説に、薄暗(ナマヨミ)の峡(カヒ)といふ意にて續けたるなりと。萬葉「なまよみのかひの國うちよする駿河の國」

なまーよろし 生宜し【形二】『なま(生)は接頭語』何となくすこし宜し。あまりわるからず。まづ普通の程度なり。〔古語〕「なまよろしくてあるべきと宜へば」 榮花

なまり 隠【名】 かくるること。なばり。〔古語〕

なまり 訛【名】 なまること。なまりたる言訛は國の手形(テガタ)【名】言葉のなまりは、その人の生國を示す。〔諺語〕

なまり 生【名】なまりぶし(生節)の略。

なまり 鉛【名】〔鐵〕『軟かなるより鈍(ナマ)る義にて得たる名』金屬元素の一。比重一一四、主として、方鉛鐵となりて産出し、その他、白鉛鑛、硫酸鉛鑛としても可なり多量に存在す。柔軟にして、搗み易く、鎔け易く色は淺藍なり。硫酸の侵蝕に抗するを以て、硫酸製造の鉛室及び機械に用ひらる。また小量の砒を混じて彈丸となし、或は活字を鑄造し、白鑞(ハンダ)となし、丹、白粉の原料にも用ふ。古は、錫を白鉛(シロリ)といへるに對して、黒鉛(クロナ)といへり。

鉛の刀で人を斬ったやう【句】『えんたう(鉛刀)を見よ』あるべからざる事なれば、信ずべからざる譬。〔諺語〕

なまり-がみ 鉛紙【名】『明治の初年頃、外國より輸入せし鉛板の間に插みてありしを剝がし集めて賣捌きしよりこの稱あり』木製の薄葉紙の一種。硝子類、金屬器、果實等の包紙とし、又ナプキン等に製す。

なまり-がらす 鉛硝子【名】〔化〕『獨 Bleiglas』硝子の一種。白砂と炭酸加里と鉛丹とを熔合したるもの。珪酸加里と珪酸鉛との複鹽と見做し得るものにて、光澤に富み、融解し易く、比重大にして、光線を屈折する性強し。裝飾品、光學機械及び寶石の摸造等に用ひらる。ふりんとがらす。

なまり-くだ 鉛管【名】えんくわん(鉛管)に同じ。

なまり-ことば 訛語【名】なまりたる言語。よこなまり。譌語。譌言。訛言。

なまり-ごゑ 訛聲【名】訛りたるこゑ。だみごゑ。訛音。 盛衰記「なまりごゑにて、高ごゑに捉て」

なまり-せん 鉛錢【名】鉛にて造りたる錢。少量の銅または銀を含むを常とす。その鑄造は古くは醍醐天皇村上天皇の頃にあり。近くは文久の頃、仙臺藩その他にて行はれたり。「丸。

なまり-だま 鉛玉【名】鉛にて作りたる彈丸。

なまり-ちゆうどく 鉛中毒【名】鉛毒(エン)に侵されて發する病症。急性は乳樣白色物の嘔吐、下血、腹痛、身體の冷却等を起すこと多く、慢性は齒齦鉛黒色となり、貧血を起す。

なまり-ちらす 訛散す【動四自】訛聲にてむやみに物言ふ。 異途飛脚「徒士(カチ)若黨も刀の威光、銀拵(ギンゴシラヘ)も胡散(ウサン)なるなまり散して歸りしが」

なまり-づきん 鉛頭巾【名】おもりづきん(重頭巾)に同じかるべしといふ。

なまり-ばし 鈍箸【名】食事の際、箸を何れの菜に著けんかと迷ふこと。

なまり-ぶし 生節【名】鰹節を製する初に、煮たる上、一度乾して、わづかに水氣を去りたるもの。蒸して、そのまま食用とす。又往往、鰹の代に鯖を用ふることあり。なまぶし。なまり。

なまり-ぶし 生武士【名】前條の語に通はせていふ。『なまくらぶし(鈍武士)に同じ。

なまり-ぶし 訛節【名】訛りのある節まはし。 浦島年代記「唄ふ西國訛節」 譯。

なまり-ふで 鉛筆【名】えんぴつ(鉛筆)の直單に製作する時などに用ふる鉛の粉末。

なまり-ふん 鉛紛【名】光琳風の蒔繪を簡

なまる 隠る【動四自】なばる(隠る)に同じ。〔古語〕 萬葉「おし照るや難波の小江(ヲ)に蘆作りなまりてをる葦蟹を」

なまる 鈍る【動四自】『生(ナマ)にて、堅固ならぬ意。 **なまり(鉛)參照』** 一鍛ひ方十分ならずして、切味(キアヂ)鋭からず。 二にぶる(鈍る)に同じ。

なまる 訛る【動四自】『前條の語と同義に出づ』正しからぬ聲にて物言ふ。發音正しからず。なばる。よこなばる。よこなまる。宇治「よこなまりたる聲にて問ふ」

なまーわかし 生若し【形一】『なま(生)は接頭語』何となくすこし若し。うらわかし。

なまーわかんとほり 生わかんごほり【名】『なま(生)は接頭語。わかんとほりを見よ』**なまそんわう(生孫王)**に同じ。〔古語〕源氏「なまわかんとほりなどいふべきすぢにやありけん」

なまーわづらはし 生煩し【形二】『なま(生)は接頭語』何となく少しわづらはし。〔古語〕源氏「わざとがましうのたまひわたれば、なまわづらはしく」

なまーわろ 生惡【貶】『なま(生)は接頭語』なまわろきさま。〔古語〕源氏「無才の人なまわろならん振舞などみえんに」

なまーわろし 生惡し【形一】『なま(生)は接頭語』何となくすこしわろし。〔古語〕 枕「人のはらからなまわろくても侍らんからに、それにつけてやは覺(エサホ)の劣らん」

なまーね【名】〔植〕『ねは蘭の義』一おもだか(澤瀉)二に同じ。〔古語〕 二くろくわゐ(黒慈姑)に同じ。

なまゑ 生餌【名】 一いき餌(生餌)に同じ。 二すり餌(擂餌)に同じ。

なまゑひ 生酔【名】『なま(生)は接頭語』少し酒に醉ひしこと、又その人。なまよひ。生醉、本性(ホンシヤウ)違(ガ)はず【句】生醉にては、本來の性質に違ふことなし。酒の醉本性違はず。〔諺語〕

なまをかし 生可笑し【形二】『なま(生)は接頭語』何となく少し面白し。〔古語〕源氏「なまをかしくも、あはれにも、おぼしいでける」

なまをんな 生女【名】『なま(生)は接頭語』世の中の事にまだ馴れざる女。〔古語〕 枕「くぼての蓋(ハ)に、なま女の手にて」

なみ 波・浪・濤【名】一大氣の動搖により起る水面の運動。波動中の横波に屬するものなるが故に、その狀前進するがごとくなれども、その實、水の分子は、主として上下に振動し、前後に進退し、その振動を相隣れる分子に傳ふるにとどまり、ただ淺き所に多少移動することあるのみ。波浪。波濤。水波。和名「水波奈三」 二なみおと(波音)の略。源氏「消息をだにかよはさで久しうなり侍りぬるを、なみのまぎれに、如何なる事かあらんとおぼめく」 三『水の波に形の似たるふりいふ』動きて、凹凸起伏を生ずること、又その物、又その形。萬葉「あめの海に雲のなみ立ち月の舟星の林にこぎかくる見ゆ」 五〔理〕『英 Wave』はどう(波動)三に同じ。 六なみかぜ(波風)二に同じ。 新

葦(あし)に寝する八十島かけていましめや浪をさまれる時は見えける」 ㊁消えやすき物の譬。あわ。泡沫。 ㊂老いて皮膚に生ずるしわ。 平家「眉には霜を垂れ、額に浪を畳み」 ㊃うみ。海上。 新撰古今「波の千里をわたるぞと知るより外はなにはなる」

波打つ【句】㊀波が音を立てて寄来る。古今「風吹けば浪うつ岸の松なれやねにあらはれも泣きぬべらなり」 ㊁波の如く高低す。「小さき胸に波打ちて」

波掛(カ)る【句】波がうちかかる。玉葉「波かかるしづえは消えて磯の松梢ばかりにつもる白雪」

波掛く【句】波うち掛く。**なみかけ**(波掛) 参照。 千載「よしさらば磯の苫屋に旅寝せん波かけぬとて濡れぬ袖かは」

波にも磯にも著かず【句】「沖にも著かず磯にも離る」に同じ。〔諺語〕 盛衰記「源平の亂逆に不二安堵一、浪にも磯にも著かぬ風情なり」

波にも著かず、磯にも著かず【句】前條に同じ。〔諺語〕 太平記「武蔵守は未二打入一、平家には引別かれぬ。浪にも附かず、磯にも附かぬ心地かな」

波にも著かず磯にも離る【句】前條に同じ。〔諺語〕

波の【句】㊀波に屬し、又は浪に關しての。 金葉「あふことはいつとなぎさの濱千鳥なみの立居に音をのみぞ鳴く」 ㊁波の上の。波の立てる所、又は打寄する所に在る。 新古今「見し人の面影とめよ清見潟袖にせきもる浪の通路」 玉葉「待たれつる天の河原に秋立ちて紅葉を渡す波の浮橋」 ㊂波の音のごとき。 謡曲(源大夫)「昔も打ちたる太鼓の御役、…今打寄るも波の調、面白やな、有難や」 ㊃一面に並びてある。 謡曲(八島)「舟よりは関(カ)の聲、陸(カ)には波の楯」

波の綾【句】『綾織物を織るがごとくなるよりいふ』「波の皺(ジワ)に同じ。 金葉「風ふけば波の綾おる池水に絲ひきそふる岸の青柳」

波の浮寝(キヌ)【句】船中にて寝ぬること。 続拾遺 問へかしな由良の港のかぢまくら行くへも知らぬ波のうきねを」

波の心【句】波を人と見立てて、その心。 後撰「あらかりし波の心はつらけれどすごしに寄せし聲ぞこひしき」

波の笘(シザ)【句】立つ波を笘に見立てていふ語。 後拾遺「見わたせば波のしがらみかけてけり卯の花さける玉川の里」

波の潮騒【句】しほさゐ(潮騒)に同じ。 萬葉「手まどの浪のしほさゐ島よどみ」

波の標(シ)【句】一體に起つ波を、標(シ)を張渡したるに譬へていふ語。 清輔集「河社波のしめゆふ水の面は月の光も清く見えけり」

波の白絲(イト)【句】波の白沫の長く引きたるを白絲に見立てていふ語。

波の白銀(シラガネ)【句】白き波を白銀に見立てていふ語。

波の白木綿(シラフ)【句】波の砕けて白きさまを白木綿に譬へていふ語。 新勅撰「み熊野の浦わの松の手向草(タムケグサ)幾世かけきぬ浪の白ゆふ」

波の皺(ジワ)【句】㊀水面のあや。波紋。貫之集「菊の花ひちて流るる水にさへ波のしわなき宿にぞありける」 ㊁**なみ**(波)七に同じ。 古今「なにはの浦にたつ波のなみのしわにやおぼほれんさすがに命をしければ」

波の關(セキ)【句】波のために往來の妨げらるるを關に譬へていふ語。 堀本「いとどしく都戀しき夕ぐれに波の關守る須磨の浦風」

波の關路(セキヂ)【句】波のために往來の妨げらるる場處を關路に譬へていふ語。 夫木「さらぬだに人すぎがたき清見がた波の關路に花やちるらん」

波の關門(セキモト)【句】「波の關」に同じ。 夫木「清見がた鐘のこゑだに渚うつ波のせき戸に明くる月影」

波の關守(セキモリ)【句】「波の關」を見よ』 旅に寝たる夜、波の音に妨げられて、夢に故郷を見ることの叶はぬ等の場合に、その波の音を關守に譬へていふ語。 太平記「都に歸る夢をさへ通さぬ波の關守に、いとど涙を催され」

波の立居(タチヰ)【句】波の立ち、又居ること。 榮花「浪の立ちぬにつけても、かたみにこそは頼みしか」

波の玉【句】波の白沫を白玉に見立てていふ。 新撰古今「河岸のかげゆく水にうちなびき浪のたまぬく青柳の絲」

波の便(タヨ)【句】「波の使」に同じ。 玉葉「難波がた浪のたよりははるかにて沙干にとまるあまの釣舟」

波の縮(チヂ)【句】「波の皺(ジワ)」㊁に同じ。 日本武尊吾妻鑑「なみのちぢみの小倉より、絲は眞紅の結び紐」

波の使(ツカヒ)【句】寄せては返る波を使者に譬へていふ語。 夫木「別れにし千里の浦の忘貝今日こそ見つれ浪のつかひに」

波の鼓(ツヅミ)【句】波の音を鼓の音に譬へていふ語。 謡曲(東岸居士)「白河の波の鼓や、風のささら」 俳家奇人談(今德)「住の江の波の鼓や松囃子」

波の手(テ)【句】波を乘切る手。

波の初花(ハツバナ)【句】初めてあらはれる波の花。 新撰古今「うちいでし浪の初花たちかへり谷風さむく氷る春かな」

波の花【句】㊀波の白き沫を花に譬へていふ語。 古今「草も木も色かはれどもわたつみの波の花にぞ秋なかりける」 ㊁しほ(鹽)を云ふ。「女の語」

波の花摺(ハナズリ)【句】波の花の入亂れて摺合ふやうなるを譬ていふ語。

波の穂(ホ)【句】波の高く立つこと、又そのいただき。 萬葉「おしていなといねばつかれど波の穂のいたぶらしもよきぞひとり寝て」

波の帆(ホ)【句】船の波に從ひて走るさまの、帆をかけたるに似たればいふ。

波の間(マ)【句】**なみま**(波間)に同じ。 芭蕉「波の間や小貝にまじる萩の塵」

波の枕【句】船中に旅寝すること。なみまくら。 新古今「つくづくと思ひあかしの浦千鳥なみの枕になくなくぞ聞く」

波の迷(マヨ)【句】波音のために、心亂ること。 源氏「あらかりし波のまよひに住吉の神をばかけて忘れやはする」

波の紋(モン)【句】「波の皺(ジワ)」㊁に同じ。 松風村雨東帰「波をきつたる波の紋。巴にまはれば巴に追っかけ」

波の八重垣(ガキ)【句】波の幾重にも起つを八重垣に譬へていふ語。 夫木「すさのをの尊を祈るともなしに越えてぞ見まし波の八重垣」

波の雪【句】波の白沫を雪に譬へていふ。

波の木綿(ユフ)【句】「波の白木綿(シラフ)」に同じ。 新六「世とともに波のゆふこそかけつらめ神さび立てる磯のつままに」

波の寄る寄る【句】波の立ちて岸に寄るを、夜夜又は絲絲(ヨヨ)にかけていふ語。 新古今「うどの濱のうとくのみやは世をば經ん波のよるよるあび見てしがな」

波を逐ふ【句】昔、波のはげしく船に當る時、割竹にて舷側をたたき、或は大聲を發して、これを退かしむ。

散る波【句】**いそ**(磯)の異名といふ。

なみ 並【名】『なむ(並む)の假體言。接尾語のなみ(並)參照』 ㊀**ならび**(並)㊁に同じ。(多くは他の語の下に添ひて熟語を成す) 紫式部日記「つるうち二十人、五位十人、六位十人、ふたなみに立ちわたれり」 ㊁その類の物事に共通なること。そのたぐひ。比類。「古語」 大鏡「入頭殿なほすぐれさせたまへる威のいみじきに侍るめり。老(オ)いのなみに言ひすごしもぞしはべると、けしきだちて、この程はうちささめく」 ㊂『世の中に並(ナ)みてある意、即ち珍しくあらぬ意にていふ』よのつね。あたりまへ。なみなみ。尋常。普通。平凡。古今「みよしののおほ川のべの藤浪のなみに思はばわが戀ひめやは」

なみ 並【接尾】『名詞のなみ(並)を見よ』 ㊀時毎に又は物毎に行ふ意。「軒なみ」「月なみ」「日なみ」 ㊁徳川時代に、官名に添へて、接頭語ごん(權)と同樣の意に用ひし語。

なみ 無み【句】なし(無し)の條下を見よ。

なみ-あし 並足【名】普通の速度にて歩むこと。(はや足・かけ足などに對して)

なみ-あと 波跡【名】打寄せたる波の跡。

なみ-あひ 波間【名】なみま(波間)に同じ。

なみ-いしや 並醫者【名】手腕の普通なる醫者。平凡なる醫者。

なみ-いた 波板【名】■芝居の小道具の一。浪の形を彫がきたる板。素人狂言紋切形「幕明はお定りの通り、柳の木をあいしらって波板を二三枚、桂川のいきかたで、櫻川といふ制札」■なまいた(海鼠板)に同じ。

(日) たいみな

なみ-いと 波絲【名】かべいと(壁絲)に同じ。

なみうち-ぎは 波打際【名】波の打寄する岸。なぎさ。みぎは。

なみうち-たつげ 浪打嶺【名】〔地〕陸奥國二戸(ノヘ)郡福岡町と一戸(イチノヘ)町との間なる嶺。古歌の歌意を誤りて、ここを一般に末の松山と稱すれども、實は浪打の名に因りて附會せるなり。すゑのまつやま(末松山)參照。

なみ-うづ 波渦【名】模樣の一。波模樣にて波板を二三枚、桂川のいきかたで、櫻川といふ制札」■なまいた(海鼠板)に同じ。

なみえ 浪江【名】〔地〕磐城國雙葉(フタバ)郡にある町。鐵道常磐線の一驛。

なみえ-げら 波江啄木鳥【名】〔動〕啄木鳥(キツツキ)の一種。大赤啄木鳥(オホアカゲラ)に酷似すれども、翼の黑色部それよりも多く、背上、横に三條の白帶あり。大和國に產す。

なみ-おと 波音【名】波の打寄せ、又は引く時などの音。

なみ-おにがはら 波鬼瓦【名】左右に波の模樣ある鬼瓦。

なみ-おろし 波風【名】水面を吹きて波を立たしむる風。謠曲「春雨」「有明の月は入りしほに、吹くは鹽風、響くは波おろし、はやち・干潟(ヒガタ)・あいの風、吹き曇れども」

なみ-かけ 波掛【名】『「波掛く」を見よ』次條を見よ。

なみ-かけ 波陰【名】波の打寄せざる所。一說に、かげはかけにて、波掛の義、卽ち波のしげく打寄する所をいふと。【古語】 續齒

なみかけ-ごろも 波掛衣【名】波に濡れたる衣。波のぬれきぬ。新古今「須磨のあまの浪かけ衣よそにのみ聞くは我が身になりけるかな」

なみかけ-の-うら 浪懸浦【名】〔地〕次條に同じ。夫木「浪懸の浦の寢覺にいとどしく物思ふてふ雁がねの聲」

なみかけ-の-きし 浪懸岸【名】〔地〕筑前國遠賀(オンガ)郡山鹿(ヤマガ)村の東北約五町にある海岸。岩石出入し、西北風烈しき時は、激浪衝突す。大浪懸・小浪懸の稱あり。夫木「松の根にあらはれにけり年を經ていかでかはれぬ浪懸の岸」

なみ-がしら 波頭【名】波の立ちたるさき。浪の穗。波頭(ハトウ)。几董「まさご路やかげろふを追ふ波がしら」

なみ-かず 並數【名】人並のかず。【古語】後撰「なみかずにあらぬ身なれば住吉の峰にもよらずなりやはてなん」

なみかぜ 波風【名】■波と風と。風强く吹きて、波の高く立つこと。かざなみ。風波(フウハ)。風浪。風濤。■さわぎ。あらそひ。ごたごた。もめ。なみ。風波(フウハ)。 樂好法師集「世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波の鳴門は波風もなし」

なみがた 波形【名】波のごとき形。波の紋。 萬葉百首「波がたの水まさ雲にかげくれておぼろに見ゆる月のふなかげ」

なみかたうま 並片馬【名】將棊に於ける、三段の段位。

なみかはせ 並爲替【名】【商】『英Remittance』送金爲替の、普通の手續に依るもの。卽ち送金者は銀行より送金高に對する手形を購入して、受取人に送り、受取人は、その地の指定銀行より右手形面の現金を受取るもの。(電信爲替に對して)

なみかはせいしよ 並河誠所【名】【人】儒者。天民の兄、父を儉齋といふ。通稱は五一郎、名は永(一說、永崇、字は宗永(一說、永父)、後、尙永と改む。丹波國の人。伊藤仁齋に學び、掛川・川越城主に歷仕し、後、江戸に帷を下し、又、去って伊豆國三島に住み、輿地通誌畿內の部六十一卷を撰して幕府に上る。元文三年歿す。年七十一。

なみかはそうすけ 濤川惣助【名】【人】七寶家。下總國の人。三河・尾張地方の陶磁器製產地を視察研究して、遂に無線七寶を發明し、明治二十八年綠綬褒章を賜はり、翌年帝室技藝員に擧げられ、同四十三年歿す。年六十七。

なみかはてんみん 並河天民【名】【人】儒者。通稱は勘助、名は亮、字は簡亮。誠所の弟。兄と共に伊藤仁齋に學びしが、その說に疑を生じ、大いに啓發するところあり。仁齋の歿後、その徒分れて二となり、一は東涯に從ひ、一は天民に屬す。經濟を以て己の任とし、傍ら兵學・本草學及び醫術をも修む。享保三年歿す。年四十。

なみがへし 波返【名】雅樂の青海波(セイガイハ)にある、太鼓の打方。祕曲の一たりといふ。謠曲「梅枝」「波も靜かに、青海の、青海波の波返し返すや袖の折りも得で」同井筒「青海波の波返し、かへすや袖のをりを得て」

なみき 並木【名】■ならび立ちてある木。一列に植われる木。つらき。列樹。行樹。津國女夫池「時しも五月下旬の五月闇、右は並木、左は小川」■道路の兩側などに、一列に樹を植ゑつけたるもの。

なみき 並木【名】〔地〕東京市淺草區藏前(クラマヘ)より淺草寺へ通ずる道路。駒形(コマガタ)町の北、茶屋町の南なる兩側の稱。柳橋狂言を書いて並木を息子行き」

なみき-がくれ 並木隱【名】並木に隱るること、又その隱れたる所。若風俗「さしあしして並木がくれに行くを」

なみき-ごへい 並木五瓶【名】【人】狂言作者。■(初代)。大阪の人。通稱は吾八。並木正三の門人。明和中、江戸に下りて、宗十郎・三世菊之丞・五世松本幸四郎のために筆を執る。傑作多く、時代物は一番目、世話物は二番目と定まりしも、この人の力に由る。文化二年歿す。年六十三。■(二代)。幕府旗本の士野野山大膳の次男。初代の門に入りて篠田金次といひ、葛葉山人・萬壽亭・鳳鳳軒の別號あり。初め並木宗六といふ。文政二年歿す。年五十二。■(三代)。因幡屋不平次と稱し、江戸の人。二代の門に入り、はじめ篠田惣六といひ、後に篠田金次と改む。安政三年歿す。年不詳。

なみき-さう なみき草【名】〔植〕唇形(シンケイ)科に屬する多年生の草。莖は方形にして、高さ約一尺、葉は對生し、鈍披針形、鋸齒を有し、初夏、葉腋に花を著く。花冠、唇形にて、通常翠紫色、中心に白斑あり、稀に白色のものあり。各地の原野及び海岸の砂地に自生す。ほたるさう。るりたつなみ。

なみき-しき 並木敷【名】並木の樹立せる部分の土地、又は並木を保護扶植するため、道路の兩側もしくは一側に、並木に沿ひて殘したる土地。

なみき-しやうざう 並木正三【名】【人】淨瑠璃及び狂言作者。通稱は高砂屋平右衞門、一に和泉屋正朔の子ともいふ。大阪道頓堀の人。菓子屋を業とす。並木宗輔の門弟。豐竹座に勤め、狂言の傑作多し。劇場の道具を改良し、廻(マハ)舞臺・競出(セリダシ)・三段返等を工夫す。安永二年歿す。年四十四。

なみき-そうすけ 並木宗輔【名】【人】淨瑠璃作者。通稱は松屋宗助。市中庵といひ、千柳と號す。大阪の人。西澤一鳳の門人。豐竹座・竹本座に勤め、三好松洛・竹田出雲等と合作して、一代の作凡そ五十篇に達し、名篇多し。寬延二年歿す。年五十七。

なみき-ぬ 波衣【名】大嘗會(ダイジヤウヱ)の時、天皇の沐浴したまふ浴槽(ユヤウ)に覆ふ絹。

なみぎは 波際【名】なみうちぎは(波打際)に同じ。

なみ-きり 波切【名】しほきり(潮切)■に同じ。

なみきる-ひれ 波切比禮【句】ひれ(比禮)の條下を見よ。

なみ-くぐり-ぶね 波潛船【名】波の入らぬ裝置をなし、顚覆の憂を免れしむるやうにしたる小船。

なみ-くぬぎ 【名】釣樟(ウラジロ)の根。

なみくも-の 【枕】靡く藻のといふ意にて、藻の靡き寄るがごとく、夫に從ふ意より、うつくしづま(美妻)にかけていふ。一說に、浪の形の雲の義なりと。 萬葉「なみくものうつ

くしづまと語らはで別れし來れば」

なみくら 並藏【名】幾つも並び立てる蔵。〔古語〕拾遺「高島やみをの中山そま立てて造り重ねよ千代のなみくら」

なみくら-やま 連庫山【名】〔地〕近江國高島郡にある山。琵琶湖の西方に位す。萬葉「さざなみの連庫(なみくら)山に雲居れば雨ぞふるちふ歸りこ我がせ」

なみ-ぐるま 波車【名】かはぶね(川船)の異稱。藏玉集「波車。河舟。大和物語にあり」

なみ-こし 波越【名】波を隔つること。波を越えて爲すこと。なごし。萬葉「朝なぎにまかぢ漕ぎ出でて見つつこしみつの松原浪越に見ゆ」

なみ-ざけ 並酒【名】なみの酒。あまり上等ならぬ酒。狭騰翠毛「この邊で飲む並酒とは違うて、こりや生諸白(きもろはく)ぢや」

なみ-しな 並品【名】普通の品物。なみなみの品。〔古語〕「し。

なみしな 【名】あま(海人)の異稱なりといふ。

なみす 蔑す【動佐變他】『無みすの義。よみす(嘉す)おもみす(重みす)などと同類の語』無きものと見なす。ないがしろにす。侮る。

なみ-せき 浪關【名】和船の舳の前面の、浪を防ぐところ。中敷居込板ありて、戸を立つ。表の眞向。

なみせき-まはり 浪關廻【名】和船の表のなみ-せん 浪錢・波錢【名】裏面に波形ある錢の總稱。即ち寛永眞儀錢・精巧錢・文久錢等。娼妓細見「周室を陷したる褒似が穿(うが)ち、波錢一本落したる鳥銃河岸(かがん)の穿も」

なみそ 【名】〔動〕あをだいしやう(青大將)に同じ。

なみ-そや 並征矢【名】普通の征矢。今昔「並征矢四十ばかり差したるを負ひたり」

なみだ 涙・泪【名】目眼球の上外部にある淚腺より分泌する透明なる液體。常も、少しづつは出でて、眼球を濕せども、烈しき感動に逢ふ時は、その量を增して溢れ出づ。なんだ。眼水。目涙を流すこと。泣くこと。涙ながらにすること。五人女「何ながらへて甲斐なしと、泪に語るにぞ、座中袖をしぼりて」二人情。思ひやり。「血も涙も無い」四花などの上における露の譬。

涙多し【句】目涙を流すこと多し。悲しみ多し。二同情に富む。多涙なり。五人女「親の茂介(もすけ)殿の事のみ言出して、泪片手、夜すがら話し」

涙片手に【句】片手に涙を拭ひながら。泣きながら。涙ながらに。涙と共に。曾根崎心中「涙片手におもてを見れば、夜の編笠」

涙曇る【句】「涙に曇る」に同じ。千載「大方にさやけからぬか月影は涙くもらぬ人にみせばや」

涙と共に【句】泣きながら。涙ながらに。「涙と共に物語る」

涙に浮沈む【句】涙に浮き、又、涙に沈む。甚しく泣悲しむ。增鏡「涼闇の三とせまでにならんことを、いとまがまがしくゆゆしと、皆人思ふべし。…ここも、かしこも、高きも、下れるも、都も、遠きも、島島も、涙に浮沈みてぞ過し給ひける」

涙に浮く【句】涙の中に、わが身の浮ぶほどに、甚しく泣く。〔古語〕榮花「つゆ物も聞しめさで、ただ夜晝なみだにうきてのみおはしませば」

涙に溺(おぼ)る【句】欠條に同じ。

涙に溺(おぼ)る【句】『涙の海又は涙の川などに溺れ沈む義』正體なきまで泣く。榮花「あさましう涙におぼれまどふ」

涙に腐(くた)す【句】涙のためにくさらす。

涙に暗(くら)す【句】涙に曇らす。〔古語〕續千載「ひとりわが涙にくらす月影を誰れとさやかに人の見るらん」〔同じ。

涙に暮らす【句】なきくらす(泣暮す)に同じ。

涙に暗(くら)る【句】涙のために心くらくなる。悲しみて途方にくる。源氏「雲の上も涙にくもる秋の月いかですむらん浅茅生(あさぢふ)の宿」一代男「こまごまと書きつづけしを涙にくれて讀む中に」

涙に沈む【句】なきしづむ(泣沈む)に同じ。榮花「ただ涙に沈みて、過させたまひけり」一代男「目もくらみ、涙に沈み」

涙に絞る【句】涙にぬれたるものがしぼるばかりになる。

涙に迷ふ【句】涙にくれてまどふ。新千載「たらちねのあらばといとどかきくれて涙にまよふ敷島の道」

涙に身を濕(うるほ)ぐ【句】涙にて身をすぐほどに、甚しく泣く。〔古語〕榮花「口唱(くしょう)、はるかに聲なげたれば、さばかり悲しき事のもよほしなり。おはしましやらず、涙に御身どもすすがせたまふ」

涙に咽(むせ)ぶ【句】欠條に同じ。榮花「宮司ども、涙にむせて仕うまつる」

涙に咽(むせ)ぶ【句】聲のむせぶほどに涙を流す。よよと泣く。

涙の【句】目涙を流しながらの。涙を流すほどの。金葉「おのづから夜かるるほどのさむしろは涙のうきになると知らずや」今宮心中「泣いつ戀しつさまざまに、慈悲心餘る涙の愈見」二涙のかかる。涙に濡るる。續後撰「いかにせん涙の袖に海はあれど同じ渚に寄る舟もなし」謠曲(清經)「これる涙の手枕を並べて、二人が逢ふ夜なれど」

涙の雨【句】目しげく落つる涙を雨に譬へていふ語。涙の時雨(しぐれ)。後撰「目も見えず涙の雨のしぐるれば身のぬれ衣はひるよしもなし」二なみだあめ(涙雨)に同じ。

涙の霰【句】はらはらと落つる涙を霰に譬へていふ語。井筒業平河内通「くらむ眼に涙の霰はらはらはら」

涙の池【句】〔をたたへたるところ。謠曲「ならびゐて遊びしものを鳥鳥の涙の池にひとりゆくかな」

涙の絲【句】涙の垂るるを絲に譬へていふ。心中宵庚申「三筋四筋の涙の絲、たぐり出だすが如くなり」

涙の色【句】目涙の色あひ。「血の涙」參照。後撰「世の常のねをしなかればあふことの涙の色もことにぞありける」中宵庚申「一重廻の抱へ帶、涙の色にそめかへて」二泣くやうす。綠田兵衛名所重「思を告ぐる涙の色」

涙の潮(かい)【句】涙のおびただしきを潮にたとへていふ語。

涙の海【句】前條に同じ。榮松「たれにより涙の海の身を沈めしほるる蠶となりぬとか知る」

涙の川【句】甚しく流れ出づる涙を川に譬へていふ語。なみだがは。落葉「袖朽(くち)す涙の川の深ければふちの衣といふにぞありける」榮花「見る人ごとにことわりの涙の川を流すかな」

涙の雲【句】涙に曇れるを雲のおほふに譬へていふ語。「の時。

涙の蓑(みの)【句】涙にくれたること、又その涙。

涙の氷【句】涙の流れて氷れるもの。涙のつらら。新勅撰「ねや寒きぬたれ髪の長き夜に涙の氷むすぼほれつつ」

涙の垢離(こり)を掻く【句】『垢離の行をなし得る程の、多くの涙を流す義』甚しく泣悲しむ。雜袋「故郷の方を見渡して、涙のこりをぞ掻きまぶ」

涙の衣(ころも)【句】涙にぬれたる衣。

涙の時雨(しぐれ)【句】しげく落つる涙を時雨に譬へていふ語。涙の雨。新勅撰「月のうちの桂の枝をおもふとや涙のしぐれふる心地する」

涙の潮(しほ)【句】「涙の潮(かい)」に同じ。曾丹集「谷川の涙のしほにくちぬべし世にはからくてすみの江の松」

涙の數珠(じゅず)【句】涙の玉といふより、數珠に譬へていふ。

涙の筋【句】涙の絲筋。流るる涙。蓄の門松「美ましさと悲しさと、涙の筋は多けれども」

涙の水晶【句】涙の露を水晶にたとへ

涙の末【句】涙のはて。千載「あさましやおさふる袖の下くぐる涙の末をいかにみつらん」

涙の關(せき)【句】涙をせきとむる物事。

涙の底【句】涙の淵の最も深き所。悲みの底。新勅撰「昔思ふ涙の底に宿してぞ月をば袖のものと知りぬる」

涙の玉【句】涙の露を玉に譬へていふ語。古今「ふち衣はづるる絲はわび人の

涙の玉の緒とぞなりける」

涙の端(ハシ)**【句】**涙をさそふいとぐち。俊成集「朽ちはてん涙のつまと知らざりき契りし中の夜半のさ衣」「じ。

涙の旋毛(ツムジ)**【句】ふうるね**(風涙)に同じ。

涙の露【句】涙の雫を露に見立てていへる語。新古今「よもすがら消えかへりつるわが身かな涙の露にむすぼほれつつ」

涙の氷柱(ツラヽ)**【句】**「涙の氷」に同じ。新古今「年暮れし涙のつらら解けにけり苔の袖にも春や立つらん」

涙の波【句】涙の浮び又は涙にしづむを波の浮沈にかけていふ語。

涙の初入(シホ)**【句】**涙の色に初めて一入染むること。夫木「このごろの雁の涙の初しほに色わきそむる峯の松風」

涙の初染(ソメ)**【句】**涙の色に初めて染むること。「く一筆。

涙の一筆(フデ)**【句】**涙にくれながら書

涙の隙(セキ)**【句】**涙の出でぬ時。榮花「しのびつつ涙のひまにはいひかはしたり」

涙の淵(フチ)**【句】**涙の多く湛へたるを淵に譬へていふ。新千載「しのびつつ長きよすがら戀ひわびて涙の淵に浮びてぞふる」

涙の外(カハ)**【句】■**涙と關係なきこと。涙の出でぬ時。涙のひま。新勅撰「荻の葉に風の音せぬ秋もあらば涙のほかに月は見てまし」■涙以外。續古今「紫の戸に雨のしぐるる木の葉かな涙の外に袖はぬれねど」

涙の闇(ヤミ)**【句】**涙にくれて、心の暗くなること。泣きて別るること。

涙の別(ワカレ)**【句】**涙を流して別るること。

涙離る【句】涙に遠ざかる。續千載「山かげはうきよの外と思へども涙はなれぬ墨染の袖」

涙亂る【句】正體なきまでに泣く。

涙を貫く【句】甚しく泣く。若風俗「大藏がなりゆく有樣に涙をつらぬき、寺前の松柏も枯れぬべし」

涙を呑む【句】『いんきふ(飲泣)を見よ』

涙を揮って、馬謖(バショク)**を斬る【句】**『三國志の諸葛亮傳に「亮爲レ政無レ私、馬謖素爲二亮所一知、及二敗軍一流涕斬レ之、而郤二其後一」とあり』法の嚴正を保つ爲に、私情をすつ。〔諺語〕

涙を揮ふ【句】落つる涙を手にてはらふ。悲しさを忍びて爲す。

喜の涙【句】うれしなみだ(歡涙)に同じ。平家「齋藤五・齋藤六はいふに及ばず、北條の家の子郎等どもも、皆喜の涙をぞ流しける」增鏡「まことかとのたまふままに、よろこびの御涙ぞ落ちぬる」

なみだ 涙【接頭】特別のなさけにて與ふる僅かなる物の意。「涙米(ナミダ)」「涙金(ナミダ)」

なみだ-あめ 涙雨【名】涙が雨に化して降るといふ、その雨。「虎が涙雨」參照。

なみだいがい 並大概【名】次條に同じ。當世虎の卷「死ぬる所を介抱して、連れてここまで來る内も、なみ大概や大かたの難儀なこっちやおざんせん」

なみだいてい 並大抵【名】なみなみ。一とほり。たいてい。「並大抵の事では無し」

なみだ-がすみ 涙霞【名】涙の、霞となりて、目のよく見えぬこと。なみだぐもり。

なみだ-がち 涙勝【名】涙の出でやすきこと。源氏「年の積るままに、いと涙がちにてすぐしはべるを」

なみだ-がは 涙川【名】「涙の川」に同じ。

なみだ-がは 涙川【名】〔地〕■伊勢國三渡川の別稱。■陸前國桃生(モヽフ)郡橋浦村に於ける、追波(オッパ)川の一部。新後拾遺「みちのくの袖の渡の涙川心のうちに流れてぞすむ」

なみだ-きん 涙金【名】人情的に與ふる金錢。同情して、人に與ふる僅少の金錢。

なみだ-ぐまし 涙含し【形二】涙ぐむべくあり。〔古語〕萬葉「妹とこしみぬめの崎を歸るさにひとりして見れば涙ぐましも」

なみだぐむ 涙含む【動四自】『ぐむは(含む)の略』眼に涙をふくむ。涙をもよほす。泣かんとす。源氏「なでしこの花を折りておこせたりとて、涙ぐみたり」

なみだ-ぐもり 涙曇【名】涙のために目のくもること。なみだがすみ。謠曲(檜垣)「涙曇の顏ばせは、それとも見えぬ袂を」

なみだたけ【名】〔植〕**をなもみ**(菜耳)に同じ。萬葉草「菜、耳奈具多介」

なみだ-ごころ 涙心【名】涙をもよほす心。あはれを感ずしむる心。謠曲(三井寺)「古を今思寢(オモヒネ)の夢だにも、涙心の寂しさに」

なみだ-ごめ 涙米【名】おなさけに與ふる米。俗謠「木曾へ木曾へと附けだす米は伊奈や高遠(タカトヲ)の涙米」

なみだ-ごゑ 涙聲【名】涙を流しながら物をいふ、あはれげなる聲。なきごゑ。おろおろごゑ。

なみだ-ぐむ 涙染む【動四自】涙にしむ。涙に濡る。

なみだ-ぐる 涙汁【名】なみだ(涙)■に同じ。雜「姑(トジ)の涙汁」「同じ。

なみだ-せん 涙錢【名】なみだきん(涙金)に同じ。

なみだ-たり 承淚【名】『涙垂の義』經穴(イケツ)の一。目の下七分ほどのところ。〔古語〕和名「黃帝内經云、目下謂二之承泣一、和名、奈美太太利」

なみだ-たち 並立【名】なみたつこと。並びて立てること。〔古語〕萬葉「二上(フタカミ)のたふとき山のなみたちの見がほしの山と」

なみだ-たち 並駄賃【名】普通の駄賃。挽久物語「白馬は並駄賃より高し」

なみだ-たつ 並立つ【動四自】ならびたつ(並立つ)に同じ。〔古語〕後撰「なみたてる松の緑の枝分かずをりつつ千代を誰れとかは見ん」

なみだ-っぽし 涙っぽし【形二】『ぽしは接尾語』涙の落ちんばかりなり。涙落ちやすし。なみだもろし。

なみだ-っぽろし 涙脆し【形二】なみだもろし(涙脆)の訛。「上の方。

なみだ-たて 波立【名】魚の尾の一部。尾鰭の

なみだ-ながら 涙乍【副】次條に同じ。類拾遺「かき流す涙ながらぞ手向けつる物思ふ袖の露の玉づさ」

なみだ-ながら-に 涙乍に【副】泣きながら。泣く泣く。

なみだ-の-いけ 涙池【名】〔地〕攝津國西成(ニシナリ)郡中島村大字小松にある池。山家「よしさらば涙の池に身をなして心のままに月宿らなん」

なみだ-ばやし 涙早し【形二】なみだもろし(涙脆し)に同じ。

なみだ-べんけい 涙辨慶【名】なきべんけい(泣辨慶)に同じ。

なみだ-ぼふし 涙法師【名】なきむし(泣蟲)に同じ。用捨箱「人を嘲り卑めて法師といひ、又、坊・發意(ホツイ)ともいふ。これら大抵蟲といふにも通ふ。しはむし・しはん坊の類、種種あり。涙法師は、今いふ泣蟲なり」

なみだ-まじり 涙交【名】涙ながらなること。泣きながらすること。夕霧阿波鳴戰「涙まじりの笑顏」

なみだ-め 涙眼【名】るゐがん(涙眼)に同じ。

なみだ-もろ 涙脆【形二】涙もろきさま。〔古語〕源氏「なみだもろにおはせぬ心づよさなれど」

なみだ-もろし 涙脆し【形二】■涙の出でやすき性質なり。なみだばやし。源氏「例の、涙もろきは、ふとこぼれいでぬるも、いと苦し」■情に動かされ易し。なさけふかし。氣が弱し。多涙なり。

なみ-ぢ 波路【名】ふなぢ(船路)に同じ。源氏「浦人のしほ汲む袖にくらべみよ波路隔つるよるの衣を」

なみつき-の-みや 雙槻宮【名】いけのべのなみつきのみや(池邊雙槻宮)の略。

なみつき-じんじや 雙槻神社【名】いはれやまぐちじんじや(石寸山口神社)に同じ。

なみづまーぎみ 波豆麻君【名】なみづまといふ地に住む人の意かとも、波豆麻は波里

摩附(ハリツケ)の誤寫にて、榛(ハリ)を衣に摺著くるをいふかともいふ。〔古語〕 萬葉「すみのえのなみづぎみが馬のりどろもさにづらふあやめをするを縫へる衣ぞ」

なみ-てすり 浪手摺 【名】芝居の道具だての一。浪の模を彩がきて、後黄幕の前などに、横に立つるもの。

なみ-と 波音 【名】**なみおと**(波音)の略。〔古語〕 萬葉「天の川浮津のなみと騒ぐなりわが待つ君し船出すらしも」

なみ-とう 並等 【名】普通の等級。高くもなく、低くもなき等級。中等。

なみ-ともゑ 波巴 【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(ゑもどみな)

なみ-なし 並無し 【形】【一】ならびなし(並無し)に同じ。〔古語〕 敏本「いかにいかにと見向かへてもありなめど、なほし並なき品ぞほしけき」

なみ-なと 波音 【名】**なみおと**(波音)に同じ。〔古語〕 萬葉「ゆこさきになみなとゑらひしるへには子をら妻をらおきてらも來ぬ」

なみ-なみ 並並 【名】【一】ならぶこと。〔古語〕 萬葉「なにせむとたがひはをらむいなもうも友のなみなみ我れも寄りなむ」【二】よのつね。あたりまへ。ひととほり。なみ。尋常。平凡。 源氏「なみなみの人にも、ものものたまはねば、かたじけなう心ぐるしう」 同「女も、なみなみならずかたはらいたしと思ふに」

なみ-なみ 波波 【貌】溢れこぼれんとするほどに滿ちたるさま。滿滿。

なみのうへ-の-じんじや 波上神社 【名】次條に同じ。

なみのうへ-の-みや 波上宮 【名】**うなかみのみや**(波上宮)に同じ。

なみ-の-こ 波子 【名】〔動〕次條の略。

なみのこ-がひ 波子貝 【名】〔動〕瓣鰓(ベンサイ)類に屬する貝。殻は三角形に近くして、丸味あり。長さ約一寸、地は帶白乃至褐色にして、暗色の放射帶と輪様帶とを有し、扁平にして、その邊緣に微小なる鋸齒を具ふ。海濱の淺底の砂中に棲息す。なみのこ。

なみのひら-ゆきやす 波平行安 【名】〔人〕刀鍛冶。薩摩國谷山郡の人。寛弘頃の人。

なみのまる 波丸 【名】【一】波の形を丸く描きたる模様。【二】紋所の一。波形を圓形にしたるもの。これに「荒浪の丸」「中輪浪の丸」などあり。

なみ-はづる 並外る 【動下二自】普通の程度以外なり。なみの物事に異なり。「並外れて大きい」「並外れて小さい」

なみ-はづれ 並外 【名】なみはづれてあること、又その物事。どはづれ。づはづれ。

なみ-はば 並幅 【名】なみの幅。普通の幅。織物のは、鯨尺にて八寸乃至一尺、その二倍なるを大(オホ)幅といふ。

なみ-びらき 波開 【名】從來、航路の知られざりし海を、初めて渡ること。

なみ-ふる-ひれ 波振比禮 【句】ひれ(比禮)の條下を見よ。

なみ-ほ 波穂 【名】「波の穂」に同じ。〔古語〕 起秀起波穂(ナミホ)之上、起二八尋殿一

なみ-ま 波間 【名】【一】『あまま(雨間)』ひさま(人間)などと同類の語』浪の立たぬあひだ。〔古語〕 源氏「浦風やいかに吹くらん思ひやる袖うちぬらし波間なき頃」【二】波と波との間。 謡曲「壇風」船はなみに遠ざかれば、追手はあとに近づきたり」

なみまがしは 波間柏 【名】〔動〕瓣鰓(ベンサイ)類に屬する軟體動物。殻質薄く、一方の殻は圓形にして膨れ、一方の殻は扁平にして、他物に附著す。各地の淺海に產す。

なみ-まくら 波枕 【名】【一】「波の枕」に同じ。〔古語〕 金葉「なみ枕いかに浮寢を定むらんこほる益田の池のをし鳥」【二】波の音の、枕もとに聞え來ること。 新勅撰「なみ枕夢にもみえずいもが島なにを形見の浦といふらん」

なみ-まつ 並松 【名】並木の松。 浪華「臥高」

なみ-みつどもゑ 波三巴 【名】紋所の一。三箇の大なる浪頭と十二箇の小なる浪頭とにて、圓形に作りたるもの。

なみ-もの 並物 【名】普通の品物。上等にも下等にもあらぬ品。 「矢」を見よ。

なみや 雙矢 【名】のちふたぎなみや(後窒雙矢)の略。

なみやうじ 名名字 【名】名と、みやうじと。 狂言「しじかり」「旦那とならっしやられて下されまするからは、過去帳にも書きまするほどに、名名字を名のらっしやれい」

なみやか 並やか 【貌】なみなみなるさま。なだらか。〔古語〕 辨要抄「うらうらと、なみやかに、然も一節ある體を」

なみやぶり-ぶね 波破船 【名】こばや(小舸)に同じ。

なみゆく 並行く 【動四自】ならびて行く。〔古語〕 起人不レ得二並行(ナミユク)一

なみよけ 波除 【名】【一】波をよくること、又そのために設けたる物。【二】打寄する波を防ぐために、海岸より海中に築出したる堤。防波堤。

なみよけ-いしがけ 波除石垣 【名】波よけのために設くる石垣。

なみよけ-ぐひ 波除杙・波除杭 【名】波よけのために、岸に近き海中などに立つる杙。防波杙。

なみ-よる 並寄る 【動四自】並びて寄りあふ。〔古語〕 源氏「引寄せたまへるに、御ぐしの、なみよりて、はらはらとこぼれかかりたるほど」 榮花「池に、いろいろの蓮花なみよりて」 金葉「吉野山峰になみよる白雲と見ゆるは花の梢なりけり」

なみ-わけ 波分 【名】【一】馬の旋毛(ツジ)の、頸の底部、喉の下に當る部にあるもの。【二】軼(ガイ)のあと房との中間。

なみ-わり 浪破 【名】しほきり(潮切)【二】に同じ。

なみ-ゐる 並居る 【動上一自】ならびてゐる。つらなる。たちならぶ。 顯藥「水の面にやどれる月ののどけきはなみゐて人のねぬ夜なればか」

なみをか-じやう 浪岡城 【名】陸奥國南津輕(ツガル)郡浪岡村にありし城。正平以後、北畠氏の子孫と稱する者これに居り、御所と稱したりといふ。天正年中、北畠顯村ここに居り、大浦氏に亡されたり。

なみをぶね 波小舟 【名】波に浮び居る小船。波にただよへる小さき船。 謡曲(白髭)「我れは心も波小舟」

なむ 並む 【動四自】**ならぶ**(並ぶ)に同じ。〔古語〕 榮花「かをりたる扇どもさし隱して、なみさぶらふほど」 榮花「うるはしくさうぞきおはしましなめば、十六の大國の王などのやうに見えさせたまふ」 聖德太子傳曆記「ゆきの岡の松なみて、人目もしげる葉もしげる」

なむ 並む 【動下二他】**ならぶ**(並ぶ)に同じ。〔古語〕 古今「駒なめていざ見にゆかんふるさとは雪とのみこそ花は散るらめ」 大鏡「この姫君たちをすゑなめて、泣く泣くのたまひける」

なむ 嘗む・甞む・舐む・甜む 【動下二他】【一】舌の尖にて撫づ。ねぶる。【二】あぢはふ。經驗す。體得す。「浮世の辛酸を嘗む」 【三】男が女と私通す。【四】侮りて取扱ふ。「無禮(ブレイ)たり」參照。「人を嘗めてかかる」 傾城反魂香「葬禮の戸に、祝言の家へ立寄るは、なめ過ぎた不道化(ブドウケ)、可笑しうない、歸れ、歸れ」 【五】『疊を嘗むといふ義』花骨牌にて、或札を、重ね伏せてあるものの最も下に置く。なめ(嘗)參照。

なむ 南無 〔梵 Namah 又 Namo〕【感】〔佛〕『原語の原體は Namas にて、Namay (贊讀・納莫などは、その音譯)は獨立語として用ふる時の形、Namo(南無・南牟などは、その音譯)は弱き音の前に立つ時の形。歸命(キミヤウ)・敬禮(キヤイ)・歸敬(キキヤウ)などと譯す』佛に祈る時、歸依・信順の意にて唱ふる語。なうまく。なも。「南無阿彌陀佛」「南無三寶」 平家「西方に向ひ、手を合はせ、高聲に念佛百遍ばかり唱へたまひて、南無と唱ふる聲共に、海にぞ飛入りたまひける」 隅田者曩者熟寃、南無淺草の觀音さま」 嚢野元順「南無や空ただ有明の時鳥」

南無あいだ 【句】〔佛〕「南無阿彌陀」の音便。 孕常談「南無阿彌豆腐、なまいだ、ああ、なむあいだ」

南無阿彌陀 【句】〔佛〕「南無阿彌陀佛」の略。 都鄙「南無阿彌陀南無阿彌陀と唱へて」

南無阿彌陀佛 【句】〔佛〕次條の略。

南無阿彌陀佛 【句】〔佛〕次條の略。

略。燈入卦柱鬚「南無阿彌陀ぶを帆にあげて」

南無阿彌陀佛(ナムアミダ)《梵 Namo 'mitâbhâva buddhâya》【句】〔佛〕一心に阿彌陀佛の冥護を頼む意にて唱ふる語。眞宗には六字の名號(ミゃウ)といひ、又これを唱ふるを稱名(シャウ)、又念佛といふ。拾遺「一たびも南無阿彌陀佛といふ人の蓮(ハス)の上にのぼらぬはなし」

南無阿彌陀佛耶(ボヤ)【句】〔佛〕『漢字の唐音』前條に同じ。義術公義經記「同音に、南無おみとぼや、ととぎやとやと唱へつつ進めり」

南無喝囉怛那(カラタナ)哆羅夜耶(トラヤヤ)《梵 Namo ratnatrayâya》【句】〔佛〕『喝囉怛那は本音アラタナにて、寶の義、哆羅夜耶は三の義』「南無三寶(ボウ)」に同じ。

南無歸命(キミャウ)【句】〔佛〕南無とその譯語歸命との重言。

南無歸命(キミャウ)頂禮(チライ)【句】〔佛〕佛足を頭に載きて禮拜すること。

南無三(サン)【句】次條[二]の略。一茎「花の陰南無三火打無かりけり」

南無三寶(ボウ)【句】■〔佛〕一心に佛法僧の三寶の助を頼む意にて唱ふる語。謡曲「部屋」「げに、何事も一炊の夢、南無三寶」■『三寶の冥護を乞ふ意』失策などしたる時、驚きあわてて發する語。しまった。凱陣八島「南無三寶、しなしたり、しなしたり」

南無佛(ブツ)《梵 Namo buddhâya》【句】〔佛〕『法華經の方便品に「一稱二南無佛、皆成二佛道」とあり』一心に佛陀の冥護を頼む意にて唱ふる語。水鏡「掌を合はせて、南無佛とのたまひき」

南無佛の舍利(シャリ)【句】〔佛〕『神皇正統記に「庭戸(ニハ)の皇子。生れたまひしよりさまざまの奇瑞あり、御手を握りたまひしが、二歳にて東方に向きて、南無佛と唱へたまひしかば、一の舍利ありき。傳法流布のために權化したまへること、疑なしとあり』大和國法隆寺の舍利殿に安置せる舍利。形圓くして、小豆よりも小さく、色は青白くして、數箇の黑點あり、毎日午の刻に鐘を鳴して人を集め、取出して拜せしむ。

南無妙法(ホフ)【句】〔佛〕次條の略。重井筒「南無妙法の力を賴みに」

南無妙法蓮華經(メウホフレンゲキャウ)【句】〔佛〕『妙法蓮華經に歸依する意』だいもく(題目)[二]を見よ。

南無や【句】なむ(南無)に同じ。謡曲(紅葉狩)「南無や八幡八菩薩」

なむ 祈む【動四他】のむ(祈む)に同じ。〔古語〕萬葉「しじもの膝折伏せたわやめのおすひ取掛け斯くだにもわれはこひなむ妹にあはぬかも」

なむ【助動】■然あれかしと、他に對して願へ望む意。(動詞の未然形に添ひ、終止形以外の形を缺けり)。なん。なも。〔古語〕大和「いかにしてわれは消えなん白露はかへりて後のものは思はじ」■らむに同じ。〔東國の古の方言〕萬葉「國國の神の社に幣(ヌサ)まつりあが戀(コヒ)すなむいもが悲しさ」

なむ【助動】『完了助動詞ぬの未然形なるなに未來の助動詞むの添はれるもの』むを强めていふ語。意味はてむとほぼ同じくして、多くは自動詞(連用形)に添ふ。なん。なも。源氏「烟にたぐひてしたひ參りなんといふ」

なむ【助】物事を指示する意。ぜに似てやや弱し。なん。なも。古今「柿の本の人丸なむ歌のひじりなりける」

なむあみだぶつ 南無阿彌陀佛【句】なむ(南無)の條下を見よ。

なむからたんなうーとらやや 南無喝囉怛那哆羅夜耶【句】なむ(南無)の條下を見よ。

なむきみやう 南無歸命【句】なむ(南無)の條下を見よ。

なむきみやうーちやうらい 南無歸命頂禮【句】なむ(南無)の條下を見よ。

なむさう【名】〔動〕へび(蛇)に同じ。

なむさん 南無三【句】なむ(南無)の條下を見よ。

なむさんぼう 南無三寶【句】なむ(南無)の條下を見よ。

なーむし 菜蟲【名】〔動〕紋白蝶(モンシロチョウ)の幼蟲。十字科植物を食害す。芭蕉「胡蝶にもならで秋ふる菜蟲かな」

なむだ 涙【名】なみだ(涙)に同じ。〔古語〕起「眼滂自流…妄眼淚也、ナムダ…」

なむたち 汝達【代】なむち(汝)の複數。〔古語〕起「汝二人、ナムタチフタリ」〔語〕

なむち 汝爾【代】なんち(汝)に同じ。〔古語〕

なむーなむとーす 垂むとす【句】なる(成る)の條下を見よ。

なむーぶつ 南無佛【名】なむ(南無)の條下を見よ。

なむーめうほふれんげきやう 南無妙法蓮華經【句】なむ(南無)の條下を見よ。

なん 難【名】■難(ナン)きこと。むづかしきこと。困難。■わざはひ。災難。難儀。太平記「大塔宮、…一定(ナンチヂ)道にて難に逢はせたまひぬと覺ゆるぞ。志を存ぜん人は、急ぎ御迎に參れ」五人女「火元近づけば、母親に附添ひ、年頃賴をかけし旦那寺駒込の吉祥寺といへるに行きて、當座の難を凌ぎける」■惡しき癖。きず。缺點。取意「そればかりをぞ、なんに思ひきこえたりつるを」

難中の難【句】『無量壽經の下卷に「難中之難、無レ過二此難一」とあり』困難なる物事の中にて、更に困難なるもの。

難附く【句】缺點を指摘せらる。きずが附く。塵附く。心中及び氷の朔日「家に難附かず、疵が附けば平兵衛が疵」

難無くて七癖(クセ)【句】「無くて七癖」に同じ。諺語

難無し【句】■少しの困難もなし。ざうさもなし。「難無く敵城を乘取る」狂言「抜參」「ねころび打つてあの池へはまるならば、なんなく身は投げませうず」■聊かの缺點も無し。批難を打つべき點なし。源氏「人として、かくなんなきことは、かたかりける」

難に臨んで、兵を鑄る【句】『晏子春秋に「臨レ難鑄レ兵、噎而遽掘レ井、雖レ速亦無レ及已」とあり』「軍(イクサ)を見て、矢を矧(ハ)ぐ」に同じ。諺語

難を構ふ【句】『戰國策の楚國の條に「楚嘗與二秦構一レ難、戰二於漢中一」とあり、又、同書魏國の條に「構レ難而兵結」とあり』兵難を引起す。戰爭をおこす。兵を構ふ。

難を附く【句】他人の缺點を指摘す。批難す。難癖(クセ)を附く。源氏「人の上をなんつけ、おとしめざまのことといふ人をば、いとほしきものにしたまへば」

なん 男【名】だん(男)[一][二]に同じ。

なん 南【名】みなみ。南方。「南北」

なん 軟輭【名】■やはらかなること。(硬に對して)■おだやかなること。「硬・軟兩派」

なん 何【代】なに(何)の音便。宇治「股に强く挾みて、なんの料に、この老法師をば」

何かん【句】「何の彼の」の訛。「少しも知らぬなんかんと云つて、相手にならぬ」

何ぞ【句】「何(ナン)ぞ」の音便。なんぞ(何ぞ)參照。謡曲「上たち聞きつけさせたまひて、なんぞと問はせたまふ」

何ぞいの【句】『何ぞよなうの訛。よは感嘆の意の助辭、なうは感嘆詞』■いかがしたる事ぞ。何事ぞ。■「何(ナン)のいのに」に同じ。

何ぞこいふこ【句】「何(ナン)ぞといふと」の音便。

何ぞの【句】「何(ナン)ぞの」の音便。〔古語〕謡曲「あはれ、なんぞの人かたよりなきすまひはする」

何ぞや【句】「何(ナン)ぞや」の音便。狂言「矢山伏」「何ぞや、坊主の分として、慮外な奴(ヤツ)ぢや」

何ぞれ彼(カ)ぞれ【句】「何(ナン)か彼やに同じ。浮世風呂「人といふ者は、何ぞれかぞれ取得(エトク)のあるものでござりやすが」

何だか【句】「何となく」に同じ。浮世風呂「とかくに故障がございまして、おほほほ。なんだか、もう世話なものでございますよ」

何だか、彼(カ)だか【句】「何(ナン)やら彼やら」に同じ。

何だ彼(カ)だ【句】「何(ナン)だ彼だ」の音便。

何だって【句】何故に。何のために。なんで。俚語「何だってそんな事をする

のか」
何だの彼(ヵ)だの【句】何とか彼とか。猿蓑深毛「なんだのかだのと、大きにお世話になりやした」
何だは彼(ヵ)だは【句】「何(ナ)だは彼だは」の音便。浮世風呂「やれ藝者の、それ封間(タイコ)の、や何だは彼だはと、さまざまの者を内へ取込んで、どっぴどっぴと騒ぐやら」
何たら【句】■「何といふ」に同じ。■曲(越後獅子)「何たら愚痴ぢやえ」■「何(ナ)とやら」■の訛。「何たら町の裏通り」
何たら彼(ヵ)たら【句】「何(ナ)とか彼とか」に同じ。浮世風呂「なんたらかたらいうても、上の者の目から見ては、ととやくたいぢやがな」
何だら法師の柿の核(ネ)【句】他人が「何だ」と問ひかけたる時、その「なんだ」といふ語を取りて茶化していふ語。
何たる【句】「何(ナ)たる」の音便。
何ぢや【句】『何であるの訛』■「何ぞ」■に同じ。■次條に同じ。
何ぢや彼(ヵ)ぢや【句】前條に同じ。一休駄世の中は貧者有徳(ウトク)者苦ぢや樂ぢや何ぢや彼ぢやとて末は無茶苦茶」
何で【句】何(ナ)にて。何物にて。何事にて。なんぞ(何で)參照。狂言(義大名)「今の言足(タシ)はなんであったぞ」「略。
何であれ【句】「何であれ、彼であれ」の何であれかし【句】前條を強めていふ語。狂言(つたふ山伏)「なんであれかし食(タ)べてから」
何でふ【句】『何(ナ)と云ふの訛。何條とも書けど、條の字はデウの假名なれば、實は當らず。助動詞のてふ參照』■「何といふ。いかなる。何ほどの。なでふ。「古語」參照「なんでふ事も侍らず」■「何として。いかでか。なんぞ。なでふ。(反語の意に用ふ)「何條」「古語」宇治物つきたまへるかと云ひければ、なんでふ物のつくべきぞ、……といひて、あざ笑ひて」

何でも【句】■いかなる物事でも。何にても。■何にしても。いづれにしても。とにかく。■「何(ナ)が何でも」に同じ。狂言(蟇)「
何でも彼(ヵ)でも【句】■いかなる物なりとも。いかなる事なりとも。■いづれにしても。どのみち。
何でも來(コ)い【句】■如何なるものにても來るものは拒まず。■安請合に引受くること。■何にてもえりきらひせず引受くること。
何でも來(コ)いに名人なし【句】多藝なる者は一藝に秀づる能はず。(諺語)
何でも御座れ【句】「何でも來(コ)い」に同じ。「ること。(諺語)」
何でも四文(シモ)【句】安請合に引受くる事にあらず。つまらぬ事なり。狂言(目近大名)「なんと、目近(カヂ)こめ骨を求めて來たか」
何ごと云うても【句】次條に同じ。俳諧古選(任口)「酒の德何と云うても花にあり」
何ごと云っても【句】「何(ナ)といふ」の音便。
何ごといふ【句】「何(ナ)といふ」の音便。
何ごか【句】「何(ナ)とか」の音便。
何ごか彼(ヵ)ごか【句】「何(ナ)とか彼とか」の音便。
何ごかして【句】「何(ナ)とかして」の音便。
何ごして【句】「何(ナ)として」の音便。狂言(内沙汰)「ここへは、又、何としておりやったぞ」狂言(武悪)「討たうとは思うたれど、なんとして身が討たうぞ」
何ごしよ【句】次條の訛。生玉心中「のっこれ、何としよ」
何ごせう【句】次條の音便。
何ごせん【句】「何(ナ)とせん」の音便。俳家奇人談(西武)「からからに身はなりはてて何と蟬」(「何とせん」の「せん」をもぢりて「蟬」と續けたるなり)
何ごそ【句】「何とか」に同じ。浮世風呂「ははあ、麻疹(ハシ)、はて、とんだ物が目へ這入ったの。這入る時に、何とぞ云ひましたか」
何ごて【句】「何(ナ)とて」の音便。
何ごと無く【句】「何(ナ)となく」の音便。繊曽「財寶に望無き人は、何となく打眺めて通りぬ」俳家奇人談(杉風)「何となく芝吹く風もあはれなり」
何ごと何ごと【句】前條の語を強めていふ語。芭蕉「笠も無き我れを時雨(シグ)るか何と何と」
何ごも【句】「何(ナ)とも」の音便。狂言(おかがり)「殿樣に負はれまするが、なんとも迷惑にござります」五人女「人の譏、世の取沙汰、なんとも思はず」
何ごも彼(ヵ)ごも【句】「何(ナ)とも彼とも」の音便。「便。
何ごも無い【句】「何(ナ)とも無し」の音便。
何ごや【句】「何とやら」に同じ。醒睡笑「御膳に候と存ずれば、何とやなつかしさに」
何ご樣(ヤウ)【句】どのやう。いかやう。狂言(不調立)「御坊の事ならば、なんとやうな御用なりとも承らう」
何ごやら【句】「何(ナ)とやら」の音便。梅暦「何とやら信女(シンジョ)と名弘(ナノ)をして、極樂の新道へ世帶を持ちますは」
何ごやらん【句】「何(ナ)とやらん」の音便。
何ならば【句】■いづれかの點に於て氣に入らぬならば。氣に入らずば。浮世風呂「大束が何なら、この下に小束もありまする」■もし差支なくば。事によりては。都合次第にて。なんならちやづけ(何ならば茶漬)參照。
何なりとも【句】「何(ナ)なりとも」の音便。狂言(不調立)「出家に似やうた事ならば、なんなりともおっしやれませ」
何にも彼(ヵ)にも【句】どうにも、かうにも。「何にも彼にも一人しか無い子供」
何の【句】■「何(ナ)の」の音便。■「何(ナ)の彼(ヵ)の」の略。心中刃は氷の朔日「屋根へ上れのなんのといふ」■意に介せず、又他を否定する意。なんのその。狂言(内沙汰)「なんの、行かいでは」
何のいな【句】次條に同じ。浮世風呂「それは御憚りだね。なんのいな」
何のいの【句】『何のよなうの訛。「何(ナ)ぞいの」參照』何にても無き事なり。意に介すべきにあらず。言ふに足らず。なんぞいの。
何の彼(ヵ)の【句】「何(ナ)の彼の」の音便。狂言(成上物)「人に取られて言はうやうがなさに、なんのかのとぬかす」一代男「帶するを引きこかし、なんのかの言葉重なるうちに、茶屋の阿爺(トト)、階子(ハシゴ)二つ目にあがって」
何の彼(ヵ)んの【句】前條に同じ。
何の事は無い【句】■何等の理由もなし。何とか彼(ヵ)とか論ずるほどの價値は無し。普通なり。なんでもなし。■あだかも。ほとんど。丁度。
何の其の【句】何のそれが。何のそれしきが。なんの。曾根崎心中「大名とても何のその」大高源吾「何のその岩をも通す桑の弓」
何の某(ガシ)【句】「何(ナ)の某」の音便。
何の誰れ【句】「何(ナ)の誰れ」の音便。狂言(盗人連歌)「なんの誰れどのは、隱もない分限者でござる」「便。
何の何某(ナニガシ)【句】「何(ナ)の何某」の音便。
何の絲瓜(ナヘ)【句】何とも思はぬこと、又何の用にも立たぬこと。蜀山人「世の中をなんの絲瓜と思へどもぶらりとしては暮されもせず」
何の絲瓜(ナヘ)の皮【句】前條に同じ。今圍姓氏錄「百日奉行について何の絲瓜の皮」
なーん【助動】なむの音便。
なん【助】なむの音便。
なん【接頭】■なに(何)の音便。徒然露臺「朝餉(アサガ)・何殿(ナン)・何門(モン)などは、いみじとも聞ゆべし」■數量の不定・不明なる意。いく。「なん日」「なん遍」
なん【接頭】爲すにむづかしき意。「難問題」「難工事」

なん 難【接尾】むつかしき意。「生活難」「知己難」「人選難」

なんあ 南亞【名】〔地〕亞弗利加洲の南部。

なんい 難易【名】難きと易きと。

なんい 南夷【名】『詩經の泮水篇に「淮夷蠻貊、及彼南夷、莫不率從」とあり』南方の蠻夷。南のえびす。南蠻。

なんいん 南音【名】■『左傳の成公七年の條に「鄭人所レ獻楚囚也、使レ冠レ之、與二之琴一、操二南音一」とあり』南國の人の言語。■『夏侯湛の魔舜賛に「垂拱臨レ民、詠二彼南音一」とあり』舜の「南風之薫」の詩を歌ひて、琴を彈ずること。「南風薫ず」參照。

なんえんぶ 南閻浮【名】〔佛〕次條の略。盛衰記「南閻浮大日本國」

なんえんぶだい 南閻浮提【名】〔佛〕『四大洲中、須彌山(シュミセン)の南方に位せりといふによりて、南の語を冠らせていふ』えんぶだい(閻浮提)に同じ。太平記「昔、葦の葉の國となりし南閻浮提豐葦原の中つ國」

なんおう 南歐【名】〔地〕歐羅巴洲の南部、即ち伊太利の邊。

なんおん 南音【名】なんいん(南音)に同じ。

なんか 南下【名】『地圖にては、南方が下になるよりいふ』北方の國の、南隣の地を蠶食し、又戰爭にて、北方の國の軍隊・軍艦などが、南方の敵に向ひて進出すること。(北上に對して)

なんか 南柯【名】■南にさし出でたる枝。南枝。■次條の略。

南柯の夢【句】『異聞集に「淳于棼家二居廣陵一、宅南有二古槐樹一、棼醉臥二其下一、夢二使者曰、槐安國王奉邀、棼隨レ使入二穴中一、見レ楼、曰大槐安國、其王曰、吾南柯郡、政事不レ理、屈レ卿爲二守理一レ之、棼至レ郡二十載、使二送歸一、遂覺、因尋二古槐下穴一、洞然明朗、可レ容二一榻一、有二大蟻一、乃王也、又尋二一穴一、直上二南柯一、即棼所レ守之郡也』とあるに本づく』ゆめ(夢)に同じ。

なんか 何か【副】なにか(何か)の音便。浮世風呂「番頭なんかうまさうな物を食ふの」

なんか 【接尾】『何(ナ)かの音便』など(等)に同じ。「國靜岡の方言」

なんかあ 【名】いたづら。じやうだん。(駿河)

なんかい 南階【名】■南に向ひて設けられたる階段。古昔の主なる建築物にては、南方を前面として、日光を受けしめたり。著聞集「尊者として、南階よりねり上りて」■紫宸殿の前面(南面)にありて、南庭に上下するための階段。その左右に左近の櫻と右近の橘とありたり。みはし。著聞集「諸司の下部の年長けたるが南階の邊に候ひけるを」

なんかい 南海【名】■南方の海。■【地】南海(南海)を見よ。

なんかいだう 南海道【名】【地】我が國八道の一。四國及び紀伊・淡路の六國を含む。みなみのみち。みなみのうなつぢ。

なんかいいちらんき 南海治亂記【名】【書】足利將軍戰爭の事及び豐太閤の四國を征服せる事蹟を記せるもの。十七卷。香西成資の撰。

なんかいいてつだう 南海鐵道【名】大阪市南區難波(ナニハ)を起點とし、大阪灣の東岸に沿ひて住吉・堺・濱寺等を經て、和歌山市に通ずる私設鐵道。我が國私設鐵道中、最古のものにして、もと阪堺鐵道と稱せし時代には、堺を終點としたり。

なんかう 軟膏・輭膏【名】『獨Salbe』豚脂・黄蠟・樹脂・グリスリン・石鹸・蜂蜜等の如き物質の中に、藥品を加へ、皮膚に塗抹して、藥品の效力を、それと直接に接觸せる組織又は下層の組織、もしくは全身に及ぼさしむるに便ならしめたる藥劑。例へば、水銀軟膏・亞鉛華軟膏の類。(硬膏に對して)

なんかう 軟鋼・輭鋼【名】『英Mild steel』炭素を含むことはめて少なき鋼鐵。性質、錬鐵に似たれども、溶解しやすく、從つて各部分は均一なる長所を有し、機械・電氣・建築等の各種工業上に需要多し。

なんかう 南岡【名】南方のをか。

なんかう 南郊【名】南方の郊外。

なんかう 南校【名】だいがくなんかう(大學南校)を見よ。

なんかうざい 軟膏劑・輭膏劑【名】なんかう(軟膏)に同じ。(硬膏劑に對して)

なんがく 南學【名】『南海の朱學の義』土佐國に行はれし朱子派の儒學。實踐躬行を重んず。南村梅軒を始祖とし、その學、僧如淵・忍性・信西・天實等に傳はり、天實は谷時中に傳へ、時中の門に小倉三省・野中兼山あり。(東學に對して)「同じ。

なんがく 南岳【名】〔佛〕〔人〕支那唐代の僧。同國天台宗の第二祖。本姓は李。名は慧思(エシ)。五嶽の一なる衡山の般若寺に居り、弘法につとむ。大乘止觀法門・法華安樂行義・諸法諍三昧法門等の著あり。天台の數義、師によりてほぼ成る。自記の妙理を智顗(智者大師)に傳ふ。陳の大建九年(一說に、七年)寂す。年六十四。

なんかく-らん なんかく蘭【名】〔植〕石松(ヒカゲノカヅラ)科に屬する多年生の草。莖は紐の如き形を呈し、葉は小鱗狀、葉腋に胞子嚢を生ず。山地の樹上・岩上等に自生す。

なんかふ 南洽【名】南方にゆきわたること。次條參照。

南洽北暢【句】『夥軍の白麟奇木對に「大將軍秉レ鉞、單于薨レ幕、票騎抗レ旌、昆邪右レ衽、是澤南洽、而威北暢也」とあり』天子の恩威の、四方にゆきわたること。

なんかふるゐ 軟甲類・輭甲類【名】〔動〕甲殻類中の一亞目。頭胸部は十三環節、腹部は七環節より成り、各環節に必ず一對の附屬物を有するもの。節甲類胸甲類に分つ。

なんかん 難艱【名】■かんなん(艱難)に同じ。■『なんくわ(南華)■の訛なりともいふ』あらあらしく又は愚鈍などにて、手にもはぬこと。

なんかん 南漢【名】支那唐時代南方に起りし國號。僖宋の時、劉謙卦州の刺史となり、僭して越と稱し、更に漢と改む。五主六十七年にて亡ぶ。「見よ。

なんかん 何彼んᵗ【句】なん(何)の條下を見よ。

なんかんじよ 南漢書【名】〔書〕支那南漢の劉氏の興亡を記せるもの。八十卷。唐の李延壽の撰。

なんかん-もの 難艱者【名】『なんかん(難艱)■を見よ』あらあらしく又は愚鈍などにて、手にあはぬ人。

なんき 南紀【名】〔地〕紀伊國の南部。

なんぎ 難義【名】■解し難き意義。(稽古今)三十講行ひはべりける聽聞(チヤウモン)に、…なんぎのいできたりけるを、增辨法師、御簾(ミス)の内へ、これはいかにと尋ねたりければ」■次條に同じ。

なんぎ 難儀・難義・難議【名】■爲すに難き物事。太平記「今度の軍難儀ならば」■一とほりならぬこと。重大なること。■困難。難澁。迷惑。きのふはけふの物語「難儀千萬するを見て」醒睡笑「そちに難儀はかけはせぬ」■生計に苦しむこと。貧苦。

なんきつ 難詰【名】缺點を擧げて非難し、なじり問ふこと。詰難。

なんきつ 南橘【名】次條を見よ。

南橘北枳【句】「江南の橘(ハナチ)、江北に栽うれば枳(カラタチ)となる」を見よ。

なんき-ぶんこ 南葵文庫【名】『紀州侯の舊領地「南紀」と家紋「葵」とに因みて名づく』舊紀州藩主侯爵德川賴倫の經營に係る公開圖書館。同家舊藏の圖書の外、貴重なる圖書多し。東京市麻布區飯倉町に在り。

なんきん 南京【名】■【地】『漢字の朱音』江蘇省にある都會。南京は明代の稱呼のまに呼ぶものにして、今は江寧縣といふ。楊子江の右岸を距る少許の地に位し、前清時代には、江南の省城、兩江總督駐紮(サツサツ)の地たりき。なほ時代によりて、金陵・秣稜・建業・建康・昇州・集慶などとも呼ばれたり。なんきやう(南京)參照。■なんきんじん

(南京人)の略。 ㊂なんきんもめん(南京木綿)の略。 ㊃なんきんやき(南京焼)の略。「繪なんきん」 鳩翁道話「南京の古染附(ふるそめつけ)の壺に、大輪の金米糖を入れて」 ㊄〔植〕なんきんうり(南京瓜)の略。〔大阪の語〕

なんきん 南京 【接頭】 支那又はその他南方の外國より渡來せる物の意。「南京米」「南京繻子」「南京玉」

なんきんあやつり 南京操 【名】 操人形の一種。人形に絲をつけ、上よりこれを動かして操るもの。いとあやつり。 放屁論「硝子(ビイドロ)細工、挙絲傀儡(アヤツリ)、古きを以て新しく、田舎者の目を悦ばしむ」 浮世風呂「二三人につかまへられて、ひよろひよろ、ひよろひよろ、南京操のごとく、その辟に、目をすゑて睨んでゐるゆゑ」

なんきんいちじゆく 南京無花果 【名】〔植〕いぬびは(犬枇杷)に同じ。

なんきんいとあやつり 南京絲操 【名】いとあやつり(絲操)に同じ。

なんきんいばら 南京薔薇 【名】〔植〕だにばら(雛波薔薇)に同じ。

なんきんうさぎ 南京兎 【名】〔動〕 ㊀かひうさぎ(飼兎)に同じ。 ㊁もるもっとに同じ。

なんきんうめ 南京梅 【名】〔植〕らふばい(蠟梅)に同じ。

なんきんうり 南京瓜 【名】〔植〕かぼちや(南瓜)を云ふ。〔大阪の語〕

なんきんうるし 南京漆 【名】なんきんわにす(南京假漆)に同じ。

なんきんかいだう 南京海棠 【名】〔植〕海棠の一種。花の色、濃紅なり。

なんきんかぶ 南京甲 【名】鰲甲の一種。南支那海及びマラッカ海峽以東の近海に産し、多く支那人の手を經て輸入するもの。

なんきんがんな 南京鉋 【名】反臺(かへり)鉋の一種。形小さくして、圖溝を削るに用ふるもの。

なんきんこざくら 南京小櫻 【名】〔植〕櫻草(サクラソウ)科に屬する多年生の草。蝦夷(エゾ)小櫻の變種。高山に生じ、高さ四五寸、葉は倒卵形にして鋸齒あり、叢生す。夏季、櫻草に似たる紅紫色の五瓣花を開く。はくさんこざくら。りうきうこざくら。

なんきんさくろ 南京柘榴・火石榴 【名】〔植〕こうせんざくろ(朝鮮柘榴)に同じ。

なんきんざら 南京皿 【名】南京燒の皿。形多くは扁く淺く、西洋料理などに用ふ。

なんきんじん 南京人 【名】しなじん(支那人)に同じ。〔明治の半ば頃までの語〕

なんきんじゆす 南京繻子 【名】絹絲を經(タテ)、綿絲を緯(ヨコ)とし、表面には絹絲の方のみあらはるるやうにせる繻子。始めて支那より渡來せし頃には、廣東緞子(カンヂンヅ)と呼びたり。絹綿(ケンメン)繻子。

なんきんしらみ 南京虱 【名】〔動〕なんきんむし(南京蟲)に同じ。

なんきんすさ 南京寸莎 【名】けすき(毛すまな(山慈姑)に同じ。

なんきんずゐせん 南京水仙 【名】〔植〕あまな(山慈姑)に同じ。

なんきんぜみ 南京蟬 【名】〔動〕ちっちぜみ(ちっち蟬)に同じ。

なんきんぞめ 南京染 【名】支那南京の風に摸して染むること、又その染めたる物。

なんきんだけ 南京竹・慈竹 【名】〔植〕竹の一種。幹細くして、高さ六七尺に過ぎず。その筍は叢外に出づることなし。

なんきんだま 南京玉 【名】小さき玻璃製の玉の、孔を穿ちたるもの。紅白その他の色ありて、女兒その孔に絲を通し、頭髪などの飾とし、又、指環ともす。

なんきんちく 南京竹 【名】〔植〕なんきんだけ(南京竹)に同じ。

なんきんぢやう 南京錠 【名】巾著の形したる錠前。えびぢやう。きんちやくぢやう。せいやうぢやう

(うやぢんきんな)

なんきんちやぼ 南京矮雞 【名】〔動〕ちやぼの一種。形は甚だ小なり。

なんきんつた 南京寸莎 【名】なんきんすさ(南京假漆)に同じ。

なんきんつばき 南京椿 【名】〔植〕たうつばき(唐椿)に同じ。

なんきんでうやく 南京條約 【名】阿片戰爭の結果として、清國と英國との間に締結せる條約。西暦一八四二年八月二十九日調印。支那にては江寧(カウネイ)條約といふ。

なんきんにす 南京假漆 【名】なんきんわにす(南京假漆)の略。

なんきんにんぎやう 南京人形 【名】南京操(ナンキンあやつり)に用ふる人形。

なんきんねずみ 南京鼠 【名】〔動〕鼷鼠(カセイ)の一變種。身長約四寸、尾も同じほどの長さにて、毛は、白きを常とし、又黒斑を有するもあり。眼は赤色を呈す。匣の中に養ひて、事を廻し、又は梯子に登るなどの技をなさしめて玩弄す。

なんきんはぜ 南京櫨・烏臼 【名】〔植〕大戟(トウダイ)科に屬する落葉喬木。原産地は亞細亞洲の熱帶地方。現今、暖國に栽培す。幹は高さ三丈に達するもあり。葉は廣き卵形にして、秋紅葉す。夏、單性黄色の小花開き、實は大いさ三分ほどにて、形圓く、秋の末に熟して、黒褐色となる。内に三子ありて、豆の如く、その外被に白粉ありて、核を包む。白粉は製して、蠟となすべく、核の仁よりは、燈油を搾取するを得。たうはぜ。さつまはぜ。りうきうはぜ。

なんきんばと 南京鳩 【名】〔動〕べにばと(紅鳩)に同じ。

なんきんはなび 南京花火 【名】花火の一種。一寸許の赤き軸に火藥を盛りたるものを連接して、紙包とし、爆竹の代りに爆音を發せしむるもの。

なんきんぼうふら 南京子子 【名】〔植〕かぼちや(南瓜)に同じ。

なんきんほほづき 南京酸漿 【名】海酸漿の一種。無蓋蟬(ウンニン)の卵胞の生のままなるもの、又は鹽漬となしたるを染料にて著色したるもの。

なんきんまい 南京米 【名】印度・暹羅(シャム)・佛領印度・支那等より我が國に輸入する米。味劣る。外國米。外米。

なんきんまち 南京町 【名】支那人の多く住める町。

なんきんまめ 南京豆 【名】〔植〕らくくわせい(落花生)に同じ。

なんきんむし 南京蟲 【名】〔動〕有吻(ハウン)類に屬する昆蟲。翅を缺き、全體扁く圓くして、長さ約二分、赤褐色を呈し、不快の臭氣あり。頭小さく、口吻は三節より成り、螫し又は吸引するに適し、眼は複眼のみを有す。明治維新前後、外國よりの船舶貨物等に附著して輸入せられしもの。晝間は柱又は壁の裂目、床の隙間などに潛伏し、夜出でて、人畜の血液を吸ふ。螫されれば、その痕潮紅し、數日間惡痒を覺ゆ。とこじらみ。しんだいむし。とこむし。なんきんじらみ。

(しむんきんな)

なんきんもめん 南京木綿 【名】支那南京地方にて、太絲にて、厚地に織りたる平織の綿布。棉花天然の色合を呈し、水洗に堪ふ。英・獨等の國にて模造するものは、色合も種種のものあり。なんきん。

なんきんやき 南京燒 【名】慶長年間、支那より渡來せし陶器。

なんきんやしき 南京屋敷 【名】支那人の住家を尊びていふ語。〔開港場などの語〕

なんきんらくがん 南京落雁 【名】落雁の一種。小形のもの。

なんきんりう 南京流 【名】〔文〕俳諧の一派。不明瞭にいひて、それと悟らしむる言葉づかひをなすもの。例へば、三輪(ミワ)といひて、索麪(サクメン)の意に用ふる(三輪索麪として有名なるより)類。談林風の後、流行せり。

なんきんわた 南京綿 【名】支那南京に産する綿。 今宮心中「南京綿のうはべには手のないやうに仕立ぐち」

なんきんわにす 南京假漆 【名】假漆の下等なるもの、即ち樹脂を酒精・石油精・アセトン等の揮發しやすき溶解劑に溶かしたるもの。揮發しやすく、後に殘る膜は薄くして、光澤あれども、剝落しやすき缺點あり。南京にす。南京うるし。

なんきやう 南京 【名】『なんきん(南京)を見よ』 ㊁なんきん(南都) ㊀に同じ。 ㊂〔地〕なんきん(南都) ㊁に同じ。なんぼくにきやう(南北二京)參照。 大鏡「南京の法師は、三會(サンヱ)の講師しつれば、已講と名づけて」 著聞

「樂所の預小監物源頼能は、…玉手信近に腕ひて横笛を習ひけり。信近は南京にあり、頼能、その道の遠きをいとはず、或は隔日に向ひ、或は二三日を隔てて往く」

なん-ぎやう 難行 【名】僧徒の修行のためにする、難儀なる行。(易行(イギヤウ)に對して) 太平記「釋尊、…二月上八の夜半に王宮を遁れ出て、六年難行の雪山に身を捨て」 謡曲(谷行)「この道は、難行捨身の行體(ギヤウタイ)にて、思ひもよらぬ事にぞある」

難行-苦行(ナンギヤウクギヤウ) 【句】〔佛〕『難行と苦行との重言』種種の苦しき修業。 著聞「道心堅固にして、難行苦行したまふこと」 釋迦如來誕生會「師を尊みの宮仕、難行苦行苦衣」

難行-苦行(ナンギヤウクギヤウ)-こけの行(ギヤウ) 【句】前條を喞りていふ語。 狂言「柿山伏「それ、山伏といっば、役(エン)の行者の後をつぎ、難行苦行こけのぎやうをする」

難行苦行(ナンギヤウクギヤウ)、やせこけの行(ギヤウ) 【句】前條に同じ。 古今現曲集「峰入やあるひは野に伏し山伏の難行苦行やせこけの行」

難行の法の薪(ナンギヤウノホフノタキギ) 【句】釋迦が、難行苦行の間、薪を伐りて…仙人に事へしこと。 じごくのひ(五巻目)及び「薪の行道(ギヤウダウ)」參照。 謡曲「鉢木」「難行の法の薪と思し召せ」

難行六年(ナンギヤウロクネン) 【句】〔佛〕釋迦が、太子の位を捨て出家し、南の方比舍離(ビシヤリ)・摩訶陀(マカダ)の諸國に遊びて、蓮華(レンゲ)仙・跋伽(バカ)仙・阿羅羅(アララ)仙の諸隱士を歴訪し、苦修(クシウ)練行(レンギヤウ)十二年(一說に六年)を經たることを形容していへる語。後に、難行苦行は成佛の因にあらざることを認め、これを捨て、深禪定に入りて、廓然大悟するに至れり。一二六(ハロ)の難行 【句】〔佛〕前條に同じ。 盛衰記「二六の難行、功畢へて、無上正覺(ガウ)成就せり」

なんぎやうだう 難行道 【名】〔佛〕自力(ジリキ)の修行に頼りて、證果を得んとする教義。聖道(シヤウダウ)門。(易行(イギヤウ)道に對して)

なんきやく-びやう 軟脚病・輭脚病 【名】『韓愈の祭十二郎文に「比得二軟脚病一」とあり』 かっけびやう(脚氣病)に同じ。

なん-きよく 難局 【名】事の處し難きところ。面倒なる時局。

なん-きよく 南極 【名】■〔地〕『英 South-pole』地軸の南端。(北極に對して) ■〔天〕『英 South-pole 宋書の天文志に「其二端、謂二之南極・北極一」とあり』地軸の南端の延長して、天球と會せる點。(北極に對して) ■〔天〕『漢書の天文志に「老人星曰二南極一」とあり』 なんきよくせい(南極星)■の略。 ■〔天〕『英 South-pole』黄道面に垂直なる天球の直徑の南端。(北極に對して)

なん-ぎよく 軟玉・輭玉 【名】■〔鑛〕ぎよく(玉)■に同じ。 ■『蘇軾の豆腐の詩に「鎗中軟玉香」とあり』 とうふ(豆腐)の異稱。

なんきよく-きより 南極距離 【名】〔天〕『英 South-polar distance』きよくきより(極距離)■を見よ。

なんきよく-くわう 南極光 【名】〔地〕きよくくわう(極光)を見よ。(北極光に對して)

なんきよく-けん 南極圈 【名】〔地〕『英 Antarctic circle』きよくけん(極圈)を見よ。

なんきよく-せい 南極星 【名】■支那古代の天文說にて、天の南極にありて、人の壽命を司るといふ星。 ■〔天〕『South-pole star』南極に近き位置にありて、僅かに五等七の光度を有する一の恆星。老人星、壽星。南極老人。南極。

なんきよく-らうじん 南極老人 【名】■『史記の天官書に「狼比地有二大星一、曰二南極老人一」とありて、集解に「晉灼曰、比地、近地也」と、正義に「老人一星、在二弧南一、曰二南極一、爲二人主一占二壽命延長之應一、見、國命長、故謂二之壽星一、不レ見、人主憂也」とあり』 なんきよくせい(南極星)■に同じ。 ■じゆらうじん(壽老人)に同じ。

なんきるゐ 軟鰭類・輭鰭類 【名】〔動〕魚類中、硬骨類の一亞目。骨骼は硬骨より成り、鰭(ヒレ)は硬棘を有せざるもの。悉く海産にして、鱈(タラ)・鰈(ヒラメ)・比目魚(ヒラメ)の類、これに屬す。

なん-く 難苦 【名】くなん(苦難)に同じ。

なん-く 難句 【名】詩文の句の難解なるもの。むつかしき文句。

なん-ぐ 難遇 【名】遇ひ難きこと。遭遇の容易ならざること。 盛衰記「遇二難遇之大願一、建二立聖皇大佛殿一」

なんぐう-ざん 南宮山 【名】〔地〕美濃國不破(フハ)郡に在る山。關ケ原の役に毛利秀元の據りしところ。別稱、美濃中山。

なんぐう-じんじや 南宮神社 【名】美濃國不破(フハ)郡宮代(ミヤシロ)村南宮山の北麓に鎭坐せる國幣中社。祭神は金山彦(カナヤマヒコ)命。舊稱、仲山金山彦神社。

なんぐう-たいしう 南宮大湫 【名】〔人〕儒者。名は岳、字は喬卿、通稱は彌六、別に積翠樓・烟波釣叟と號す。信濃國の人。中西淡淵に學び、伊勢國桑名及び松坂に往きて教授し、後、江戸に來りて、專ら學徒を教授す。著に春秋三傳學庸旨考・獨窓放言・講餘獨覽等の著あり。安永七年歿す。年五十一。

なんくせ-しふ 難句集 【名】古文又は外國語などの難解の文句のみを集めて、意義の解釋の練習用に供する書籍。「英文難句集」

なん-くせ 難癖 【名】非難すべき點。きず。なん。缺點。

なん-くわ 難癖を附く 【句】「難を附く」に同じ。

なん-くん 難訓 【名】漢字の、訓(クン)むにむづかしきこと、又そのむづかしき訓(クン)。

なん-くん 南薫 【名】『王維の詩に「陌上桑簷傾二北斗一、樓前舜樂動二南薫一」とあるに本づく。「南風の歌」參照』 みなみかぜ(南風)に同じ。

なん-ぐん 南軍 【名】南方の軍勢。(北軍に對して)

なん-くわ 軟化・輭化 【名】■やはらかなること。(硬化に對して) ■硬派に屬したる者が、軟派の說に化せらるること。(硬化に對して) ■〔商〕買屋が賓屋に變ること。(硬化に對して)〔取引所の語〕

なん-くわ 南華 【名】■〔書〕なんくわしんきやう(南華眞經)の略。 ■『南華眞經、卽ち莊子の寓言多きよりいひ初めたりといふ』 言ふところのとりとめなき人。變人。愚者。

なんかん(難關) ■參照。〔德川時代の遊里などの語〕

なんくわ 南華の悔(クヰ) 【句】『唐詩記事「令狐綯爲レ相、以二舊事一問二温庭筠一、曰事出二南華經一、非二雜書一也、竇相公嘆二其博一、時宜レ覽レ古、綯怒、辛不レ得レ第、庭筠有レ詩曰、因知此恨人多積、悔讀二南華第二篇一』とあるに本づく』 上官にさからひしため、試驗に落第するをいふ。

南華の篇(クワンヘン) 【句】〔書〕なんくわしんきやう(南華眞經)に同じ。 徒然文選のあはれなる卷卷、白氏文集・老子の言葉・南華の篇』

なん-くわ 軟貨 【名】〔經〕『英 Soft money』しへい(紙幣)の異稱。(硬貨に對して)

なん-ぐわ 南畫 【名】〔美〕なんしゆうぐわ(南宗畫)の略。(北畫に對して)

なん-くわう 南荒 【名】『荒は荒服(クワウフク)の義』南方の野蠻の地。

なん-くわう 南光 【名】〔地〕なんきよくくわう(南極光)の略。(北光に對して)

なんくわうばう 南光坊 【名】〔人〕てんかい(天海)に同じ。

なんくわう-きやう 南華經 【名】〔書〕なんくわしんきやう(南華眞經)に同じ。

なん-くわく 南郭 【名】〔人〕■次條を見よ。

なんくわく 南郭 【名】都邑の南方にある城郭。 ■はつさりなんくわく(服部南郭)を見よ。

南郭濫吹(ランスヰ) 【句】『韓非子の內儲說篇に出づ。古、支那齊の宣王の時、竽(笛の一種)を三百人にて同時に吹く習なりしに、處士南郭といふ者、竽を吹く能はざるに拘らず、三百人の中にまじりて、祿を食みしが、後、宣王死して、子の湣王(ビンワウ)の代となりしに、文王その三百人に就き、一人づつ竽を吹かんことを求めしかば、南郭驚きて逃げたり、といふ故事に本づく』實力なき者が、その位にあること。戸位(コヰ)素餐(ソサン)。

なんくわ-しんきやう 南華眞經 【名】〔書〕『唐書藝文志に「天寶元年、詔號二莊子一爲二南華眞經一」とあり』 さうし(莊子)■を見よ。

なんくわ-しんじん 南華眞人 【名】〔人〕『唐會要に「天寶元年二月十二日、追二贈莊子一爲二南華眞人一」とあり』 さうし(莊周)に

同じ。

なんくわ-しやう 軟化症・輭化症【名】〔醫〕骨(ホネ)軟化症・腦軟化症などの稱。

なんくわつ 軟滑・輭滑【名】やはらかにして滑らかなること。

なんくわはふ 軟化法・輭化法【名】〔農〕野菜の葉と莖との線毛を自變せしむる法。俗間に「もやし」と呼ぶは、この法を行へるものなり。軟白法。

なんくわびやう 軟化病・輭化病【名】蠶病の一種。蠶體次第に軟化して斃死す。蠶具の不潔濕桑等より起る。(硬化病に對して)

なんくわん 難關【名】㊀過ぎにくき關所。㊁目的を達するまでの途中に横たはれる困難なる事の譬。なんば。「條に同じ。

なんくわ-らうじん 南華老人【名】〔人〕次『李白の大鵬賦に「南華老仙、發二天機於漆園一」とあり』『莊周』に同じ。

なんくわ-らうせん 南華老仙【名】〔人〕次『李白の大鵬賦に「南華老仙、發二天機於漆園一」とあり』『莊周』に同じ。

なんけ 何家【名】なにけ(何家)の音便。

なんけ 南家【名】『大和國奈良に在りし頃の邸宅の位置によりて、北家と區別せるもの』藤原氏の四家の一。不比等(フヒト)の長子武智麿の裔たるもの。

なんけ 難化【名】〔佛〕『維摩經の卷下に「此土衆生、剛強難化」とあり』教化(ケウケ)しがたきこと。たやすく教化に服せざること。

なんげ 難解【名】〔佛〕なんかい(難解)に同じ。

なんげ-なんにふ 難解・難入(ナンニフ)【句】〔佛〕『法華經の方便品に「諸佛智慧甚深無量、其智慧門、難レ解難レ入」とあり』解し難く、悟入し難きこと。榮花「難解・難入の法華經」

なんげつ 難月【名】㊀『儒門事類に「武安胡産祥之妻、臨二難月一病レ喘」とあり』りんげつ(臨月)に同じ。㊁陰暦八月の異稱。

なんげふ 難業【名】むづかしきしわざ。困難なる事業。

なんけん 難嶮・難險【名】けんなん(嶮難)に同じ。

なんけん 難件【名】とりさばきの爲しにくき事件。難事。

なんげん 南原【名】〔地〕朝鮮全羅北道南原郡にある邑。附近は平野にして、米麥を産し、商業亦盛んなり。慶長の役に明軍の大敗せし所なり。

なんげん 南阮【名】『晉書の阮咸傳に「咸字仲容、與レ籍居二道南一、諸阮居二道北一、北阮富而南阮貧、七月七日、北阮盛晒二衣服一、皆錦綺棊目、咸以竿掛二大布犢鼻一于庭、人或怪レ之、答曰、未レ能レ免レ俗、聊復爾耳」とあるに本づく』貧しき家。蓬戸甕牖(ホウコヨウイウ)阮の風呂に入る身かな」

なんけんばふ 軟憲法・輭憲法【名】〔法〕『英Flexible constitution』法律制定の手續によりて變更することを得る憲法。即ち法律との間に、變更上の手續の區別を設けざるもの。不文憲法の全部及びきはめて少數の成文憲法は、これに屬す。軟性憲法。可動憲法。自由憲法。(硬憲法に對して)

なんこ 何箇【名】手に小石又はその他の物を握り、人をして、その數をあてしむる遊戲。藏鉤。猜拳。一代男「よい年をして、螺(ニシ)まはし、扇引・なんこ呼びて、おのづと子供心になって」

なんこ 南湖【名】〔地〕㊀下野國中禪寺湖の別稱。㊁磐城國白河町の附近にある沼池。周回二十一町。山紫水明の勝景なり。

なんご 喃語【名】『なんなん(喃喃)を見よ』こまやかにむつまじく物語ること、又その言葉。「語。むづかしき語。

なんご 難語【名】難解の語。わかりにくき語。

なんご 軟語・輭語【名】『涅槃經の卷二十に「諸佛常軟語」とあり』やはらかなる語。やさしきものいひ。遵歩色業集、軟語、ナンゴ」

なんこう 難攻【名】次條を見よ。

なんこう 難攻不落【句】攻むること難くして、容易に陷落せざること。

なんこうがい 軟口蓋・輭口蓋【名】〔醫〕口蓋の一部。後半の、軟くして、稍瓣狀を呈し、筋肉を藏せる部分。後端の中央に懸壅垂(ケンヨウスイ)と稱する圓錐形の軟性突起ありて下垂す。又この口蓋の後部に、鼻に通ずる孔あり、聲音を發する時は、大抵この口蓋上りて、空氣の鼻へ出づる通路杜絕し、空氣はただ口腔にのみ通ずれども、呼吸の際は、この口蓋下りて、空氣は鼻に通ず。又この空氣を鼻に通ぜしめたるままにて發する音聲は、即ち鼻音なり。(硬口蓋に對して)

なんこうがいおん 軟口蓋音・輭口蓋音【名】〔語〕こうおん(喉音)に同じ。

なんこうじ 難工事【名】困難なる工事。むづかしき工事。「(北國などに對して)

なんこく 南國【名】南方にある國。南州。

なんこつ 軟骨・輭骨【名】㊀やはらかなる骨。(硬骨に對して)㊁〔動〕『獨Knorpel』殆んど膠質より成り、石灰分少なく、帶黃白色・半透明にして、彈力に富み、容易に切割し得る骨。耳殼・鼻翼の骨、肋軟骨などこれなり。㊂意志の薄弱なること。强硬なる意見・主張又は態度をとる能はざること。氣節なきこと。

なんこつえん 軟骨炎・輭骨炎【名】〔醫〕『羅Chondritis』軟骨に於ける炎症。長管狀骨の骨端軟骨に發すること多く、その結果、骨端の離斷を來す。

なんこつかん 軟骨漢・輭骨漢【名】節操なき人。主義なき人。意思薄弱者。

なんこつきしつ 軟骨基質・輭骨基質【名】〔醫〕軟骨細胞と共に軟骨を構成せるもの。細胞の分泌物にして、中に軟骨膠と軟骨素とを有す。

なんこつぎよるゐ 軟骨魚類・輭骨魚類【名】〔動〕なんこつるゐ(軟骨類)に同じ。

なんこつさいばう 軟骨細胞・輭骨細胞【名】〔醫〕軟骨基質中にある空隙を塡充せる細胞。球形又は卵圓影をなし、膜囊を有し、圓形の核及び顆粒を含む。稀には各箇散在すれども、通例群を成し、その隣接面は、扁平にして、不全球形又は多角形をなす。

なんこつせつがふ 軟骨接合・輭骨接合【名】〔醫〕『羅Symphysis』不動關節の一種。兩骨の相對向せる面の、軟骨にて接合せるもの。彈力性と靱帶の柔靱性とによりて、多少の運動をなすを得。脊椎骨間または肋骨と胸骨との接合の如き、その例なり。

なんこつそ 軟骨素・輭骨素【名】〔化〕『獨Knorpelein又Chondrin』動物の軟骨を煮湯に浸出して得る物質。膠(ニカワ)に類す。ひよんどりん。

なんこつそしき 軟骨組織・輭骨組織【名】〔醫〕軟骨を構成する組織。軟骨細胞と軟骨基質とより成る。

なんこつまく 軟骨膜・輭骨膜【名】〔醫〕『獨Knorpelhaut』軟骨の表面を被ふ强靱なる結締組織の膜。血管と神經とを通じ、軟骨は、この血管よりの血液の滲入によりて養はる。

なんこつまくえん 軟骨膜炎・輭骨膜炎【名】〔醫〕『羅Perichondritis』軟骨膜に於ける炎症。喉頭部のカタル性・結核性・黴毒性・癌腫性・チブス性潰瘍及び痘瘡後發する喉頭破壞などに繼きて、その部分の披裂軟骨膜に發すること、最も多く、又結核性なるものの肋軟骨に發することあり。

なんこつるゐ 軟骨類・輭骨類【名】〔動〕魚類中の一目。骨骼は殆んどすべて軟骨より成り、口と鼻孔とは頭の下面に開き、鰓(エラ)は五對乃至七對ありて、鰓蓋(カイ)を缺き、各自裂孔を以て外面に開き、鱗は概ね顆粒狀を呈し、鰾(ウキブクロ)を有せざるもの。鮫(サメ)類・鱣(チヨウザメ)類の二類に分つ。板鰓類。

なんこん 男根【名】いんきよ(陰莖)に同じ。(女根(ニヨコン)に對して)

なんさ 南座【名】㊀南方の座席。㊁かよちやう(駕輿丁)の異稱。

なんざい 軟材【名】〔美〕膨脹の材料の中、油土型・蠟粘土などの類なるもの。(硬材に對して)

なんさう 南窓・南窗・南牕【名】南方にあるまど。南にむかへるまど。

なんさう 南曹【名】『大學寮の南にありたるよりいふ』くわんがくゐん(勸學院)に同じ。正税帳「冬嗣の大臣、…勸學院を建立す。大學寮に東西の曹司あり、…大學の南にこの院を建てられしかば、南曹とぞ申すめる」

南曹の辨(ベン)【句】古、南曹をつかさど

なんさう

りたる辨官。

なんさう 南草【名】〔植〕たばこ(烟草)の異稱。

なんざん 難産【名】㊀出産に臨みて、胎兒が、安らかに出でずして艱むこと。おもき産。(安産に對して)盛衰記「母は、吾を生まんとて、難産して死にぬ。父には三歳の時別れぬ」㊁事の成立の、埒あかず、長びくこと。「後繼内閣の難産」

難産、色に懲りず【句】難産にて苦しみたる婦人、こりずして、色事を繼續するをいふ。〔諺語〕

なんざん 南山【名】㊀南方にある山。㊁〔地〕『周の都豐鎬の南方にあるよりいふ』**しゅうなんざん**(終南山)の別稱。㊂『「南山の壽」を見よ』ことぶくこと。いはふこと。(書牘文に用ふ)「壽二南山一候」㊃〔地〕『京都の南方にあるよりいふ。**みなみまつり**(南祭)參照』**をとこやま**(男山)に同じ。㊄〔地〕**よしのやま**(吉野山)の異稱。㊅〔地〕**かうやさん**(高野山)の異稱。(北嶺に對して)〔佛教徒の話〕弘法大師行狀記「大師、南山に住居したまふ時」㊆〔地〕朝鮮京城の南にある山。㊇〔地〕支那南滿洲金州城の西南約十町にある小山。東は大連灣に面し、西は金州灣を望み、日露戰役に於ける古戰場たり。

南山の歌【句】『三齊略記及び藝文類聚卷九十四に出づ』支那春秋時代の衞の人寧戚(ネイセキ)、貧しくして、人のために車を挽き、齊の國に到り、桓公の他出をうかがひ、牛の角をたたきながら、「南山粲粲、白石爛爛、(南山府、白石爛ともあり)中有二鯉魚一長尺有半、生不レ遭二堯與一舜、生不レ逢二桀與一紂(生不レ逢二堯與二舜禪一ともあり)、短布單衣纔至レ肘(纔は一に適に作る)從レ昏飯レ牛至二夜半一、長夜漫漫何時旦」と歌ひて、己が世に用ひられざるを歎きたりといふ詩。桓公これを聞き、召して相と爲せりといふ。牛角の歌。

南山の壽(ことぶき)【句】『詩經の小雅、天保の篇に「如二月之恒一、如二日之升一、如二南山之壽一不レ騫不レ崩、如二松柏之茂一、無レ不二爾或一承」とあるに本づく。南山は終南山』長命をいはふことば。

なんざん

なんざん 難山【名】けはしき山。越ゆるに困難なる山。

なんざんじゅんしゅうろく 南山巡狩錄【名】〔書〕『吉野朝の天皇の吉野山(南山)に皇居を移し給ひしを、支那春秋の天子の河陽に巡狩せしに譬へて命ぜし名』吉野朝五十七年間の事蹟を記し、附錄には、明德四年より長祿二年までの事蹟を記せるもの。十五卷、別に附錄一卷。大草公弼の撰。

なんし 南枝【名】木の枝の、南の方へ生え延びたるもの。(多くは梅のにいふ) 朗詠「南枝北枝梅、開落已異」

なんし 男子【名】**だんし**(男子)に同じ。

なんし 南至【名】『左傳の僖公五年の條に「春王正月辛亥朔、日南至」とありて、杜預の註に「周正月今之十一月、蓋十一月一日冬至也、自二秋分一日行二南陸一至二冬至之日一日南極」とあり。秋分の日より太陽南方に廻り、冬至の日、その極に達するよりいふ』**とうじ**(冬至)に同じ。

なんし 南史【名】〔書〕南朝即ち宋、齊、梁、陳の四朝約百七十年間の事を記せるもの。八十卷。支那唐の李延壽の撰。ほくし(北史)參照。

なんし 南支【名】〔地〕支那の南部地方。〔北支に對して〕

なんし 難思【名】〔佛〕**なんじぎ**(難思議)に同じ。

なんじ 難事【名】難儀なるわざ。むづかしき事がら。

なんじ 難字【名】むづかしき文字。

なんじ 何時【名】なんどき。

なんじ 南寺【名】『奈良の南に在るよりいふ』**ごわんごうじ**(元興寺)に同じ。

なんしう 南洲【名】㊀〔佛〕**なんせんぶしう**(南贍部洲)に同じ。正統記「南洲をば贍部といふ。これは樹の名なり」㊁〔人〕**さいがうたかもり**(西鄕隆盛)の號。

なんじぎ 難思議【名】〔佛〕法の廣大深淵にして、思ひはかりがたきこと。難思。

なんしくわう 難思光【名】〔佛〕次條の略。

なんしくわうぶつ 難思光佛【名】〔佛〕十二光佛の一。その光明の不可思議にして、一乘などの思議する能はざる所なりとの意にて名づけたるもの。

なんしさ

なんしさん 軟脂酸・輭脂酸【名】〔化〕ばるみちんさん(パルミチン酸)に同じ。

なんしつ 軟質・輭質【名】やはらかなる質。柔軟なる性質。

なんじふ 難澁【名】㊀爲すに難くして澁ること。㊁困ること。困苦。困難。難儀。㊂もてあますこと。迷惑がること。

なんしん 南清【名】〔地〕なんし(南支)を、清朝時代に呼びしもの。(北淸に對して)

なんじん 南人【名】南方の國の人。

なんじや 難者【名】批難する人。「病。

なんじやう 難症【名】治し難き病症。難き事がら。

なんじやく 軟弱・輭弱【名】かよわきこと。ひよわきこと。柔弱。

なんじゃく 南斗【名】なんと(南斗)を見よ。

なんしゅう 南宗【名】㊀〔佛〕『慧能は嶺南に布敎し、專ら江南に行はれしより名づく』支那の禪宗の一派。達磨五世の法孫弘忍の弟子慧能(エノウ)を祖とするもの。單純に禪定のみを修し、本來無一物の頓悟主義を取り、「敎外(ケウグワイ)別傳、不立(フリフ)文字」、又、「以心傳心」の說を主張す。五代に於て五家を分ち、宋代に至り、更に二派を加へて、七宗となれり。後世ますます隆盛に赴きしより、この派を禪の正宗とし、慧能を禪宗の六祖とするに至れり。祖師禪。南宗禪。南禪。南頓。(北宗に對して)**なんのう**(南能)參照。正統記「異朝には、南宗の下に五家あり」㊁〔美〕次條の略。

なんしゅうぐわ 南宗畫【名】〔美〕『支那にて、禪宗の南北二宗に分れしと殆んど同時代に、繪畫も二派に分れしより、その名稱を轉用するに至りしもの』支那の繪畫の一派。支那唐の王摩詰を祖とすと稱し、宋の董源・繹巨然・米芾(ベイフツ)、元の倪瓚(ゲイサン)・黃公望・王蒙、明の董其昌はその系統を引けるものなりとせられ、殊に宋代に於て、北宗畫との相異著しきに至れり。南畫。(北宗畫に對して)**ぶんじんぐわ**(文人畫)參照。

なんしゅうじ 南宗寺【名】和泉國堺市旅籠(ハタゴ)町に在る臨濟宗の寺。弘治二年三好長慶が父元長の追福のために創立し、僧正傑の開基したるもの。天正二年及び元和元年兵火に罹り、僧澤庵再興せり。

なんしゅうじぼん 南宗寺本【名】天文中、和泉國堺市の南宗寺にて開板せる論語。

なんしゅうぜん 南宗禪【名】〔佛〕南宗の禪法。南禪。祖師禪。(北宗禪に對して)

なんしょ 南所【名】**かたなごころ**(結政行)に同じ。

なんしょ 難書【名】『非難すべき點ある文書の義』申文(マウシブミ)が書式に違ひたること、又その申文。

なんしょ 難所・難處【名】けはしき場所。往來に困難なる場所。せっしょ。峻所。太平記「山陽第一の難所なり」

なんじょ 難所【名】前條に同じ。

なんしょうわ 難勝地【名】〔佛〕『勝ちがたき無明(ムミヤウ)に能く勝つ地の義』十地(ヂフヂ)の第五階。菩薩この地位に至れば、能く一切の情見を破して、一切の法に通ずといふ。

なんしょく 難色【名】㊀むづかしと思ふやうなる顏色。かたしとする顏つき。㊁非難せんとするやうなる顏色。

なんしょく 男色【名】㊀〔書〕ほんてうわかうぞく(本朝若風俗)に同じ。「畫けるもの。

なんしょくえ 男色繪【名】男色の有樣をなんしろ(何爲ろ)【副】**なにしろ**(何爲ろ)の音便。類聚名物考「言分(イヒワケ)のある奴等だけれども、なんしろ相手が女といふものだから、つまらねえ」

なんす【接尾】**なさす**の音便。梅暦「花魁(オイラン)、叱られたら來てお呉んなんしよと、おろおろ涙に、下へ行く」

なんず 難ず【動佐變他】他の非をなじる。批難す。源氏「なんずべくさはひまぜぬ人は」頓阿法師詠百題「某が考ふる所よく聞

き、不審あらば難ぜられよ」「下を見よ。

なんすれぞ 何爲れぞ【句】なん(何)の條

なんすゐ 軟水・輭水【名】〔化〕『英Soft water』カルシウム・マグネシウム等の鹽(エン)を溶解せざる水。石鹸を容易に發泡せしむ。雨水の如き、その一なり。(硬水に對して)

なんすゐ 南陲・南垂【名】南方の邊鄙。一國の南境。

なんせい 軟聲・輭聲【名】『梁の簡文帝の詩に「嬌歌逐二軟聲一」とあり』柔和なる聲。やさしき音聲。おだやかなる聲。

なんせい 軟性・輭性【名】やはらかなる性質。(硬性に對して)

なんせい 南齊【名】支那の國號。宋の蕭道成、帝を廢して自ら皇帝と稱す。七世二十三年にして亡ぶ。(北齊に對して)

なんせい 南西【名】『英South-West』せいなん(西南)に同じ。

なんせい 南征【名】南方の國、又は南方の賊を討伐すること。

なんせいいぼ 軟性疣・輭性疣【名】〔醫〕疣の一種。表皮中の角質層に變化を及さずして、質の軟きもの。(硬性疣に對して)

なんせいくわぶつ 軟性貨物・輭性貨物【名】〔商〕『英Soft goods』木綿又は羊毛などにて製したる貨物。

なんせいげかん 軟性下疳・輭性下疳【名】〔醫〕『英Weicher Schanker』花柳病の一種。下疳菌の、陰部の皮膚または粘膜の裂創より侵入し、その部に赤き小粒生じ、次いで疼痛起り、潰き潰瘍面に變じ、斷えず多少の膿汁様なる滲出物を被るもの。(硬性下疳に對して)

なんせいけんばふ 軟性憲法・輭性憲法【名】〔法〕なんけんばふ(軟憲法)に同じ。(硬性憲法に對して)

なんせいしょ 南齊書【名】〔書〕南齊の歷史を記せるもの。本記八卷、志十一卷、列傳四十卷。支那梁の蕭子顯の撰。

なんせきけん 軟石鹸・輭石鹸【名】〔化〕『英Soft soap』かりせきけん(加里石鹸)に同じ。(硬石鹸に對して)

なんせん 難戰【名】くせん(苦戰)に同じ。

なんせん 難船【名】船の難破すること、又その船。はせん。

なんせん 南贍・南贍【名】〔佛〕なんせんぶしう(南贍部洲)の略。譯曲小鏡造「南贍僧伽陀(ガダ)國、波斯彌陀(ハシミダ)尊者より以來」

なんせん 南船【名】次條を見よ。

なんせん 南船北馬【句】『支那の地、南方は河流多くして、行くに船舶を用ひ、北方は平地多くして、行くに馬背を借るよりいふ』常にいそがしく旅行すること。

なんぜん 南禪【名】〔佛〕なんゆうぜん(南宗禪)の略。(北禪に對して)

なんせんくわぶつ 難船貨物【名】〔商〕なんせんもの(難船物)に同じ。

なんぜんじ 南禪寺【名】京都市上京區南禪寺町にある寺。臨濟宗の本山。詳しくは太平興國南禪寺といひ、瑞龍山と稱す。もと龜山上皇の離宮禪林寺殿を、弘安中、僧普門に賜ひて、寺となさしめられしもの。建武元年大德寺と共に京都五山の上に列し、後、五山の第一に改められ、至德三年また舊に復して、五山の上に列せり。

なんぜんじどうふ 南禪寺豆腐【名】山城國京都東山の名物なる豆腐。

なんぜんじは 南禪寺派【名】〔佛〕我が國の臨濟宗の十三派の一。京都の南禪寺を本山とし、その開山大明國師普門を祖とするもの。

なんせんしんがう 難船信號【名】『英International code signals of distress』船舶の港灣または洋中にて、火災または難破の厄に罹りたる場合に、救助を求むるため掲揚し、若しくは表示する、萬國共通の信號。

なんせんにん 難船人【名】難船せる人。

なんせんぶしう 南贍部洲・南贍部洲【名】〔佛〕『南は須彌山(シュミセン)の南方に位するよりいひ、贍部は閻浮の新稱にして、梵Jambuの音譯。なんえんぶだい(南閻浮提)參照』えんぶだい(閻浮提)に同じ。太平記「この南贍部洲を遍く飛行(ヒギヤウ)して」

なんせんぶつ 難船物【名】〔商〕なんせんもの(難船物)に同じ。

なんせんせう 南仙笑【名】〔人〕そまんぢ(楚満人)を見よ。

なんせんもの 難船物【名】運搬の途中、難船に遇ひて、水に浸り、又は投棄せられなどして、値打の下落したる商品。難船貨物。積藤巢毛「この代物は難船物だから、ひけ物だ」

なんぜんねん 南禪院【名】なんぜんじ(南禪寺)に同じ。增奧「禪林寺をば、おはしましし時より、禪院になされき。南禪院といふは、これなんめり」

なんぞ 【動】なにぞ(何ぞ)の音便。紀「何(ナン)得(ゾ)不二迎禮一也」莊言(月見座頭)「我御料(ゴリヤウ)も、何ぞ有をさしませ」

なんぞ 等・杯【接尾】なんど(等)の訛。浮世風呂「居てやるんだなんぞと太平樂さ」繁千話「朝なんぞ見ると、面(ツラ)も變だに、よくよく見ねえ」

なんぞ 何ぞ【句】なん(何)の條下を見よ。

なんぞいの 【句】なん(何)の條下を見よ。

なんそう 南總【名】〔地〕かづさ(上總)に同じ。(北總に對して)

なんそう 南宋【名】〔地〕■そう(宋)■に同じ。■そう(宋)■を見よ。

なんそうさとみはっけんでん 南總里見八犬傳【名】〔書〕足利時代末期の武將里見義實の愛女伏姫(フセヒメ)犬の精に感じて孕み、その因緣によりて、仁・義・禮・智・忠・信・孝・悌の八德を表はしたる八犬士出でて、里見家の勃興を助くる筋に作りたるもの。九輯百六卷。曲亭馬琴の著。二十八年間を經て完備せる、江戸文學上の大作。通常、單に八犬傳と呼ぶ。

なんぞや 何ぞや【句】なん(何)の條下を見よ。

なんだ 涙【名】なみだ(涙)の音便。

なんだ 涙に溺る【句】「涙(ナミダ)に溺るる」に同じ。盛衰記「泣く泣く語らひければ、諸僧涙に溺れ、聽衆袖をぞ絞りける」

なんだ 難陀(梵Nanda)【名】〔佛〕『觀喜の義。龍王の名としての外、佛典及び印度歷史上に、この名、なほ數見す』次條を見よ。

なんだ 難陀・跋陀(バツダ)【句】〔佛〕次條に同じ。

なんだ 難陀・跋難陀(バツナンダ)【句】〔佛〕次條の略。

なんだ 【句】〔佛〕八大龍王中、第一に位するものと、第二に位するものと。兄弟にして、釋迦降誕の時、天上より溫涼二流の雨を降らし、說法の時は、その會座に列し、甚だ長壽なるため、釋迦入滅の後も長く佛法を守護せりといふ。佛法の殿堂に龍の彫刻繪畫多きはこれに由る。はなみだう(花御堂)參照。摩耶の右脇より生れさせたまひて、難陀・跋難陀二つの龍の、空よりして、湯あびし奉りけるよりはじめて」

なんだい 男體【名】だんだい(男體)に同じ。日本武尊吾妻鑑「第二の宮男體を現はし、日本武尊と稱し奉り」

なんだい 難題【名】■詩歌・文章などの題の、作るに難きもの。■なんもん(難問)に同じ。■難澁することがら。難儀なる事件。■無理なるいひかけ。むつかしきいひがかり。「を見よ。

なんだいとんげん 男體權現【名】次條■

なんだいさん 男體山【名】〔地〕■下野國上都賀(カミツケ)郡日光山中の最高峯。山麓に中禪寺湖あり。高さ八一八〇尺、一名、黑髮(クロカミ)山・二荒(フタラ)山。にっくわうざん(日光山)參照。■つくばさん(筑波山)を見よ。

なんだいじ 南大寺【名】だいあんじ(大安寺)を見よ。

なんだいどうぶつ 軟體動物・輭體動物【名】〔動〕動物界の一門。無脊椎動物に屬し、節足動物の下、蠕形(ゼンケイ)動物の上に位す。體質柔軟にして、環節を有せず、體壁の一部は外套膜と稱する膜となりて體を包み、多くはこの膜より石灰質の殼を分泌す。骨骼を缺けるがために、確實なる運動をなすこと能はず。頭足類・腹足類・瓣鰓(ベンサイ)類・有板類・掘足類の五綱に大別す。

なんだいへいき 難太平記【名】〔書〕今川一家の祖先以來の事を記述せるもの。書中太平記を非難せるところあり。一卷。今川了俊の撰。

なんだいもん 南大門【名】■南方にある大門。■奈良の東大寺の南の大門。

記「南都に歸り上りつつ、まづ南大門に居る奉り」㊁京都東寺に在るもの。太平記「鳥羽の作道(ツクリ)より、東寺の南大門の前へぞ寄せたりける」㊂朝鮮京城の正門。本名は崇禮門、八門の中最も壯大なり。

なんたう 南島・南嶋【名】㊀南方にある島。㊁〔地〕琉球諸島の古稱。

なんだう 南堂【名】南家の儒家。東鑑「稱以、累祖立身、雖レ趁二北闕之月一、一族傳レ跡、皆學二南堂之風一」

なんだう 南道【名】南方へ赴く道。

なんだう 南道の主人【句】『北史に「魏孝武謂成陽王一日、昨得二汝主簿一、爲二南道主人一、於レ是又有二南道主人之說一」とあり』南方へ行く道案内者。「東道の主人」參照。

なんだう 男道【名】男子として守るべき道。甲陽軍鑑「物よみ・坊主のごとくにて、…男道無嗜(ナサケ)にて、武邊無案内なり」

なんだう 難道【名】險嶮なるみち。往來するに困難なる道路。難路。惡路。

なんたうか 男踏歌【名】をとこたうか(男踏歌)に同じ。

なんだん-ぼんなう 難斷煩惱【句】〔佛〕『下に引ける榮花物語なる四字六句の文、出處明かならずといふ。觀音の大慈悲を稱せる語』斷じ難き煩惱を能く斷じて、大慈悲を以て、衆生(シュジョウ)を度すること。榮花「難斷煩惱、即解斷除、自然智慧、發起慈心、隨數示現、以大慈悲」

なんたんもん 南端門【名】けんれいもん(建禮門)の異稱。

なんだ-りゅうわう 難陀龍王【名】〔佛〕はたいりゅうわう(八大龍王)を見よ。

なんち 南地【名】南方にある土地。南土。

なんち 難地【名】險難なる土地。事を爲すに困難なる土地。平家「彼といひ、此といひ、かたがた難地のやうに覺え候ふ。東の陣頭をば、小松殿の大勢にて固められて候ふ」

なんぢ 難治【名】病の癒えがたきこと。療治の屆かぬこと。不治。

なんぢ 汝・爾【代】『なおち(汝)の音便』同輩以下の人に對する第二人稱。きさま。そのはう。おてまへ。あがみ。いまし。

なんぢ-が-つみ-を-ゆるして-わ-が-つみ-を-ゆるす 汝が罪、汝を責む【句】じじふじとく(自業自得)に同じ。

なんぢ-が-ほしを-たまに-す 爾に出づる者は、爾に反(カヘ)る【句】『孟子の梁惠王下篇に「曾子曰、戒レ之戒レ之、出二乎爾一者、反二乎爾一者也」とあるに本づく』禍も福もその人の行に報い來るものなり。自業自得(ジゴウジトク)。諺語』

なんぢ-は-われ-なり 爾は爾たり、我れは我れたり【句】『孟子の萬章上篇に「與二鄉人一處、由由然不レ忍レ去也、爾爲レ爾、我爲レ我、雖二袒裼一裸二裎於我側一、爾焉能浼レ我哉」とあり』他の爲に自分の心をいためず、煩はさざること。諺語』

なんぢ-を-たまに-す 汝を玉にす【句】『詩經の大雅民勞篇に「王欲レ玉レ女、是用大諫也」とあるに本づく』汝の身を寶玉の如く貴くなす。

なんちん 難陳【名】㊀一方より論難せるに對して、他方より陳辯すること。㊁改元の時、年號を選ぶに當り、學者を集めて、文字の吉凶を選ばしめ、故事などを討議せしめしこと。明治改元の際、岩倉具視の發議にて、爾後廢することと定められたり。

なんちん 軟塵・輭塵【名】美女又は美妓などの、あまた集りて、はでに賑しき形容。

なんちん-うたあはせ 難陳歌合【名】人人左右に分れて、一方の人の歌に難ある時、他の一方の人その由をいひ立つれば、又、一方に於て、これが答辯をなし、左右言論を闘はしたる末に、判者がその難陳の可否を判斷する歌合。後鳥羽天皇の頃、多く行はれたり。

なんちん-もんだふ 難陳問答【名】なんちん(難陳)㊁に同じ。

なん-ちゃう 南庭・南廷・南庭【名】『南はなんれう(南簗)の略。庭は梃(テウ)の如く行延べたる義といふ』なんれう(南簗)に同じ。東鑑「南廷三十、唐盧十廷、茶垸具二十」

なん-ちゃう 難聽【名】耳の聞え難き症狀。

なんぢゃ-もんぢゃ 何云物乎【名】〔植〕次條の略。

なんぢゃもんぢゃの-き 何云物乎木【名】〔植〕あんにゃもんにゃの木)に同じ。

なん-ちゆう 南中【名】〔天〕『英Upper transit又Upper culmination』天體の、天頂より南方の子午線を經過すること。某地點に於て、太陽の南中せる時は、卽ちその地の正午なり。

なんちゆう-の-なん 難中の難【句】なん(難)の條下を見よ。

なん-ちよう 男寵【名】男色によりて寵愛せらるること。

なん-で 何で【副】何故に。何のために。

なん-で 何で【句】なん(何)の條下を見よ。

なん-てい 南庭【名】㊀南方にある庭(ニハ)。盛衰記「熊野にありける時、或人南庭に池を掘りけるに、大石を掘出せり」㊁紫宸殿の階前(南)にある庭。平家「大地震ありて、…法皇は南庭の幄屋を建ててぞおはします。主上は、鳳輦に召して、池の汀へ行幸なる」

なん-てい 南帝【名】南朝の天皇。太平記「南帝御卽位の始」「に同じ。

なん-てい 南梃・軟梃【名】なんちゃう(南梃)

なん-てい 軟泥・輭泥【名】『英Ooze』海底の柔き泥土。多く介殼の粉末等よりなる。

なん-てう 南朝【名】南方の朝廷。(北朝に對して)

なんぼくてう 南北朝【參照】

なんでう 南條【名】〔地〕㊀越前國八郡の一。郡役所を武生(タケフ)町に置く。㊁伊豆國田方(タカタ)郡韮山(ニラヤマ)町の大字。北條(ホウジヤウ)と相對せしめたる名稱。伊豆鐵道の停車場あり。

なんでう-きでん 南朝紀傳【名】〔書〕後醍醐天皇の元弘元年より稱光天皇の應永三十二年までの吉野朝の事蹟を記せるもの。五卷。作者詳かならず。一名、南方紀傳。

なんでう-くぎやうぶにん 南朝公卿補任【名】〔書〕延元二年より元中九年まで、五十六年間の吉野朝廷に於ける公卿の補任を記せるもの。四卷。(塙保己一は、南朝公卿補任考を著して、本書を僞撰と斷定せり)

なんでう-をどり 南條踊【名】周防國岩國藩に傳來したる踊。藩士の少年踊子となり、揃の浴衣を着、裾を折り紮(カラゲ)げ、甲掛を用ひ、頭に月形の兜を被り、鉢卷を後に結びて垂れ、手に唐團扇を持ち、城攻に擬して踊る。藩祖吉川(キツカハ)元春が天正六年伯耆國羽衣石城主南條元續を討ちし故事に出でたるものといふ。

なん-てつ 軟鐵・輭鉄【名】〔鐵〕たんてつ(鍛鐵)に同じ。「下を見よ。

なん-てふ 何でふ・何條【句】なん(何)の條下を見よ。

なん-てん 南天【名】㊀南方の天。㊁〔地〕なんてんぢく(南天竺)の略。㊂〔植〕小蘗(ヘ)科に屬する常綠灌木。莖は高さ四五尺。葉は卵狀披針形にて先端尖り、五瓣の小白花を開く。實は圓くして小さく、熟すれば、赤くなりて、叢り垂る。我が國南部に自生し、支那にも産す。變種多くして、白南天・縮(チヂ)南天・筏(イカダ)南天、葉の極めて小さき細葉(ホソバ)南天、蔓南天・斑入(フイリ)南天等あり。實を結べるものは、生花(イケバナ)に供せられ、材は床柱(トコバシラ)もしくは小器具を作るに用ひられ、葉は慶事の際、赤飯を贈る時、これを盛りたる器に敷きて用ふ。なってん。なりてん。なるてん。みつば。なんてんちく。「南天燭・南天竹」㊃紋所の一。南天の葉と實とを配合して、種種の形に描きなしたるもの。「抱(ダキ)南天」・「龜甲(カメノコ)南天」・「向(ムカヒ)南天」・「南天菱」・「三割(ミツワリ)南天」・「雪輪(ユキワ)南天」などの種類あり。

なんてん 南天の鐵塔(テツタフ)【句】〔佛〕古、南天竺にありきといふ鐵塔。傳說によれば、大日如來所說の法門を、その上首たる金剛薩埵(コンガウサツタ)が輯錄し、經文として、この鐵塔中に藏せしを、龍樹菩薩の開きて、金剛薩埵より授かりしと傳ふ。後世、この傳說を說明するに、鐵塔は龍樹の內心を指したるものにして、吾人各自の心性に外ならずとする說(法爾說といふ)と、歷史的に實在せしものなりとする說(隨緣說といふ)とあり。盛衰記、賞、金剛薩埵南天の鐵塔を開いて、大日如來に値(ア)ひ奉り」

なん-でん 南殿【名】㊀南方の宮殿。㊁なでん(南殿)に同じ。和名、紫宸殿。謂之南天二。太平記「主上則ち南殿の御簾を高く捲かせ」㊂しんでん(宸殿)㊀に同じ。

なんてん-ぎり 南天桐【名】〔植〕『なんてんのぼだいじゅ(南天實菩提樹)を見よ』いいぎり(椅)に同じ。

なんてん-ぐさ 南天草【名】〔植〕なんてんはぎ(南天萩)に同じ。

なんてん-さう 南天草【名】〔植〕なんてんはぎ(南天萩)に同じ。

なんてん-しよく 南天燭【名】〔植〕なんてん(南天)三に同じ。

なんてん-ちく 南天竹【名】〔植〕なんてん(南天)三に同じ。

なんてん-ぢく 南天竺【名】一〔地〕五天竺の一。南方に位せる州。水經「南天竺に、龍猛菩薩と申す僧いますなり」二〔植〕『陸遊の詩に「南天竺子赤微寒」とありて、註に「南燭、本草俗謂二之南天竺一」とあり』なんてんじょく(南天燭)に同じ。

なんてん-てうづ 南天手水【名】『南天を難轉の意に取りなし、難を轉ずる意にて用ふといふ』南天三の葉を、常に懐中して、手洗ふ水なき時、塵手水(ちりてうづ)となすこと。

なんてん-の-えだのまる 南天枝丸【名】紋所の一。枝南天を中にをさめて圓形にしたるもの。

なんてん-はぎ 南天萩・歪頭葉【名】〔植〕豆(マヽ)科に屬する多年生の草。高さ一二尺、葉は二箇の小葉より成り、秋日、紫碧色の蝶形花を開く。山地に自生す。くさなんてん。ふたばはぎ。たにわたし。

なんてんみ-の-ぼだいじゅ 南天實菩提樹【名】〔植〕いいぎり(椅)に同じ。「見よ。

なん-でも 何でも【句】なん(何)の條下をなんでもや【名】何事をもたやすく引受くる人。雜戯に廣く物事を知れる人。かれこれや。

なん-と 南都【名】一『北史の魏思皇帝紀に「城二盛樂一以爲二北都一、修二故平城一以爲二南都一」とあり』南方にある都。二〔地〕大和國奈良の異稱。南京。太平記「榮西・能忍等、禪宗を洛中に弘めし時、南都・北嶺共に起りて、噪訴に及ぶ」三こうふくじ(興福寺)の別稱。(北嶺に對して)平家「都には南都・三井寺、同心して…と聞えしかば」

南都の三會【句】「奈良の三會」に同じ。

南都の八景【句】〔地〕奈良地方にある八箇所の勝地、即ち南圓堂の藤、佐保川の螢、春日野の鹿、猿澤の月、三笠山の雪、雲坂の雨、東大寺の鐘、轟橋(トドロキ)の行人。

南都の六宗(ロクシウ)【句】〔佛〕奈良朝時代、奈良に諸寺を構へて行はれし佛教の六宗、即ち倶舍(クシヤ)・成實(ジヤウジツ)・三論・法相(ホツサウ)・華嚴(ケゴン)・律の諸宗。

なん-と 南斗【名】〔天〕さ(北斗)四に同じ。倭漢三才圖會「南斗六星、北方第一之宿、狀似二北斗一」

なん-と 南渡【名】南方の地に渡り移ること。正統紀「宋の政亂れしより、北狄の金國起りて、上皇徽宗並びに欽宗を取りて、北に歸りぬ。皇第高宗江を渡りて杭州といふ所に都を立てて行在所とす。南渡といひしはこれなり」

なん-と 何ご【句】なん(何)の條下を見よ。

なん-と 納戸【名】一金銀・衣服・調度などを納め置く室。古くは納殿(ナフデン)といひ、納戸の名は、足利時代より見ゆ。奏房。おほなんど、大納戸)・こなんど(小納戸)參照。雅亮裝束抄「みすは、なんどにかくるも」二なんどかた(納戸方)の略。三ねま(居間)を云ふ。「安房國の方言」

なん-ど 南土【名】なんち(南地)に同じ。

なん-ど 難度【名】〔佛〕『剛強の衆生濟度し難き意』なんぢ(難解)に同じ。

なん-ど 何度【副】度數の知れぬ場合にいふ語。いくど。いくたび。何回。何遍。

なん-ど 等・杯【接尾】『「何(ナ)と」の略』など(等)に同じ。

なんど-いろ 納戸色【名】おなんどいろ(御納戸色)に同じ。

なん-とう 南東【名】『英 South-east』こうなん(東南)に同じ。「に同じ。

なん-とう 【名】〔植〕いせはなび(伊勢花火)一

なんとう 南投【名】〔地〕臺灣の中部に位する町。濁水溪と大肚溪との中間にあり。南投廳を置く。

なんとう-ほくべい 南蕃北米【句】〔人〕とうきしやう(董其昌)を見よ。

なんど-かい 難度海【名】〔佛〕『六十華嚴經の卷五に「已度二難度海一」、十住毘沙論易行品に「乘二彼八道船一、能度二難度海一」とあり』「生死(シヤウジ)の海」に同じ。

なんど-がしら 納戸頭【名】江戸幕府の職制の一。若年寄の支配下にありて、納戸方の事務を司り、納戸組頭・納戸衆等これに屬せしもの。定員二名。鎌倉幕府の納殿(ナフデン)奉行に相當す。次條參照。

なんど-かた 納戸方【名】江戸幕府の職制の一。納戸頭・納戸組頭・納戸衆等の職員ありて、內府の金銀・衣服・調度の出納・大名・旗本以下の獻品及び下賜の金品等の事を掌りしもの。なほ納戸頭・納戸組頭・納戸衆等の職員は西丸にもありて、職掌・管屬・待遇等すべて本城のに准ぜり。納戸役。

なんど-がまへ 納戸構【名】昔時、武家にての殿中の帳鍵。

なんどき 何時【代】なにどき(何時)の音便。

なんに。字音「ただ今はなんどきぞ」

何時だこいふ顏附(カホツキ)【句】不得要領なる顏つき。ぼんやりとしたる顏つき。

なんど-きん 納戸金【名】昔時、貴人の家にて、會計方に保管する金錢。兒園小說餘錄「まことに稀有の夜盜にて、この十五箇年間、大名屋敷へのみ忍び入りて、納戸金を盜み取りきといふ」

なんど-ぐち 納戸口【名】納戸(一)の入口。

なんど-ぐひ 納戸食【名】なんどめし(納戸飯)を見よ。

なんど-ぐみ 納戸組【名】なんどしゅう(納戸衆)を見よ。

なんど-ぐみ-がしら 納戸組頭【名】江戸幕府の職制の一。納戸頭の下にありて、納戸組の事務を司りしもの。定員八名。なんどかた(納戸方)參照。

なんど-しゅう 納戸衆【名】江戸幕府の職制の一。納戸方の下役。納戸組頭に分屬して、納戸組を組織したり。なんどかた(納戸方)參照。

なんど-ずみ 南都墨【名】ならずみ(奈良墨)に同じ。

なんど-ぢゃ 納戸茶【名】青と綠との間なる染色。

なんど-でんそう 南都傳奏【名】南都の寺院の奏事を傳奏せし職。「下を見よ。

なん-と-なし 何ごと無し【句】なん(何)の條下を見よ。

なん-と-なれ-ば 何ごとなれば【句】なん(何)の條下を見よ。

なんど-ねず 納戸鼠【名】染色の一。御納戸に鼠を加へたるもの。

なんど-はらひかたがしら 納戸拂方頭【名】はらひかたなんどがしら(拂方納戸頭)に同じ。

なんど-ぶぎゃう 南都奉行【名】室町幕府の職制の一。奈良の興福寺・東大寺及び奈良中の聽訟並びに春日祭等の事を管せしもの。

なんど-ぶぎゃう 納戸奉行【名】武家時代に、將軍の衣服・調度を出納することを掌りし職。

なんど-まちぶぎゃう 南都町奉行【名】ならぶぎゃう(奈良奉行)に同じ。

なんとん 南頓【名】〔佛〕『南宗は、その宗風、頓悟を主義とするよりいふ』なんしゅう(南宗)に同じ。(北漸に對して)

なんど-めし 納戸飯【名】遊女などの、客の前にては遠慮して控目にし、納戸などやうの物陰にて食ふ飯など。又これを食ふを、納戸食(ナンド)といへり。(德川時代の語)風流曲三味線「傾城は、打見には、公家がたの御息女めきて、…、世の事知らぬ顏つきせらるれど、…、納戸飯とて、越前菜もはづかしいほど參るげな。いかにしても、したごころが賤しい」「見よ。

なん-とも 何とも【句】なん(何)の條下を

なんど-もとかたがしら 納戸元方頭【名】もとかたなんどがしら(元方納戸頭)に同じ。

なんど-もろはく 南都諸白【名】大和國奈良より產する諸白。

なんど-やく 納戸役【名】なんどかた(納戸方)に同じ。「下を見よ。

なんと-やら 何ごやら【句】なん(何)の條

なんどり【貌】などりの音便。曾我會稽山「同じ物のいひやうで、ああ畏ったと、ついなんどりとお受けは成らぬことかは」

なんぞゑ 納戸繪【名】納戸などの襖などに張附けたる繪。柳樽「山なかの家なんぞゑに平九郎」

なんーなうまく 軟腦膜。輭腦膜【名】〔醫〕『羅 Pia mater』腦膜中、最も内部にありて、腦髓の表面に密著せるもの。血管に富み、上下の二層に分る。脈絡腦膜。

なんーなし 難無し【句】なん(難)の條下を見よ。

なんーなん 【感】小歌などの中に囃辭としていふ語。室町千載草の枕も綾や錦か、金襴緞子の夜着も布團も、なんなん、なっこりや、いらぬ、いらぬ」

なんーなん 喃喃【貌】『なんど(喃語)おなん(呢喃)を見よ』人の私語し又は低聲にて書を讀みなどする聲。ぺちゃぺちゃ。

なんなんとす 垂んとす【句】なる(成る)の條下を見よ。「見よ。

なんーなら 何なら【句】なん(何)の條下を見よ。

なんならーちゃづけ 何なら茶漬【名】『「何なら」を見よ。又、ならちゃ(奈良茶)に通はせてもいふものなるべし』客の歸り際に臨みて、「若し何なら茶漬でも召上って」と空(カラ)世辭をいふこと。

なんーなり 【助動】なるなりの音便。人鏡「さては、譽むるなんなり」「を見よ。

なんーにふ 難入【名】〔佛〕「難解(ナン)難入」難入の法典【句】〔佛〕至上の妙理ありて悟入し難き法典。即ち、華嚴經・法華經など。

なんに 何【代】なに(何)の音便。(助辭もの添ふ時に限りて用ふ)

なんにも【句】なにも。何事も。何物も。一茎「我が宿はなんにも無いぞ巢立鳥」「なんにも役に立たぬ」などの「なんにも」は「何(ナニ)にも」の音便にて、これとは同じからざれども、混同しやすし)

なんによ 男女【名】だんぢょ(男女)に同じ。

なんによう-ぼう 男女房【名】男房と女房と。増鏡「男女房、みだりがはしくしひかはして、御筆どもめし、拍子打ちならしなどして、明けぬ」

なんによごどうけん 男女同權【名】だんぢょどうけん(男女同權)に同じ。

なんーの 何の【句】なん(何)の條下を見よ。

なんーのう 南能【名】〔人〕次條を見よ。

南能北秀(ホクシウ)【句】〔人〕支那の佛教に於ける南宗(ナンシウ)の慧能(エノウ)と北宗の神秀と。

なんーのその 何の其の【句】なん(何)の條下を見よ。

なんーのたれ 何の誰【句】なん(何)の條下を見よ。「を見よ。

なんーば 難場・難場【名】■なんじょ(難所)に同じ。■難儀なる場合。

なんーば 南蠻【名】■船具の一。綱を繰りこす所に用ふる滑車。■なんばんてつ(南蠻鐵)の略。狂言「なんばの鉾というて、錆びる鉾ではおりない」■なんばん(南蠻)の略。■かんじき(橇)云ふ。(畿内の方言)

なんば 難波【名】■〔地〕なには(難波)の音便。**なんばのうみ**(難波海)參照。■〔地〕大阪市南區の一部、道頓堀の南、天王寺夕日岡(ユフヒ)の西麓邊の汎稱。千日前に南海鐵道の起點たる難波停車場あり。又千日前の西北に接して、難波新地と呼ぶ遊廓ありて、繁昌の市區を成せども、川より西は、もと難波村と呼ひ、いはゆる特殊部落にして、皮革業者多かりしが、今は市に編入せられたり。■姓氏の一。本姓は藤原。師實の五男忠敎を祖とす。その子賴輔以後、世世蹴鞠を業とし、第十二世宗富の後、家絶えしか、その後再興せられ、明治維新後、子爵を授けらる。

なんーぱ 軟派【名】■主義・主張又は行動の温和・優柔なる一派。確固たる主義・主張なく、他の說にたやすく動かさるるか如き黨派。政見・主義などの穩和なる一派。(硬派に對して)■新聞・雜誌などにて文藝・藝種(ゲイシュ)などを擔當するもの。(硬派に對して)■文學の自然主義に傾けるもの。又は男女の戀情を主として取扱へるもの。

なんーぱ 難破【名】■相手の說を論難・破斥すること。論破。■船舶の、坐礁・膠沙・破損・覆沒などの災に遭ふこと。難船。

なんーぼう 男房【名】宮仕する男子。(女房に對して)**なんによぼう**(男女房)參照。

盛衰記「平家は、舷を拍いて、女房も、男房も、あ射たり射たりと感じけり」同「女房・男房、上も下に返し、堂上も、堂下も、紙燭を出し」■くらうど(藏人)に同じ。安藝叢書「男房のことは、藏人をさしていふなり。藏人の職は、天子の御身近く親しみ召使はるる者にて、御側の女房と同樣なる者ゆゑに、女房に擬へて、男房と云ひたるなり」

なんーぱう 南方【名】■南の方角又は方面。■**なんぱうけぬき**(南方毛拔)の略。卜養狂歌集「ある人、南方の毛拔を給はり、氣に入りたらば、歌よみておこせとありければ、よきといひて類もいさやしらがけをこれぞなんぱう拔く世界の圖」■吉野朝廷に屬する方。南朝。太平記「嫡孫近江判官秀詮・舍第次郎左衞門二人は、攝津國神崎の合戰の時、南方の敵に誅せられにけり」

南方の強(ツヨ)【句】『中庸の第十一章に「寬柔以敎、不レ報二無道一、南方之強也」とあり』忍耐の力を以て、人に勝つをいふ。(「北方の強」に對して)

なんぱう-きてん 南方紀傳【名】〔書〕なんぽうきてん(南朝紀傳)に同じ。

なんーぱうせき 軟寶石・輭寶石【名】〔鑛〕蠟石より軟き寶石。即ち孔雀石・琥珀の類。

なんぱう-せんだんかうふつ 南方栴檀香【名】〔佛〕『十住毘婆沙論第五易行品に「栴檀德者、南方去二此無量無邊恒河沙等佛土一有二世界一名二歡喜一佛號二栴檀德一」とあり』南方世界に居する佛の名。

なんぱうどん 南蠻饂飩【名】南蠻(ナンバン)煮にしたる饂飩。(京都大阪邊の語) 勝栗毛「名物なんばうどん、あがらんかい」

なんぱう-の-けぬき 南方の毛拔【名】『南方は鍛冶屋の名。夏山雜談に「尾張國名古屋に南方といへる鍛冶あり、彼を南方といへるは、源敬公、彼が作りし毛拔にて御髭を拔きたまへば、よく拔けて少しも殘らず、南方不毛の地といふ事あれば、常に彼を南方と仰せられしより名となりたるなり」とあり。南方不毛の地とは、諸葛亮の後出師表に「五月渡瀘、深入二不毛一」とあるを指せるなるべし』昔時、尾張國名古屋にて製せし一種の毛拔。

なんぱう-はってん 南方八天【名】〔佛〕帝釋天宮(クテンゾ)の南方にありといふ八つの天。

なんぱう-ぶっけう 南方佛敎【名】阿育王以後、南天竺及び錫蘭(セイラン)・暹羅(シヤム)・緬甸(ビルマ)等の諸地に傳播せる佛敎。これらの諸地に現存する經典は總てパアリ語にて記され、小乘敎に屬す。(北方佛敎に對して)

なんぱう-りう 南方流【名】茶道の一流派。和泉國堺の南宗寺の塔頭(タッチウ)なる巢雲院の首座(シュソ)にして、千利休の門人なる宗慶を流祖とするもの。

なんぱう-ろく 南坊錄【名】〔書〕茶道のことを精細に記せる書。〇卷。宗慶の著。

なんぱう-ねぎさいかうてん 南方緯度最高點【名】〔天〕さうじてん(冬至點)に同じ。

なんばきしや 軟派記者・輭派記者【名】新聞紙の三面記事を擔當する記者。(硬派記者に對して)

なんばく 難駁【名】非難して反駁すること。

なんばくーはふ 軟白法・輭白法【名】〔農〕なんくわはふ(軟化法)に同じ。

なんーばくらふ 軟白蠟・輭白蠟【名】〔化〕『英 Softsolider』白蠟(ハクラウ)と半田蠟(ハンダ)との總稱。

なんばくわぶつ 難破貨物【名】なんせんもの(難船物)に同じ。

なんばじーがた 難波寺形【名】うりざねがた(瓜核形)に同じ。

なんばせん 難波船【名】難破したる船。

なんばち-だんじ 南八男兒【名】『南八は、支那唐の張巡が、南霽雲を、その兄弟排行に於て第八に當るによりて呼びし稱にて、共に節に殉ぜり』氣節をたふとぶ男子。

なんばづきん 難波頭巾【名】昔時用ひられし一種の頭巾。

なんばに 難波煮【名】小鯛と、ずゐきとを合はせて煮たるうまに。新永代藏「鯛の難波煮、鯉のさしみ」

なんばのうみ 難波海【名】■〔地〕なにはのうみ(難波海)の音便。■催馬樂(サイバラ)の

呂の曲の一。備鳥望「なんばの海澄きものぼる小舟大舟、つくしつまでに今すこしのぼれ山崎までに」

なんばん 南蠻【名】一支那にて、古、南部の地に住せし野蠻人。南夷。(東夷・西戎・北狄に對して) 二南方の野蠻人。太平記「南蠻西戎は已に亂れぬ」 三呂宋(ルソン)・暹羅(シヤム)・亞瑪港(カガヤン)・瓜哇(ジヤワ)等の南洋諸國又、西班牙(イスパニヤ)人、葡萄牙(ポルトガル)人などのこれらの地方を經て、我が國に渡來せしを南蠻人といへり。(足利時代の末より德川時代の初にかけての語) 薩摩歌「本國長崎に、黃陳といふ南蠻の外科、昔の華陀が仙方を傳へ」 四**なんばんりう**(南蠻流)の略。 五(植)**なんばんがらし**(南蠻辛)の略。(上總國・三河國・遠江國・陸奥國・佐渡國の方言) 六(植)**なんばんきび**(南蠻黍)の略。(京都の語) 七**なんばんに**(南蠻煮)の略。 八**たこ**(紙鳶)を云ふ。(九州の一部の方言)

なんばん 南蠻【接頭】昔、西洋より渡來せる物の名に添へていふ語。「南蠻鐵」

なんばんあさがほ 南蠻朝顏【名】(植)**てうせんあさがほ**(朝鮮朝顏)に同じ。

なんばんあづき 南蠻赤小豆【名】(植)**たうあづき**(唐赤小豆)に同じ。

なんばんありのみ 南蠻有實【名】(植)**あんらく**(奄羅)に同じ。

なんばんいはう 南蠻醫方【名】西洋の醫術。南蠻流。(德川時代の語)

なんばんがうやく 南蠻膏藥【名】西洋より渡來したる膏藥。きのふはけふの物語「まぶたを剪み切つて取り、南蠻膏藥を附くれば二日・三日の間(マ)に、すきとなほる」

なんばんがさ 南蠻笠【名】昔時用ひられし一種の笠。

なんばんかたばみ 南蠻酸漿草【名】(植)**みやまかたばみ**(山酸漿草)に同じ。

なんばんがね 南蠻金【名】**なんばんてつ**(南蠻鐵)に同じ。百合若大臣野守鏡「南蠻金の鐵の弓」「つくりたる胄。

なんばんかぶと 南蠻甲【名】南蠻金にて

なんばんがらし 南蠻辛【名】(植)たうがらし(唐辛)に同じ。

なんばんからすうり 南蠻烏瓜【名】(植)**もくべつし**(木鼈子)に同じ。

なんばんぎしやう 南蠻起請【名】外國の神名を記して誓ひたる起請文。(德川時代の語)

なんばんぎせる 南蠻烟管野菰【名】(植)列當(ハマウツボ)科に屬する草。他の植物の根に寄生し、葉綠素を含まず、鱗片狀の葉を有し、高さ七八寸の花莖を出し、頂に一箇の帶赤紫色なる脣形花を著く。禾本科の農作物に大害を與ふることあり。おもひぐさ。きせるさう。

(るせぎんばんな)

なんばんきび 南蠻黍【名】(植)**たうもろこし**(玉蜀黍)を云ふ。(畿内の方言)

なんばんぎり 南蠻錐【名】**もおぎり**(鍏錐)に同じ。

なんばんぐわし 南蠻菓子【名】スペインポルトガル等の國の製法に依れる菓子、即ち金平糖・カステラ等。(足利時代の末より德川時代の初頃にかけての語)

なんばんげくわ 南蠻外科【名】南蠻醫方の外科、又それを業とする醫師。薩摩歌「長崎に黃陳といふ南蠻外科」

なんばんこせう 南蠻胡椒【名】(植)**たうがらし**(唐辛)に同じ。

なんばんさいかち 南蠻皂莢・阿勃勒【名】(植)次條に同じ。

なんばんさいかし 南蠻皂莢・阿勃勒【名】(植)豆(マメ)科に屬する喬木。幹は直立し。高さ四五十尺に達す。葉は大形の羽狀複葉をなし、互生す。四月頃疎なる總狀花序をなして、黃色の五瓣花を著く。熱帶地方に自生し、果實は藥用に供せらる。なんばんさいかし。

なんばんじ 南蠻寺【名】一南蠻宗の寺院。二織田信長が、永祿十一年に、葡萄牙(ポルトガル)人を招き、京都四條坊門に建造せしめし寺。天正十五年豐臣秀吉の天主教を禁止するに及びて破壞せらる。初め永祿寺と呼びしが、延曆寺より、年號を用ひて名とせしにつきて、朝廷に異議を呈出せしより、南蠻寺と改めしめしなりといふ。切支丹寺。

なんばんじっくい 南蠻漆喰【名】漆喰の一種。石灰・蠣灰(カキハイ)・濱苧(ハマヲ)・角叉(フノリ)のみを調合して製するもの。下塗に用ふ。

なんばんしぼり 南蠻絞【名】**なんばんぶき**(南蠻吹)に同じ。

なんばんじん 南蠻人【名】**なんばん**(南蠻)

なんばんしゆう 南蠻宗【名】『南蠻の宗教の義』きりたんしゆう(切支丹宗)に同じ。

なんばんすな 南蠻砂【名】(化)はうしや(硼砂)に同じ。

なんばんだいこん 南蠻大根【名】(植)**ころは**(胡蘆巴)に同じ。(皐蘆)に同じ。

なんばんちや 南蠻茶【名】(植)**たうちや**

なんばんづきん 南蠻頭巾【名】昔時、南蠻風に製りたる頭巾。

なんばんづけ 南蠻漬【名】酢と古酒と鹽とを混ぜて煎じ、さましたる後、鮎その他の川魚、小鰯・酸漿(ホホヅキ)・生薑(ショウガ)・水母(クラゲ)など種種の物を漬けたる食品。

なんばんつば 南蠻鐔【名】昔時、外國より渡來したる鐔。また我が國にて、それに摸して造りたるもの。圓形をなし、大にして薄く、光澤なき地鐵に銀布目象嵌にて文字・易卦を現はせり。その摸造品中、京都製は美しく、長崎製は雅なりとて、何れも好事家に珍重せらる。

なんばんてつ 南蠻鐵【名】足利時代の末より德川時代にかけて舶來したる、精煉せる鐵。兜・鉾、その他の武器を造る料として珍重せられたり。

なんばんに 南蠻煮【名】葱を一寸五分ほどに切り、斷割りて、味を附け、魚・鳥に交へて煮たる食品。

なんばんはこべ 南蠻繁縷・狗筋蔓【名】(植)一**おほやまはこべ**(大山繁縷)に同じ。二石竹科に屬する蔓草。莖は長くして強く、葉は卵形または卵狀披針形にして尖り、全緣なり。夏季、枝梢に帶綠白色の五瓣花を著く。各地の山中に自生す。つるせんをう。たうぢんかづら。

なんばんふう 南蠻風【名】南蠻のふう。南蠻人のなすふう。

なんばんぶき 南蠻吹【名】『天正年間、和泉國堺の銅商住友家に、南蠻人(和蘭人)の來りて傳へし法なるよりいふ』鎔融點の著しき差ある二種の金屬の合金を熱し、兩鎔融點の中間の溫度にて壓し、鎔融點の低き方の金屬を絞り出して、その二種の金屬を分つ方法。銅と鉛との合金のごとき、この方法を適用して、最も有效なるものなり。なんばんしぼり。

なんばんぶね 南蠻船【名】南蠻の船。南蠻風の船。南蠻人の船。

なんばんまつやに 南蠻松脂【名】くんろく(薫陸)に同じ。

なんばんもち 南蠻餅【名】蒸したる餅米に、甘皮を去りたる胡桃(クルミ)の仁をまぜ、擣木にてよく擣きて搗ね、小さくちぎりて丸め、水飴に漬けたる上、砂糖煮の青豌豆を周圍に附けたる食品。

なんばんりう 南蠻流【名】南蠻人のなす流儀。多くは、その醫術(殊に外科)にいへり。昔の西洋流。

なんばんれうり 南蠻料理【名】南蠻風の料理。昔の西洋料理。

なんばんわ 南蠻繪【名】西洋畫。蠻繪。(江戸時代の語)

なんばもち 南蠻餅【名】南蠻煮にしたる「雜煮餅。

なんばやき 南蠻燒【名】大阪市南區高津(コウヅ)にて製する陶器。京都黑谷山の土を用ふ。色赤し。延寶頃の創始。高津燒。

なんばりう 南蠻流【名】蹴鞠の一流派。難波宗長が、祖父賴輔に賀茂流の蹴鞠を學び、工夫して創めたるもの。

なんぴ 難非【名】**ひなん**(非難)に同じ。太平記「この外に應ノ鼎ノ地獄に者あるべしと見えたり。人の生涯を矢はんことを願みず、他の難非を顯す此等なり」

なんぴと 何人【代】**なにびと**(何人)の音便。

なんぴん 【名】一愚なる人。あまき人。二代名詞「銀(カネ)遣ふ客を疎かにして、不斷(ツネ)隙(セキ)にて賽すは、主だふし、我が身知らずの

なんぴんなり」 ㊂〔商〕相場の思惑外れし時、買方針の場合は初めの買價より下落せる價にて買ひ、賣方針の場合は初めの賣價よりも上騰せる價にて賣り、以て損失の打撃を少なからしむること。相場の亂高下の場合これを行ふ。〔難平〕〔取引所の語〕

なんぴん 餡餅【名】あんぴん(餡餅)に同じ。

なんぴん 南品【名】〔地〕『江戸の南部にあるよりいふ。さいたう(西島)參照』東京市の南郊なる荏原(エバラ)郡品川の遊廓。〔俚語〕

なんぴん-うり 難平賣【名】〔商〕前に賣りて損失ありたるに、更に又賣ること。〔取引所の語〕

なんぴん-がひ 難平買【名】〔商〕前に買ひて損失ありたるに、更に又買ふこと。〔取引所の語〕

なんぴんは 南蘋派【名】〔美〕明人沈南蘋(シンピン)を祖とする繪畫の一派。濃艶なる色彩を用ひ、動植物の寫生を主とす。應擧・岸駒・狙仙・若冲等の描く所、亦此の畫風に得る所ありといひ、近世の花鳥畫に見るべきもの多きも、該派の影響に由るといふ。

なんぴん-もち 餡餅餅【名】なんぴん(餡餅)に同じ。

なんぴやう 難病【名】療治し難き病。難症。重病。西鶴、諸國ばなし「その年中(トシジュウ)は難病に逢へり」

なんぴやうやう 南氷洋【名】〔地〕五大洋の一。南極圏の中にありて、氷に鎖されたる海。

なんぶ 南浮【名】〔佛〕なんえんぶだい(南閻浮提)の略。南部。沙石集「南浮の衆生は三障重きが故に、不動を念ずべし」

なんぶ 南部【名】㊀南方に位する部分。㊁〔佛〕なんせんぶしう(南瞻部洲)の略。南浮。

なんぶ 南部【名】㊀〔地〕甲斐國南巨摩(ミナミコマ)郡睦澤(ムツサハ)村の大字。駿州街道の一驛。次項參照。㊁姓氏の一。清和源氏より出づ。新羅三郎義光の裔南部光行を祖とす。甲斐國巨摩郡南部鄕に居りて氏とす。文治五年源頼朝の奥州征伐に從ひ、功により、奥州糠部五郡の地を得。盛岡に住し、子孫傳領し、明治維新後、伯爵を授けらる。また今の陸奥國三戸(サンノヘ)郡八戸(ハチノヘ)町及び同國上北(カミキタ)郡七戸(シチノヘ)町に藩主たりし兩分家あり。共に子爵を授けらる。㊂〔地〕『南部氏の所領に屬するよりいふ』陸中國盛岡(モリオカ)市及びその附近の地の汎稱。㊃南部の私大(シダイ)【句】「津輕(ツガル)の私大」に同じ。

なんぶ-あさみ 南部蔴【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。葉は鋭き鋸齒を具へ、分裂せざるものと、羽狀に分裂せるものとあり。通常、葉柄を缺く。花は皆筒狀花冠を有し、多數集りて頭狀花序に排列す。東北地方の山野に多し。ひめあざみ。

なんぶ-いと 南部絲【名】陸中國舊南部領地方にて製する絹絲。昔時は特殊の方法にて製せしが、近時は、改良して、普通の方法に依る。

なんぶう 南風【名】㊀南方より吹きくる風。薫風。㊁南方の詩。

南風競(ソヘ)はず【句】㊀『左傳の襄公十八年の條に「晉人聞レ有二楚師一、師曠曰、不レ害、吾驟歌二北風一、又歌二南風一、南風不レ競、多二死聲一、楚必無レ功」、南風は前條㊁の義にて、楚は南方の國なるよりいひ、その聲調の盛んならざるは、國勢の衰へたるに因るといふ』南方の國の勢の衰へて振はざる譬。㊁吉野朝の勢の衰へて振はざる譬。

南風の歌(ウタ)【句】『孔子家語の辨樂篇に出づ』支那にて、堯舜が五絃の琴にあはせて彈じ、これがために天下治りたりといふ歌。即ち「南風之薫兮、可二以解一二吾民之慍一兮、南風之時兮、可二以阜一二吾民之財一兮」といふ詩。

南風の詩【句】前條に同じ。

なんぶう 軟風・輭風【名】㊀輕軟なる風。そよそよと肌に心地よく感ずるほどの風。㊁〔地〕『英 Breeze』風力の階級の一。陸上即ち中央氣象臺及び測候所にては、六階級に分てるものの一。海上即ち艦船にては、十二階級に分てるものの一。前者にありては、毎秒一メエトル半乃至三メエトル半、後者にありては、毎秒六メエトル乃至八メエトルの速力なるをいふ。㊂〔地〕『英 Breeze』海軟風と陸軟風との併稱。

なんぶうま 南部馬【名】陸中國舊南部領の地より産する馬。體軀强大、性質温順にして、よく勞働に服し、我が國の産馬中、優良なるものなり。南部駒。

なんぶおり 南部織【名】次條に同じ。

なんぶおりもの 南部織物【名】舊陸中國南部地方、即ち盛岡(モリオカ)邊より産出する織物。南部氏の甲州より奥州に移封の後、從者のうち、織物に通ぜし者あり、甲州の織方に倣ひて始めしものといふ。昔時は紬(ツムギ)及び縮緬を製し、南部紬・南部縮緬の名著れしが、現今のは殆んど紡績木綿織物のみなり。

なんぶ-ぎぬ 南部絹【名】南部織物なる絹。地質强く、光澤に富む。

なんぶ-きよく 南部局【名】拓殖務省に置かれし二局の一。臺灣に關する事務を掌りしもの。

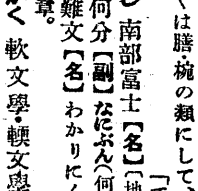
なんぶ-こま 南部駒【名】なんぶうま(南部馬)に同じ。

なんぶ-ごよみ 南部曆【名】『もと奥州南部地方にて、無學文盲の人の爲に發行せしよりいふ』あこよみ(綿曆)に同じ。

なんぶ-さう 南部草【名】〔植〕小蘗(ヘビノボラズ)科に屬する多年生の草。高さ約一尺。葉は複葉にして、三箇の小葉より成り、花は小形にして花被無く、穗狀花序を成す。みつばさう。

なんぶ-さうじゆ 南部草壽【名】〔人〕儒者。字は子壽。蘆沈軒と號す。山城國の人。京都に講說す。富山侯に仕へ、博學にして、典故に精しく、經濟に通ず。元祿元年歿す。

なんぶ-じま 南部縞【名】南部織物の一木綿縞。



(まじぶんな)

なんぶ-じやけ 南部鮭【名】〔動〕陸中國舊南部地方、即ち、今の盛岡(モリオカ)市地方に産する鮭。品質劣り、形狀もやや普通のに異なり、鼻少しく曲りて、味やや劣れり。

なんぶ-たらき 南部當歸【名】〔植〕當歸の一品種。葉の鋸齒の細小なるもの。東北地方の高山に自生す。いはてたらき。みやまたらき。

なんぶ-ちりめん 南部縮緬【名】なんぶおりもの(南部織物)を見よ。

なんぶつ 難物【名】扱ひ難き物、又は人。厄介もの。もてあましもの。

なんぶ-つむぎ 南部紬【名】なんぶおりもの(南部織物)を見よ。

なんぶ-づる 南部鶴【名】次條の略。

なんぶ-つるのまる 南部鶴丸【名】紋所の一。舊盛岡藩主南部家一族の家紋。下の圖を見よ。

(るづぶんな)

なんぶ-てつびん 南部鐵瓶【名】陸中國舊南部即ち今の盛岡市にて製出する鐵瓶。釜石(カマイシ)産の良質なる鐵を用ひて造るにより、鐵氣(クケ)を生ずる憂なきを特色とす。

なんぶ-とらのを 南部虎尾【名】〔植〕蓼(タデ)科に屬する多年生の草。肥厚せる根莖あり、短き地上莖を出す。葉は長卵形をなす。夏季、穗狀花序をなして、桃色の花を著く。陸中國の山野に自生す。

なんぶ-なんざん 南部南山【名】〔人〕儒者。草壽の養子。名は景衡、字は思聰、通稱は昌輔。別に環翠園とも號す。肥前國長崎の人。富山侯の儒官。木門十才子の第一と稱せらる。正德三年歿す。年五十五。

なんぶ-ぬり 南部塗【名】陸中國舊南部地方、即ち今の盛岡(モリオカ)市附近より製出する漆器。多くは膳椀の類にして、赤色のもの多し。「手山の別稱。

なんぶ-ふじ 南部富士【名】〔地〕陸中國岩手山の別稱。

なんぶぶん 何分【副】なにぶん(何分)の音便。

なんぶぶん 難文【名】わかりにくき文。むづかしき文章。

なんぶんがく 軟文學・輭文學【名】〔文〕

小說・戯曲の如き、主として、感情に訴ふる性質の文學。輕文學。硬文學に對して)

なんぶもやう 南部模様【名】模様の一。南部椀の模様に摸して、布帛に染めたるもの。

なんぶりやう 南部領【名】〔地〕徳川時代に於ける南部氏の領地。甚だ廣くして、南は仙臺領より北は津輕海峽に及び、西は鹿角(カヅノ)郡を併せ、東は津輕氏と八甲田(ハッカウダ)山を以て限りたり。

なんぶわん 南部椀【名】南部塗の椀。内面は朱、外面は黑にして、黑漆の上に、朱漆青漆または黃漆にて、鶴或は花卉を畫き、所所に金箔片をおしたるもの。鮮麗にして雅致あり。飯器などとして、點茶家の愛翫する所なり。藤原秀衡の創始に係り、一名秀衡椀ともいふ。

なんべい 南米【名】〔地〕みなみあめりかしう(南亞米利加洲)の略。

なんべん 何遍【副】なんど(何度)に同じ。

なんべる (英 Nompareil) 活字の大いさの一種。六ポイントなるもの。

なんぼ 何程【副】■なにほど(何程)の訛。今宮心中「何ぼ直に縫うても横へ横へといきおる」 雜膝栗毛「なんぼ晝日中(カヂヤ)でも、こんなうす淋しい山道ぢやあ、それも知れねえ」 ■價いくばく。いくら。なんぼでも【句】たとひ何程といふとも。いかにしても。 雜歌加留多「是非是非頼み奉る。いや、なんぼでもなりませぬ」 なんぼ何(ナン)でも【句】たとへ如何あらうとも。いかにどうあらうとも。

なんぼ 南畝【名】『詩經の豳風篇に「同二我婦子一、饁彼南畝一、田畯至喜」とあり』日當のよき南方の田畝。

なんぼ 南畝【名】〔人〕おほたなんぼ(太田南畝)を見よ。

なんぼ 南浦【名】南方にある浦。 持統天皇歌「或時は一葉に掉して、袂を南浦の雲に片敷」

なんぼう 何程【副】■なんぼ(何程)の訛。當世虎の卷「なんぼうお聞きなんすとて、はしたないお咄をしいしたなら」 ■いかにも。なんとも。 狂言かりがね「なんぼうめでたきものにて候」

なんぼく 南北【名】みなみと、きたと。

なんぼくあみ 南北網【名】敷網の一種。方形にして、四隅に重き沈子(シヅ)あり、中部に長き手繩を附け、その末端に空樽を結び附けて浮標とし、四艘の網船と一艘の中見(ナカミ)船とにて張る。紀伊國志摩國の地方にて、鰯(イワシ)鰺(アヂ)などを漁するに用ふ。

なんぼくしんわ 南北新話【名】〔書〕麥林希因・梅路等の說を敷衍して、俳論を斷片的に記したるもの。一卷。建部(タケベ)涼袋の著。

なんぼくしゆう 南北宗【名】〔美〕南宗畫と北宗畫とを見よ。

なんぼくてう 南北朝【名】■支那史上の一時代。東晉の末、江を隔てて天下二分せられ、南方には、劉裕晉を纂奪して、宋を起し、北方にありては、五胡十六國滅亡し、拓跋魏の併有するところとなる。爾來隋の天下を統一するまで凡そ百五十年間戰亂たえず。 正統記「もろこしの晉滅びて南北朝となる。宋・齊・梁・陳相次ぎて起る。これを南朝といふ。後魏・北齊・後周、次次に起れりしを北朝といふ。百七十餘年並びて立ちたりき」 ■我が國にて、南(吉野)朝と、北朝と。

なんぼくてうじだい 南北朝時代【名】南朝と北朝と相對立したりし時代。

なんぼくにきやう 南北二京【名】〔地〕奈良(南京)と京都(北京)と。 榮花「南北二京の僧綱・凡僧學生、數を盡したり」 平家「一天の君崩御なりて後、御墓所(ゴムシヨ)へ渡し奉る時の作法は、南北二京の大衆(ダイシユ)悉く供奉して、御墓所の廻に、我が寺寺の額を打つことありけり」

なんぼくもの 南北物【名】狂言作者鶴屋南北の得意とせし、怪談に類する作物。當時の、奇を悦ぶ人氣に投じて、流行したり。 續膝栗毛「覺悟はよからず、今が、はい、この世の別れば、なんまいだぶつ」 「毛。

なんまいだぶつ 南無阿彌陀佛【句】〔佛〕なんまみだぶつ(南無阿彌陀佛)の音便。

なんまいだぶつ 南無阿彌陀佛【句】〔佛〕なんまみだぶつ(南無阿彌陀佛)の音便。

**なんまい

なんやう-ちやう 南洋廳【名】南洋群島中我が委任統治に屬するヤップ島及び赤道以北の太平洋諸島を統轄するために設けたる官廳。大正十一年開き、長官・郡長・事務官・警視・技師・警部等を置く。

なんやう-ちやう-ちやうくわん 南洋廳長官【名】內閣總理大臣の指揮監督を受け、南洋廳部內の政務を管理する勅任官。

なんら 何等【代】なにら(何等)の音便。「なんらの報知もなし」

なんりん 軟輪・輭輪【名】古、支那にて、蒲にて包みたる車の輪、又その車。蒲輪。

なんりよ 南呂【名】㊀『禮記の月令篇に「仲秋之月、律中二南呂一」とあり』十二律の一。㊁『國語の註に「八月曰二南呂一」とあり』陰曆八月の異稱。

なん-れい 南嶺【名】南方にある山嶺。

なんれい 南嶺【名】〔人〕㊀すずきなんれい(鈴木南嶺)を見よ。㊁ただなんれい(多田南嶺)を見よ。㊂〔地〕ほらがたうげ(洞峠)の異稱。

なんれう 南遼・煖窶【名】㊀『遼は、爾雅に「白金謂二之銀一其美者謂二之遼一」とあり』品質のすぐれたる銀。㊁〔鐵ぎん(銀)の異稱。渡邊華山書簡「墨建具の外、大低實物に置壺し、猫親類共に借壺し候へば、僅か南遼一片の儀にて、母事身內に當り候山伏の、本所一つ目に住居仕候方へ…罷り越し」㊂平宗盛の飼養せし名馬。平家「白葦毛なる馬の、南遼とて、秘藏せられたりけるに」

なんれう-いちりやう 南遼壹兩【名】古銀貨の一。縱二寸二分强、橫一寸二分强、重さ三匁五分にして、面に「南遼」及び「壹兩」の極印あるもの。〔㊁に同じ。

なんれう-ぎん 南遼銀【名】なんれう(南遼)の銀。

なんれう-ざ 南遼座【名】和泉國堺にて、南遼を鑄たる座。慶長三年廢せられたり。

なんれう-にしゆぎん 南遼二朱銀【名】にしゆぎん(二朱銀)に同じ。

なんろ 南呂【名】なんりよ(南呂)に同じ。

なんろ 難路【名】けはしき路。難道。

なんろん 難論【名】㊀むづかしき議論。㊁ろんなん(論難)に同じ。

なん-ぬん 難韻【名】〔文〕漢詩を作るに、文字小さくして、押韻に艱む韻。例へば、三江・三肴・十四鹽・十五咸の類。險韻。

なんぬん-の-おとど 南院大院【名】〔人〕ふぢはらみちたか(藤原道隆)に同じ。

なんぬん-だう 南圓堂【名】藤原冬嗣の、父內麿の遺志を繼ぎ、藤原氏の興隆を祈るために、氏寺なる大和國奈良の興福寺に建てし八角形の佛堂。西國巡禮第九番の札所。本尊は不空絹索(フクウケンジヤク)觀音。水鏡「山階寺(ヤマシナデラ)の中に南圓堂を建てまひにき」

なめ 嘗【名】『なむ(嘗む)㊀を見よ』花骨牌にて、重ね伏せてある札の中にて、最も下にあるもの。

なめ-む 嘗【名】㊀嘗むること。「一なめに嘗め了る」㊁高貴の人に菜(サイ)を進むる際、まづ嘗め試むること、又その役。

なめ 饌脊【名】『滑(ナメ)の義。さこなめ(常滑)參照』はだつけ(膚附)に同じ。〔古語〕和名「饌脊、奈女」

なめ 白痢・癩【名】びやくり(白痢)に同じ。〔古語〕和名「癩、釋名云、痢赤白曰レ癩、音賴。赤痢、知久曾、白痢奈女」

なめ 漫面【名】『錢の背面には波紋あるによりて、なみ(波)の轉じたる語なりといふ』昔時の錢の裏面を云ふ。〔東國の方言〕

なめ 無禮【名】なめげなること。無禮(ブレイ)。增鏡「御返(カヘ)し、辨の內侍承りて申すべしと聞きはべりしを、なめなりといふことにて、おとど今出川より申されけるとかや」

なめ 無禮【名】なめげなること。無禮(ブレイ)。

なめ 無め【句】な(無し)の條下を見よ。

なめ-うじ 名苗字【名】なみやうじ(名名字)に同じ。

なめ-かた 漫面【名】試に錢をなげうちて、文字を刻める方の現れたると伏したるとによりて、勝負を決すること。

なめ-かた 漫面の謀(ハカリ)【句】『武備志の北宋の

部に「秋青神に祈り、錢を投じて、吉凶を占ひ、將士を勵ましむること見えたり』神に祈りて、多くの錢を投じ、悉くその表面又は裏面出づれば、吉なりと豫め定め、密かに豫告に遣はぬやうに、兩錢を貼り置きて、士氣を鼓舞すること。

なめかた 行方【名】〔地〕常陸國十一郡の一。郡役所を麻生(アサフ)町に置く。

なめかは 滑川【名】〔地〕下總國香取(カトリ)郡にある驛。利根(トネ)川に沿ふ。鐵道成田線の一驛。

なめがは-くわんおん 滑川觀音【名】下總國香取(カトリ)郡滑川町大字滑川にある天台宗の寺。滑川山・龍正院と號す。本尊は十一面觀世音。阪東二十八番の札所。

なめ-くさり 【名】なまいき。きいたふう。

なめ-くすし 嘗藥師【名】嘗(ナ)[二]の役をする〔動〕『なめは滑の義なるべし』腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。蝸牛に似て、殼なく、背は灰黃褐色にして、薄き黑條あるもの、黑色なるもの、或は單に灰黃褐色にして、黑條を缺けるものなどあり。常に陰濕の地を好みて棲息し、苔蘚等を食とし、腹面の筋肉の伸縮によりて徐徐に運動し、體面より粘液を分泌して、移動を滑かならしむ。この液は、乾けば銀白色を呈す。なめくぢら。なめくぢり。和名蛞蝓、云云、本草云、蛞蝓、奈女久知」

なめくぢ 蛞蝓【名】〔動〕『なめは滑の義なるべし』腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。蝸牛に似て、殼なく、背は灰黃褐色にして、薄き黑條あるもの、黑色なるもの、或は單に灰黃褐色にして、黑條を缺けるものなどあり。常に陰濕の地を好みて棲息し、苔蘚等を食とし、腹面の筋肉の伸縮によりて徐徐に運動し、體面より粘液を分泌して、移動を滑かならしむ。この液は、乾けば銀白色を呈す。なめくぢら。和名蛞蝓、云云、本草云、蛞蝓、奈女久知」

なめくぢら 蛞蝓【名】〔動〕前條に同じ。

なめくぢり 蛞蝓【名】〔動〕㊀前條に同じ。㊁げげぢり(蛞蝓)の異稱。

なめくづ 蛞蝓【名】〔動〕前條㊀に同じ。字鏡「蝓。加太豆夫利。又、奈女久豆」

なめさか 滑坂・蠑【名】なめらかなる坂。〔古語〕字鏡「蠑。山岡邪平。奈女佐可。又、奈乃女爾」

なめ-ざれ 無禮戲【名】無作法なるざれごと。犬子集「親子居るあたりで戀はなめざれぞ」

なめし 鞣【名】なめすこと、又なめしたる物。なめしがは。源少色葉集「滑革、ナメシ」

なめし 菜飯【名】油菜又は蕪大根などの葉の蒸したるを、細かに刻み、炊きたての飯にまぜたるもの。芭蕉「忘草菜飯に摘まん年の暮」

なめし 無禮し【形一】禮(サ)無し。無作法なり。〔古語〕萬葉「妹といへばなめし畏しかすがにかけまくほしきことにあるかも」枕「從者(ズサ)のなめげに侮(アナ)るも」

なめしがは 鞣革・韋【名】鞣したる革。つくりがは。をしかは。

なめしがは-し 鞣革師・韋師【名】鞣革にて種種の細工をなす者。

なめし-でんがく 菜飯田樂【名】田樂を菜飯の菜(サイ)として食ふこと。

なめす 鞣す【動四他】『滑(ナメ)す義』毛皮の毛と脂とを去りて、水にて漂し、柔かにす。

なめ-すう 並据う【動下二他】なべすう(並据う)に同じ。〔古語〕答禮「奉りたまへる物どもを御まへになめすゑ」

なめ-すぐ 嘗過ぐ【動上二他】㊀餘りに多く嘗む。過度に嘗む。㊁相手を輿(コシ)し

り、全體無色半透明、頭部判然せず。背腹の中央線及び尾端に鰓あり。頭端の下面に口を有し、その周緣に絲狀物あり。春鰓は春の上に走れり。活潑に游泳し、常に海底の砂中に埋沒して、口のみを出す。數種あり、我が國にては、瀨戶內海と博多灣とに「に同じ。

なめ-くぢら 蛞蝓【名】〔動〕なめくぢ(蛞蝓)に同じ。

なめくぢり 蛞蝓【名】〔動〕㊀前條に同じ。俳家奇人談「なめくぢりいつまで草に隱れけり」㊁げげぢり(蛞蝓)の異稱。下學集「蛞蝓、ナメクヂリ」

なめ-くづ 蛞蝓【名】〔動〕前條㊀に同じ。字鏡「蝓。加太豆夫利。又、奈女久豆」

なめ-さか 滑坂・蠑【名】なめらかなる坂。〔古語〕字鏡「蠑。山岡邪平。奈女佐可。又、奈乃女爾」

なめ-ざれ 無禮戲【名】無作法なるざれごと。犬子集「親子居るあたりで戀はなめざれぞ」

なめし 鞣【名】なめすこと、又なめしたる物。なめしがは。源少色葉集「滑革、ナメシ」

なめし 菜飯【名】油菜又は蕪大根などの葉の蒸したるを、細かに刻み、炊きたての飯にまぜたるもの。芭蕉「忘草菜飯に摘まん年の暮」

なめし 無禮し【形一】禮(サ)無し。無作法なり。〔古語〕萬葉「妹といへばなめし畏しかすがにかけまくほしきことにあるかも」枕「從者(ズサ)のなめげに侮(アナ)るも」

なめしがは 鞣革・韋【名】鞣したる革。つくりがは。をしかは。

なめしがは-し 鞣革師・韋師【名】鞣革にて種種の細工をなす者。

なめし-でんがく 菜飯田樂【名】田樂を菜飯の菜(サイ)として食ふこと。

なめす 鞣す【動四他】『滑(ナメ)す義』毛皮の毛と脂とを去りて、水にて漂し、柔かにす。

なめ-すう 並据う【動下二他】なべすう(並据う)に同じ。〔古語〕答禮「奉りたまへる物どもを御まへになめすゑ」

なめ-すぐ 嘗過ぐ【動上二他】㊀餘りに多く嘗む。過度に嘗む。㊁相手を輿(コシ)し

易しと認めて侮る。生玉心中「しなだれ寄って手を取れば、ああ、いやいや、なめ過ぎた、置かんせ」

なめ-すすき 滑薄【名】〔植〕ねずみたけ(鼠茸)に同じ。貞丈雑記「年中恒儀記に、なめすすき進上の事あり。殿中申次記には、滑薄とあり、これは、木茸の名なり。しめぢ茸に似て、莖長きものなり。筑紫にては、みづたたきといふ物なり。江戸には無し」

なめ-せん 漫面錢【名】なめ(漫面)に同じ。

なめせん-ぎれ 漫錢切【名】錢文・寶盡(ヲカラ沙)と唐草の摸様とある古代切(ギレ)。

なめ-たけ 滑茸【名】〔植〕なめすすき(滑薄)に同じ。

なめ-づり 嘗・舐【名】なめづること。くちなめづり(口嘗)・したなめづり(舌嘗)参照。

なめ-づる 嘗る・舐る・嚙る【動四他】已れの脣のまはりなどを嘗めまはす。たびたび嘗む。伊呂波字類抄「嚙、ナメツル」

なめ-て 並めて【副】なべて(並べて)に同じ。〔古語〕萬葉「秋風はすずしくなりぬ馬なめていざ野にゆかな萩の花みに」

なめてならず 【句】「並(なべ)てならず」に同じ。〔古語〕平家「なめてならぬ御事は、ゆめゆめ思し召し留まりたまへり」

なめ-にんぎやう 嘗人形【名】『小供の口に入れて嘗め得るほどの大いさなる義』極めて小さき人形。浮世風呂「この御褒美には嘗人形」

なめ-みそ 嘗味噌【名】ひしほ(醢)を云ふ。〔甲斐國の方言〕

なめ-みら 【名】〔植〕にら(韮)に同じ。〔古語〕字鏡「韮、奈女見良」

なめんだら 【名】『無禮(ナメ)みだらの訛かといふ』物の整ひをらぬこと。鵜鷺物語「幾内・近國の勢(ナメ)馳集りて、在在・所所なめんだらに、ここに一手、かしこに一手」

なめもの 嘗物【名】■ひしほの類の總稱。■嘗物麹に、干したる茄子・生薑の薄く切りたるものなどを漬けたる食品。

なめもの-かうぢ 嘗物麹【名】なめものを造るに用ふる麹。即ち麥にて造れる麹。

なめら 【名】〔動〕しまへび(縞蛇)に同じ。

なめ-らか 滑か【貌】■むらなく平かなるさま。すべすべ・つるつる。■少しもつかへず、すらすらと進むさま。

なめ-らけし 滑けし【形二】滑らかなるさまなり。〔古語〕字鏡「脆、波太奈女良介之」

なめら-ぶぐ なめら河豚【名】〔植〕などやぶぐ(名古屋河豚)に同じ。

なめり 滑【名】〔動〕なめりうを(滑魚)の略。

なーめり 【助動】なんめりに同じ。〔古語〕竹取「子になりたまふべき人なめりとて」

なめり-ありく 滑歩く【動四自】のろのろとあるきまはる。ぬめりありく。紅梅千句「若きやつめと知らばただ斬れ(長頭丸)、あだふくは鰻のやうになめりありき(季吟)」

なめり-うを 滑魚【名】〔動〕すなめり(砂滑)に同じ。

なめり-がは 滑革【名】佩楯の刀革の下なる一文字の革。

なめり-がは 滑川【名】〔地〕相模國鎌倉町を流るる川。由比ケ濱に注ぐ。長さ五十町。青砥藤綱の故事を以て名高し。

なめりがは 滑川【名】〔地〕越中國中新川郡に在る町。富山灣に臨む。郡役所を置く。鐵道北陸線の一驛。

なめり-ごと 無禮言【名】なめき言葉。無禮の語。〔古語〕起「亂語、ナメリゴトシテ」

なめり-つのごけ 滑角苔【名】〔植〕つのごけ(角苔)に同じ。

なめり-みち 滑道【名】すべり易き道路。〔常陸國の方言〕

なめる 滑る【動四自】なめらかにあり。すべる。字鏡「滑、奈女利女」

なも 南謨・那謨《梵 Namo》【感】〔佛〕なむ(南無)に同じ。源氏「なも當來の導師とぞ拜むなる」

南謨阿彌陀【句】〔佛〕次條の略。

南謨阿彌陀佛【句】〔佛〕なむあみだぶつ(南無阿彌陀佛)に同じ。夫木「人を見るも我が身を見るもはいかにたもあみだぶつなもあみだぶつ」

南謨、阿梨耶(アリヤ)、婆盧枳帝(バロキテ)、樓婆羅耶(シヤヤ)、菩提薩埵婆耶(サタバヤ)、(梵 Nama Aryavalokiteśvaraya Bodhisattvaya)【句】〔佛〕『歸命聖觀自在有情の義』觀音大士に歸命し奉る。盛衰記「天皇の御前に跪き、南謨阿梨耶、婆盧枳帝、樓婆羅耶、菩提薩埵婆耶と唱拜し奉って」

なも 【助動】願望の意なるなむに同じ。〔古語〕萬葉「かみつけのをどのたどりが川ぢにも兒らにあはなも一人のみして」

なーも 【助動】らむの意なるなむに同じ。〔東國の古の方言〕萬葉「ひたがたの磯のわかめのたちみだえわをか待つなもきぞもこよひも」

なも 【助】なむ(助)に同じ。〔古語〕類聚「天(アメ)の下の公民(オホカミ)を惠みたまひ、撫でたまはむとなも、神(カム)ながら思ほしめさくとのたまふ天皇(スメラミコト)の大命(オホミコト)」

なーもじ 名文字【名】名をあらはせる文字。〔古語〕祭禮故治部卿のぬしのみなもじより附けたり」

なもだ 【句】〔佛〕なまうだの約。關八州繁昌「なもだ・なもだの鉢叩(ハチタヽキ)」

なもて-をどり なもで踊【名】八月二十七日、橘津國川邊(カハベ)郡の多田神社の祭禮に、村民集りて白旗を立ててなす踊。

なもみ 菜耳【名】〔植〕をなもみ(菜耳)の異稱。和名「菜耳、奈毛美」

なもも 菜耳【名】〔植〕前條に同じ。

なもろ 【助】『ろは接尾語』なもに同じ。一說に、な(勿)に同じと。〔古語〕萬葉「まつがうらにさわぐうらたちま人ごとおもほすなもろわがもほのすも」

なーや 魚屋【名】さかなや(魚屋)に同じ。〔古語〕のおきごや。今宮心中「船の屋形に三味弾けば、納屋に油の白を引く」

なやうや 【句】なを見よ。

なやす 萎す【動四他】■なゆるやうになす。やはらかにす。〔古語〕類聚「萎、奈夜須」■たる物の、色もあらぬやうに見ゆ」■ねやす(練す)に同じ。字鏡「鍛、揺也。推也。練也。奈夜須也。」

なやーまい 納屋米【名】江戸時代、諸國の商人の手を經て、大阪又は兵庫に輸入せし米穀。(藏米に對して)

なやまい-しやうにん 納屋米商人【名】納屋米を取扱ふ商人。なやものし。

なやまし 惱【名】なやますこと、又その物。字鏡「此の人のなやましにやあらん」

なやまし 惱し【形二】■難儀なり。くるし。起「迍邅、ナヤマシキニ」■氣分あし。心地わろし。字鏡「なやましく侍りて、内へも參らず、まかりありきもし侍らねばなん、そこにも參りこれ」

なやましがる 惱しがる【動四自】なやましと思ふ。源氏「なやましがりて臥したまへれど」

なやましげ 惱しげ【形】なやまし(惱し)の連體形「惱しき」の轉訛。「東國の古の方言」萬葉「なやましけ人妻かもよこぐ船の忘れはせなないやもひますに」

なやます 惱す【動四他】惱しむ。惱むやうにす。苦します。源氏「御心をもなやまし奉るにやとなん思ひたまふる」

なやます 惱す【動四自】なやむ(惱む)の敬語。〔古語〕萬葉「くがねかも樂しけくあらむと思ほしてしたなやますに」

なやみ 惱【名】■なやむこと。くるしみ。■やまひ。病氣。源氏「御目のなやみさへ、このごろ重くならせたまひて」

なやむ 惱む【動四自】『なゆ(萎ゆ)に關係ある語なるべし』■思ひ煩ふ。心苦しむ。源氏「いぶせくも心にものをなやむかなやよやいかにと問ふ人もなみ」■病に煩ふ。源氏「御心地も、いと苦しくて、なやみたまふ」■書からぬ事に思ひ言ふ。榮花「御子もおはせぬ女御の、后にゐたまひぬること、安からぬことに世の人惱み申して」■こまる。苦しむ。困難す。土佐「河の水干てなやみわづらふ」

なやむ 惱む【動下二他】なやます(惱す)に同じ。(狂言 惡坊)「路次で出家をとらまへて惱めたが、某が惡を作るをば惱に思召し」

なやもの 納屋物【名】なやまい(納屋米)に同じ。

なやもの

なやものし 納屋物師【名】なやまいしやうにん(納屋米商人)に同じ。

なやゝか【貌】なよやかに同じ。〔古語〕「いとなやゝかなる往(ヰ)に」「見よ。

なーやらふ 儺遣らふ【句】な(儺)の條下を源同じ』力失せて、なよなよとなる。氣力なく、くたくたとなる。〔痿ゆ〕竹撓「手に力もなくなりて、なえかかりたる中に」參照「病みあかし…、ただなえになえ伏したまひぬ」㊁衣服など、くたくたとなる。㊂しをる。しなぶ。

なゆた 那由陀・那由他・那庾多・那由多(梵 Nayuta)【數】【佛】極めて多き數。或は數千萬といひ、或は億に當るといふ。大原問答雜集第百千萬那由他の舌の上に無量の辭を出し、一一以て褒むるとも、淨土の莊嚴褒め盡すこと能はず」〔古語〕

なゆーたけ 萎竹【名】なよたけ(萎竹)に同じ。

なゆたけーの 萎竹の【枕】萎竹は、萎(な)えたわむものなるより、たわの轉なるとをにかけていふ。萬葉「なゆ竹のとをよる子らは」萬葉「秋山のしたべる妹なよ竹のとをよる子らは」㊁竹の緣語なるふし(節)又節と節との間の意なるよにかけていふ。古今「なよたけのよながき上に初霜のおきゐて物を思ふ頃かな」

なゆたこふ 那由他劫【名】〔佛〕極めて多き數の劫(カフ)。永劫(エイカフ)。無量劫。著鑑大平記「なゆたこふその間、阿鼻の苦患は受くるとも」

なーゆみ 楯【名】古、鼠を捕ふるに用ひたりし具。〔古語〕和名「楯、奈由美」

なゆむ 惱む【動四自】なやむ(惱む)の轉訛。〔東國の古の方言〕萬葉「人の子のかなしけしだはいますどりあなゆむ駒のをしけくもなし」

なよし 名古【名】〔動〕いな(鰯)に同じ。〔古語〕「土佐しりくめなはのなよしの頭」

なーよせ 名寄【名】名所などの名を寄せあつめたるもの。

なよせーちやう 名寄帳【名】江戸時代、檢地帳の中より地主の氏名・畝歩等を抄錄したる帳簿。萬葉縣治要略「名寄帳は、田畑屋敷反別の筆數を各所有者一人別に區分し、納租及び村費賦課の標準を取る基礎として、村役場に備へ置く簿册なり」

なよたけ

なよたけ 萎竹・弱竹【名】㊀しなやかなる竹。細くして、なよなよとせる竹。なゆたけ。〔古語〕源氏「なよ竹の心地して、さすがに折るべくもあらず」㊁〔植〕めだけ(山竹)に同じ。

なよたけーの 萎竹の・弱竹の【枕】㊀なよ竹は萎(な)えたわみ、起伏(オキフ)するものなるより、たわの轉なるとを及びおきふしにかけていふ。なゆ竹の。萬葉「秋山のしたべる妹なよ竹のとをよる子らは」㊁竹の緣語なるふし(節)又節と節との間の意なるよにかけていふ。古今「なよたけのよながき上に初霜のおきゐて物を思ふ頃かな」

なよたけーものがたり 奈與竹物語【名】〔書〕『主人公たる女の、新勅撰集なる「高しとして何にかはせんなよ竹の一よ二よのあだのふしをば」といふ歌の意をとりて、天皇の御使に「なよたけの」と答へたるにより名とす』後嵯峨天皇、大井の山莊にて蹴鞠の御遊の時、拜觀に參りあはせし某少將の北の方を懸想し、わりなく語らはせたまふ筋に作りたる小說。作者詳かならざれども、後嵯峨院崩御後久しからざる時代のものなるべしといふ。

なよたけものがたりーえまき 奈與竹物語繪卷【名】奈與竹物語を繪卷にせるもの。模本世に傳はるもの多けれども、最も著名なるを、讃岐金刀比羅神社に藏する一卷とす。作者は詳かならざるも、吉野朝頃のものならんといふ。

なよなよ 萎萎【貌】なえたるさま。しなやか。たをやか。なえなえ。なえやか。なやゝか。なよやか。なよよか。なよらか。なよびか。〔古語〕源氏「まみなども、いとたゆげに、いとどなよなよと、われかのけしきにて」

なよびーか 萎びか【貌】なよびたるさま。なよなよ。なよやか。〔古語〕源氏「なよびかに女しと見れば、あまり、なさけにひきこめられて」

なよびーすがた 委び姿【名】なよびかなる姿。〔古語〕梁塵「なよびすがた、はた、いといたう、たをやぎけるをや」

なよぶ 萎ぶ【動上二自】なよなよと見ゆ。(連用形以外の用例無し)〔古語〕源氏「御心なよびたるかたに過ぎて」㊁少し弱き所附きて、なよびすぎたりしけぞかし」

なよめかし 萎めかし【形二】なよめきたるさまなり。〔古語〕參考「なよめかしくおはすめるなど」

なよや【感】歌謠の拍子に添ふる詞。〔古語〕催馬樂「美作や久米のさら山さらさらになよやさらさらになよや」

なよやか 萎やか【貌】なよなよ(萎萎)に同じ。〔古語〕秋夜長物語「きんしやの水干、なよやかにうちしをれたるていにて」

なよよか 萎よか【貌】なよなよ(萎萎)に同じ。〔古語〕源氏「櫻のほそながら、なよよかに著なして」

なよらか 萎らか【貌】なよなよ(萎萎)に同じ。〔古語〕源氏「なよらかにをかしばめること」

なーよる 馴寄る【動四自】親しく寄りあふ。〔古語〕夫木「ふるさとの月吹く風になよたけのなよりあひても幾代經ぬらん」

なよろ 名寄【名】〔地〕天鹽國に在る地。天鹽川と名寄川との合流點附近にして、上下の二村に分れしも、大正四年上名寄村は名寄町と改稱せり。

なら 楢【名】〔植〕こなら(小楢)㊀に同じ。楢の柏木【句】〔植〕なら(楢)に同じ。一說に、ならがしは(楢柏木)の異稱なりと。新六「さほ山のならのかしは木又はえのもとつ葉茂み紅葉しにけり」

なら 那羅【名】〔佛〕次條を見よ。

なら 那羅・那里【句】〔佛〕男性と女性と。

なら 那羅・那里の娛樂【句】〔佛〕男女交合の樂。沙石集「釋經の二根交會、五塵成大佛事の文を僻解して、薩埵の大藥師適は那羅・那里の娛樂なりといひて」

なら 奈良【名】㊀〔地〕大和國全部を管轄する縣。縣廳を奈良市に置く。㊁〔地〕大和國にある市。元明天皇以下、七代、七十餘年間の帝都たりし處。今も古蹟多し。奈良縣廳の所在地。一名、南都・南京。〔平城・寧樂・平・名良〕㊂姓氏の一。秦(ハタ)氏より岐れしもの。姓(カバネ)は忌寸(イミキ)。㊃姓氏の一。江戸の金工奈良利暉の一門。ならぼり(奈良彫)參照。㊄ならもめん(奈良木綿)の略。

なら 奈良【名】㊀〔地〕大和國全部を管轄する縣。縣廳を奈良市に置く。㊁〔地〕大和國にある市。元明天皇以下、七代、七十餘年間の帝都たりし處。今も古蹟多し。奈良縣廳の所在地。一名、南都・南京。〔平城・寧樂・平・名良〕㊂姓氏の一。秦(ハタ)氏より岐れしもの。姓(カバネ)は忌寸(イミキ)。

なら 奈良の畫師(エシ)【句】上古、奈良に住み、朝廷より戶課を免ぜられて、畫師を世職とせし一團の人人。〔楢葉抄〕「聖德太子傳曆」冬十月、太子爲ㇾ繪諸寺佛像莊嚴、定ㇾ賣文畫沙ㇾ山背畫沙ㇾ河內畫師楢畫師等、永免ㇾ戶課ㇾ永爲ㇾ名業」

なら【助】㊀ならば。にてあるならば。狂言「鬮罪人」「それなら身共の存じよりを申して見ませう」㊁物の名を重ね擧ぐる時、一一その下に添へて用ふる語。大鏡「内の粟なら、麥なら、祭ならでは使はぬ米まですかせど」京童跡「花洛、その外、隣國よりも、けふこの御祭(マツリ)にあはんため、寄りくる人、船なら、陸なら、所せきあまり」

ならーうちは 奈良團扇【名】奈良の名產なるうちは。判じ物及び樣樣の繪を畫がきたる團扇。江戸の金工奈良利暉の一門。ならぼり(奈良彫)參照。㊄ならもめん(奈良木綿)の略。

なら 奈良の團扇【句】ならうちは(奈良團扇)に同じ。俳諧新選「碧梧桐」自南來(ジナン)と奈良の團扇に書かれたり」

なら 奈良の三作(サク)【句】奈良派の彫工中傑出せる三人、即ち利壽(トシ)・乘意・安親。奈良風の三傑。「見よ。

なら 奈良の三會【句】さんゑ(三會)の條下を見よ。

なら 奈良の七大寺【句】しちだいじ(七大寺)を見よ。

なら 奈良の大佛【句】だいぶつ(大佛)の條下

なら 奈良の都【句】〔地〕奈良朝時代の帝都、即ち平城宮(ナラノ)の在りし處。古來、天皇卽位ごとに遷都ありしも、此に至りて久しく一地に定まるに至れり。その地域、大和國添上(ソフノカミ)・添下(ソフノシモ)の二郡の一部)の二郡に跨り、東は大安寺の舊跡、西は西大寺の邊、北は東大寺・法華寺間街道の邊、南は九條村・郡山町の邊に亙り、今の奈良市は、その左京の一部に過ぎざりしものの如し。〔平城の都・寧樂の都〕萬葉「八百よろづ千年をかねて定めけん平城の都は…よろづ世に榮えゆかむと…顯めりし寧樂の都を」

なら 奈良の六宗【句】〔佛〕ろくしゆう(六宗)に同じ。

なら【助】㊀ならば。にてあるならば。狂言「鬮罪人」「それなら身共の存じよりを申して見ませう」㊁物の名を重ね擧ぐる時、一一その下に添へて用ふる語。大鏡「内の粟なら、麥なら、祭ならでは使はぬ米まですかせど」京童跡「花洛、その外、隣國よりも、けふこの御祭(マツリ)にあはんため、寄りくる人、船なら、陸なら、所せきあまり」

ならーうちは 奈良團扇【名】奈良の名產なるうちは。判じ物及び樣樣の繪を畫がきたる

る、廉價なるもの。後、京都にても大阪にても作りて賣れり。ねぎうちは。一茶「仰向に寢て青丹(アヲ)よし奈良團扇」 貞享伊勢物語奈良團扇うちはに思入の歌書きつけて、これを今の女に見せよと渡したまへば」

ならえん 那羅延(梵 nārāyaṇa)【名】〔佛〕『勝力・堅固金剛の義。又、那羅は人、延は生本の義、即ち一切の人類の生ずる本源の義』帝釋天の眷屬にて、惡を排し、善を生ずるを務となし、力量甚だ大なりといふ、佛法守護の神。又、梵天王の別名といふ。太平記「那羅延が力にても動し難く、金剛の杵も碎き難くぞ見えたりける」

ならえん-てん 那羅延天(梵 Nārāyaṇa-deva)【名】〔佛〕前條に同じ。

なら-か 捺落迦・那落迦(梵 Nāraka)【名】〔佛〕『捺落は人、迦は惡の義、即ち人類の罪惡の義、轉じて、人類が罪惡のために苦痛を受くる處の意となる。**ならく**(奈落)參照』**おとく**(地獄)に同じ。太平記「八王子は千手觀音の垂跡(スヰジヤク)、以二無垢三昧力一、潜二奈落迦重苦一、灌頂大法王子なり、故に大八王子といふ」

なら-かいだう 奈良街道【名】〔地〕■京都より大和國奈良へ通ずる街道。ならみち。■大阪より奈良に通ずる街道。 玄殺油地獄「四筋に別れ、玉鉾の、これより辰巳奈良街道、丑寅隅は八幡(ヤハタ)道、玉造へは未申、西元來し京橋や、野田の片町大和川」

なら-かう 奈良香【名】あをに(青丹)■に同じ。

なら-がき 奈良柿【名】大和國奈良より産出する柿、又その實。

なら-かし【名】金を貸しし者かへってとがめられ、また金を出さしめらるること。 雛笑「秀吉公の御時、ならかしといふ事あり。貸したる者、もとを失墜せし上に、なほ放埒の働、罪科輕からずとて、再び黃金を出だせたまへば、奈良かしや此の天下殿二重どりとにもかくにもねだれ人かな」

なら-がしは 楢柏【名】〔植〕かしは(柏)■に同じ。 夫木「ならがしは末葉に露やなりぬらん木蔭すずしひぐらしのこゑ」

なら-がすり 奈良絣【名】やまとがすり(大和絣)に同じ。

ならがたな 奈良刀【名】■大和國奈良に住せし刀工の鍛へたる刀。■切味の鈍き刀」 毛吹草(永治)「朝がほの花の光や奈良刀」 世間手代氣質「百日精進してうち上げても、その儘の奈良刀」

なら-がま 楢釜【名】どんぐり(櫟栗)を云ふ。〔越後國の方言〕

なら-がみ 奈良紙【名】大和國奈良より産せし、薄き紙。 馬鳴寺法記「吉野紙二十束、奈良紙十束」 職人盡歌合「忘らるる我が身よいかになるがみの薄き契は結ばざりしを」

なら-きや 捺落迦・那落迦【名】〔佛〕ならか(捺落迦)に同じ。

なら-く 奈落【名】『ならか(捺落迦)の訛』■〔佛〕おとく(地獄)に同じ。■地獄に墮つること。■奈落の底。どんぞこ。「奈落に早く沈みなば、この世の思はせまいもの」 文武五人男「奈落までも勘當ぞ」■舞臺の床下。舞臺を踏鳴らす音を、共鳴の作用によりてよく響かするために樽へたるもの。燈も點火せざれば暗く、又廻(マハ)り舞臺、鏡出(セリダシ)等の仕掛あり、周圍は大道具などの物置として使用す。

なら-く 奈落の底【句】■〔佛〕地獄の底。 寶物集「いふならく奈落の底に入りぬれば剃刀(テウス)も首陀(ズダ)もかはらざりけり」■深くして底の分らざる處。どんぞこ。九原の下。九泉の下。■いつまでも浮ぶ瀬のなき處。■はてのはて。どんじまひ。最終。 壽の門松「その切手とは、男同士の義理あるなか、奈落の底までこの與次兵衛が切ったになって」

ならく 【助動】『なりの連體形なるの延』なる事は。「言ふならく」「聞くならく」

ならく-か 捺落迦【名】〔佛〕ならか(捺落迦)の誤讀。 教長集「地獄を。ならくかの烟の底にむせぶ身はさきの報いのかかるなりけり」

なら-こぶ 楢瘤【名】楢(ナラ)の木に生ずる栗の毬(イガ)の如きもの。寄生蟲の巢にして、初め綠色、後、茶褐色となる。ならだんご。

なら-こんがう 奈良金剛【名】『こんがう(金剛)(四を見よ』

ならざうり(奈良草履)に同じ。 風俗文選「奈良漬・奈良酒・奈良金剛」

なら-ごよみ 奈良曆【名】大和國奈良より出だしし曆。春日社などより刷りて出だしものなるべし。やまとごよみ。 小町踊「八重に咲く梅の異名や奈良曆」

なら-さ 奈良座【名】■しもがかり(下掛)(二)に同じ。 大藏流「奈良座の謠の口拍子」■大和國奈良の錢座(ゼニザ)。

なら-ざらめん 奈良索麺【名】大和國奈良にて製る索麺。

ならざうり 奈良草履【名】大和國奈良より産する、一種の草履。ならこんがう。 御伽名代紙衣「どろめんのくつ足袋に、細緒の奈良草履はきて」 鹽生隅田川「お若紫方は尻を振り、櫻も八重の奈良草履」

なら-ざか 奈良坂【名】〔地〕大和國より山城國に出でんとする者の通行する坂路。但し、古今その地を異にし、古のは、今の歌姫越にて、今のは、古の般若寺越なりといふ。**ならのみや**(平城宮)參照。名寄「奈良坂を來鳴きとよます時鳥二四八とぞをちかへり鳴く」 平家、入道相國、大に怒って、さらば南都をも攻めよやとて、…その勢(セイ)四萬餘騎、南都へ發向す。南都にも、…奈良坂般若寺二箇所の道を掘切って、搔楯かき、逆茂木(サカモギ)引いて待ちかけたり」

ならざか-の-うへ-の-みささぎ 平城坂上陵【名】仁德天皇の皇后磐之媛(イハノヒメ)の命の御陵。大和國生駒郡都跡(ミヤト)村大字佐弘にあり。

なら-さくら 奈良櫻【名】古、大和國奈良の興福寺の東圓堂の前にありて、上東門院これを召されしに、奈良法師惜みて奉らざりきといふ櫻。

なら-ざけ 奈良酒【名】大和國奈良にて造る酒。 醒睡笑「なら酒やこの天目に二つ三つ飲めと仰あらばとにもかくにも」

ならざーせん 奈良座錢【名】寛永年間、大和國奈良にて鑄造せしものといふ銅錢。徑八分强、重量一匁。錢文は加茂縣主(アガタ)甲斐守敦直の書なりと傳ふ。奈良錢。

なら-さらし 奈良晒【名】大和國奈良にて晒して出だす、上品なる麻布。慶長頃の創始にして、その後、技術進歩し、德川氏の用品となるに及びて、その名諸國に弘まるに至れり。 淺草出世濱萱「大坂の堺は明いたれど、又傾城とならざらし、立横沙汰をききふれて」

ならし 馴慣【名】■なれしむること。ならはし。馴致。練習。稽古。 後撰「吹く風をならしの山の櫻花のどけくぞ見る散らじと思へば」■しきたり。ならはし。ならひ。習慣。風習。風儀。 盛衰記「宇治・勢多のならしに、馬筏を組んで渡して心見ばや」■しがく(試樂)に同じ。

ならし 均【名】■ならすこと。たひらにすること。平等。平均。■すりこぎ(擂粉木)を云ふ。〔堂上家の語〕

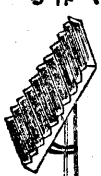
ならし 【名】■木・鐵などを削りて、平かにする具。和名「鑢、鏟劃、辨色立成云、鑢、奈良之、一云劃刀、上平木器也、下削也」■鐵床(カナドコ)の類。■『ならしだけ(ならし竹)の略』かけざを(掛竿)■を云ふ。〔九州の方言〕

ならし 均【副】ならして。平均數にて。「ならし千圓の月收」

ならし 【助動】■『なり(也)の連體形なるとらしとの連結して約まりたる語』にて有るらし。 萬葉「眞木のつまでをもたらず筏につくりのぼすらむいそはくみれば神ながらならし」■なり(也)に同じ。〔德川時代の通俗文の語〕 萬葉千紅「霜(シモ)いなみがたく、聊かをろちの足を書添ふるものならし」

ならし-いし 均石【名】かさいし(笠石)に同じ。

ならし-いた 均板【名】畦を打ちて土壤の固き塊を破碎し、兼ねて鎭壓操作をなすに用ふる農具。



(板均)

ならし-かご 均籠【名】堤防用具の一。大小の蛇籠(ジヤカゴ)を取交ぜて平かならざる地形を均し、その上に蛇籠出(ジヤカゴダシ)をなすもの。

ならし-がほ 馴顔【名】ならすやうなる顏つき。馴らさんとするがごとき樣子。ならし

はしがほ。なれがほ。大和「わが宿をいつかは君が楢柴のならし顔には折りにおこせる」後撰「我が宿をいつ慣してか楢の葉をならし顔には折におこしする」

ならじだい 奈良時代【名】ならてうじだい(奈良朝時代)に同じ。

ならしだけ ならし竹【名】かけざを(掛竿)㊀に同じ。博多小女郎浪枕「今の小町屋總七は博多小女郎がならし竹、いつも心にかけて置く」

ならしちだい 奈良も代・平城七代【名】ならてう(奈良朝)を見よ。

ならしの 習志野【名】〔地〕『ならしは演習の義』下總國千葉郡二宮村に屬する原野。東西約二十五町、南北約二十一町。一體に陸軍演習地に供せらる。明治六年明治天皇、近衞兵の演習を天覽あらせられし時、この名を命ぜられたり。舊稱、正伯(シハク)原。つだぬま(津田沼)參照。

ならしのをか 奈良志岡【名】〔地〕大和國生駒(イコマ)郡龍田町の南部、小吉田・車瀬。目安の邊の地。相接して、碧瀾(ヘキラン)森あり。萬葉「神なびのいはせの森のほととぎすならしの岡にいつかきて鳴く」

ならしば 楢柴【名】『堀河太郎百首の「御狩すと楢の眞柴を蹈みしだき交野(カタノ)の里に今日も暮しつ」同撰集の「栞する楢の葉柴に散る露のはらはらとこそねはなかれけれ」などの如く、「楢の眞柴」「楢の葉柴」などの語もあり』楢の木の柴。新古今「御狩する狩場の小野の楢柴のなれはまさらで戀ぞまされる」

ならしば 鳴羽【名】鷹の尾羽の一。

ならしばとり 楢柴鳥【名】〔動〕たか(鷹)の異稱。〔古語〕

ならしばの 楢柴の【枕】同音を重ねて、ならす(馴す)にかけていふ。萬葉「みかりする狩場の小野のならしばのなれすまさらず戀こそまされ」

ならしもの 鳴物【名】ならすもの。なりもの。樂器。〔古語〕奈穂「今日のならし物の聲は、いみじかりつるものかな」

ならじょうい 奈良乘意【名】〔人〕江戸の金工。通稱は杉浦仙右衞門。一貫堂永春と號す。信濃國松本の藩士。奈良壽永の門人。その作、精巧にして、氣品あり、遂に肉合高彫を創始す。利壽(トシ)・安親と共に、奈良の三作と稱せらる。寶曆十一年歿す。

ならじらう 奈良次郎【名】㊀大和國奈良の東大寺にある、有名なる巨鐘。柳樽「大きながぶりしてゐる奈良次郎」同「木辻の里で憎まれる奈良次郎」㊁「寢の峯」を云ふ。〔畿内の方言〕

ならす 鳴らす【動四他】㊀鳴らしむ。音を發せしむ。〔鼓す〕源氏「扇をならしたまへば」燕石「鯨寬市に刀を鼓(ウ)しけり」㊁音を立てて屁をひる。放屁す。大鏡「いと高やかにならして侍りけるに」㊂言ひたつ。「不平を鳴らす」㊃他人の罪過を表むきに言ひたてて責む。〔鼓す〕「その非を鳴らす」㊄自己の長所を發揮してひびきわたらしむ。

ならす 均す・平す【動四他】㊀高低なからしむ。平かにす。萬葉「さす竹の大宮人の蹈みならし通ひし道は」枕「とのもりづかさの官人ども、手ごとに、箒取り、砂子(スナゴ)ならす」㊁大小・多寡を均しくす。平均す。平等にす。

ならす 馴らす・慣らす【動四他】㊀なるるやうにす。なれしむ。馴致す。㊁ならはす。㊂心やすだてをなす。

ならす 生らす【動四他】實のなるやうにていくそばくなりぬる」

ならず 成らず【名】ならずもの(成らず者)の略。大鏡「やあ、聟のならずは又留守か」

ならずみ 奈良墨【名】大和國奈良地方より産する、上品なる墨。奈良油烟にて製す。

ならずもの 成らず者【名】㊀足らはぬがちなるもの。生活の不如意なるもの。㊁度し難き人物。手のつけられぬわるもの。㊂惡行をなしつつ世を渡る人。ごろつき。無賴漢。

ならず者の振りづんばい【句】貧乏人が、身のほども考へずして、何事かなさんとすること。〔諺語〕

ならずや 成らず屋【名】ならず者の家。赤貧の家。

ならせん 奈良錢【名】ならざせん(奈良座錢)に同じ。

ならそ 奈良苧【名】大和國奈良より産する麻。ならを。一代女「首(カブ)から白らけて、奈良苧も氣が毒きます」丹波與作「をがせ亂いた胸の中、何(ナ)と奈良苧のうき身ぞや」

ならだいしゅ 奈良大衆【名】大和國奈良の東大寺の大衆。多數の奈良法師。南都の衆徒(シュ)。保元「明日までも延べばこそ吉野法師も、奈良大衆も入るべけれ」

ならたんご 楢圍子【名】ならこ(楢瘤)に同じ。

ならぢ 奈良路【名】奈良の附近なる通路。

ならみち(奈良路)參照。萬葉「君が行(ユ)けながくなりぬ奈良路なるしまの木立も神さびにけり」

ならちゃ 奈良茶【名】㊀大和國奈良に產する茶、又その茶汁。㊁ならちゃめし(奈良茶飯)の略。續猿蓑「沾圃」「八重櫻京にも移る奈良茶かな」大鏡「奈良茶の煮花を、親父(テヂ)も一杯、旦那も一杯」㊂『もと奈良茶飯を露(セビ)ぎたるよりいふ』備前國岡山市の旭川に出だす納涼の店。

ならちゃがゆ 奈良茶粥【名】ならちゃめし(奈良茶飯)を云ふ。〔畿内の方言〕博多小女郎浪枕「身はならはしよ奈良茶粥」

ならちゃぶね 奈良茶船【名】奈良茶を賣るうろうろ船。新永代藏「はや奈良茶船を漕出して、遂にこれを橫著にしける」

ならちゃめし 奈良茶飯【名】『古のは大和國奈良の東大寺・興福寺等にて炊(カ)ぐものに倣ひしものなるよりいふ』茶飯の一種。古くは、大豆・小豆・慈姑(クワイ)・栗などを加へたるもの。後には、普通の煎茶に、豆腐汁・煮染などを副へたる一膳飯。ならちゃがゆ。ならちゃ。

ならづけ 奈良漬【名】㊀『大和國奈良にて漬け初めたるよりいふ』酒糟に漬けたる、上品なる香の物。(主に、越瓜(クワウリ)を用ふ)越人「奈良漬に親呼ぶ浦の汐干かな」㊁酒にひたること。さかびたし。大鏡「あまり過ぎては酒漬の、身は奈良漬となら柏」

ならづけうり 奈良漬瓜【名】奈良漬にしたる瓜。ならづけ。

ならづけくさし 奈良漬臭し【形ク】酒くさし。熟柿くさし。

ならてう 奈良朝【名】大和國奈良に都したまひし時代、即ち元明天皇より光仁天皇までの七代(即ち奈良七代)・七十四年の間。

ならのみや(平城宮)參照。

ならてうじだい 奈良朝時代【名】奈良朝の頃の時代。奈良時代。

ならてうぶんがく 奈良朝文學【名】奈良朝時代に起りし文學。この時期は抒情詩の時代にして、和歌盛んに行はれ、その代表たるものを萬葉集となす。一般に漢學及び佛教の影響漸く現れたり。

ならでんじゅ 奈良傳授【名】古今傳授の一。牡丹花肖柏より奈良の饅頭屋林宗二に傳へたるもの。

ならとしてる 奈良利輝【名】〔人〕金工。俗稱は小左衞門。後、周防と稱す。寬永年中、幕府に召され、晩年剃髮して、宗貞と號す。

ならとしひさ 奈良利壽【名】〔人〕江戸の金工。俗稱は太兵衞。奈良利永の弟。一說に、その門人なりと。乘意・安親と共に、奈良の三作と稱せらる。元文元年歿す。

ならとぢ 楢綴【名】楢の葉を綴合はせて製せる、大なる折敷(オシキ)。賀茂祭に神供を盛るに用ふ。儀制「賀茂祭に折敷の大なるに神供を盛るを、楢綴と名くるは、楢かしはを綴ぢて用ふる故に名くるといふ」

ならななよ 奈良七代【名】ならしちだい(奈良七代)に同じ。芭蕉「奈良七代七堂伽藍八重櫻」

ならにんぎょう 奈良人形【名】大和國奈良にて刻み造る、木彫彩色の人形。春日の祉の舊材を用ひて造るといふ。雅致ありて、好事の者、根附として用ふ。

ならぬし 奈良塗師【名】大和國奈良に住

める塗師。奈良塗を造る者。

ならぬり 奈良塗【名】大和國奈良地方より産する塗物。（松井簡梁「天塗物も、元はもろこしを學べり。昔は奈良塗師根來物（ネゴロヌリ）なり」

ならの-おとものしゆう 奈良御供衆【名】室町時代、將軍の大和國奈良へ社參する時、御供に候ひし人人、又その家家。

ならの-き 楢木【名】〔植〕なら(楢)に同じ。

ならの-こちまろ 奈良許知麿【名】〔人〕和銅年間の孝子。大和國添下(ソフノシモ)郡の人。よく父と繼母とに事へて旌表せられ、終身課稅を免ぜられたり。

ならの-さんえ 奈良の三會【句】さんえ(三會)の條下を見よ。

ならの-だいぶつ 奈良の大佛【句】だいぶつ(大佛)の條下を見よ。

ならの-つまで 楢の嬬手【名】〔書〕古語を集めて五十音順に排列し、說明・例證したるもの。五卷。楫取魚彦(カヂトリナヒコ)の著。

ならのは-の-なにおふみや 楢の葉の名に負ふ宮【名】ならのみや(奈良宮)に同じ。古今「神無月しぐれふりおけるならのはの名におふ宮のふることぞこれ」

ならのへ 【名】うはだな(上棚)に同じ。

ならの-みかど 奈良帝【名】〔人〕ていせいてんわう(平城天皇)に同じ。古今「ならのみかどの御歌」

ならの-みや 平城宮【名】元明天皇の和銅三年より、桓武天皇の延曆三年平安宮に移らせたまふまで、七代の天皇のおはせし宮。奈良市の西方、即ち古の奈良阪、今の歌姫越(ウタヒメゴエ)の南麓、生駒(イコマ)郡都跡(トド)村大字超昇寺の地に在りしもの。**ならてう**(奈良朝)及び「奈良の都」參照。

ならの-みやこ 奈良の都【句】なら(奈良)の條下を見よ。

ならの-やま 奈良山【名】〔地〕ならやま(奈良山)に同じ。萬葉「あをによし奈良の山の山のまにい隱るまで」

ならは 楢葉【名】〔地〕磐城國の舊郡の一。明治二十九年その川前(カハマヘ)村は石城(イハキ)郡に併せられ、その餘の七村は標葉(シメハ)郡と合して、雙葉(フタバ)郡となれり。

ならは 成岩【名】〔地〕尾張國知多(チタ)郡に在る町。半田・武豐兩町の中間にありて、市街ほぼ相連なれり。

ならはかし 習【名】**ならはし**(習)に同じ。油地獄「一門・一家みな侍、そのならはかし、思ひきつては見返らず」

ならはがし 楢葉樫【名】〔植〕くろがし(黑樫)に同じ。

ならはかす 習はかす【動四他】ならはす(習はす)に同じ。著聞「人こそあらめ、おもてをならべたる者に心うつしてねたきめ見するに物ならはかさん」

ならはし 習【名】一ならはすこと。なれしむること。ならはかし。ならし。練習。二しきたり。ならひ。ならし。ならひ。習慣。風習。風儀。新古今「里は荒れぬ空しきとこのあたりまで身はならはしの秋風ぞ吹く」心中萬年草「わがまま云ひしならはしも」習ひの物【句】**ならはしもの**(習物)に同じ。拾遺「手枕のすきまの風も寒かりき身はならはしの物にぞありける」

ならはしがほ 習顏【名】ならはすやうなる樣子。ならしがほ。

ならはしもの 習物【名】常常のならはしによりて、いかにともなる物。〔古語〕新後拾遺「心をばならはしものといふなれど片時の間もわすれやはする」

ならはす 習はす【動四他】一馴れしむる。習慣とならしむ。練習せしむ。ならす。仕立「かくたいたいしくやはならはすべき」二學ばしむ。錆古せしむ。教ふ。源氏「琴琵琶の師とて、內敎坊のわたりより迎へ取りつつならはす」三懲らしむ。

ならはーずがほ 不習顏【名】習はぬやうなる顏つき。習はぬ如きやうす。拾玉「いく秋もわかれぬ年もなきものを習はず顏に何惜しむらん」

ならばふ 並ばふ【動四自】**ならぶ**(並ぶ)の延。〔古語〕落窪「いみじう臭き物どものならばひ居たる」

ならはんさらし 奈良半晒【名】奈良晒の、十分に晒さざるもの。

ならはら 楢原【名】〔地〕大和國葛上(カツラギ)郡に在りし鄕、即ち今の南葛城(ミナミカツラギ)郡楢原村。葛城山の東麓。

ならはら-あづまびと 楢原東人【名】〔人〕萬葉集中の歌人。大和國楢原に居り、天平勝寶二年、黃金を獻じて、勳臣の姓を賜はる。五年大學頭・大學博士となる。

ならばる 並ばる【動四自】**ならぶ**(並ぶ)に同じ。

ならひ 習【名】一**ならぶこと**。なること。ならはし。しきたり。習慣。資綠「おもひだに寄りましものか紫の雲のかからぬならひなりせば」二世間普通のこと。四祕傳などの口授。傳授。

習、性と成る【句】『書經の太甲篇に「伊尹曰、玆乃不義、習與レ性成、予弗レ狎二于弗一レ順」とあるに本づく。「性と成る」は「與レ性成」を訓讀せる語なるが故に、「性になる」といふと同一の意には非ず』習慣が、元來の性質と相合して、第二の性質を形成す。習慣は第二の天性。〔諺語〕

ならひ 【名】**ならひかぜ**・**ならひ**風(ニシ)に同じ。

ならび 並・竝【名】一だぐひ。なみ。ひとしなみ。同類。二心を同じうする者。一味の人。色道大鑑「ならび、男女に限らず、一味する者をいふ。おしなべて心を同じうするといふ心なり。これ偶人より出でたる言葉なり」四女色を云ふ。〔奧州の方言〕

ならひ-あふ 習合ふ【動四他】互に習ふ。共に習ふ。狂言「俄道心」「それそれ、互に行ゆくは習ひ合うて致さう」

ならび-あふぎ 並扇【名】紋所の一。男持の扇子二本を、摺みたるまま、縱に並べたるもの。

ならび-おこる 並起る・併起る【動四自】競ひておこる。同時に蜂起す。

ならひ-かぜ ならひ風【名】東北より吹く風。ならひ。あなし。五人女「ならひ風はげしく師走(シハス)の空、雲の足さへ早く」

ならび-がをか 雙岡【名】〔地〕ならびのをか(雙岡)に同じ。

ならび-ぐら 並倉【名】並べる倉。棟を並べたる倉庫。

ならび-くるし 並苦し【形二】並ぶにつらし。並ぶに心ぐるし。ならびにくし。ならびかぬ。〔古語〕齊愆「人人もならびぐるしう、なげかしうおぼされぬべき事ぞかし」

ならひ-ごと 習事【名】一習ふ事柄。習得すべき事柄。ならひもの。學事。二ならひもの(習物)二に同じ。

ならひ-こむ 習込む【動四他】習ひて、善く覺ゆ。熟練す。

ならび-さき 並先【名】並べる人人の先の方。五人女「狂言も、人の娘を盜む所、これさへ氣味惡しく、ならび先の方見れば、おさん樣の旦那殿、魂消えて、地獄の上の一足飛、玉なる汗をかきて」

ならび-だいみやう 並大名【名】一芝居にて、殿中の場面などに、その狂言の主要なる人物にあらずして、單に舞臺の光景を添ふるために、大名姿に扮して居ならべる役者。二座に列なるといふ名ばかりにて、その場に當り、何の仕種(シグサ)も取柄もなき人。

ならび-たかのは 並鷹羽【名】紋所の一。鷹の羽二枚を縱に並べたるもの。

（はのかたびらな）

ならび-たつ 並立つ【動四自】ならびて立つ。なみ立つ。風雅「ならび立つ松のおもては靜かにて嵐の奧に鐘ひびくなり」

ならび-でら 比寺【名】『比丘(ビク)即ち雙岡にありしりいふ』**ほふこんがうゐん**(法金剛院)に同じ。

ならひ-とる 習取る【動四自】習ひて、自分のものとす。源氏「我が心にあくべきかぎりなくならひとらんことはいと難けれど」

ならび-なし 並無し【形二】比ぶべきものなし。類なし。四敵なし。無雙なり。なみなし。二なし。源氏「面白き事ども、なほならびなしといふ」

ならび-に 並に・竝に・併に【接】及び。つづきて。かつ又。

ならび-の-おとど 比大臣【名】〔人〕『比寺

(ナラビ)を創めしよりいふ』**ならびのをかのうだいじん**(雙岡右大臣)に同じ。

ならびのをか 雙岡・雙丘・並岡・比丘【名】〔地〕山城國葛野(カヅノ)郡花園村にある岡。清原夏野の山莊の地、又、吉田兼好の隱棲せし處。兼好家集「雙の岡に無常所を設けて、傍に櫻を植ゑさすとて、契りおく花とならびの岡のべにあはれ幾世の春を過ぐさん」

ならびのをかのうだいじん 雙岡右大臣【名】〔人〕『前條を見よ』**きよはらなつの**(清原夏野)の異稱。ならびのおとど。

ならびのをかのすねもの 雙岡拗者【名】〔人〕『**ならびのをか**(雙岡)を見よ』**よしだけんこう**(吉田兼好)の異稱。

ならひばち 奈良火鉢【名】大和國奈良より産する土燒の火鉢。今戸燒に似たり。東海道名所記「はし傾城は、蜂の巢の如くに、面面に小さき局一つ一つをかかへて、門口には、なめし革にて綴ぢたる青のうれんを掛け、奈良火鉢、又は目のつぶれたる摺鉢に火をいけ」

ならびへいし 並瓶子【名】紋所の一。瓶子を二つ縱に並べたるもの。

ならひもの 習物【名】㊀**ならひごと**(習事)に同じ。㊁能樂・茶の湯などの藝道にて、容易には傳授せざるもの。ならひごと。でんじゆもの。祕事。

ならび-や 並矢【名】紋所の一。矢を二條又は三條縱に並べたるもの。ならびやはず。

ならび-やはず 並矢筈【名】**ならびや**(並矢)に同じ。

ならび-ひら 奈良平【名】**しやうさくひら**(正德「平」)に同じ。

ならふ 慣ふ・馴ふ【動四自】**なる**(慣る)【動四】に同じ。後撰「人はいさみ山がくれのほととぎすならはぬ里は住みうかるべし」源氏「幼かりしほどよりつゆ心づかれ奉ることなく、塵ばかり隔てなくてならひたるに」

ならふ 倣ふ・傚ふ【動四自】『前條の語の轉義』まねて行ふ。摸倣す。模擬す。後撰「つらきかなどて櫻ののどかなる春の心にならはざりけん」

ならふ 習ふ【動四他】學ぶ。稽古す。源氏「わづかなる腰をれ文作ることをならひはべりしかば」習はうより慣れろ【句】『唐話纂要に「凡事學不レ如レ慣」とあり』學びて知るよりも、經驗を重ねて覺ゆるがよし。〔諺語〕用明天皇職人鑑「上方住居習はうよりなれて、所の風にそみたる髮容」習はぬ經は讀めぬ【句】習はざる事は爲し得ぬものなり。〔諺語〕習はんより慣れよ【句】「習はうより慣れろ」に同じ。〔諺語〕毛吹草「習はんより慣れよ」に同じ。〔諺語〕

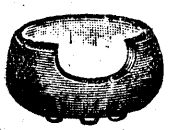
ならふ 並ぶ・竝ぶ・列ぶ【動四自】㊀一列に揃ふ。つらなる。なむ。なぶ。源氏「立ちならびては、花のかたはらのみやま木なり」㊁たぐふ。くらぶ。比肩す。萬葉「をぐさをさぐきずけをと潮舟のならべて見ればをぐさかもめり。㊂現在にまぢかき前後。

ならふ 並ぶ・竝ぶ・列ぶ【動下二他】㊀ならばしむ。つらならしむ。一列に揃はす。なぶ。なむ。起「ころもこそふたへもよきさよどこをならべむきみはかしこきろかも」㊁一つ一つ擧げて言ふ。「理窟を並ぶ」「不平を並ぶ」「口上を並ぶ」㊂くらぶ。比較す。「比ぶ」正徹記「震旦虞しといへども、五天笠にならぶれば、一邊の小國なり」

ならふう 奈良風【名】奈良彫の流儀。奈良風の三傑【句】「奈良の三作」に同じ。

ならぶぎやう 奈良奉行【名】江戸幕府の職制の一。老中の管下に屬し、大和國奈良に駐在して、京都所司代の指揮を受け、京都町奉行と相議して、駐在地の民事を理し、社寺に關することを掌りしもの。定員初は一人、後に二人となり、又一人に復せり。南都町奉行。

ならぶ 奈良風爐【名】大和國奈良にて造り出す土風爐(フウロ)。宗easの創意といふ。色は黒と赤とあり、形扁(ヒラ)く、口を一方の緣へかけて切り、四角の小板の上に載せおくもの。



(ろぶらな)

ならべ 並・竝・列【名】ならぶること、又ならべたるさま。

ならべ-じま 並縞【名】そろへ並べたる縞。一代女「ならべ縞の大幅帶」

ならべ-たつ 並立つ・列立つ【動下二他】『たち(立つ)は接尾語』**ならぶ**(並ぶ)㊀㊁を強めていふ語。「いかさま物を並べ立つ」「關係者の名を並べ立つ」

ならべ-まくら 並枕【名】並べたる枕、又枕を並ぶること。ともね。若風雀「同じ蚊屋に生男(オトコ)ばかりのならべ枕、別して口惜しかりき」

ならべ-もん 並紋【名】並べたる紋所、又紋所を並ぶること。比翼紋。五人女「黒羽二重の大振袖に、梧(キリ)・銀杏(イチヤウ)のならべ紋」

ならほうげん 奈良法眼【名】〔人〕**かんぜい**(鑑眞)に同じ。

ならぼふし 奈良法師【名】大和國奈良の興福寺の僧。同寺は藤原氏の氏寺たるがために、中古、武器を携へ、神木を舁(カ)きて、京都に亂入するなど、大いに威を弄して荒れまはりたり。卽ち寺(テラ)法師・山法師・根來(ネゴロ)法師などの類。盛衰記「南都の衆徒、…京へ攻上りしを、その時、山法師、一首の狂歌をぞ立てたりける。奈良法師栗子山までしぶり來ていか物の具をむきぞ取らるる」七一職人歌合「奈良法師、もろこしの月よりも見どころあればこそ春日なる御笠の山とは詠みつらめ」

(しふほらな)

ならぼん 奈良本【名】繪卷物・御伽話などを問合(トヒアハ)と呼ぶものに似たる紙に、假名文にて認め、胡粉・朱・綠青又は金銀箔などを用ひたる絢爛(ケンラン)なる畫を加へ、紺紙に金泥にて、雲形・饅・草花などをあらはしたる表紙を附けたるもの。何れも寫本にして、足利時代の中期以後、桃山時代にかけて盛んに行はれしもの如く、遑棚などに置き、裝飾の用に供したり。その插畫は、奈良畫と呼ぶ。棚飾(タナカザリ)本。

ならぼり 奈良彫【名】彫金法の一流。奈良利輝(トシテル)を祖とするもの。横谷(ヨコヤ)後藤二派と相並びて名あり、手法纖巧ならざれども、雅致に富みたり。利輝より第九代利恆までを古奈良といひ、三代利治の門人利壽を過渡として、その以後を新奈良といふ。「奈良の三作」參照。

ならまちぶぎやう 奈良町奉行【名】**ならぶぎやう**(奈良奉行)に同じ。

ならまんぢゆう 奈良饅頭【名】『唐人林浮因歸化して、大和國奈良に住し、氏を鹽瀨と改め、饅頭を製して賣りしに始るといふ』中華饅頭に類し、圓く扁く燒きたる饅頭。大繼遐「下戸衆には奈良饅頭」

ならみち 奈良路【名】〔地〕**ならかいだう**(奈良街道)に同じ。**ならおう**(奈良路)參照。無名抄「奈良道や當麻(タギマ)畑の花一木」

ならみやげ 奈良土產【名】〔書〕誹本の誤を頭註したるもの。

ならん-から-に 【句】なりの條下を見よ。

ならんだいじ 那爛陀寺・那蘭陀寺【名】印度摩揭陀(マカダ)國の那爛陀(Nālandā)卽ち今の恒河河畔パトナ(Patna)市の東南なるバラガオン(Baragon)の地にありし寺。西曆第四世紀より第七世紀に亙りて榮え、修學の僧一時は萬を以て數ふるに至りしときへあり、印度以外の國人の來り學ぶもありて、印度敎學の中心となりたり。盛衰記「那爛陀寺の戒壇の土に等しき地味を本朝に尋ねられしに」徒然「那爛陀寺は大門北むきなりと、江帥の說とていひ傳へたれど、西域傳・法顯(ホツケン)傳などにも見えず、更に所見なし」

なら-も 奈良茂【名】〔人〕次條を見よ。

なら-もざえもん 奈良茂左衞門【名】〔人〕

江戸の豪商。略稱、奈良茂。浪我と競ず。材木商を營み、豪遊を以て名あり。吉原の名妓玉菊を愛し、その死するや、弔魂のため人をして淨瑠璃を作らしむ。今遊廓にて盂蘭盆會に燈籠を點ずるは、此の人の創意といふ。享保十年歿す。年三十一。

ならもみぢ 楢紅葉【名】秋季、楢の葉の黄色にかはること、又その葉。

ならもめん 奈良木綿【名】大和國奈良及びその附近の諸郡より産出する木棉織物。白木棉・紺絣・白絣・縞物及び綿無地等あり。古は白木綿の製織最も盛んなりしが、今は絣織を以て著る。

ならもろはく 奈良諸白【名】大和國奈良にて醸造したる諸白。大機嬉「上戸には奈良もろはく」

ならやすちか 奈良安親【名】〔人〕江戸の金工。俗稱は土屋彌五八。人道して、東雨と號す。奈良辰政の門人。その作、奇拔にして、雅致あり。利壽(トシヒサ)・乘意と共に、世に奈良の三作と稱せらる。延享元年歿す。

ならやま 楢山【名】楢の木の多く生ふる山。芭蕉「楢山や柴して戻る夏の雨」

ならやま 奈良山・那羅山・平山【名】〔人〕大和國奈良市・添上(ソフノカミ)郡佐保村及び生駒(イコマ)郡都跡(トド)村の北方にある丘嶺の總稱。奈良市の北を奈良坂といひ、佐保村の北を佐保山といひ、都跡北村の北を歌姫(ウタヒメ)越といひ、奈良坂と歌姫越とは大和・山城兩國間の通路なり。**ならざか**(奈良坂)・**たむけやま**(手向山)及び「奈良の都」參照。萬葉「そらにみつ大和をおきて青丹(アヲニ)よし平(ナラ)山を越え」

ならやまのはか 那羅山墓【名】應仁天皇の皇子大山守命の御墓。大和國添上(ソフノカミ)郡佐保村大字法蓮の山中にあり。

ならゆえん 奈良油煙【名】大和國奈良にて産する製墨用に供せし、上等の油烟。もと春日の神燈より採れるより起るといふ。**ならずみ**(奈良墨)參照。大機嬉「物じて、奈良の名物、奈良油煙・奈良團扇」

ならろくしやう 奈良綠青【名】大和國奈良にて産する、良質の綠青。古來、繪具として名あり。

ならねしだ 【名】〔植〕水龍骨(カヒノカラ)科に屬する多年生の草。地下の根莖より葉を出す。葉は大形、淡綠色の三四回羽狀複葉にして、その裏に茶褐色の子嚢群散生す。各地の山地に自生す。

ならば 奈良畫【名】ならぼん(奈良本)を見よ

ならぼ 奈良坊【名】大和國奈良の地に產する苧。奈良麻(ナラソ)。

ならを 鳴尾【名】鷹の尾羽の一。

なり 成・爲【名】『なる(成る)』七を見よ』將棊にて、王將・金將以外の駒が、敵の陣地に入りて、元來の資格の上に、金將と同一の資格をも得ること、又その駒。なりきん。

なり 形【名】『なる(爲る)又はなる(成る)の假體言』一さまかたち。形狀。形體。伊勢「なりは、鹽尻のやうになんありける」二身のたけ。せいかっかう。體格。「大きななりをしながら、小さい者をいぢめるな」三よそほひ。みなり。衣飾。服裝。四ありさま。ていさい。態度。狂言「内沙汰」「その繰に目をまはかすなりで」五爲すがまま。そのとほり。續狂言・柱巻「義經新選(鷲羽)」「吹寄せた形に片づく落葉かな」一茶「春の風お萬が布のなりに吹く」

なり 形【名】『なる(爲る)』又はなる(成る)の假體言』一さまかたち。形狀。形體。伊勢「なりは、鹽尻のやうになんありける」二身のたけ。せいかっかう。體格。「大きななりをしながら、小さい者をいぢめるな」三よそほひ。みなり。衣飾。服裝。四ありさま。ていさい。態度。狂言「内沙汰」「その繰に目をまはかすなりで」五爲すがまま。そのとほり。續狂言・柱巻「義經新選(鷲羽)」「吹寄せた形に片づく落葉かな」一茶「春の風お萬が布のなりに吹く」

なり 形【名】『なる(爲る)』又はなる(成る)の假體言』一さまかたち。形狀。形體。伊勢「なりは、鹽尻のやうになんありける」二身のたけ。せいかっかう。體格。「大きななりをしながら、小さい者をいぢめるな」三よそほひ。みなり。衣飾。服裝。四ありさま。ていさい。態度。狂言「内沙汰」「その繰に目をまはかすなりで」五爲すがまま。そのとほり。續狂言・柱巻「義經新選(鷲羽)」「吹寄せた形に片づく落葉かな」一茶「春の風お萬が布のなりに吹く」

なり 成【名】一成ること。出來上ること。成立。成就。成功。萬葉「を山田の池の堤にさす柳なりもならずもなとふたりはも」古今「をふの浦に片枝さしおほひ、なる梨のなりもならずもねて語らはん」二貴人の他行。おでまし。(多くは接頭語おを添へていふ)

なり 成【名】一成ること。出來上ること。成立。成就。成功。萬葉「を山田の池の堤にさす柳なりもならずもなとふたりはも」古今「をふの浦に片枝さしおほひ、なる梨のなりもならずもねて語らはん」二貴人の他行。おでまし。(多くは接頭語おを添へていふ)

なり 業【名】『もと前條の語の轉義。五穀の生(ナリ)ける義。**なりはひ**(生業)(二)參照』**なりはひ**(生業)に同じ。「古語」萬葉「久方のあまぢは遠しなほなほに家に歸りてなりをしまさね」

なり 鳴【名】こゑ。おと。ひびき。**なりおと**。源氏「講說(ヤウヂ)のをりは、おほかたのなりをしづめて、のどかに」

なり 鳴【名】こゑ。おと。ひびき。**なりおと**。源氏「講說(ヤウヂ)のをりは、おほかたのなりをしづめて、のどかに」

なり 鳴【名】こゑ。おと。ひびき。**なりおと**。源氏「講說(ヤウヂ)のをりは、おほかたのなりをしづめて、のどかに」

鳴高し【句】鳴音高し。靜かにせよと制する語。源氏「なり高し、鳴りやまん、甚だひざうなり」宇治「なり制せん、なり高しといひて、立ちふたがりて通さざりければ」

なり 成【名】一成ること。出來上ること。成立。成就。成功。萬葉「を山田の池の堤にさす柳なりもならずもなとふたりはも」古今「をふの浦に片枝さしおほひ、なる梨のなりもならずもねて語らはん」二貴人の他行。おでまし。(多くは接頭語おを添へていふ)

なり 祭利【名】【佛】**ないり**(泥梨)に同じ。太平記「一念五百生繫念(ケネン)、無量劫の業なれば、奈利八萬の底までも、同じ思の炎となって焦れたまふらん」

なり 癩【名】『朝鮮語 Nal(瘡毒の義)より出づ』**らいびやう**(癩病)に同じ。

なり 也【助動】『『有り』を含める語なるが故に、語尾の變化は、動詞の良行變格活用と同樣なり』一『補足格のにと『有り』との連結して約まりたるもの。落葉「たのもしげにあり」曾根崎心中「狂言にしたらば、哀にあらうぞ」などのごとく、にと『有り』との分離せる形にて用ひらるることもあり、又『有り』を省きて、『いと面白くなん』『いと面白くこそ』など用ふることもあり』事物を指定し、又は解說する意。にあり。にてあり。ぢや。だ(名詞の下又は動詞・形容詞及び他の助動詞の連體形の下に添ふ)**なら**參照。新古今「我が宿のものなりながら櫻花散るをばえこそとどめざりけれ」二『實は前項の誤用にて、漢籍の訓讀より出でしもの』人名・地名などを擧げて、云云と云ふ人又は土地の意にて用ふる語。(連體形としてのみ用ふ)「伯耆國に名和長年なる者あり」三『場所・方向の副詞格なるにと『有り』との連結して約まりたるもの』場所方向を指定する意。(名詞の下に添ひ、連體形として用ひらるが常なれど、又連用形として用ひられ、その下に過去の意などの他の助動詞の添ふ場合には、その添ひたる助動詞が連體形となる)記「天(アメ)なるや おとたなばたのうながせる玉のみすまる」新古今「庭なりける櫻の」

なり 也【助動】『『有り』を含める語なるが故に、語尾の變化は、動詞の良行變格活用と同樣なり』一『補足格のにと『有り』との連結して約まりたるもの。落葉「たのもしげにあり」曾根崎心中「狂言にしたらば、哀にあらうぞ」などのごとく、にと『有り』との分離せる形にて用ひらるることもあり、又『有り』を省きて、『いと面白くなん』『いと面白くこそ』など用ふることもあり』事物を指定し、又は解說する意。にあり。にてあり。ぢや。だ(名詞の下又は動詞・形容詞及び他の助動詞の連體形の下に添ふ)**なら**參照。新古今「我が宿のものなりながら櫻花散るをばえこそとどめざりけれ」二『實は前項の誤用にて、漢籍の訓讀より出でしもの』人名・地名などを擧げて、云云と云ふ人又は土地の意にて用ふる語。(連體形としてのみ用ふ)「伯耆國に名和長年なる者あり」三『場所・方向の副詞格なるにと『有り』との連結して約まりたるもの』場所方向を指定する意。(名詞の下に添ひ、連體形として用ひらるが常なれど、又連用形として用ひられ、その下に過去の意などの他の助動詞の添ふ場合には、その添ひたる助動詞が連體形となる)記「天(アメ)なるや おとたなばたのうながせる玉のみすまる」新古今「庭なりける櫻の」

なり 也【助動】『『有り』を含める語なるが故に、語尾の變化は、動詞の良行變格活用と同樣なり』一『補足格のにと『有り』との連結して約まりたるもの。落葉「たのもしげにあり」曾根崎心中「狂言にしたらば、哀にあらうぞ」などのごとく、にと『有り』との分離せる形にて用ひらるることもあり、又『有り』を省きて、『いと面白くなん』『いと面白くこそ』など用ふることもあり』事物を指定し、又は解說する意。にあり。にてあり。ぢや。だ(名詞の下又は動詞・形容詞及び他の助動詞の連體形の下に添ふ)**なら**參照。新古今「我が宿のものなりながら櫻花散るをばえこそとどめざりけれ」二『實は前項の誤用にて、漢籍の訓讀より出でしもの』人名・地名などを擧げて、云云と云ふ人又は土地の意にて用ふる語。(連體形としてのみ用ふ)「伯耆國に名和長年なる者あり」三『場所・方向の副詞格なるにと『有り』との連結して約まりたるもの』場所方向を指定する意。(名詞の下に添ひ、連體形として用ひらるが常なれど、又連用形として用ひられ、その下に過去の意などの他の助動詞の添ふ場合には、その添ひたる助動詞が連體形となる)記「天(アメ)なるや おとたなばたのうながせる玉のみすまる」新古今「庭なりける櫻の」

なり 成【助動】『助動詞のなりの轉用』何れか一つを選ぶ意にて、多くの物事を並べ擧ぐる時の語。「金なり品物なりを」「行くなり、行かぬなり、何れとも決定せよ」

なりあがり 成上【名】なりあがること、又なりあがりたる人。(成下(ナリサガリ)に對して)**なりあがりもの**(飛上)三參照。

なりあがりもの 成上者【名】一なりあがりたる人。昇進したる人。二能の狂言の一。冠者主人と共に清水に參籠し、眠れる暇におのが持ちたる主人の太刀と杖とを取換へられ、言譯に成上るものをいひ立つることを作れるもの。

なりあがる 成上る【動四自】卑きより高きに上る。貧賤より富貴に上る。出世す。昇進す。(あがる。なりのぼる。(成下(ナリサガル)るに對して)**なりあがり**(成上ぐ)參照。狂言「成上者」「縁じて物の成上ると申すこと御存じでござるか……まづ嫁が姑に成上るは程がござらぬ」

なりあひ 成合【名】一なりあふこと。謠曲「浦島」「なほも客人(マラビト)に奇特を見せんと木綿四手(シデ)の神心(カミゴヽロ)、龍神も心

一つに成合の」 ㊁そのままにして、手を著けざること。なるままにすること。 女武五人男「素顔にかかる吹びんの髪の髱さへなりあひに」 俳諧新選(梨二)「なりあひに鳥遊ばせる柳かな」

なりあひさん 成相山【名】〔地〕丹後國與謝(セ)郡橋立灣の北方にある山。高さ二一八一尺。

なりあひじ 成相寺【名】丹後國與謝(セ)郡府中村にある眞言宗の寺。慶雲年中應眞上人の開基なりといひ、慶長年中僧賢長再興せり。成相山の中腹に在り、天ノ橋立の全景を一眸に收むるを得べく、俗に橋立觀音と呼ぶ。西國三十三所第二十八番の札所。

なりあふ 成合ふ【動四自】 ㊀成り調ふ。完成す。〔古語〕 源氏「まだなりあはぬ佛の御かざなど」 ㊁一緒になる。親しくなる。なれあふ。 太平記「もし遲く退治せば、劍白山の衆徒等成合ひて、ゆゆしき大事なるべし」

なりあふ 鳴合ふ【動四自】同時に鳴る。擊ひびきあふ。 榮花「なりあひてこそ、のしらせたまふめりしか」

なりあまる 成餘る【動四自】出來上りて、餘あり。 記「吾(ア)が身は、成成りて成餘れる處、一處(ヒトコロ)あり」

なりいし 鳴石【名】內部に空所ありて、石片を容れ、振動かせば、その石片の動きて響く岩石。初、外殼の先づ固まりたる後、內部の乾固などに因りて、空所を生じたるなり。美濃國垂井(タル)より產出す。

なりいた 鳴板【名】なるいた(鳴板)に同じ。 辨內侍日記「なり板の程に立ちて、何にも目とまるけしきなるを」

なりいづ 生出づ・成出づ【動下二自】 ㊀生れて、世に出づ。化生す。 祝詞「國中(クニ)に生出でむ天(ア)の益人(マヒト)等」 ㊁成りあがりて、世に出づ。世に用ひらる。出世す。立身す。なりたつ。なりづ。なしいづ(成出づ)參照。 源氏「次次になりいでつつ、劣らず榮えたる御家のうちなり」

なりいで 生出【名】生(ナリ)出づること。そだち。おひたち。 榮花「ものきらきらかになりいで、よきをえらせ給へり」

なりおと 鳴音【名】鳴る音。鳴りたる音。おと。なり。 若風雅「鳴音靜めて、一人の仰せられけるは」

なりおとる 成劣る【動四自】劣りたる方になる。わるくなる。(成勝(マサリ)るに對して)〔古語〕 落窪「われ、年頃しづみて、昨日けふの若人どもに多く越えられて、なりおとりつるなん恥に思ひける」

なりおほす 爲果す【動下二他】なりすます。全くなる。 萬代「山深みさびしき宿のあるじとはなりおほせたるみにも有かな」

なりか 成箇【名】『箇は數の義。とりか(取箇)參照』 そぜい(租稅)に同じ。〔江戶時代の語〕

なりかがうちやう 成箇鄕帳【名】江戶時代に於ける地方三帳(ジチカタチャウ)の一。諸村より租稅として公納する品數を詳記せしもの。取箇本途見取反高・流作場(ナガレバ)・小物成・高掛物(タカガカリ)等の高・反別並びに租稅額及び上納に係る運上・冥加の類を記載したり。 成箇帳。鄕帳。

なりかかり 爲掛【名】なりかかること、又その物。

なりかかる 爲掛る【動四自】化して其の物とならんとす。出來かかる。 炭俵(廢香)「なりかかる蟬がら落す李かな」

なりかかる 鳴懸る【動四自】呼びかけて、のしりさわぐ。〔古語〕 著聞「のこりのともがら、なりかかりて、をこづきけり」

なりかたち 形體【名】『なり(形)とかたち(形)との同義の二語を重ねたるもの』なりかっかう(形格好)に同じ。 榮花「故中納言殿のみやす所、なりかたちも淸げなり」

なりかちやう 成箇帳【名】なりかがうちやう(成箇鄕帳)の略。

なりかっかう 形恰好【名】『なり(形)とかっかう(恰好)との同義の二語を重ねたるもの』身なりと體格と。せいかっかう。風(フ)格好。ふうつき。なりかたち。なりふり。なりすがた。

なりかはる 爲變る【動四自】變りて、他の物と爲(ナ)る。變ず。變化す。 後撰「淵は瀨になりかはるてふ飛鳥川渡りみてこそ知るべかりける」

なりかはる 成代る【動四自】身代(シンダイ)になる。名代す。 五人女「その夜の慰にもなりぬべしと、おさん樣、りんに成代らせられ、身を木綿(モメン)のなるひとへ物にやつし、りん不斷の寢所に、曉方まで待ち給へるに」 「同じ。

なりかぶら 鳴鏑【名】かぶらや(鏑矢)㊀に同じ。

なりかぶらや 鳴鏑矢【名】かぶらや(鏑矢)㊀に同じ。

なりかへる 爲反る・爲返る【動四自】 ㊀轉じて爲(ナ)る。うらがへる。なりかはる。 拾遺「さを鹿のしがらみ伏する秋萩は下葉や上になり返るらん」 ㊁かへりなる(還爲る)に同じ。 增鏡「家實の大臣、又、攝政になり返らせたまひて、よろづおきて給ふも、さまざまに引返したる世なりかし」

なりがら 成柄【名】除目(ジモク)の成文(ナリブミ)。 建武年中行事「なりがらは、三人ばかりになりて」

なりきん 成金 ㊀『なる(成る)七を見よ』將棋の駒のなりたるもの。なりごま。なり。〔爲金〕 ㊁『明治三十九年より四十年へかけて、株式の變動のありし時に、前項の將棋のに譬へて言ひ出でたる語』成上(ナリアガリ)の金滿家。にはかぶげん。 「見よ。

なりぎり 成切【名】おなりぎり(御成切)をに同じ。

なりくだもの 生果物【名】くだもの(果物)に同じ。

なりくだる 成下る【動四自】なりさがる(成下る)に同じ。(成上(アガリ)るに對して) 戀八卦柱曆「斯う成下つた始りは」

なりくち 生口【名】果實のほぞの部分。

なりけ 生毛【名】地より生(ゼ)出づる物。なりいでもの。

なりけり 【名】『なりはもとなり(形)㊁なるを、なり(也)と混同するに至りしより、過去の助動詞けりの添ひたるもの。なりき參照』なり(形)㊁に同じ。 膝栗毛「上方(カタ)さあへ稼ぎに行(イ)くとって、出たなりけりて歸らぬ」「それなりけりにして置く」

なりこつ 【動四自】『のりごつの轉訛』 壁高に驟ぐ。とどめく。〔下臈の語〕 「じ。

なりこま 生駒【名】なりきん(成金)㊀に同じ。

なりこまや 生駒屋【名】〔人〕俳優中村芝翫の家名。

なりこむ 鳴込む【動四自】騷ぎ立ちて入込む。どなりこむ。 柳樽「園はれの鳴込んで來る以呂波茶屋」

なりさうぞく 形裝束【名】『なり(形)とさうぞく(裝束)との同義の二語を重ねたるもの』なりふり(形振)に同じ。 榮花「えもいはぬなりさうぞくにて」

なりさがり 成下【名】なりさがること、又なりさがりたる人。零落。(成上(アガリ)に對して)

なりさがる 成下る【動四自】富貴より、貧賤となる。おちぶる。なりくだる。(成上(アガ)るに對して) 靈生隅田川「あったら御身をくづをらし、成りさがるも皆われ故」

なりさま 形樣【名】『なり(形)とさま(樣)との同義の二語を重ねたるもの』なりふり(成振)に同じ。 一代男「つみ崩して、親に疎まれ、懲らしめのためにかかるなりさまぞと、京近くに住める人の目もはづかし」

なりすがた 形姿【名】『なり(形)とすがた(姿)との同義の二語を重ねたる語』なりかっかう(形恰好)に同じ。 源氏「さぶらふ人人のなりすがたより始めたゆみなく」

なりすけしんわう 成輔親王【名】〔人〕貞健親王の御子。櫻町天皇の猶子。薙髮して、名を尊眞と改む。一身阿闍梨となり、四たび天台座主に補せられ、文政七年薨ず。年八十一。

なりすます 成濟す【動四自】 ㊀成ることをすます。成了る。成りおほす。完成す。 俳諧新選(梨二)「初雪のはや酒になりすましたり」 ㊁成りたるやうなる態度をなす。

なりそふ 成添ふ【動四自】生じて加はる。 〔古語〕 源氏「人のそねみ深くつもり、安からぬ事、多くなりそひぬべし」

なりそぶり 形素振【名】『なり(形)とそぶり(素振)との同義の二語の重なりたるもの』身なりと擧動と。なりふり。 膝栗毛「こなさんたちのなりそぶり、胡散臭いと思ひを

ったに」

なりた 成田【名】〔地〕下總國印旛(インバ)郡にある町。新勝寺あるを以て名高く、全町殆んどこれがために生活す。

成田の不動(フドウ)【句】じんこしんしょうじ（神護神勝寺）を見よ。

なりーたけ 成丈【副】なるたけ(成丈)の轉訛。

なりたーさきち 成田蒼虬【名】〔人〕俳人。加賀國金澤藩士。俳諧を高桑闌更に學び、後、仕を辭して、京都に入り、專ら正風(シャウフウ)復興に努む　二世芭蕉堂・南無庵對塔庵の號あり。天保十三年歿す。年八十二。

なりたーさん 成田山【名】しんこしんしょうじ（神護新勝寺）を見よ。

なりーたち 成立【名】㊀成立つこと。成立(セイリフ)。㊁成立ちたる時までの經歷。松風村雨衆帶屋「身元・成立偽らず具さに申せ」㊂成分。要素。

なりーたつ 成立つ【動四自】㊀しかと成る。成就す。できあがる。成立(セイリフ)す。㊁なりいづ（成出づ）に同じ。なしたつ（成立つ）參照。源氏「かく心おくべきわたりぞと、さすがに知られて、人にもなりたたん事かたし」

なりーたつ 鳴立つ【動下二自】聲高に騷ぎ立つ。どなり立つ。わめきたつ。

なりたーてつたう 成田鐵道【名】下總國佐倉佐原間及び成田・我孫子(アビ)間に通ずる私設鐵道。

なりたーふどう 成田不動【名】しんこしんしょうじ（神護新勝寺）に同じ。「屋號。

なりたや 成田屋【名】〔人〕市川團十郎の

なりたやに 成田屋煮【名】『市川團十郎は成田屋と號せしよりいふ』だんごふらうに（團十郎煮）に同じ。「じ。

なりたやぶかし 成田屋蒸【名】前條に同じ。

なりーづ 成出づ【動下二自】なりいづ（成出づ）に同じ。〔古語〕起き憂き獄狼を助けて後ぞおほっちが深草よりはなりてたりける」「もの。

なりーづか 成束【名】成文(ナリフミ)を束ねたるなる。全くなる。なりきる。新續古今「君が代はちくまの川のさざれ石の苔むす岩となりつくすまで」

なりーつけ 形附【名】裁縫手工などにて、布帛・紙などに痕を附けて、標(シルシ)とするに用ふる筥(ハコ)。角・象牙・竹などにて製す。

なりーつまど 鳴妻戸【名】あけたてに音のする妻戸。新六「あひ見ての後のつらさの鳴妻戸おせどもあかぬおとしだてかな」

なりーて 鳴手【名】太鼓・鼓などのよく鳴る手。舞女五枚羽子板「鞨も鳴手の曲鼓」

なりーて 爲手【名】なる人。當る人。狂言「鬮罰人」鬼にはなりても御座らうが、罪人にはなりてが御座るまい」「じ。

なりーてん 【名】〔植〕なんてん(南天)㊀に同じ。

なりーところ 業所【名】『なり(業)を見よ』㊀農產物を生じて、所有者の生活の資となる土地。田庄。起「田宅、ナリドコロ」㊁下屋敷(シヤキ)。別莊。別業。落葉「三つのなりどころの券と、帶一つをなんとどめつる」

なりーとし 生年【名】果實の特によく生(オ)る年。又、年切(キリ)の柿の實を結ぶ年。

なりーとどろく 鳴轟く【動四自】なりひびく（鳴響く）に同じ。

なりーとよぐ 鳴讙ぐ【動四自】がやがやと騷ぎ立つ。喧騷す。〔古語〕起晝夜鳴讙、ナリトヨギテ」「じ。

なりーとよむ 鳴響動む【動四自】前條に同じ。

なりながーしんわう 成良親王【名】〔人〕後醍醐天皇第七の皇子。母は藤原廉子(カコ)。元弘元年上野太守となり、建武元年護良親王の後を襲ひで征夷大將軍となる。のち兩統迭立の舊例に依り、光嚴院の太子となる。然れども、父帝の吉野に潛幸せらるるにあたり、廢せられて、毒殺せられたり。

なりーなんとす 垂んとす【句】なる（成る）の條下を見よ。

なりーのこり 成殘【名】㊀なり殘ること、又その物。㊁除目(ジモク)にて、未だ成文(ナリフミ)とならざること。

成殘の申文(マウシブミ)【句】除目(ジモク)に、成文(ナリフミ)とならざる申文。

なりーのこる 成殘る【動四自】成らずして、あとに殘る。

なりっくすまで

なりーつけ 形附【名】裁縫手工などにて、布帛・紙などに痕を附けて、標(シルシ)とするに用ふる筥(ハコ)。角・象牙・竹などにて製す。

なりーつまど 鳴妻戸【名】あけたてに音のする妻戸。新六「あひ見ての後のつらさの鳴妻戸おせどもあかぬおとしだてかな」

なりーて 鳴手【名】太鼓・鼓などのよく鳴る手。舞女五枚羽子板「鞨も鳴手の曲鼓」

なりーて 爲手【名】なる人。當る人。狂言「鬮罰人」鬼にはなりても御座らうが、罪人にはなりてが御座るまい」「じ。

なりーてん 【名】〔植〕なんてん(南天)㊀に同じ。

なりーところ 業所【名】『なり(業)を見よ』㊀農產物を生じて、所有者の生活の資となる土地。田庄。起「田宅、ナリドコロ」㊁下屋敷(シヤキ)。別莊。別業。落葉「三つのなりどころの券と、帶一つをなんとどめつる」

なりーとし 生年【名】果實の特によく生(オ)る年。又、年切(キリ)の柿の實を結ぶ年。

なりーとどろく 鳴轟く【動四自】なりひびく（鳴響く）に同じ。

なりーとよぐ 鳴讙ぐ【動四自】がやがやと騷ぎ立つ。喧騷す。〔古語〕起晝夜鳴讙、ナリトヨギテ」「じ。

なりーとよむ 鳴響動む【動四自】前條に同じ。

なりながーしんわう 成良親王【名】〔人〕後醍醐天皇第七の皇子。母は藤原廉子(カコ)。元弘元年上野太守となり、建武元年護良親王の後を襲ひで征夷大將軍となる。のち兩統迭立の舊例に依り、光嚴院の太子となる。然れども、父帝の吉野に潛幸せらるるにあたり、廢せられて、毒殺せられたり。

なりーなんとす 垂んとす【句】なる（成る）の條下を見よ。

なりーのこり 成殘【名】㊀なり殘ること、又その物。㊁除目(ジモク)にて、未だ成文(ナリフミ)とならざること。

成殘の申文(マウシブミ)【句】除目(ジモク)に、成文(ナリフミ)とならざる申文。

なりーのこる 成殘る【動四自】成らずして、あとに殘る。

なりーのぼる 成上る【動四自】なりあがる（成上る）に同じ。（成下(ナリオ)るに對して）源氏「なほびとの、上達部(カンダチベ)までなりのぼりたる」

なりは 成羽【名】備中國川上(カハカミ)郡にある町。德川時代には、山崎氏の陣屋ありし處。今、郡役所を置く。

なりはーじやう 成羽城【名】つるくびじやう（鶴頸城）を見よ。

なりーはず 鳴弾【名】なかはず(奈加弾)を見よ。

なりーはつ 爲果つ・成果つ【動下二自】㊀なりゆきて、終りになる。全く成る。古今「おのがちりぢりわかれなば頼むかげなくなりはてて」源氏「なりはてんさまを見んとおぼせど」㊁なりさがりはつ。おちぶれはつ。心中宵庚申「心ぶしやうに身體を持扇し、たたずみもないやうに成果て」

なりーはひ 生業【名】『はひ(業)は接尾語』㊀五穀の生(オ)るやうに務むる業。農業。耕作。〔古語〕起「農(ハナヒ)天下之大本也」萬葉「作りたるそのなりはひを雨降らず日の重なれば植ゑし田も蒔きし畑も」㊁生產の事業。世すぎの業。すぎはひ。家業。職業。渡世。源氏「今年こそ、なりはひにも、たのむところすくなく」

なりはひーぶね 業船【名】たぶね(田船)に同じ。

なりーはぶく 鳴羽振く【動四自】大なる音を立てて羽ばたきす。國姓爺「數多の蜂、鳴羽ふいてぞ出でにける」

なりーひさご 生瓢【名】〔植〕『ひさご(瓢)㊀に區別するために、蔓に生(オ)りたるままのものなる瓢にて、生(オ)を添へていふ』ひさご(瓢)㊀に同じ。〔古語〕更科「なりひさごの、風に吹かれて」和名瓢。奈利比佐古。瓠也」

なりーひびく 鳴響ぐ【動四自】㊀鳴る音、遠く聞ゆ。なりとどろく。とどろく。ひびく。㊁名聲遠く傳はる。なりとどろく。とどろく。ひびく。

なりひらーしじみ 業平蜆【名】東京本所區業平町源森(モリ)川附近より產する蜆。大きくして、味よろし。根岸志具佐「御注進と呼ばり呼ばり、眞黑になりて、ころころとこけ出づるは、本庄邊に住居する業平蜆にてぞありける」

なりひらーだけ 業平竹【名】〔植〕竹の一種。葉は山竹(ヤダケ)に似、稈は苦竹(ニガタケ)に似たり。壁下地の小舞などに多く用ふ。

なりひらーちく 業平竹【名】〔植〕前條に同じ。

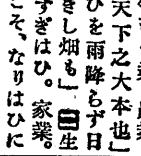
なりひらーづくり 業平作【名】好男子の隨一と稱せらるる在原業平のやうなる形振(ナリフリ)。五十年忌歌念佛「花橘の軸の香に昔男の業平作」「樣」に同じ。

なりひらーびと 業平菱【名】とりだすき(取敷)に同じ。

なりひらーぶし 業平武士【名】柔弱なる武士。こしぬけ武士。

なりーひらめく 鳴閃く【動四自】雷鳴り、電(イナヅマ)ひらめく。源氏「雷(カミ)のなりひらめくさま、更に言はんかたなくて」

なりひらーねづつ 業平井筒【名】紋所の一。下の圖を見よ。



（業平井筒）

なりひらーをとこ 業平男【名】在原業平のごとき美男。

なりーぶみ 成文【名】太政官より奏請して勅許になりたる文書。除目(ジモク)の申文の通りに任官せしめたる文書。**なりのこり**（成殘）㊁參照。江次第「次結固成文、結之上引レ韈」

なりーふり 形振【名】『なり(形)とふり(振)との同義の二語を重ねたるもの』㊀身體のよそほひ。みなり。なりさうぞく。なりすがた。㊁ふりあひもやう。形勢。

なりーほゆ 鳴吼ゆ【動下二自】なりひびく（鳴響く）に同じ。起「素戔嗚尊昇レ天之時、山岳爲レ之、鳴吼」

なりーまかる 成罷る【動四自】成りゆく。（謙遜していふ）まかる（罷る）㊁參照。〔古語〕雜世繼「女、みまかりにければ、悲しみの餘りに、取捨つることもせで、なりまかるさまをも見て、心をおこして、やがて、か

しらおろして」

なりまさる 成優る【動四自】優りたる方になる。よくなる。(成劣(オト)るに對して)【古語】源氏「ゆゑしきまでなりまさりたまふ御ありさまかな」

なりまじる 生交る【動四自】交りて生(ナ)る。生(ナ)りて入(リ)交る。右京大夫集「このごろは柑子橘なりまじり木の葉もみつや秋の山里」

なりみつ 鳴滿つ【動四自】鳴りて、その音、あたりに滿つ。ひびきみつ。榮花「れいの聞きにくきまで、なりみちたり」

なりーんーぼう 癩坊【名】(癩(ライ)坊の音便。ぼう坊)は接尾語。なり(癩)參照』癩病に罹りたる人。かったゐ。かったゐぼう。なりんぼ。

なりーんーぼ 癩坊【名】前條の訛。

なりーもの 鳴物【名】㊀がく(樂)業器)に同じ。㊁音曲、器樂。

なりーもの 生物【名】㊀田畑などに出來る、食用となるべき物の總稱。なり。㊁くだもの。なりくだもの。果實。宇治「なりもの、木の枝になりたる、多かりければ」

なりーもの 生物の樹【句】果實を結ぶ樹木。果樹。

なりーものいり 鳴物入【名】歌舞などにて、鳴物を以て、調子を取り、又は賑かにすること。

なりーや 鳴矢【名】かぶらや(鏑矢)に同じ。【古語】萬葉「紀の國の昔ゆみをの鳴矢(リヤ)もち鹿(シカ)とり辭(コト)けし坂の上にぞある」

なりーやむ 鳴止む【動四自】鳴ること止む。さわぎしづまる。榮花「夜ふけて、なりやみ、靜かなるに」

なりーゆき 成行【名】㊀なりゆくこと、又その狀態。ゆくすゑ。㊁〔商〕なりゆきねだん(成行直段)の略。〔取引所の語〕

なりゆきーうり 成行賣【名】〔商〕成行直段にて賣ること。〔取引所の語〕

なりゆきーがひ 成行買【名】〔商〕成行直段にて買ふこと。〔取引所の語〕

なりゆきーちゆうもん 成行註文【名】〔商〕成行直段にて取引することを註文すること。〔取引所の語〕

なりゆきーねだん 成行直段【名】〔商〕市場の成行のままに出來る直段。その時、その時の成行次第に定りたる直段。〔取引所の語〕

なりゆきーばいばい 成行賣買【名】〔商〕成行直段にて賣買をなすこと。〔取引所の語〕

なりーゆく 成行く【動四自】自然とその方ざまにかたむきゆく。うつりゆく。源氏「いとあつしくなりゆき、もの心ぼそげに」

なりーわたる 鳴渡る【動四自】㊀鳴りて、廣く傳播す。なりひびく。㊁名前高く聞ゆ。

なる 成【名】曆の中段に記す十二直の一。正月の戌、二月の亥、三月の子、四月の丑、五月の寅、六月の卯、七月の辰、八月の巳、九月の午、十月の未、十一月の申、十二月の酉の日をいひ、造家・婚姻・立願・入學・出行・移徙・種蒔等に吉にして、訴訟等に凶なる日なりと傳ふ。

なる 爲る【動四自】『なる(成る)・なる(生る)と語源相同じ。なす(爲す)・なり(形)參照』㊀前のと異なる形又は狀態に變る。伊勢「つひに、尼になりて」㊁時日經過して、その時期に至る。それだけの時日を費ぬ。經(ヘ)。萬葉「ほととぎす來鳴かむ月にいつしかも早くなりなむ」㊂運命窮まる。全く成下(クダ)る。なりはつ。なれのはてとなる。零落す。平家「當家傾けうとする謀叛の奴がなれる姿よ」㊃なる(成る)㊄に同じ。葉集「垂向、ナンナントス」

なる 成る【動四自】『なる(爲る)・なる(生る)と語源相同じ。なり(形)參照』㊀成して、終はる。出來あがる。目的達す。完成す。成功す。ととのふ。きまる。源氏「奏したまふ事の成らぬはなかりしかば」㊁定の時刻至る。定の時刻となりて、事始まる。更科「七月十三日に下(クダ)る。その日は、立騷ぎて、時成りぬれば、今はとて、簾(スダレ)を引上げて、うち見合はせて、涙をほろほろと落して」增鏡「事なりぬるにや、兩院御門(ミカド)・春宮・大宮院・今出川院・春宮大夫など、うちつづき、誦經の鐘の聲も、耳響くばかり所狹(セ)う聞ゆ」同「未(ヒツジ)のくだり、すでに事成りぬ」同「時なりて、上(カミ)、こなたに渡りたまふ」㊂爲すを得。できる。かなふ。狂言「盜人連歌」「天神もなりますまい。さても出來(デ)ました」丹波與作「その話は、何時(イツ)でもなる」㊃堪へ得(エ)。差支なし。たまる。(打消又は反語の形に用ふ)「堪忍まかり成らぬ」「斯うまでせられてたまるものか」㊄酒を飲み得(エ)。「成る口」㊅生計足る。(打消の形に用ふ)狂言「たださへ成らぬ身代で、今日(ケフ)も連歌、明日(アス)も連歌といふて」㊆貴人の動作を示す名詞の下に用ふる語。あらせらる。平家「法皇、仰なりけるは」同「一天の君、崩御なりて」太平記「臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を、强ひて仰せ出されける間」㊇他行したまふ。出御す。いでます。(天皇・皇后・親王などにいひ、又、僭して、攝家・將軍などにもいふ)おなり(御成)參照。四季物語「主上にも、ならせおはしまして」增鏡「新院、…大宮院のおはします中御門京極寶後の中將の家へ成る」㊈將棋にて、王將・金將以外の駒が、敵の線内に入りて、その本來の資格の上に、金將と同一なる資格をも得。「爲る」なりきん(成金)㊀參照。八笑人「これは、角(カク)成りたきと云ふ地口だが」㊉なる(爲る)㊁に同じ。成って居(ヰ)る。【句】一通りととのへり。

なる 生る【動四自】『なる(爲る)・なる(成る)と語源相同じ。なす(生す)及びなり(業)參照』㊀動・植物など、新に形成りて現れ出づ。起「親なしに、なれなりけめや」㊁實(ミ)を結ぶ。みのる。古今「秋來れど月の桂の實やはなる光を花と散らすばかりを」生る木は花から違(サ)ふ【句】實のなる木は花を見ても知らる。【諺語】

なる 鳴る【動四自】㊀『ね(音)なく(泣く)

成らぬ内が樂(タノ)【句】事は、成就したる後よりも、成就を待てる間に却りて樂あり。持つ間(ア)が花。【諺語】世話草「ならぬ内はたのしみ」

なるらぬ堪忍 爲(ス)るが堪忍【句】普通の人の堪忍しがたき事を堪忍して、始めて眞の堪忍といふを得。【諺語】

成らば【句】㊀「成らうことなら」に同じ。㊁なるたけならば。なるべく。

成り成らず【句】成就と不成就と。成功と不成功と。できふできず。成敗。夫木「なりならずふの浦梨うらなれてねぬに語らふ郭公かな」

成り成る【句】㊀成りに成る。できあがる。紀「吾身具成(ナリ)而、有稱陰元」者一處上」㊁なりたる上に又なる。順次になる。王生忠見集「なりなりてもとにおちぬる人をこそ色ごのみとはいふめりけれ」宇治「をの子・女子あまた生みつづけて、またそれが妻(メ)をとこになりなりしつつ」

成りんじ事をば說かず【句】『論語の八佾篇に「成事不レ說、遂事不レ諫、既往不レ咎」とあるに本づく。「成りんじ」は「成りにし」の音便』既に成りし事は云ふも詮なし。〔諺語〕枕草子「成りんじ事をば說かず、遂げんじ事をば諫めず、既に往(イ)んじを咎めず」

成る口【句】酒を飲み得る口。雜葉集「二人ながら、なる口ゆゑ、あひのおさへのと飲みかけ」同じ。

成る事ならば【句】「成らう事なら」に同じ。

成れ、成らざれ【句】成るにせよ、成らざるにせよ。成らうが成るまいが。成否は兎に角。國姓爺「成れ、成らざれ、御返事を、さあ只今と、責めつくれば」「じ。

成れる果(ハテ)【句】「爲(ス)れる果」に同じ。

なる 生る【動四自】『なる(爲る)・なる(成る)と語源相同じ。なす(生す)及びなり(業)參照』㊀動・植物など、新に形成りて現れ出づ。起「親なしに、なれなりけめや」㊁實(ミ)を結ぶ。みのる。古今「秋來れど月の桂の實やはなる光を花と散らすばかりを」生る木は花から違(サ)ふ【句】實のなる木は花を見ても知らる。【諺語】

なる 鳴る【動四自】㊀『ね(音)なく(泣く)

などと同一なる語源より出づ』音を立つ。ひびく。㊁名聲聞ゆ。名著はる。㊂風が帆桁・帆柱などを折る。

鳴るは瀧の水【句】延年舞などの歌の囃詞に用ひし文句。平家「嬉しや水、鳴るは瀧の水、日は照るとも絶えずとうたり、絶えずとうたり、とくとく立つや、たつかの水、日は照るとも絶えずとうたり、絶えずとうたり、とくとく立つや、たつかの」

なる 慣る・馴る【動下二自】㊀屢ば出會ひて、珍しからずなる。習慣となる。夫木「傳へける山はあらしのわが宿となれてもありかぬさをしかの聲」㊁繰返して爲したる結果として、能く知る。習熟す。熟知す。水鏡「いかにせん都の春もをしけれどなれし吾妻の花やちるらん」㊂屢ば近づきて、隔なくなる。親しみむつむ。なつく。源氏「いづれの御方にも、うとからず、なれまじらひありきたまふ」㊃親しき過ぎて、禮を缺く。なれなれしきさまになる。「狎る・褻る」㊄新しからずなる。ふるぶる。「褻る」萬葉「わが齡しおとろへぬれば白妙の袖のなれにし君をしぞ思ふ」源氏「桐代(ケヤキ)の、すこしなれたるが」㊅生氣失(う)す。くさる。

馴れ馴る【句】馴れたる上に馴る。十分に馴る。馴れに馴る。新勅撰「なれなれて秋に扇をおく露のいろもうらめしき閨の月かげ」

馴れぬ米商(コメアキ)より馴れた糠商(アラキ)【句】優れたりとも、馴れぬ仕事に手を著くるより、劣りたりとも、馴れたる仕事を續け行く方安全なり。知らぬ米商より知った糠商。〔諺語〕

なる 熟る【動下二自】混合してよく熟す。蘆村「寂寞とひるまを酢のなれ加減」

なるい【形】㊀鈍し。のろし。㊁おだやかなり。なだらかなり。續膝栗毛「なるくいふと、つき上って、だめいふな」

なるいかづち 鳴雷【名】なるかみ(鳴神)に同じ。記「左の足(シタ)には鳴雷居り、右の足には伏雷(カヅチ)居り」謠曲(雷電)「我、この世にての望は叶はず。死しての後、梵天・帝釋の憐を棄り、鳴雷となり、内裏に飛入り、我に憂(ウ)かりし雲客を蹴殺すべし」

なるいた 鳴板【名】なりいた。建暦御記「切妻板、不レ打レ釘、是號二鳴板一」增鏡「七月七日、乞巧奠、…笛・篳篥などは、殿上人ども、なる板のほどに候ひてつかうまつる」

なるかは 鳴川【名】〔地〕大和國奈良市の一部なる舊郷名。徳川時代より遊里となり、路頭に一大樹あるより、その東西の通路を木辻(キヅ)と呼ぶ。一代男「あない知る人、所自慢して、爰こそ名にふれし木辻町、北は鳴川と申して、おそらくよねの風俗、都にはぢぬ發音、竹隔子(タカシ)の内に面影見ずには歸られまじと」

なるかは-まさか 生川正香【名】〔人〕國學者。通稱は三郎助。伊勢國の人。足代(アシロ)弘訓(ノリ)の門人。近世女風俗考・俳人大系考。和蘭話詞考等の著あり。明治二十三年歿す。年八十七。

なるかぶら 鳴鏑【名】かぶらや(鏑矢)に同じ。古今「天の原踏みとどろかしなるかみも思ふ中をばさくるものかは」㊁敬舞伎十八番の一。本外題は「門松四天王元祖」。國十郎の自作の狂言にて、鳴神上人、時の帝を怨みて、龍神を封じ、雨を降らさぬやうにす。朝廷雲の絶間姫といふ美人を送りて、上人の行を破らしめ、よりて、雨沛然として降るといふことを作れるもの。

なるかみ 鳴神【名】㊀かみなり(雷)に同じ。古今「天の原踏みとどろかしなるかみも思ふ中をばさくるものかは」㊁敬舞伎十八番の一。本外題は「門松四天王元祖」。國十郎の自作の狂言にて、鳴神上人、時の帝を怨みて、龍神を封じ、雨を降らさぬやうにす。朝廷雲の絶間姫といふ美人を送りて、上人の行を破らしめ、よりて、雨沛然として降るといふことを作れるもの。

鳴神の鼓(ツヅミ)【句】雷の音を、鼓の音に聞きなしていふ語。謠曲(加茂)「ほろほろ、ほろほろ、とどろとどろと踏みとどろかす、鳴神の鼓の時も至れば、五穀成就も、國土を守護し」

なるかみ-づき 鳴神月・鳴雷月【名】『雷鳴多き月なりといふ』陰暦六月の異稱。〔古語〕蔵玉集「十二月異名。…六、鳴雷月。夕立はなほれやらでなるかみの月にもなりぬ夏や暮るらん」

なるかみ-の 鳴神の【枕】鳴神は音高きものなるより、おと(音)にかけていふ。萬葉「鳴神の音にのみ聞く巻向(マキムク)の檜原(ヒバラ)の山をけふ見つるかも」

なるかみ-まつり 鳴神祭【名】鳴神に五穀の豐熟を祈りて行ふ祭。

なるこ 鳴子【名】㊀木の板に、小さき竹管を絲にて並べ掛け、その板より引きわたしたる繩を引けば、その竹管の、板に觸れて鳴るやうに仕掛けたるもの。田畠などにて、害鳥を驚し、又門扉などを設けて、人の出入を知らする等に用ふ。ひきた。ひた。右京大夫集「鶉臥す門田の鳴子引きなれて歸らまうきや秋の山里」㊁〔動〕めばるの子を云ふ。〔安藝國の方言〕

なるこ-うり 成子瓜【名】江戸の近在なる西成子村より産出したる瓜。

なるこ-すげ 鳴子菅【名】〔植〕莎草(カヤツリ)科に屬する多年生の草。莖は七八寸。葉は細長し。五月頃、穗狀花序を成して、綠褐色の花を開く。各地の沼澤水田に自生す。

なるこ-だ 鳴子田【名】鳴子を仕掛けてある田。謠曲(鳥追船)「賤(アラ)が鳴子田引連れて、鳥追船に乘らんとて」

なるこちん (Narcotine)【名】阿片中にあるアルカロイドの一。白色針狀の結晶性物にして、無味、麻醉力微弱なり。

なるこ-づな 鳴子綱【名】次條に同じ。俳諧新選(寛政)「出す手より引く手や罪に鳴子綱」

なるこ-な 鳴子繩【名】引鳴らすために鳴子に附けたる繩。小侍從集「厭ふまで思ひなかけそ鳴子繩稻葉の風の招く心を」蘆村「家ありや烟の傳ふ鳴子繩」

なるこ-びえ 鳴子稗【名】〔植〕禾本(カホン)科に屬する一年生の草。莖は高さ二三尺。葉は細長し。七月頃、概ね四箇の花群より成る穗を著け、穎花は、二列をなして、花軸の一側にのみ附著す。各地の原野に自生す。

なるこ-まくは 鳴子甜瓜【名】〔植〕甜瓜の一種。果實早熟にして、豐産。小形なれども、香氣多く、甘味强し。

なるこ-ゆり 鳴子百合・黃精【名】〔植〕百合科に屬する多年生の草。我が國中部以北の山野に自生す。根莖、白色・多肉にして、奉季、圓柱形の地上莖を出し、高さ一二尺乃至四五尺に至り、夏の初、葉腋より一花軸下垂し、形は百合のに似て淡綠色を呈し、各裂片の鈍角三角形をなせる花を開く。根莖は煮て食ふべく、又、藥用ともす。おほゑみ。つゆぐさ。へびゆり。やまゑみ。ゑみぐさ。

(りゆこるな)

なるこをせん 鳴子溫泉【名】〔地〕陸前國玉造郡溫泉(ユヅ)村に在る溫泉。泉源數箇所にして、泉質には、硫黃泉及び鹽類泉あり。

なるさは 鳴澤【名】〔地〕富士山の麓なる谷の一。今その西北の裾野に、甲斐國南都留(ツルノ)郡に屬する鳴子村、即ちその跡にて、水蒸氣噴騰して鳴動せりといふ。萬葉「さ寢(ヌ)らくは玉のをばかり戀ふらくは富士の高根の鳴澤のごと」

なるさを 鳴竿【名】鳴子を附けたる竿なりとも、音のするやうに先の方を拆きたる竿なりともいふ。〔古語〕秘藏抄「めかれしで粟穗きらすなあなかしこ鳴る棹持ちてましら追へるうなゐ」

なるしま 奈留島【名】〔地〕肥前國西方の海中にある島。周回、十七里ばかり。松浦五島の一。

なるしまもとなは 成島司直【名】〔人〕江戸幕府の奥儒者。通稱は邦之助、又邦之亟、後、岡雪頭と改む。字は邦之、東岳と號す。又、翠巒の別號あり。衡山の子。幕命を以て東照宮實紀・改正三河風土記等を著す。文久二年歿す。年八十五。

なるしまりうほく 成島柳北【名】〔人〕文人。司直(モトナオ)の孫、稼堂の子。名は弘、字は保民、通稱は甲子太郎。柳北と號す。徳川家定及び家茂の侍講となり、後、外國奉行に擢でられ、參政に列す。明治元年歐米を漫遊し、爾後朝野新聞社に入りて、社長兼主筆となる。明治十七年歿す。年四十八。

なるせ 成瀬【名】姓氏の一。二條良基八世

の孫成瀬正之の子正成の後。正成、三河國德川氏に仕へて、尾張國犬山城に封ぜられ、子孫相承け、明治維新後、男爵を授けられ、後、子爵となる。

なるせ-たいねき 成瀬大域【名】〔人〕書家。通稱は久太郎。字は子直。遠江國日坂(ニサカ)の人。勅を奉じて王羲之の書を臨摹し、嘉賞せられ、御硯を賜はる。よりて賜硯堂と稱す。明治三十五年歿す。年七十六。

なるたき 鳴瀧【名】〔地〕**なるたきがは**(鳴瀧川)の略。類聚名義抄「鳴瀧の名にやせりあふほととぎす」

なるたきがくしや 鳴瀧學舍【名】ジイボルト(Siebold)が長崎に開きし學舍。

なるたきがは 鳴瀧川【名】〔地〕山城國葛野(カヅノ)郡に在る川。紙屋(カミヤ)川と合して、愛宕山の麓を流れ、嵐山の對岸にて大井川に入る。一名、御室(オムロ)川。拾遺愚草「秋加留多流るる水はとうとうとなる瀧にぞつき給ふ」

なるたきど 鳴瀧砥【名】山城國葛野(カヅノ)郡鳴瀧山より出づる砥石。質緻密にして、黃褐色を呈し、板狀に割れやすし。合砥(アハセド)などに用ふ。**とのこ**(砥粉)參照。

なるーたけ 成丈【副】手の盡さざるだけ。力の及ぶ限り。なるべく。

なるーたけ 成丈【副】前條の音便。梅暦「私(ワタヂ)やあ、もう、成たけ他(ヒト)と顏を赧めあふまいと思って」

なるーてん 【名】〔槌〕なんてん(南天)に同じ。

なるーと 鳴戸【名】古、禁中にありて、開閉にはげしく鳴りきといふ戸。後撰「春宮に、なるとといふ戸のもとに」

なるーと 鳴門【名】〔地〕『水の流の行きあひて鳴りひびく瀬戸の義。と(門)參照』㊀周防國玖珂(カノ)郡柳井津(ヤナヰヅ)の東方なる屋代(ヤシロ)島と陸岸との間の瀬戸。一名、大島(オホシマ)瀬戸。萬葉「過ニ大島鳴門一而經ニ再宿一之後追作歌、これやこの名に負ふ鳴戸のうづしほに玉藻刈るとふあま少女ども」㊁阿波國の東北端なる孫崎と淡路國の西南端なる鳴門崎との間なる海峽。兩端相距ること約十二町なれど、孫崎の側に櫟(イカダ)礁あり、鳴門崎の前方に中瀬(ナカセ)礁あり、主要水路の幅は五町ほどに過ぎず。一晝夜に二回は外洋に、二回は內海に向ひて潮流生じ、その間、殆ど休止の時なく、急潮の際は河川の狀をなし、兩側に渦流を生ず。新古今「淡路潟瀬戸の追風吹添ひてやがて鳴門にかかる舟人」兼好家集「世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波の鳴門は波風もなし」

なるとわかめ(鳴門和布)【句】鳴門の和布(ワカメ)に同じ。著聞「鳴門のわかめとて、良き布(メ)の上(ホ)る所なれば」

なるとう 成東【名】〔地〕上總國山武(サンブ)郡に在る町。銚子街道の一驛。不動堂あり。

なるとーかいけふ 鳴門海峽【名】〔地〕なると(鳴門)㊁に同じ。

なるとーぜめ 鳴門責【名】馬術にて、馬を乘りならす一法。

なるとーだひ 鳴門鯛【名】〔動〕『阿波の鳴門の難所を通りたるもの、味殊に美なりとていふ』まだひ(眞鯛)に同じ。

なるとちゆうじやう-ものがたり 鳴門中將物語【名】〔書〕鳴門中將と稱せし者のその君より寵せられしことの物語。一卷。一名、奈與竹(ナヨタケ)物語。

なるとーのうら 鳴門浦【名】〔地〕阿波國の、鳴門㊁に面せる海邊。類聚「風はやみ鳴門の浦の舟よりもとまり定めぬわが身なりけり」

なるとーみかん 鳴門蜜柑【名】〔植〕蜜柑の一種。果實はやや大にして扁圓形をなし、黃色、滑澤なる果皮を有し、多汁にして、甘味に富む。淡路國洲本(スモト)地方に產す。

なるとーわかめ 鳴戸和布【名】阿波國鳴戸海峽の邊に產するわかめ。柔かにして、味まさる。

なるーはじかみ 蜀椒【名】〔植〕あさくらざんせう(朝倉山椒)に同じ。〔古語〕

なるべし 奈留別志【名】〔書〕『每項の終を「なるべし」といふ語にて結べるよりいふ』雅俗の言語・事物の名義などに關する考說を假名文にて記せるもの。五卷。荻生徂徠の著。

なるーほど 成程【副】㊀爲し得る程度の限に。なるべく。なるたけ。狂言(どらはぐれ)「愚僧にも參るやうにと御使でござったまどに、なるほど參りませうと申して、約束してござるが」一代男「なる程意氣過ぎて、男振るほどの女郎呼べ」㊁『爲し得る程度に於て同意する意』仰のとほりに。まことに。いかさま。げに。狂言續八番「成程彼奴が申すとほり」心中萬年草「なるほど、なるほど、その筈」

なるほどに 成程に【副】前條㊁に同じ。狂言(聟座頭)「來てくりやるまいか。ようこそ御出なされました。幸今日は暇でをりまする。なる程にまゐりませう」

なるまつ 成松【名】〔地〕丹波國氷上(ヒカミ)郡にある町。

なるみ 鳴海【名】〔地〕尾張國愛知(アヂ)郡にある町。舊東海道の一驛。鳴海絞を賣出す。古は海に瀕せしに、漸次干潟となりて、今は海岸より一里餘を隔てたる臺地の間に入る。續拾遺「よそにのみなるみの海のうつせ貝たれあだびとに名を知らせけん」

なるみーがた 鳴海潟【名】〔地〕**なるみのうら**(鳴海浦)に同じ。新古今「さよ千鳥聲こそ近くなるみがた傾く月に潮や滿つらん」

なるみーしぼり 鳴海絞【名】『尾張國愛知郡鳴海にて賣出せるよりいふ』ありまつしぼり(有松絞)に同じ。

なるみのーうら 鳴海浦【名】〔地〕尾張國愛知郡と知多郡との西方に位せる海邊。鳴海潟。

なるーや 鳴矢【名】かぶら矢(鏑矢)に同じ。夫木「なるやもて鹿とりなびく夏草にらはずふせてねらふさつをか」

なるを 鳴尾【名】〔地〕攝津國武庫(ムコ)郡にある村。武庫川の本流と支流とに挾まる三角洲の地。古の曾彌(ソミ)郷の地にして、競馬場の設あり。千載「ふこそは都の方の山の端も見えずなる尾の沖に出でぬれ」

なれ 慣・馴【名】なること。習慣。熟練。

なれ 馴が附く【句】その土地又はその家の風に化して仕舞ふ。

なれ 熟【名】熟ること。熟る具合。熟れたる物。妻經千本鑑「立歸る春は來ねども花咲かず、娘が漬けた鮓ならば、馴(ナ)れも好かろと買ひに來る」

なれ 汝【代】なんぢ、汝)に同じ。〔古語〕紀「旅人あはれ、親無しになれ生(ナ)りけめや」

なれーあひ 馴合・慣合【名】なれあふこと。なれあひたること。

なれあひきうば 馴合相場・慣合相場【名】〔商〕賣り方と賣ひ方とが馴合ひて附けたる相場。〔取引所の語〕

なれあひーてがた 慣合手形【名】〔經〕くうてがた(空手形)に同じ。

なれあひーまをとこ 馴合間男【名】夫婦馴合の上、妻を他の男と通ぜしめ、その男を脅迫して、財貨を取ること。つつもたせ。

なれあひーめをと 馴合女夫【名】どれあひふうふ(どれ合夫婦)に同じ。

なれあふ 馴合ふ・慣合ふ【動四自】㊀互に馴る。相親しむ。㊁私通す。野合す。どれあふ。㊂ひそかに相約して、事をなすぐるになる。右大將鎌倉實記「康賴、王子王子の御前にて、馴子舞をばつかうまつらる」義經記「御かぐらなど參らせて、おもひおもひのなれこまひし給へば、夜はほのぼのと明けにけり」

なれーぎぬ 馴衣・褻衣【名】なれぎぬ(馴衣)に同じ。〔古語〕萬葉「わかれにし妹がきせてしなれごろも袖片敷きてひとりかも寢む」謠曲(盛久)「葦火たく屋は煤垂れごろも。なれごろも。〔古語〕

なれーこ 馴子【名】屢ば經驗してよく馴れ、少しも氣にとめざること。なれっこ。

なれこまひ 馴子舞・馴講舞【名】互に親睦をあつくする爲に、寄合講をして舞ひ遊ぶこと。〔古語〕盛衰記「康賴、王子王子の御前にて、馴子舞をばつかうまつらる」義經記「御かぐらなど參らせて、おもひおもひのなれこまひし給へば、夜はほのぼのと明けにけり」

なれーごろも 馴衣・褻衣【名】なれぎぬ(馴衣)に同じ。〔古語〕萬葉「わかれにし妹がきせてしなれごろも袖片敷きてひとりかも寢む」謠曲(盛久)「葦火たく屋は煤垂れ

・て、おのが妻衣(ぎぬ)、それならで、又は誰にかなれごろも」

なれすがた 馴姿・褻姿【名】常に家に居る時の姿。【古語】榮花「今日よりは、ねはしましどころを、御念佛の所にしつらひて、佛おはしまさせ、僧などのなれ姿も、いみじくかたじけなう、よろづに悲し」

なれずがほ 不馴顔【名】未だ馴れぬらしきやうす。夫木「秋はさぞ吹くないぶきの山風になれずがほにも鹿のわぶらん」

なれすぐ 馴過ぐ慣過ぐ(動上二自)ほどを越すばかりになる。餘りになる。

なれすぐ 熟過ぐ【動上二自】ほどに過ぎて熟す。餘りに熟す。藪村「なれすぎた鮓をあるじの遺恨かな」

なれずし 熟鮨・馴鮓【名】魚を鹽にまぶして壓したる後、冷飯に合はせて桶に入れ、重き石にて壓して、數日の間、熟らして造りたる鮨。

なれそむ 馴染む【動下二自】馴るることをはじむ。初めて睦ぶ。初めて馴染になる。天神記「時平の大臣の御内奏の筆竹と申す御隨身の侍と、入知れずなれそめ、忍び逢ふ夜の數重なり」

なれそめ 馴初【名】馴染めたること。親しくなりたる最初。

なれつく 馴附く【動四自】なれ親しむ。なつく。なじむ。

なれっこと 馴事【名】なれこ(馴事)の音便。浮世風呂「江戸で傳法、上方で奢侈などといふあばれがあれど、夫れさへも馴事(なれこ)になってゐる所爲か、更にかまはぬ」

なれど 【接】矢張の略。

なれども 然ども【接】さにはあれども。然れども。けれども。

なれなじみ 馴馴染【名】なじみ(馴染)に同じ。きのふはけふの物語、なれなじみの中はどなる事はござるまい」

なれ-なれし 馴馴し【形二】甚だ馴れたるさまなり。したしさうなり。源氏「なれなれしく振舞ひたり」㊁臆面なきさまなり。ぶしつけなり。細撰酒吞童子「一見と申し武骨者、なれなれしき事ながら、盲蛇に怖ぢずとやら、身に迫っての物語」㊂甚だなれ古びたり。「褻褻し」(古語)新六「いつか我れしほ燒くあまのふぢごろもなれなれしくも妹にあひ見ん」夫木「なれなれし床はふるきの皮衣君きまさねばあたらさむけし」

なれのはて 爲の果【句】「爲(な)れる果」の訛。「成の果」用明天皇職人鑑「この島へ流され、五位介諸岩がなれの果にて御座候」

なれ-ばむ 褻ばむ【動四自】褻(な)れたる樣あらはる。褻れて見ゆ。ふるぶ。(古語)枕「狩衣は、何も打ちなればみたる」

なれ-もの 馴者【名】世馴れたる人。物事によく通じたる人。今昔「人咲(わら)はする馴者なる翁にてぞありければ」

なれ-よる 馴寄る【動四自】馴れて近寄る。源氏「女房にもけぢかうなれよりつつ」

なわ 名和【名】㊀(地)伯耆國西伯(ほうき)郡長年の故邑にして、元弘三年後醍醐天皇、隱岐國よりこの地に著御あらせられき。と奈和とも書きたり。㊁姓氏の一。本姓は村上源氏。右大臣顯房の第八子雅兼より出づ。その第十一世の孫行高、伯耆守長年を生む。長年、本國名和莊の地頭となり、因りて氏とし、其の孫顯興、懷良(かねよし)親王に西海に隨ひしが、その後爲泰に歸りて、世世、名和神社の祠官たり。明治維新後、男爵を授けらる。

なわ-こんちゅうけんきうしょ 名和昆蟲研究所【名】昆蟲學者名和靖(やすし)の昆蟲に關する研究を成すために設けたる研究所。岐阜市の公園内にあり。

なわ-じんじゃ 名和神社【名】伯耆國西伯(ほうき)郡名和村に鎭坐せる別格官幣社。祭神は名和長年。

なわすれ-ぐさ 勿忘草【名】〔植〕ほたるかづらの異名。

なわ-ながしげ 名和長重【名】〔人〕勤王家。長年の從子。太郎左衞門と稱す。長年に隨ひて義兵を擧げ、京師に戰ふ。正平七年足利義詮(よしあきら)の男山の行宮を侵しし時、神鏡の櫃を奉じて走る。その終るところを知らず。

なわ-ながとし 名和長年【名】〔人〕勤王家。初名は長高、通稱は又太郎。伯耆國名和の人。元弘三年後醍醐天皇の隱岐國におはするや、詔を奉じて義兵を擧げ、天皇を船上山(せんじょうざん)に迎へて賊を破りしが、延元元年足利尊氏の京師を犯すにあたり、諸將と謀りて之を走らせしが、尊氏再び至るに及び奮戰して死す。「(中海)の別稱。

なわ-の-うら 名和浦【名】〔地〕なかのうみ

なゐ 【名】ぢしん(地震)に同じ。(古語)記「おみの子のやぶのしば垣したとよみなゐが搖(ゆ)りこばやれむしば垣」垂仁「ありつるよりも聲の聳高くまさりて、かみいときわがしくひらめきて、なゐのやうに土うごく」

なゐふる 【句】地震す。地震がいる。紀「地動、ナヰフリテ」定額寺「十月ばかり、夜、なゐいたくふりければ、木末にはのこりもあらじ神無月なべてふりつる夜はのくれなゐ」

なゐのかみ 地震神【名】地震を司る神。地震の神。(古語)記「地動、舍屋悉破、則令二四方一俾レ祭二地震神(なゐのかみ)一」

なゐは-むし なゐは蟲【名】〔動〕『苗葉(なえ)蟲の轉訛か』あをむし(蝮蛉)に同じ。(古語)字鏡「蝮、ナエハシム」

なをり 名折【名】『名を折る』を見よ』名譽をきずつくること。なをれ。(古語)拾玉「しづの男が麻の衣の花ずりは森の名をりのものにぞありける」長門本平家「きたなしや、源氏のなをりに返し合はせたまへ」

なをり 波折【名】波の折重なりて立つこと、又その所。一說に、波の折返すこと、又その所。(古語)記「潮瀬(しほ)のなをりをみれば遊び來る鮪(しび)がはた手に妻立てり見ゆ」

なをる 名折る【句】な(名)の條下を見よ。

なをれ 名折【名】『名折る』を見よ』名譽のきずつくこと。はぢ。盛衰記「源氏の名折不審なりとて、一門に擯出せられて」大鏡「虎雅物語「他領所の名折ぞ」

に

【發音】㊀な行第二の音。羅馬字にてはniと書けども、他のな行音な(na)・ね(ne)・の(no)の子音nが舌端音(齒音)なるに對し、にとぬとの子音は、發音の場所、それよりも一層後方に位し、舌の中部を高めて發するものなるが故に、口蓋音に屬す。これ、い(i)・う(u)が口蓋的母音なるがために、子音nもその感化を受くるに因る。類例は、さ行のし、た行のち・ぢ及び行のひにも求むることを得べし。故に、にはnに非ずして、實はnjの音なり。㊁長音は、にいと書くとにーと書くとの兩法あり。本書は前者に依れり。㊂拗音にゃにゅにぇによは、舌の中部をなねのの子音を發する場合よりも更に高めて、母音iを發する場合の位置に置きたる子音に、母音a・u・e・oの結び附きたるものにして、にに母音a・u・e・oの結び附きたるものともいふを得ること、㊀に說ける所によりて知らるべし。又、その長音はにゃあ・にゅう・にぇえ・によおなり。㊃一語の中にて、にの直後にう又はふの續く時は、相合して拗長音ニュウとなる。例へば、にうめん(煮麵)・にうわ(柔和)・にふがく(入學)をニュウメン・ニュワ・ニュウガクと發音する類。一語の中の變化